九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告
－36－

朝倉郡朝倉町大字大庭所在の大庭・久保遺跡の調査

1995

福岡県教育委員会

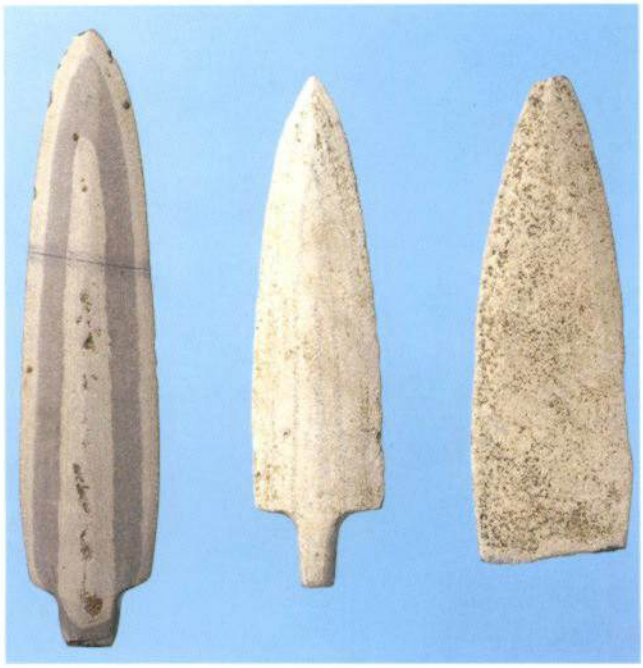
九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告
—36—

朝倉郡朝倉町大字大庭所在の大庭・久保遺跡の調査

平成６年度

福岡県教育委員会

大庭・久保遺跡俯瞰



墓地群出土の石剣

29号木棺墓出土の鏡

序

本書は，福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて，昭和54年度から実施している九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査の記録であります。

本年度の報告は，昭和60年度に実施しました大庭・久保遺跡の調査結果を「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」第36集としてまとめたものであります。本報告書をとおして文化財の愛護思想の資料および学術研究の一助となれば幸甚に存じます。

なお，発掘調査にあたりまして多くのご尽力とご協力をいただきました地元の皆様方をはじめ，関係された各位に対して心から深く感謝いたします。

平成７年３月31日

福岡県教育委員会
教育長　光安　常喜

例　言

1　本書は，昭和60年度福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて発掘調査を実施した福岡県朝倉郡朝倉町大字大庭に所在する大庭・久保遺跡の調査報告書で，「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」の第36冊目にあたる。

2　本書の執筆分担は下記のとおりである。

Ⅰ …… (佐々木隆彦)
Ⅱ …… (　〃　)
Ⅲ－1，2-(1)・(2)・(8)，(10) … (　〃　)
Ⅲ－2-(3) …… (中橋　孝博)
Ⅲ－2-(4) …… (本田　光子)
Ⅲ－2-(5～7･9) …… (井上　裕弘・佐々木)
Ⅳ …… (佐々木)

3　発掘調査における遺構実測は，井上裕弘・佐々木・小田和利(県文化課)，高田一弘・日高正幸(現・小石原村教育委員会)・田中康信（現・瀬高町教育委員会)・加田隆志(現・佐賀県鹿島市教育委員会)・永見秀徳(現・筑後市教育委員会)・柏原孝俊（現・小郡市教育委員会)・本石セツ子・高瀬セツ子・後藤カミヨ・矢野静子・中村ミツエ・牟田カヨコが行った。

4　発掘現場での写真は井上・佐々木が撮影し，空中写真はフォト大塚に委託した。

5　出土人骨の鑑定及び執筆は，九州大学大学院比較社会文化研究科，助教授の中橋孝博先生にお願いし，赤色顔料の鑑定及び執筆は，福岡市教育委員会埋蔵文化財課・調査員の本田光子女史にお願いした。

7　出土遺物の整理作業は，文化課甘木事務所と九州歴史資料館で実施し，遺物の実測は宮小路賀宏・井上・佐々木・平田春美・久富美智子・棚町陽子・藤原さとみ・江口幸子・堀之内久美子・坂田順子・大野愛里・岡泰子が行った。また，鉄器処理については九州歴史資料館の横田義章の指導で政住理英子・坂田ミチヨが行った。

8　掲載した遺物写真は，九州歴史資料館学芸１課の石丸洋，文化課整理指導員の北岡伸一が撮影した。

9　本書の編集は井上と協議のうえ佐々木が担当した。

本文目次

頁

I　発掘調査の経過 …… 1

II　遺跡の位置と環境 …… 7

III　発掘調査の記録

1　遺跡の概要 …… 9
2　遺構と遺物 …… 11
(1)　墓　地 …… 11
①　甕棺墓 …… 11
②　木棺墓 …… 33
③　石蓋土壙墓 …… 60
④　箱式石棺墓 …… 68
⑤　土壙墓 …… 76
⑥　祭祀土壙 …… 102
(2)　各遺構の出土遺物 …… 112
①　甕　棺 …… 112
②　鏡 …… 136
③　土　器 …… 136
④　石　器 …… 139
⑤　鉄　器 …… 141
(3)　大庭・久保遺跡出土の弥生人骨 …… 144
(4)　大庭・久保遺跡出土の赤色顔料 …… 149
(5)　竪穴住居跡 …… 151
(6)　掘立柱建物 …… 215
(7)　土　壙 …… 222
(8)　落し穴 …… 226
(9)　土壙墓 …… 226
(10)　その他の出土遺物 …… 227

IV　総　括 …… 228

図版目次

巻頭図版１　大庭・久保遺跡俯瞰

巻頭図版２　墓地群出土の石剣

　　29号木棺墓出土の鏡

図　版　１　大庭・久保遺跡俯瞰

図　版　２　(1)　墓地群全景（北東から）

　　(2)　墓地群全景（南西から）

図　版　３　(1)　北側墓地群（東から）

　　(2)　中央墓地群（北東から）

図　版　４　(1)　南側墓地群（北東から）

　　(2)　１号甕棺墓（北西から）

図　版　５　(1)　１号～３号甕棺墓（西から）

　　(2)　２号甕棺墓補修状態

図　版　６　(1)　４号～６号甕棺墓（東から）

　　(2)　４号甕棺墓（東から）

図　版　７　(1)　５号甕棺墓（北西から）

　　(2)　６号甕棺墓（北西から）

図　版　８　(1)　７号甕棺墓，6号石蓋土壙墓（北西から）

　　(2)　８号甕棺墓の標石（北西から）

図　版　９　(1)　８号甕棺墓標石除去後の状態

　　(2)　10号・19号甕棺墓と10号木棺墓（北西から）

図　版　10　(1)　11号甕棺墓（北から）

　　(2)　12号甕棺墓（北西から）

図　版　11　(1)　13号甕棺墓（南東から）

　　(2)　14号甕棺墓と26号土壙墓（南東から）

図　版　12　(1)　18号甕棺墓（北西から）

　　(2)　19号甕棺墓（北西から）

図　版　13　(1)　23号甕棺墓標石（北西から）

　　(2)　23号甕棺墓（北西から）

図　版　14　(1)　24号甕棺墓（北から）

　　(2)　25号甕棺墓（北から）

図　版　15　(1)　26号甕棺墓上層河原石出土状態（南西から）
　　(2)　26号甕棺墓（北東から）
図　版　16　(1)　28号甕棺墓と19号土壙墓（北西から）
　　(2)　29号甕棺墓（西北から）
図　版　17　(1)　30号甕棺墓（北西から）
　　(2)　32号甕棺墓と５号石蓋土壙墓（北西から）
図　版　18　(1)　33号・19号甕棺墓，５号石蓋土壙墓（北西から）
　　(2)　34号・５号甕棺墓（北西から）
図　版　19　(1)　35号甕棺墓（南東から）
　　(2)　36号甕棺墓標石，25号土壙墓標石（北西から）
図　版　20　(1)　36号甕棺墓（北西から）
　　(2)　37号甕棺墓（北から）
図　版　21　(1)　１号木棺墓（北西から）
　　(2)　２号木棺墓（北西から）
図　版　22　(1)　３号木棺墓（北西から）
　　(2)　４号木棺墓（南東から）
図　版　23　(1)　５号・25号木棺墓，10号土壙墓（南東から）
　　(2)　６号・31号木棺墓，38号土壙墓，15号甕棺墓（北西から）
図　版　24　(1)　７号木棺墓，12号土壙墓（北西から）
　　(2)　８号・24号木棺墓，７号石蓋土壙墓，９号甕棺墓（北西から）
図　版　25　(1)　２号・９号木棺墓（北西から）
　　(2)　11号木棺墓，29号土壙墓（北西から）
図　版　26　(1)　12号木棺墓（北西から）
　　(2)　13号木棺墓（南東から）
図　版　27　(1)　14号木棺墓（西から）
　　(2)　15号木棺墓（北西から）
図　版　28　(1)　16号木棺墓（南東から）
　　(2)　17号木棺墓（北西から）
図　版　29　(1)　19号木棺墓（西から）
　　(2)　20号木棺墓（東南から）
図　版　30　(1)　21号木棺墓（北西から）
　　(2)　22号木棺墓（北西から）
図　版　31　(1)　23号木棺墓（北西から）

(2) 26号木棺墓（北西から）

図 版 32 (1) 27号木棺墓（北西から）

(2) 28号木棺墓（西北から）

図 版 33 (1) 29号木棺墓，39号土壙墓，１号箱式石棺墓棺材除去後（南西から）

(2) 29号木棺墓鏡出土状態

図 版 34 (1) 33号木棺墓（北西から）

(2) １号石蓋土壙墓（南東から）

図 版 35 (1) １号石蓋除去後の状態（南東から）

(2) １号石蓋土壙墓人骨出土状態（東北から）

図 版 36 (1) ２号石蓋土壙墓（北西から）

(2) ２号石蓋土壙墓除去後の状態（北西から）

図 版 37 (1) ３号石蓋土壙墓，２号土壙墓，15号木棺墓（北西から）

(2) ３号石蓋除去後の状態

図 版 38 (1) ４号石蓋土壙墓（北西から）

(2) ４号石蓋除去後の状態

図 版 39 (1) ５号石蓋除去後の状態

(2) ８号石蓋土壙墓（北東から）

図 版 40 (1) ８号石蓋除去後の状態（西北から）

(2) ９号石蓋土壙墓（西北から）

図 版 41 (1) １号箱式石棺墓，16号・20号甕棺墓（北西から）

(2) １号箱式石棺墓石蓋除去後と16号・20号甕棺墓（北西から）

図 版 42 (1) １号箱式石棺内鉄器出土状態

(2) ２号箱式石棺墓（南西から）

図 版 43 (1) ３号箱式石棺墓，24号甕棺墓，12号・30号木棺墓（北西から）

(2) ３号箱式石棺墓石蓋除去後の状態

図 版 44 (1) ３号箱式石棺墓人骨出土状態（北東から）

(2) ４号箱式石棺墓，30号・34号土壙墓（北から）

図 版 45 (1) ４号箱式石棺墓石蓋除去後の状態（北から）

(2) ５号・６号箱式石棺墓，28号木棺墓（西北から）

図 版 46 (1) ７号箱式石棺墓（北西から）

(2) ８号箱式石棺墓，32号木棺墓，38号甕棺墓（北西から）

図 版 47 (1) １号土壙墓（西北から）

(2) ４号・９号土壙墓（南東から）

図　版　48　(1)　5号土壙墓（北から）
(2)　7号・8号土壙墓（北西から）
図　版　49　(1)　11号土壙墓，17号・21号・22号甕棺墓（北西から）
(2)　13号土壙墓（北西から）
図　版　50　(1)　14号・24号土壙墓（北西から）
(2)　16号土壙墓（北東から）
図　版　51　(1)　17号土壙墓（西から）
(2)　18号土壙墓，27号甕棺墓（北西から）
図　版　52　(1)　21号～23号土壙墓，18号木棺墓，4号石蓋土壙墓（北西から）
(2)　28号土壙墓（北西から）
図　版　53　(1)　31号土壙墓（北西から）
(2)　32号土壙墓（北西から）
図　版　54　(1)　33号土壙墓（北西から）
(2)　36号土壙墓（北西から）
図　版　55　(1)　37号土壙墓（北西から）
(2)　40号土壙墓（北西から）
図　版　56　(1)　1号祭祀土壙（北東から）
(2)　2号祭祀土壙（西から）
図　版　57　(1)　3号祭祀土壙（南西から）
(2)　4号祭祀土壙（北西から）
図　版　58　(1)　5号祭祀土壙埋土状態（南西から）
(2)　5号祭祀土壙（北から）
図　版　59　(1)　5号祭祀土壙出土石剣
(2)　6号祭祀土壙（南東から）
図　版　60　(1)　7号祭祀土壙（南東から）
(2)　8号祭祀土壙（北東から）
図　版　61　(1)　8号祭祀土壙土器出土状態
(2)　9号祭祀土壙（北から）
図　版　62　1号～4号甕棺
図　版　63　5号～8号甕棺
図　版　64　9号～11号甕棺
図　版　65　12号～16号甕棺
図　版　66　17号～20号甕棺

図　版　67　21号～25号甕棺
図　版　68　26号～28号甕棺
図　版　69　29号～30号甕棺
図　版　70　27号・32号・33号甕棺
図　版　71　34号～37号甕棺
図　版　72　(1)　2号甕棺上甕凸帯下の沈線
(2)　12号甕棺下甕胴部の補修痕（表側）
図　版　73　(1)　12号甕棺下甕補修痕（内側）
(2)　29号甕棺上甕口縁部補修痕
図　版　74　(1)　29号甕棺下甕焼成時の亀裂（煤が吹き出している）
(2)　29号木棺墓出土の鏡
図　版　75　7号～9号祭祀土壙出土土器，5号甕棺墓，36号土壙墓，2号・5号祭祀土壙出土石器，1号箱式石棺墓出土鉄器
図　版　76　(1)　大庭・久保遺跡西側俯瞰
(2)　大庭・久保遺跡西側竪穴住居跡群
図　版　77　(1)　8号～10号竪穴住居跡群
(2)　12号・13号竪穴住居跡
図　版　78　(1)　13号・15号～18号竪穴住居跡群
(2)　15号・16号竪穴住居跡，8号掘立柱建物跡
図　版　79　(1)　18号・19号竪穴住居跡
(2)　発掘区東北隅
図　版　80　(1)　1号～10号竪穴住居跡群（南から）
(2)　1号竪穴住居跡（西から）
図　版　81　(1)　1号～7号竪穴住居跡群（南から）
(2)　2号竪穴住居跡カマド
図　版　82　(1)　5号・6号竪穴住居跡（南から）
(2)　5号竪穴住居跡カマド
図　版　83　(1)　8号竪穴住居跡（南から）
(2)　9号竪穴住居跡（南から）
図　版　84　(1)　10号竪穴住居跡（南から）
(2)　10号竪穴住居跡カマド
図　版　85　(1)　12号竪穴住居跡（西から）
(2)　13号竪穴住居跡（東から）

図　版　86　(1)　13号竪穴住居跡カマド
(2)　14号竪穴住居跡（西から）
図　版　87　(1)　15号竪穴住居跡（南から）
(2)　15号竪穴住居跡カマド
図　版　88　(1)　16号竪穴住居跡（東から）
(2)　17号竪穴住居跡（東から）
図　版　89　(1)　18号竪穴住居跡（南から）
(2)　18号竪穴住居跡カマド
図　版　90　(1)　19号竪穴住居跡（南から）
(2)　19号竪穴住居跡カマド
図　版　91　(1)　1号・21号竪穴住居跡（南から）
(2)　22号竪穴住居跡（西から）
図　版　92　(1)　22号竪穴住居跡カマド
(2)　23号・47号竪穴住居跡（東から）
図　版　93　(1)　24号～26号竪穴住居跡（東から）
(2)　24号竪穴住居跡（東から）
図　版　94　(1)　24号竪穴住居跡カマド
(2)　25号竪穴住居跡（東から）
図　版　95　(1)　25号竪穴住居跡カマド
(2)　26号竪穴住居跡（東北から）
図　版　96　(1)　26号竪穴住居跡カマド
(2)　26号竪穴住居跡カマド壁体
図　版　97　(1)　27号竪穴住居跡（東から）
(2)　29号・30号竪穴住居跡（東から）
図　版　98　(1)　31号・51号竪穴住居跡（東から）
(2)　31号竪穴住居跡カマド
図　版　99　(1)　32号・50号竪穴住居跡（東から）
(2)　32号竪穴住居跡カマド
図　版　100　(1)　33号・49号竪穴住居跡（東から）
(2)　34号竪穴住居跡（東から）
図　版　101　(1)　34号竪穴住居跡カマド
(2)　35号竪穴住居跡（東から）
図　版　102　(1)　36号～41号竪穴住居跡（東から）

(2)　43号～46号竪穴住居跡（東から）
図　版 103　(1)　44号竪穴住居跡カマド
(2)　45号竪穴住居跡（東から）
図　版 104　(1)　45号竪穴住居跡カマド
(2)　46号竪穴住居跡（東から）
図　版 105　(1)　46号竪穴住居跡カマド
(2)　48号竪穴住居跡（東北から）
図　版 106　(1)　48号竪穴住居跡カマド
(2)　50号竪穴住居跡カマド
図　版 107　(1)　52号竪穴住居跡（東北から）
(2)　1号掘立柱建物跡（東から）
図　版 108　(1)　2号掘立柱建物跡（東から）
(2)　3号掘立柱建物跡（東から）
図　版 109　(1)　4号掘立柱建物跡（北東から）
(2)　6号土壙（北から）
図　版 110　(1)　7号土壙（西から）
(2)　落し穴（南から）
図　版 111　(1)　土壙墓（北から）
(2)　土器出土状態（北から）
図　版 112　竪穴住居跡出土遺物
図　版 113　竪穴住居跡出土遺物
図　版 114　(1)　竪穴住居跡出土遺物
(2)　各住居跡出土焼塩壺
図　版 115　竪穴住居跡，6号土壙，土壙墓，ピット出土遺物

挿図目次

本文対象頁

第 1 図 九州横断自動車道路線図……2
第 2 図 大庭・久保遺跡周辺地形図（1/1,000）……3
第 3 図 大庭・久保遺跡と周辺の主要遺跡分布図（1/50,000）……6
第 4 図 大庭・久保遺跡地形図（1/3,000）……8
第 5 図 1号・3号・5号・7号甕棺墓実測図（1/20）……14
第 6 図 2号甕棺墓実測図（1/20）……15
第 7 図 4号・6号甕棺墓実測図（1/20）……16
第 8 図 8号～10号甕棺墓実測図（1/20）……17
第 9 図 11号・12号甕棺墓実測図（1/20）……19
第 10 図 13号～16号甕棺墓実測図（1/20）……20
第 11 図 17号～20号甕棺墓実測図（1/20）……22
第 12 図 21号～23号甕棺墓実測図（1/20）……24
第 13 図 24号・25号・27号甕棺墓実測図（1/20）……26
第 14 図 26号甕棺墓実測図（1/20）……27
第 15 図 28号甕棺墓実測図（1/20）……28
第 16 図 29号甕棺墓実測図（1/20）……29
第 17 図 30号甕棺墓実測図（1/20）……30
第 18 図 32号・33号甕棺墓実測図（1/20）……折り込み
第 19 図 34号～36号甕棺墓実測図（1/20）……折り込み
第 20 図 37号・38号甕棺墓実測図（1/20）……33
第 21 図 1号・2号木棺墓実測図（1/30）……35
第 22 図 3号・4号木棺墓実測図（1/30）……36
第 23 図 5号・6号木棺墓実測図（1/30）……38
第 24 図 7号木棺墓実測図（1/30）……39
第 25 図 8号木棺墓実測図（1/30）……40
第 26 図 9号木棺墓実測図（1/30）……41
第 27 図 10号・11号木棺墓実測図（1/30）……43
第 28 図 12号・13号木棺墓実測図（1/30）……44
第 29 図 14号・15号木棺墓実測図（1/30）……46
第 30 図 16号木棺墓実測図（1/30）……47

第 31 図 17号・19号木棺墓実測図（1/30）……48
第 32 図 18号木棺墓実測図（1/20）……49
第 33 図 20号木棺墓実測図（1/30）……51
第 34 図 21号・22号木棺墓実測図（1/30）……52
第 35 図 23号・24号木棺墓実測図（1/30）……54
第 36 図 25号・26号木棺墓実測図（1/30）……55
第 37 図 27号・28号木棺墓実測図（1/30）……57
第 38 図 29号・30号木棺墓実測図（1/30）……58
第 39 図 31号・32号木棺墓実測図（1/30）……59
第 40 図 33号木棺墓実測図（1/30）……60
第 41 図 1号石蓋土壙墓実測図（1/30）……61
第 42 図 2号・3号石蓋土壙墓実測図（1/20）……63
第 43 図 4号・5号石蓋土壙墓実測図（1/20）……64
第 44 図 6号・7号石蓋土壙墓実測図（1/20）……65
第 45 図 8号石蓋土壙墓実測図（1/20）……67
第 46 図 9号石蓋土壙墓実測図（1/20）……68
第 47 図 1号箱式石棺墓実測図（1/30）……69
第 48 図 2号箱式石棺墓実測図（1/20）……70
第 49 図 3号箱式石棺墓実測図（1/30）……71
第 50 図 4号箱式石棺墓実測図（1/30）……73
第 51 図 5号・6号箱式石棺墓実測図（1/20）……74
第 52 図 7号・8号箱式石棺墓実測図（1/30）……75
第 53 図 1号・2号土壙墓，3号石蓋土壙墓実測図（1/30）……77
第 54 図 3号・4号土壙墓実測図（1/30）……78
第 55 図 5号・6号土壙墓実測図（1/30）……80
第 56 図 7号～9号土壙墓実測図（1/30）……81
第 57 図 10号～12号土壙墓実測図（1/30）……83
第 58 図 13号～14号土壙墓実測図（1/30）……84
第 59 図 15号・17号・18号土壙墓実測図（1/30）……86
第 60 図 16号・19号土壙墓実測図（1/20）……87
第 61 図 20号・22号土壙墓実測図（1/30）……89
第 62 図 21号・23号土壙墓実測図（1/20）……90
第 63 図 24号・25号土壙墓実測図（1/20）……92

第 64 図 26号・27号土壙墓実測図（1/30）……93
第 65 図 28号・29号土壙墓実測図（1/20）……95
第 66 図 30号・31号土壙墓実測図（1/30）……96
第 67 図 32号・34号土壙墓実測図（1/30）……97
第 68 図 33号・35号土壙墓実測図（1/20）……98
第 69 図 36号・37号土壙墓実測図（1/30）……99
第 70 図 38号・39号土壙墓実測図（1/30）……101
第 71 図 40号土壙墓実測図（1/30）……102
第 72 図 1号・2号祭祀土壙実測図（1/40）……104
第 73 図 3号祭祀土壙実測図（1/40）……105
第 74 図 4号祭祀土壙実測図（1/40）……106
第 75 図 5号祭祀土壙実測図（1/40）……107
第 76 図 6号・8号祭祀土壙実測図（1/40）……109
第 77 図 7号祭祀土壙実測図（1/40）……110
第 78 図 9号～11号祭祀土壙実測図（1/40）……112
第 79 図 1号・3号・4号甕棺実測図（1/6・1/8）……120
第 80 図 2号甕棺実測図（1/8）……121
第 81 図 5号～7号甕棺実測図（1/6・1/8）……122
第 82 図 8号～10号甕棺実測図（1/6・1/8）……123
第 83 図 11号甕棺実測図（1/8）……124
第 84 図 12号・13号甕棺実測図（1/8）……125
第 85 図 14号～17号甕棺実測図（1/6・1/8）……126
第 86 図 18号～20号甕棺実測図（1/6・1/8）……127
第 87 図 21号～23号甕棺実測図（1/6）……128
第 88 図 24号・25号・27号甕棺実測図（1/6・1/8）……129
第 89 図 26号甕棺実測図（1/8）……130
第 90 図 28号甕棺実測図（1/8）……131
第 91 図 29号甕棺実測図（1/8）……132
第 92 図 30号甕棺実測図（1/8）……133
第 93 図 32号・34号・35号甕棺実測図（1/6・1/8）……134
第 94 図 33号甕棺実測図（1/8）……135
第 95 図 36号～38号甕棺実測図（1/6・1/8）……136
第 96 図 29号木棺墓出土鏡拓影（2/3）……137

第 97 図　1号土壙墓，26号土壙墓，6号～10号祭祀土壙出土土器実測図（1/4）……139
第 98 図　墓地群出土の石器，鉄器実測図（1/2）……141
第 99 図　北部九州弥生人を基準とした偏差折線図……147
第 100 図　1号・2号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……152
第 101 図　1号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……153
第 102 図　1号～7号住居跡付近出土土器実測図（1/3）……154
第 103 図　2号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……155
第 104 図　3号・4号・7号竪穴住居跡実測図（1/60）……157
第 105 図　3号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……157
第 106 図　5号・6号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……159
第 107 図　5号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……160
第 108 図　8号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……161
第 109 図　8号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……162
第 110 図　9号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……162
第 111 図　10号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……163
第 112 図　10号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……164
第 113 図　11号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……164
第 114 図　11号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……165
第 115 図　12号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……166
第 116 図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……166
第 117 図　13号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……167
第 118 図　13号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……167
第 119 図　14号竪穴住居跡実測図（1/60）……168
第 120 図　14号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……169
第 121 図　15号・20号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……169
第 122 図　15号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……170
第 123 図　16号竪穴住居跡実測図（1/60）……171
第 124 図　16号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……171
第 125 図　17号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……172
第 126 図　18号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……173
第 127 図　18号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……174
第 128 図　19号竪穴住居跡実測図（1/60）……174
第 129 図　19号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……175

第 130 図　19号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……175
第 131 図　21号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……176
第 132 図　21号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……177
第 133 図　22号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……177
第 134 図　22号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……178
第 135 図　23号竪穴住居跡・カマド，47号竪穴住居跡実測図（1/60・1/30）……179
第 136 図　23号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……180
第 137 図　23号竪穴住居跡出土土製品実測図（1/2）……180
第 138 図　24号～26号竪穴住居跡実測図（1/60）……181
第 139 図　24号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……182
第 140 図　24号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……183
第 141 図　25号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……184
第 142 図　25号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……184
第 143 図　25号竪穴住居跡出土土製品実測図（1/2）……185
第 144 図　26号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……185
第 145 図　26号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……186
第 146 図　27号・28号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……187
第 147 図　27号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……188
第 148 図　29号・30号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……189
第 149 図　29号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……190
第 150 図　30号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……191
第 151 図　31号竪穴住居跡・カマド，51号竪穴住居跡実測図（1/60・1/30）……191
第 152 図　31号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……192
第 153 図　32号・33号・49号・50号竪穴住居跡実測図（1/60）……194
第 154 図　32号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……195
第 155 図　32号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……195
第 156 図　34号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……196
第 157 図　34号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……197
第 158 図　35号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……197
第 159 図　35号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……198
第 160 図　36号～42号竪穴住居跡実測図（1/60）……199
第 161 図　36号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……200
第 162 図　38号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……201

第 163 図　39号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……202
第 164 図　39号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……202
第 165 図　40号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……203
第 166 図　40号竪穴住居跡出土鉄器実測図（実大）……203
第 167 図　41号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……204
第 168 図　43号～45号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……205
第 169 図　43号竪穴住居跡出土鉄器実測図（1/2）……206
第 170 図　44号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……206
第 171 図　45号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……207
第 172 図　46号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……208
第 173 図　46号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……209
第 174 図　48号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……210
第 175 図　48号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……211
第 176 図　49号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……212
第 177 図　50号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……213
第 178 図　50号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）……213
第 179 図　51号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）……213
第 180 図　52号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）……214
第 181 図　1号掘立柱建物実測図（1/60）……215
第 182 図　2号掘立柱建物実測図（1/60）……216
第 183 図　3号掘立柱建物実測図（1/60）……217
第 184 図　4号掘立柱建物実測図（1/60）……218
第 185 図　5号掘立柱建物実測図（1/60）……219
第 186 図　6号掘立柱建物実測図（1/60）……219
第 187 図　7号掘立柱建物実測図（1/60）……220
第 188 図　8号掘立柱建物実測図（1/60）……221
第 189 図　1号～4号土壙実測図（1/40）……222
第 190 図　5号土壙実測図（1/40）……223
第 191 図　6号・7号土壙実測図（1/30）……224
第 192 図　7号土壙出土土器実測図（1/3）……225
第 193 図　落し穴実測図（1/30）……226
第 194 図　土壙墓実測図（1/30）……226
第 195 図　土壙墓出土土器実測図（1/3）……227

第 196 図　P－49出土石製品実測図（1/2）……227
第 197 図　墓地群の分布とグループ（1/300）……229
第 198 図　大庭・久保墓地群と上の原集落との関係図（1/2,000）……234

表目次

第 1 表　墓地群・竪穴住居跡新旧対照表……10
第 2 表　甕棺観察表……113
第 3 表　大庭・久保遺跡出土の弥生人骨……144
第 4 表　主要頭蓋計測値の比較（男性）……145
第 5 表　四肢骨計測値（男性，左）……146
第 6 表　1 掘立柱建物計測表……215
第 7 表　2 掘立柱建物計測表……216
第 8 表　3 掘立柱建物計測表……217
第 9 表　4 掘立柱建物計測表……218
第 10 表　5 掘立柱建物計測表……219
第 11 表　6 掘立柱建物計測表……219
第 12 表　7 掘立柱建物計測表……220
第 13 表　8 掘立柱建物計測表……221

付　図

付 図 1　大庭・久保遺跡遺構配置図（1/200）
付 図 2　大庭・久保遺跡墓地群配置図（1/100）

Ⅰ　発掘調査の経過

九州横断自動車道の21地点（STA159＋60～168＋40）内には，西法寺遺跡（21-A）・経塚遺跡（21-B）・大庭・久保遺跡（21-C）・上の原遺跡（21-D）などの遺跡が調査された。今回報告する大庭・久保遺跡は，「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－27－」で報告した上の原遺跡の西側に隣接した遺跡で，周辺は佐田川によって形成された扇状台地が筑後川に向かって開け，その東側の一角に大庭・久保遺跡は所在する。

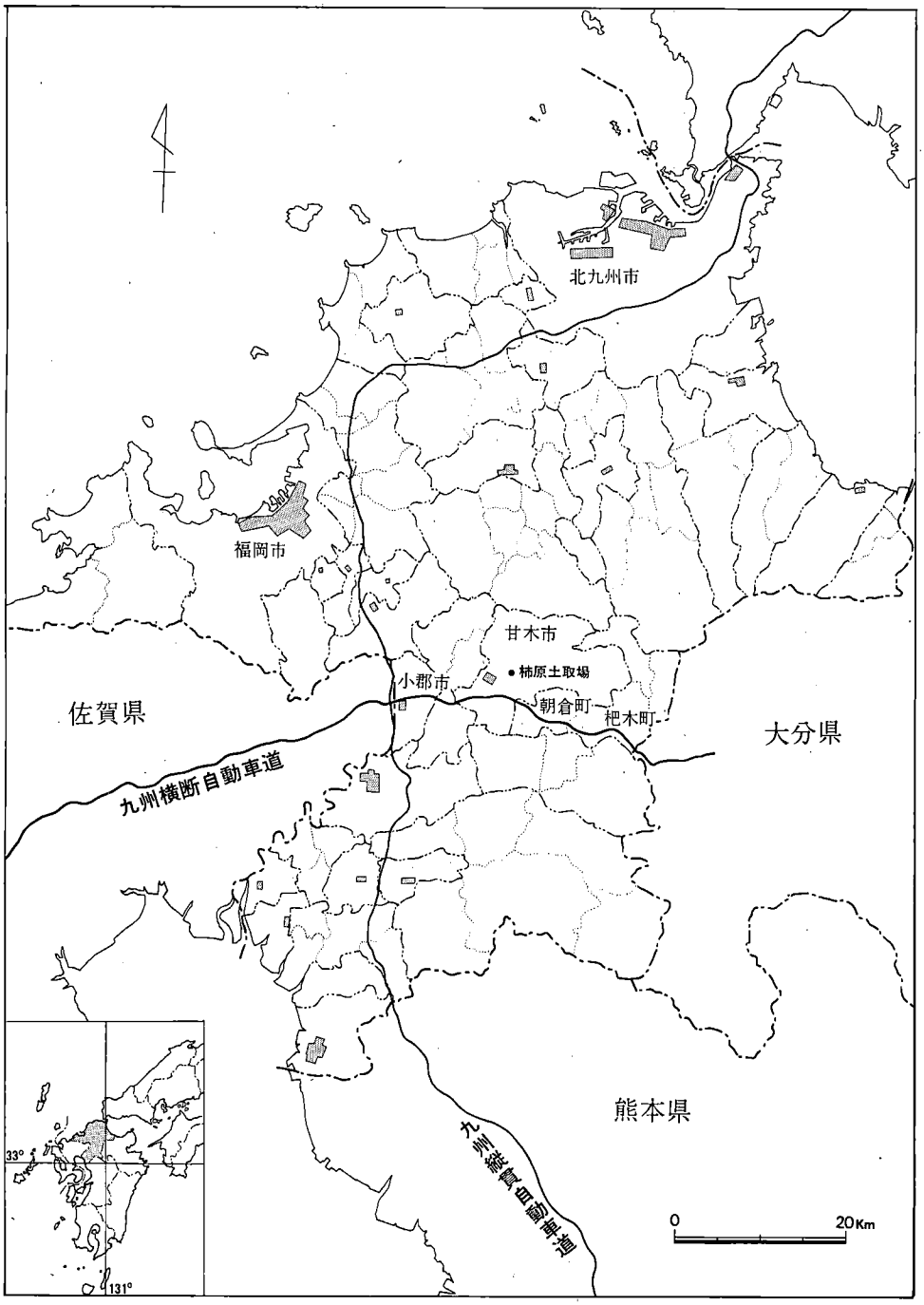
当該地区の試掘調査は57年に実施し，この時点で７世紀前後の竪穴住居と東側で弥生時代の墓地群を確認しており，道路敷きの南西側で圃場整備事業に伴って弥生時代の墓地群が調査されていることと相まって規模の大きな墓地群が予想された。

発掘調査は，日本道路公団との協議の結果，高速道路のボックス部分を先行させるとの結論から２次に分けて実施した。第１次調査は昭和60年８月27日から着手し10月11日で終了した。第２次調査は昭和60年12月23日～昭和61年３月13日の間実施したが，隣接する上の原遺跡が先行して調査が実施されており，これと並行して調査を実施することとなった。上の原遺跡は，工事工程の上から調査を急ぐ必要に迫られ，年度末に近づくにつれて逼迫し，大庭・久保遺跡の作業員を上の原遺跡の応援に出すなど緊張した日々が続いた。

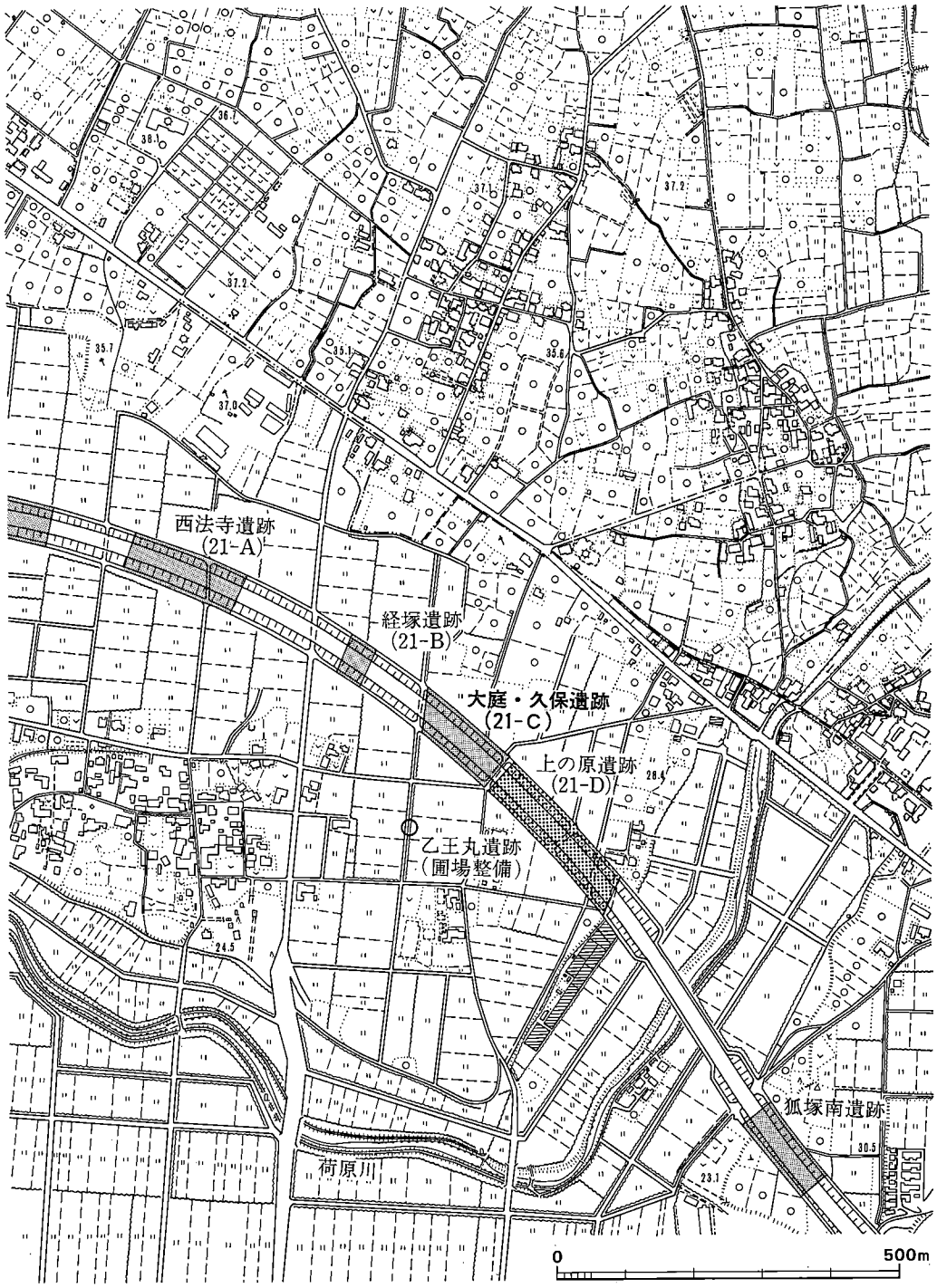
大庭・久保遺跡の調査地点は，他の地点からの排土が盛られており，土量の多さからダンプによる搬出が必要となり，表土剝ぎにかなりの時間を必要とした。表土剝ぎは昭和57年の試掘調査で弥生時代の墓地群を確認していた南東側から開始した。調査区の約1/3を剝ぎ終った時点で上の原遺跡で重機が必要となり，当面の調査範囲を確保した後重機を移動し，墓地群の調査に着手した。

墓地は様々な形態のものが錯綜しており，まさに謂集した状況を呈していた。このため，個々の墓地を検出した段階で平板によるポイント測量をしながら調査を進めていった。この間排土の除去が終了し，重機による表土剝ぎは順調に推移した。この結果，調査区の3/4が７世紀以降の竪穴住居群で構成され，第１次調査の総数を合わせると51軒を数えた。調査区の南東側で検出した墓地群に伴う集落は調査区内からはまったく発見されておらず，同時並行して調査した上の原遺跡にその集落が見いだせる。線的な調査のため断言はできないが，上の原集落と大庭・久保の墓地群とは相関関係が存在した可能性が強いといえよう。発掘調査は約３ケ月を要したが，３月中旬には次の調査地点である39地点（杷木宮原遺跡）の発掘調査の準備に取りかかった。

整理作業は，当初文化課甘木事務所で実施していたが，甕棺墓の復原などから九州歴史資料館に遺物を移し，現場と並行しながら本格的な整理作業に着手した。



第１図　九州横断自動車道路線図



第２図　大庭・久保遺跡周辺地形図（1/1,000）

なお，大庭・久保遺跡に関する調査関係者は下記のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

局　　長	今村　浩三
総務部長	安元　富次
管理課長	森　　宏之
管理課長代理	佐伯　　豊

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

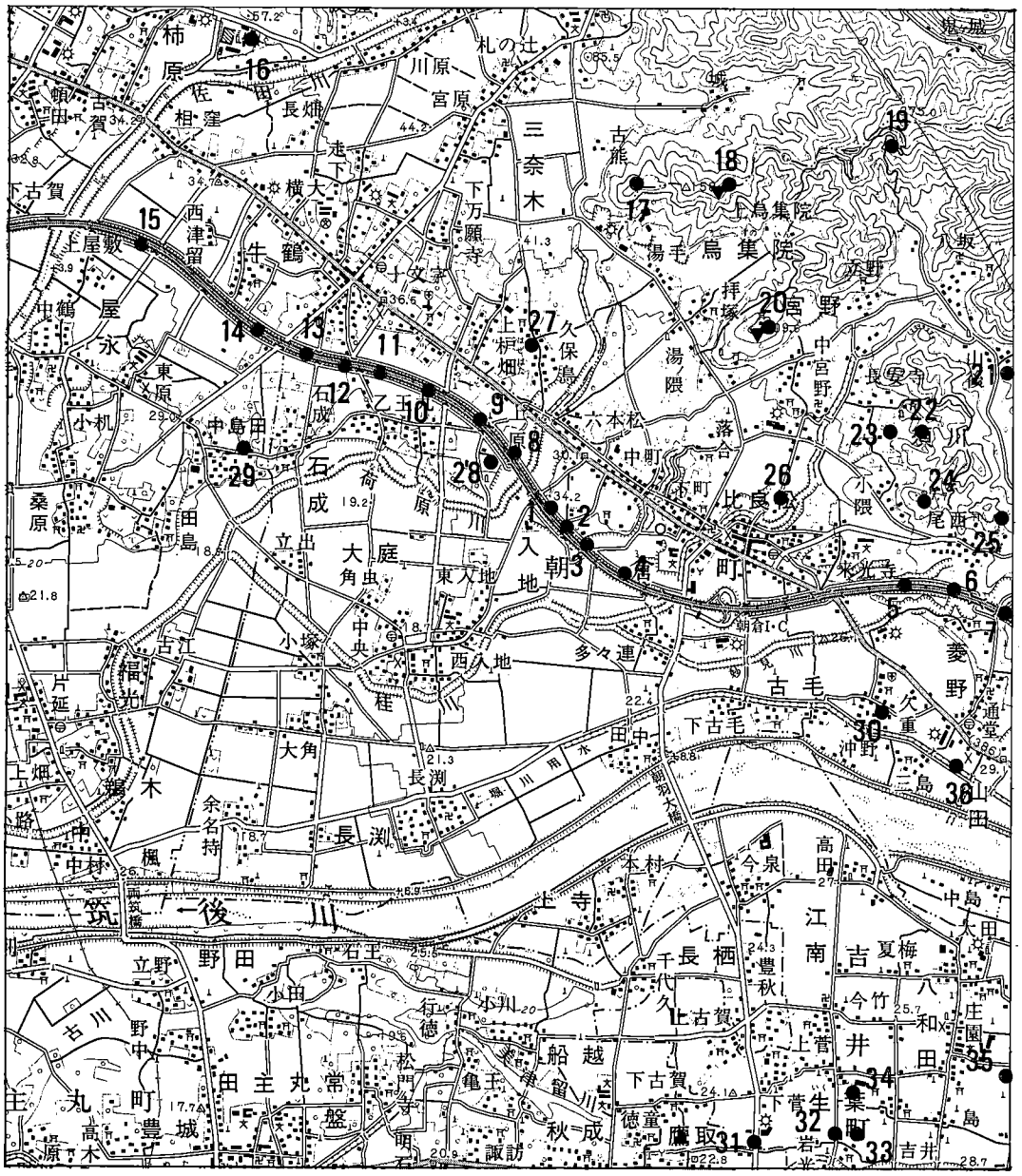
所　　長	乗松　紀三
副 所 長	西田　　功
副 所 長（技術担当）	中村　義治
庶務課長	徳永　　登
用地課長	岩下　　剛
工務課長	後藤二郎彦
小郡工事区工事長	友田　義則
甘木工事区工事長	猪狩　宗雄
朝倉工事区工事長	小手川良和
杷木工事区工事長	山中　　茂

福岡県教育委員会

総　括	教 育 長	友野　　隆
	教育次長	安部　　徹
	管理部長	大鶴　英雄
	文化課長	前田　栄一
	文化課長補佐	平　　聖峰
	文化課長技術補佐	宮小路賀宏
	文化課参事補佐	栗原　和彦
庶　務	文化課庶務係長	平　　聖峰（兼任）
	文化課事務主査	長谷川伸弘
調　査	九州大学大学院　比較社会文化研究科 助 教 授	中橋　孝博

調　査	文化課調査第２係長	宮小路賀宏（兼任）（現・九州歴史資料館）
	同　技術主査	井上　裕弘（調査担当）
	同　主任技師	木下　　修
	同　主任技師	高橋　　章（現・北九州教育事務所）
	同　主任技師	児玉　真一
	同　主任技師	新原　正典（現・甘木歴史資料館）
	同　主任技師	中間　研志（現・福岡教育事務所）
	同　主任技師	佐々木隆彦（現・九州歴史資料館）（調査担当）
	同　主任技師	小池　史哲
	同　技　　師	伊崎　俊秋（現・南筑後教育事務所）
	同　技　　師	小田　和利（現・九州歴史資料館）
	同　技　　師	緒方　　泉（現・筑豊教育事務所）
	同　文化財専門委員	木村幾多郎（現・大分市立歴史資料館）
	同　臨時職員	日高　正幸（現・小石原村教育委員会）
	同　臨時職員	森山　栄一（現・筑紫野市教育委員会）
	同　臨時職員	宮田　浩之（現・小郡市教育委員会）
	調査補助員	高田　一弘
		武田　光正（現・遠賀町教育委員会）
		佐土原逸男
		樋口　秀信（現・佐賀県教育委員会）
		平嶋　文博（現・三輪町教育委員会）
		向田　雅彦（現・鳥栖市教育委員会）
		柏原　孝俊（現・小郡市教育委員会）
		田中　康信（現・瀬高町教育委員会）

この他，発掘作業に携わった地元の方々をはじめ，多くの方々の援助をいただき調査が無事終了したことに感謝を申し上げたい。



1.狐塚南遺跡　2.治部ノ上遺跡　3.座禅寺遺跡　4.才田遺跡　5.長島遺跡　6.中妙見遺跡　7.原の東遺跡
8.上ノ原遺跡　**9.大庭・久保遺跡**　10.西法寺遺跡　11.中道遺跡　12.石成久保遺跡　13.大環端遺跡
14.塔ノ上遺跡　15.高原遺跡　16.柿原野田遺跡　17.古熊古墳群　18.烏集院１号墳　19.北八坂Ｂ古墳群
20.宮地崩古墳群　21.赤林古墳群　22.長安寺窯跡　23.長安寺廃寺　24.小隈古墳群　25.上須川古墳群
26.八並遺跡　27.久保鳥遺跡　28.上原遺跡　29.金川中島田遺跡　30.古垂遺跡　31.鷹取五反田遺跡
32.堺町遺跡　33.大碇遺跡　34.生葉１号墳　35.女塚古墳　36.朝倉三連水車

第３図　大庭・久保遺跡と周辺の主要遺跡分布図（1/50,000）

II　遺跡の位置と環境

大庭・久保遺跡は，福岡県朝倉郡朝倉町大字大庭字久保に所在する。

甘木市の鳥屋山（標高645m），籾岳（標高693.9m）の山塊を開析する佐田川は，途中で多目的ダムとしての寺内ダムで堰き止められ，その中流域は佐田川によって形成された広大な扇状台地が広がる。扇状台地の西側には佐田川，東側は荷原川が南流し，中央には朝倉路の幹線道路である386号線が筑後川に沿って大分県日田市へと延びている。

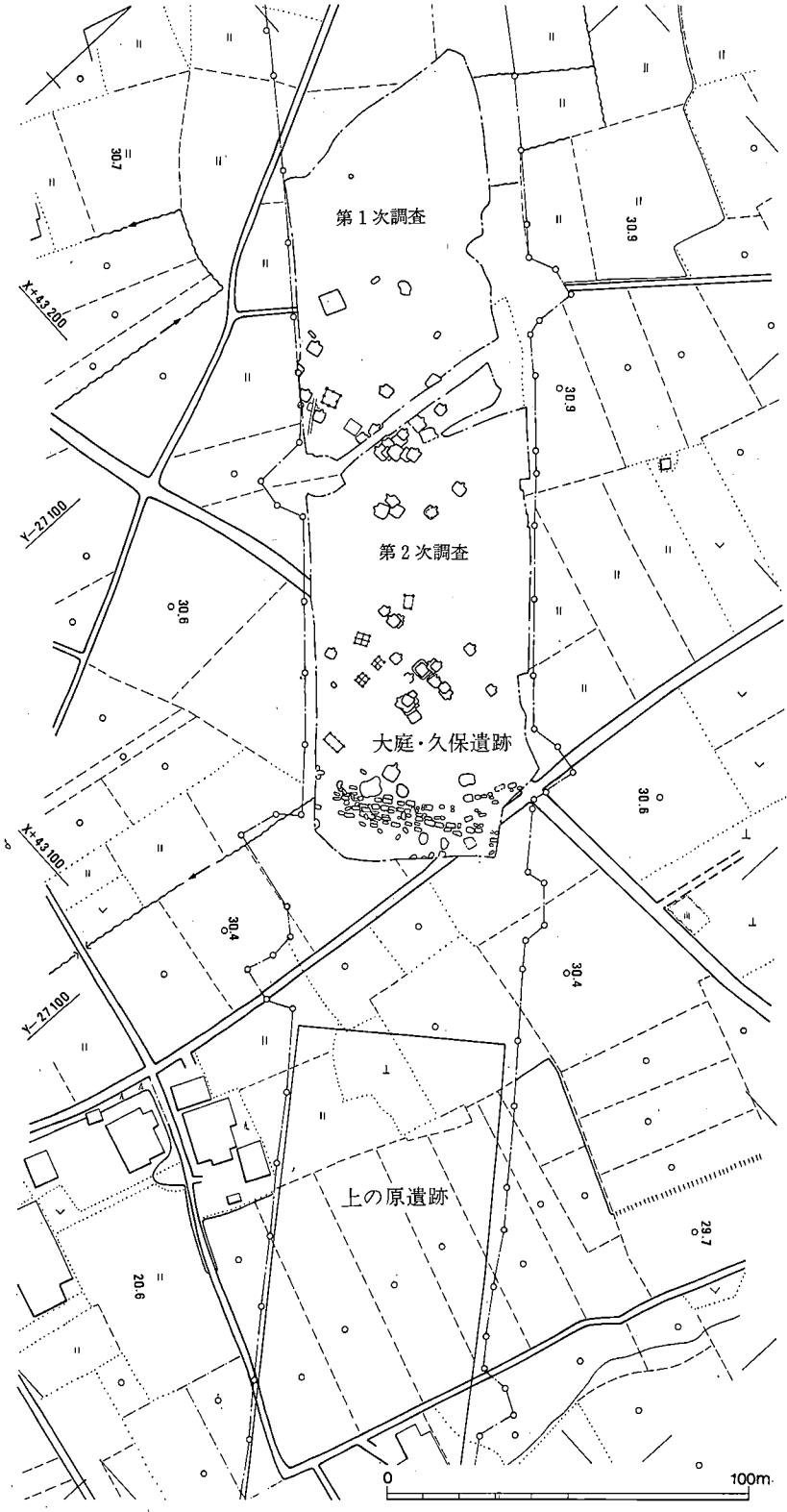
三奈木を中心とする扇状台地上の遺跡は，横断自動車道工事に伴う路線内での遺跡の実態は解明されたものの，台地の中央部から山手にかけての遺跡については不明な点が多い。横断道用地内で数多くの遺跡が発見されたことは，扇状台地の縁辺部近くを走っていることがその要因とも考えられるが，烏集院周辺の丘陵上には烏集院１号墳，宮地獄古墳などの前方後円墳や多くの古墳群が分布しており眼下に広がる扇状台地上には数多くの遺跡が埋蔵されていることが想起できる。

この扇状台地の西側を流れる佐田川を挟んで相対峙するように小田の扇状台地が南に延びている。この台地上にも過去の発掘調査が物語るように弥生時代から古墳時代にかけての集落跡や墓地群が密集した広がりを見せ，多重の環濠集落である平塚川添遺跡が発見されたことで一躍脚光を浴びた所でもある。

この扇状台地も東に佐田川，西に小石原川に挟まれた地形をなし，朝倉郡夜須町で内行花文精白鏡や日光鏡，ガラス璧などの副葬品を所有した峯遺跡，鏡や不明銅製品などの鋳型を出土したヒルハタ遺跡，また佐賀県の吉野ケ里遺跡など弥生時代の「クニ」と判断された遺跡と地理的な立地条件に共通するものがある。

今回調査した大庭・久保遺跡は，小田扇状台地上の遺跡群からやや離れた所に位置しており，弥生時代の墓地群において総体的な埋葬形式については，弥生時代特有の縦列埋葬の形態を採用しているものの，甕棺の製作技法などが小田台地の栗山遺跡などで検出された甕棺と比較すると一段と粗く未熟さが指摘できる。中核地への供給源とは異なった供給源の存在が考えられよう。

遺跡の周辺の位置と環境については，東側に隣接する上の原遺跡の報文中に述べられているので簡略に述べるにとどめる。詳しくは「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」－18・27集－を参照されたい。



第4図　大庭・久保遺跡地形図（1/3,000）

III　発掘調査の記録

1　遺跡の概要

大庭・久保遺跡は，扇状台地の先端近くに位置する弥生時代中期初頭から前葉と後期の墓地群と７世紀以降の集落跡から構成されている。

この墓地群は，北東側がわりと整然と列をなしているが，中央部分から南西側はかなり錯綜しており，北東から南西方向に縦列して形成されていることが判明した。その幅はおおよそ10.0m前後を測る。しかも，墓地群が形成されている部分は周辺よりも若干微高地（比高差30cm～40cm）をなし，意識的にこの場所を選定したと考えられる。

墓地の種類は様々で，甕棺墓38基，木棺墓33基，石蓋土壙墓９基，木蓋土壙墓40基，箱式石棺墓８基などがありバラエティーに富んでいる。と同時に，弥生時代中期の墓地群に普遍的に見られるように縦列埋葬された墓地群を挟む形で祭祀土壙が配されており，弥生時代の墓地と祭祀との両面から当時の葬送形態を知る重要な手掛かりが把握できる可能性を示唆した。

また，隣接する西側では圃場整備事業に伴う調査で当該遺跡に続くとみられる墓地群が確認されており（乙王丸遺跡），今回の調査区北東側が墓地群の端でないことを考えあわせると，その長さは200m以上と推測される。

この墓地群の南東側200mから弥生時代中期初頭から中期中葉頃の規模の大きな上の原集落が発掘され，路線内での総数は65軒を数えた。竪穴住居の分布状況から調査した箇所は，集落の東端に近い部分と考えられ，西側に広がることを想定すると大規模集落になると考えられる。大庭・久保遺跡の墓地群を所有したのは上の原集落と思われ，甕棺墓から墓地群の上限時期とも符合する。また，時期決定のはっきりしない木棺墓や土壙墓，明らかに弥生時代後期に下がる箱式石棺墓などが同じ墓域内に埋葬されていることを考えあわせると，発見されていないが上の原集落は弥生時代後期まで連綿と継承された拠点集落の可能性がある。

生活遺構としては，第１次・２次調査で発掘された７世紀から８世紀の竪穴住居跡が51軒，掘立柱建物８棟，土壙７基の他，落し穴１基を検出した。

竪穴住居跡は，錯綜しかなり重複するものと単独で散在するものとがあり，前者は一定程度規制を受けた場所での建て直しが図られたのであろう。住居跡には殆どがカマドを付設しているが，住居の壁から突出するタイプと「U」字状に付設するカマドとがある。住居の遺存状態は総体的に悪い。

掘立柱建物については８棟を検出したが，その内訳は１間×２間が１棟，２間×２間が４棟（この内総柱建物が３棟），２間×３間が１棟，１間×３間のやや大型の建物１棟，1/2が調査

区外ではっきりしない建物１棟を数える。その他，ピットの中で規則性があるが一方の柱が存在しないものや柱穴の深さが極端に異なるものなどがあり，掘立柱建物の可能性を残しているが不確定要素が多くここでは割愛した。最後に墓地群と竪穴住居に付与した号数が整理の時点で変更になった遺構があるため新旧対照表を掲げておく。

第１表　墓地群・竪穴住居跡新旧対照表

木棺墓（旧→新）	石蓋土壙墓（旧→新）	土壙墓（旧→新）	竪穴住居（旧→新）
木７号 → ６号	８号 → 土37号	32号 → 30号	28号 → 29号
８号 → ７号	９号 → ８号	33号 → 31号	29号 → 30号
９号 → ８号	10号 → ９号	34号 → 32号	30号 → 31号
10号 → ９号	11号 → 土39号	37号 → 33号	31号 → 32号
11号 → 10号		38号 → 34号	32号 → 33号
12号 → 11号	土壙墓（旧→新）	36号 → 35号	33号 → 34号
13号 → 12号		39号 → 36号	34号 → 35号
14号 → 13号		石蓋８号→ 37号	35号 → 36号
15号 → 14号	土12号 → 木31号	木６号 → 38号	36号 → 37号
16号 → 15号	13号 → 12号	石蓋11号→ 39号	37号 → 38号
17号 → 16号	14号 → 13号	石７号 → 40号	38号 → 39号
19号 → 17号	15号 → 14号		39号 → 40号
20号 → 18号	16号 → 15号	祭祀土壙	40号 → 41号
21号 → 19号	17号 → 16号		42号 → 43号
22号 → 20号	18号 → 17号	12号 → ９号	43号 → 44号
23号 → 21号	19号 → 18号		44号 → 45号
24号 → 22号	20号 → 19号		45号 → 46号
25号 → 23号	21号 → 20号	竪穴住居	46号 → 47号
26号 → 24号	22号 → 21号		47号 → 48号
27号 → 25号	23号 → 22号	20号 → 21号	48号 → 49号
28号 → 26号	24号 → 23号	21号 → 22号	49号 → 50号
29号 → 27号	25号 → 24号	22号 → 23号	50号 → 51号
30号 → 28号	26号 → 25号	23号 → 24号	51号 → 52号
土32号 → 29号	27号 → 26号	24号 → 25号	
土33号 → 30号	木18号 → 27号	25号 → 26号	
土12号 → 31号	29号 → 28号	26号 → 27号	
30号 → 32号	31号 → 29号	27号 → 28号	
土35号 → 33号			

2　遺構と遺物

(1)　墓　地

①　甕棺墓

1号甕棺墓　(図版4－(2)・5－(1), 第5図)

調査区の北東端から検出した小児用甕棺墓である。不整形をした二段掘りの墓壙に広口の壺形土器を使用した単棺である。蓋には緑泥片岩の板石を使い，接する部分に灰白色の粘土で目張りを施している。

墓壙の規模は，主軸長が1.00m，幅が85.0cmを測る。主軸方位はN62°Eを示し，埋葬傾斜角度は＋6度である。棺内に人骨などは遺存していない。

2号甕棺墓　(図版5－(1)・(2), 第6図)

1号甕棺墓の南西隣で検出した成人用の接口式甕棺墓である。この甕棺墓の東隣には小児用の甕棺墓が埋葬されており，1号の小児用の甕棺墓と合わせて親子の関係が想起される。墓壙の形状は楕円形を呈し，その規模は主軸長が2.45m，短軸が1.50m，深さは70cmを測る。下甕をやや高位置に据え上甕より大型のものを使用しているが，底部の接合面がはずれたかあるいは破損したため緑泥片岩で補修し，石を押さえに使っている。接口部と補修部分には灰黄色の粘土で目張りを施している。埋葬傾斜角度は－10度を測り，頭位は下甕方向であろう。主軸方位は頭位側で測るとS40°Wである。棺内の出土遺物はない。

3号甕棺墓　(図版5－(1), 第5図)

2号甕棺墓と主軸をほぼ並行に埋葬された接口式の小児用甕棺であるが，上部の削平が激しい。現状での墓壙の形状は楕円形を呈する。その規模は主軸長70.0cm，短軸長は54.0cmを測る。墓壙の残りが悪いため頭位がはっきりしないが，2号甕棺との血縁的な関係があるとするならば南西側であろう。主軸方位はS46°Wを示す。棺内の出土遺物はない。

4号甕棺墓　(図版6－(1)・(2), 第7図)

調査区の北東側で検出した接口式の甕棺墓で，上下の甕の寸法が1.00mを測ることから，若年層の被葬者を埋葬したと考えられる。西側には隣接する形で2基の小児甕棺が埋葬されているが，頭位の方向が逆である。

墓壙の形態は不整楕円形を呈し，北側には階段状のテラスを設けている。規模は主軸で1.70

m，短軸長は1.05mを測る。下甕の約1/2は横穴を穿ち埋め込んでいる。下部を除く接口部分には灰黄色の粘土で目張りをしている。下甕を頭位とするならば主軸方位はS22°Wを示し，埋葬傾斜角度は－7度を測る。墓壙の覆土内から6号甕棺墓の上甕の打ち欠き片が出土したが，棺内の人骨などは遺存しない。

5号甕棺墓　(図版7－(1)，第5図)

4号と34号の若年層を埋葬したと思われる甕棺墓に挟まれた形で検出した小児用の単棺である。周辺には小児層・若年層の甕棺墓が4基ほど近接して埋葬されており，この一群を挟むように成人の木棺墓が配されている。墓壙の形状は楕円形を呈し，甕棺の口縁に接する部分には長さ50cmほどの木蓋を施したと考えられる掘り込みがある。墓壙の規模は長軸が1.20m，短軸が85.0cmを測る。埋葬傾斜角度はほぼ水平で，主軸方位はN35°Eを示す。棺内からの出土遺物はないが，墓壙の上層から輝緑凝灰岩製の石包丁の破片が出土した。これが棺外の副葬品なのか混入遺物なのかは分からない。

6号甕棺墓　(図版6－(1)・7－(2)，第7図)

20号木棺墓，34号・35号甕棺墓と列をなす中で，両者の甕棺墓に挟まれた形で検出された上甕を打ち欠き接口させた小児用の甕棺墓である。主軸で見ると木棺墓，4号・34号甕棺墓がほぼ同一方向の主軸をなす。墓壙形状は楕円形を呈し，断面は逆台形をなす。その規模は主軸が1.50m，短軸が1.0m前後，深さは55.0cmと小児用甕棺墓にしては深く掘られている。接口部分には灰黄色の粘土で目張りを施している。埋葬傾斜角度は水平で，主軸方位は人骨が遺存しておらず頭位がはっきりしないが，甕棺の時代的な趨勢から下甕にあるとすればS38°Wを示す。前述したように，上甕の打ち欠き片が4号甕棺の墓壙内から出土したことは，ほぼ同時の埋葬であったことが窺われる。棺内からの出土遺物はない。

7号甕棺墓　(図版8－(1)，第5図)

当該墓地群の縦列埋葬は，調査区の中央から南西側にかけては著しく錯綜しているが，北東側は「Y」字形に分岐している。その「Y」字形に分かれた間，つまり列から若干ずれた箇所に成人の1号土壙墓と7号小児用の甕棺墓，6号石蓋土壙墓が埋葬されている。しかし，列からずれたとはいえ墓域から逸脱したものではない。この3基の墓地は親子関係の繋がりが想定される位置関係にある。当該甕棺墓は6号石蓋土壙墓と重複関係にあり，甕棺墓の方が新しい。所謂挿入式の甕棺墓で，墓壙形態は楕円形を呈し，断面は逆台形を呈する。その規模は主軸の長さが1.00m，短軸は65.0cm，深さは30.0cmを測る。棺内からの出土遺物はない。

8号甕棺墓　(図版8－(2)・9－(1), 第8図)

8号甕棺の周辺は，成人墓や小児墓が極めて謂集した状況を示した箇所で，墓の間隙を縫うように埋葬され重複関係が著しい。当該甕棺墓も9号石蓋土壙墓との重複があり，石蓋土壙墓を切った状態で検出された緑泥片岩の板石を墓標に持つ小児用甕棺である。発見当時墓標に押しつぶされた状態で甕棺の上部が破損していた。甕棺は接口式で，墓壙形態は不整楕円形を呈する。墓標が遺存していることからもともと浅く埋葬されたのであろう。主軸方位は頭位がはっきりしないため判断できないが，北東側とすればN50°Eを示す。埋葬傾斜角度は－4度を測る。棺内からの出土遺物はない。

9号甕棺墓　(図版24－(2), 第8図)

8号木棺墓（成人墓）の墓壙内に埋葬された小児用の接口式の甕棺墓で，発見当時かなり破壊されていたが，壺を使った下甕に上甕が接するように僅かに遺存していたことから，壺と甕の組み合わせであることが判明した。当該甕棺墓は22号木棺墓を切っているが，8号木棺墓との新旧関係ははっきりしない。重複していたため墓壙なども捉えられていないが，8号木棺墓の主軸とは90°のずれがある。明らかに木棺墓との血縁関係があったものと考えられる。その他のことは不明である。棺内からの出土遺物はない。

10号甕棺墓　(図版9－(2), 第8図)

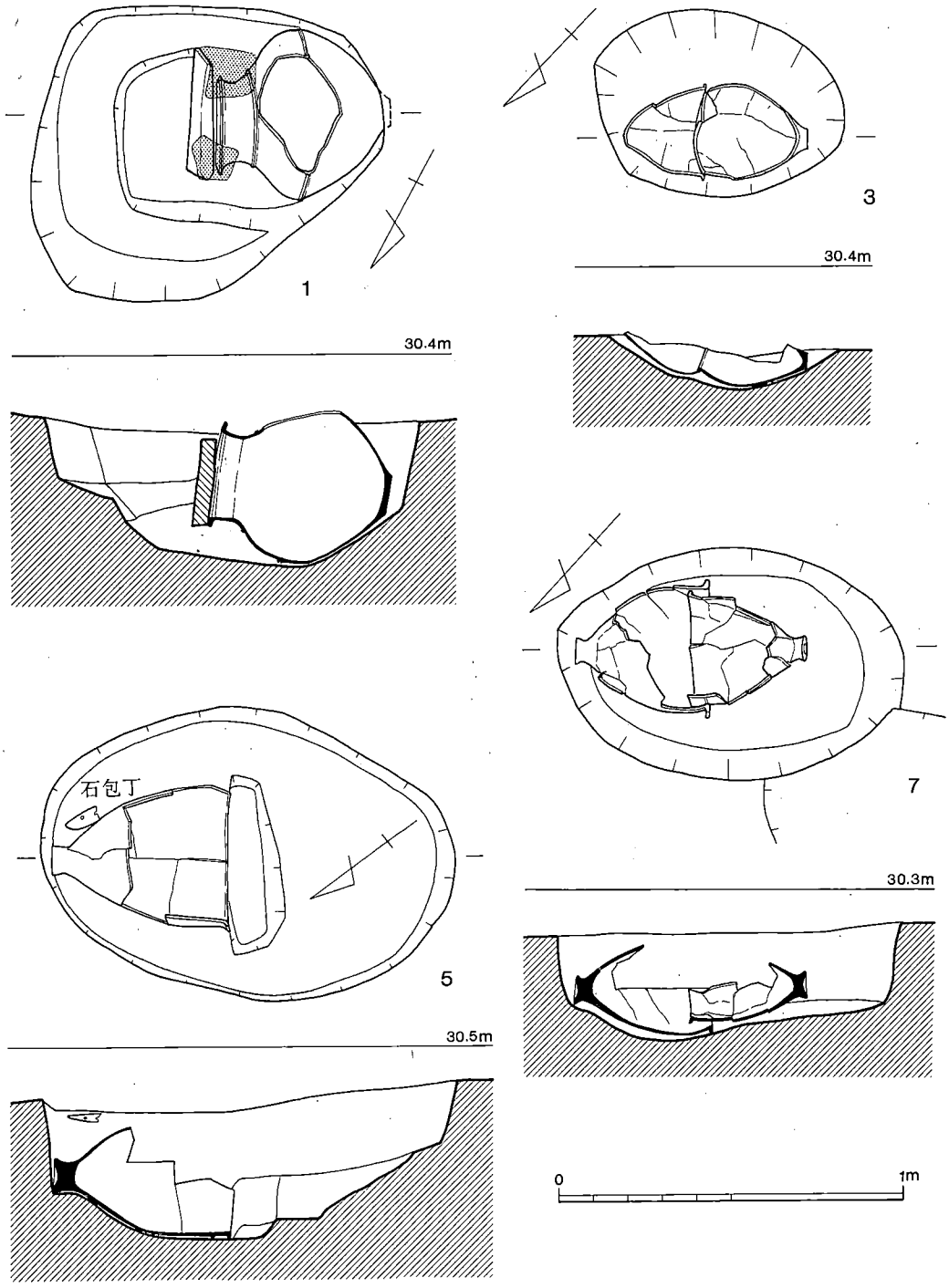
10号木棺墓と重複して検出した挿入式の小児用甕棺である。下甕に対して上甕は，壺の肩部を打ち欠いて挿入している。墓壙内の甕棺は，10号木棺墓の小口の板石に接する形で埋置されており，10号木棺墓（成人棺）の被葬者との血縁関係が考えられる。

墓壙の形態は不整楕円形を呈し，その規模は主軸長1.20m，短軸長は89cmを測る。埋葬傾斜角度は＋3度で，主軸方位はN27°Wを示し，10号木棺墓に対して直交した形をとる。打ち欠いた上甕の破片を18号甕棺墓の北側で採集した。棺内からの出土遺物はない。

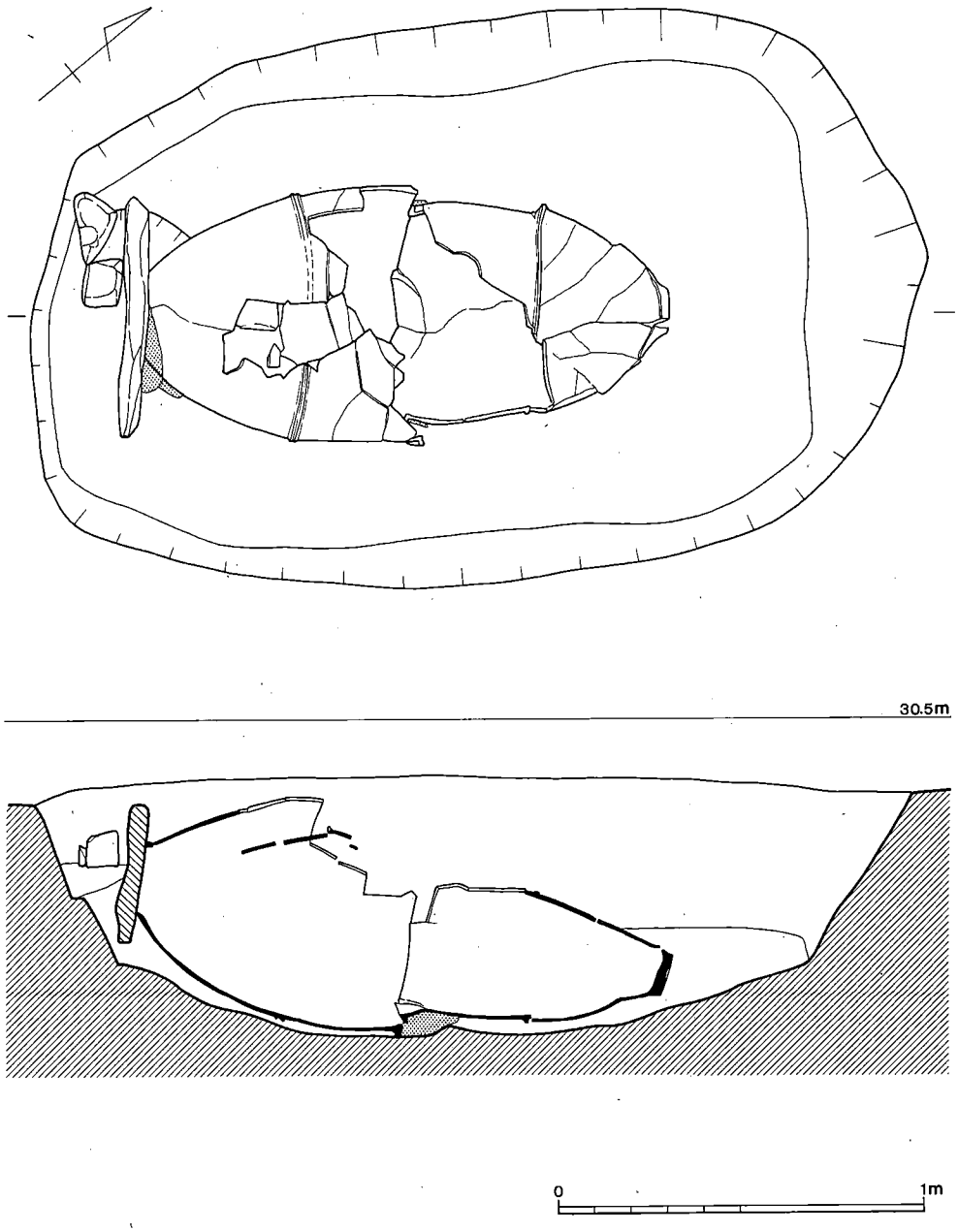
11号甕棺墓　(図版10－(1), 第8図)

調査区のほぼ中央部分で検出した成人用の甕棺墓である。断面で見るかぎりでは挿入式と判断されるが，接口式のものがずり落ちたことも考えられる。当該甕棺は26号甕棺と33号木棺墓と切り合いがあり，33号より新しく26号より古い。

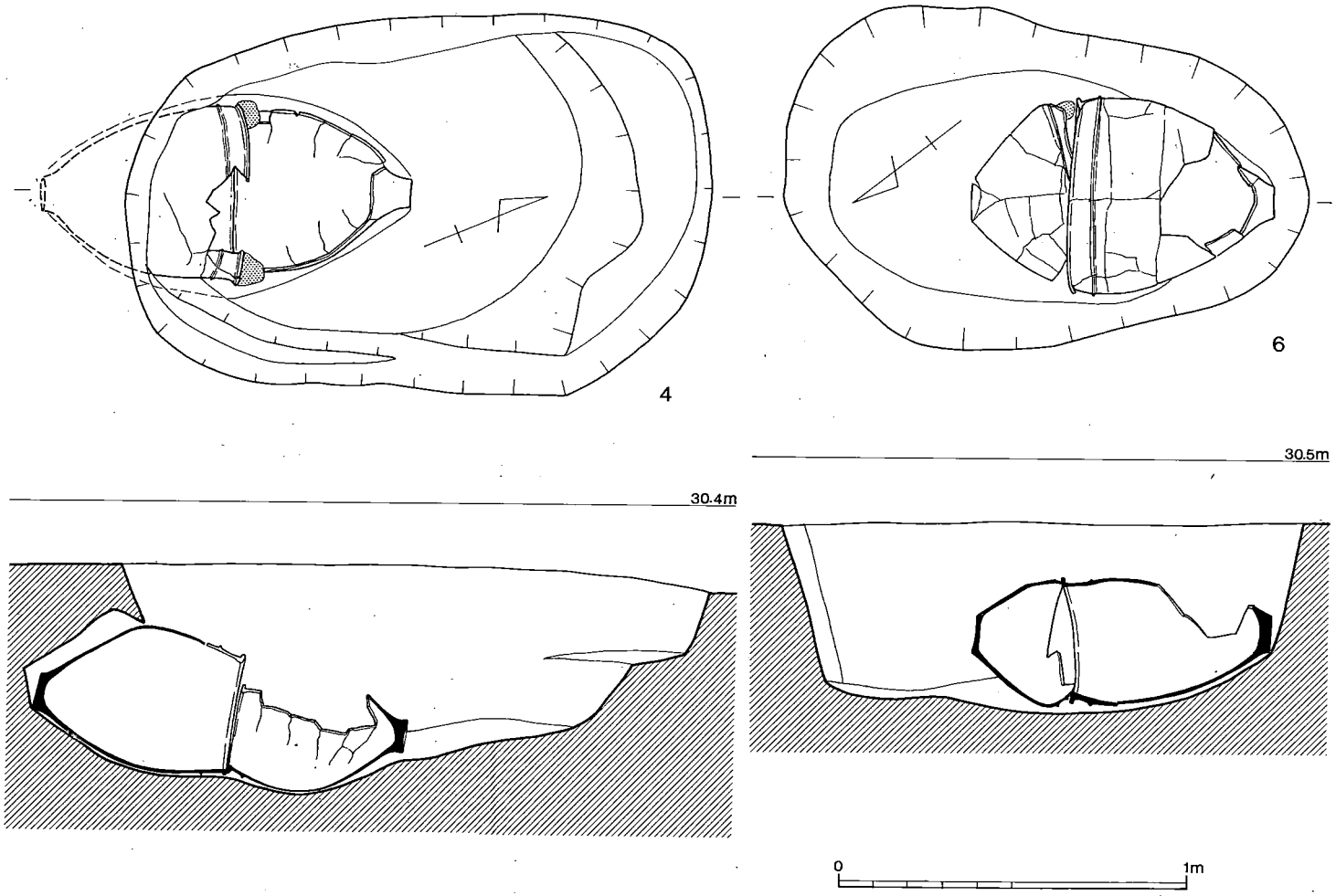
墓壙は楕円形を呈し，下甕の1/3が横穴に挿入されている。墓壙の規模は主軸長を復原すると1.70m前後で，短軸が1.25mを測る。上下甕の接合部には黄茶褐色粘土で目張りを施している。下甕の最下位部には穿孔がみられる。主軸方位はS66°Wを示す。埋葬傾斜角は＋25度を測る。棺内の出土遺物はない。



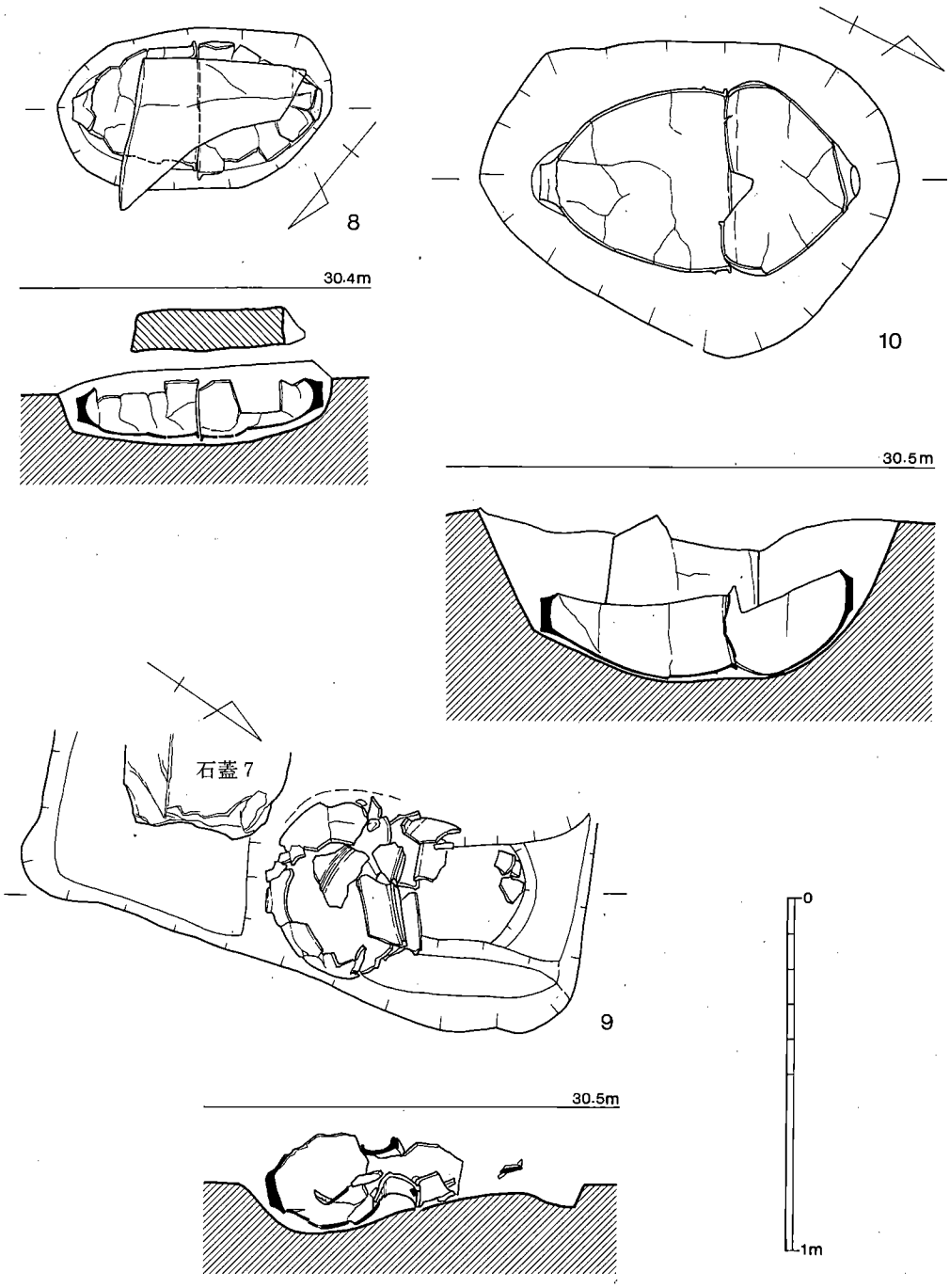
第5図　1号・3号・5号・7号甕棺墓実測図（1/20）



第6図　2号甕棺墓実測図（1/20）



第7図　4号・6号甕棺墓実測図（1/20）



第 8 図　8 号～10号甕棺墓実測図 (1/20)

12号甕棺墓 （図版10－(2)，第9図）

調査区の中央付近の2列埋葬の間で検出した甕棺墓で，内法が1.00mを測ることから若年層を埋葬したと考えられる。他の墓地との重複はない。上甕は壺の肩部を打ち欠いて下甕に挿入し，この部分に灰黄色の粘土で目張りをしている。

墓壙は楕円形を呈し，西側には低いテラスを削り出している。墓壙の規模は，長軸が1.82m，短軸が1.20mを測る。当該時期は頭位が下甕にあると考えられることから，主軸方位はN71°Eを示す。埋葬傾斜角度は＋6度を測る。棺内の出土遺物はない。

13号甕棺墓 （図版11－(1)，第10図）

5号木棺墓の南東隣に主軸をほぼ並列して埋葬した覆口式の小児用甕棺である。墓壙の形状は楕円形で，床面は2段掘りをなし，甕棺を埋置する箇所は一段掘り下げて固定している。墓壙の規模は長軸が1.25m，短軸長は75.0cm測る。

甕棺は壺の下甕に鉢形土器を深く覆った形で埋納され，このために目張り粘土の使用は認められない。下甕の胴部には径が5.0cmの穿孔がみられる。主軸方位はN57°Eを示し，埋葬傾斜角は＋16度を測る。棺内からの出土遺物はない。

14号甕棺墓 （図版11－(2)，第10図）

縦列埋葬から僅かにはずれた位置にあり，27号土壙墓と重複した接口式の小児用甕棺で，甕棺墓が新しい。主軸は27号土壙墓と同一で，近親者の関係にあったと考えられる。

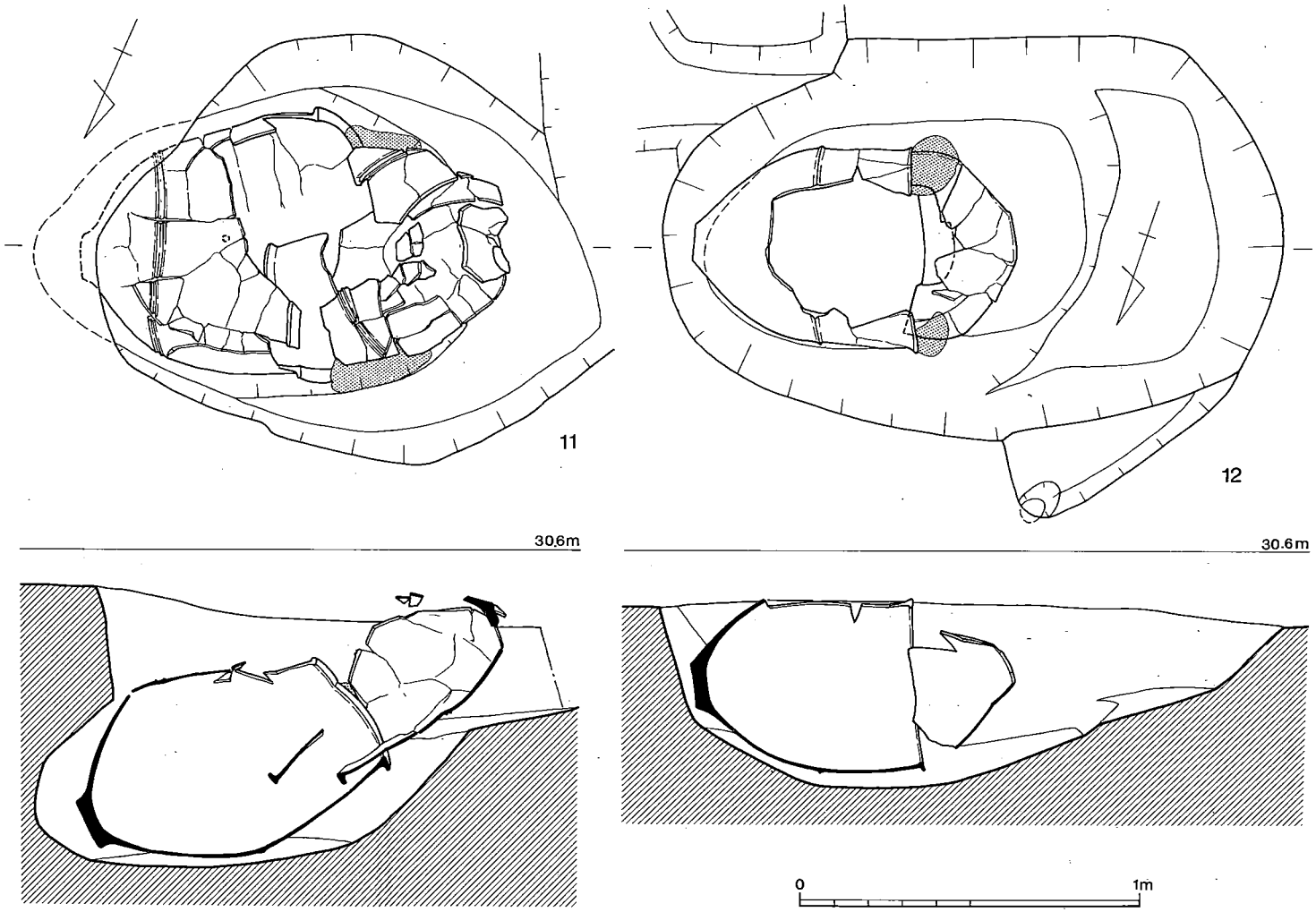
墓壙の形態は不整楕円形を呈し，断面は舟形を呈する。長軸の規模は1.20mを測り，甕の接合部分は黄褐色の粘土を一周させる。埋葬傾斜角はほぼ水平で，主軸方位はN77°Eを示す。棺内の人骨は遺存しない。

15号甕棺墓 （図版23－(2)，第10図）

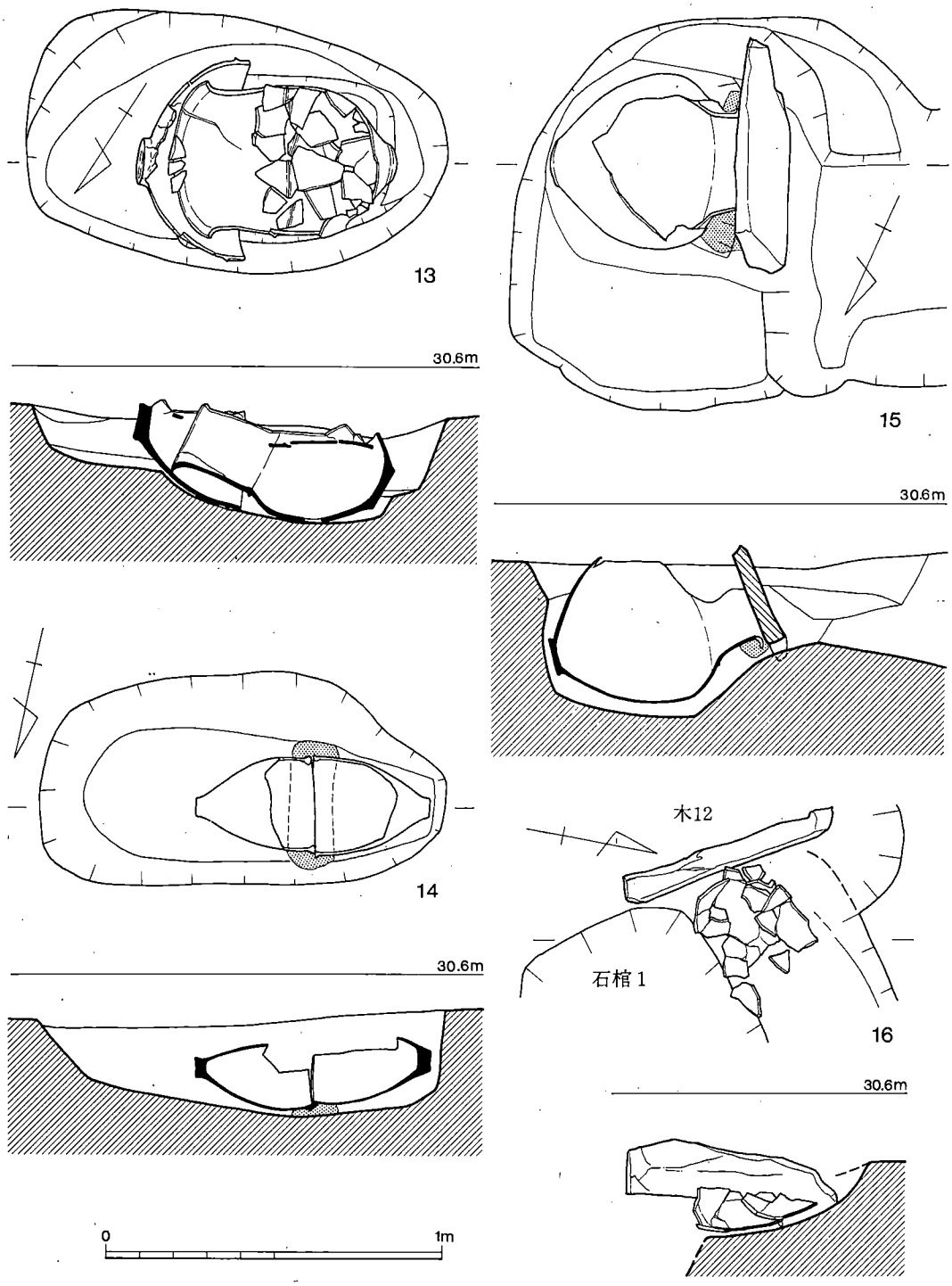
調査区の南西側の墓地群が非常に密集した箇所で検出した小児用甕棺墓である。6号木棺墓と重複しており，甕棺墓が木棺墓の墓壙を切っている。6号木棺墓（成人棺）との近親関係が考えられる。

甕棺はやや大型の壺を使い，緑泥片岩の板石で蓋をする単棺墓である。墓壙の形状は切り合いではっきりしないが，不整円形のようである。甕の上部が欠損しているが，板石との接点には粘土の目張りが一周していたようである。

墓壙内の甕棺を埋置する箇所は一段と深く掘られて甕棺の安定を図っている。主軸方位はS65°Wを示し，埋葬傾斜角度は＋17度を測る。棺内からの出土遺物はない。



第9図　11号・12号甕棺墓実測図（1/20）



第10図　13号～16号甕棺墓実測図 (1/20)

16号甕棺墓　(図版41－(1), 第10図)

1号箱式石棺墓と12号木棺墓とが切りあった箇所で検出した甕棺墓で，大半が1号箱式石棺墓で破壊され，調査時点では上甕と下甕の接口部分が遺存しているに過ぎなかった。1号箱式石棺墓と12号木棺墓との新旧関係は石棺墓の方が新しい。石棺墓の墓壙を掘る段階で12号木棺墓の存在を知っていたためか小口石を破壊してはいないが，甕棺は大破している。しかも，下甕の破片が1号石棺の墓壙内のみならず2号石蓋土壙墓，5号・7号祭祀土壙に散乱しており，祭祀土壙内の破片は甕棺を埋納する際に打ち欠き片を投棄したことが考えられるが，他の墓壙内の散乱は石棺構築時に捨てたものであろう。いずれにしても不明な点の多い甕棺墓である。

17号甕棺墓　(図版49－(1), 第11図)

11号土壙墓と27号土壙墓に挟まれた場所で検出した接口式の小児用甕棺墓である。周辺は墓地が錯綜しており断言できないが，27号土壙墓（成人棺）に隣接して，しかも主軸をほぼ同一方向に向けて埋葬されており血縁関係のあった被葬者の可能性がある。また，この甕棺墓は34号土壙墓と完全に重複している。

墓壙は楕円形を呈し，その規模は長軸で1.00m，短軸では55.0cm，深さは45.0cmを測る。接口部には粘土で目張りを施す。主軸方位はN58°Eを示す。埋葬傾斜角はほぼ水平である。棺内からの出土遺物はない。

18号甕棺墓　(図版12－(1), 第11図)

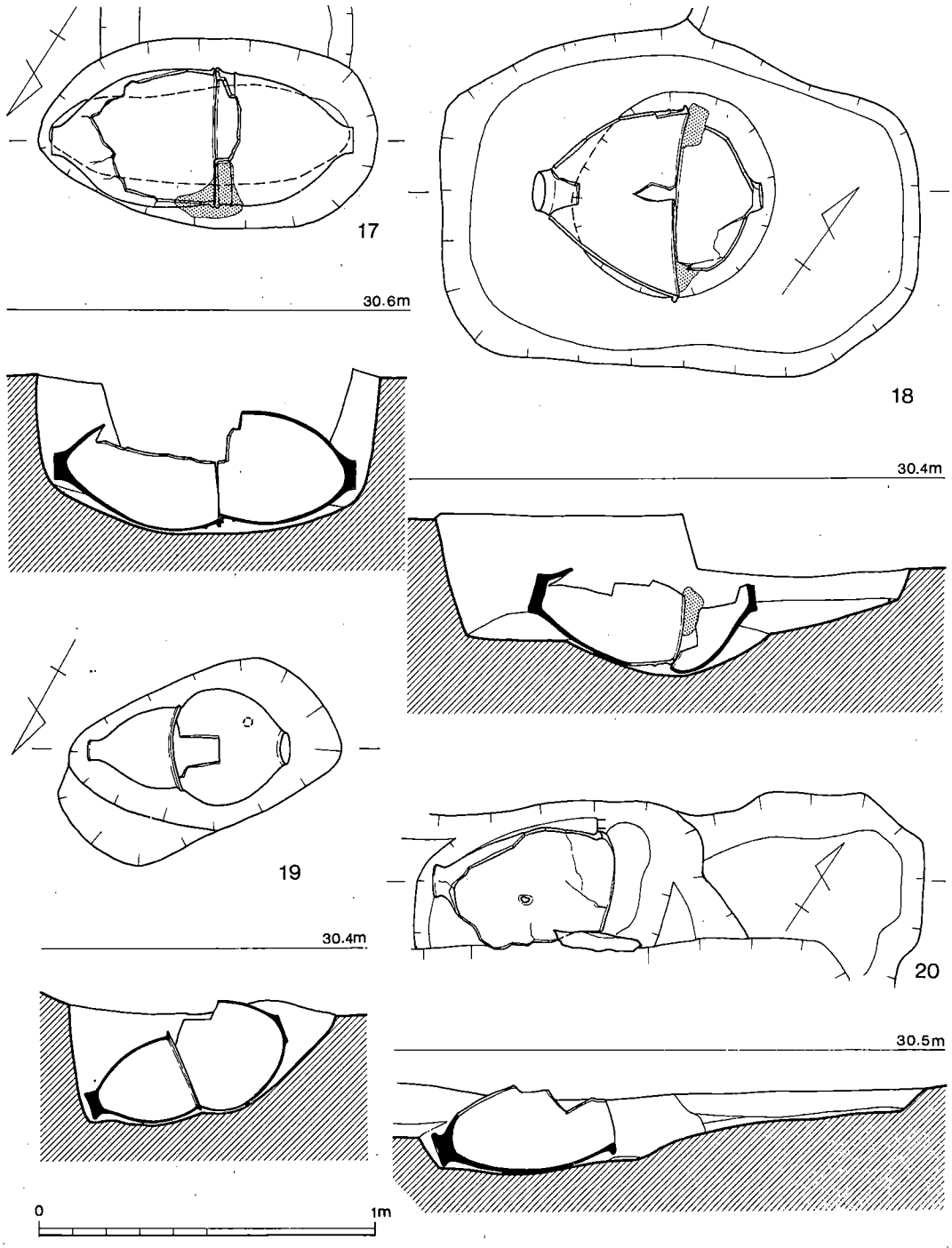
墓地群の北側よりで検出した接口式の小児用甕棺墓で，15号土壙墓との重複があり土壙墓が新しい。この2基は22号木棺墓の北西側に隣接して埋葬されていることから親子関係にあったと考えられる。

墓壙の形態は胴張り隅丸長方形を呈し，底面には甕棺が安定するように掘り込みがある。その規模は小型の甕棺にしては大きく，主軸長が1.43m，短軸長が1.00mを測る。下甕は日常什器を使い，上甕は壺の肩部付近を打ち欠いている。下甕が高位を示すことから，頭位は下甕にあったと考えられる。主軸方位はN54°Eを示す。棺内からの出土遺物はない。

19号甕棺墓　(図版12－(2), 第11図)

10号木棺墓の墓壙と一部を重複し並行して埋葬された接口式の小児用甕棺墓で，10号甕棺同様10号木棺墓と親子の関係にあったと思われる。墓壙は不整楕円形を呈し，上甕は壺の肩部を打ち欠き小型の下甕と接口させ，上甕には孔を穿つ。

墓壙の規模は，長軸が80.0cm，短軸は40.0cmを測り，主軸が墓壙の対角線上にある。接口部の目張り粘土はない。主軸方位はS60°Wを示す。埋葬傾斜角は＋21度である。



第11図　17号～20号甕棺墓実測図（1/20）

20号甕棺墓　(図版40－(2)・41－(1), 第11図)

16号小児甕棺墓と同様１号箱式石棺墓の墓壙内から検出した小児用の木蓋か石蓋の甕棺である。墓壙と甕棺の約1/3が石棺墓で破壊されているが，墓壙は緩い２段掘りで主軸長が85.0cm前後を測る。蓋の部分には浅い掘り込みが残っている。

甕棺の下部は外側から穿孔しており，破壊された甕棺片が１号箱式石棺墓の墓壙内のみならず39号土壙墓，５号祭祀土壙内，９号祭祀土壙内の他，約20m離れた１号祭祀土壙付近にまで散乱していた。このことは，当該甕棺墓が単棺であり打ち欠く必要がなく，ほぼ同一時期の祭祀土壙内への破片投棄は考えられないことから石棺墓の構築時に散乱したと考えられる。
主軸方位はN56°Eを示し，埋葬傾斜角度は＋28度を測る。棺内からの出土遺物はない。

21号甕棺墓　(図版49－(1), 第12図)

調査区の南西側で検出した接口式の小児用甕棺墓である。南東隣には11号木棺墓，29号土壙墓，22号甕棺墓が並列して埋葬されているが，21号は22号甕棺墓との切り合いがあり，後者の方が新しい。いずれにしてもこの４基の墓地は近親者の関係にあったと考えられる。

墓壙は楕円形を呈するが，著しく削平を受けているため不明な点が多い。棺内の出土遺物はない。

22号甕棺墓　(図版49－(1), 第12図)

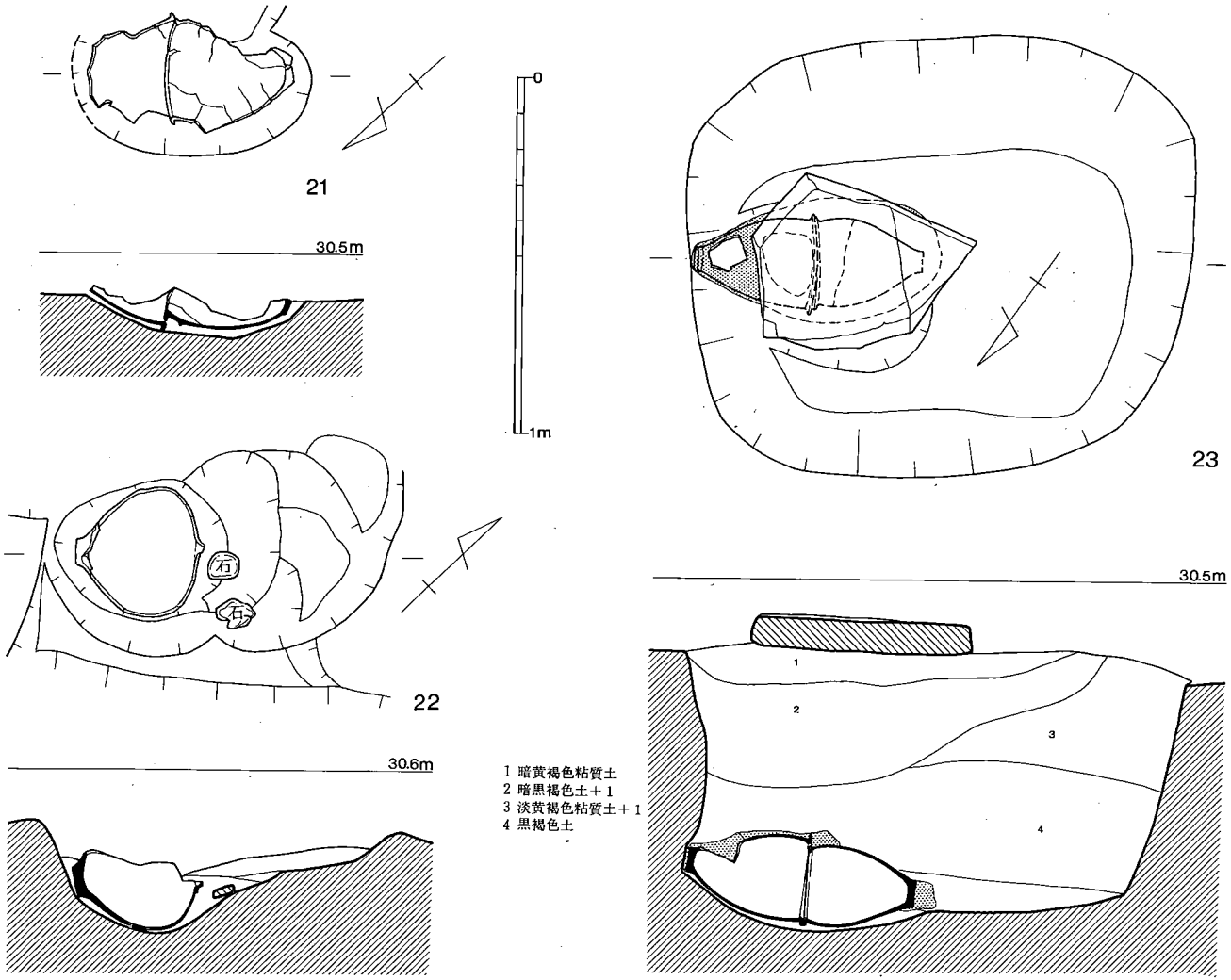
24号土壙墓の墓壙との重複のある壺を使った小児用の単棺墓である。木蓋痕ははっきりしないが，墓壙内に10cm前後の石が３個出土していることから，木蓋を押さえたのかも知れない。墓壙の形状は楕円形に近いが複雑な形状をしている。棺内の遺物はない。

23号甕棺墓　(図版13－(1)・(2), 第12図)

基本的な縦列埋葬が「Y」字形に分かれる基点近くで33号甕棺墓（成人棺）と36号小児用甕棺墓の間で検出した甕棺墓である。甕棺墓の周辺はわりとゆとりのある埋葬間隔をなし，南西側ほどの密集度はない。

墓壙の掘り込み面の中央には，緑泥片岩の板石が標石として残っている。墓壙内の埋土は標石部分が最も高く，若干の盛土があったと考えられる。埋め土をみると上層に黄褐色系の粘質土で埋め，下層は黄褐色粘質土と黒褐色土，最下層は黒褐色土で埋めている。墓壙の小口壁を若干掘り窪め下甕を固定し上甕と接口させて灰黄色粘土で覆っている。

墓壙は隅丸胴張長方形を呈し，その規模は主軸が1.40m，短軸が1.25m，深さは85.0cmを測り，埋葬時の状態を良く残している。棺内の人骨は遺存していないが，埋葬傾斜角が－８度を測り頭位が下甕にあったと推測される。主軸方位はN54°Eを示す。



第12図　21号～23号甕棺墓実測図（1/20）

24号甕棺墓　(図版14－(1), 第13図)

27号土壙墓の墓壙内で検出した小児用甕棺墓である。遺存状態が悪いが甕と壺がセットになる甕棺で，大きく重なる所から覆口式と考えられる。その他は不明である。

25号甕棺墓　(図版14－(2), 第13図)

調査区のほぼ中央部の錯綜した部分にあり，30号甕棺墓（成人墓）の墓壙と重なった状態で検出した小児用甕棺墓である。墓壙の平面形状は楕円形に近く，しかも２段掘りである。その規模は主軸が1.00m，短軸が74cmを測る。甕棺は上甕を打ち欠いた接口式と考えられるが，調査段階では接していない。主軸方位はN73°Eを示す。棺内の出土遺物はない。

26号甕棺墓　(図版15－(1)・(2), 第14図)

墓地群は基本的には２列埋葬の形をとっていたと思われるが，墓の数が増加するにしたがって被葬者の近親者の傍に埋葬することによりその形態が乱れたと思われる。その典型が当該甕棺墓で大半の墓地群の主軸に対して直交する方向に埋葬している。このことは周囲の墓地に対して新しく埋葬したことの現れで，33号木棺墓と11号甕棺墓(いずれも成人墓)を切っている。

墓壙は不整楕円形を呈し，長軸は2.52m，短軸は1.30m前後を測る。甕棺の墓壙に対する埋置状態から南側の甕が上甕と考えられ，その覆土の上層には5.0cm～20cmほどの河原石を敷石状に配している。この河原石の集石を標石代わりにしたのか，河原石を根石にしこの上に緑泥片岩の板石を載せていたのかのどちらかであろう。

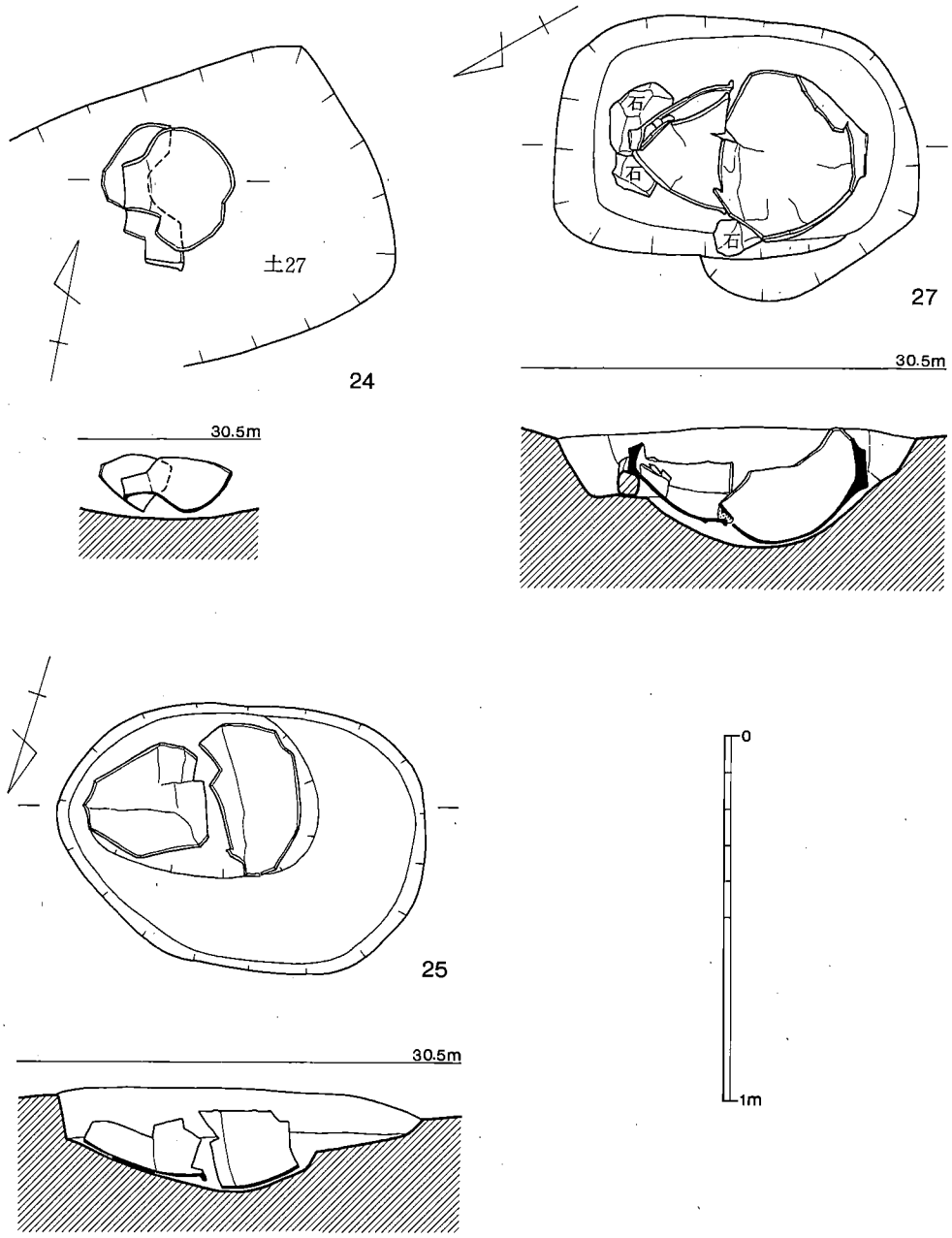
甕棺は同じような甕を接口させ，黄色粘土で目張りを一周させる。下甕を高位部に埋置しておりこの方向に頭位があったと考えられる。甕棺墓の内法は1.40mを測る。主軸方位はN26°Wを示し，埋葬傾斜角度は－12度である。棺内からの出土遺物はない。

27号甕棺墓　(図版51－(2), 第13図)

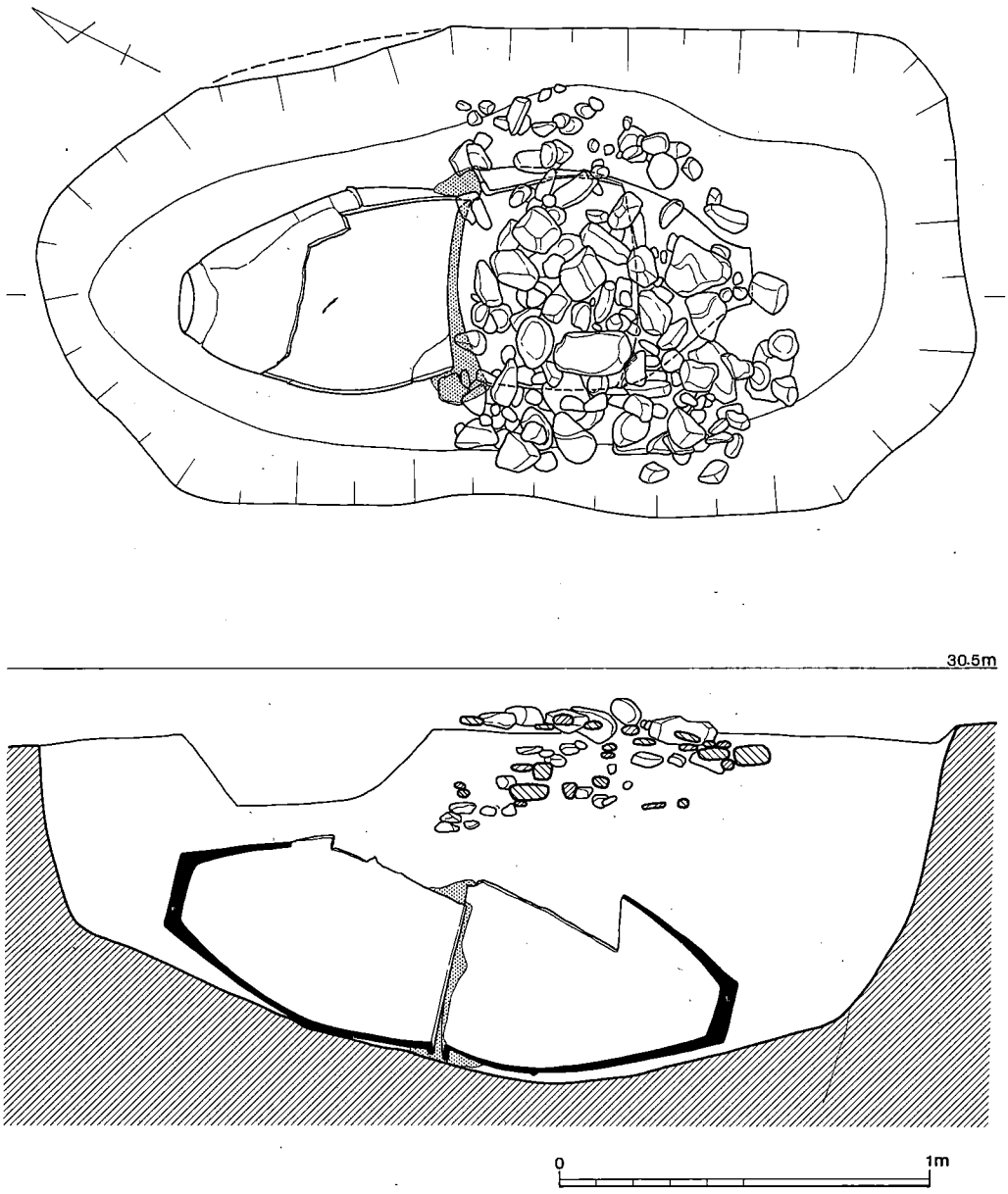
調査区の北東隅で検出した覆口式の小児用甕棺墓である。北隣には成人用の18号土壙墓があり，この甕棺墓と血縁的な繋がりがあるものと推測される。墓壙は隅丸長方形で主軸が98.0cm，短軸は65.0cmを測る。上甕の底部を２個の石で固定し，壺の頸部を打ち欠いた下甕に被せている。下甕の一方も石で固定している。覆口部には若干の粘土がみられる。主軸方位はS29°Wを示す。埋葬傾斜角はほぼ水平である。棺内の出土遺物はない。

28号甕棺墓　(図版16－(1), 第15図)

調査区の北東端で検出した成人用の甕棺墓で，墓壙の1/3が調査区外（側道）のため全容は分からない。現況で推測すると墓壙は楕円形であろう。断面で測ると主軸が1.90m，短軸は1.10m

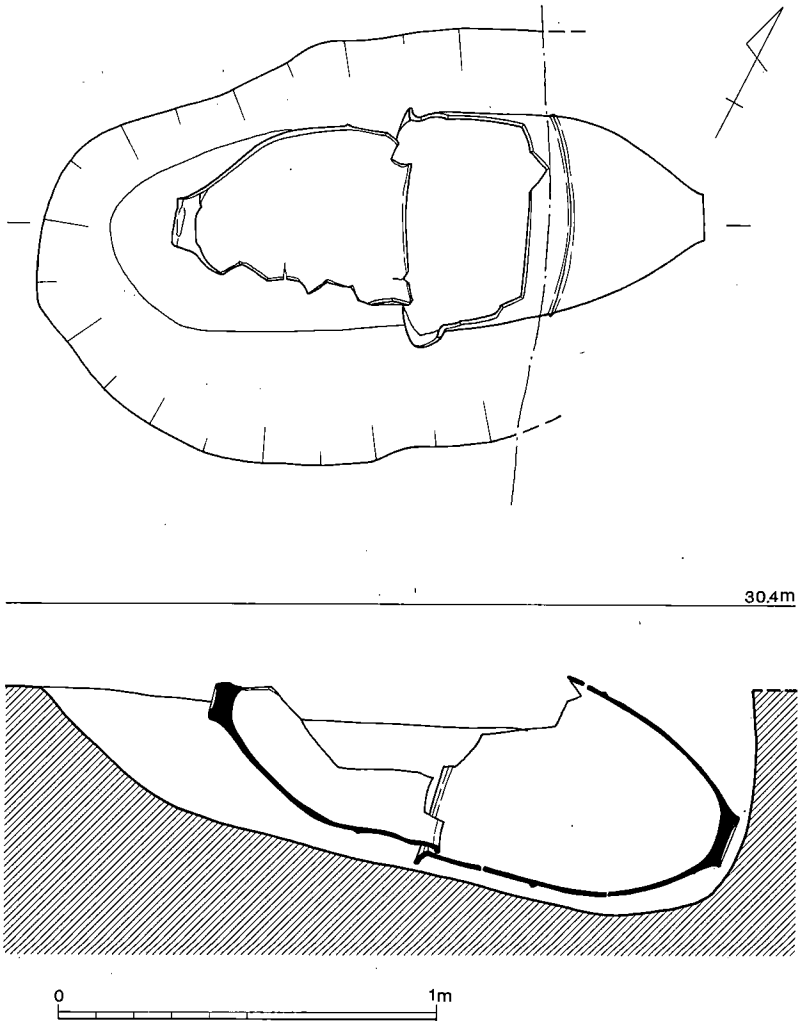


第13図　24号・25号・27号甕棺墓実測図（1/20）



第14図　26号甕棺墓実測図（1/20）

である。甕棺は下甕に対して上甕の方が小型で挿入式である。人骨が遺存していないため，頭位がはっきりせず，同時期の成人棺の甕棺墓とは埋葬角度が逆転していることから，この場合上甕に頭位があったと考えざるを得ない。この理由で主軸方位はS62°Wを示す。埋葬傾斜角度は＋16度を測る。棺内からの出土遺物はない。



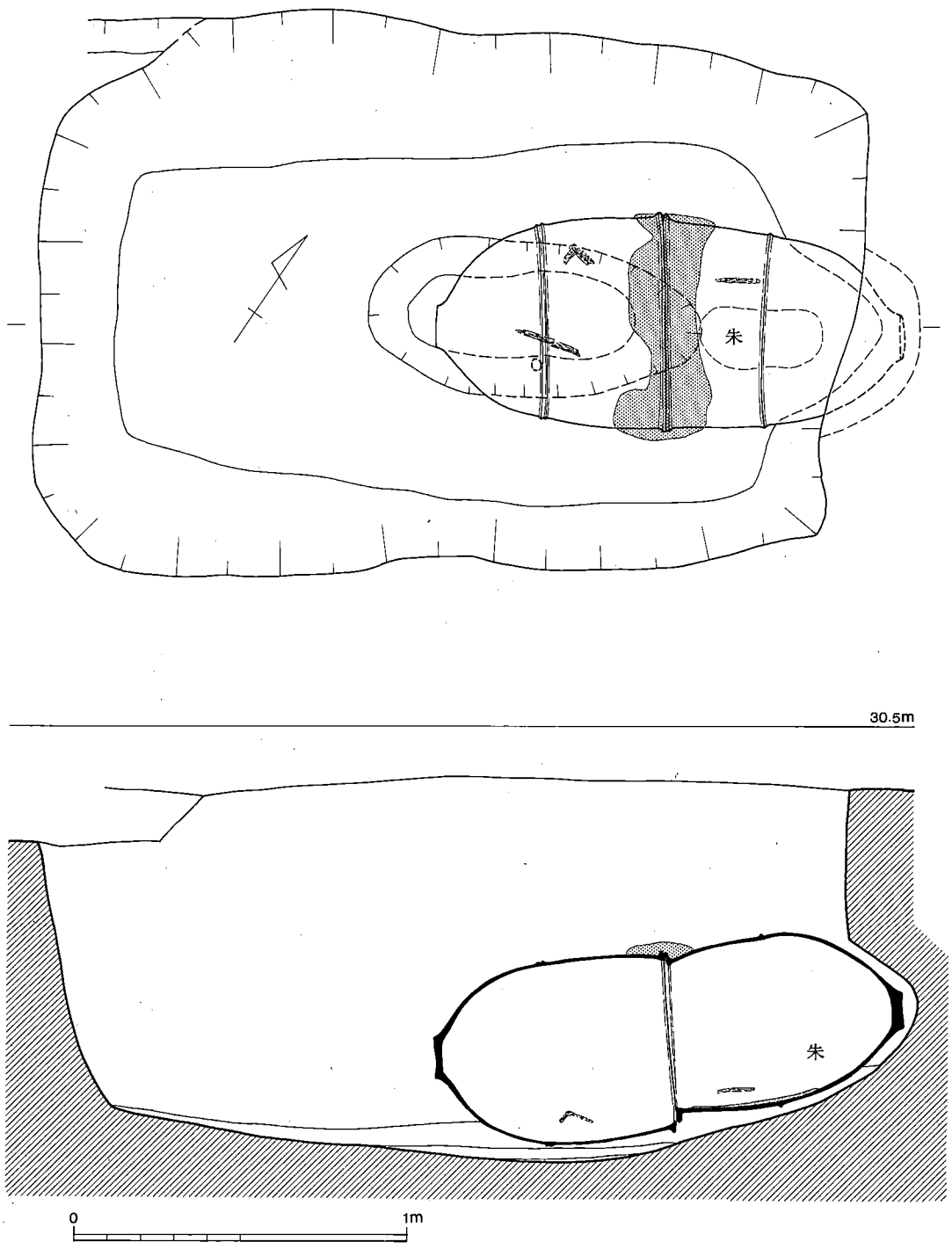
第15図　28号甕棺墓実測図（1/20）

29号甕棺墓（図版16－(2)，第16図）

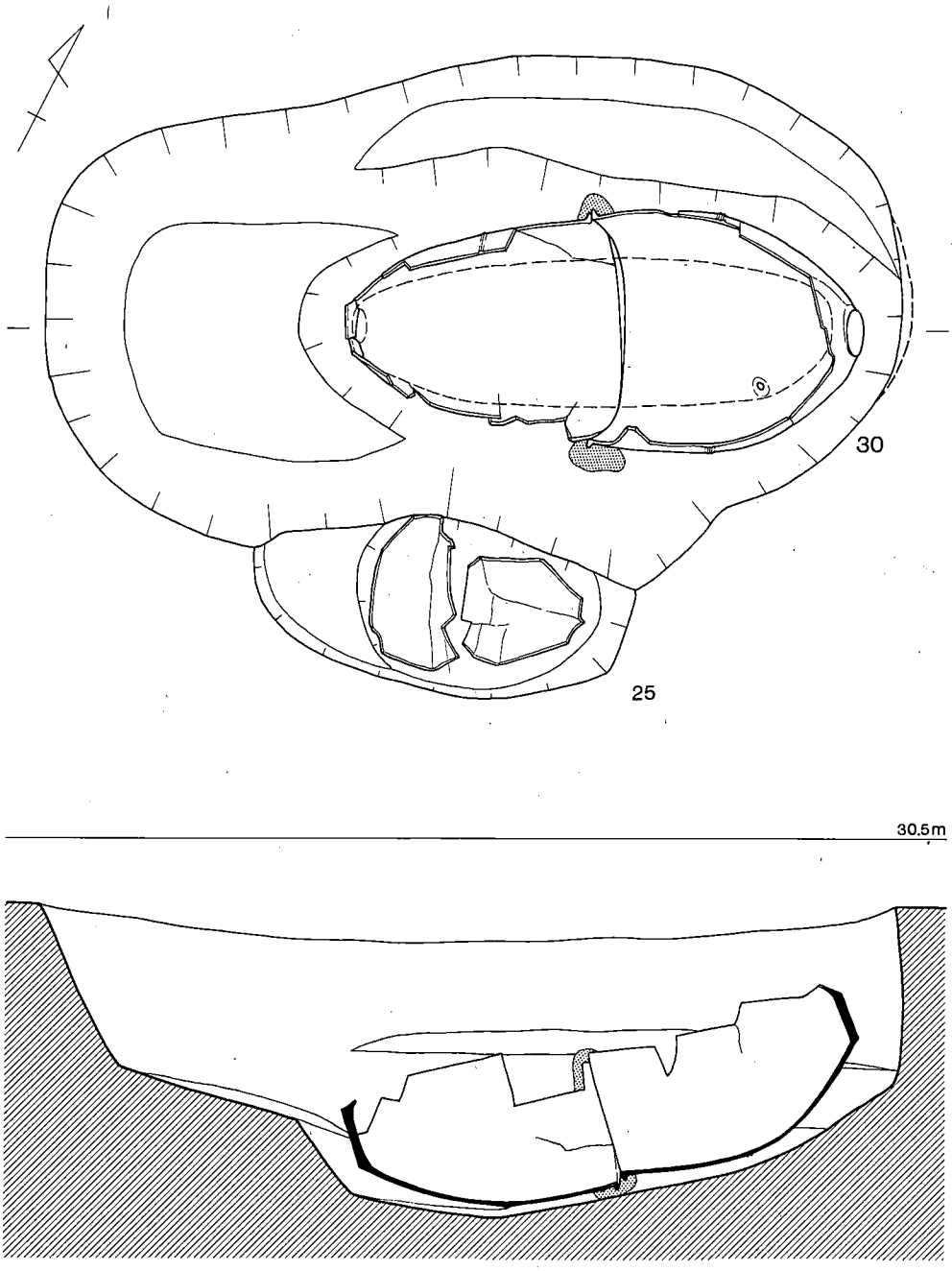
墓地群が形成された段階での２列埋葬の基本線上にある甕棺墓で，当該甕棺墓の中で最も大きな墓壙を有す甕棺墓である。この甕棺墓の基本線上の南西側（７号祭祀土壙の南側）には僅かな空白区域があり，７号祭祀土壙に規制されたことを物語ると考えられる。

甕棺墓との重複関係は23号木棺墓があるが甕棺墓が新しい。墓壙の形状は不整長方形を呈しており，主軸は2.45m，短軸は1.60m前後，深さは1.15mを測る。墓壙の東側小口壁には奥行き20cmの横穴を掘り，下甕の1/3を挿入している。

甕棺は下甕を高位にして上甕と接口させその部分には灰黄色粘土で目張りを施しているが，下部には目張り粘土はない。棺内の下甕には朱の痕跡がみられ，頭位が下甕であったことが分かる。その右側には腕の骨，上甕には大腿骨の一部が僅かな痕跡をとどめていた。主軸方位はN55°Eを示し，埋葬傾斜角は－６度を測る。棺内からの出土遺物はない。



第16図　29号甕棺墓実測図（1/20）



第17図　30号甕棺墓実測図（1/20）

30号甕棺墓　(図版17－(1), 第17図)

調査区のほぼ中央付近の２列埋葬の間で検出した接口式の成人用甕棺墓である。25号小児用甕棺墓と36号土壙墓と重複しており，25号甕棺墓と親子の関係が想定できるが，36号土壙墓の一部を破壊して埋葬している。

墓壙の形状は楕円形を呈し北側と西側にはテラスを設けている。その規模は長軸が2.35m，短軸は1.30m前後を測る。甕棺は下甕を高位置にし頭位を下甕に置いていたと考えられる。接口部には目張り粘土を一周させていた。主軸方位はN62°Eを示す。埋葬傾斜角は－13度を測る。棺内からの出土遺物はない。

31号甕棺墓　(付図２)

４号木棺墓の北西隣で検出した甕棺片であるが，不整形な落ち込みの覆土内から出土した。当初，甕棺墓として31号と付与していたが，整理段階で25号小児用甕棺と接合したため31号は欠番になった。攪乱された箇所には本来土壙墓か木棺墓の存在が考えられるが，攪乱が激しくはっきりしない。

32号甕棺墓　(図版17－(2), 第18図)

縦列埋葬の「Y」字形に分岐する基部付近で検出した接口式の小児用甕棺墓である。墓壙の大半がが33号成人用甕棺墓の墓壙内にあり，５号石蓋土壙墓とも接していることから，この３基は血縁関係にあったことが推測される。

墓壙の形態は円形を呈し，規模は73cm×70cmと小さく東の壁には奥行きが30cmの横穴を穿って下甕を挿入している。甕棺の接口部には目張り粘土を貼りつけている。主軸方位はN56°Eを示し，埋葬傾斜角度は＋８度を測る。棺内からの遺物はない。

33号甕棺墓　(図版18－(1), 第18図)

「Y」字形に分かれた北側の列の基部に位置する接口式の成人用甕棺墓で，調査区の端からこの甕棺墓まではわりとゆとりのある埋葬をしている。傍には近親者の２基の小児用墓を伴っている。

墓壙は隅丸長方形を呈し，その規模は主軸が2.33m，短軸は1.50m，深さ1.25mを測る。西側にはテラスを設け階段状に掘り込んで，埋葬時に甕棺を埋納し易くしている。東側の小口壁には奥行き45cmの横穴を掘り下甕の約1/2を挿入している。

甕棺は完全な形で残っており，真下を除く接口部には黄灰色粘土で目張りを施していた。主軸方位はN60°Eを示し，埋葬傾斜角は＋６度を測り，頭位は下甕にあったと考えられる。甕棺が完存していたにもかかわらず人骨などは遺存していない。

34号甕棺墓　(図版18－(2), 第19図)

調査区の北東側で分岐した北側で検出した接口式の小児用甕棺墓である。北側の19号木棺墓と南側の6号小児甕棺墓に挟まれている。周囲の墓地では当該棺を入れて小児甕棺が4基，若年層の甕棺1基を成人の木棺墓が挟む形で配されている。これが1グループを形成しているとも看取できる。

墓壙は不整形な楕円形を呈し，南西側は狭いテラスを削り出している。墓壙の規模は，主軸が1.40m，短軸は1.00mを測る。甕棺は上甕が鉢，下甕は甕をセットとし，下甕を高位置に埋納している。主軸方位はN34°Eを示し，埋葬傾斜角は－12度である。棺内からの出土遺物はない。

35号甕棺墓　(図版19－(1), 第19図)

20号木棺墓と6号甕棺墓の間に若年層を埋葬したと推察される甕棺墓である。墓壙は不整形で，断面が逆台形を呈する。東側には低いテラスを設け，底面の中央は一段深く掘り込んでいる。規模は主軸が1.80m，短軸が1.53m，深さは88cmである。

甕棺は上甕がずれて断面では挿入式に見えるが，本来は接口式であろう。接口部分には目張り粘土を貼りつけている。主軸方位はS57°Wを測り，埋葬傾斜角度はほぼ水平である。棺内の出土遺物はない。

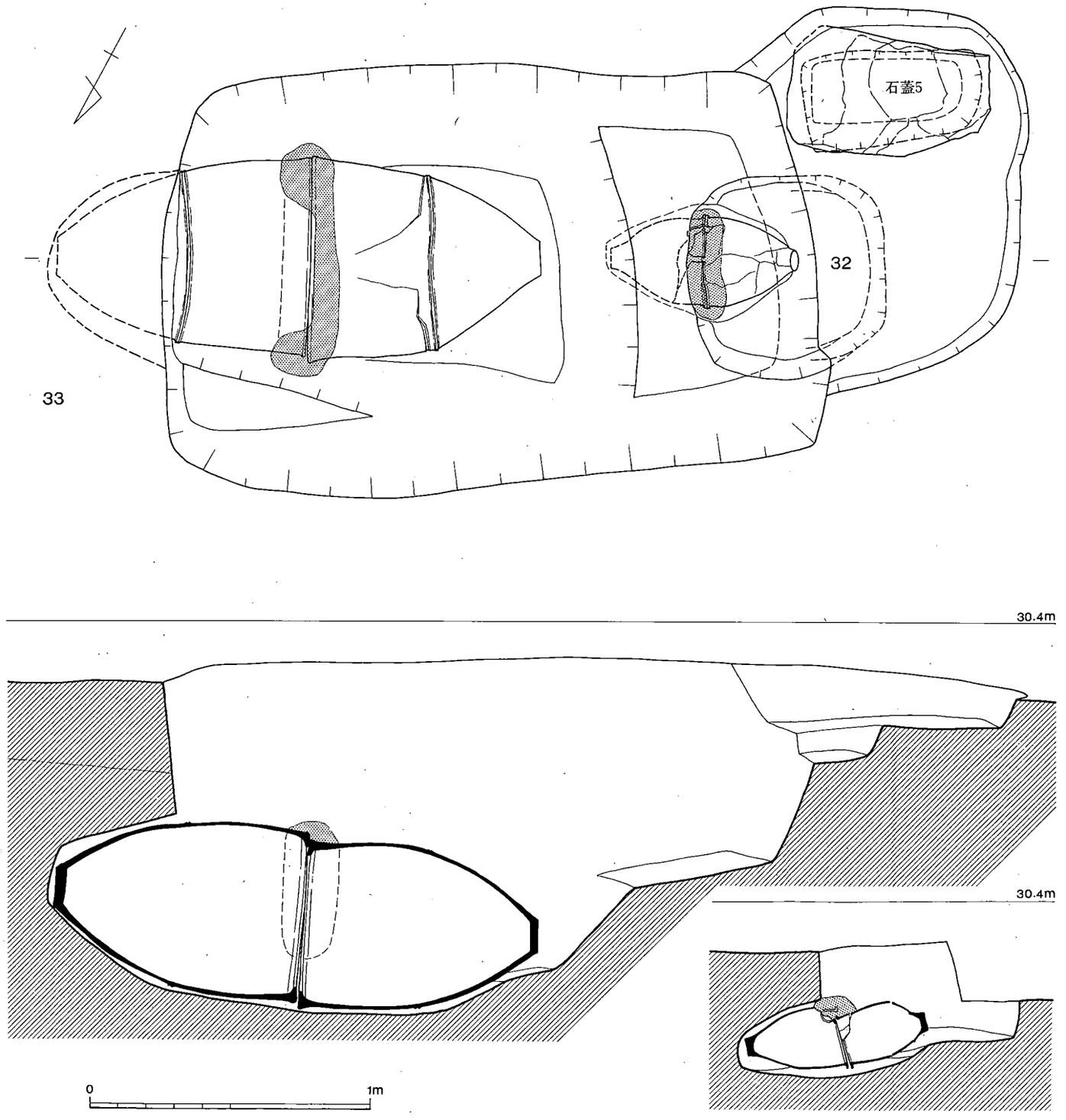
36号甕棺墓　(図版19－(2)・20－(1), 第19図)

20号木棺墓と23号甕棺墓の間で検出した小児用の甕棺墓で，南東隣に標石を持つ25号土壙墓が並列して埋葬されている。この甕棺の周囲は中央付近の墓地群に比較して空間を広く持っている。墓壙の検出面より10cm上層で台形をした緑泥片岩の板石が出土した。甕棺墓の標石と考えられる。このことは甕棺の上に盛土があったことを物語っている。

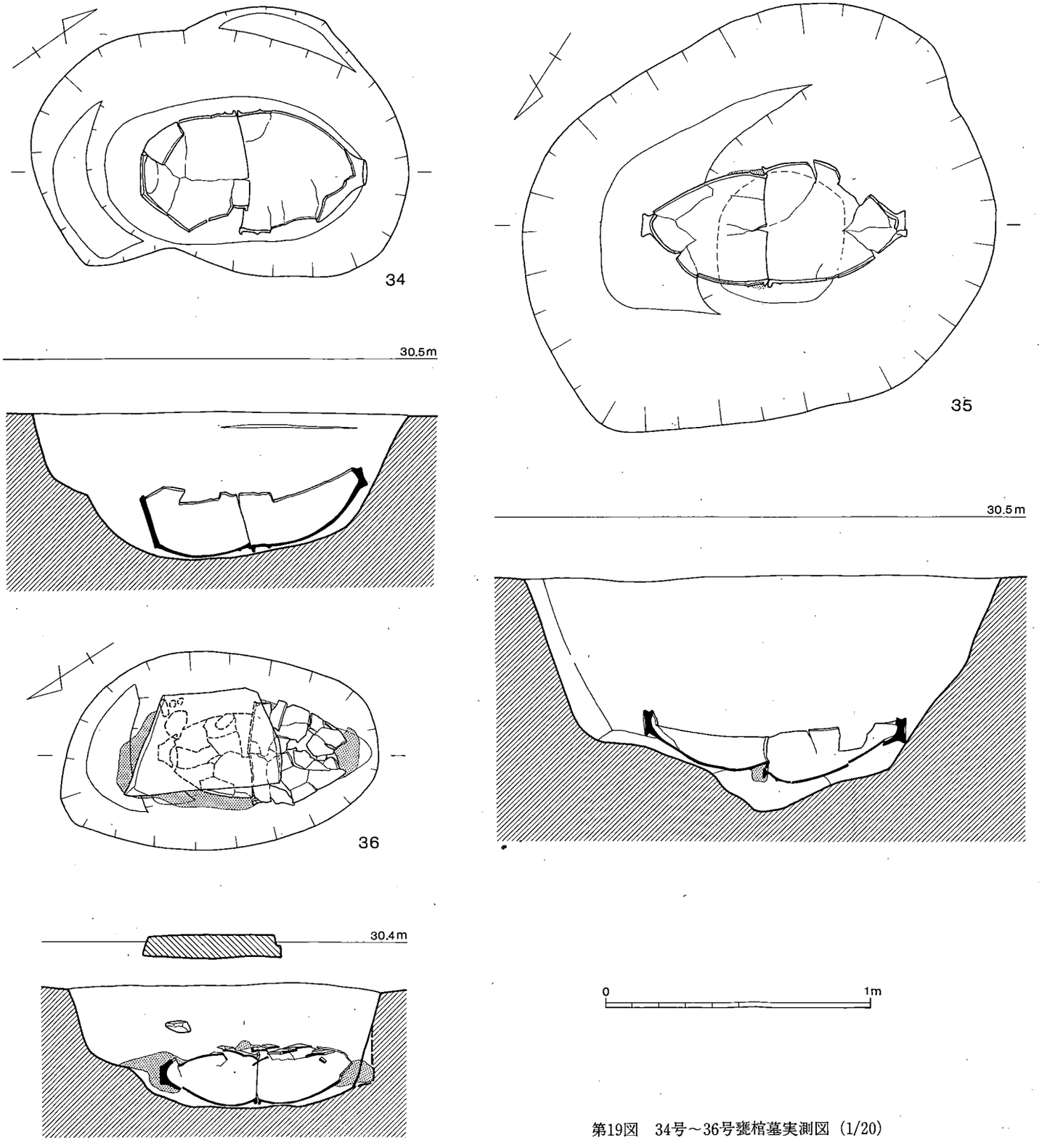
墓壙は楕円形を呈し，北側にはテラスを造っている。墓壙の規模は主軸で1.17m，短軸では75cmを測る。甕棺墓は土圧により原形を保っていないが，下甕の底部は埋葬時に既に欠損していたため黄褐色粘土で補修していた。上甕はほぼ全面に黄褐色粘土で覆っており，特に底部付近は粘土で固定していた。主軸方位はS33°Nを示し，埋葬傾斜角はほぼ水平である。棺内からの出土遺物はない。

37号甕棺墓　(図版20－(2), 第20図)

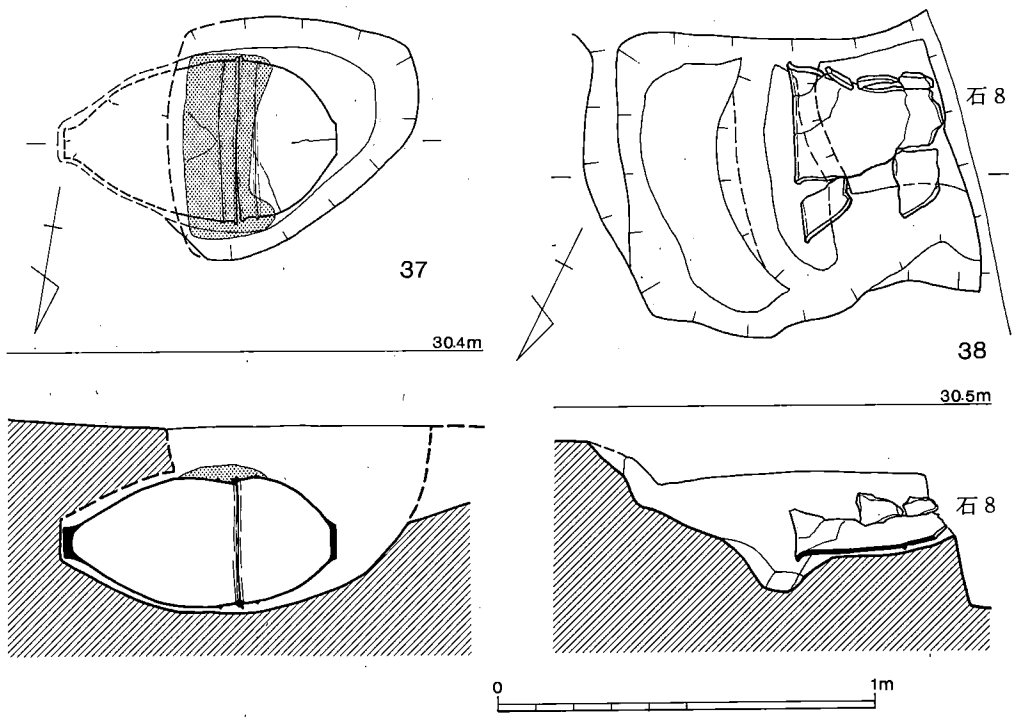
調査区の中央部分で検出した接口式の小児用甕棺墓で，近辺には甕棺墓の他，石蓋土壙墓，土壙墓などの小児用墓が密集している。この中で当該甕棺墓と重複関係にある墓地は10号木棺墓，28号土壙墓，9号石蓋土壙墓の4基があるがいずれの墓地よりも新しい。



第18図　32号・33号甕棺墓実測図（1/20）



第19図　34号～36号甕棺墓実測図（1/20）



第20図　37号・38号甕棺墓実測図（1/20）

この周囲に重なるように埋葬された小児用墓5基はどの成人墓と関係するかは，判断が難しいが，10号木棺墓との重複がある28号土壙墓と当該甕棺墓，10号・19号甕棺墓が近親の関係があったことが推定される。

墓壙は不整形をなし，東壁には奥行き30cmの横穴を掘り下甕を2/3ほど挿入している。甕棺は鉢と甕をセットにし，真下を除く接口部には幅広に粘土で目張りを施している。主軸方位はN79°Eを示し，埋葬傾斜角は水平である。棺内からの出土遺物はない。

38号甕棺墓　（図版46－(2)・47－(1)，第20図）

調査区の南西側で検出した若年層を埋葬したと考えられる木蓋単棺墓である。甕棺の下部を9号石棺墓（木棺墓か？）で破壊され遺存していない。破壊された甕の破片は4号・5号・7号の祭祀土壙から発見された。このことは重要な意味を持つもので，当該甕棺墓は単棺であるとから打ち欠いた破片を祭祀土壙に投棄する必要はない。つまり，この3基の祭祀土壙は9号石棺墓が構築される時点でも機能していたことになり，祭祀土壙は新しい墓地群が機能しなくなった段階で完全に埋没したと考えられる。このことは1号石棺墓に破壊された16号甕棺墓にも同様な事実があることからも指摘できよう。

墓壙の東には緩斜面をなすテラスを設け，溝状に木蓋の痕跡がある。出土遺物はない。

② 木棺墓

1号木棺墓 (図版21－(1), 第21図)

調査区の北東側の「Y」字状に分岐した列の間で検出した成人用の木棺墓である。墓地どうしの重複はなく，墓地群の中では割と広い空間がある。墓壙は隅丸長方形であるが，埋葬土壙は墓壙の対角線方向に掘り込んでおり，このようなタイプは当墓地群ではこの1基のみである。墓壙の規模は長軸が2.14m，短軸は1.50mを測り，埋葬土壙は主軸が1.73m，両小口が65cm前後を測り，幅の広さでは頭位ははっきりしない。深さは60cm弱である。両方の小口には緑泥片岩の板石を立てているが，西側の板石は掘方の上面まで突き出ている。さらに2枚の縦長の板石を接するように使用し，底面を掘り込んでいる。また，板石の所どころに青灰色の粘土で目張りをしており，このタイプの墓地は甘木・朝倉地方に普遍的に分布するもので，小口に緑泥片岩の板石，両側は板を使用し木蓋を主軸に対して直交に被せた木棺墓と考えられる。裏込めの埋土は黒褐色と暗茶褐色土を使っている。

主軸方位は頭位がはっきりしないため明らかでないが，大きめの板石を使っている側が頭位とすればS60°Wを示す。棺内からの出土遺物はない。

2号木棺墓 (図版21－(2) 25－(1), 第21図)

「Y」の字形に分かれた南側列で検出した木棺墓で，検出した時点での掘方は分かっていない。墓壙を掘らずに直接木棺を埋納したことが考えられる。主軸は違っているが9号木棺墓の南東傍に埋葬されており近親関係にあったことが想定される。

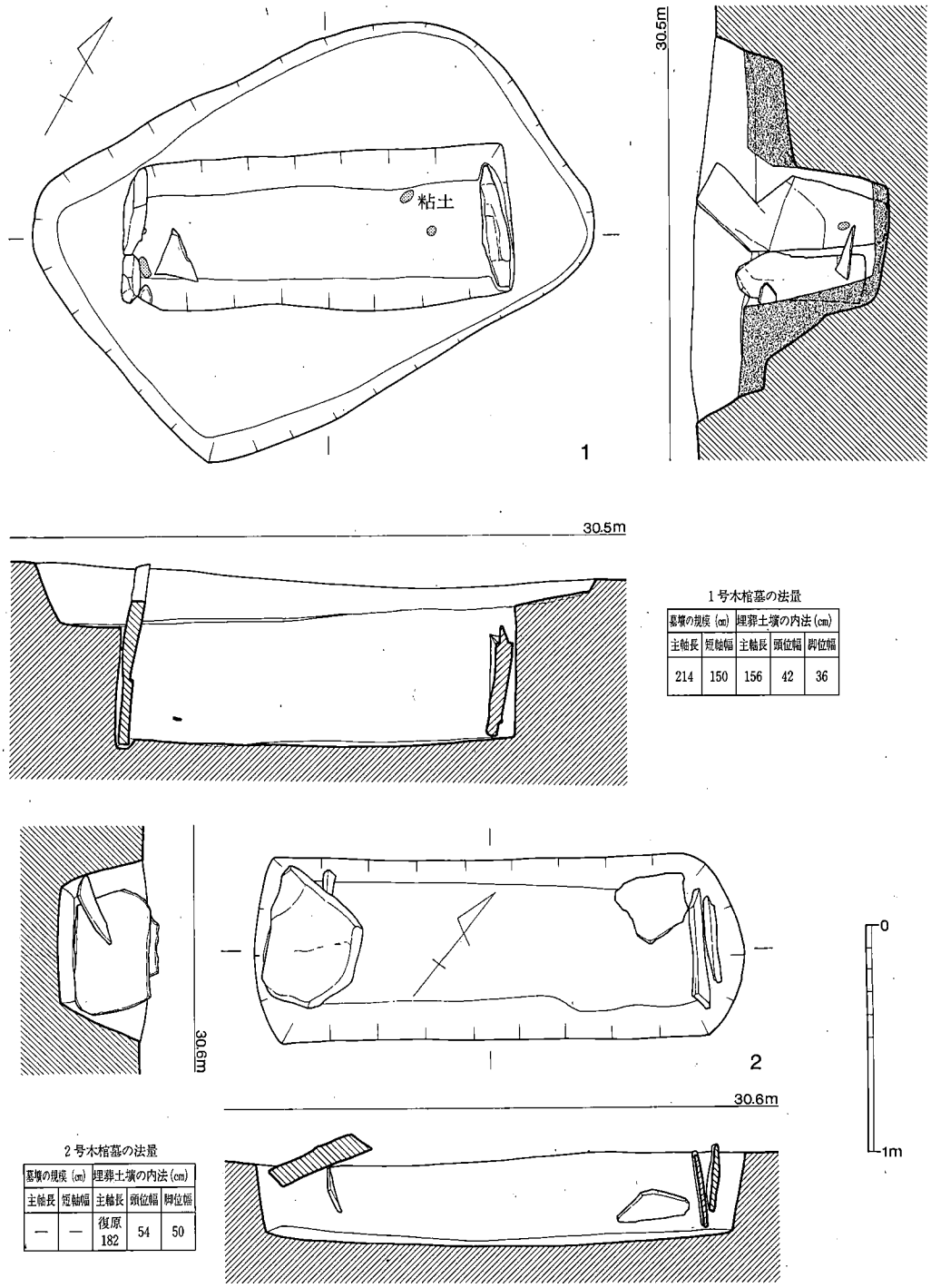
埋葬土壙の形態は隅丸長方形で小口部が丸みを持つ。土壙の規模は主軸が2.15m，短軸は80cmを測る。両小口には緑泥片岩の板石を立て一方は厚めの板石を，もう一方は薄い2枚の石を立てて，その傍の側壁には1枚の板石が倒れている。おそらく側板の裏込めに使用したのであろう。この類の木棺は両小口に板の掘り込みが検出されないことから，箱形の木棺に両小口を板石で押さえをしたのか，側板のみに板を使用したのかのどちらかであろう。

棺内の法量は，南西側の小口石が元位置を保っていないが復原すると長さが1.82mを測り，小口幅は54.0cmと50.0cmで南西側が頭位であろう。棺内からは人骨及び副葬遺物はない。

3号木棺墓 (図版22－(1), 第22図)

規制された墓域内にはあるものの，列からややはずれた箇所に埋葬された成人用の木棺墓で他の墓地との重複はない。その東傍には6号祭祀土壙が配されている。

墓壙は隅丸長方形を呈し，その規模は長軸で2.20m，短軸で1.00m前後を測る。埋葬土壙は南側に片寄り，「コ」字状のテラスをつくり2段掘りである。埋葬土壙の規模は長軸が1.78m，短



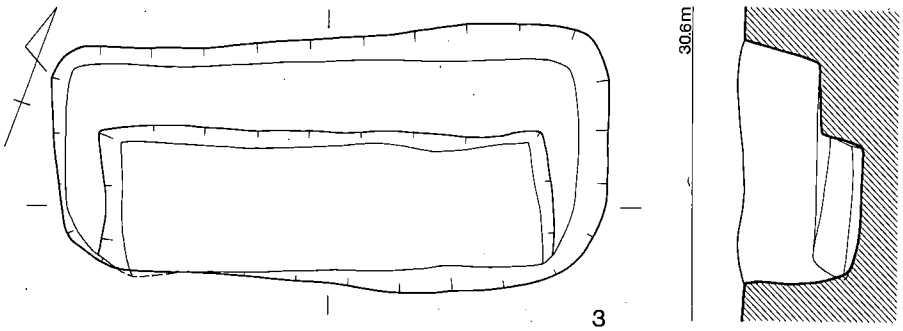
1号木棺墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
214	150	156	42	36

2号木棺墓の法量

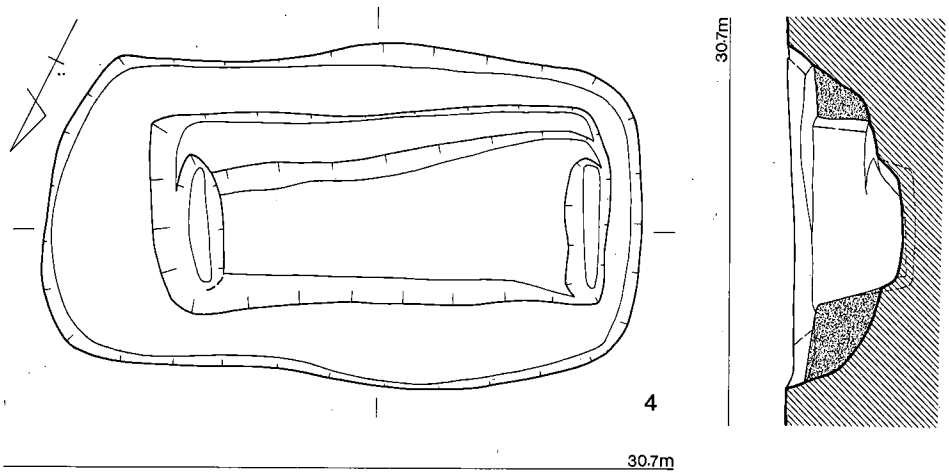
墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
—	—	復原 182	54	50

第21図　1号・2号木棺墓実測図 (1/30)



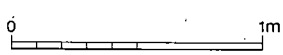
3号木棺墓の法量

墓壙の規模（cm）		埋葬土壙の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
220	100	166	51	48



4号木棺墓の法量

墓壙の規模（cm）		埋葬土壙の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
236	135	140	55	32



第22図　3号・4号木棺墓実測図（1/30）

軸は60cmを測り，小口部と側壁沿いに掘り込みがないことから箱形の木棺を埋納したと推測される。頭位ははっきりしないが，西側の幅が若干広く掘られており，頭を西にして埋葬していたと考えられる。主軸方位はS70°Wを示す。棺内の出土遺物はない。

4号木棺墓　(図版22－(2)，第22図)

調査区の中央付近で検出した成人用の木棺墓で，他の墓地とは重複していない。墓壙は小口部の張る隅丸長方形で，その規模は主軸が2.36m，短軸は1.35mを測る。

埋葬土壙の両小口には木棺の小口板を埋め込んだ掘方が残り，西側の方が幅広になるとから頭位は西側になると思われる。土壙の規模は主軸が1.80m，短軸は75cmを測るが，東側の脚位の幅は33cmと狭くなる。

棺の内法は1.40m前後である。木棺の裏込めは黒褐色と茶褐色の混土層で埋められていた。床面は頭位側が約7.0cmほど高くなっている。棺内の出土遺物はない。

5号木棺墓　(図版23－(1)，第23図)

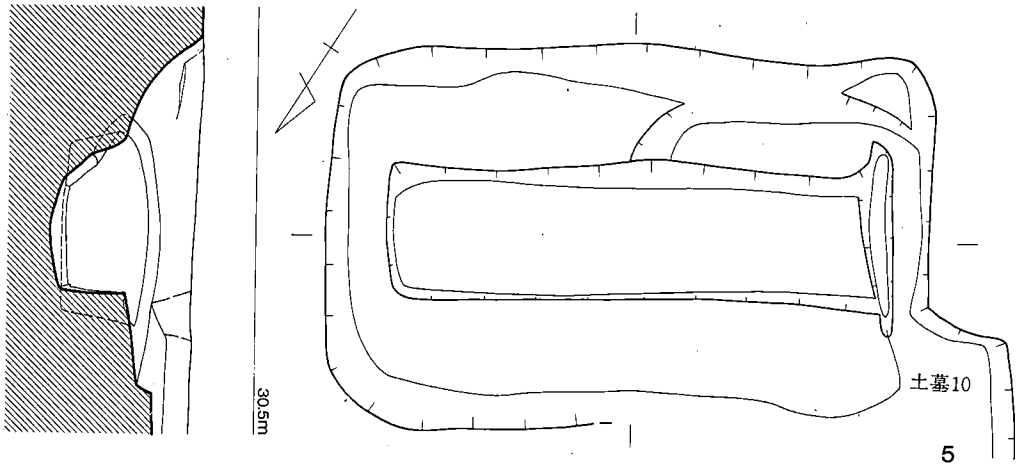
南西側の墓地群が密集した箇所で検出した成人用の木棺墓で，10号土壙墓との切り合いがあり木棺墓が新しい。木棺墓に並列して13号小児用甕棺墓が埋葬されており，親子関係にあったことが想像される。

墓壙の形状は隅丸長方形で，その規模は長軸が2.40m，短軸は1.50mを測る。墓壙から埋葬土壙までは2段掘りで，埋葬土壙の西側は木棺の小口板を埋め込んだ掘方を検出したが，東側は土壙状に掘り込んでいる。この形態は一方の小口は組み合わせの木棺形式，もう一方は箱形の木棺であろう。埋葬土壙の内法は主軸で1.90m，幅は42cm前後を測り，西側が頭位であろう。主軸方位はS58°Wを示し，棺内からの出土遺物はない。

6号木棺墓　(図版23－(2)，第23図)

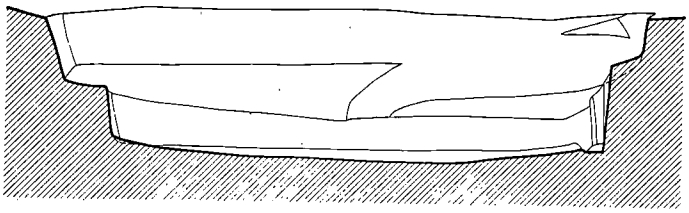
当該木棺墓が検出された周辺は著しい謂集状況を呈し，新しく築造された墓地が古い墓を無造作に破壊している。6号木棺墓は39号土壙墓，15号甕棺墓と重複しているが，木棺墓が新しければ甕棺墓の石蓋は除去されているはずであるが，遺存していることで甕棺墓が新しいと考えられる。この2基の墓は近親関係にあった可能性がある。しかし，土壙墓より新しい。

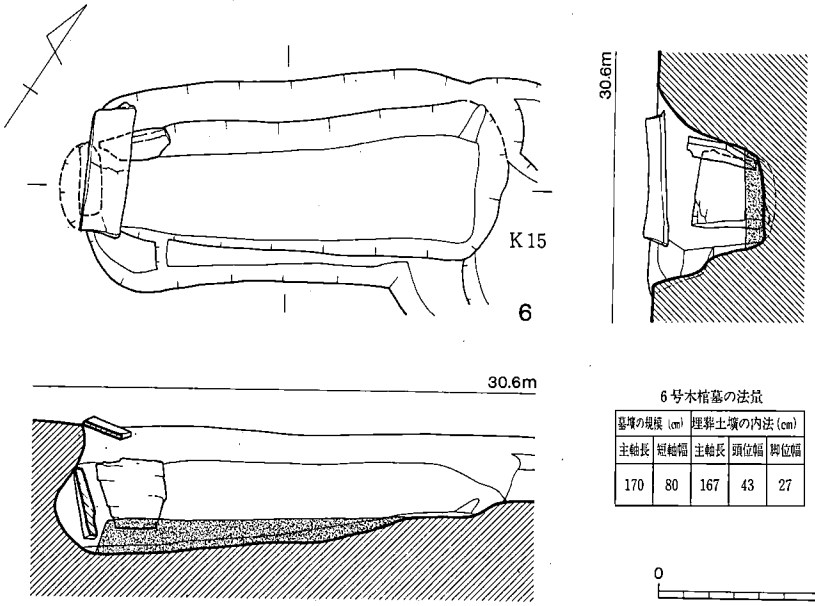
墓壙の形状は隅丸長方形で，長軸の長さを復原すると1.70m前後，幅は80cmを測る。埋葬土壙の内法は，主軸が1.67m，幅広で頭位と思われる東側で43cm，脚位側は小口壁を奥行き10cmほど掘り込んで緑泥片岩の板石を立て，北側壁にも板石を立てている。その上には同じ緑泥片岩で蓋状に架構させる。立て掛けた板石は木棺の裏込めに使ったのか，または元々が木蓋土壙墓であった可能性もある。中央から脚位側の床面は掘り過ぎている。主軸方位はN58°Eを示し，棺内



5号木棺墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
240	150	187	40	42





6号木棺墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
170	80	167	43	27

0 1m

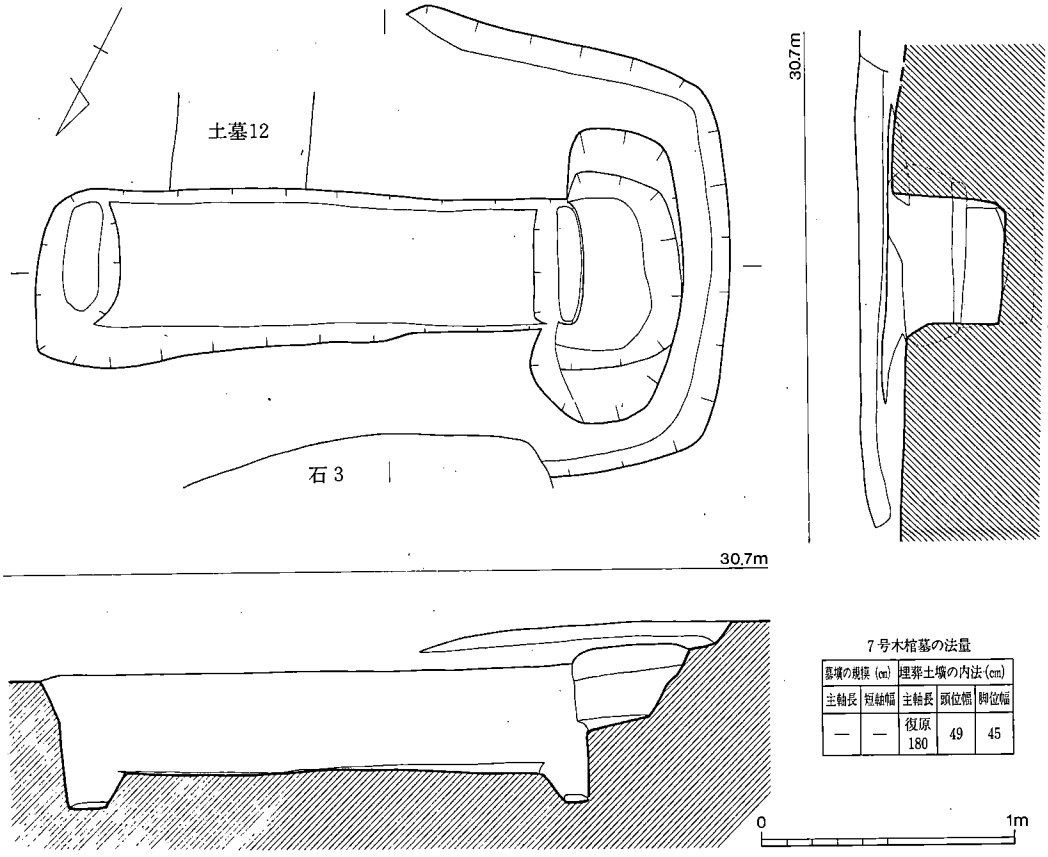
第23図　5号・6号木棺墓実測図（1/30）

からの出土遺物はない。

7号木棺墓　(図版24－(1), 第24図)

調査区の南西側で検出した成人用の木棺墓で，6号・31号木棺墓と12号土壙墓，3号箱式石棺墓との切り合い関係があり，6号木棺墓と3号石棺墓より古く，31号木棺墓と12号土壙墓より新しい。墓壙は西側の1/3ほど遺存しているが東側は複雑な切り合いで判明していない。

埋葬土壙の西側には直交する形で土壙様の掘り込みがあり，小児墓があったことが考えられるが定かでない。埋葬土壙の規模は主軸が2.18m，東側の頭位と思われる幅は68cm，脚位側は50cmを測り，両小口には小口板を埋め込む掘方があり，組み合わせ式の木棺であったと考えられる。主軸方位はN61°Eを示し，棺内の出土遺物はない。



7号木棺墓の法量

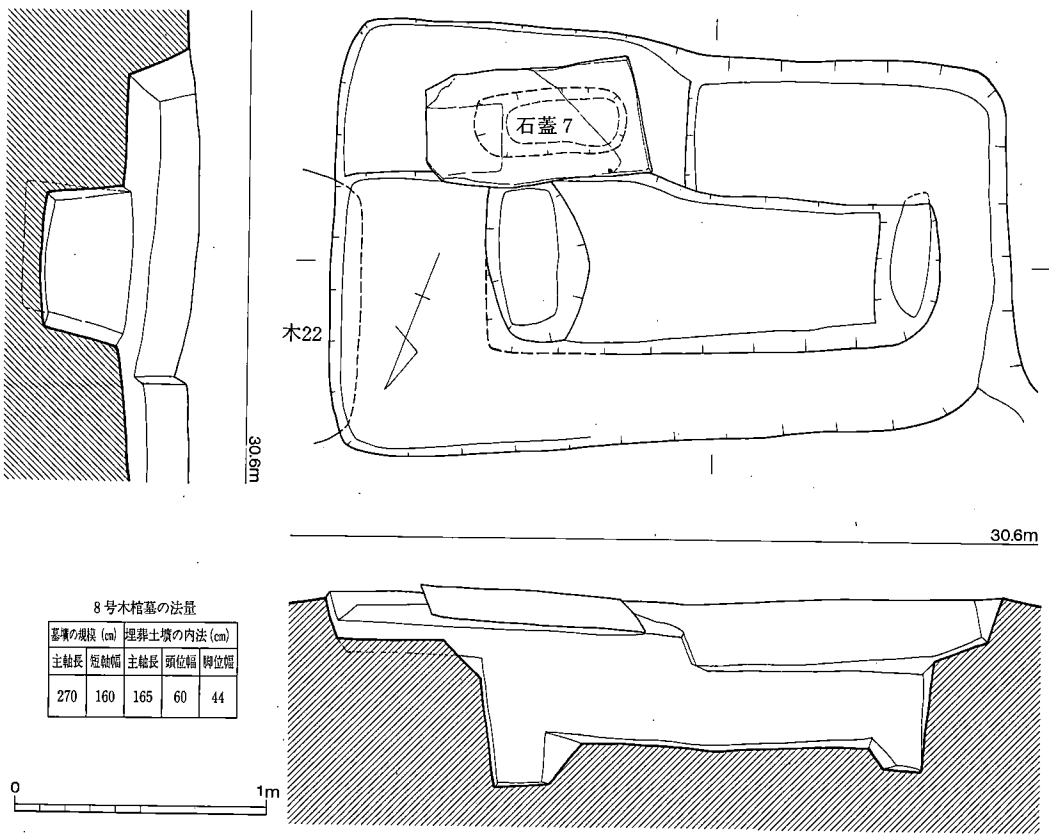
墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
—	—	復原 180	49	45

第24図　7号木棺墓実測図 (1/30)

8号木棺墓　(図版24－(2), 第25図)

調査区の北東側の「Y」字状に分かれる列の基部で検出した成人用木棺墓で，24号木棺墓，7号石蓋土壙墓，9号甕棺墓との重複があり，24号木棺墓を除く2基の墓地は当該木棺墓の墓壙内に埋葬されており，いずれも8号木棺墓より新たに埋葬された墓地で近親者の関係を彷彿させてくれる。しかも，24号木棺墓の小口の板石は壊されておらず既にこの墓地の存在を察知していたかのようである。

墓壙形態は隅丸長方形を呈し，規模は主軸で2.70m，短軸で1.60mを測る。墓壙は2段掘りで埋葬土壙の裏込めを施していない。埋葬土壙の両小口には小口板を埋め込んだ掘方が認められる。埋葬土壙の規模は主軸が1.80m，幅は頭位と思われる東側で70cm，脚位側で55cmを測り，棺の内法は1.60m前後である。主軸方位はN69°Eを示す。棺内からの遺物は出土していない。



8号木棺墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
270	160	165	60	44

第25図　8号木棺墓実測図 (1/30)

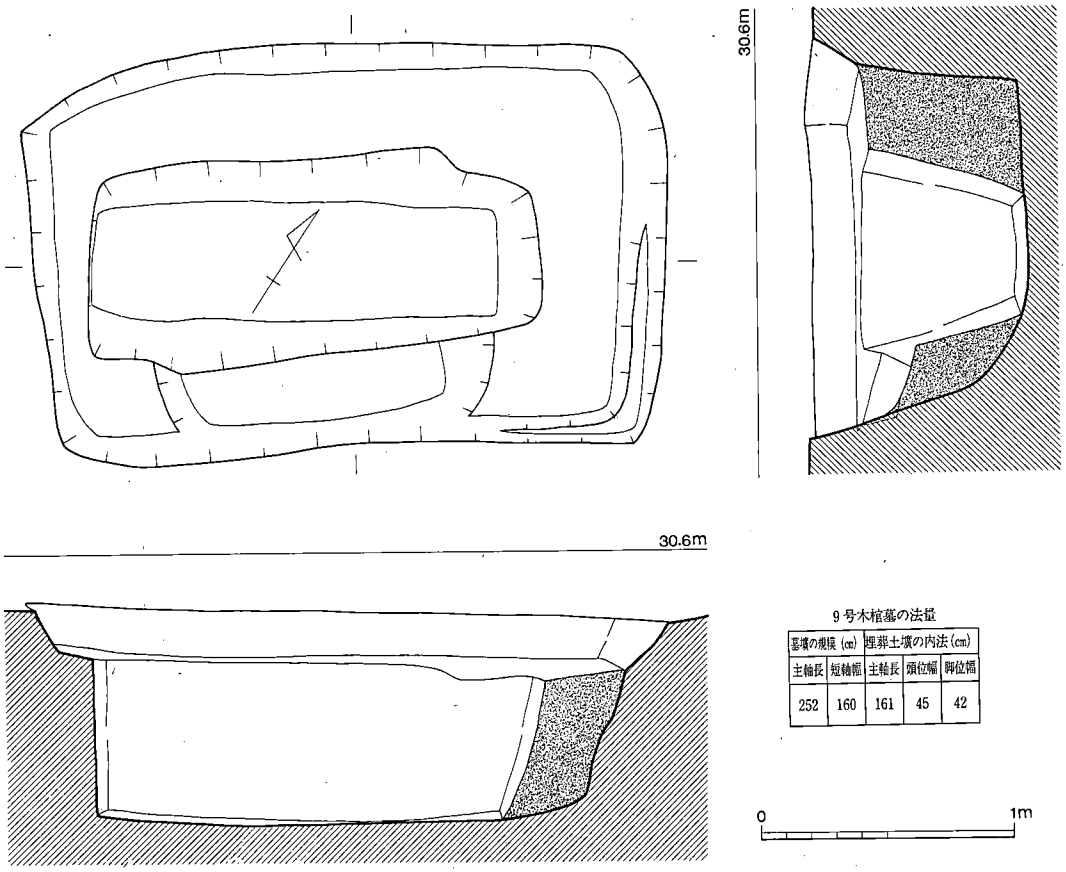
9号木棺墓　(図版25－(1), 第26図)

調査区の北東側の埋葬列が分岐した南東側の列で検出した成人用の木棺墓である。その南側傍には並列して2号木棺墓が埋葬されており，近親関係を彷彿させてくれる。

墓壙は隅丸長方形を呈し，その規模は主軸が2.52m，短軸は1.60mを測る。埋葬土壙は西壁側に片寄って掘り込まれており，規模は長軸が1.80m，短軸は80cm前後，内法は1.61mと42cmから45cmと頭位と脚位では差はなく，深さは85cmと深い。

土壙内には小口部の掘り込みはなく，裏込めに黒褐色に粘土ブロック混じりの土が充塡してあることから箱形の木棺と断定したが，目張り粘土などはみられない。また，西側小口側は裏込めはみられず，小口壁は垂直に掘られている。

被葬者の頭位がはっきりしないが，周囲の墓地の頭位方向から西側に向けられていたと推測され，主軸方位はS61°Wを示す。棺内からの出土遺物はない。



9号木棺墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
252	160	161	45	42

0　1m

第26図　9号木棺墓実測図 (1/30)

10号木棺墓　(図版9－(2), 第27図)

縦列埋葬が「Y」字形に広がる基部付近で検出した成人用木棺墓である。この木棺墓は，小児用甕棺墓3基と若年層の被葬者を埋葬した28号土壙墓に切られている。すべての墓地が当該木棺墓の被葬者と関係があったとは断言できないが，無関係ではないであろう。

墓壙は埋葬土壙のレベルまで削平されているが，形状は隅丸長方形である。規模を復原すると主軸が2.30m，短軸は1.65mを測る。埋葬土壙はやや胴が張り，両小口には緑泥片岩の板石を立てて小口板の代わりにしている。西側の板石は土壙の小口部より約15cmほど内側に据えており，側板の長さかまたは被葬者の身長に合わせたために当初の規格より短くなったと考えられる。床面は調査時に若干掘り過ぎたため凹凸があるが，小口石の掘り込みが認められないことで石の下面が床であろう。

埋葬土壙の内法は長軸で1.70m，頭位と考えられる東側では55cm，脚位側は50cmを測り，主軸方位はN58°Eを示す。棺内からの出土遺物はない。

11号木棺墓　(図版25－(2), 第27図)

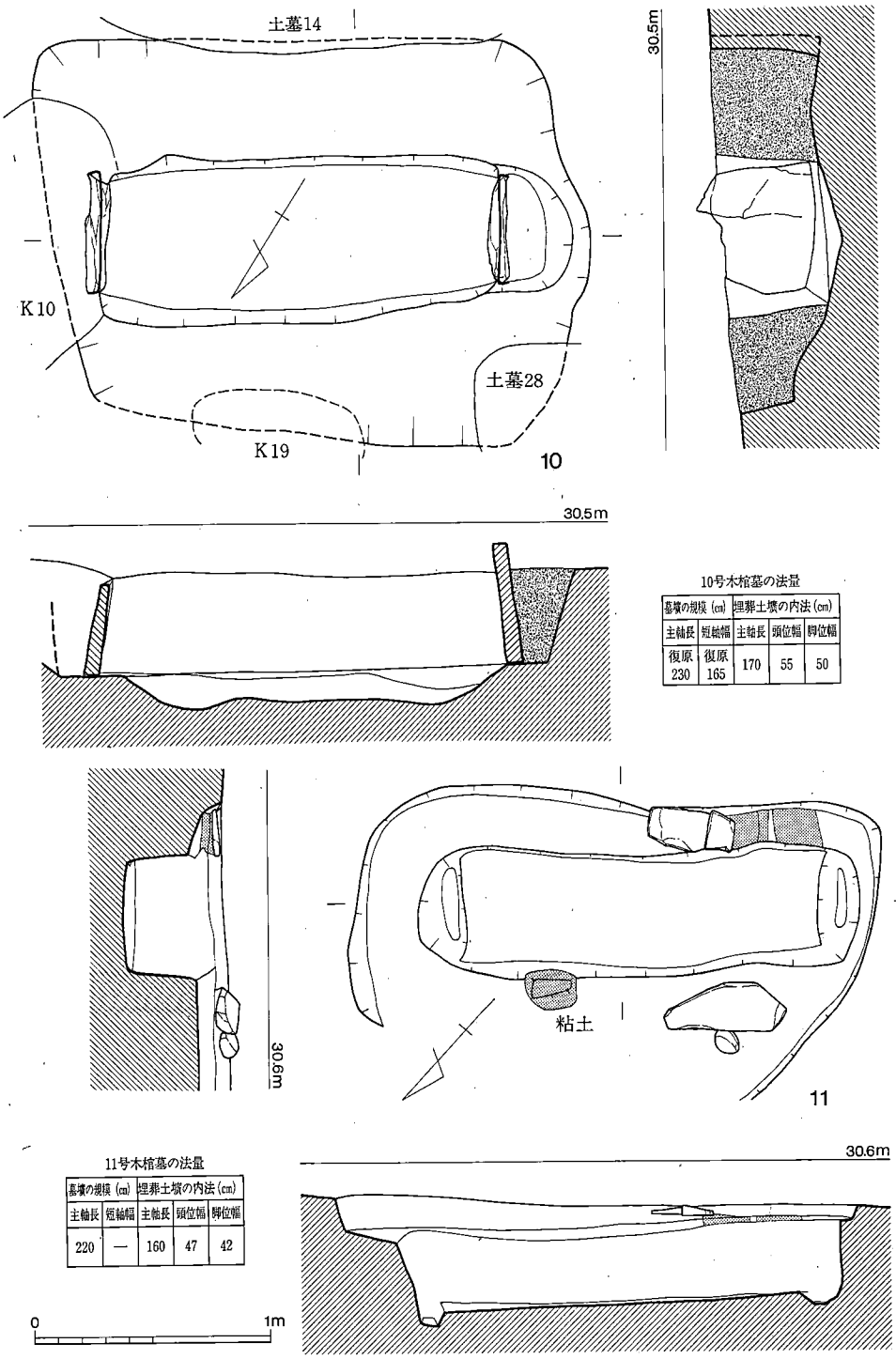
調査区の南西側で検出した成人用の木棺墓であるが，29号土壙墓（子供用）と並列して埋葬され29号墓が新しく，親子の関係が推測される。

墓壙は楕円形に近く，その規模は主軸で2.20mを測る。埋葬土壙も楕円に近い形状で，両側壁沿いに緑泥片岩の板石，青灰色粘土が遺存していることから木蓋の目張りや押さえに使ったものであろう。土壙の規模は長軸で1.87m，幅広の頭位と思われる東は54cm，もう一方は50cmを測る。両小口には小口板を埋め込んだ掘方がみられ，組み合わせ式の木棺である。棺の内法が160cmを測ることから，被葬者は160cm以下の身長であったと推測できる。主軸方位はN47°Eを示す。棺内からの出土遺物はない。

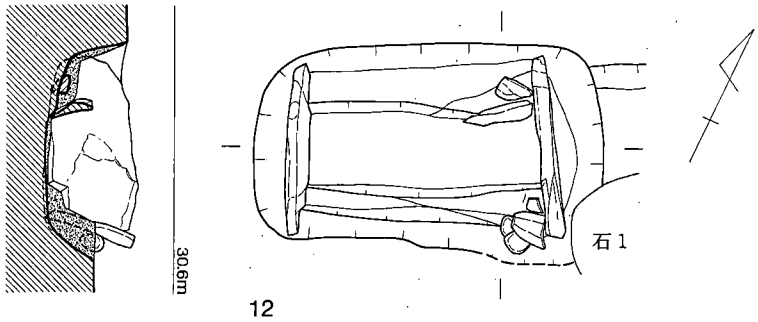
12号木棺墓　(図版26－(1), 第28図)

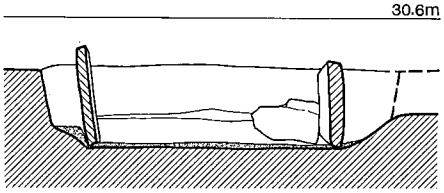
12号墓の周辺は様々な形態の墓が錯綜しており，古い墓の上に新たな墓を築造して北東側から一定の規則性で縦列埋葬されてきた墓地群に変化が現れる箇所である。ここから南西側の一旦墓地群が途切れ空白部分があるが，この間は墓地の重なり具合が激しく，以前の墓を無視した形で新たに墓地群が出現する。これも埋葬する墓域を規制したあらわれとも受け取ることができよう。

当該木棺墓は，棺の内法から若年層を埋葬したと考えられる。重複関係は16号甕棺墓と1号箱式石棺墓があるが，石棺墓に切られている。墓壙の形状は隅丸長方形を呈し，両小口には緑泥片岩の板石を立て小口板とする。側板の掘り込みはなく，東側の小口石と接する箇所に板石と河原石数個を側板の裏込めに使っている。両端の幅がほぼ同じぐらいで頭位が分からないが



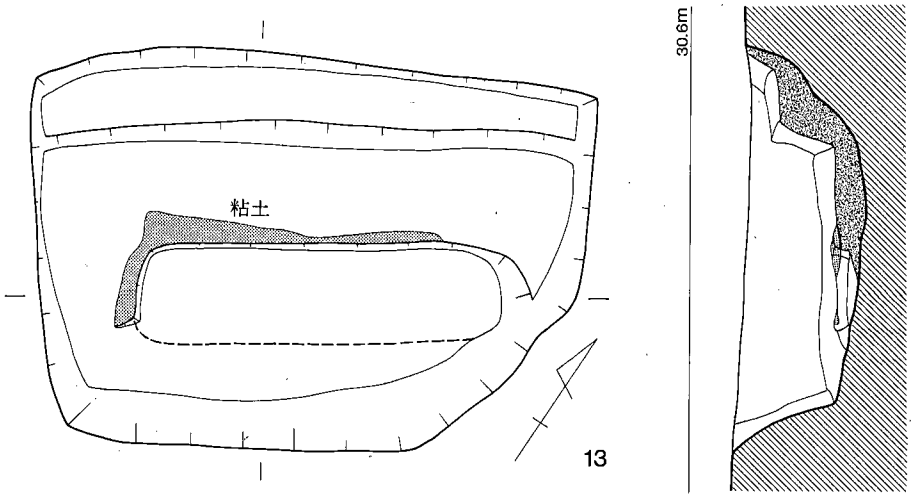
第27図　10号・11号木棺墓実測図（1/30）

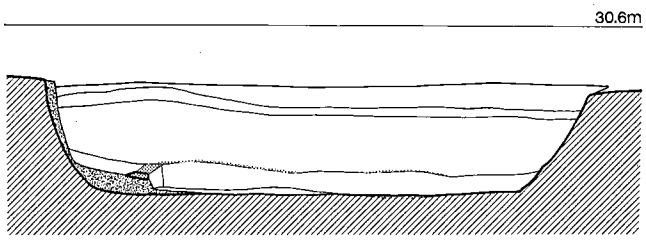




12号木棺墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
139	80	93	30	28





13号木棺墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
218	158	143	復原 35	35

第28図　12号・13号木棺墓実測図（1/30）

西側とすれば主軸方位はS63°Wを示す。棺内からの出土遺物はない。

13号木棺墓　(図版26－(2), 第28図)

当該木棺墓は墓地群が著しく錯綜する中にあって数少ない重複していない墓地である。基本的には2列埋葬を踏襲しているが，その狭間に埋葬されている。

墓壙は不整長方形を呈し，規模は2.18m×1.58mを測る。一見して木蓋土壙墓に見間違うが，木棺墓とした根拠は埋葬土壙の外側には黒色土の裏込めが施されている所以であるが，土壙沿いの粘土の出土状態から木蓋土壙墓の可能性も否定できない。

埋葬土壙は墓壙の下部で確認したが深さが浅く，本来は北側のテラス面から掘り込んでいたことが考えられる。土壙の周縁の約1/2には粘土が取り巻いている。因に埋葬土壙の規模は主軸で1.57m，短軸は復原すると40cm程度になる。頭位は復原幅が同じでありはっきりしないが西側とすれば，主軸方位はS56°Wを示す。棺内の出土遺物はない。

14号木棺墓　(図版27－(1), 第29図)

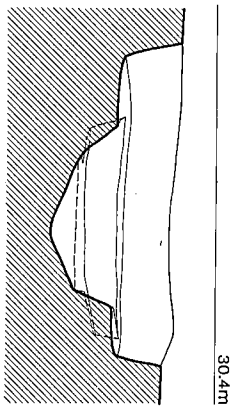
調査区の東端で検出した成人用の木棺墓であるが，この木棺墓が埋葬されている周辺の墓地（計3基）は北東から南西に延びる一連の墓地群とは異なる墓地群で南側に延びている。この南側は既に高速道路のボックスが建設されており調査は不可能であったが，当該木棺墓が列埋葬の起点であろう。この傍には2号祭祀土壙が配され，この祭祀土壙もこの一群の所有であろう。

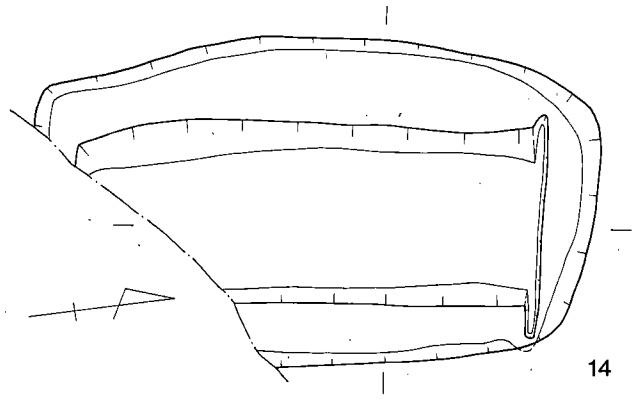
木棺墓は1/4が未調査であるが，墓壙は胴張りの隅丸長方形を呈する。規模は長軸を復原すると2.25m，短軸は1.30mを測る。埋葬土壙は調査時に若干掘り過ぎた感があるが，北側の小口部には長さ88cmの板の掘方があり，南側は土壙状の掘り込みを呈し，一方が組み合わせ式，他方は箱形の所謂「⊏⊐」形の木棺であろう。この形状から頭位は北側と考えられ，主軸方位はN7°Eを示す。棺内からの出土遺物はない。

15号木棺墓　(図版27－(2), 第29図)

調査区の北東側の「Y」字形に分かれた南列で検出した成人用の木棺墓である。他の墓地との重複はなく，周辺の墓地は整然と埋葬されている。この木棺墓の北西傍には主軸をほぼ同じくして2号土壙墓とそれに付随する形で3号石蓋土壙墓が埋葬されている。近親関係にあったことが考えられる。

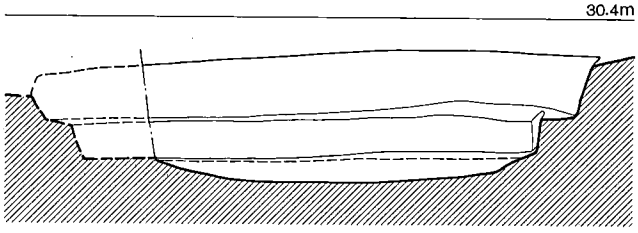
墓壙は不整隅丸長方形を呈し，その規模は主軸で2.37m，短軸で1.40mを測る。埋葬土壙は墓壙の東側に片寄って掘られ，小口では西側にのみ裏込めをする。両小口には側板の幅より若干広い小口板の掘方がある。所謂組み合わせ式の木棺である。木棺の内法が1.50mを測り，被葬者

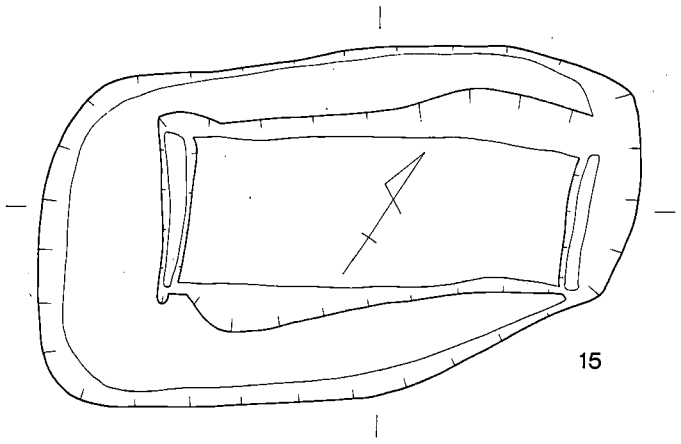


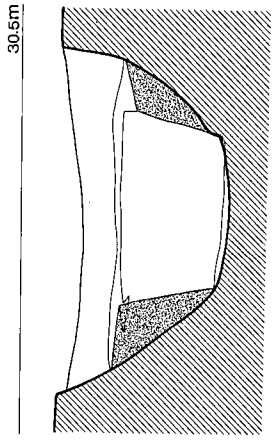


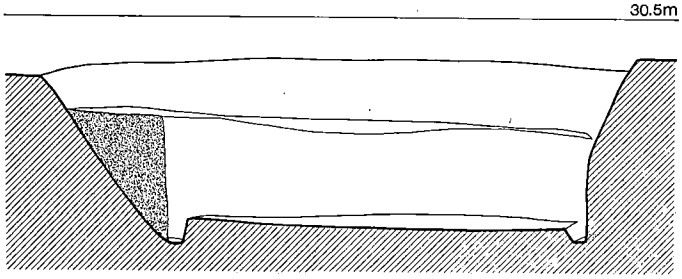
14号木棺墓の法量

墓壙の規模（cm）		埋葬土壙の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
復原 225	130	復原 180	52	—



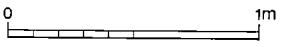






15号木棺墓の法量

墓壙の規模（cm）		埋葬土壙の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
237	140	150	58	54



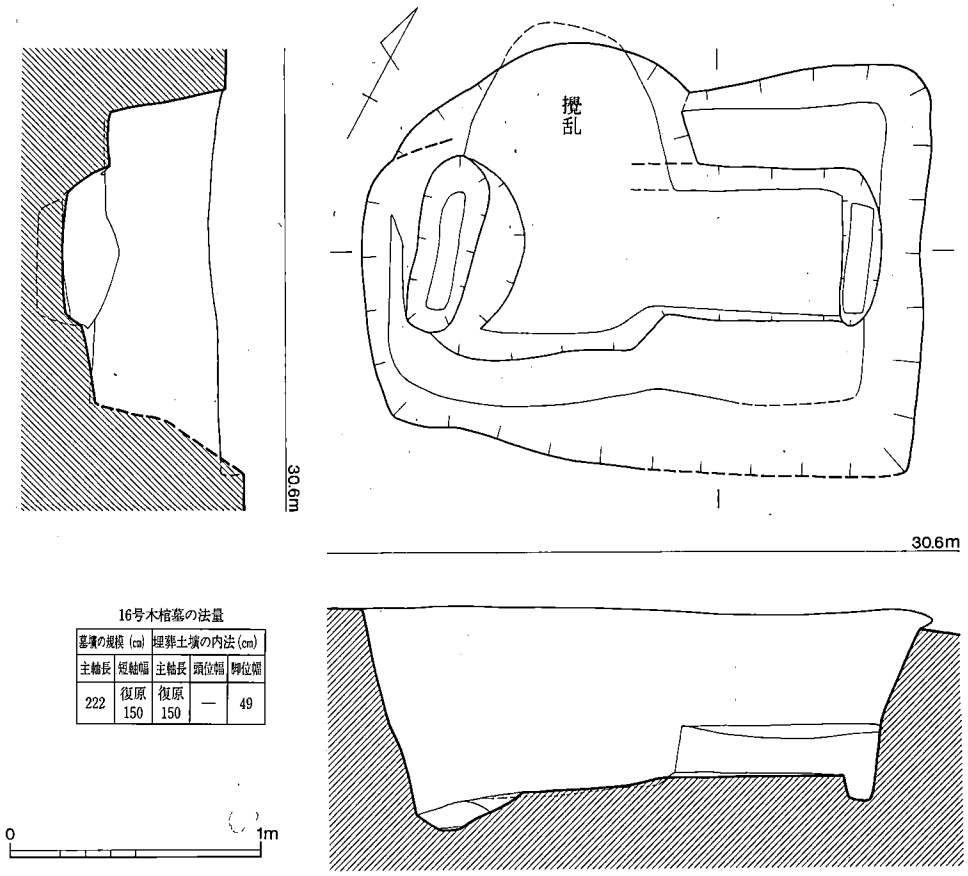
第29図　14号・15号木棺墓実測図（1/30）

はそれ以下の身長であろう。頭位は若干幅広の西側とすれば，主軸方位はS57°Wを示す。棺内の出土遺物はない。

16号木棺墓 （図版28－(1)，第30図）

15号木棺墓の南西隣に位置する成人用の木棺墓である。この木棺墓も他の墓との切り合いはないが，墓壙の西側が攪乱で大きく抉られている。墓壙の形態は羽子板状の長方形をなし，その規模は主軸が2.22m，短軸幅は1.50mを測る。

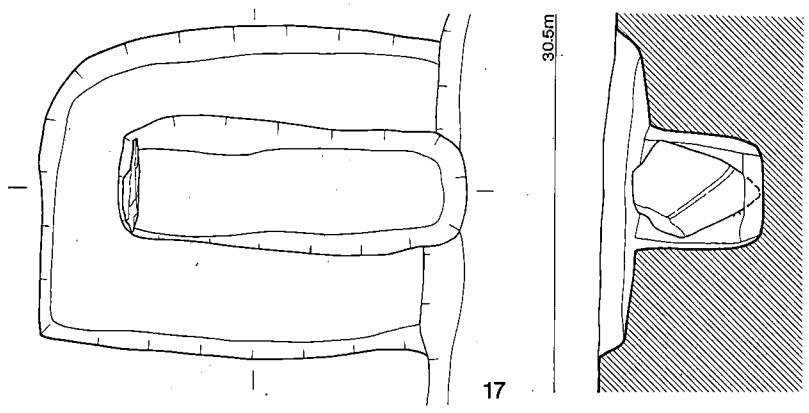
墓壙は2段掘りをなし，埋葬土壙を検出したレベルは地山面である。両小口は小口板を埋め込んだ掘方があり，組み合わせの木棺である。当然，埋葬土壙の掘り込み面はこれよりも上層からであったが，調査時には確認できなかった。棺の内法は1.50m前後で，頭位が断定できないが周囲の墓地群の状況から西側であろう。主軸方位はS62°Wを示す。棺内からの出土遺物はない。

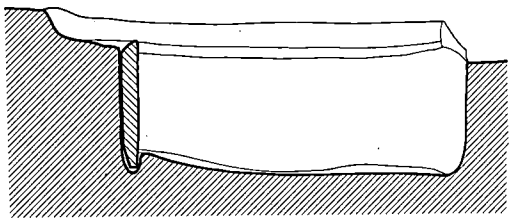


16号木棺墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
222	復原 150	復原 150	—	49

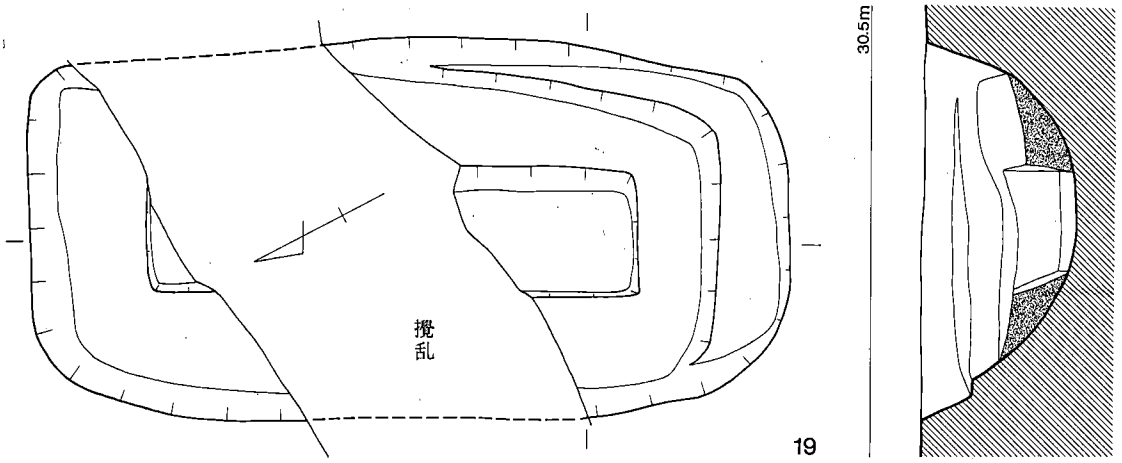
第30図　16号木棺墓実測図（1/30）





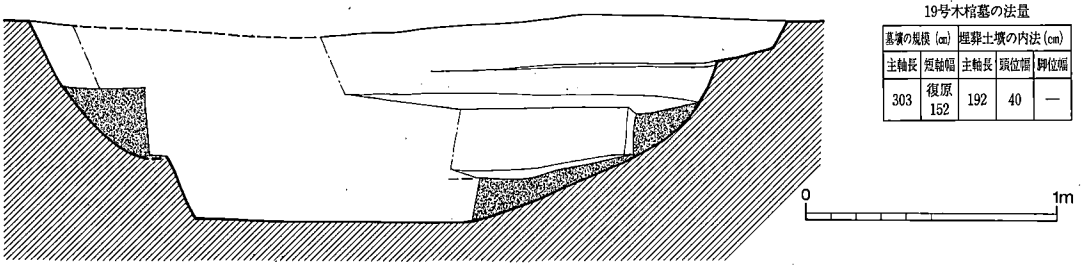
17号木棺墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
—	132	122	34	31



19号木棺墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
303	復原 152	192	40	—



第31図　17号・19号木棺墓実測図 (1/30)

17号木棺墓　(図版28－(2), 第31図)

調査区の南西側で検出した木棺墓で，2号石棺墓との重複があるものの29号甕棺墓と23号木棺墓との重なり具合ははっきりしない。この木棺墓の西側には7号祭祀土壙が配されており，北東側から連なる墓地群が当木棺墓を境に南西側で途切れ部分的な空白ができている。これは一連の墓地群が配される段階で既に7号祭祀土壙が掘られていたからにほかならないと考えられる。

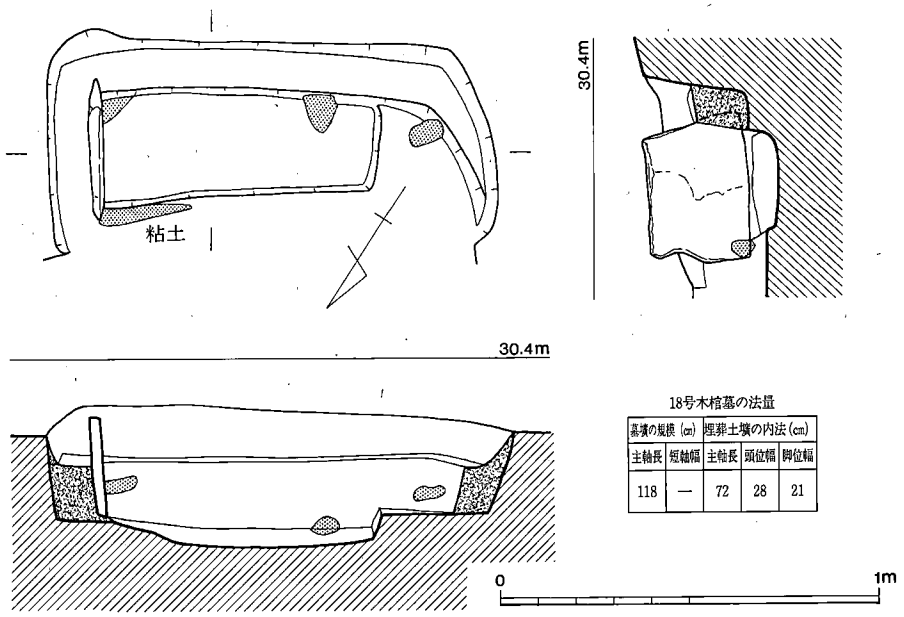
墓壙は東側が削られ明らかでないが，胴張りの隅丸長方形を呈すると思われる。また，2段掘りで墓壙のテラス部分は地山であることから，土壙墓の可能性を残している。墓壙の短軸規模は1.32mを測る。

埋葬土壙は長さが1.40m，幅は50cm，深さはテラスから50cmを測る。内法が1.20m強で青年の被葬者を埋葬したと思われる。土壙の西側小口には緑泥片岩の割り石を立てており，この方向が頭位と思われ床面が7.0cm～8.0cm高い。脚位部の小口は丸くつくる。主軸方位はS49°Wを示し，棺内の遺物はない。

18号木棺墓　(図版52－(1), 第32図)

調査区の中央部分に位置する若年層の被葬者を埋葬したと思われる木棺墓である。23号土壙墓と重なっており土壙墓が新しい。

墓壙はややいびつな長方形をなし，主軸の長さは1.18mを測る。埋葬土壙は長方形を呈し，東側小口には薄い緑泥片岩の割り石を立てて幅広く掘られており，頭位であったと思われる。



18号木棺墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
118	—	72	28	21

第32図　18号木棺墓実測図 (1/20)

小口石に接する箇所と脚位側に灰黄色の目張り粘土が残っている。主軸方位はN57°Eを示す。棺内からの出土遺物はない。

19号木棺墓 (図版29－(1), 第31図)

墓地群調査区の北東側で「Y」字形に分岐した北側列に整然と埋葬された成人用の木棺墓である。この周辺の墓地群の配置では木棺墓2基（成人棺），甕棺墓1基（成人棺）の他，小児棺墓7基が連続あるいは付属する形で配列されている。配列状況から19号と20号木棺墓の間に5基の小児用甕棺墓があり，この7基の墓地群は一つの血縁的な関係にあったと解することもできよう。前述したように6号甕棺の上甕の打ち欠き片が4号甕棺の墓壙内から出土したことも無縁ではなかろう。

当該木棺墓は中央部分が水田の配水暗渠で攪乱されており，主要な部分が破壊されている。墓壙の形状はやや胴張りの隅丸長方形で，南側は「L」字状のテラスをつくる。墓壙の規模は墓地群の中の木棺墓では最大の規模で，主軸の長さが3.03m，短軸幅は1.52mを測り，埋葬土壙の長さは1.92mで，両小口に板の掘方がないことから箱形の木棺と考えられる。頭位ははっきりしないが，周囲の墓地の頭位から南西側であろう。主軸方位はS29°Wを示す。出土遺物などはない。

20号木棺墓 (図版29－(2), 第33図)

墓域調査区の北東側，「Y」字に分かれた北西列で検出した成人用木棺墓で，この木棺墓を境に南西側には一定の間隔を置いて空白部分がある。これが一つのまとまりをなすものと考えられる。

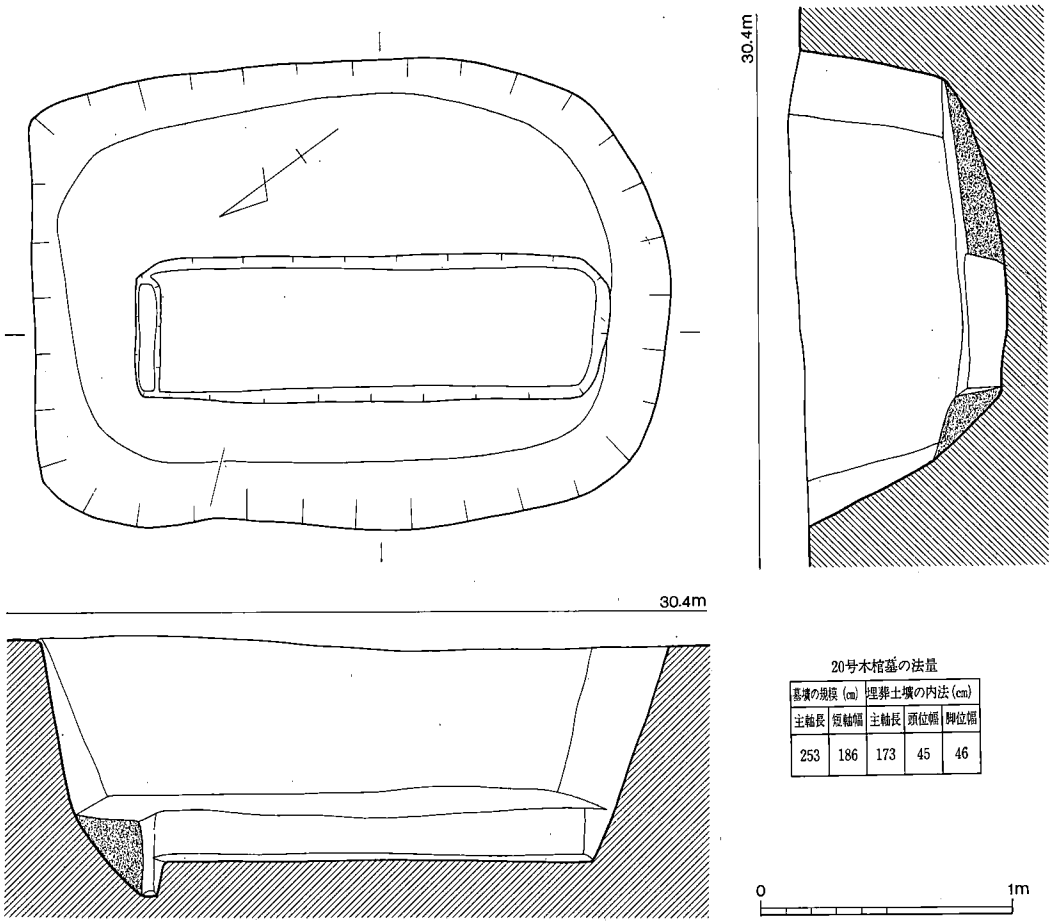
墓壙の形態は楕円形に近く，その規模は長さが2.53m，幅は1.86mを測る。埋葬土壙は墓壙の南寄りに掘られ，墓壙と埋葬土壙の間には茶褐色土と黒褐色土を充填している。土壙の北側小口には小口板の掘方がみられるが，もう一方の小口にはない。この類の木棺墓は5号・14号木棺墓などにみられる。

埋葬土壙の規模は長軸で1.88m，幅は55cm前後で，両小口幅は殆ど変わらず頭位がはっきりしないが，小口板を立てた方角が頭位であろう。主軸方位はN37°Eを示す。棺内からの遺物は出土していない。

21号木棺墓 (図版30－(1), 第34図)

墓域調査区の中央付近で検出した成人用の木棺墓で，この木棺墓も他の墓地との切り合いはない。墓壙は不整な隅丸長方形を呈し2段掘りである。

埋葬土壙は墓壙の東寄りに掘られ，両小口には緑泥片岩の割り石を立てているが，明瞭な掘



20号木棺墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
253	186	173	45	46

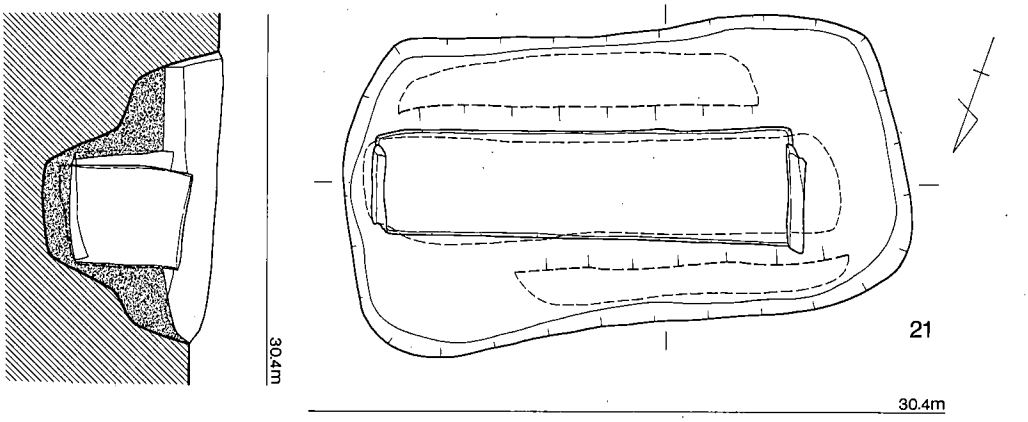
第33図　20号木棺墓実測図（1/30）

方はない。このことから，墓壙を掘った後に床面を平らに盛土し，小口石を立て黒褐色土の裏込めをしながら構築している。埋葬土壙の内法は1.61mを測り，1.60mに近い身長の被葬者を埋葬したと思われる。西側の小口幅が広いことから頭位は西側であろう。主軸方位はS70°Wを示し，棺内の出土遺物はない。

22号木棺墓　（図版30－(2)，第34図）

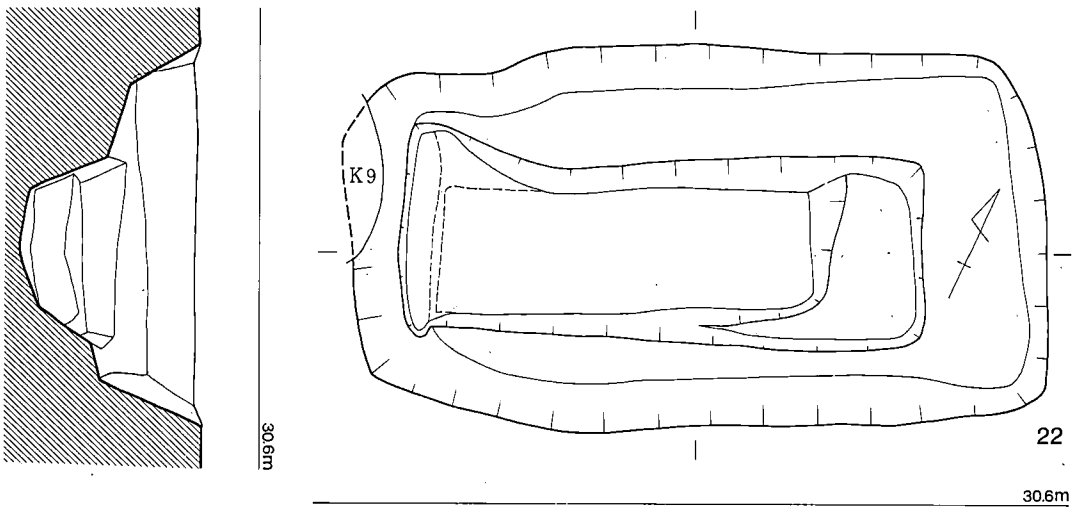
「Y」字に分岐した南側列で検出した成人用の木棺墓である。この木棺墓を挟むように木棺墓が列をなしている。木棺墓どうし接することはあっても重複することはないが，当該木棺墓と9号甕棺墓との切り合いがあり甕棺墓が新しい。この木棺墓の北西傍には並列して18号甕棺墓と15号土壙墓が配されており近親関係が想定される。

墓壙は隅丸長方形をなし，その規模は長さが2.76m，幅は1.52mを測る。埋葬土壙は西側に片寄せて掘り，西側小口は板の掘方で組み合わせ式に，東側は箱形につくる。床面は掘り過ぎて



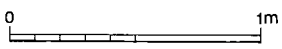
21号木棺墓の法量

墓壙の規模（cm）		埋葬土壙の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
225	115	161	44	38



22号木棺墓の法量

墓壙の規模（cm）		埋葬土壙の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
276	152	190	50	60?



第34図　21号・22号木棺墓実測図（1/30）

おり，東側の一段高くなった部分が床面であろう。頭位は小口板のある西側と考えられ，主軸方位はS65°Wを示す。棺内の出土遺物はない。

23号木棺墓　(図版31－(1)，第35図)

墓域調査区の西側で検出した成人用の木棺墓であるが，列埋葬の北側に含まれる。この列では当該木棺墓を切った29号甕棺墓が周囲の埋葬列に合致しており，木棺墓はやや北西側にずれている。

墓壙は甕棺墓によって約1/3が抉られた状況で発見された。この甕棺墓は中期初頭頃に比定でき，木棺墓はこれより古く中期初頭内の時間的な差か前期末頃の所産の可能性もある。当墓地群の中で近時した墓地どうしで著しく破壊することは少なく，29号甕棺墓を埋葬する時点でこの木棺墓の存在を知り得なかったか，破壊が埋葬土壙にまで及んでいないことで近親者を並列して埋葬したと考えることができよう。この他に重複している墓地は2号石蓋土壙墓，2号石棺墓があり，この2基も血縁的な関係が想定される。

墓壙は胴張りの長方形を呈し，長軸の長さは墓地群の中では大きく3.00mを測る。東側には平坦なテラスを造り出し，埋葬土壙はこのレベルから切り込んでいたと思われる。埋葬土壙は「T」字形をなし，西側の小口には長さ1.00mの板を立てて組み合わせ木棺とし，東側は箱形の木棺形式とする。床面は一段下がっているが，調査時に客土した部分を掘り過ぎたと思われ，本来は埋葬土壙の東に残るテラス面が床面であろう。頭位は小口板を立てる西側と推測され，主軸方位はS59°Wを示す。棺内からの出土遺物はない。

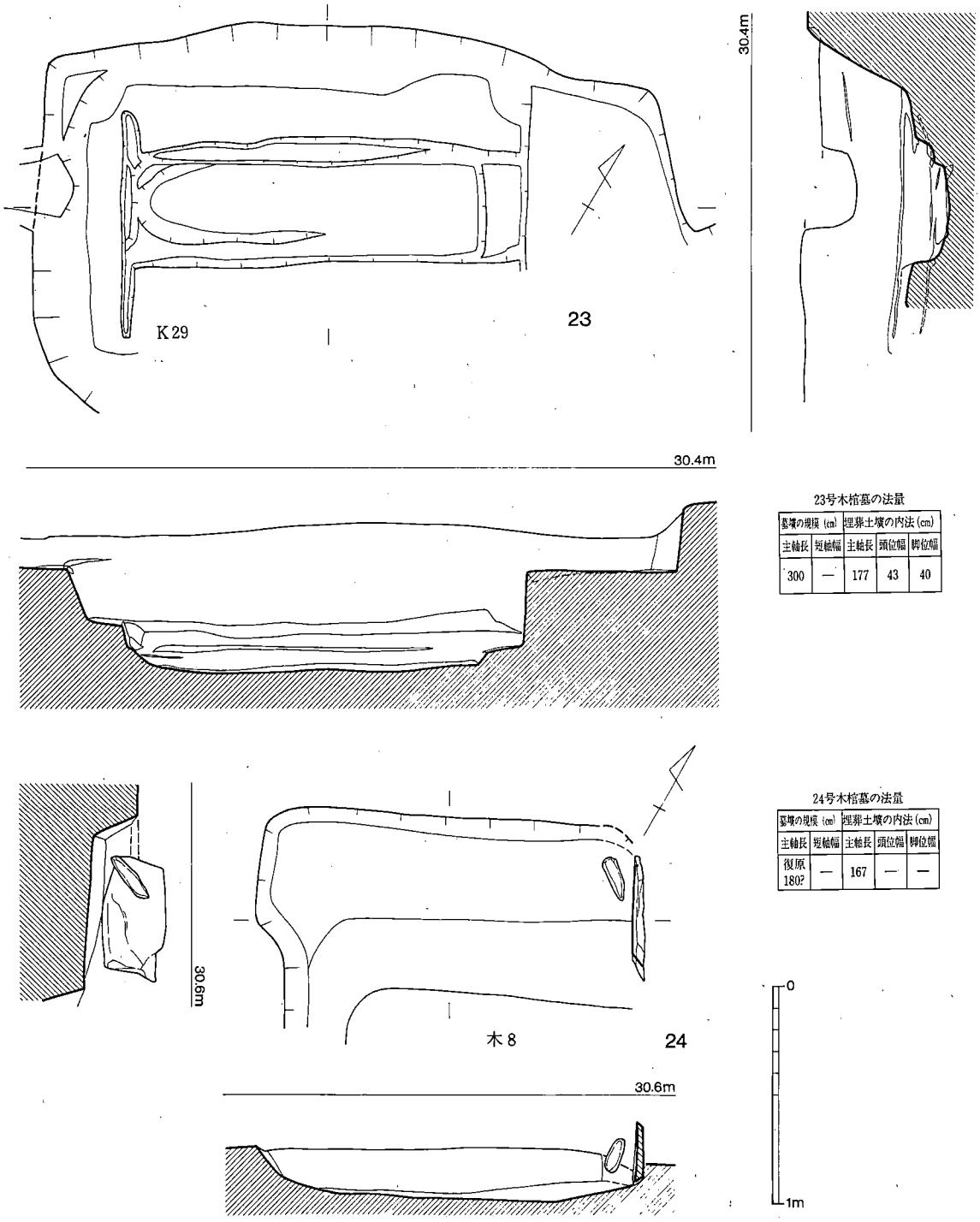
24号木棺墓　(図版24－(2)，第35図)

2列埋葬が「Y」字形に分かれる基部に位置するやや小形の成人用木棺墓で，8号木棺墓に切られている。この木棺墓は2号木棺墓同様墓壙を掘らず，埋葬土壙に木棺を直葬したもので東の小口部には緑泥片岩の板石を立て，西側は土壙様に掘っている。

8号木棺墓の土壙の一部が小口の石と切りあっているにも拘らず破壊を免れていることは，故意に壊さなかったと推測される。頭位は板石のある東側と思われ，主軸方位はN59°Eを示す。出土遺物はない。

25号木棺墓　(図版23－(1)，第36図)

墓地群が錯綜した中央よりやや南西側の，基本的な2列埋葬の間で検出した成人用と思われる木棺墓である。10号土壙墓と並列しているが，新旧関係があり土壙墓の方が新しい。この土壙墓は5号木棺墓に切られている。埋葬土壙は楕円形に近く，西側小口部には板を埋め込んだ掘方があるが，東側にはない。土壙も浅く上部がかなり削られていると思われる。頭位は小口



23号木棺墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
300	—	177	43	40

24号木棺墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
復原 180?	—	167	—	—

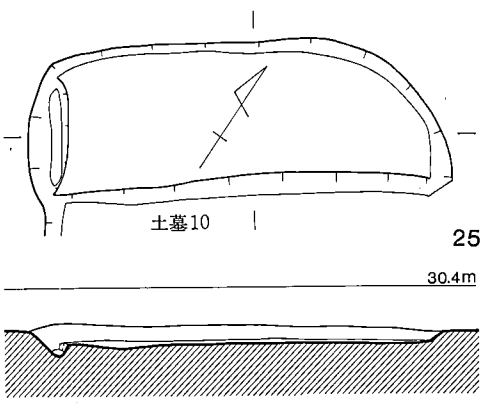
第35図　23号・24号木棺墓実測図 (1/30)

板の方向と考えられ，主軸方位はS55°Wを示す。棺内からの遺物はない。

26号木棺墓 （図版31－(2)，第36図）

墓地群の南西端の縦列埋葬の南側で検出した成人用の木棺墓と考えられる。この木棺墓を境に北東側から連綿と継続してきた墓地群は，一部後世の攪乱により不明な箇所があるものの一旦途切れる。これは大規模集団墓の中での小集団のまとまりとも受け取られるが，墓地群が調査区外に広がる状況から推測の域をでない。

この墓地を木棺墓と断定した然したる理由はなく，強いて挙げれば埋葬土壙のプランが明瞭な長方形を呈していることで，木蓋土壙墓の可能性もありはっきりしない。墓壙の形状は長方形を呈し，２段掘りである。その規模は長さが2.00m，幅は1.15mを測る。埋葬土壙は東側が幅広で頭位と考えられる。主軸方位はN65°Eを示す。棺内の出土遺物はない。



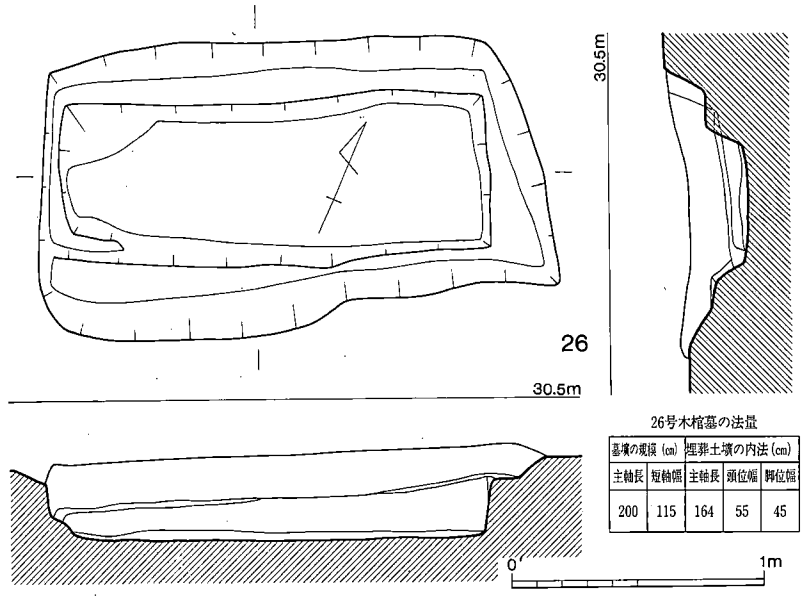
25号木棺墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
166	—	145	50	—

27号木棺墓（図版32－(1)，第37図）

当初の２列埋葬の北西側列上に位置する木棺墓である。墓壙から埋葬土壙までは２段掘りを呈し，黄褐色土や茶褐色土などの裏込めを充填していることで木棺墓と判断した。

この墓は９号石蓋土壙墓との切り合いがあり，木棺墓が古



26号木棺墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
200	115	164	55	45

第36図　25号・26号木棺墓実測図（1/30）

い。被葬者を埋葬した後に近親者の子供を葬ったのであろう。

墓壙の形態は隅丸長方形を呈し，その規模は長さが2.15m，幅は1.30mを測る。埋葬土壙は主軸を土壙の長さとほぼ同規模に掘り，長さは2.10m（内法は1.98m），幅は頭位側で56cm，脚位は48cmで，この規模から推測すると被葬者は高身長であったと思われる。

埋葬土壙の両側には灰黄色粘土が掘り込み沿いに遺存し，木蓋の目張りを施していたことが分かる。西側の小口部には「U」字形の粘土枕が付設され，その全面には薄く朱が残っていた。粘土枕のある墓地はこの他に7号石棺があるのみで，この墓地群では稀有である。主軸方位はS60°Wを示す。棺内からの出土遺物はない。

28号木棺墓　（図版32－(2)・45－(2)，第37図）

墓域調査区の南西端近くに位置し，従来の2列埋葬の間隙を縫った形で埋葬された小形の部類に入る成人用の木棺墓である。5号石棺墓（若年層用）と35号土壙墓と完全に重複して，6号石棺とも一部切り合っておりかなり錯綜している。

墓壙は西の壁側に一部見られるが，東側は埋葬土壙のみである。もともと一方を幅広に掘り墓壙と木棺との透き間に茶褐色土の裏込めを充填していることから，東側に片寄せて木棺を埋葬したことが考えられる。

埋葬土壙の北東側小口には板を立てた掘方が残り，片方にはなく，折衷様式の木棺である。埋葬土壙の断面は「U」字形をなしており箱形でない可能性もあるが定かではない。土壙の規模は，長さが1.64m，幅は60cm前後を測る。小口板を立てる方が頭位とすれば，主軸方位はN31°Eを示す。棺内の出土遺物はない。

29号木棺墓　（図版33－(1)・(2)，第38図）

この墓の周囲は墓地群の中で最も遺構が錯綜した部分である。重複関係にある墓は1号箱式石棺墓，39号土壙墓，30号木棺墓である。

周辺の墓の新旧関係は下記のとおりである。（新→旧）

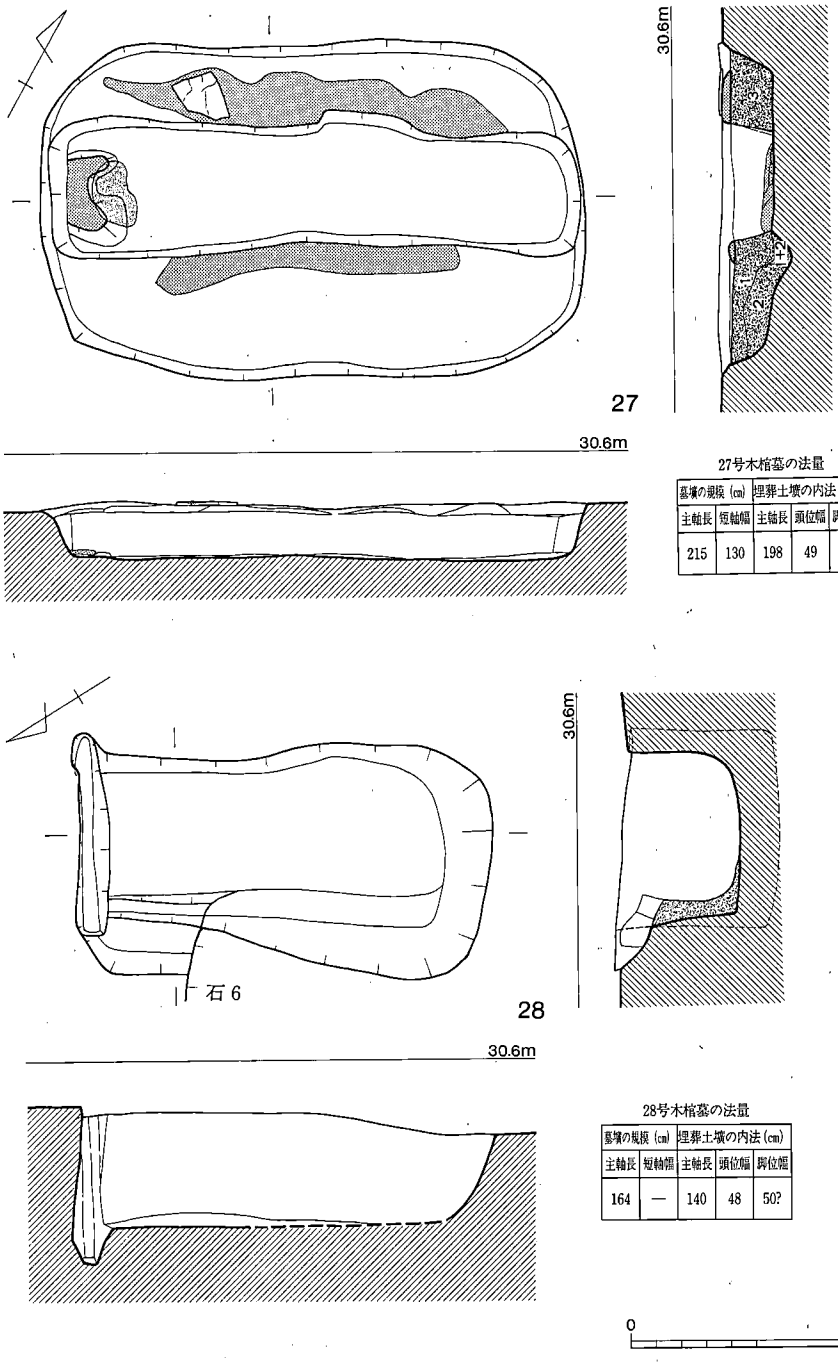
↗　39号土壙墓　←　6号木棺墓

1号箱式石棺墓　→　29号木棺墓

↙　↘　↘　30号木棺墓

16号甕棺墓　20号甕棺墓

この木棺墓は，北西側壁が1号箱式石棺墓で約1/3が削られている。墓壙も不明瞭で，1号石棺墓を調査しているときに木棺墓に気づいた次第である。検出状況での埋葬土壙は整った長方形を呈し，長さは1.77m，棺内の法量は1.70mほどである。北東側小口と南東側の壁沿いには組み合わせ式の木棺を埋納したと思われる掘り込みがあるが，南西側の小口にはない。



27号木棺墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
215	130	198	49	40

28号木棺墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
164	—	140	48	50?

第37図　27号・28号木棺墓実測図（1/30）

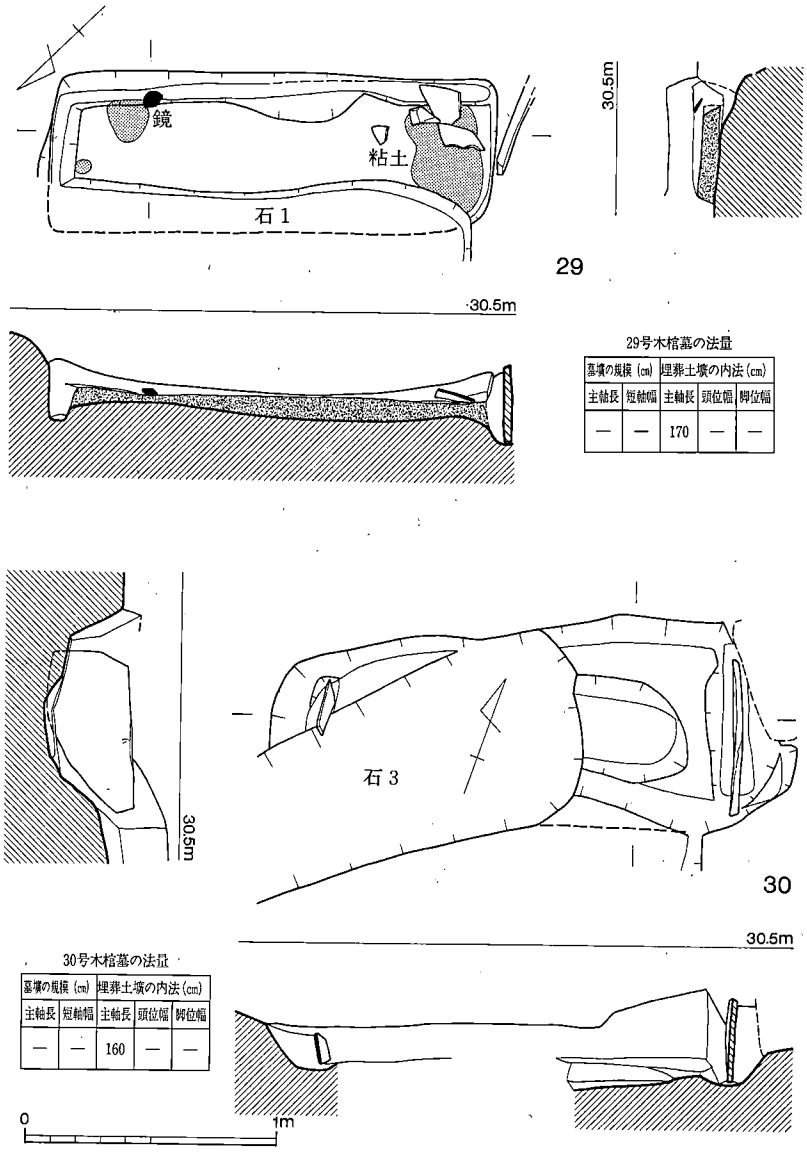
床面には礫混じりの褐色土と一部黒褐色土を7.0cm～10cmほど客土している。南西側と北東側の一部に灰青色の粘土があり，南西側の粘土は床に敷いていた。この粘土に緑泥片岩の板石がくい込んでおり，当初，枕と考えていたが北東側の棺材の掘方上に小形仿製鏡が鏡面を表にし，斜めになった状態で出土したことからこちら側が頭位の可能性もあるが定かでない。この棺材は木棺の裏込めに使用したものと思われる。この鏡の出土状況は元位置を保っているとは考えられず，内部はかなり攪乱されていたと思われる。

主軸方位は鏡が出土した側が頭位とするとN44°Eを示す。

30号木棺墓（図版42－(2)，第38図）

この木棺墓も本来の２列埋葬の間隙を縫った形で埋葬されているが，重複関係が著しく３号箱式石棺墓に大半が切られて，１号箱式石棺墓と29号木棺墓とも一部重複している。また，27号土壙墓とも重なりこの木棺墓の方が新しい。

墓が錯綜して墓壙は定かでない。埋葬土壙の長さは2.20mで，内法は1.60mを測る。両小口には緑泥片岩の割り石を立てており，床面は一段土壙様に掘り込んでいる。被葬者の頭



29号木棺墓の法量

墓壙の規模（cm）		埋葬土壙の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
—	—	170	—	—

30号木棺墓の法量

墓壙の規模（cm）		埋葬土壙の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
—	—	160	—	—

第38図　29号・30号木棺墓実測図（1/30）

位は大きめの板石を立てている東側と思われ，主軸方位はN70°Eを示す。出土遺物はない。

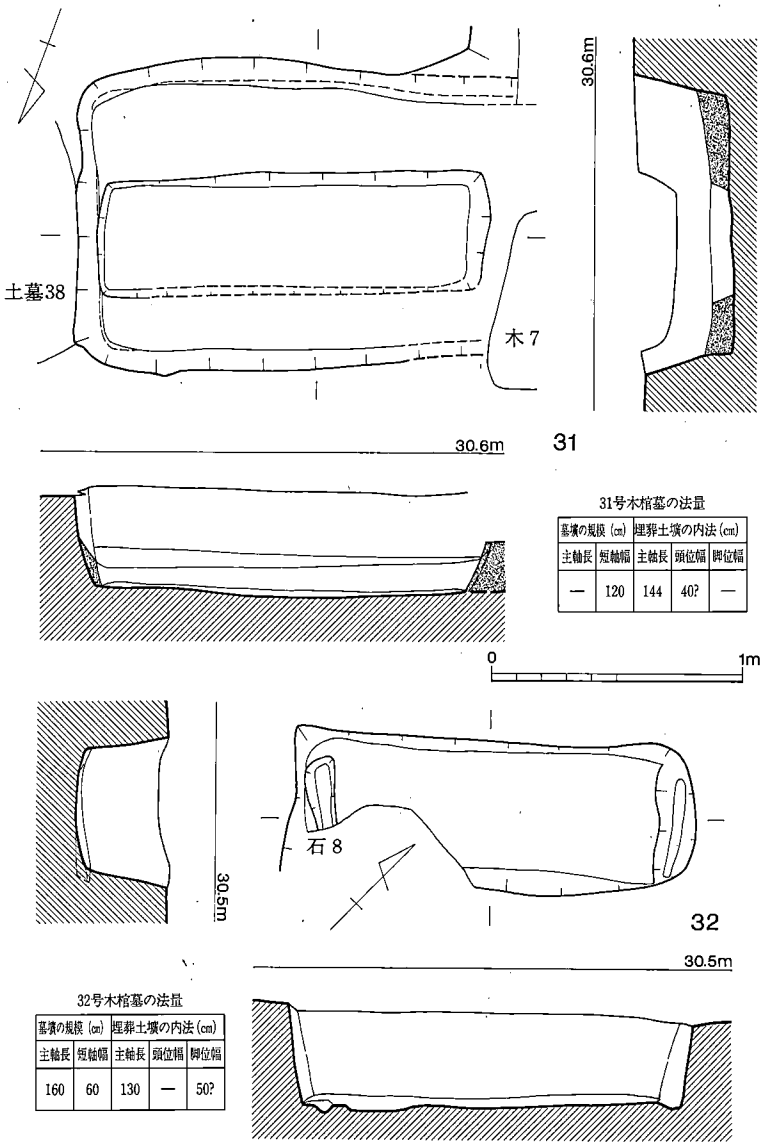
31号木棺墓 （図版23－(2)，第39図）

墓域調査区の南西側に位置する，本来の２列埋葬の南側列で検出した木棺墓である。発掘当初は12号土壙墓と付与していた墓で，墓壙と埋葬土壙の間に裏込め土を充填していることから木棺墓と判断した。重なり具合は，38号土壙墓の墓壙の短辺を切っているが，７号木棺墓には切られている。12号土壙墓との新旧関係は定かでない。

墓壙の形は隅丸長方形と思われ，短軸が1.20mである。埋葬土壙は墓壙の東側に片寄せて掘り込んでいるが，北側の壁は裏込め土との判断ができず掘り過ぎた。形状は整った長方形で，小口板の掘方がないことから箱形の木棺であろう。両小口の幅が変わらず頭位がはっきりしないが，南西側の可能性があり，主軸方位はN70°Wを示す。棺内の出土遺物はない。

32号木棺墓 （図版46－(2)，47－(1)，第39図）

２列埋葬の北側列から若干北西側に逸脱した位置に埋葬された木棺墓で，９号箱式石棺



31号木棺墓の法量

墓壙の規模（cm）		埋葬土壙の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
—	120	144	40?	—

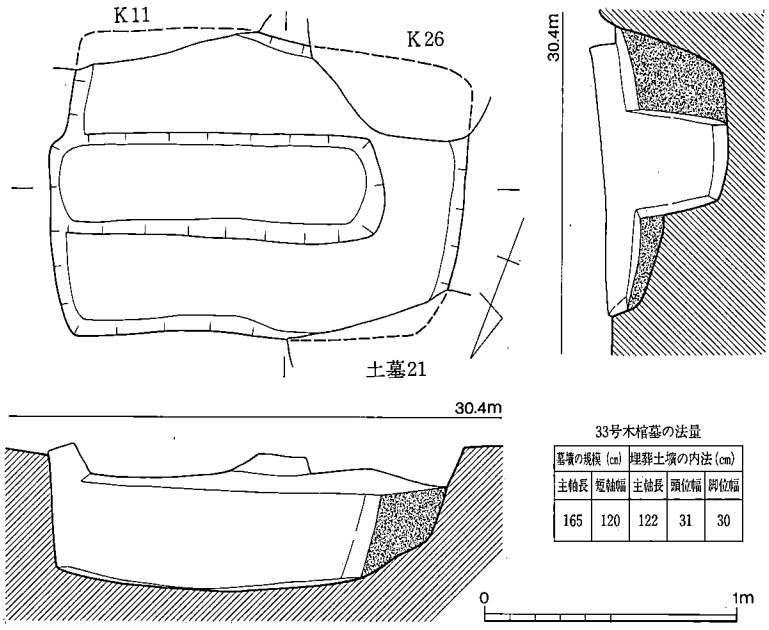
32号木棺墓の法量

墓壙の規模（cm）		埋葬土壙の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
160	60	130	—	50?

第39図　31号・32号木棺墓実測図（1/30）

墓（木棺墓の可能性がある）に切られている。

墓壙はなく，埋葬土壙に木棺を直葬したものである。土壙は長方形で，長さは1.60m，幅は60cm前後を測る。両小口には板を立てた浅い掘方がある。頭位は分からないが周辺の墓から推測すると南西側と考えられ，主軸方位はS45°Wを示す。棺内の出土遺物ない。



33号木棺墓の法量

墓壙の規模（cm）		埋葬土壙の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
165	120	122	31	30

第40図　33号木棺墓実測図（1/30）

33号木棺墓　（図版34－(1)，第40図）

墓域調査区のほぼ中央付近に位置する小形の成人用の木棺墓で，２列埋葬の間に埋葬されている。この墓は調査時に土壙墓としていたもので，裏込めに礫混じりの黒褐色土を充填していることから木棺墓と判断した。

この木棺墓は，11号・26号甕棺墓，21号土壙墓のすべての墓に切られている。墓壙は長方形を呈し，タイプとしては31号木棺墓と同じ形態で，墓壙の東側に片寄って埋葬土壙を掘っている。墓壙の規模は，長さが1.65m，幅は1.20mを測る。

埋葬土壙は隅丸長方形で一見土壙墓に見えるが，箱形の木棺墓と考えられる。埋葬土壙の内法の長さは1.22mで，やや身長の低い被葬者を埋葬したと推測される。両小口の幅が殆ど変わらず頭位がはっきりしない。棺内の出土遺物はない。

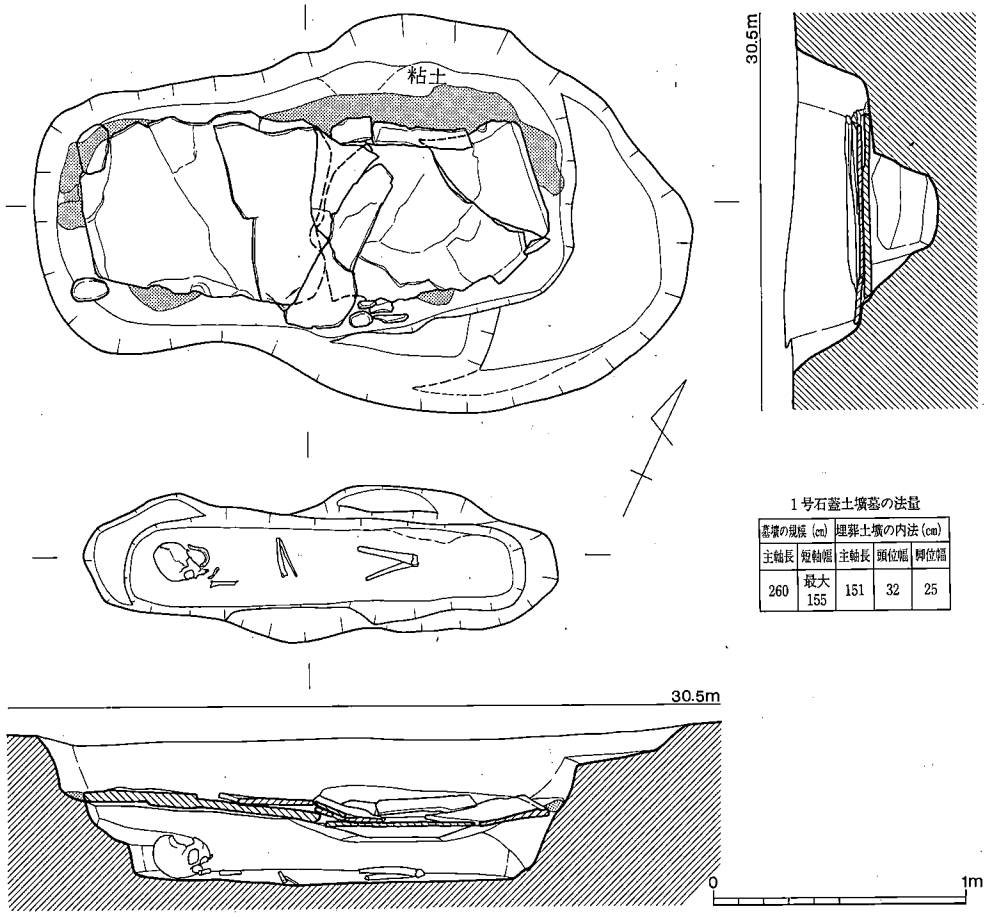
③ 石蓋土壙墓

1号石蓋土壙墓 （図版34－(2)・35－(1)・(2)，第41図）

墓域調査区の北東側で「Y」字形に分岐した南側列に位置する成人用の石蓋土壙墓である。調査した範囲内で成人用の石蓋土壙墓はこの1基のみで，列埋葬の線上から若干南東側にずれている。

墓壙は靴底状を呈し，東側小口部は2段掘りにしテラスを設けている。墓壙の規模は長軸で2.60m，幅は1.55mを測る。蓋石は緑泥片岩の割り石を平蓋状に架構し，その透き間を小ぶりの板石で覆っている。黄褐色の目張り粘土は蓋の周囲と継ぎ目部分に覆っている。

埋葬土壙は楕円形を呈し，部分的に若干崩落しているが旧形は保っている。土壙内の床面には，頭位を西側にして頭骨と右前腕骨，左右の大腿骨が遺存していたが，枕や朱の散布は認め



1号石蓋土壙墓の法量

墓壙の規模（cm）		埋葬土壙の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
260	最大155	151	32	25

第41図　1号石蓋土壙墓実測図（1/30）

られない。埋葬土壙の内法が1.50mほどで，伸展葬とすると身長はそう高くない被葬者であろう。主軸方位はS65°Wを示し，副葬品などは出土していない。

2号石蓋土壙墓　(図版36－(1)・(2)，第42図)

北側列からややはみ出し，23号成人用木棺墓と重複し若年層を埋葬したと思われる石蓋土壙墓である。木棺墓とは主軸をほぼ同一にし近親者の関係にあったと推測される。

墓壙は隅丸長方形で，長さは1.23m，幅が65cmを測る。石蓋は緑泥片岩の割り石を2枚使って，1枚は横に架構しその上に重ねるようにもう1枚を縦に使っている。埋葬土壙は楕円形に近く，両小口の幅は西側が広く頭位はこの方向であったと思われる。主軸方位はS53°Wを示す。棺内の出土遺物はない。

3号石蓋土壙墓　(図版37－(1)・(2)，第42図)

墓域調査区の北東側，「Y」字状に分岐した列の間で検出した小児用の石蓋土壙墓である。2号土壙墓（2基の墓を合葬した可能性がある）との切り合いがあり，石蓋土壙墓が新しい。親子の関係とも考えられる。

墓壙は楕円形に近い形状で，長さは90cmを測る。石蓋は2枚の緑泥片岩を重ねあわせて架構している。埋葬土壙の長さが46cmを測り，生まれたばかりの乳児を埋葬したと思われる。棺内からの遺物はない。主軸は東西方向に向けている。

4号石蓋土壙墓　(図版38－(1)・(2)，第43図)

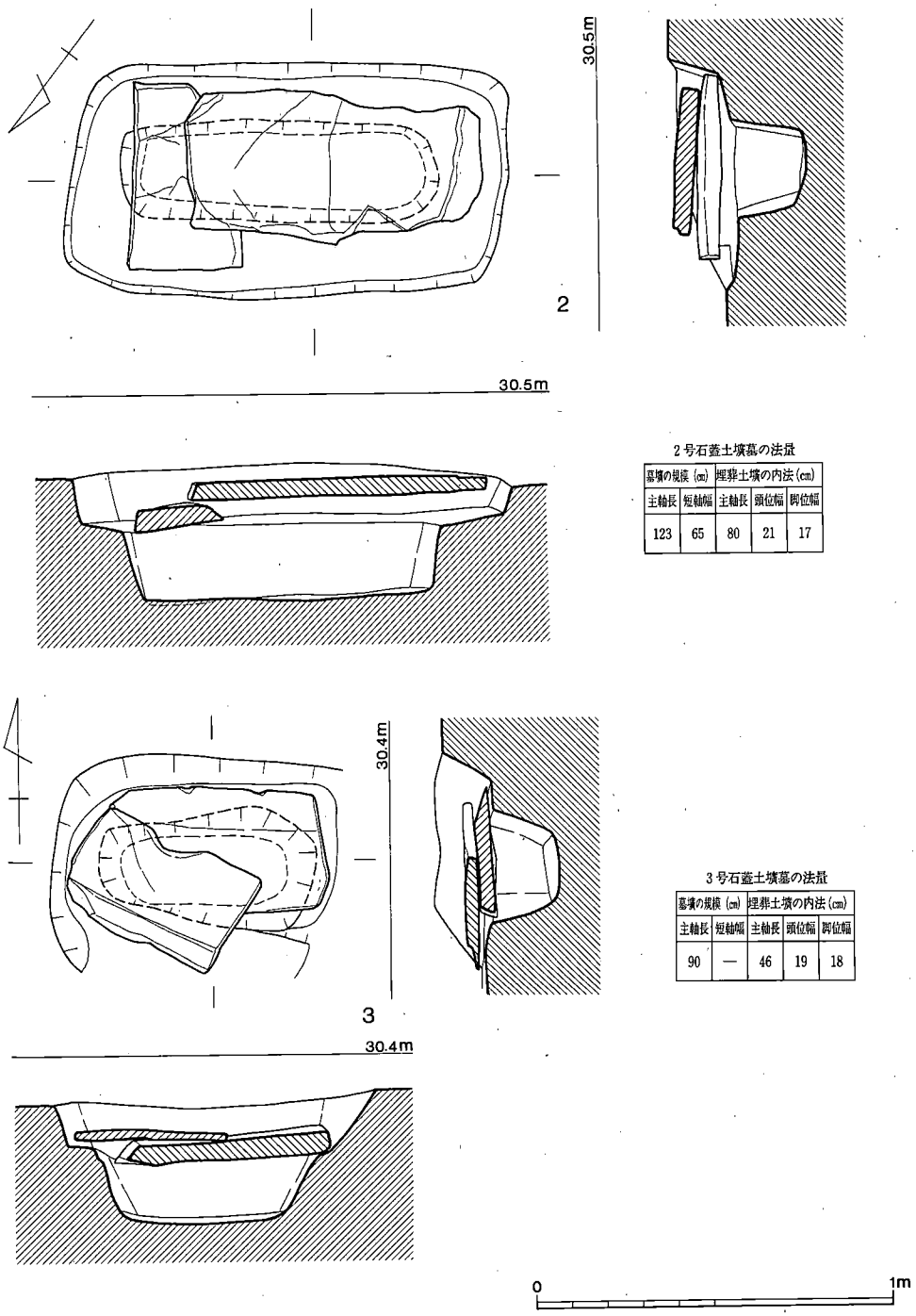
墓域調査区の中央に位置する小児用の石蓋土壙墓で，「Y」字状に分かれる列の基部に埋葬されている。この周辺は小児用墓が密集している箇所で重複関係も複雑であるが，当該墓は9号石蓋土壙墓と28号土壙墓の切り合いがある。新旧関係ははっきりしない。

石蓋は長方形の緑泥片岩の板石を1枚架構しているが，板石の検出面と2段掘りに掘られた埋葬土壙とのレベルが一致しないことから，一種の標石で木蓋土壙墓とも考えられる。主軸方位は幅広の西側が頭位と考えられ，主軸方位はS58°Wを示す。棺内の出土遺物はない。

5号石蓋土壙墓　(図版17－(2)・39－(1)，第43図)

2列埋葬の「Y」字形の基部に当たる北側の列に位置する小児用の石蓋土壙墓で，33号成人用甕棺墓と32号小児用甕棺墓との近親関係にある墓であろう。場所的には33号甕棺墓の範疇にあるもので，石蓋は緑泥片岩の厚みのある割り石を架構している。

埋葬土壙の内法は54cmを測り，生まれて間もなく死亡した赤子を埋葬したと推測される。頭位は分からないが，蓋石の形状から東側と推察される。出土遺物はない。



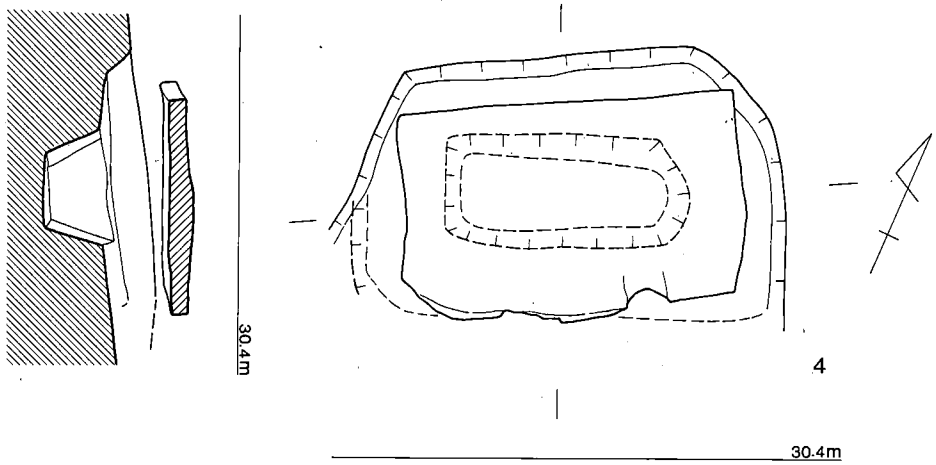
2号石蓋土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
123	65	80	21	17

3号石蓋土壙墓の法量

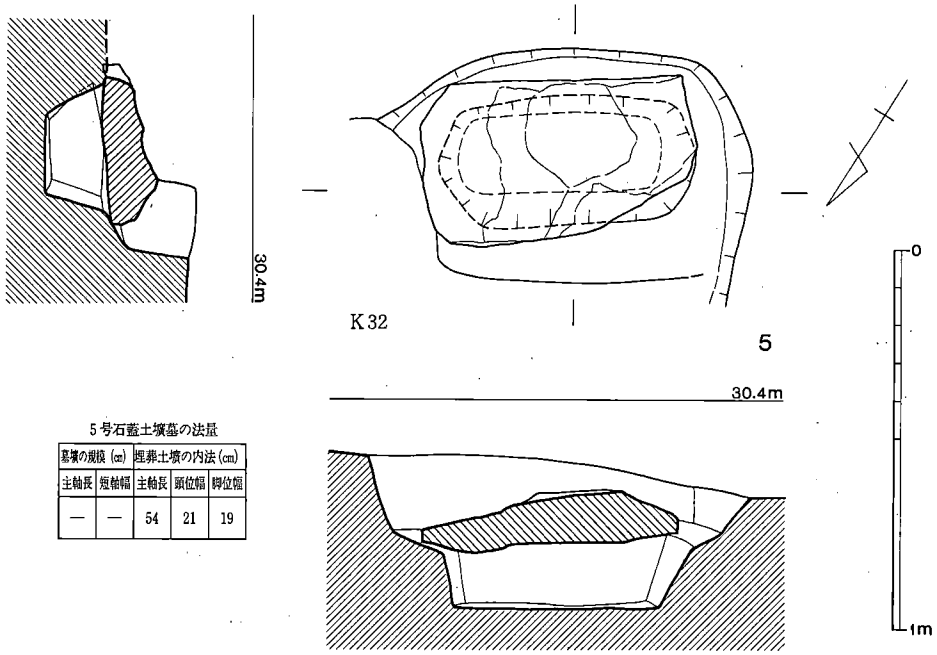
墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
90	—	46	19	18

第42図　2号・3号石蓋土壙墓実測図 (1/20)



4号石蓋土壙墓の法量

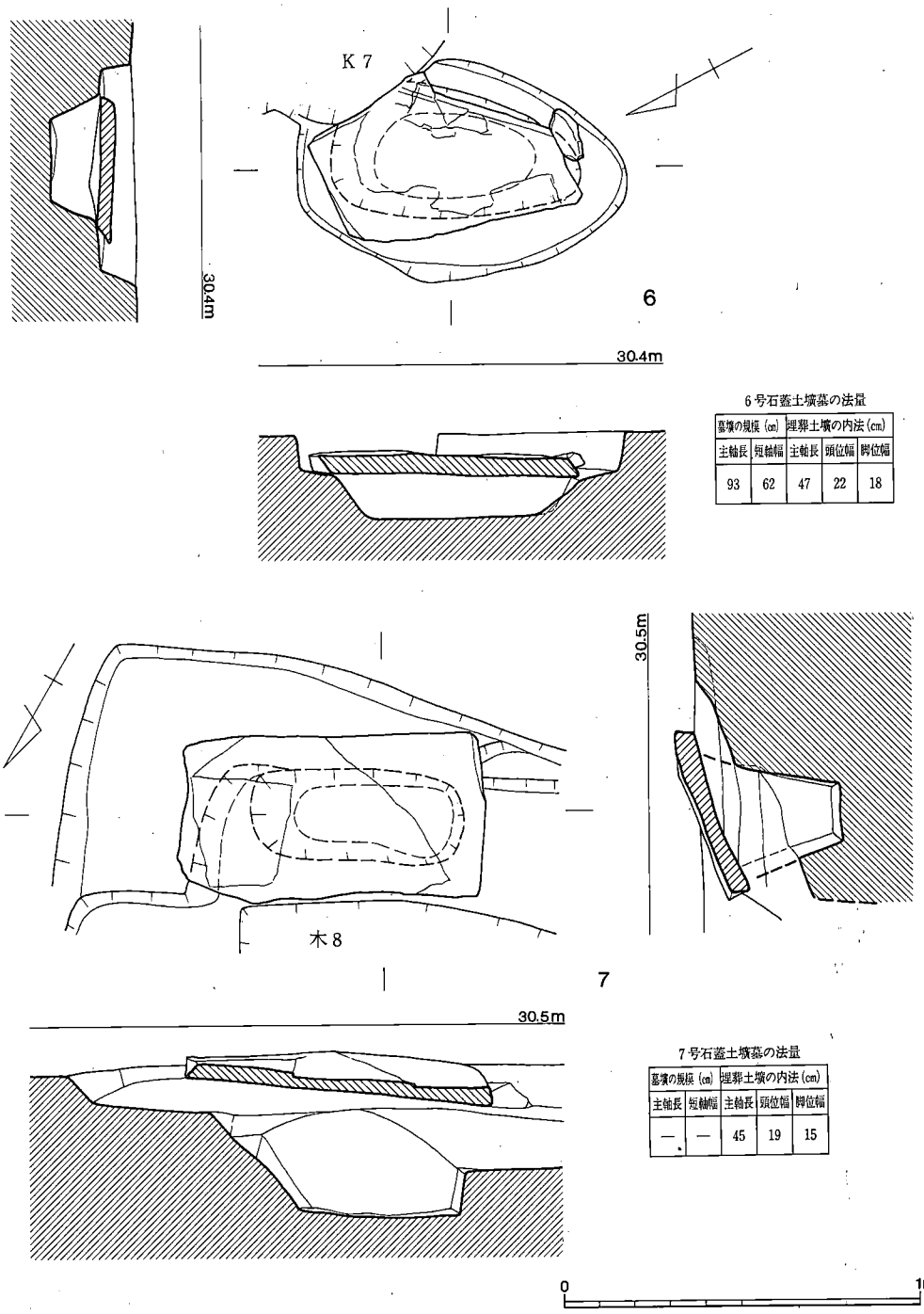
墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
復原 115	—	55	19	15



5号石蓋土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
—	—	54	21	19

第43図　4号・5号石蓋土壙墓実測図 (1/20)



6号石蓋土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
93	62	47	22	18

7号石蓋土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
—	—	45	19	15

第44図　6号・7号石蓋土壙墓実測図 (1/20)

6号石蓋土壙墓　(図版8－(1), 第44図)

墓域調査区の北東側に位置する小児用の石蓋土壙墓で,「Y」字状に分岐する列間の真ん中に埋葬されている。この周辺には1号木棺墓号, 7号小児用甕棺墓と1号成人用土壙墓が埋葬されており, わりとゆとりのある埋葬が行われている。埋葬位置関係から, この3基は血縁的な関係にあったことが想定できる。7号甕棺墓との重複があるが甕棺墓の方が新しい。

墓壙は卵形を呈し, 埋葬土壙には1枚の緑泥片岩の板石を架構している。規模は長軸がが93cm, 幅は62cm, 埋葬土壙は内法が47cmと小さく, 生まれたばかりの乳児を埋葬したものと考えられる。棺内の出土遺物はない。

7号石蓋土壙墓　(図版24－(2), 第44図)

2列埋葬の「Y」字形の基部付近に位置する8号木棺墓の墓壙内から出土した小児用の石蓋土壙墓である。8号木棺墓は9号甕棺と石蓋土壙墓の2基の小児用墓が埋葬され近親の関係にあることが想定される。

石蓋は1枚の緑泥片岩を長方形に加工したものを架構している。埋葬土壙が木棺墓の墓壙内にあるため若干掘り過ぎ, 土壙に対して石蓋が浮いた状態を呈している。埋葬土壙は楕円形で内法が45cmと小さいことから, 生まれて間もない乳児を埋葬したと思われる。出土遺物はない。

8号石蓋土壙墓　(図版39－(2)・40－(1), 第45図)

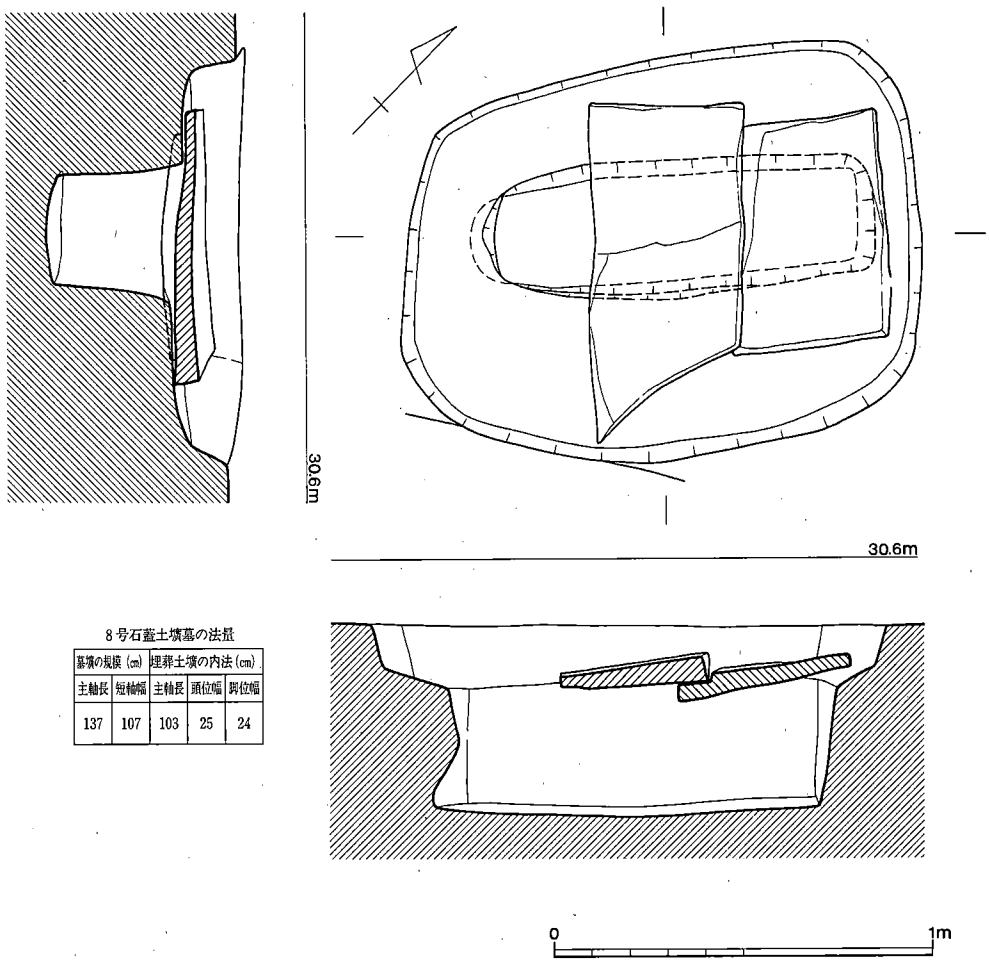
墓域調査区の南西側で検出した若年層を埋葬したと思われる石蓋土壙墓で, 2列埋葬の間隙を縫って掘り込んでいる。重複関係は27号木棺墓より新しく, 6号箱式石棺墓より古い。27号木棺墓との関係が推測される。

墓壙は隅丸長方形に近く, その規模は長さが1.37m, 幅は1.07mを測る。石蓋は緑泥片岩の割り石を鎧蓋状に2枚架構しているが, 南西側には石蓋はなく攪乱の痕跡が見当たらないことから木蓋で覆っていたと考えられる。

埋葬土壙は楕円形に近い形状を呈し, 南西側の小口壁を若干掘り込んでいる。おそらくこの方向が脚位と思われ, 主軸方位はN45°を示す。出土遺物はない。

9号石蓋土壙墓　(図版40－(2), 第46図)

墓域の中央付近の小児墓が激しく重なり合っている箇所に埋葬された小児用の石蓋土壙墓である。この墓を中心として4基の小児墓が埋葬されているが, すべての墓よりも古い。石蓋は緑泥片岩の板石を3枚使っているが, 周囲の墓を埋葬する時点で攪乱を受けているようで, 埋葬土壙のプランに合致した架構ではない。

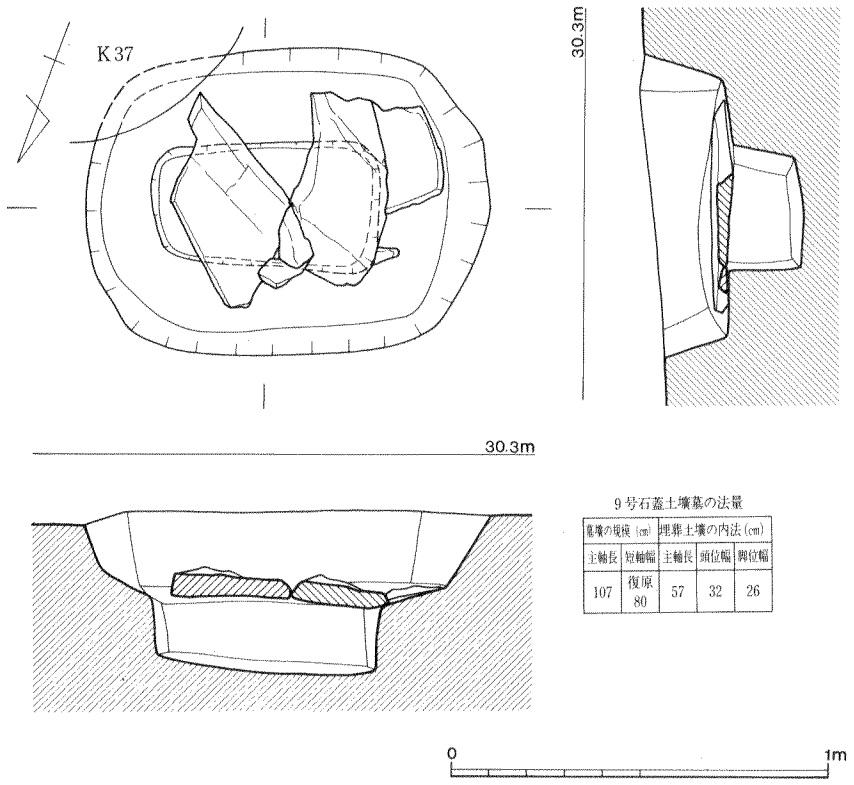


8号石蓋土壙墓の法量

墓壙の規模（cm）		埋葬土壙の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
137	107	103	25	24

第45図　8号石蓋土壙墓実測図（1/20）

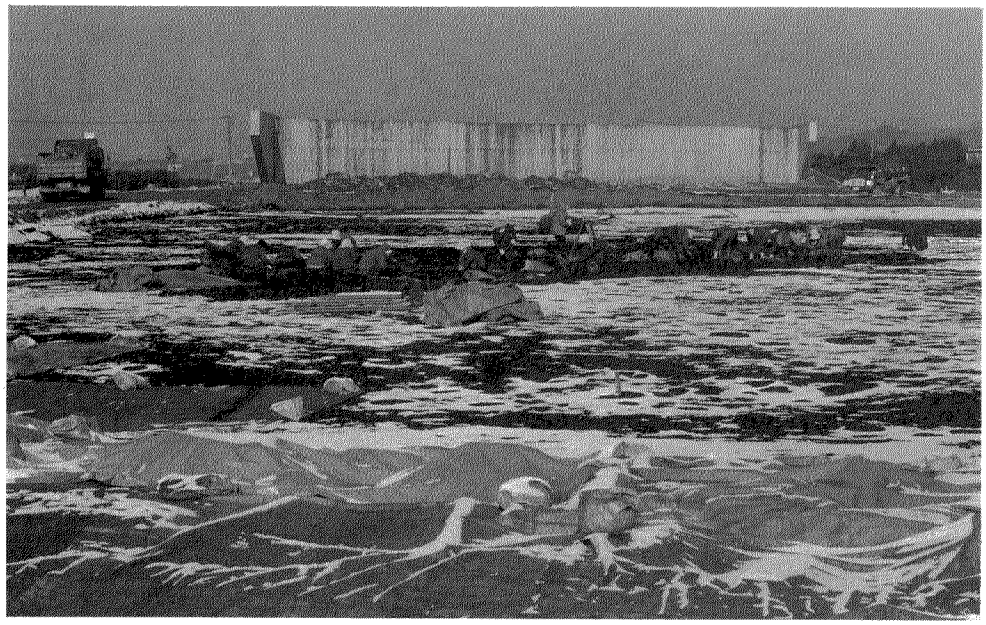
墓壙は殆ど残っていないが，復原すると隅丸方形に近い形状であろう。埋葬土壙は隅丸長方形で，内法が57cmと短いことから生まれて年のいかない幼児を埋葬したと考えられる。頭位は西側が幅広に掘られており，この方向であったと思われる。主軸方位はN69°Eを示し，棺内の出土遺物はない。



9号石蓋土壙墓の法量

墓壙の規模（cm）		埋葬土壙の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
107	復原80	57	32	26

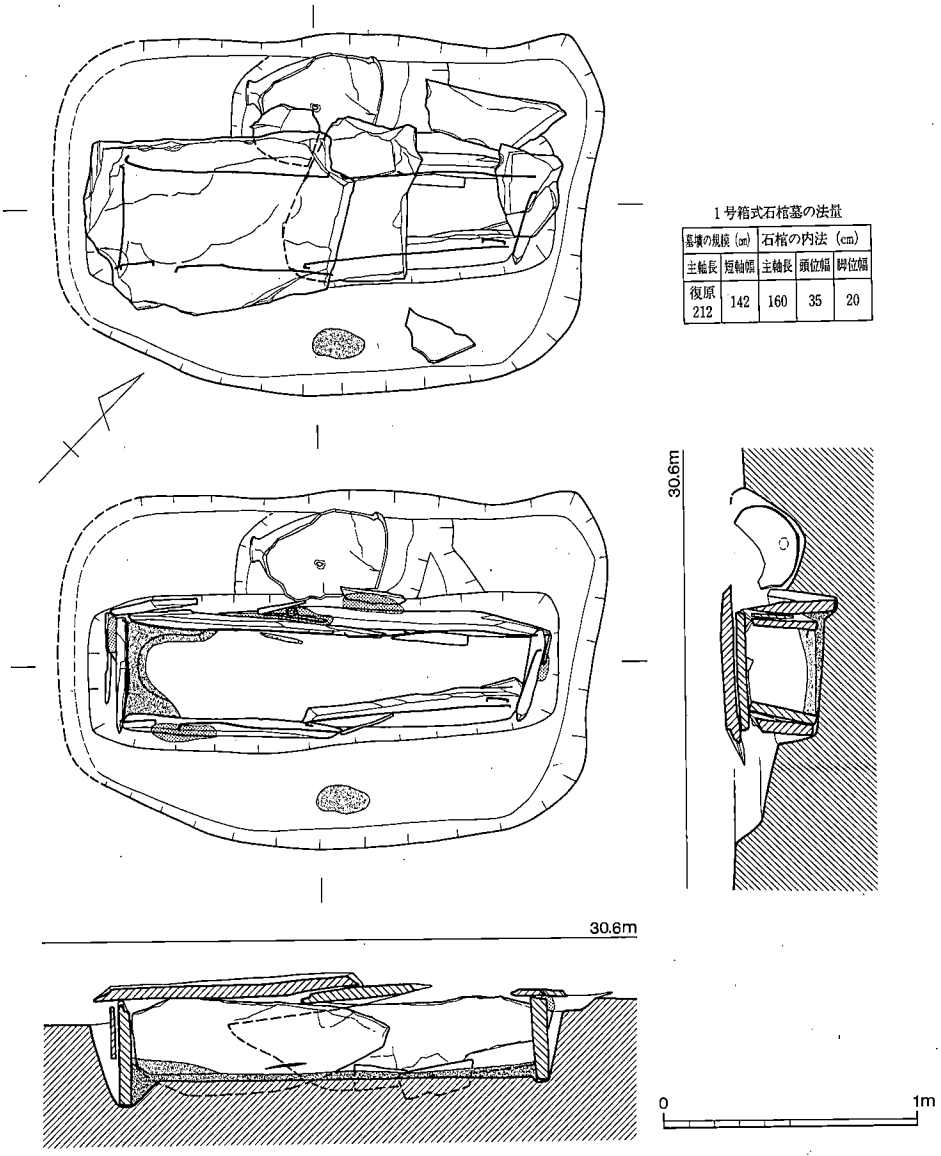
第46図　9号石蓋土壙墓実測図（1/20）



雪の中での作業風景

④ 箱式石棺墓

調査した範囲内での箱式石棺は，不明確なもの（箱式石棺墓と木棺墓の折衷様式，木棺墓の可能性を残している墓）を入れると8基を数えるが，はっきりとした成人用の箱式石棺墓は1号・3号・4号墓である。しかも，この墓は連綿と継承される墓地群の中では最も新しく，少なくとも弥生時代後期の範疇に入れられることから，この墓地群が弥生時代中期初頭頃から後期



1号箱式石棺墓の法量

墓壙の規模（cm）		石棺の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
復原 212	142	160	35	20

第47図　1号箱式石棺墓実測図（1/30）

までの長い期間営まれた墓地群であることが理解できる。しかし，この間途切れなく埋葬されたか否かは，弥生時代中期中頃から終末にかけての遺物がまったく出土していないため分からないが，後期の箱式石棺墓が古い墓を無視して埋葬しているものの，あらかじめ設定された墓域から逸脱しない範囲で埋葬され，墓地の設営に一定の規制を設けていたことを考えあわせると，この墓地群が後期までの同一集団墓であることが理解されよう。

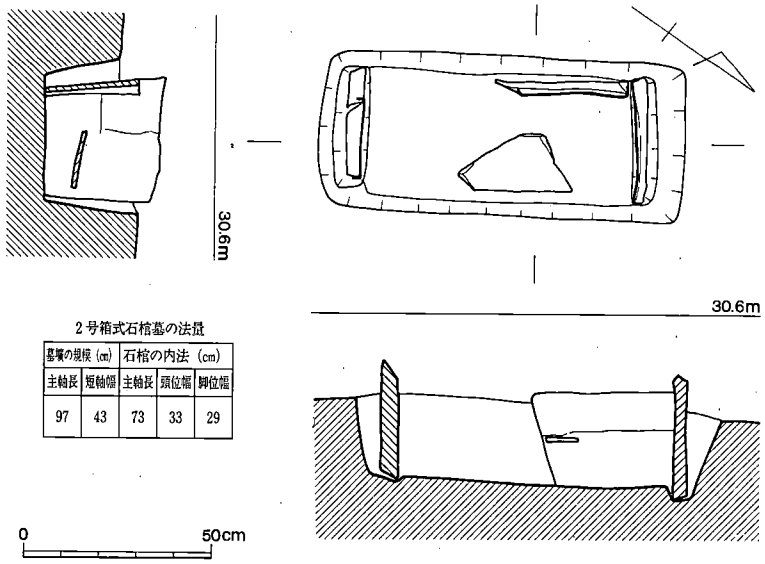
1号箱式石棺墓　(図版41－(1)・(2)・42－(1)，第47図)

墓域の南西側で検出した箱式石棺墓である。2列埋葬の列間に埋葬され，重複する16号・20号甕棺墓，12号・29号木棺墓，39号土壙墓より新しい。

墓壙は不整隅丸長方形を呈し，その規模を復原すると長さが2.12m，幅は1.42mを測る。石蓋は緑泥片岩の割り石を架構しているが，脚位側は新たに抜かれて遺存していない。現存では頭位側に大きめの板石を重ねあわせて被せている。蓋の一部には盃状穴様の窪みがあるがはっきりしない。

石棺の両側板は大きめの2枚の緑泥片岩を重ねあわせて使い細かい割り石で目詰めをし，所どころに黄灰色の粘土で目張りを施している。側板の掘り込みは北側と小口のみにみられ，他は石を置いて組み合わせた形である。床面は頭位側に粘土で「U」字状の枕をつくり，薄く暗褐色の砂混じりの土を敷き詰めていた。

石蓋の裏側と床面には朱の散布が認められ，特に粘土枕の部分が顕著であった。また，墓壙の南側には朱の集中した箇所があり，朱を棺外に副葬したのか鏡を副葬した29号木棺墓のものなのかははっきりしない。29号木棺墓のものであれば位置的には棺の中心部分に当たる。主軸方位はS45°Wを示し，棺内の遺物は，被葬者の左側から刀子が1点出土している。



2号箱式石棺墓の法量

墓壙の規模 (cm)		石棺の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
97	43	73	33	29

第48図　2号箱式石棺墓実測図 (1/20)

2号箱式石棺墓

(図版42－(2)，第48図)

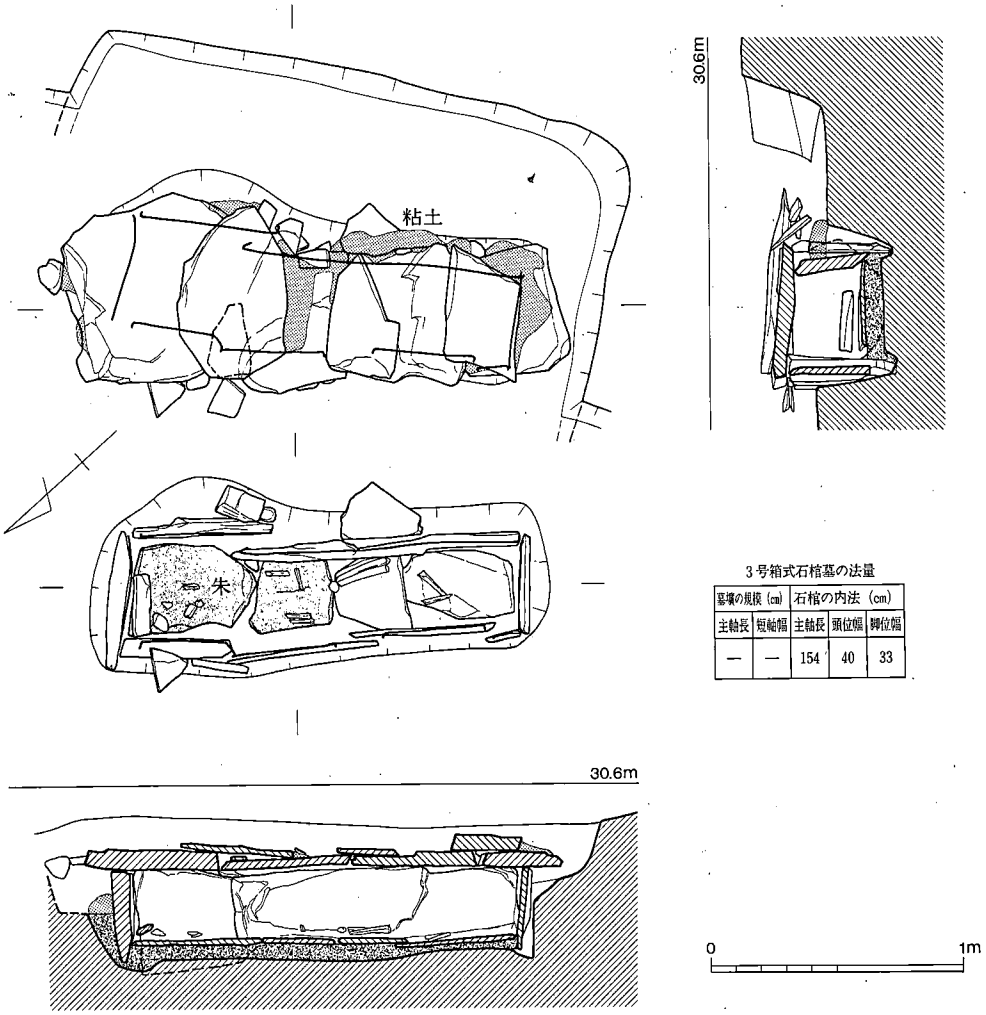
2列埋葬の北側列で検出した小児用の箱式石棺墓である。重なり

具合は17号・23号木棺墓がありどちらよりも新しい。傍には29号甕棺墓があり，この３基は当該箱式石棺墓に対して主軸を直交させ，近親関係としては29号甕棺墓の被葬者が推測される。

墓壙は長方形を呈し，両小口には緑泥片岩の薄い板石を立て，側板は両側に１枚づつ使っているが一方は倒れている。遺存しない部分は板を使っていたと考えられ，木棺との折衷形態であったと推察される。棺の内法が73cmを測り若年層を埋葬していたのであろう。頭位は側板に石を使っている方向と思われ，主軸方位はN35°Wを示す。棺内の出土遺物はない。

３号箱式石棺墓　（図版43－(1)・(2)・44－(1)，第49図）

１号石棺墓の南側に隣接するように埋葬された成人用の箱式石棺墓で，２列埋葬の列間で検



３号箱式石棺墓の法量

墓壙の規模（cm）		石棺の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
—	—	154	40	33

第49図　３号箱式石棺墓実測図（1/30）

出した。重複関係は12号・30号木棺墓と27号土壙墓があり，すべての墓より新しいが，30号木棺墓は大きく破壊されている。

墓壙から埋葬土壙にかけては2段掘りを呈し，墓壙の北側プランは切り合いが激しいため確認できなかった。おそらく長方形であろう。石蓋は緑泥片岩の割り石4枚を平蓋状に架構して頭位の箇所が最も大きな石を使い，その接する部分にやや小ぶりの板石を被せている。目張り粘土は蓋石の接する部分の所どころに被せている。

棺材も蓋と同じ緑泥片岩を用い一方は2枚，もう一方は4枚を使いその透き間を小さな板石で覆っているが総体的に雑な組み方である。床面には暗褐色土で客土した後，緑泥片岩の薄い割り石を4枚敷き，その上に被葬者を埋葬している。

頭位は北東側で，頭蓋骨の傍には細い板石を枕にしていた。頭位側からの2枚の敷石には朱を散布しており，棺内には頭骨の破片と左右の前腕骨片，左右の大腿骨，右脛骨などが遺存していたが，副葬遺物は出土していない。石棺の主軸方位はN42°Eを示す。

4号箱式石棺墓 （図版44－(2)・45－(1)，第50図）

墓域の調査区の南西側に位置する成人用の箱式石棺墓で，2列埋葬からは逸脱して西側に埋葬されている。この墓地の周辺を境に列埋葬の墓地群は，一部攪乱されているが一旦途切れるようである。

この空白区域を境に南東側の墓地群（32号土壙墓と8号祭祀土壙）は集団墓の中でも単位の異なる集団が設営した墓地群の可能性があり，この墓地群は圃場整備事業で調査した墓地群（乙王丸遺跡）に続くものと思われる。

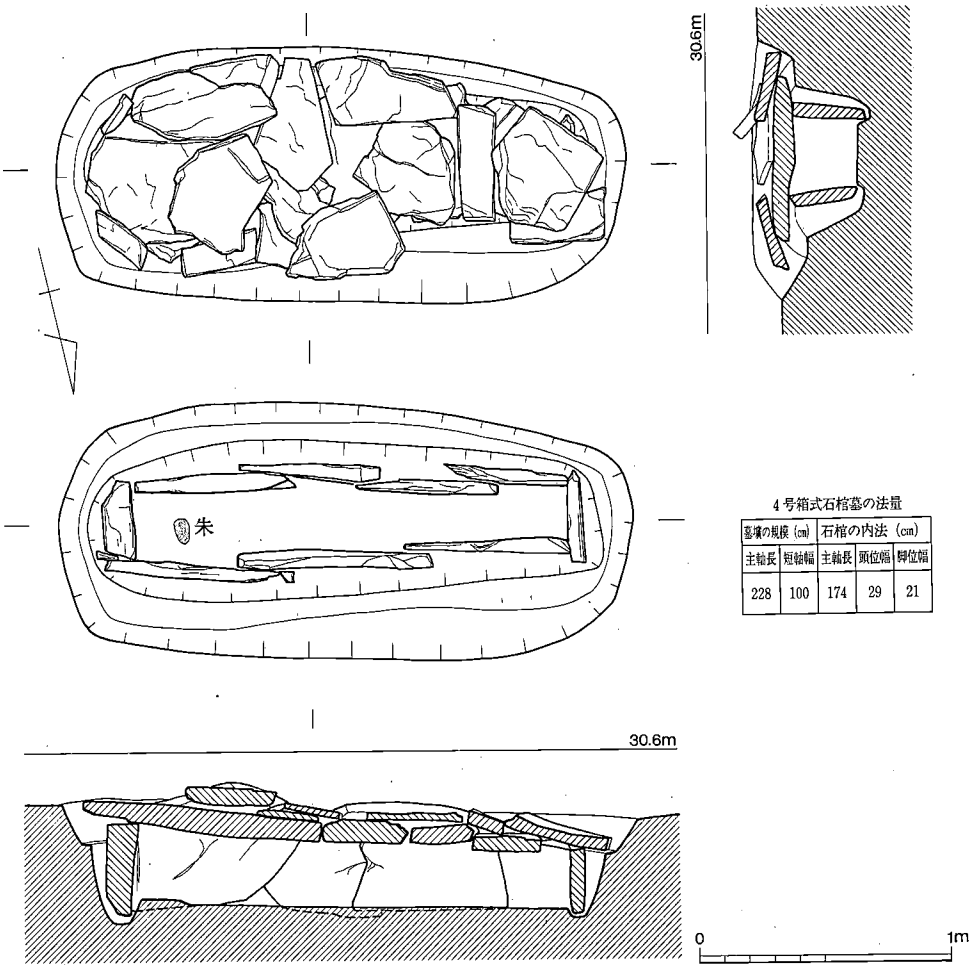
当該石棺墓は縦列埋葬の方向とは主軸を異にし，30号・34号土壙墓との切り合いがあり両者を破壊している。墓壙は楕円形に近い形状で，長さが2.28m，幅は狭く1.00mを測る。

蓋石は緑泥片岩5枚を平蓋状に架構し，その透き間を埋めるように無造作に板石を重ねている。棺材も同じ緑泥片岩を使い東側の小口石と側板との組み合わせが異なり，一方では挟み込み，他方では接するように組み合わせている。この近くの床面には低い高まりがあり，枕をつくり小さな範囲で朱の散布がみられたが，棺材などには朱の塗布は認められない。側壁には4枚と3枚の割り石を重ねるように組んでいる。

石棺の内法は，長さが1.74m，幅は頭位側で29cm，脚位では21cmと狭く組んでいる。主軸方位はS77°Eを示し，棺内からの出土遺物はない。

5号箱式石棺墓 （図版45－(2)，第51図）

墓域の南東側に位置する小児用の箱式石棺墓で，2列埋葬の列の間に埋葬している。この墓は28号木棺墓（成人用）と35号土壙墓（小児用）と完全に重なっており，血縁関係にあった両



4号箱式石棺墓の法量

墓壙の規模（cm）		石棺の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
228	100	174	29	21

第50図　4号箱式石棺墓実測図（1/30）

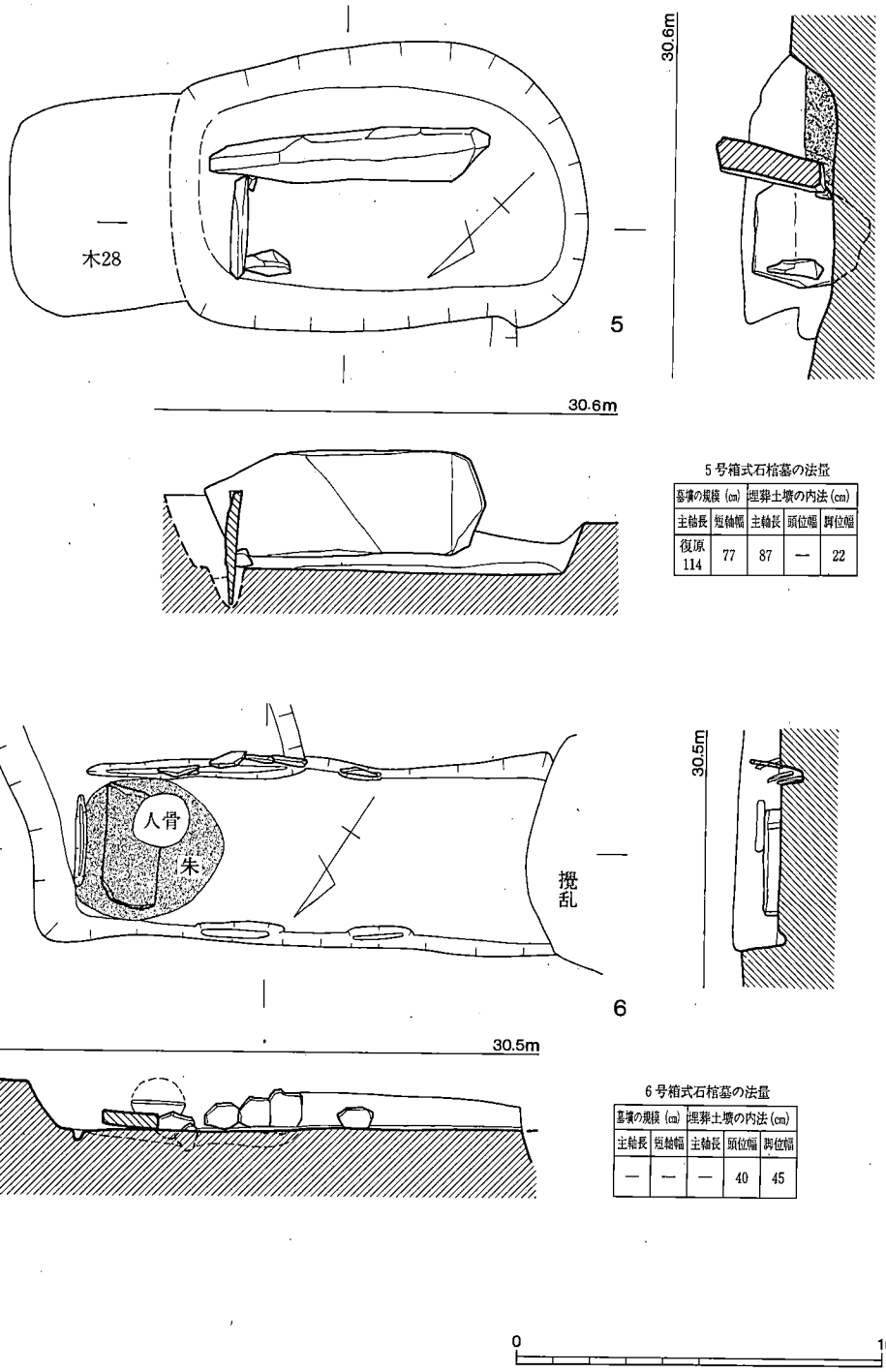
者の墓の上に埋葬している。この2基の墓と箱式石棺墓とは近親関係にはなく，むしろ6号石棺墓にそれを求めることができよう。

墓壙の形状は楕円形に近く，規模は表に示したとおりであるが，棺材は緑泥片岩を使い東側小口石を南側の側石が挟み込む形で組み合わせているが，他の棺材が見当たらないことから木棺との折衷様式であった可能性がある。

頭位は分からないが小口石の方向と考えると，主軸方位はN45°Eを示す。棺内からの出土遺物はない。

6号箱式石棺墓　（図版45－(2)，第51図）

5号石棺の西隣に埋葬された成人用の墓である。明確に箱式石棺墓とする根拠はないが，埋



5号箱式石棺墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
復原 114	77	87	—	22

6号箱式石棺墓の法量

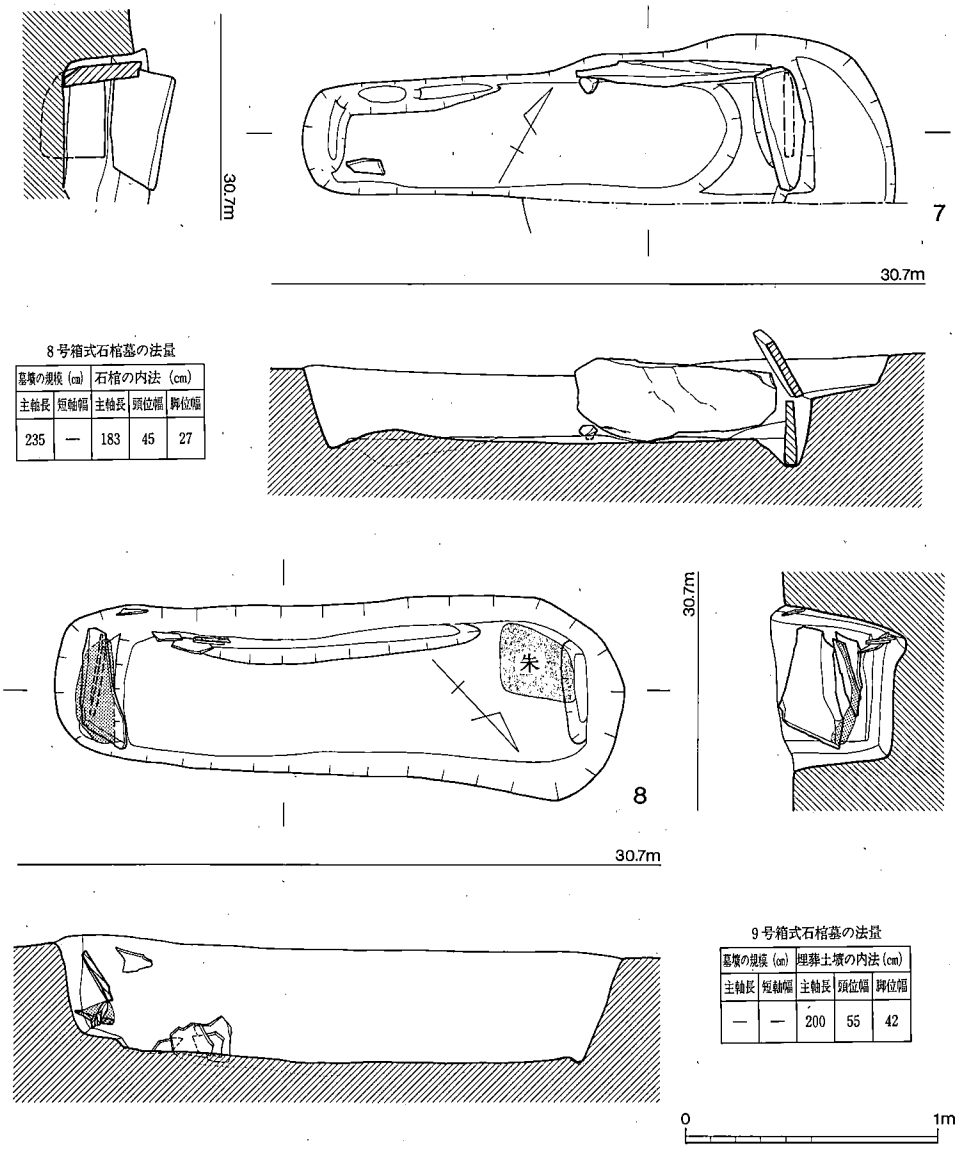
墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
—	—	—	40	45

0 1m

第51図　5号・6号箱式石棺墓実測図 (1/20)

葬土壙の所どころに棺材を立てたと思われる細い掘方がみられることから，箱式石棺墓と位置付けたが，遺存状態が悪く棺材が抜かれていると考えても残る棺材が小さすぎることから，木棺の棺材の裏込めに使った石材とも思え木棺墓の可能性も否定できない。

埋葬土壙の南西側小口部は攪乱されている。北東側の小口部には緑泥片岩の板石を枕とし，その周辺には朱の散布がみられた。枕の上には頭蓋骨の破片が遺存していたが，他の副葬遺物は出土していない。主軸方位はN57°Eを示す。



8号箱式石棺墓の法量

墓壙の規模（cm）		石棺の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
235	—	183	45	27

9号箱式石棺墓の法量

墓壙の規模（cm）		埋葬土壙の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
—	—	200	55	42

第52図　7号・8号箱式石棺墓実測図（1/30）

7号箱式石棺墓　(図版46－(1), 第52図)

墓地群の南西端の2列埋葬の線上に位置する墓で，ここを境に墓地群は一旦途切れ，新たに32号土壙墓がやや距離を置いて埋葬される。大きくはこの空白区域で墓地群が大別されるようである。

当該墓は南壁側が攪乱を受けしかも削平されているため，墓壙は一部を残すのみである。現存する墓壙から埋葬土壙は北側に片寄せて設置していると思われる。埋葬土壙は長方形で，その長さは2.02m，幅は50cm前後を測る。

土壙内の東側小口部には緑泥片岩の板石を立て，その上に同じような板石を載せている。上の板石はレベル的にも蓋とは合致しないことから，一種の標石的なものかも知れない。

箱式石棺墓と位置付けたのは小口石と北側壁の緑泥片岩の棺材，棺材の抜き跡と思える掘方などが残っているのを根拠にしたが，南側の壁沿いには棺材の痕跡はなく，石蓋の棺材がまったく発見されていないことから石棺と木棺の折衷様式の墓で木蓋で覆ったタイプのものかも知れない。このタイプの墓は，墓地群の中で箱式石棺墓と位置付けた墓とは時期的に古いタイプの墓と考えられ，2列埋葬の線上に埋葬されていることからも可能性が高い。

東側の床面は1段掘り下げられており，小口部の高まりが削り出しの枕であろう。主軸方位はN60°Eを示し，棺内の出土遺物はない。

8号箱式石棺墓　(図版46－(2), 第52図)

墓地群の南西側に位置する墓で，2列埋葬の北側列に直交する形で埋葬されている。墓の形態を北西側小口と南側側壁に棺材の掘方が残ることから箱式石棺墓とした。しかし，棺材が遺存しておらず抜かれたことも考えられるが，木棺墓の可能性も否定できない。当該墓は38号甕棺墓を切っており，墓地群と主軸を直交することから明らかに新しい墓地と考えられる。

墓壙はつくらず土壙に直接被葬者を埋葬している。墓壙の形態は楕円形に近く，その規模は長軸で2.25m，床面の長さは1.80m，頭位幅は55cm，脚位幅は42cmを測る。南側の壁沿いの掘方内には緑泥片岩の小片が立った状態で確認され，裏込めに使われたものであろう。

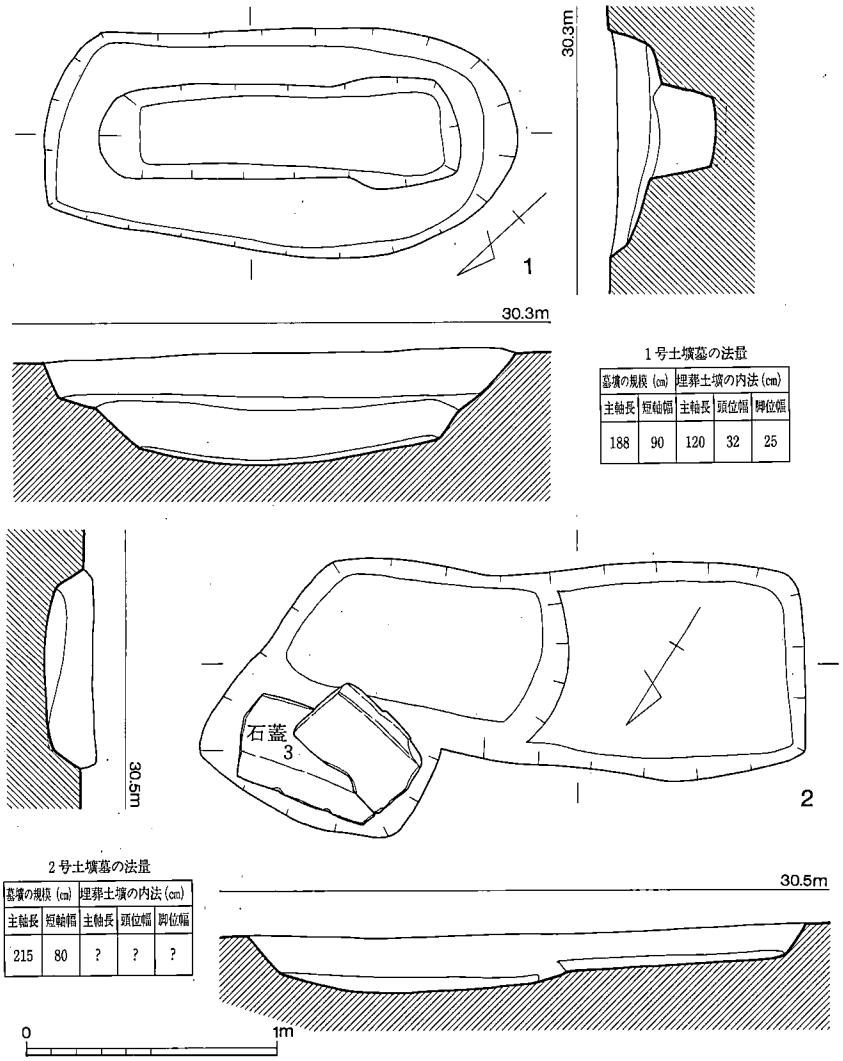
脚位側の小口部は低い2段掘りでテラスをなし，その上に灰黄色の粘土と緑泥片岩の板石が残っていたが，これも裏込めに使用したと考えられる。頭位側の床には朱が散布されていた。主軸方位はN46°Wを示し，出土遺物はない。

⑤ 土壙墓

1号土壙墓 （図版47－(1)，第53図）

墓地群の北東側に位置する成人用の土壙墓で，「Y」字状に分岐した列の間に埋葬されている。周囲の列埋葬は秩序よく整然と埋葬されており，中央から南西側の墓地群のように錯綜した状況はみられず，重複した墓は血縁的な関係にあったもののみと考えられ，成人用墓の切り合いがないことは北東側に墓地群の起点があったといえよう。

土壙墓の西隣には7号甕棺墓と6号石蓋土壙墓が重なり合った状態で埋葬され，位置関係から土壙墓との近親関係を彷彿させる。土壙墓の南西2.00mには1号木棺墓が埋葬されており，こ



1号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
188	90	120	32	25

2号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
215	80	?	?	?

第53図　1号・2号土壙墓，3号石蓋土壙墓実測図（1/30）

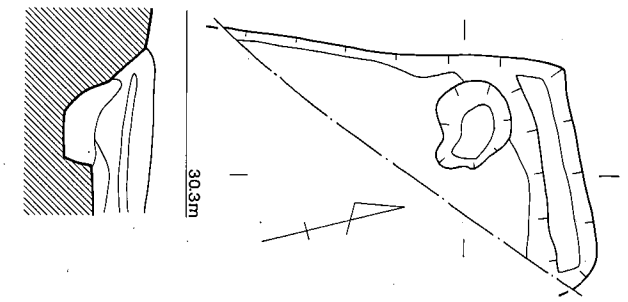
れに埋葬された被葬者も近親者の関係が推測される。

墓壙は2段掘りを呈し，形状は楕円形に近い。その規模は主軸が1.88m，幅は90cmを，埋葬土壙は隅丸長方形で長さが1.45mを測り，断面は舟底状である。内法は1.20m，頭位幅は32cm，脚位側は25cmで，やや身長の低い被葬者を埋葬していたと推測される。主軸方位はS42°Wを示し，棺内の出土遺物はない。

2号土壙墓　（図版37－(1)，第53図）

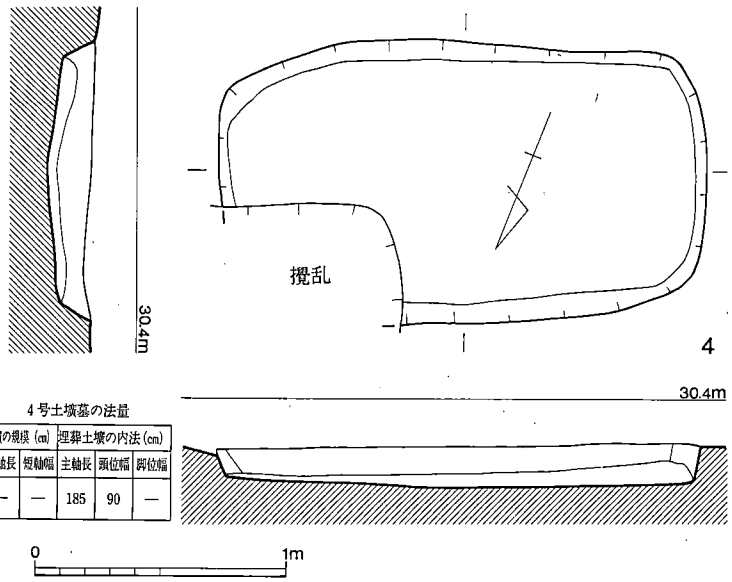
当該土壙墓も1号土壙墓の南側にあり列間に埋葬されている。3号石蓋土壙墓と重複しており，並列して埋葬されている15号木棺墓と近親関係にあったと想定される。また，16号木棺墓とも主軸を同一方向に向けており，傍に埋葬されていて同じような関係があった可能性が推測できよう。

墓壙は不整長方形の形状をなし，主軸方向に対して2段掘りであることから，小児墓を2基連続して埋葬したことも考えられる。そうなると，15号・16号木棺墓とは親子の関係が推察される。現況での墓壙は浅く，3号石蓋土壙墓の遺存状況から大した削平は受けていないと思われる。出土遺物などはない。



3号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
—	—	—	—	—



4号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
—	—	185	90	—

第54図　3号；4号土壙墓実測図（1/30）

3号土壙墓　(第54図)

14号木棺墓でも述べてようにこの墓地群は，北側の縦列埋葬の墓地群とは異なった集団の墓地群と考えられ，列は14号木棺墓を起点に南側に延びている。調査したのは木棺墓1基と土壙墓2基のみで，大半は調査区外である。木棺墓の北側には2号・3号祭祀土壙が配されているが，祭祀土壙の配置状況から判断すると3号祭祀土壙は北側の縦列埋葬墓地群に伴うもので，2号祭祀土壙が南側に延びる墓地群のものであろう。

調査した当該土壙墓は1/3ほどで，大半が調査区外にあり全容は分からない。北側の小口部分には狭いテラスを設けている。この部分の幅は90cmを測り，おそらく，成人用の土壙墓であろう。出土遺物などはない。

4号土壙墓　(図版47－(2)，第54図)

2列埋葬の南側列で検出した成人用の土壙墓である。重なる墓は9号土壙墓で，4号土壙墓が新しいが，9号と主軸を殆ど同じにしていることから何らかの関係があったのかも知れない。埋葬土壙の形態は胴張り隅丸長方形を呈する。北側の隅は新たな攪乱を受けている。

その規模は長さが1.85m，深さは15cmと浅く，通常の土壙墓としては理解に苦しむ所であるが，縦列埋葬の軸線上にあることから土壙墓と判断した。周囲の墓の状態からさほど削平を受けているとは考えにくく，むしろ被葬者を埋葬した段階で上部に大きく盛土を施したと考えることができよう。このような墓は7号・8号・20号土壙墓にも共通するものである。頭位は東西のどちらかか分からないが，周辺の墓から判断すると西側の可能性がある。主軸方位はN68°Wを示し，内部からの出土遺物はない。

5号土壙墓　(図版48－(1)，第55図)

4号土壙墓の南隣に埋葬された成人用にしてはやや小形の木蓋土壙墓である。2列埋葬の南側列からは逸脱した位置にあり，主軸も他の墓とは方向が異なるが，規制された墓域内には埋葬されている。

墓壙の形状は不整楕円形に近く，その規模は1.84m，幅は95cm前後を測る。埋葬土壙は隅丸長方形で，長さが1.32m，深さは55cm前後でわりと深い。内法は1.03mを測り，身長が1.00m以下の被葬者を埋葬したことになる。頭位は小口が広く掘られている東側であろう。主軸方位はS58°Eを示す。出土遺物はない。

6号土壙墓　(第55図)

前述したように縦列埋葬とは別のグループの墓地群で，調査区外の南側に延びることからこの墓地群が2列埋葬の形態を採るかは定かでないが，他の2基の墓と2号祭祀土壙の配置から

2列埋葬の形態であればこの6号墓が西側の列で15号木棺墓と3号土壙墓が東側の列になる。埋葬土壙の形状は長方形で南側の一部が未掘である。規模は1.96m，幅は55cm弱で，内法は長さが1.86mと長く，同じようなタイプの墓としては36号土壙墓がある。

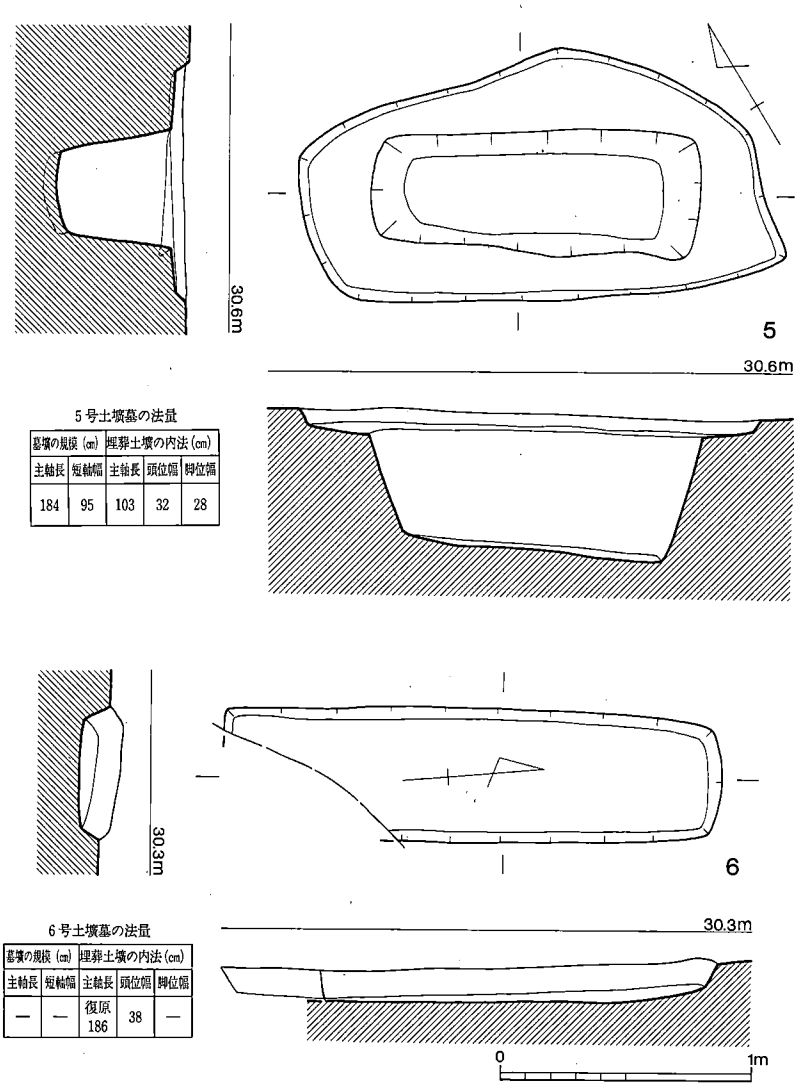
頭位がはっきりしないが，傍の墓の頭位から北側と推測される。主軸方位はN5°Eを示す。内部からの出土遺物はない。

5号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
184	95	103	32	28

6号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
—	—	復原 186	38	—

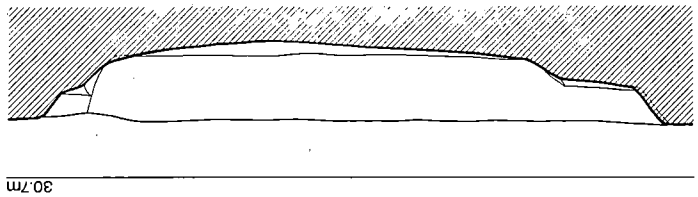


第55図　5号・6号土壙墓実測図 (1/30)

7号土壙墓　(図版48−(2)，第56図)

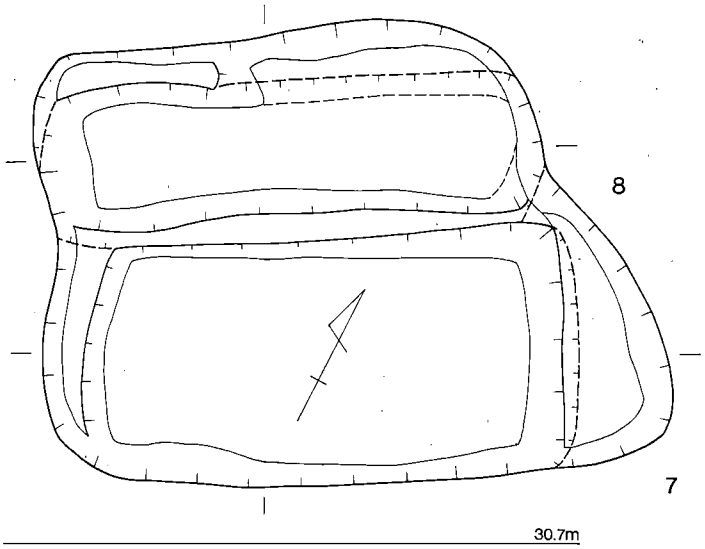
調査した墓域の中央よりやや南西側で墓地の密集した箇所の南側，2列埋葬の南列から若干逸脱した所に位置する土壙墓である。この土壙墓は列の外側にありながら，8号土壙墓と重複し，しかも並列して埋葬されている。このことは，当該墓地群の基本的な規制である2列埋葬の外側にあり，墓地群の規範からずれながらも，何度も述べてきたようにお互いの血縁関係に依拠した状況で埋葬されていると考えられる。このことは墓地群の拠点となる集団の中で遅れて埋葬され，埋葬場所が基本的な縦列埋葬の中に入る余地がなかったために依るもとも思われる。

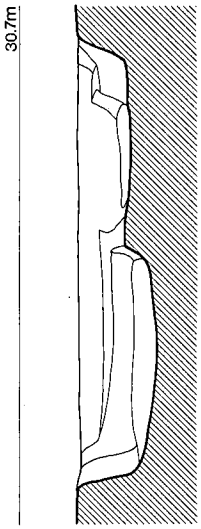
墓壙の検出状況でも両者は主軸を同じ方向に向け，墓そのものも並列こそすれお互いに重なり合っておらず，同時併存か若干の時間差を置いて埋葬されたと推測される。この土壙墓は，



7号土壙墓の法量

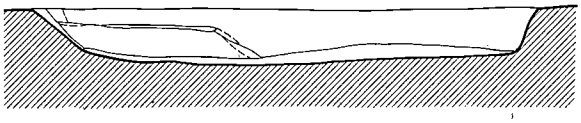
墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
248	98	168	77	73

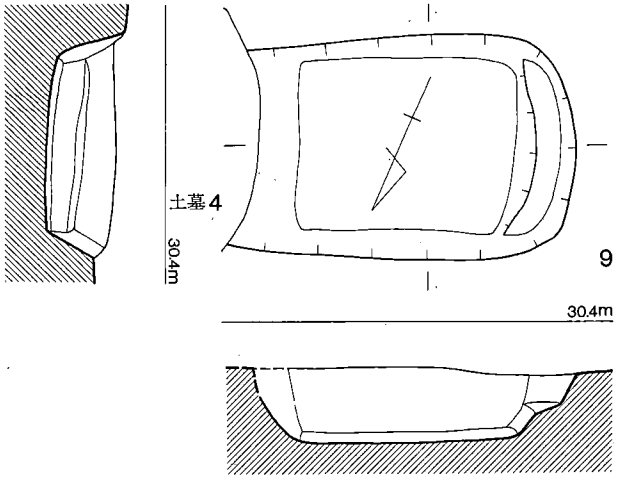




8号土壙墓の法量

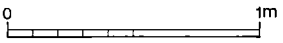
墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
220	70	170	—	40?





9号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
—	90	86	70?	68?



第56図　7号～9号土壙墓実測図 (1/30)

不整長方形のプランをなし，両小口は２段掘りで小さなテラスをつくる。埋葬土壙は長方形で，その規模は1.90m，幅は98cm，内法は1.68m，幅は東側の幅が若干広いが，８号土壙墓の頭位と関連づけると西側と考えるのが妥当ようである。床面は舟底状を呈する。主軸方位はN61°Eを示す。出土遺物はない。

８号土壙墓　（図版48－(2)，第56図）

７号土壙墓と並列して埋葬された土壙墓で，７号土壙墓の項で述べたので詳細には説明しないが，７号土壙墓より横幅の規模も小さく成人墓であることとから相互の近親的な関係が想定される。

埋葬土壙の規模は長さが2.20，幅は70cm前後で，北側の壁沿いは２段掘りにし，内法は1.70mを測る。主軸方位も７号土壙墓と同じで，出土遺物はない。

９号土壙墓　（図版47－(2)，第56図）

２列埋葬の南側列に埋葬された小児用の土壙墓で，４号土壙墓と切り合い関係にあり，４号よりも古い。西側の小口には小さなテラスを設けている。詳細は定かでなく，出土遺物もない。

10号土壙墓　（図版23－(1)，第57図）

墓域のほぼ中央付近に位置する成人用の土壙墓で，２列埋葬の行間に埋葬されている。５号木棺墓と25号木棺墓との切り合いがあり，５号木棺墓より古く25号木棺墓より新しいか，または同時併存の可能性もある。５号木棺墓で約1/2が破壊されていることから，両者の血縁関係はなく，むしろ北西側に並列して埋葬している13号木棺墓（成人墓）との近親関係が推測される。

埋葬土壙の形態は長方形で，内法は1.48mを測り，深さは15cm前後と浅いことから前述したように被葬者を埋葬した後に盛土を施したことが考えられる。頭位ははっきりせず，出土遺物もない。

11号土壙墓　（図版49－(1)，第57図）

墓域の南西側に位置する若年層を埋葬した土壙墓である。２列埋葬の北側列の線上にあり，この北東側の17号木棺墓との間に空白部分がある。この空白部は７号祭祀土壙墓が掘られていたことで墓が掘れなかったことによるものか，または，南側列の７号木棺墓と40号土壙墓との間の空白部とでひとつのグルーピングが可能なのかのどちらかであろう。

この土壙墓は他の墓との重複はなく，並行して17号甕棺墓が掘られておりこれとの関係が考

えられる。

墓壙の形状は隅丸長方形で2段掘りである。埋葬墓壙は楕円形に近く，内法が80cmと短い。両小口の幅は殆ど変わらず，頭位がはっきりしないが南西側が若干広く，こちら側を頭位とすると，主軸方位はS37°Wを示す。出土遺物はない。

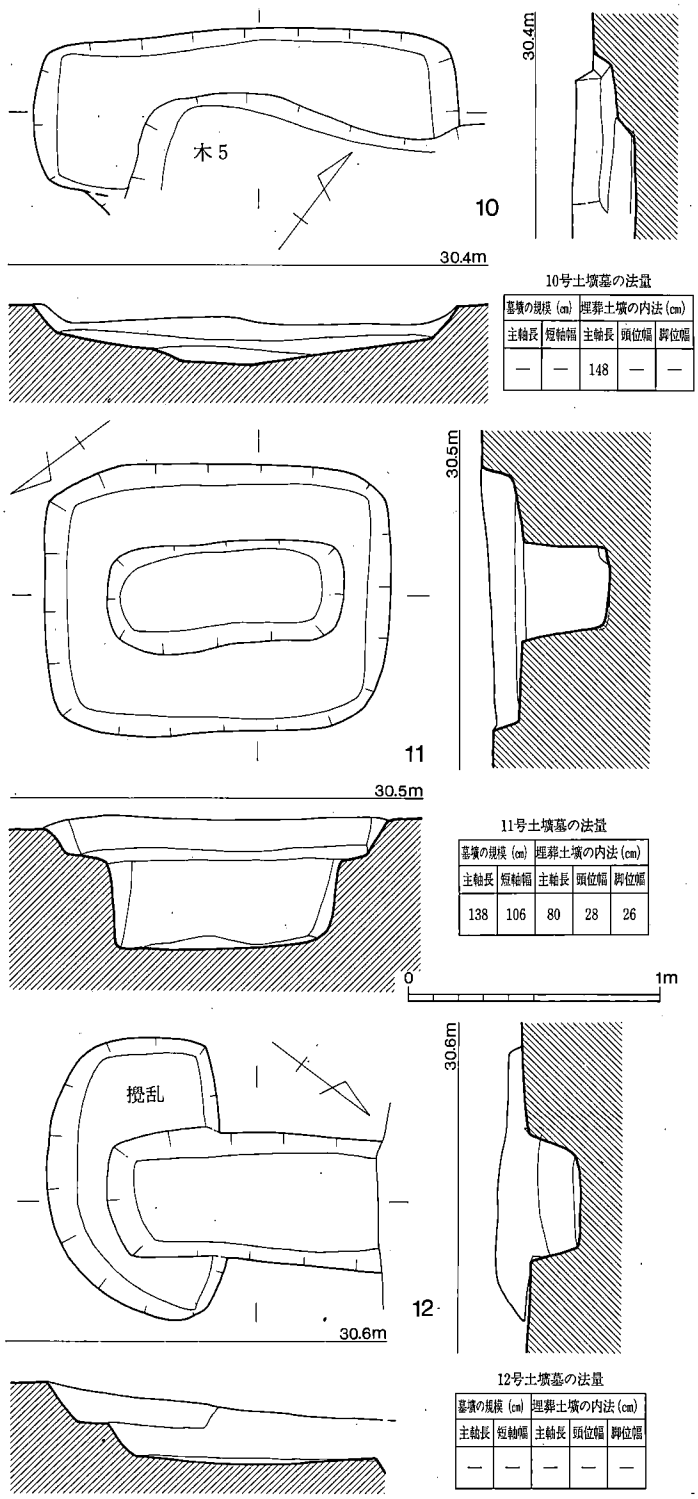
12号土壙墓　(図版24－(1), 第57図)

南側列の縦列埋葬方向に対して直交する状態で掘られた成人用の土壙墓であるが，7号・31号木棺墓との切り合いがあり，31号との新旧関係ははっきりしないが，7号木棺墓より古い。

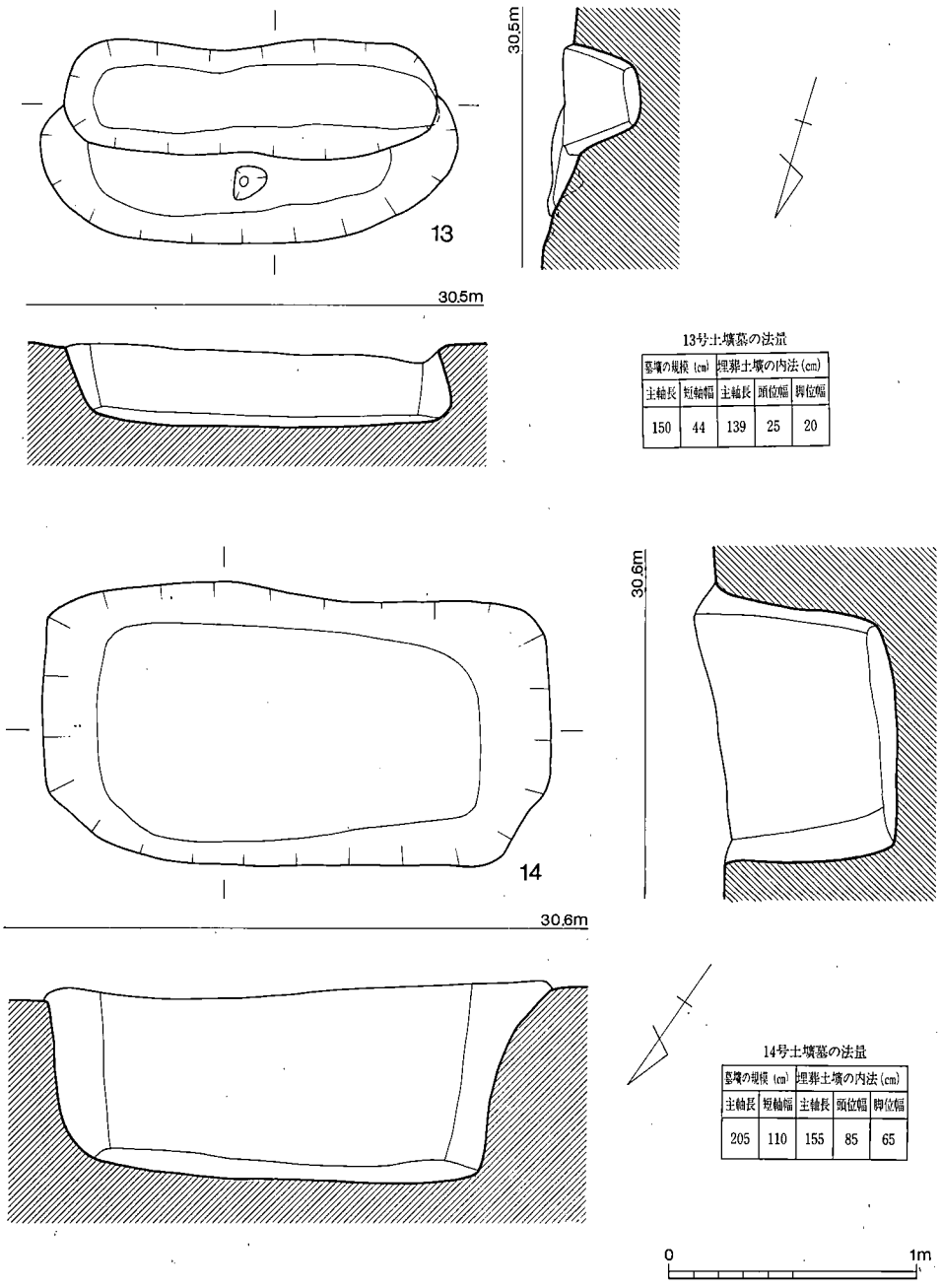
墓壙は微かに形状が残っているが，南側は攪乱を受けている。埋葬土壙も1/3が破壊され，出土遺物もない。

13号土壙墓　(図版49－(2), 第58図)

縦列埋葬の線上から若干逸脱して南側に埋葬された成人用の土壙墓で，主軸もやや西を向いている。埋葬土壙は楕円形を呈し，北側は浅い土壙様の遺構と重なっている。



第57図　10号～12号土壙墓実測図 (1/30)



13号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
150	44	139	25	20

14号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
205	110	155	85	65

第58図　13号～14号土壙墓実測図（1/30）

埋葬土壙の内法は1.39mを測り，身長のそう高くない被葬者を埋葬したのであろう。西側の小口部は若干抉り込まれ，こちらが脚位と考えられる。主軸方位はN73°Eを示し，土壙内からの出土遺物はない。

14号土壙墓　（図版50－(1)，第58図）

調査した墓域の中央付近，埋葬列が「Y」字形に分岐する部分に位置する成人用の土壙墓である。2列埋葬の行間に埋葬され，4基の甕棺墓と1基の土壙墓との重複のある10号木棺墓と重なっており，この土壙墓が新しいが主軸を並行して掘られていることから10号木棺墓の被葬者との血縁関係が想定される。もしかすれば夫婦の関係にあったのかも知れない。

埋葬土壙は不整隅丸長方形の形状をなし，長さは2.05m，幅は1.10m，深さは75cmと深い。内法は長さが1.55mで成人としてはやや身長の低い被葬者を埋葬したと思われる。東側の小口部の幅が広いことで頭位は東側であったと考えられ，10号木棺墓と同じ方向である。主軸方位はN56°Eを示す。出土遺物はない。

15号土壙墓　（第59図）

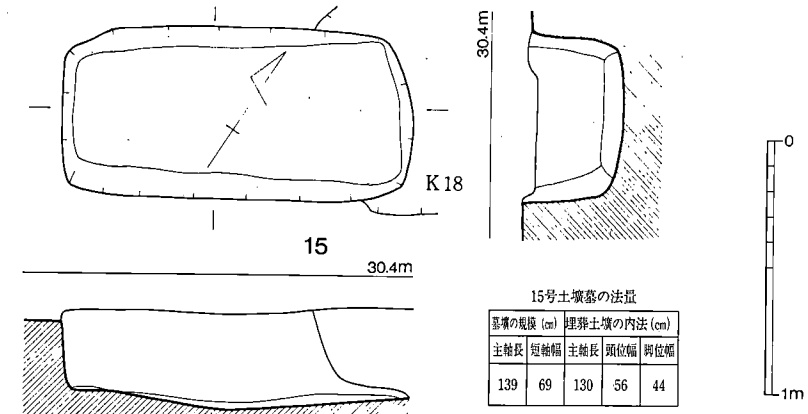
埋葬列が「Y」字形に分岐する場所の列間に位置する若年層あるいは身長の低い被葬者を埋葬した土壙墓である。この土壙墓の周辺はわりとゆとりのある埋葬をしており，重複する墓は18号小児用甕棺墓のみで，土壙墓の方が新しい。血縁的な関係を求めようとすれば南東側に並列する22号木棺墓が当てられよう。

埋葬土壙は長方形を呈し，その規模は1.39m，幅は69cmを測る。内法の長さは1.30mで，東側の小口が幅広で頭位は東側であろう。主軸方位はN56°Eを示し，出土遺物はない。

16号土壙墓　（図版50－(2)，第60図）

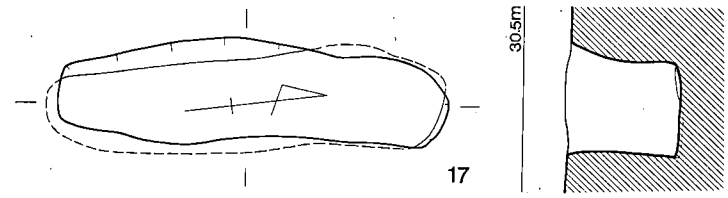
墓域の北東側で南側列のほぼ線上にある土壙墓で，内法から若年層を埋葬したと思われる。この墓は縦列埋葬方向に対して主軸を直交させている。墓の両側には9号・16号木棺墓を埋葬しているが，この間隔が成人墓が埋葬できるにも拘らず当該土壙墓のみで，この南側には1号石蓋土壙墓が列線上からずれた形で配されている。北列の延長線上にもやや広い空白部分があり，故意に間隔を開けているかのように看取できる。この空白部は，集団墓の中でも異なったグループの境目とも考えられる。1号石蓋土壙墓は，本来9号・16号木棺墓の間に埋葬されるはずが故意にずらしたことも推測される。

埋葬土壙は長方形で，長さが97cm，幅は43cmを測る。南東側の小口部には緑泥片岩の割り石を立てているが床面から15cm前後上層にあり，通常使われる小口部の板石とは使い方が違っている。おそらく，頭位側に標石として立てたと推測される。主軸方位はS29°Eを示し，出土遺物



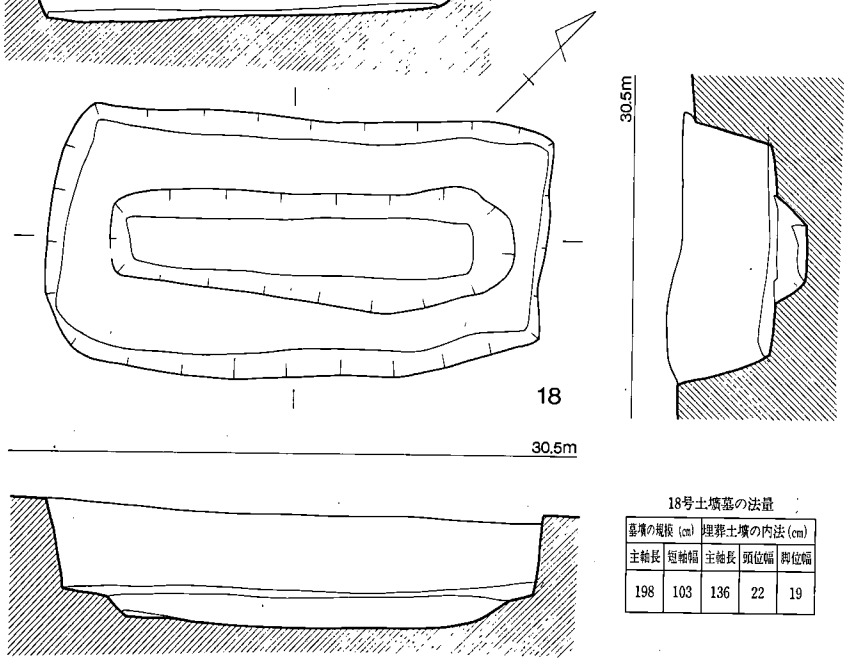
15号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
139	69	130	56	44



17号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
155	39	157	35	26



18号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
198	103	136	22	19

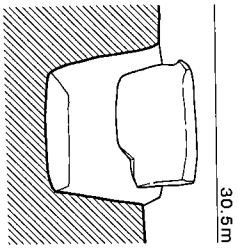
第59図　15号・17号・18号土壙墓実測図 (1/30)

はない。

17号土壙墓 （図版51－(1)，第59図）

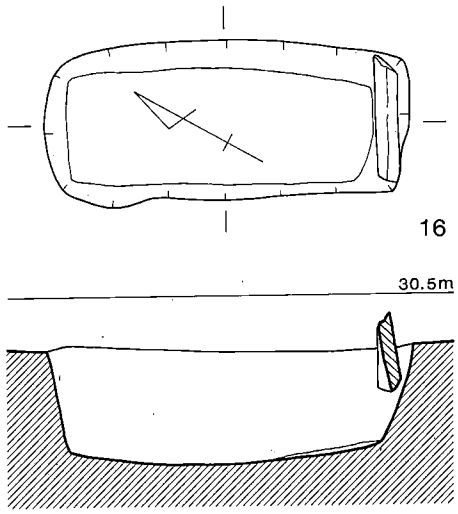
墓地群の北東端で検出した成人用の土壙墓で，２列埋葬の線上からは完全に逸脱した形で埋葬されている。墓の主軸も南北に向いており，14号木棺墓のグループと同じように別グループの列埋葬の存在が考えられるが，調査区の端に位置するため定かでない。別グループの列埋葬が存在したとしても21－Ｄ地点では確認されていないことから長い列埋葬ではなかろう。

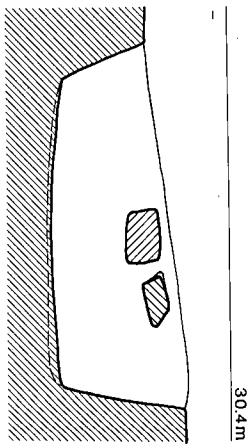
埋葬土壙は楕円形を呈し，西側の壁の一部を除いてオーバーハング気味に掘られ，特に南側の小口壁は10cmほど抉っている。この方向が脚位となろう。主軸方位はＮ７°Ｅを示しほぼ南北方向に埋葬している。出土遺物はない。



16号土壙墓の法量

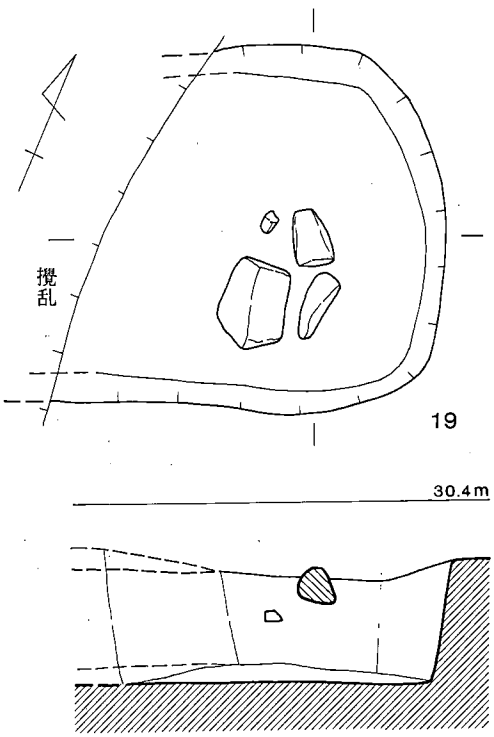
墓壙の規模（cm）		埋葬土壙の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
97	43	82	28	29





19号土壙墓の法量

墓壙の規模（cm）		埋葬土壙の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
—	—	—?	80?	—



第60図　16号・19号土壙墓実測図（1/20）

18号土壙墓　(図版51－(2), 第59図)

墓地群の北東端に埋葬された成人用の土壙墓で，南側の列埋葬のから若干ずれている。隣接した北側には28号甕棺墓と19号土壙墓が埋葬されている。土壙墓の南側には27号小児用甕棺墓があり，親子の関係を彷彿させる。

墓壙の形状は不整長方形で，長さは1.98m，幅は1.03mを測り，埋葬土壙までは2段掘りを呈している。図示したように墓壙から埋葬土壙までは深いが，本来はこれより上層から埋葬土壙が掘り込まれていたと思われる。土壙の形態は隅丸長方形を呈し，断面が舟底状を呈する。内法は長さが1.36m，両小口は22cmと19cmと狭く若干幅広の北東側が頭位であろう。主軸方位はN46°Eを示す。土壙内の出土遺物はない。

19号土壙墓　(図版16－(1), 第60図)

墓域調査区の北東端で検出した成人用の土壙墓であるが，南北に走る新しい排水暗渠で半分以上が攪乱され破壊を受けている。埋葬場所は南側の列線上にあり，他の墓とは重複していない。頭位は分からないが隣接する28号甕棺墓が北東側であることから，同じ方向と考えるならばN67°Eを示す。出土遺物はない。

20号土壙墓　(第61図)

墓域調査区の南側に位置する成人用と思われる土壙墓である。この土壙墓は主軸を南北にとり列埋葬から完全に逸脱した箇所に埋葬され，他の墓との切り合いはない。

埋葬土壙は楕円形を呈し，規模は主軸が1.55m，幅は67cmを測り，内法が1.42mであまり身長の高くない被葬者を埋葬したと思われる。床面には新しいピットが掘られている。出土遺物はない。

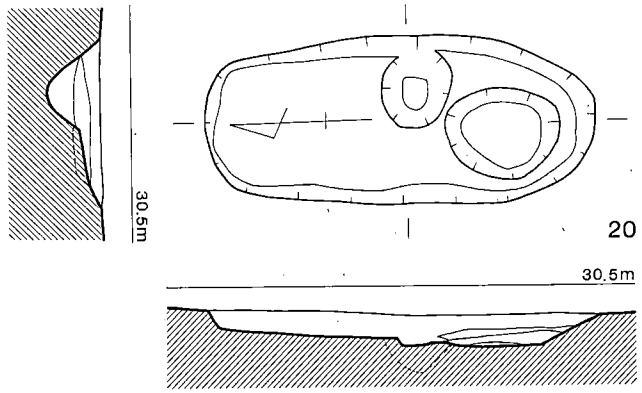
21号土壙墓　(図版52－(1), 第62図)

調査した墓地群のほぼ中央付近に位置する小児用の土壙墓である。2列埋葬の行間に埋葬され，33号木棺墓（成人墓）と重なり当該土壙墓が新しい。木棺墓との近親関係があるのかも知れないがはっきりしない。

墓壙は隅丸長方形を呈し，その大きさは1.06m×64cmを測り，内法は43cmで生まれたばかりの乳児を埋葬したと思われる。頭位ははっきりしないが東側であろう。出土遺物はない。

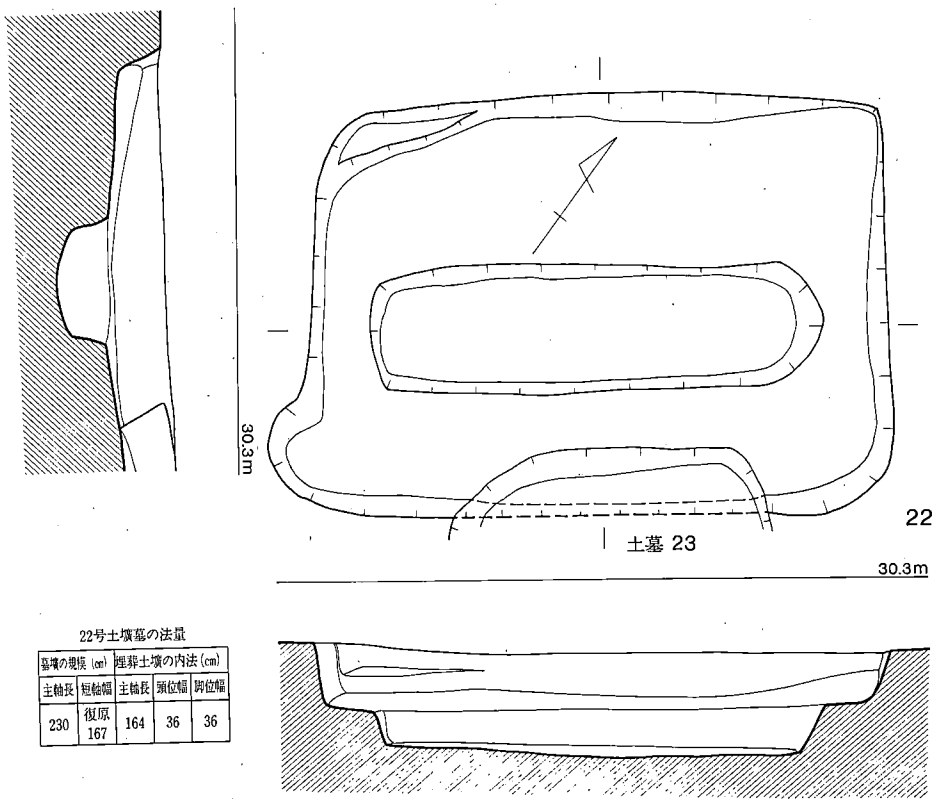
22号土壙墓　(図版52－(1), 第61図)

調査した墓地群の中央付近に埋葬された成人用の土壙墓で，2列埋葬の北側の列上に位置する。23号の小児用土壙墓との切り合いがあり，23号が新しい。列埋葬の線上にのる32号甕棺墓



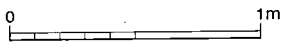
20号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
155	67	142	48	46

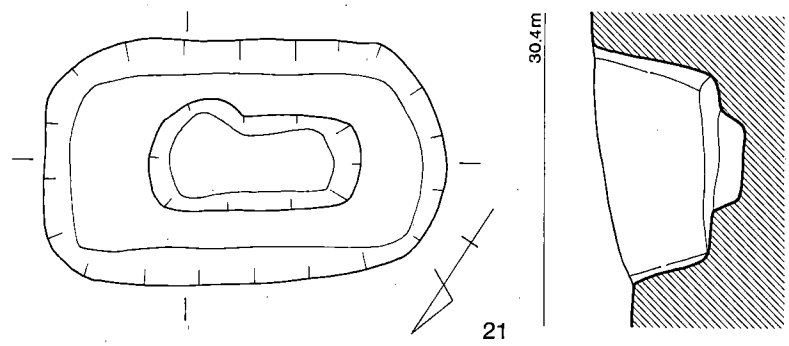


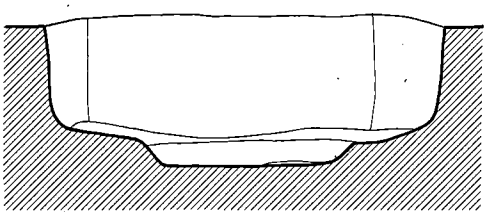
22号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
230	復原 167	164	36	36



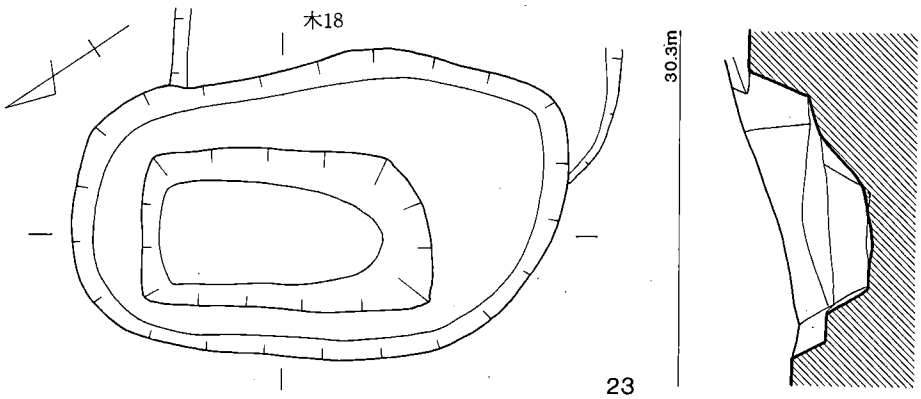
第61図　20号・22号土壙墓実測図 (1/30)





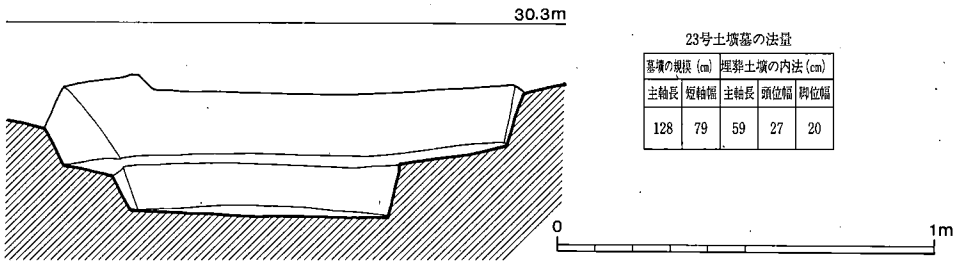
21号土壙墓の法量

墓壙の規模（cm）		埋葬土壙の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
106	64	43	復原 18	15



23号土壙墓の法量

墓壙の規模（cm）		埋葬土壙の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
128	79	59	27	20



第62図　21号・23号土壙墓実測図（1/20）

との間には2.00mほどの空白部があり，これと相対峙する南側の列では24号土壙墓と８号木棺墓の間の空白部とで一線が引かれるとも考えられ，小単位でのグループの違いがあるように看取できる。

墓壙は隅丸長方形で，その規模は主軸の長さが2.30m，幅は復原すると1.67mとなろう。埋葬土壙の形状は楕円形に近く，内法は長さが1.64mで，両小口はほぼ同じで頭位がはっきりしない。周囲の墓と床面の高低差からみると西側にように思える。西側であれば主軸方位はS53°Wを示す。出土遺物はない。

23号土壙墓　（図版52－(1)，第62図）

22号土壙墓（成人墓）と18号木棺墓（若年層墓）との重なりがある小児用の土壙墓で，どちらよりも新しい。22号土壙墓と血縁関係にあったのかも知れない。

墓壙は不整形な楕円で，埋葬土壙までを２段掘りとする。墓壙の規模は長さが1.28m，幅は79cm前後を測る。埋葬土壙は隅丸長方形を呈し，内法が59cmで生まれてそう月日の経ない乳児を埋葬したのであろう。北東側の小口部が幅広で頭位と思われる。主軸方位はN34°Eを示し出土遺物はない。

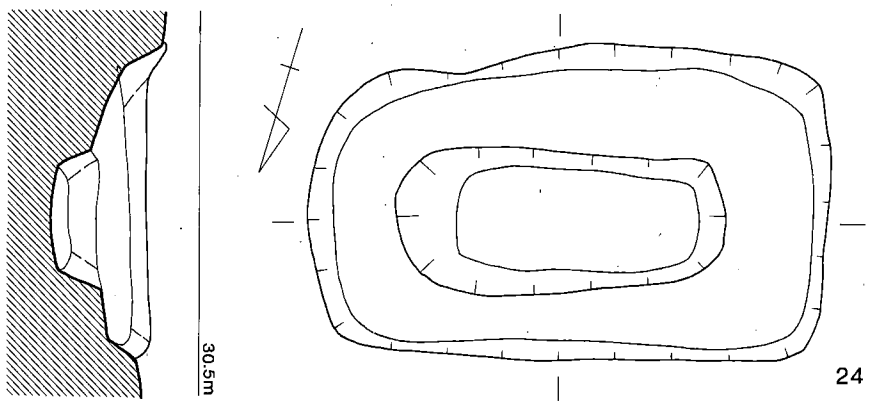
24号土壙墓　（図版50－(1)，第63図）

調査した墓域のほぼ中央付近に埋葬された子供用の土壙墓である。南列の線上に位置し，他の墓との切り合いはない。この土壙墓は14号土壙墓と３号木棺墓とに挟まれた形で，血縁的な繋がりを求めるならば，14号土壙墓が10号木棺墓と関係があると推測され，当該墓はむしろ３号木棺墓との繋がりが推測される。また，この土壙墓の北東側と相対峙する北列には若干の空白部があり，小グループの境目とも見てとれる。

土壙は隅丸長方形を呈し，埋葬土壙までは２段掘りである。埋葬土壙の内法は，長さが64cmを測り，若年層を埋葬したのであろう。小口は東側が幅広に掘られ頭位と考えられる。主軸方位はN73°Eを示す。出土遺物はない。

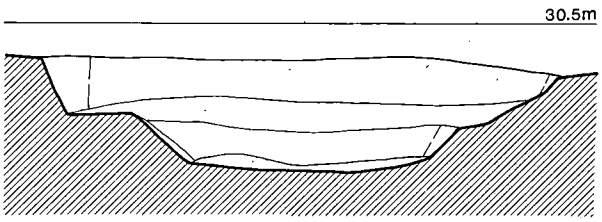
25号土壙墓　（図版19－(2)，第63図）

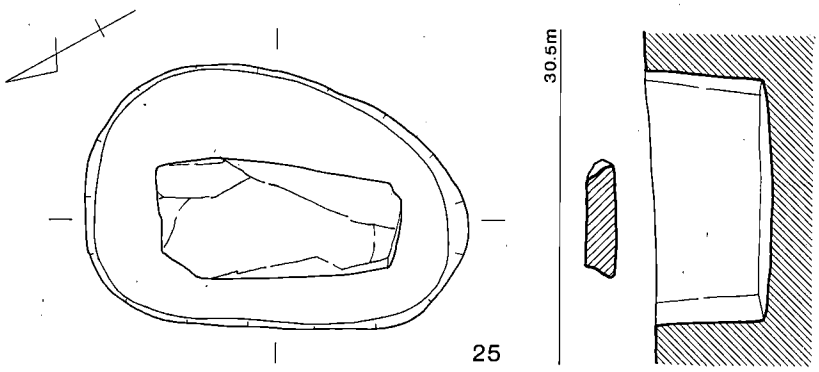
縦列埋葬が「Y」字形に分岐する行間で検出した若年層を埋葬したと思われる土壙墓で，北東側に並列して埋葬された36号甕棺墓と同じように緑泥片岩の板石を墓標としている。この２基の墓は近親的な繋がりが想定されるが，どちらも子供の墓で，近くに成人用の墓が埋葬されていない。この墓の北側はやや広い間隔があり集団墓内での小単位を示しているのかも知れない。埋葬土壙は楕円形で，頭位がはっきりしないが，36号甕棺墓と同じであれば南西側であろう。出土遺物はない。

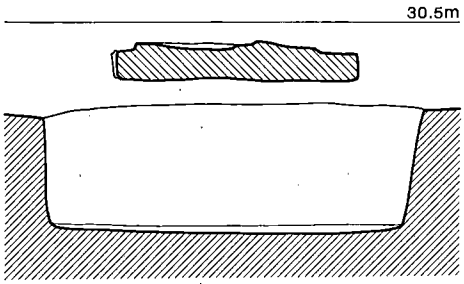


24号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
138	82	64	25	22







25号土壙墓の法量

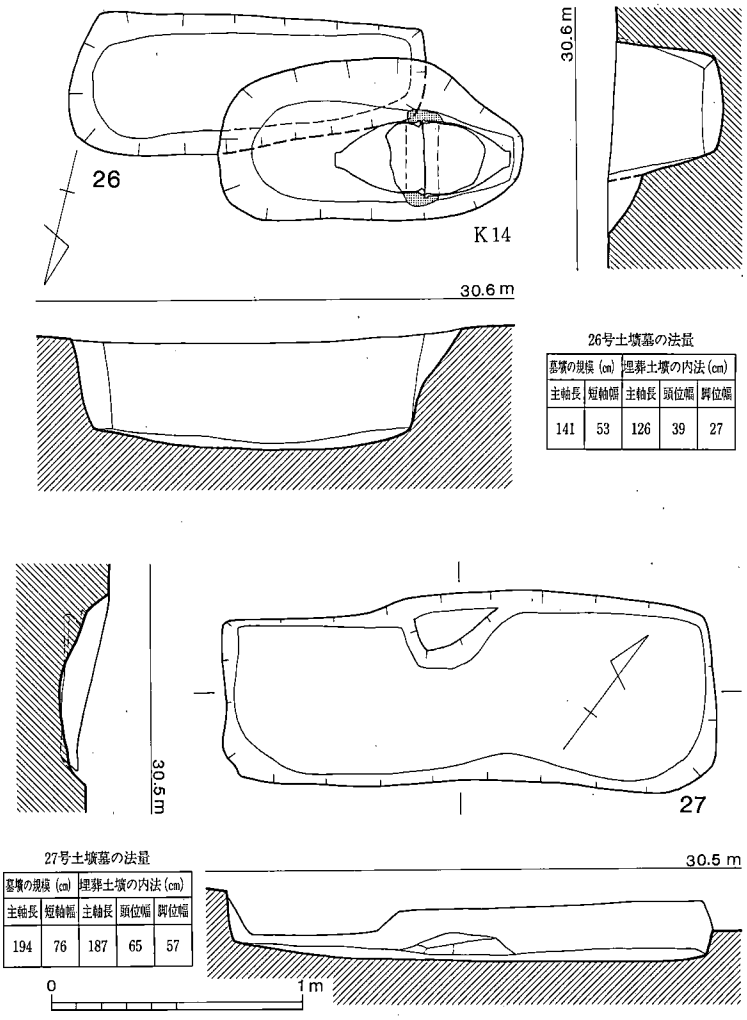
墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
101	68	93	63	47

第63図　24号・25号土壙墓実測図（1/20）

26号土壙墓　（図 版11－(2)，第64図）

墓域の南西側の縦列埋葬の南側にはみ出した成人を埋葬したと思われる土壙墓である。14号小児用甕棺墓との重複があり甕棺墓より古い。両者は主軸を並行に埋葬し，親子の関係にあったと想定される。

埋葬土壙は隅丸長方形を呈し，内法が1.26mを測ることから身長のそう高くない被葬者を埋葬したのであろう。東側の小口が幅広くしかも，床面より高くつくっており頭位と考えられるが，甕棺墓は時期的には下甕を頭位とすると思われるので逆に埋葬していることになる。主軸方位はN77°Eを示し，中からの出土遺物はない。



26号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
141	53	126	39	27

27号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
194	76	187	65	57

第64図　26号・27号土壙墓実測図（1/30）

27号土壙墓　（第64図）

墓域調査区の南西側の２列埋葬の行間で検出した成人用の土壙墓である。この周辺は墓地群がかなり錯綜しており，墓どうしの重なり具合は３号箱式石棺墓と30号木棺墓，24号甕棺墓とがあり，すべての墓より古い。甕棺墓は小児用（生まれて間もない乳児と思われる）で，埋葬土壙内に埋められていることから親子の関係にあったことが想像される。

土壙の形状は長方形であるが，遺存状態は良くない。削平を受けていることも考えられるが他にも浅い土壙墓があり，本来浅く掘り盛土を施していたことが考えられる。小口部は東側が幅広で，頭位方向であったと推測される。主軸方位はN54°Eを示し，出土遺物はない。

28号土壙墓　(図版52－(2), 第65図)

調査した墓域のほぼ中央付近，２列埋葬の行間に位置する土壙墓で，埋葬土壙の内法から青年を埋葬したと考えられる。周辺の墓の重複関係は次のとおりである。

↗　10号木棺墓

37号甕棺墓→　28号土壙墓→　10号木棺墓，９号石蓋土壙墓　←４号石蓋土壙墓

↘　９号石蓋土壙墓，　　↖８号甕棺墓

このような重なり具合から当該土壙墓は10号木棺墓との近親関係が想定される。

また，土壙墓の検出面から約30cm上層で３個の緑泥片岩の割り石が並べられて標石としている。本来は上層から掘り込んでいたのであろう。

埋葬土壙は楕円形に近い形状を呈し，床面は長方形である。土壙の規模は長さが1.24m，幅は52cm，内法は95cmを測り，両小口幅が同じで頭位がはっきりしない。出土遺物はない。

29号土壙墓　(図版25－(2), 第65図)

調査した墓地群の南西側に当たり，２列埋葬の行間に埋葬された小児用の土壙墓である。11号木棺墓と並列して埋葬されており，墓壙を共有した形で検出されたが，木棺墓を埋葬した後に傍に埋葬したと考えられる。当然親子的な関係にあったと推測される。

墓壙の形状は長方形で，埋葬土壙は楕円形に近い。墓壙の長さが1.46m，埋葬土壙の長さは85cmを測り，埋葬土壙に対して墓壙が大きすぎる。頭位は11号木棺墓が北東に対して南西側が若干幅広に掘られていることから，逆向きに埋葬したことが考えられるがはっきりしない。出土遺物はない。

30号土壙墓　(図版44－(2), 第66図)

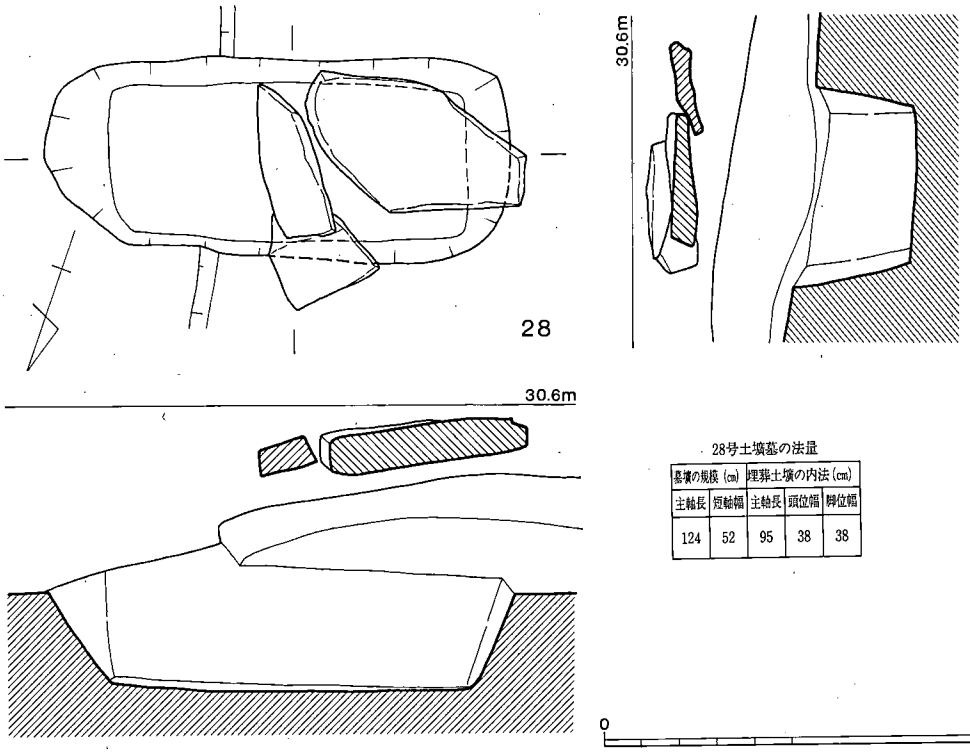
墓地群の調査範囲で南西端に位置する成人用の土壙墓である。２列埋葬の北側列の外側に埋葬されており，27号木棺墓と並列している。重複関係は４号箱式石棺墓に切られているが，34号土壙墓との関係ははっきりしない。この周囲は北側列の外側に並行して墓地が並んでいる。

埋葬土壙は歪な長方形を呈し，長さが2.15mを測るが，深さは20cm前後で浅い。おそらく盛土を施していたと考えられる。頭位などは定かでなく，出土遺物もない。

31号土壙墓　(図版53－(1), 第66図)

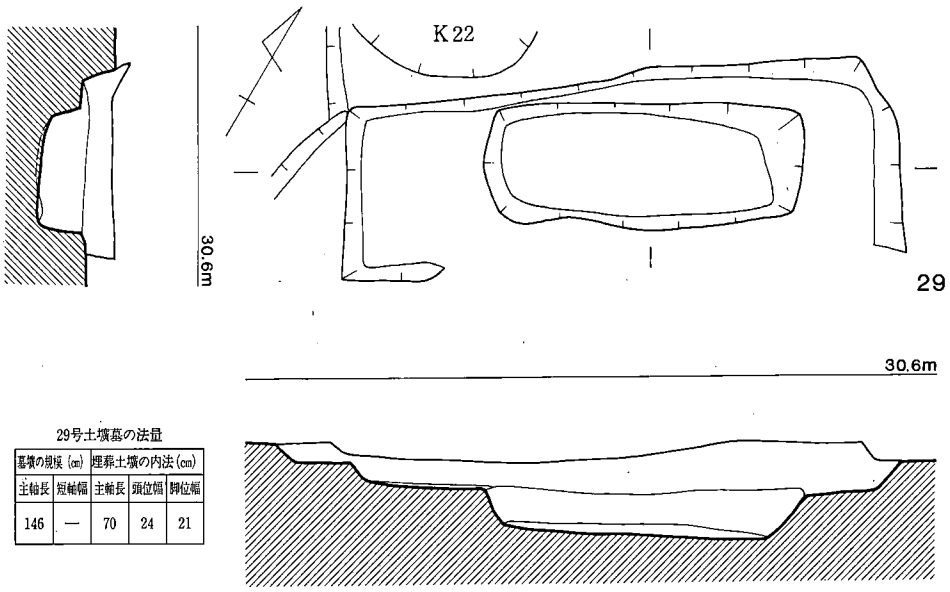
30号土壙墓の南西隣，２列埋葬の北列から若干北西側に逸脱して埋葬された成人用の土壙墓である。南東側の列上にある７号箱式石棺墓（箱式石棺墓と木棺墓の折衷様式の墓か）と並列してつくられており，近親関係があるのかも知れない。

埋葬土壙の形状は楕円形を呈し，その規模は長さが1.73m，幅が57cmを測り，内法が1.70mと



28号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
124	52	95	38	38

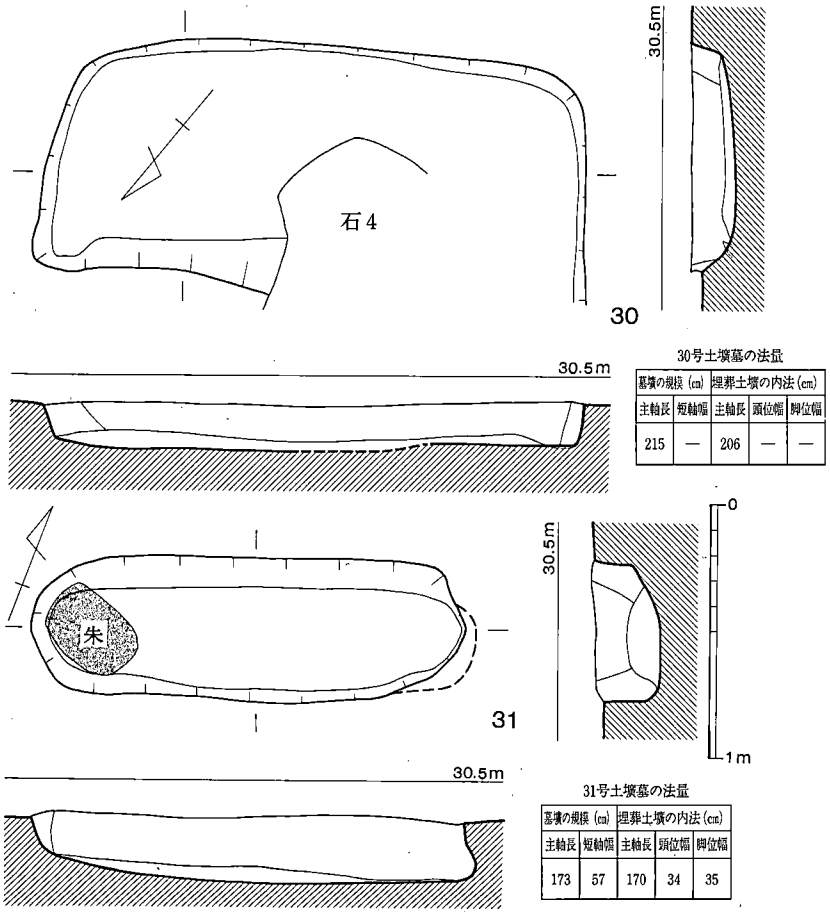


29号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
146	—	70	24	21

第65図　28号・29号土壙墓実測図（1/20）

通常の規模である。脚位の東側の小口壁は5cm前後抉っており，西側の床面には朱を散布した痕跡が残る。床面は頭位方向が10cmほど高くなっている。並列した7号箱式石棺墓の頭位方向とは逆に埋葬している。主軸方位はS69°Wを示す。出土遺物はない。



30号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
215	—	206	—	—

31号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
173	57	170	34	35

第66図　30号・31号土壙墓実測図 (1/30)

32号土壙墓 (図版53−(2)，第67図)

墓域調査区の南西端で検出した成人用の土壙墓で，約1/3が調査区外のため完掘に至っていない。位置的には2列埋葬の南側列の線上にあり，この土壙墓の北東側，26号木棺墓との間は大きな空白部分があり，明らかに墓地群の境界線が認められる。

この墓に並行した北側列は新たな削平を受けていたが，本来は墓が埋葬されていたと考えられる。この空白部は従来の墓地群内にはみられない間隔で，細部にわたってグルーピングしたまとまりとは違った別集団の墓域であると推測できる。南東側に設置してある8号及び11号・12号祭祀土壙も同じことがいえる。

土壙は南側が削平され緩斜面をなしているが，形状は長方形であろう。埋葬土壙も長方形で北東側の小口は墓壙の小口部と同じ長さに掘っている。埋葬土壙の長さは1.89mと長いが，両小口幅は殆ど変わらず，頭位がはっきりしない。西側とすればN58°Eを示す。副葬遺物などはない。

33号土壙墓（図版54－(1)，第68図）

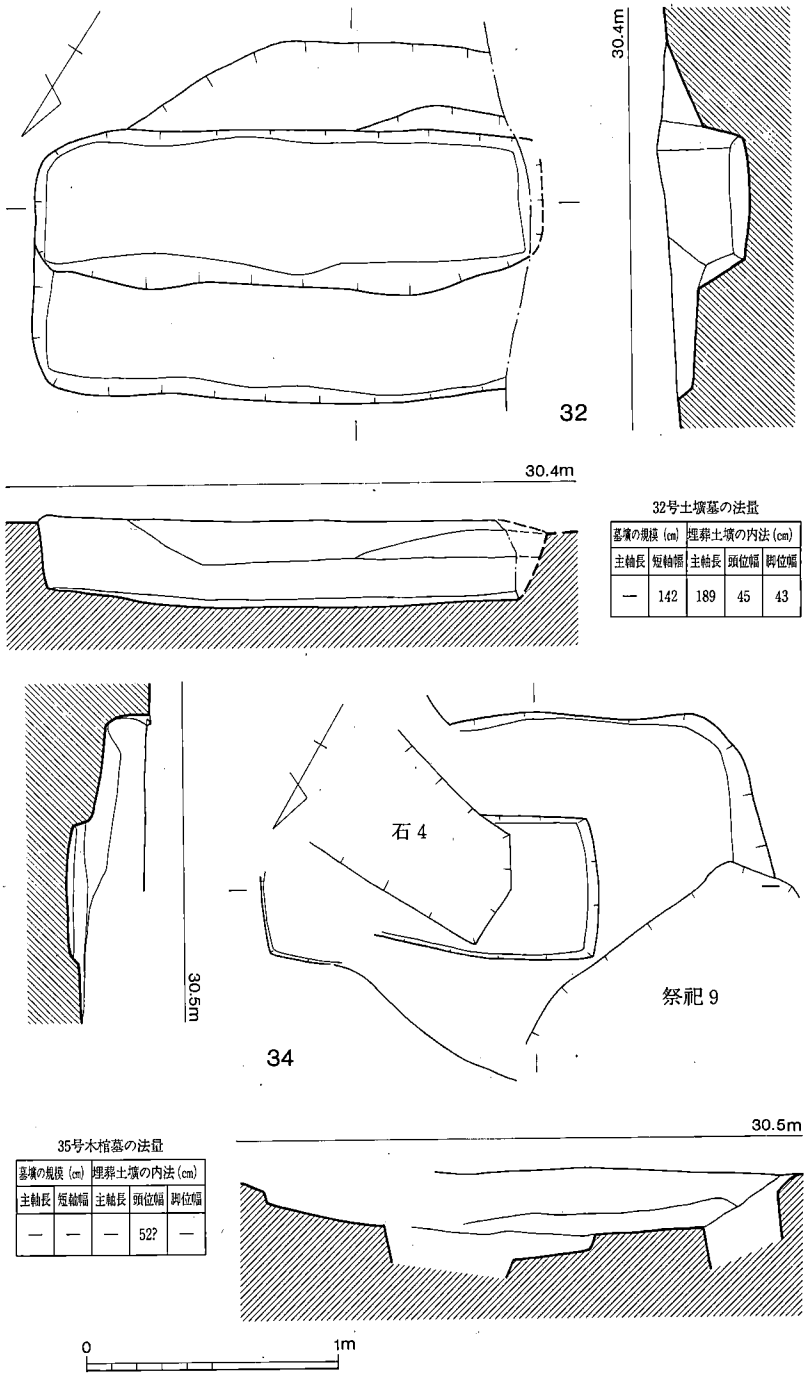
調査した墓地群の南西側に位置する土壙墓で，内法から推測すると若年層（青年か）を埋葬したと思われる。

埋葬場所は列の行間で，17号甕棺墓（小児棺）と主軸も同じで完全に重複している。当初甕棺墓の墓壙と見間違うほどであった。

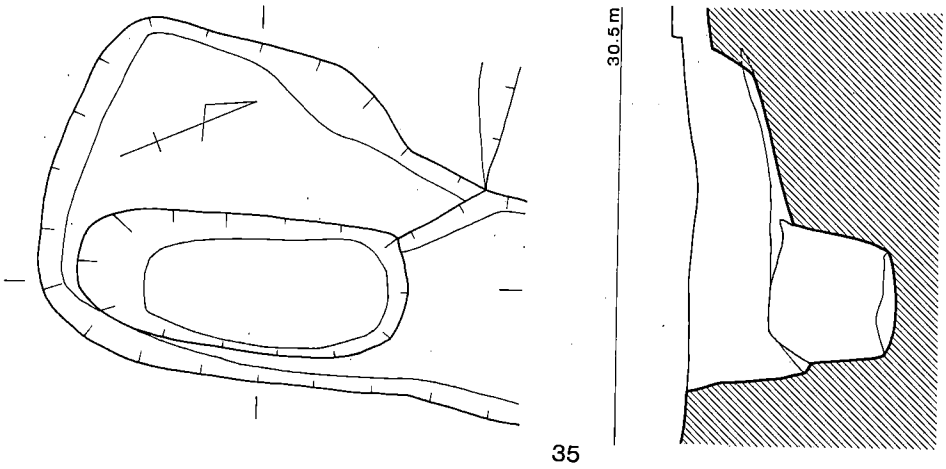
埋葬土壙は楕円形に近い形状をなし，床面は隅丸長方形である。27号土壙墓と主軸が並行に埋葬され，甕棺墓とともに近親的な繋がりがあったと想定される。頭位ははっきりしない。出土遺物などはない。

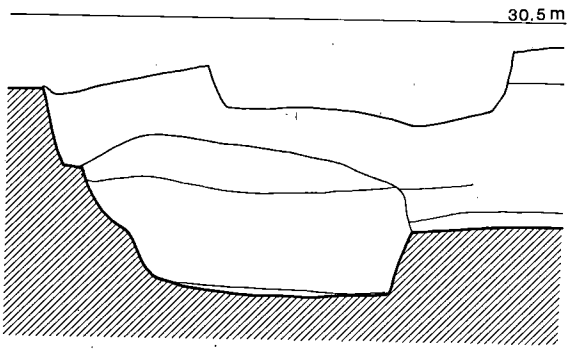
34号土壙墓（図版44－(2)，第67図）

2列埋葬の北側にずれて埋葬された土壙墓で，4号箱式石棺墓に大半が切られ



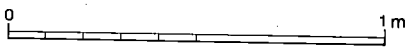
第67図　32号・34号土壙墓実測図（1/30）

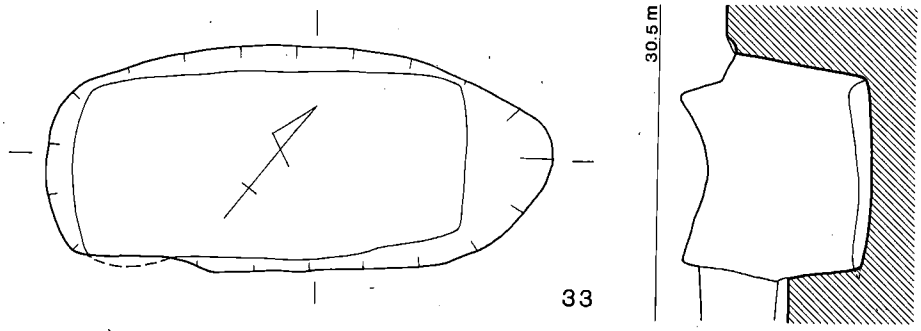


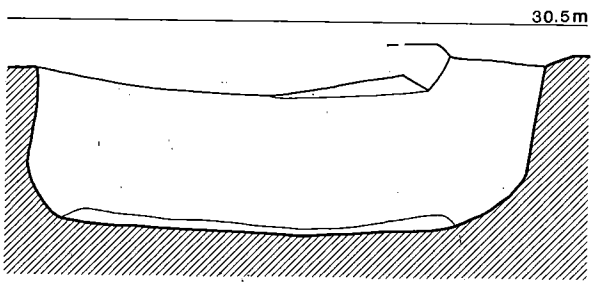


35号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
88	36	64	26	20







33号土壙墓の法量

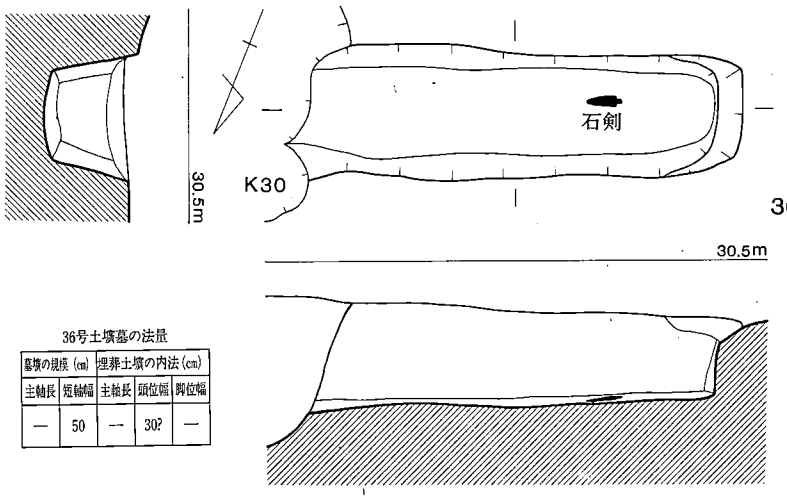
墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
134	60	105	49	44

第68図　33号・35号土壙墓実測図 (1/20)

実態の殆どが分からない。また，9号祭祀土壙とも重複し，祭祀土壙の方が新しい。墓壙から埋葬土壙までは2段掘りである。その他詳細は不明である。

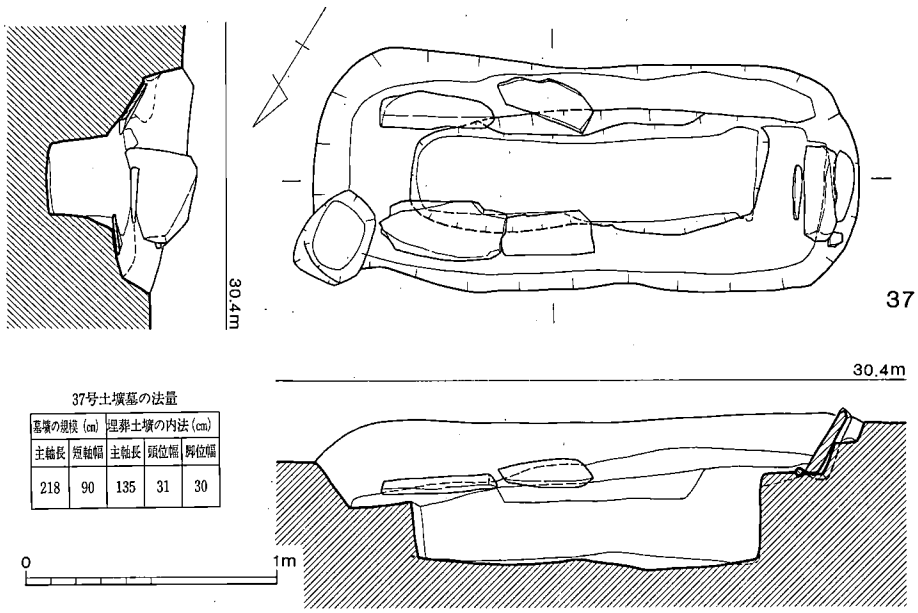
35号土壙墓 （第68図）

南西側の列の行間から出土した小児用の土壙墓であるが，5号箱式石棺墓と28号木棺墓と完全に重複し，木棺墓を調査している時点で気づいたため，全体の配置図では図示できない。



36号土壙墓の法量

墓壙の規模（cm）		埋葬土壙の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
—	50	—	30?	—



37号土壙墓の法量

墓壙の規模（cm）		埋葬土壙の内法（cm）		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
218	90	135	31	30

第69図　36号・37号土壙墓実測図（1/30）

埋葬土壙は楕円形を呈し，その大きさは長さが88cm，幅は36cmを測る。北側の小口が幅広で頭位方向であろう。主軸方位はN23°Eを示す。

36号土壙墓　（図版54－(2)，第69図）

調査墓域のほぼ中央付近に位置する成人用の土壙墓で，２列埋葬の列間に埋葬されている。重複した墓は30号成人用甕棺墓で，東側の小口部を破壊している。墓の南側には主軸を並列して12号甕棺墓（若年か青年墓）が埋葬され何らかの繋がりが考えられる。

埋葬土壙は幅の狭い長方形を呈し，深さは40cm前後である。西側の床面には石剣の完形品が副葬されており，頭位がはっきりしないが西側とすれば被葬者の胸部付近になり，床面に密着して出土したことから，被葬者と床面の間に置いたことが推測される。さらに，床面から若干上層で切っ先の欠損した無茎式の磨製石鏃が出土し，この石鏃は被葬者の体内に嵌入したもので副葬品ではなかろう。西側を頭位とすれば，主軸方位はS68°Wを示す。

この墓地群の中で遺物を出土した墓は，当該墓と弥生時代後期前半の29号木棺墓の小形仿製鏡，５号甕棺墓の墓壙内から出土した輝緑凝灰岩製の石包丁，１号箱式石棺墓の刀子があるが，石包丁は棺外からの出土で，しかも欠損品であることから混入の可能性を残している。

そうなると副葬遺物を有す墓はこの土壙墓と29号木棺墓の３基のみとなり，弥生時代中期初頭（前期末）を中心とする墓地群（中期前葉頃から後期初頭にまで墓が継続された根拠はないが，かなりの重複があるため可能性を残している）を所有する集団の貧弱さは否めない。

37号土壙墓　（図版55－(1)，第69図）

縦列埋葬の南西側に埋葬された成人用の土壙墓（木棺墓の可能性もある）であるが，主軸は揃えているものの２列埋葬から完全に逸脱して他の墓とも重複はない。

墓壙は楕円形に近い形状をなし，西側小口のテラスには緑泥片岩の割り石を立てその基部を棒状の石で押さえている。おそらく標石のための石であろう。長辺のテラス部分には２個対で緑泥片岩が遺存し，木蓋の押さえに使用したのか，木蓋をするための高さを調整したのかのどちらかであろう。

埋葬土壙は楕円形に近い形状で，西側の小口部には板を埋めたと思われる掘り込みがあり，５号・22号木棺墓のようなタイプの可能性があるが，東側の小口部は土壙様に掘り込んでおり定かでない。頭位は小口板の方向と考えられ，墓壙の立てた板石が頭位を目した標石であることを示唆しているようである。主軸方位はS58°Wを示し，出土遺物はない。

38号土壙墓　（図版23－(2)，第70図）

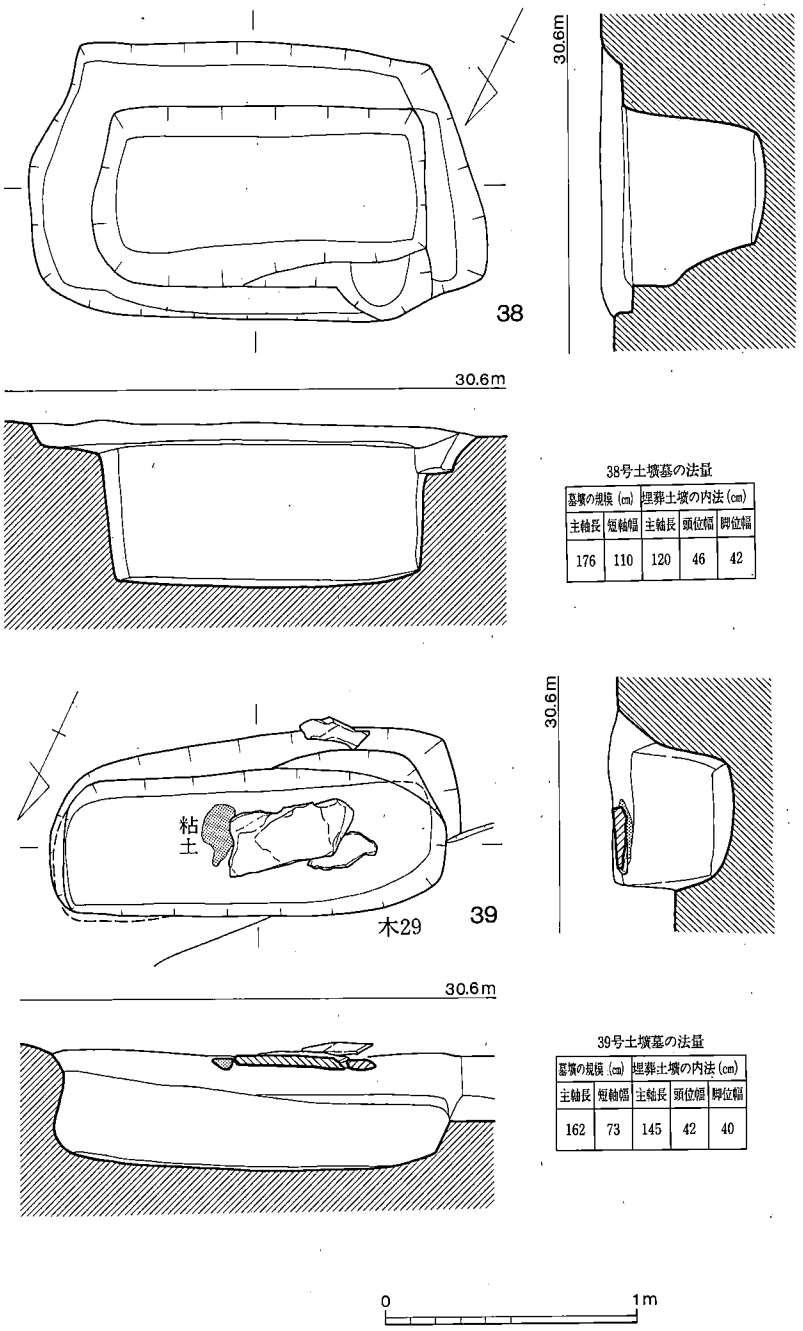
墓地の錯綜した南西よりに位置する成人用の土壙墓で，２列埋葬の南列の線上に埋葬され，

周辺の墓地群も整然と列をなして埋葬されている。重複関係は31号木棺墓の小口の一部との切り合いがあり，31号が新しいことから，墓地の埋葬順序が北東から南西へと順次埋葬されたことの証であろう。

墓壙は歪な長方形を呈し，埋葬土壙までを２段掘りとする。埋葬土壙は長方形で，内法が1.20mを測り，身長のそう高くない被葬者を埋葬したものと思われる。深さは65cmと深く掘られている。頭位は両小口の法量から東側と考えられ，主軸方位はN63°Eを示す。出土遺物はない。

39号土壙墓　（図版33－(1)，第70図）

調査区の南西側の墓地群が錯綜した行間内に埋葬された成人用の土壙墓で，６



38号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
176	110	120	46	42

39号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
162	73	145	42	40

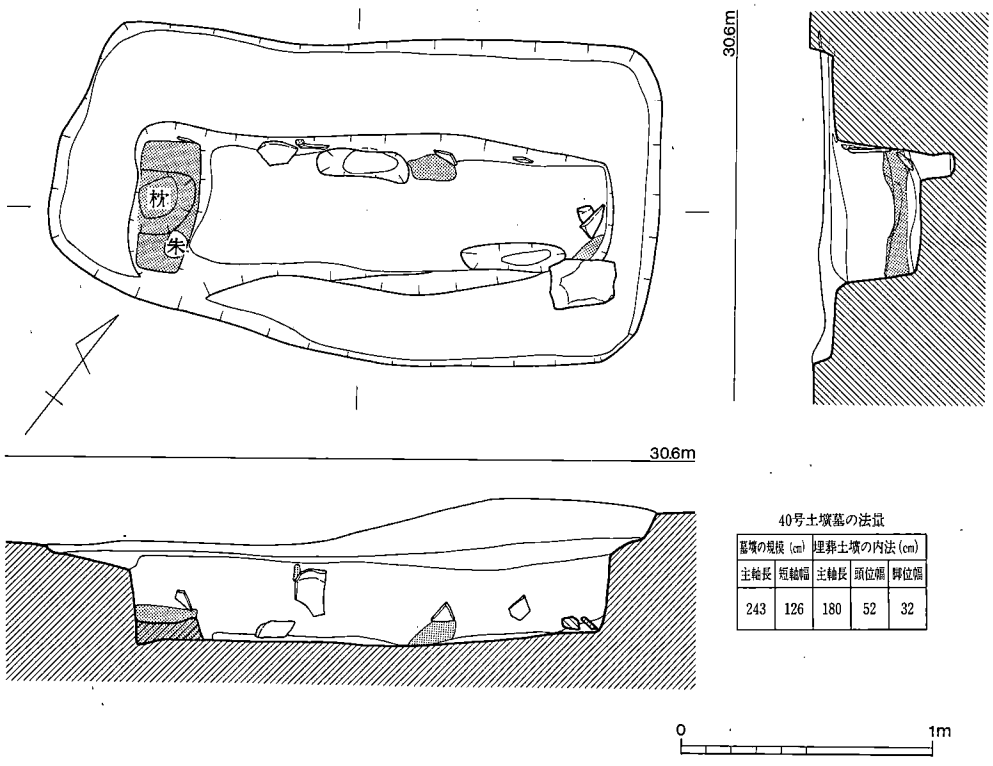
第70図　38号・39号土壙墓実測図（1/30）

号木棺墓と小形仿製鏡を副葬していた29号木棺墓に切られている。

埋葬土壙の中央には緑泥片岩の割り石２個と灰黄色の粘土があり，当初石蓋土壙墓としていたが，石材が少ないことで土壙墓とした。標石にしては粘土を使用していることから定かでない。埋葬土壙の形状は楕円形に近く，東側の小口部は若干抉り込んでいる。床面の高さは東側が高く，頭位と考えられる。土壙の内法は1.45mで，やや身長の低い被葬者を埋葬したと思われる。主軸方位はN65°Eを示す。出土遺物はない。

40号土壙墓　（図版55－(2)，第71図）

調査した墓域の南西側，２列埋葬の南側列に位置する成人用の土壙墓である。他の墓との切り合いはない。墓壙は歪な隅丸長方形を呈し，埋葬土壙は長方形である。埋葬土壙の壁際には板石を立てたと思われる掘方，緑泥片岩の薄い板石，黄灰色の粘土などが遺存しており，箱式石棺と木棺墓の折衷様式の可能性を残しているが，西側の小口部には粘土による枕を付設し，その周囲には木棺の痕跡や板石などがないことから板などを全周させたものではないと考えられる。埋葬土壙の内法が1.80mを測り，身長の高い被葬者を埋葬したと思われる。主軸方位はS53°Wを示し，出土遺物はない。



40号土壙墓の法量

墓壙の規模 (cm)		埋葬土壙の内法 (cm)		
主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅
243	126	180	52	32

第71図　40号土壙墓実測図（1/30）

⑥ 祭祀土壙

調査した墓域内では11基の祭祀土壙を確認したが，そのうちの9号～11号祭祀土壙については，他の祭祀土壙と比較して形も小さくやや疑問が残るが，9号土壙からは20号甕棺墓の破片が出土し墓地群に併存すると思われ，10号祭祀土壙については，縦列埋葬の墓地群を挟んで対峙する箇所に設定されていることから，調査区外の南西側に延びる墓地群の祭祀土壙として位置的に妥当のようである。

祭祀土壙は規模の大小はあるものの縦列埋葬墓地群を挟んだ形で配置されており，この範囲から墓地群は逸脱していない。配置状況には一定の規則性はなく等間隔に掘られる場合とかけ離れて設置する場合とがある。

これらの祭祀遺構は，出土遺物が少なく若干の中期初頭頃の土器片と石器があるに過ぎないが，各墓地の項で説明したように，16号・20号・38号などの甕棺の破片が投棄されていた。この3基の甕棺墓はいずれも新たな墓地によって破壊されており，墓地の掘削時に古い甕棺の破片を捨てたものと考えられる。この事実は新しい墓を埋葬する段階まで祭祀土壙は機能していたことが理解される。つまり，祭祀土壙と墓との切り合いがあるのは9号のみで，他の祭祀遺構については重複はおろか土壙を避けながら墓をつくり，5号祭祀土壙の底面で出土した中期初頭頃と思われる石剣があり，新たに墓をつくった段階で重複する甕棺片を投棄しているのことからもいえる。このことは7号祭祀土壙にも同じことがいえる。以上の事実から，すべての祭祀土壙ではないにしろ後期の段階まで祭祀土壙は機能していたことになる。

以下個別の祭祀土壙の説明をする。

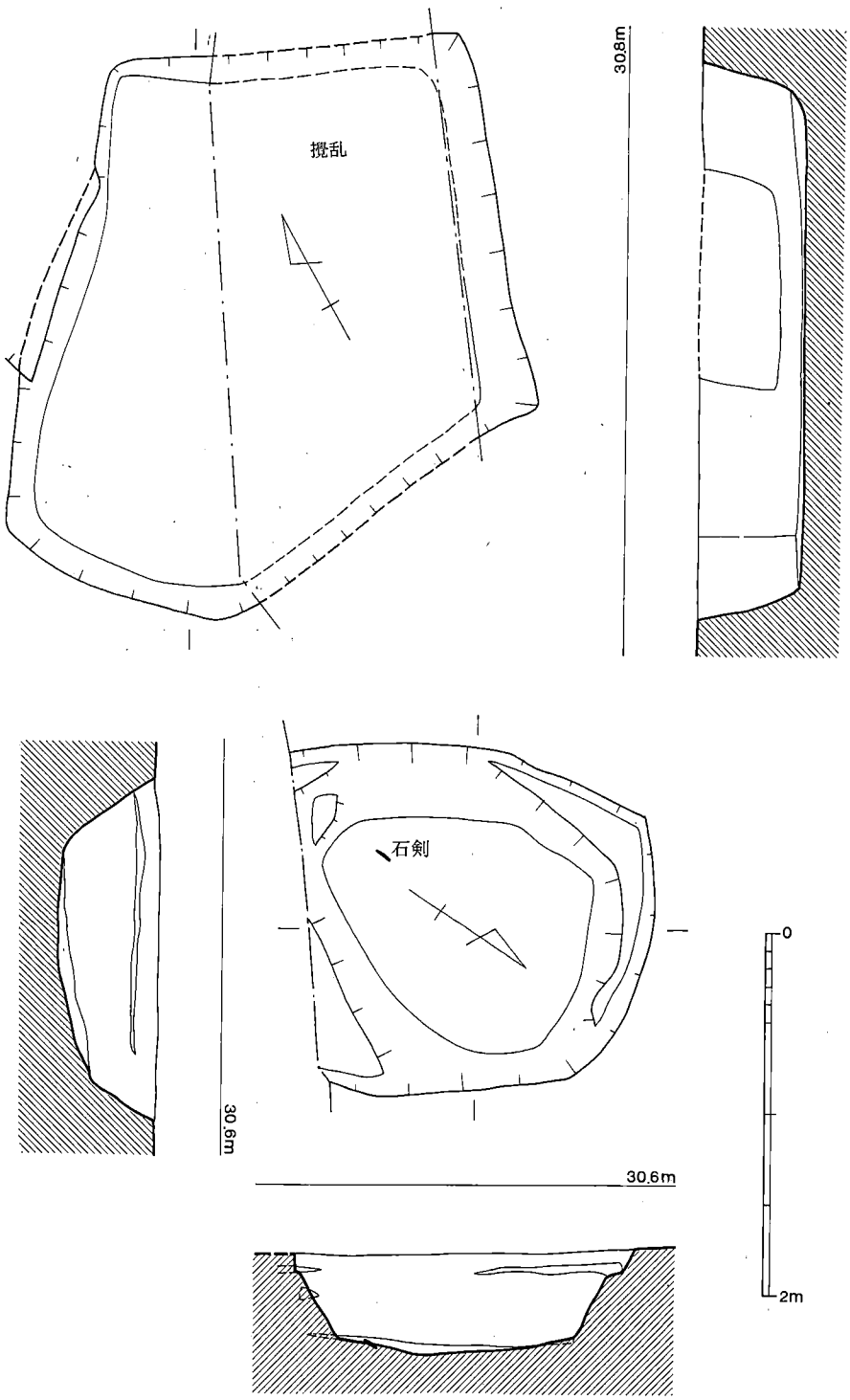
1号祭祀土壙 （図版56－(1)，第72図）

調査した墓地の北東側，南側列の外側に位置する祭祀土壙である。配置された場所は，列埋葬の16号・20号木棺墓の南側空白部を繋ぐ線上で墓地群が分けられ（便宜上A群とする）この一群の南列に属する祭祀土壙とも看取できよう。

土壙は約1/2が新しい暗渠排水溝で破壊されている。形状は不整形を呈し，土壙内は黒褐色の覆土で埋まっていた。出土遺物は殆どない。

2号祭祀土壙 （図版56－(2)，第72図）

調査区の東端で検出した祭祀土壙で，縦列埋葬の本流からはずれた別グループの墓地群に属する。この墓地群は一部を調査したに過ぎないが，この祭祀土壙が起点となると思われる。調査した土壙は完掘していないが，現況で判断すると不整長方形をなすと推測され，2段掘りであろう。土壙は墓地群の東側に位置し，6号土壙墓列と14号木棺墓列とで2列埋葬を形成す



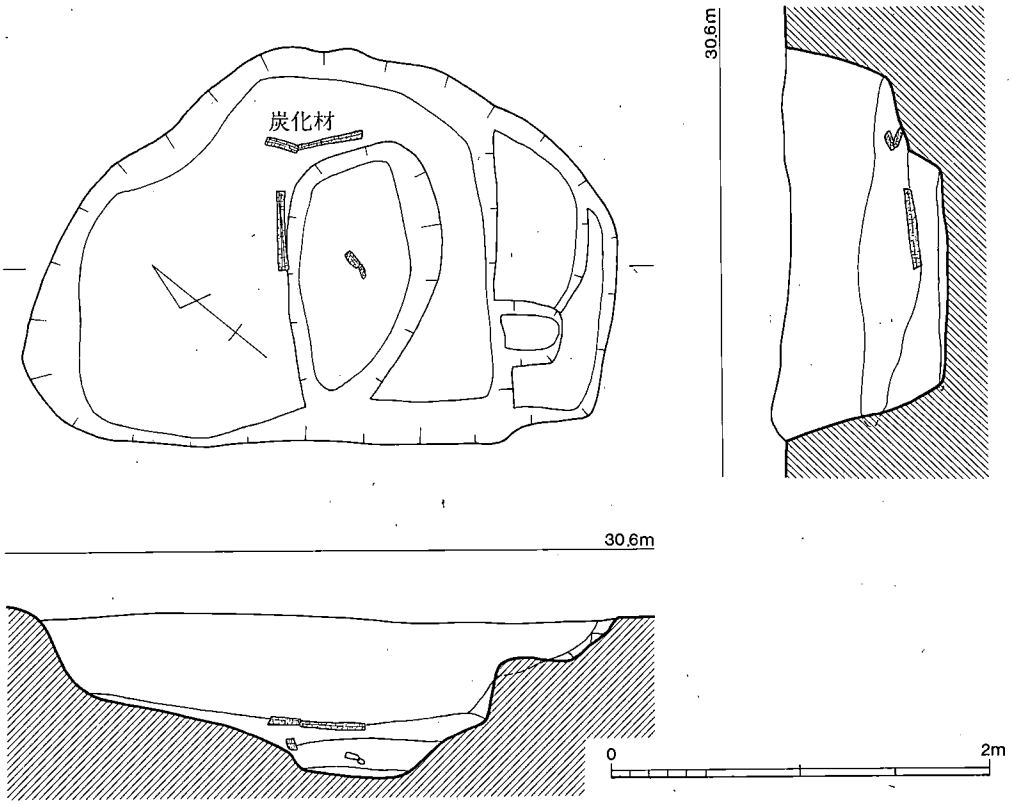
第72図　1号・2号祭祀土壙実測図（1/40）

れば対峙する列側にも祭祀土壙は配されていよう。埋土は黒灰色土で埋まっており，遺物の出土状況は，土器はまったくといってよいほどなく，５号祭祀土壙と同じように底面から整美な石剣の完形品が出土した。石剣は底面近くに密着した状態で出土し，流れ込んだ状況を示していないことは，石剣を祭祀土壙に埋納することに意味が見いだされ，断言はできないが36号土壙墓に副葬されていた個人所有の副葬品とは意味を異にすると考えられるかも知れない。

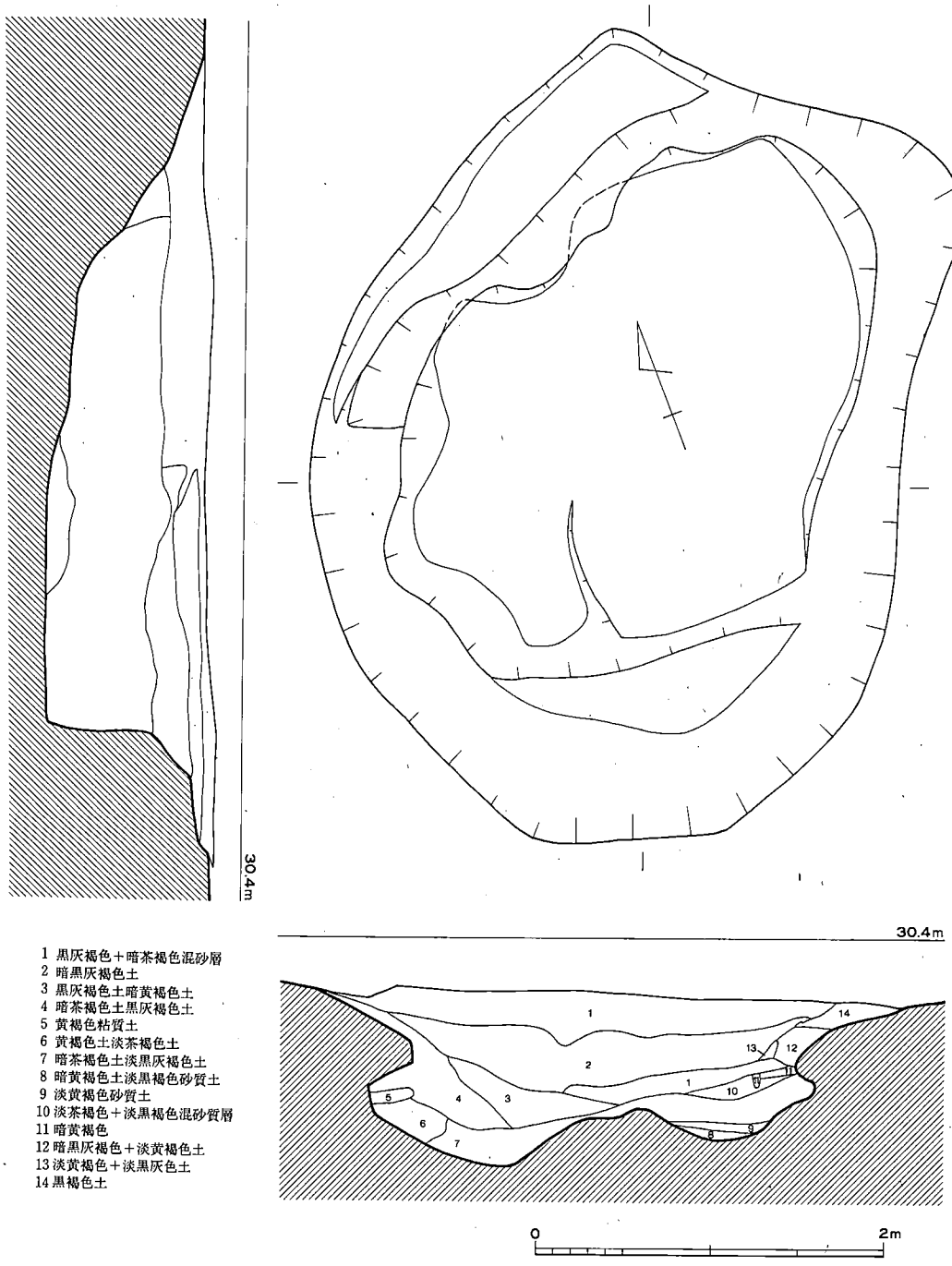
３号祭祀土壙　（図版57－(1)，第73図）

２列埋葬の南側列に添った位置に配された祭祀土壙で，２号祭祀土壙に隣接している。この祭祀土壙は縦列埋葬の墓地群に対して１号・６号祭祀土壙と等間隔に配置され，Ｂ群とした墓地群に伴うと推測することもできる。

土壙の形態は不整形で，段状に掘り込んでいる。その規模は長軸が3.15m，短軸は2.10m，深さは80cm前後を測る。出土遺物はないが，床面近くから炭化材が検出された。周辺には焼痕は認められないが，祭祀行為の一面を示唆しているとも思える。しかし，火を使った痕跡のある祭祀土壙は他にはない。



第73図　３号祭祀土壙実測図（1/40）

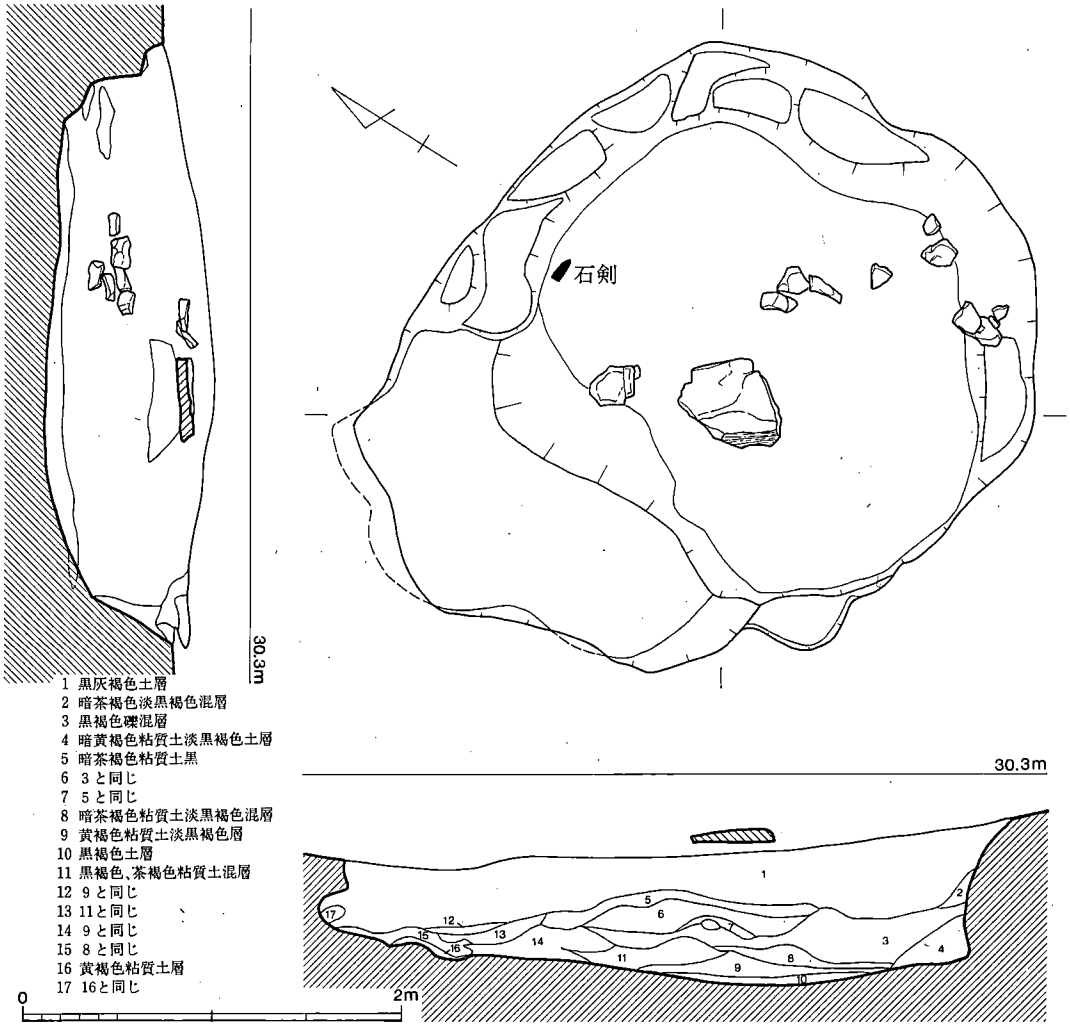


第74図　4号祭祀土壙実測図（1/40）

4号祭祀土壙　(図版57－(2), 第74図)

「Y」字形に分岐した埋葬列の北側に位置する祭祀土壙である。平面形状は不整形を呈し，断面もかなりの凹凸がある。土壙の規模は長軸が4.60m，短軸は3.35m，深さは90cm前後を測る。断面図でみると覆土は黒灰色土と茶褐色土，一部黄褐色土が自然堆積しており，最下層には砂質層の堆積がみられ，一定程度の期間埋まらないままの状態であったと考えられる。

出土遺物は38号甕棺墓の甕棺片が出土した。この事実は8号箱式石棺墓の構築時に破壊した甕棺を投棄したものと思われるが，なぜ距離的に60mほど離れたこの祭祀土壙に投げこんだのかが分からない。このことは，8号石棺墓の構築時に当該祭祀土壙が埋まっていないことを物語るものといえる。



第75図　5号祭祀土壙実測図 (1/40)

5号祭祀土壙　(図版58－(1)・(2)・59－(1), 第75図)

墓域調査区のほぼ中央付近に位置する祭祀土壙で，縦列埋葬墓地群の北西側に掘られている。掘られている場所は，4号祭祀土壙と同じように縦列埋葬の墓地群よりも40cm～50cm近くの比高差がある。

土壙の平面形状は不整円形状を呈し，西側にはテラス状の高まりがある。土壙の検出面の中央部には緑泥片岩の割り石が置かれていた。これが何を意味するのか判断に苦しむ所であるが，機能を失った段階での標石であろう。

図示した土層断面図では，覆土の堆積状態は水平もしくは中央部分がやや高くなった状態で埋没し，黒褐色土と茶褐色土，黄褐色粘土層からなる埋め土は投棄されたものと考えられ，墓の掘削排土を捨てた可能性が考えられる。その後，1層の黒灰色土で一気に埋めている。

遺物は底面に密着した状態で茎部を欠損した石剣が置かれた状態で出土した他，中層から緑泥片岩の割り石が捨てられていた。この中に1号・8号箱式石棺墓で破壊された16号と38号甕棺墓の破片が混入しており，土壙内の割り石は箱式石棺墓の構築時に石材を加工し捨てたことが考えられる。

6号祭祀土壙　(図版59－(2), 第76図)

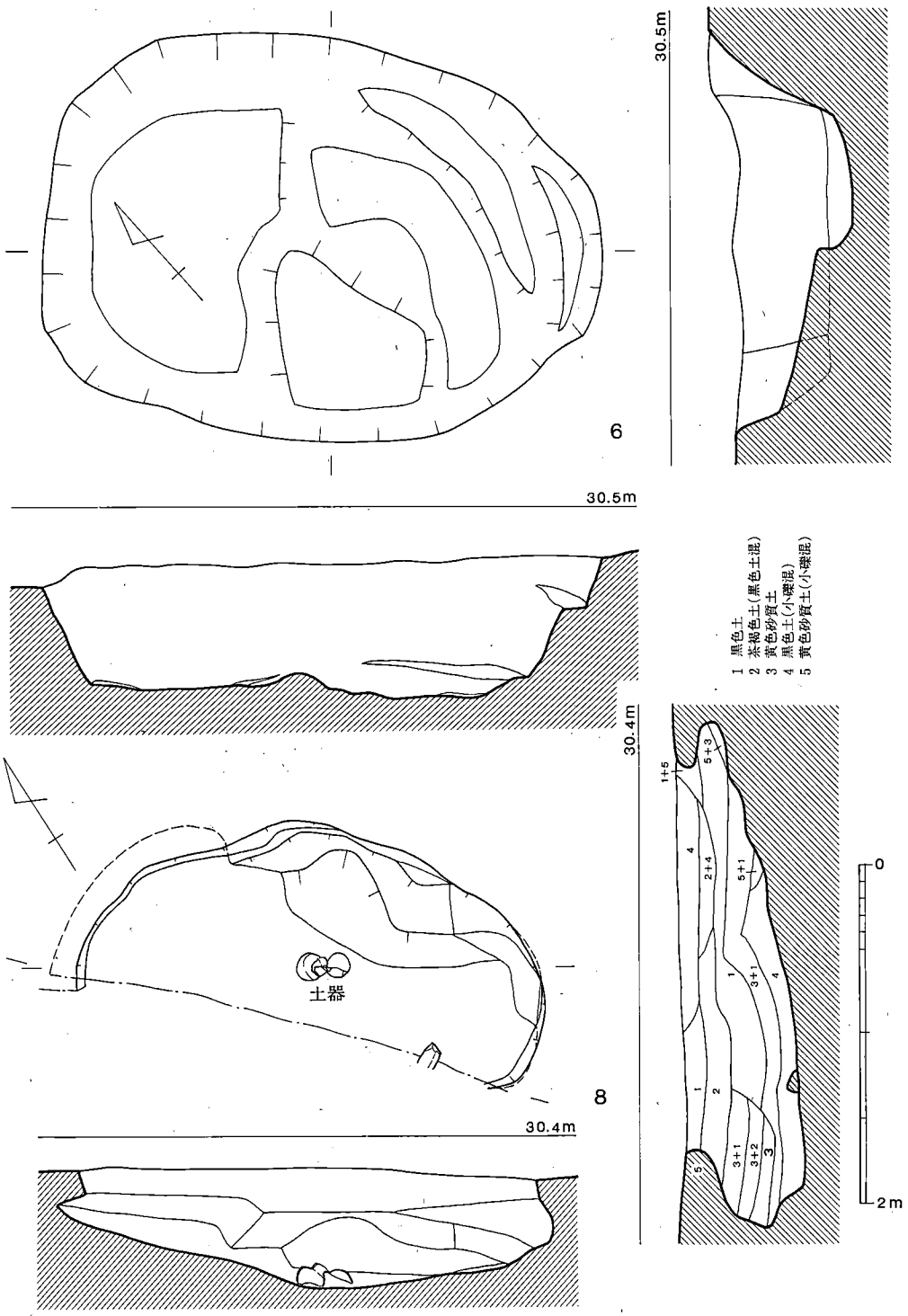
調査した墓地群のほぼ中央付近に位置し，2列埋葬の南側に掘られた祭祀土壙である。設置方向は3号祭祀土壙と同じで長軸を墓地列に対して直交させている。墓地列の南側の祭祀土壙はこの6号を境に8号までの間には祭祀土壙をつくっていない。その代わり北側列の外側には5号・7号・9号のの祭祀土壙を配置し，その間の祭祀の重点的な役割を担っているようである。

祭祀土壙の平面形状は楕円形に近い形状を呈し，東南側は階段状のテラスをなす。その規模は長軸で3.30m，短軸で2.35m，深さは80cm前後を測る。出土遺物は僅かに中期初頭ごろの甕の破片が出土したに過ぎない。

7号祭祀土壙　(図版60－(1), 第77図)

墓域調査区の南西側で検出した北側列の北東側に位置する最も規模の大きな祭祀土壙で，墓地群の近くに配置したためかその周囲にまで墓を築造しているが，墓域の規制のためかこの祭祀土壙より外側には墓をつくらない。

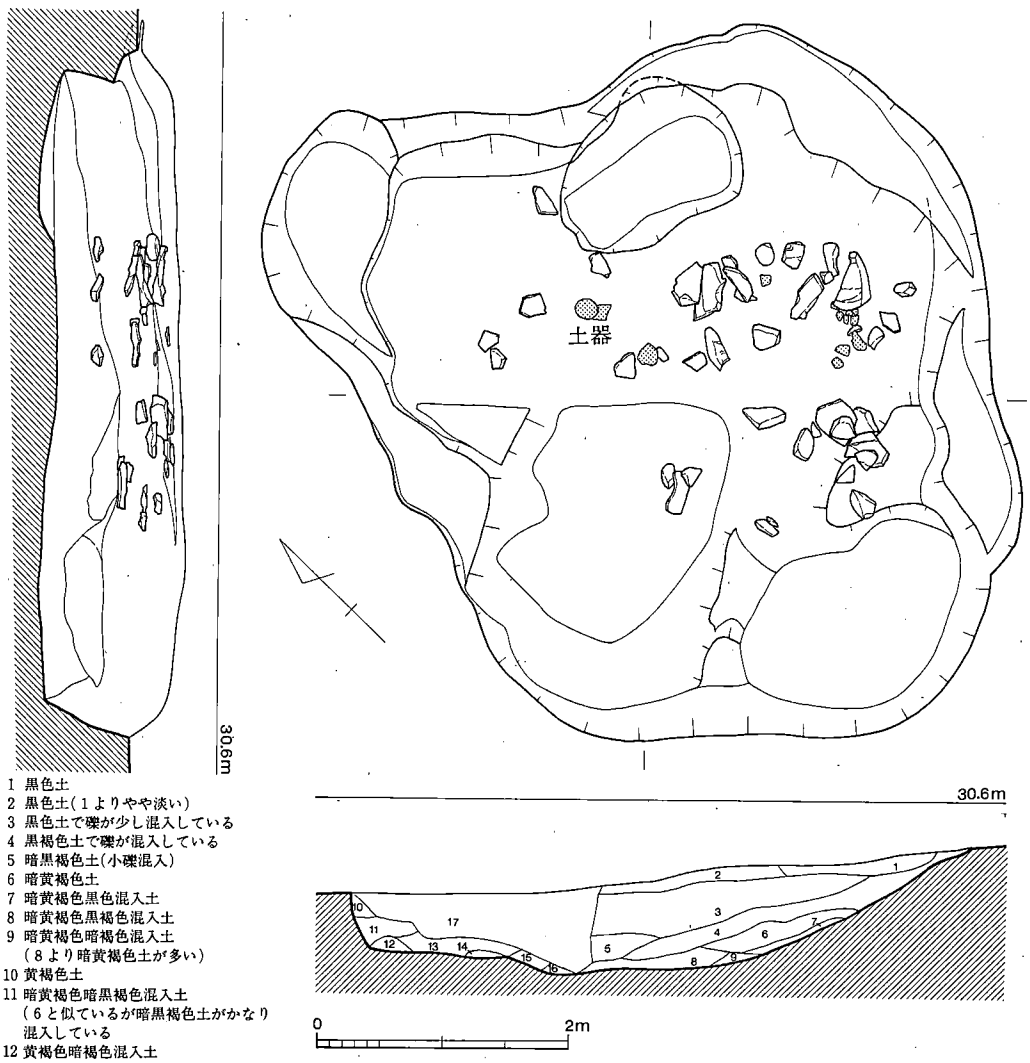
祭祀土壙の形状は不整形で，総体的にみれば祭祀土壙は意味不明な形態をなし，用途がはっきりしない曖昧模糊とした遺構を祭祀という言葉で表現している。ここの墓地群に伴う祭祀土壙も明確な供献遺物は2号と5号の石剣のみで，一般的に祭祀土壙から出土する土器類も床面の上層，覆土中からの出土が普遍的であるといえる。



第76図　6号・8号祭祀土壙実測図（1/40）

この祭祀土壙も形態的には同じようなことがいえ，堆積した覆土をみると墓地よりの土層は自然堆積しているのに対し反対側は不自然な堆積を示している。このことは，祭祀土壙が埋没した段階で新たに掘削したことを物語っていると推測される。床面にも不自然な凹凸が数カ所にみられるなど不明な点が多いのも確かである。

出土遺物をみると，床面上には殆どなく中層から上層にかけて緑泥片岩の割り石が多く散在し，その間に若干の土器片が出土している。出土状態は流れ込んだ状況ではなくほぼ水平を保った形であり，土壙が一定程度埋没した段階で投棄したものと推測される。投棄された石材に伴って16号・38号甕棺片が出土した事実から，この石材は１号・８号箱式石棺墓を築造する際に加工した石材破片とともに破壊した甕棺を廃棄したと思われる。



1 黒色土
2 黒色土(１よりやや淡い)
3 黒色土で礫が少し混入している
4 黒褐色土で礫が混入している
5 暗黒褐色土(小礫混入)
6 暗黄褐色土
7 暗黄褐色黒色混入土
8 暗黄褐色黒褐色混入土
9 暗黄褐色暗褐色混入土
(８より暗黄褐色土が多い)
10 黄褐色土
11 暗黄褐色暗黒褐色混入土
(６と似ているが暗黒褐色土がかなり混入している
12 黄褐色暗褐色混入土
13 暗黒褐色土(17とほぼいっしょであるが少し暗茶褐色土が混じっている)
14 暗黄褐色暗黒褐色混入土
(13と暗黄褐色土)
15 黒色土(小し暗茶褐色土が混じっている)
16 暗黄褐色黒色混入土
17 暗黒褐色土

第77図　７号祭祀土壙実測図 (1/40)

このことから，７号祭祀土壙は，直接関係する遺物は皆無といえ，加工された石材の廃材，破壊された甕棺の破片，甕の口縁と底部片の出土など直接祭祀に関係する遺物は少ないといえる。また，７号祭祀土壙の床面にみられる意味不明な凹面があるなど祭祀に直接結びつく根拠に乏しい。

8号祭祀土壙　（図版60－(2)・61－(1)，第76図））

調査した墓域の南西端に掘られた祭祀土壙であるが，調査区外で完掘に至っていない。この祭祀土壙は北東側に一定の空間が設けられており，これまで説明してきた墓地群とは別グループの墓地群に伴う祭祀土壙と考えられる。

現況での平面形態は楕円形のように見え，長さは2.75mを測る。東側は階段状に掘り，両壁はやはりオーバーハング気味に掘り込んでいる。覆土の堆積状態は自然堆積にしては水平に近い堆積を示し，南側にはある程度堆積した段階で新たに掘り込んだようにも看取できる。覆土は黒色土と茶褐色土及び地山である黄色砂質土とが堆積していた。床面には弥生時代中期初頭頃の完形の小型壺が破損した状態で出土した。並んだような出土状況から故意に破壊した可能性を残している。

9号祭祀土壙　（図版61－(2)，第78図）

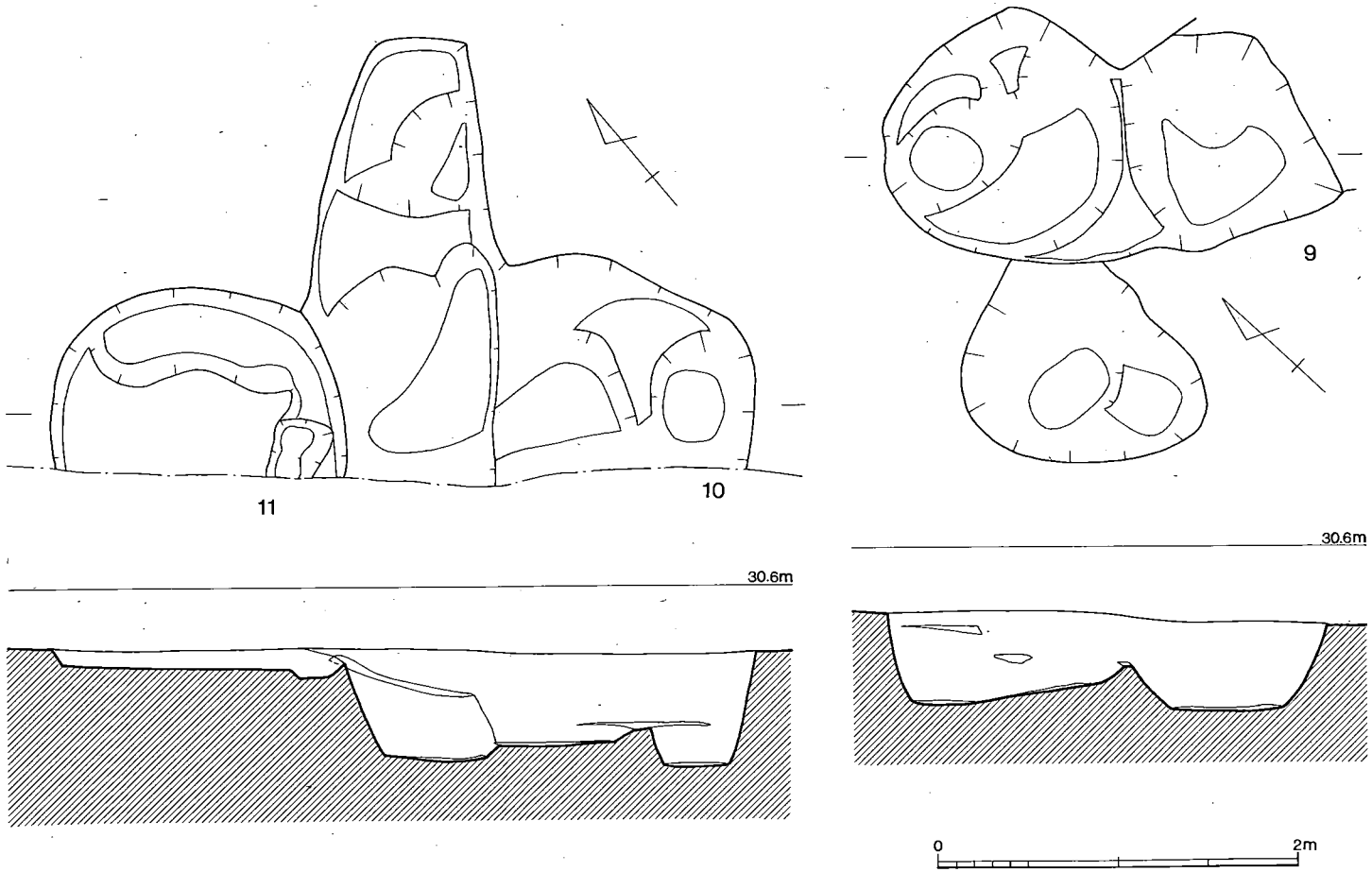
この遺構は南西側の墓地群が一旦途切れる部分に位置する土壙であり，規模も他の祭祀土壙よりも小形であるが１号箱式石棺墓に切られた20号甕棺墓の破片が出土したことで祭祀土壙とした。１号石棺墓の築造時の投棄であることから，時期的には中期初頭の祭祀土壙ではなかろう。34号土壙墓との切り合いも祭祀土壙の方が新しいことでもいえる。

平面形態は瓢箪形をしており，長さは2.40mを測る。他にも中期初頭頃の甕の底部が出土している。

10号・11号祭祀土壙　（第78図）

調査区の南西端にある土壙であるが，11号を付与した土壙は深さも浅いことから祭祀土壙ではない可能性がある。10号土壙は２基の土壙が重なっている可能性があるが把握できていない。位置的には北側の墓が新しい攪乱で破壊されているものの２列埋葬の北東側にあり，８号祭祀土壙と墓地を挟んで相対峙して掘られている。

土壙内からは中期初頭頃の壺の頸部と甕の口縁部片が出土していることから，墓地群に伴うものと考えられるが，調査区外に広がるため全容は分からない。



第78図　9号～11号祭祀土壙実測図（1/40）

第2表 甕棺観察表

番号		器種	法量（cm）	胎土①・焼成②・色調③	特徴	時期	備考
1号	単棺	壺	口径 31.8 底径 11.7 最大径 51.1 器高 51.2	①細砂粒多量，雲母，角閃石 ②良 好 ③茶褐色	鋤先状の口縁部，頸部は短く，肩部に「M」字状凸帯を貼付する。胴中央にも「M」字凸帯，上げ底をなす。 外面～頸部内面はヘラ磨き，内面はナデ仕上げ。	中期前半	外面は黒色顔料を塗布。 肩部外面→内面に穿孔。
2号	上甕	大型甕	口径 54.9 底径 12.2 最大径 ---- 器高 69.5	①細砂粒多い，雲母，角閃石，赤褐色粒 ②良 好 ③白黄色～灰色	未発達の逆「L」字状（三角口縁に近い），頸部は若干内傾。胴部には1条の見かけ台形凸帯を貼付する。器壁は1.0cm～1.5cm，底部厚は2.2cm。外面はハケが多く，頸部と口縁に磨き。内面ナデ	中期初頭	口縁内面と外面は黒色顔料塗布する。 器壁の厚さ1.0～1.5cm 底部の厚さ2.2cm
2号	下甕	大型甕	口径 64.0 底径 ---- 最大径 64.8 器高 ----	①細・粗砂粒多量，雲母赤褐色粒 ②良 好 ③褐色	未発達の逆「L」字状口縁部。頸部は内傾し，胴部に「M」字状の凸帯貼付する。最大径胴部上半にある。外面はハケの上から磨き，内面はナデの上から磨き仕上げ。	中期初頭	外面は黒色顔料を塗布。 器壁の厚さ0.7～1.2cm。 底部は欠損。 胴下半に外→内に穿孔。
3号	上甕	小型甕	口径 27.2 底径 ---- 最大径 ---- 器高 ----	①砂粒，雲母，赤褐色粒子，角閃石 ②良 ③灰黄褐色	未発達の逆「L」字状口縁部。頸部は内傾し，底部は欠損する。 外面がハケ，内面はナデで仕上げる。	中期初頭	外面に煤が付着。 日常什器の転用。
3号	下甕	小型甕	口径 25.4 底径 6.7 最大径 26.6 器高 29.0	①大粒砂粒，赤褐色粒子雲母，角閃石 ②良 好 ③茶褐色	未発達の逆「L」字状口縁部。頸部は内傾し，最大径が胴部上半にある。底部は薄づくりで，上げ底を呈する。 外面は細いハケ，内面はナデる。内面は風化。	中期初頭	外面には煤が付着。 日常什器の転用。
4号	上甕	中型甕	口径 41.8 底径 9.0 最大径 ---- 器高 49.9	①細砂粒若干含む，雲母赤褐色粒，角閃石 ②良 好 ③白黄褐色	逆「L」字状の口縁部。口縁平坦面は内傾する。口縁下には「M」字状凸帯を貼付する。底部は厚く，上げ底である。 外面がハケ，内面はナデる。	中期前半	外面には煤が付着。 日常什器の転用。
4号	下甕	中型甕	口径 45.5 底径 11.0 最大径 ---- 器高 52.3	①細砂粒多く含む，雲母赤褐色粒，石英 ②良 ③淡橙色～黄茶褐色	逆「L」字状の口縁部。頸部は内傾し，肩部には1条の三角凸帯を貼付する。底部は厚く裾は若干開き，上げ底である。 外面はハケ，内面はナデ仕上げ。	中期前半	外面には煤が付着する。 日常什器の転用。
5号	単棺	中型甕	口径 40.0 底径 9.0 最大径 ---- 器高 46.0	①細砂粒多い，雲母，赤褐色粒，石英，角閃石 ②良 好 ③黄茶褐色	未発達の逆「L」字状口縁部。頸部は内傾し肩部に1条の三角凸帯が巡る。底部は厚くつくり，抉ったような上げ底を呈する。 外面はハケ，内面はナデで仕上げる。	中期初頭	外面には煤が付着。 日常什器の転用。
6号	上甕	打欠き壺	口径 28.5 底径 10.5 最大径 45.0 器高 47.0	①細砂粒多く含む，赤褐色粒，雲母，角閃石 ②良 好 ③黄茶褐色～橙褐色	口唇部を肥厚させ，肩部と胴上半部に三角凸帯。底部は小さく不安定。 外面横ヘラ磨き，内面は口縁～頸部がヘラ磨き，肩部は指頭ナデ，胴部はナデ，底部はヘラ磨き。	中期初頭	頸部を打欠き破片を一緒に埋葬。
6号	下甕	中型甕	口径 47.3 底径 9.8 最大径 50.2 器高 57.8	①細砂粒が多量，赤褐色粒，雲母多い，角閃石 ②良 好 ③黄褐色	未発達の逆「L」字状口縁部。頸部は内傾し，1条の三角凸帯を貼付する。最大径が胴部上半にある。 外面はハケ，内面は指圧痕，磨き，ナデ仕上げ。	中期初頭	外面に煤が付着。 日常什器の転用。

番号	器種	法量（cm）	胎土①・焼成②・色調③	特徴	時期	備考
7号 上甕	小型甕	口径 ---- 底径 6.6 最大径 ---- 器高 32.6	①細砂粒，赤褐色粒，雲母， ②良　好 ③褐色	口唇部は打欠き，口縁下には１条の沈線が巡るが直結しない。底部は厚く，抉ったような上げ底を呈する。外面は細かいハケ，内面は上部に一部ハケ，他はナデで仕上げる。	中期初頭	外面と内面下半に煤が付着。 日常什器転用。
7号 下甕	小型甕	口径 33.6 底径 8.5 最大径 ---- 器高 38.8	①砂粒多く，雲母，赤褐色粒，角閃石 ②良　好 ③灰黄色～赤茶褐色	未発達な逆「L」字状口縁部。頸部は僅かに内傾し，頸部には沈線が巡る。底部は細まり，裾部は開く。厚手づくりで，上げ底を呈する。 外面はやや粗いハケ，内面はナデで仕上げる。	中期初頭	外面には煤が付着。二次加熱を受ける。 日常什器の転用。
8号 上甕	小型甕	口径 29.5 底径 6.9 最大径 ---- 器高 34.4	①砂粒，雲母，赤褐色粒角閃石 ②良　好 ③淡い橙褐色	未発達な逆「L」字状口縁。平坦面は内傾する。頸部は内傾し，最大径は口縁と胴部が同じ。底部はやや厚く，若干上げ。 底外面はやや粗いハケ，内面はナデで仕上げる。	中期初頭	外面に煤が付着。 日常什器の転用。
8号 下甕	小型甕	口径 29.1 底径 6.2 最大径 ---- 器高 34.0	①細砂粒多い，雲母，赤褐色粒若干 ②良 ③黄色～橙褐色	短い逆「L」字口縁部。頸部は内傾し，底部は厚く細い。上げ底である。外面はやや粗いハケ，内面はナデで仕上げる。	中期初頭	外面二次加熱と煤付着。 日常什器の転用。
9号 上甕	小型甕	口径 33.4 底径 ---- 最大径 ---- 器高 ----	①赤褐色粒多い，石英，雲母，砂粒 ②良　好 ③茶褐色	如意状口縁部。口縁下に１条の沈線が巡るが，直結しない。底部欠損。 外面はハケ，内面はナデで仕上げる。	中期初頭	外面に煤が付着。 日常什器の転用。
9号 下甕	壺	口径 33.5 底径 9.5 最大径 45.2 器高 39.5	①細砂粒多い，雲母，赤褐色粒，角閃石 ②良　好 ③灰黄褐色	未発達な逆「L」字状口縁部。頸部下には２条の三角凸帯を付す。胴部は玉葱形で，底部は胴部に対して小さい。口縁部～胴部内面から上半がナデ下半はハケ後磨き，頸部内面も磨き仕上げ。	中期初頭	口縁内と頸部～胴上半に煤付着。 日常什器の再利用か。
10号 上甕	打欠き壺	口径 ---- 底径 9.7 最大径 49.0 器高 ----	①細砂粒多い，雲母，赤褐色粒，石英，角閃石 ②良　好 ③黄茶褐色	肩部に１条の三角凸帯を貼付する。胴部上半が大きく張り，底部は薄く上げ底を呈する。 外面と頸部内側がヘラ磨き，内面はナデで仕上げる。	中期初頭	外面には黒色顔料を塗布する。
10号 下甕	中型甕	口径 44.4 底径 9.5 最大径 45.9 器高 52.6	①砂粒少なく，雲母，赤褐色粒，角閃石 ②良　好 ③灰黄色	逆「L」字状口縁部。平坦面と頸部は内傾し，１条の三角凸帯を付す。最大径は胴部上半にあり，底部はやや広がり，上げ底を呈す。 外面ハケ，内面はナデる。	中期初頭	外面に煤が付着。 日常什器の転用。
11号 上甕	大型甕	口径 57.5 底径 13.8 最大径 ---- 器高 69.7	①細・粗砂粒多く含む，雲母，赤褐色粒 ②良　好 ③暗黄茶褐色	逆「L」字状の口縁部。頸部は若干内傾し，胴部には「M」字状凸帯。 外面はハケの上から磨き，底部付近はハケのみ。 内面は磨きで仕上げる。	中期初頭	内外面黒色顔料塗布。 器壁は0.8cm～1.0cm。 底部の厚みは2.7cm。
11号 下甕	大型甕	口径 69.6 底径 17.5 最大径 ---- 器高 83.4	①細・粗砂粒多量，雲母赤褐色粒，角閃石 ②良　好 ③黄土色	粘土紐の貼りつけ，逆「L」字状口縁部。頸部は若干内傾。胴部には「M」字状凸帯を貼付。底部は大きくつくる。 外面はハケの上から磨き，内面は大半が磨き。	中期初頭	外面は黒色顔料塗布。 器壁は0.8cm～1.1cm。 底部の厚さ3.9cm。

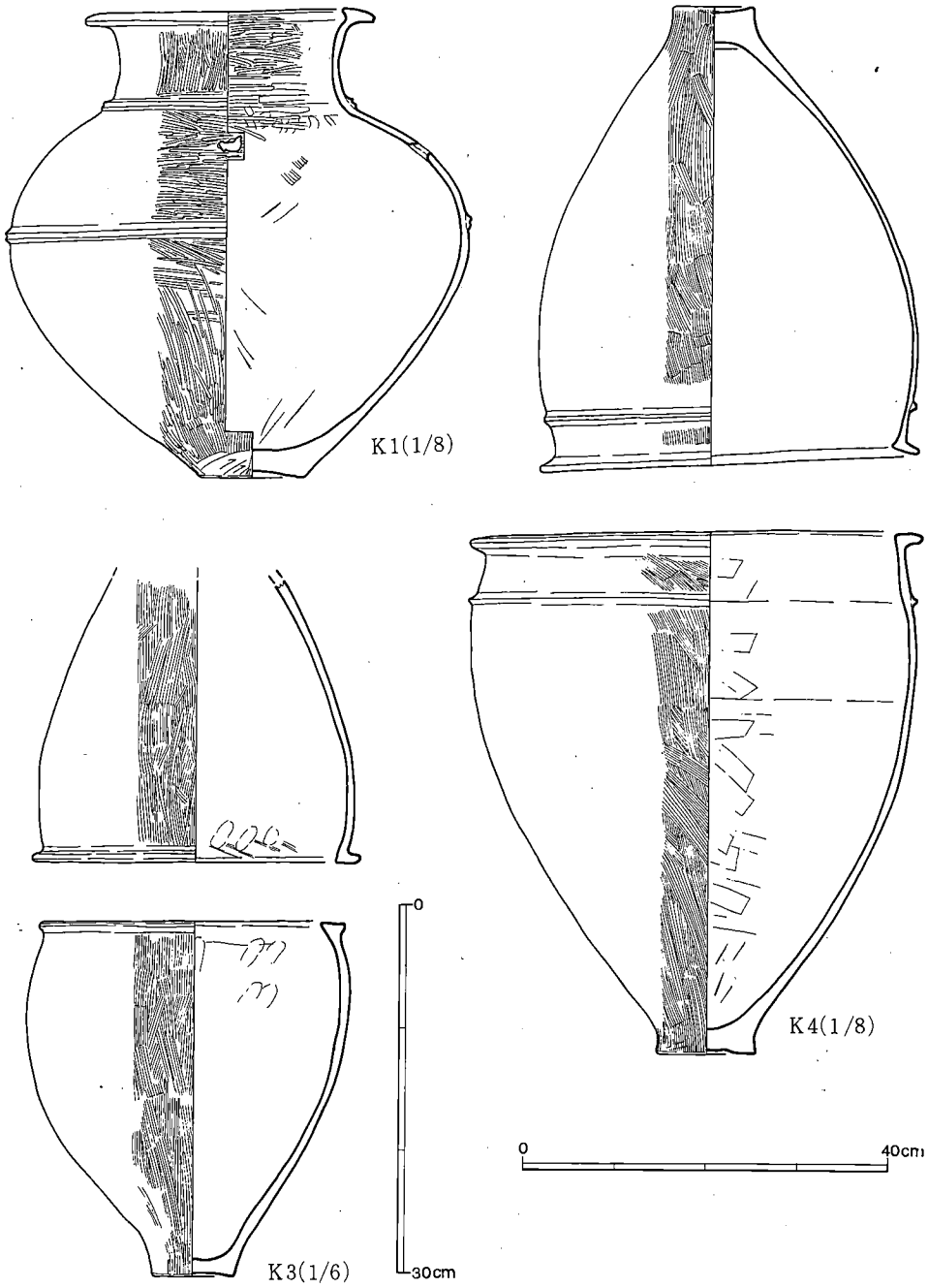
番号		器種	法量（cm）	胎土①・焼成②・色調③	特徴	時期	備考
12	上甕	打欠き壺	口径 底径 12.4 最大径 53.3 器高	①細砂粒，赤褐色粒，雲母，角閃石 ②良　好 ③灰黄褐色	最大径が胴部中央にある。底部は厚く，凹線状に巡り古相を呈する。 内外面とも丁寧にヘラで磨く。	中期初頭	肩部を打欠く。 外面には黒色顔料を塗布する。
12	下甕	大型甕	口径 61.0 底径 12.3 最大径 ---- 器高 65.7	①細砂粒多量，雲母，赤褐色粒 ②良　好 ③褐色	三角形に近い口縁部。頸部は僅かに内傾する。胴部には1条の三角凸帯を貼付。底部は厚く，上げそこである。 外面は磨き，内面はナデの上から疎らな磨き。	中期初頭	内外に面黒色顔料塗布。 胴部には亀裂が走り内外面に補修痕。器壁は0.8～1.3cm，底厚は3.7cm。
13	上甕	鉢	口径 52.5 底径 13.6 最大径 55.4 器高 32.5	①細砂粒多い，雲母，赤褐色粒 ②良　好 ③暗黄茶褐色	口唇部を肥厚させ，口縁部とその下に1条づつの三角凸帯を貼付するが，上段は剝離している。底部厚くつくり，上げ底を呈する。 外面はハケ，内面はナデ，凸帯下にもハケ。	中期初頭	甕棺専用の土器か。 外面には黒色顔料を塗布する。
13	下甕	壺	口径 41.3 底径 13.2 最大径 42.8 器高 59.1	①細砂粒多量に含む，粗砂粒，雲母，赤褐色粒 ②良　好 ③暗褐色	如意状口縁部。頸部は長く，肩部には1条の三角凸帯を貼付する。胴部の張りは鈍く，厚く大きめの底部をなす。 外面はハケで，頸部はハケ後磨き，内面はナデ。	中期初頭	外面は黒色顔料を塗布する。 胴部中央には内→外へ大きな穿孔。
14	上甕	小型甕	口径 26.2 底径 5.6 最大径 ---- 器高 33.3	①砂粒を多く含む，褐色粒，雲母 ②良　好 ③灰味黄色	厚く肥厚した口縁部。頸部は内傾。底部は細みで厚くつくり，抉ったような上げ底。 外面は横ハケと縦ハケ，内面はナデで仕上げる。	中期初頭	外面に煤が付着。 日常什器の転用。 南筑後の搬入土器。
14	下甕	小型甕	口径 29.1 底径 6.6 最大径 ----- 器高 35.2	①やや大粒砂粒，褐色粒雲母 ②良　好 ③橙色～茶褐色	厚く肥厚した口縁部。口縁下に1条の三角凸帯を巡らす。底部は厚めで抉ったような上げ底。 外面凸帯下は粗いハケ，凸帯上～内面はナデで仕上げる。	中期初頭	外面には煤が付着。 日常什器の転用。 南筑後の搬入土器。
15	単棺	壺	口径 37.0 底径 12.5 最大径 52.0 器高 61.5	①細砂粒多い，雲母，赤褐色粒 ②良　好 ③灰黄褐色	外反する口縁，口唇部を肥厚させる。頸部は短く肩部に1条の三角凸帯。最大径が胴部上半にある調整は外面と口縁内面がハケ，外面一部に磨き。 内面はナデで仕上げる。	中期初頭	胴部下半に焼成後の内→外への穿孔。
16	上甕	鉢	口径 52.0 底径 11.2 最大径 ---- 器高 29.9	①細・粗砂粒，赤褐色粒雲母，角閃石 ②良　好 ③茶褐色	未発達の逆「L」字状口縁部。頸部は内傾し，張りのある胴部を有す。底部はやや厚く，僅かな上げ底である。 外面はハケの上を磨き，内面はヘラ磨き仕上げ。	中期初頭	外面は黒色顔料を塗布する。
16	下甕		口径 底径 最大径 器高	① ② ③	甕は胴部の小破片のため不明である。		
17	上甕	小型甕	口径 39.0 底径 8.3 最大径 ---- 器高 42.4	①砂粒が多い，石英，雲母，褐色粒 ②良　好 ③橙褐色	逆「L」字状口縁部。頸部は内傾し，1条の三角凸帯を貼付する。底部は厚くつくり，裾部は若干開く。上げ底である。 凸帯下は細いハケ，外面頸部～内面はナデ。	中期前半	外面には煤が付着し，二次加熱で赤変する。 日常什器の転用。

番号		器種	法量（cm）	胎土①・焼成②・色調③	特徴	時期	備考
17号	下甕	中型甕	口径 38.0 底径 8.0 最大径 40.4 器高 49.5	①砂粒が多い，赤褐色粒 雲母 ②良　好 ③灰黄色	未発達の逆「L」字状口縁部。頸部は内傾し，1条の三角凸帯を貼付する。最大径が胴部上半にある。底部は厚く，僅かに上げ底である。 外面はハケ，内面はナデで仕上げる。	中期初頭	外面には煤が付着する。 日常什器の転用。
18号	上甕	打欠き壺	口径 ---- 底径 7.8 最大径 ---- 器高 ----	①細砂粒，赤褐色粒，雲母 ②良　好 ③暗黄茶褐色	やや扁平な胴部。底部は小さく不安定。若干上げ底を呈する。 外面はハケの上から磨き，内面はナデで仕上げる	中期初頭	胴部上半を打欠く。 外面に黒色顔料を塗布する。
18号	下甕	中型甕	口径 47.0 底径 12.0 最大径 ---- 器高 42.0	①細砂粒多量，赤褐色粒 角閃石，雲母 ②良 ③白黄褐色	未発達の逆「L」字状口縁部。口縁下には1条の三角凸帯を貼付する。底部は器高に対して大きく上げ底を呈する。 外面はハケの上を磨き，内面は磨き仕上げ。	中期初頭	
19号	上甕	打欠き壺	口径 ---- 底径 9.3 最大径 34.0 器高 ----	①砂粒が少ない，赤褐色粒，雲母，角閃石 ②良　好 ③灰黄褐色	胴部上半に最大径。底部はやや厚く，僅かに上げ底を呈する。 内外面ともヘラ磨きで仕上げ，下半は不明瞭。	中期初頭	肩部を打欠く。 外面黒色顔料を塗布。 胴中央部外面→内側に穿孔。
19号	下甕	小型甕	口径 25.3 底径 6.7 最大径 ---- 器高 29.3	①砂粒，雲母，赤褐色粒 ②良　好 ③黄褐色～赤褐色	未発達の逆「L」字状の口縁部。頸部は内傾し，底部は細づくりで厚く，若干上げ底。 外面は細かいハケ，内面はナデで仕上げ，底部に指圧痕。	中期初頭	外面に煤が付着する。 日常什器の転用。
20号	単棺	中型甕	口径 41.0 底径 10.3 最大径 38.9 器高 48.0	①細砂粒やや多い，赤褐色粒，雲母，角閃石 ②良　好 ③焦げ茶～黒色	未発達の逆「L」字状口縁部。口縁下には沈線が巡る。底部は細く上げ底。 外面は細かいハケ，内面はナデと底部に磨き。 胴部外→内に穿孔。	中期初頭	外面に厚く煤が付着。 日常什器の転用。 破片が石1・土39・祭祀5・9号から出土。
21号	上甕	小型甕	口径 28.8 底径 6.0 最大径 ---- 器高 32.0	①大粒砂粒含む，石英，雲母，角閃石 ②良　好 ③暗黄茶褐色	未発達の逆「L」字状口縁部。頸部は内傾し，低い三角凸帯を付す。底部はやや厚く，上げ底を呈する。 内面と外面凸帯下までナデ，外面はハケ。	中期前半	外面には煤が付着する。 日常什器の転用。
21号	下甕	小型甕	口径 32.5 底径 ---- 最大径 ---- 器高 ----	①砂粒，赤褐色粒，雲母 ②良　好 ③灰黄褐色	未発達の逆「L」字状口縁部。頸部は内傾する。 外面は粗いハケ，外面はナデで仕上げる。	中期前半	外面には煤が付着。 日常什器の転用。
22号	単棺	打欠き壺	口径 ---- 底径 8.6 最大径 36.2 器高 ----	①やや大粒砂粒，赤褐色粒，雲母 ②良　好 ③暗黄褐色	肩部に1条の三角凸帯を付す。最大径が胴中央部にある。底部は小さく平底を呈する。 外面はヘラ磨き，内面はナデで仕上げる。	中期初頭	頸部を打欠く。 外面は黒色顔料を塗布。
23号	上甕	小型甕	口径 26.0 底径 6.2 最大径 ---- 器高 32.0	①細砂粒を多く含む，赤褐色粒，雲母 ②良　好 ③黄色～茶褐色	未発達の逆「L」字状口縁部。頸部は内傾し，底部は厚く，若干上げ底を呈する。 外面はハケの上を部分的にナデる。内面はナデ仕上げ。	中期初頭	外面口縁部～胴部に煤が付着。 日常什器の転用。

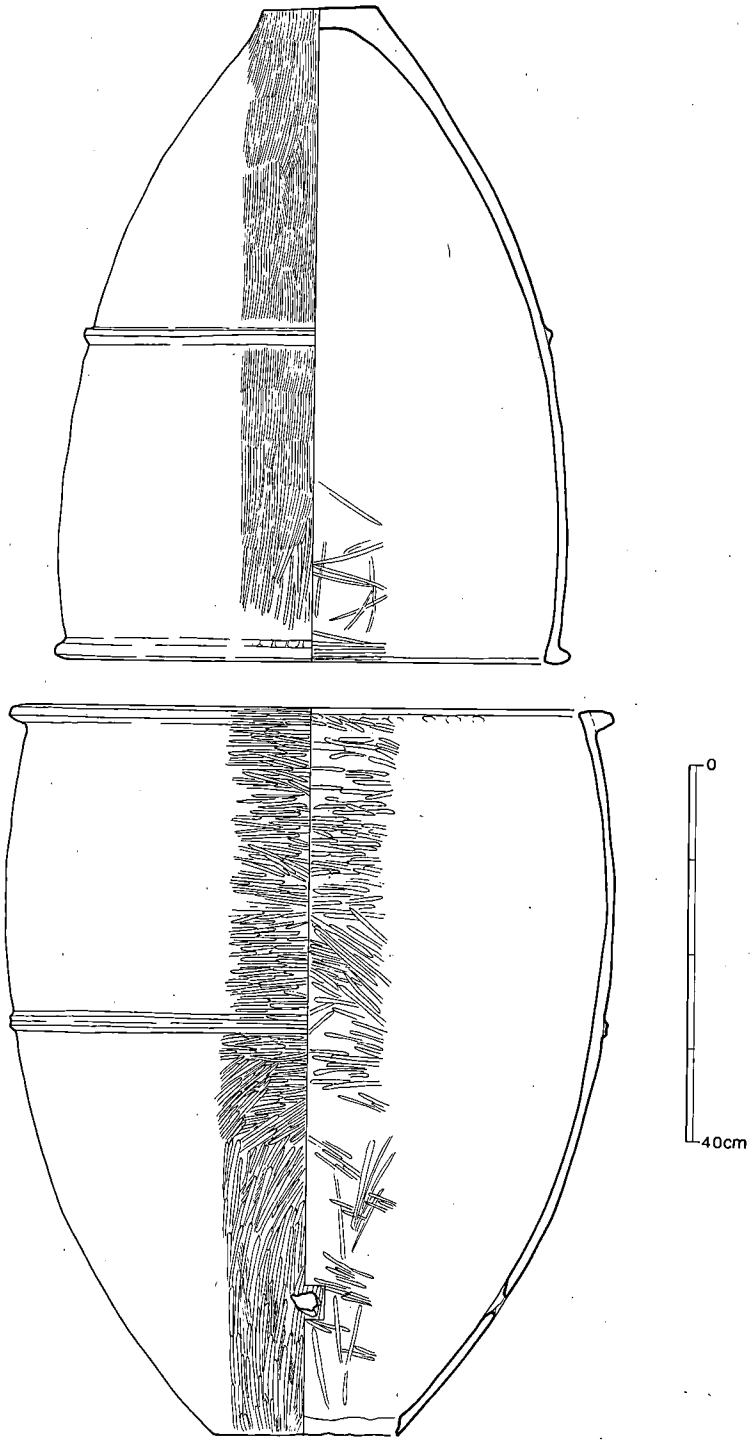
番号		器種	法量（cm）	胎土①・焼成②・色調③	特徴	時期	備考
23号	下甕	小型甕	口径 28.5 底径 ---- 最大径 ---- 器高 ----	①砂粒多く含む，雲母，赤褐色粒 ②良　好 ③黄褐色～茶褐色	未発達な逆「L」字状口縁部。頸部は内傾する。外面は粗いハケ，内面はナデる。口縁下には指圧痕が巡る。	中期初頭	外面に煤が付着する。 日常什器の転用。
24号	上甕	鉢	口径 44.2 底径 ---- 最大径 ---- 器高 ----	①細砂粒，角閃石，雲母赤褐色粒 ②良　好 ③灰黄色	未発達の「L」字状口縁部。胴部上半に1条の三角凸帯を貼付する。 外面はハケの上を磨くが風化し不明瞭。内面はナデる。	中期初頭	黒色顔料？
24号	下甕	壺	口径 18.0 底径 ---- 最大径 33.4 器高 ----	①砂粒を多く含む，赤褐色粒，雲母，角閃石 ②良　好 ③灰黄褐色	短い逆「L」字状口縁部。頸部は短く，肩部に1状の低い三角凸帯を貼付する。 凸帯上～内面はナデ，外面はハケと下半にハケの上から磨きで仕上げる。	中期初頭	外面に黒色顔料を塗布する。
25号	上甕	壺	口径 21.7 底径 10.3 最大径 40.4 器高 45.2	①細砂粒多く含む，雲母赤褐色粒 ②良　好 ③淡褐色	口縁部は朝顔状に外反する。口唇部は肥厚し，頸部は短く，肩部に低い三角凸帯を貼付する。最大径が胴部上半にあり，下半は細まり上げ底をなす外面とん頸部内面までがヘラ磨き，内面はナデ。	中期初頭	外面には黒色顔料を塗布する。
25号	下甕	小型甕	口径 34.0 底径 ---- 最大径 ---- 器高 ----	①大粒砂粒，赤褐色粒，雲母，角閃石 ②良　好 ③暗茶褐色	未発達な逆「L」字状口縁部。口縁下には1条の沈線が巡る。 外面には細かいハケ，内面はナデで仕上げる。	中期初頭	底部欠損。 外面には煤が付着。 胴部上半に焼成後の穿孔 日常什器の転用。
26号	上甕	大型甕	口径 56.7 底径 17.5 最大径 58.0 器高 68.0	①細砂粒多い，赤褐色粒雲母，角閃石 ②良 ③黄茶褐色	三角口縁に近い形状。頸部は内傾し，最大径が胴部上半にある。胴部には1条の三角凸帯を貼付。底部は大きく厚くつくる。外面はハケの上からヘラ磨き，内面は指圧痕，ハケ，ヘラ磨き。	中期初頭	器壁は1.2cm～1.7cm。 底部の厚さ4.5cm。
26号	下甕	大型甕	口径 65.0 底径 19.0 最大径 ---- 器高 77.0	①小砂粒多量，雲母，赤褐色粒 ②良 ③灰黄褐色～茶褐色	未発達の逆「L」字状口縁部。頸部は内傾し，胴部には1条の三角凸帯を貼付する。底部は大きく厚くつくる。 外面はハケの上から磨き，内面は磨き仕上げ。	中期初頭	器壁の厚さ1.6cm。 底部の厚さは5.0cm。
27号	上甕	鉢	口径 35.3 底径 5.6 最大径 ---- 器高 28.0	①やや大粒砂粒，赤褐色粒，雲母，角閃石 ②良　好 ③暗茶褐色	未発達の逆「L」字状口縁部（内側にも若干肥厚する）。口縁下には1条の三角凸帯を貼付する。 内外面ともヘラ磨き。	中期初頭	外面には黒色顔料を塗布する。 底部は欠損。
27号	下甕	打欠き壺	口径 ---- 底径 11.2 最大径 45.2 器高 ----	①細砂粒かなり含む，赤褐色粒，雲母，角閃石 ②堅　固 ③褐色	肩部には三角凸帯を貼付する。最大径は胴部上半にある。底部は若干上げ底。 外面～頸部内面には縦と横方向の磨き，内面はナデで仕上げる。	中期初頭	外面には黒色顔料を塗布する。
28号	上甕	大型甕	口径 53.1 底径 13.6 最大径 ---- 器高 67.6	①細・粗砂粒をかなり含む。 ②良　好 ③茶褐色	如意状口縁から逆「L」字状口縁に移行する過渡的な形状口縁。頸部から胴部は若干壺の形態を残す。肩部に1条の凸帯。底部は厚く，上げ底。 外面はハケの上から磨き，内面はハケとナデ。	中期初頭	外面には黒色顔料を塗布 胴部下半には内→外へ穿孔。器壁は7.0mm前後。

番号		器種	法量（cm）	胎土①・焼成②・色調③	特徴	時期	備考
28号	下甕	大型甕	口径 65.5 底径 15.7 最大径 ---- 器高 77.6	①細砂粒多量，雲母，赤褐色粒，角閃石 ②良 ③白黄茶褐色	緩く外反する口縁の内側に粘土紐を貼付。胴部上半に１条の三角凸帯。底部は厚く，上げ底。 外面と口縁内側はナデの上から粗い磨き，内面はナデ仕上げ。	中期初頭	外面は黒色顔料を塗布。 器壁は1.0cm，底部の厚さは3.3cm。
29号	上甕	大型甕	口径 60.4 底径 13.2 最大径 ---- 器高 70.8	①粗砂粒多い，雲母，赤褐色粒，角閃石 ②やや不良 ③灰黄色	未発達の逆「L」字状（三角口縁に近い）口縁部。頸部は僅かに内傾。胴部には１条・2条の三角凸帯を貼付。底部は薄く，上げ底である。 内外面ともハケの上をナデ，底部にハケ残る。	中期初頭	内外面に黒色顔料を塗布する。胴部下半には穿孔。 器壁0.4cm～0.95cm，底部の厚さ2.0cm。
29号	下甕	大型甕	口径 58.3 底径 13.8 最大径 ---- 器高 69.05	①大粒砂粒を含む，雲母赤褐色粒，角閃石 ②良　好 ③茶褐色	逆「L」字状口縁部。頸部は若干内傾し，胴部に１条の三角凸帯を貼付する。底部はやや小さく，厚くつくる。外面はハケ後ヘラ磨き，内面は磨き仕上げ。	中期初頭	外面には黒色顔料を塗布する。口縁部に補修痕あり。器壁の厚さ0.6cm～1.0cm，底部は4.80cm。
30号	上甕	大型甕	口径 60.0 底径 14.0 最大径 ---- 器高 71.0	①細砂粒多く含む，雲母角閃石 ②良　好 ③焦げ茶色	未発達の逆「L」字状口縁部。口縁下と胴部には１条の三角凸帯を付す。底部は薄づくり。 外面上半がヘラ磨き，下半はハケの上からヘラ磨き。内面はヘラ磨きとナデ仕上げ。	中期初頭	外面は黒色顔料を塗布。 器壁は1.0cm～1.4cm， 底部の厚さ2.9cm。
30号	下甕	大型甕	口径 62.6 底径 12.7 最大径 64.8 器高 72.4	①細砂粒多量，雲母，赤褐色粒 ②良　好 ③褐色	未発達の逆「L」字状（三角口縁）口縁部。頸部は内傾し，胴部には１条，見かけ２条の三角凸帯を付す。底部は薄く，上げ底を呈す。 外面はハケの上から磨き，内面は磨きとナデ。	中期初頭	内外面に黒色顔料塗布。 胴部下半に穿孔。 器壁は0.7cm～1.0cm。 底部の厚さは2.0cm。
31号	――	――	口径 底径 最大径 器高	① ② ③			25号甕棺と接合 欠番
32号	上甕	小型甕	口径 28.1 底径 7.3 最大径 ---- 器高 31.9	①細砂粒，赤褐色粒，石英，雲母，角閃石 ②良　好 ③灰黄色～茶褐色	逆「L」字状の口縁部。口縁下には指圧痕。上げ底を呈する。 外面はハケ（上半は摩滅），内面はナデ仕上げ。	中期前半	日常什器
32号	下甕	小型甕	口径 29.0 底径 8.0 最大径 ---- 器高 33.3	①細砂粒を多く含む，赤褐色粒，雲母，石英 ②良　好 ③淡い橙褐色	逆「L」字状の口縁部。口縁平坦面は内傾。頸部も内傾する。底部はやや開き気味で上げ底を呈する。 外面は粗いハケ，内面はナデで仕上げる。	中期前半	日常什器
33号	上甕	大型甕	口径 67.4 底径 13.2 最大径 ---- 器高 88.0	①細砂粒多く含む，雲母赤褐色粒，角閃石 ②良　好 ③明橙褐色	内側に発達した逆「L」字状口縁部。口縁平坦面は内傾。胴部には台形に近い凸帯を貼付。底部は薄くつくる。 内外面ともナデで仕上げる。	中期前半	口縁部外側は粘土の貼りつけが明瞭に観察できる 器壁の厚さ0.8cm～1.0cm。 底部の厚さ2.0cm。
33号	下甕	大型甕	口径 70.0 底径 13.8 最大径 ---- 器高 86.6	①細砂粒多量に含む，雲母，赤褐色粒，角閃石 ②良　好 ③黄橙色	内側に発達した逆「L」字状口縁部。口縁平坦面は水平。胴部には台形に近い凸帯を貼付。底部は薄くつくる。 内外面ともナデで仕上げる。	中期前半	口縁部は上甕とつくりが同じで厚い。 器壁の厚さ1.1cm。 底部の厚さ3.2cm。

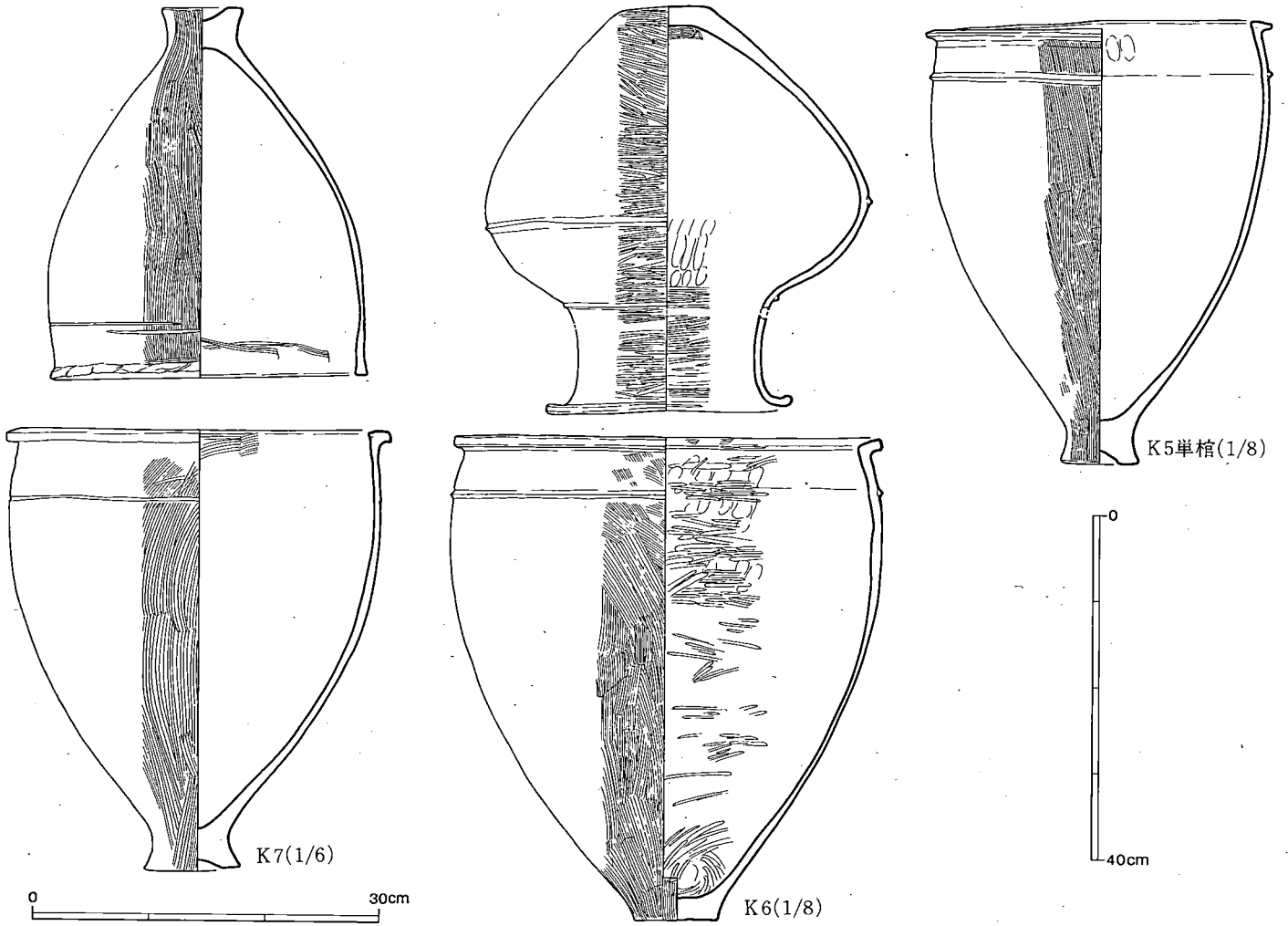
番号		器種	法量（cm）	胎土①・焼成②・色調③	特徴	時期	備考
34	上甕	樽型土器	口径 37.3 底径 16.9 最大径 38.2 器高 35.4	①砂粒，赤褐色粒，角閃石，雲母 ②良　好 ③黄褐色	未発達の「T」字状の口縁部。頸部は内傾し，1条の三角凸帯を付す。胴部は張りがあり，径の大きな底部を有す。 内外面ともヘラ磨きで仕上げる。	中期初頭	内外面とも黒色顔料を塗布。 胴下半は内→外へ穿孔
34	下甕	中型甕	口径 40.0 底径 10.1 最大径 41.4 器高 47.8	①砂粒，赤褐色粒，雲母石英，角閃石 ②良　好 ③暗黄茶褐色	未発達の「L」字状口縁部で肥厚する。頸部は内傾し，1条の三角凸帯を貼付する。最大径が胴部上半にある。底部は厚く，抉ったような上げ底。 外面はハケ，内面はナデで仕上げる。	中期初頭	外面の胴部中央から底部まで光沢のある煤状のものが付着。
35	上甕	中型甕	口径 34.8 底径 9.2 最大径 37.4 器高 47.7	①砂粒を多く含む，雲母，赤褐色粒 ②良　好 ③黄褐色	未発達の逆「L」字状口縁部。頸部は内傾し，1条の三角凸帯が巡る。最大径は胴部上半にある。底部は厚く，上げ底をなす。 外面がハケ，内面はナデで仕上げる。	中期初頭	外面に煤が付着し二次加熱を受ける。 日常什器の転用。
35	下甕	中型甕	口径 40.9 底径 9.3 最大径 41.1 器高 52.0	①砂粒を多く含む，雲母，赤褐色粒 ②良　好 ③茶褐色	逆「L」字状の口縁部。口縁下には1条の三角凸帯が巡る。頸部は内傾し，最大径が胴部上半にある。底部は厚く，抉ったような上げ底で裾部は開く。外面はハケ，内面はナデる。	中期初頭	外面には煤が付着する。 日常什器の転用。
36	上甕	小型甕	口径 31.4 底径 6.6 最大径 32.3 器高 30.7	①大粒砂粒多い，角閃石赤褐色粒，石英，雲母 ②良 ③暗黄茶褐色	未発達の逆「L」字状口縁部。頸部は内傾し，最大径が胴部上半にある。底部は細く平底である。 外面はハケ，内面はナデで仕上げ，下半は摩耗する。	中期前半	外面に煤が付着し，二次加熱を受ける。 日常什器の転用。
36	下甕	小型甕	口径 33.3 底径 ---- 最大径 ---- 器高 ----	①大粒砂粒を含む，雲母赤褐色粒，石英 ②良　好 ③橙褐色	逆「L」字状の口縁部。平坦面は内傾し，頸部も内傾する。 外面はハケ(二次加熱で不鮮明)，内面はナデで仕上げる。	中期前半	外面二次加熱と煤付着。 日常什器の転用。 底部欠損。
37	上甕	鉢	口径 38.4 底径 8.0 最大径 ---- 器高 26.4	①細砂粒，赤褐色粒，雲母，角閃石 ②良　好 ③暗黄茶褐色	逆「L」字状の口縁部。口縁下には1条の三角凸帯が巡る。底部はやや厚くつくる。 外面は磨き，内面はナデと磨きで仕上げる。	中期前半	外面は黒色顔料を塗布する。
37	下甕	中型甕	口径 39.1 底径 8.8 最大径 39.2 器高 46.0	①砂粒，雲母を多く含む赤褐色粒 ②良 ③暗黄茶褐色	短い逆「L」字状口縁部。頸部は内傾し，三角凸帯を貼付する。底部は細まり，僅かな上げ底を呈する。 外面は細いハケ，内面はナデで仕上げる。	中期前半	口縁内～外面にかけて煤が付着。 日常什器の転用。
38	単棺	大型甕	口径 52.0 底径 15.0 最大径 ---- 器高 ----	①粗砂粒，雲母，赤褐色粒，角閃石 ②良 ③暗茶褐色	如意状の口縁部。胴部の張りはなく，中央部に1条の三角凸帯を貼付する。胴部には外→内に穿孔する。外面にはハケの上から磨きをかける。内面はナデで仕上げる。	中期初頭	外面は黒色顔料を塗布。 8号石棺墓に破壊され，破片が4・5・7号祭祀土壙から出土し接合した。



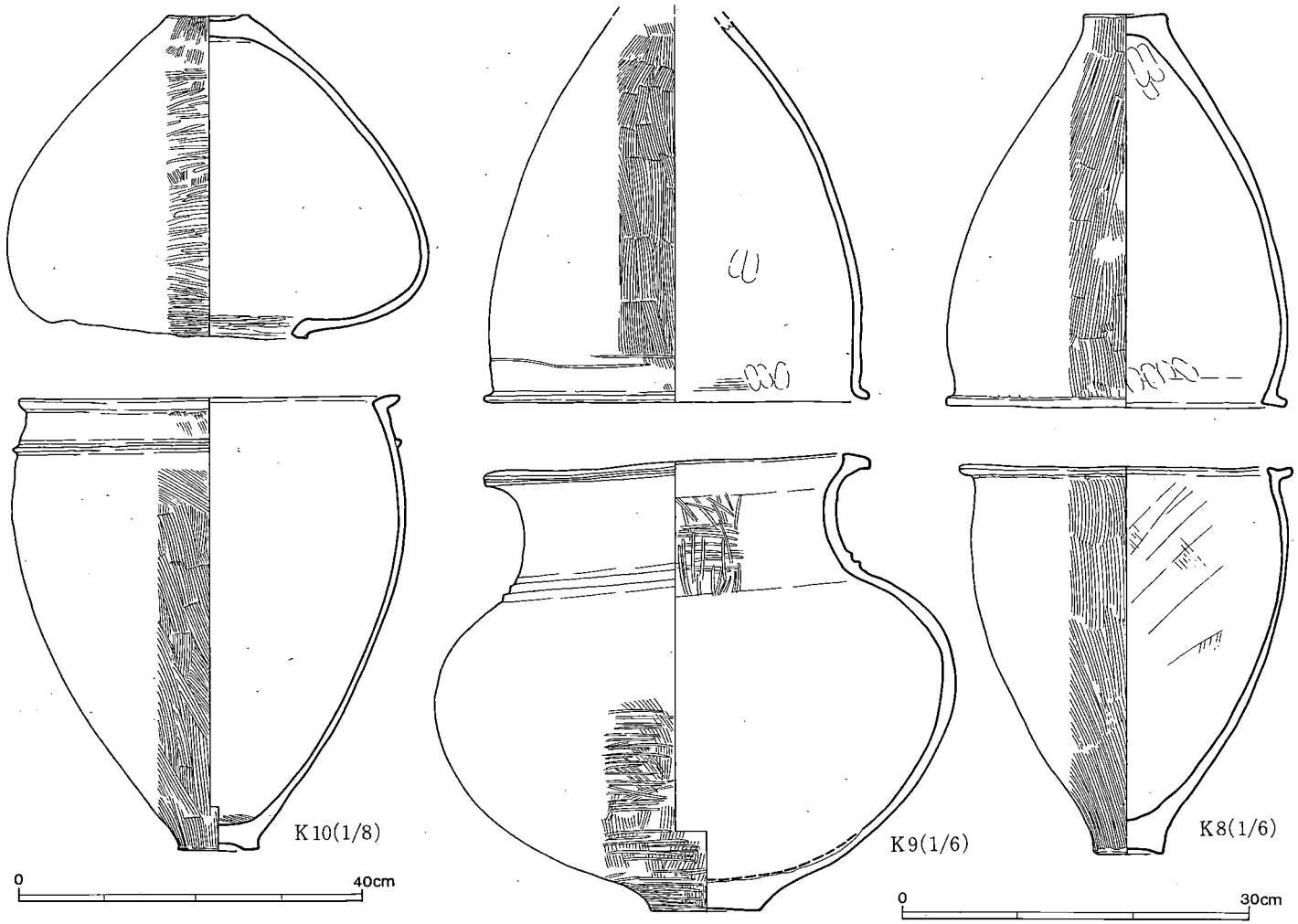
第79図　1号・3号・4号甕棺実測図（1/6・1/8）



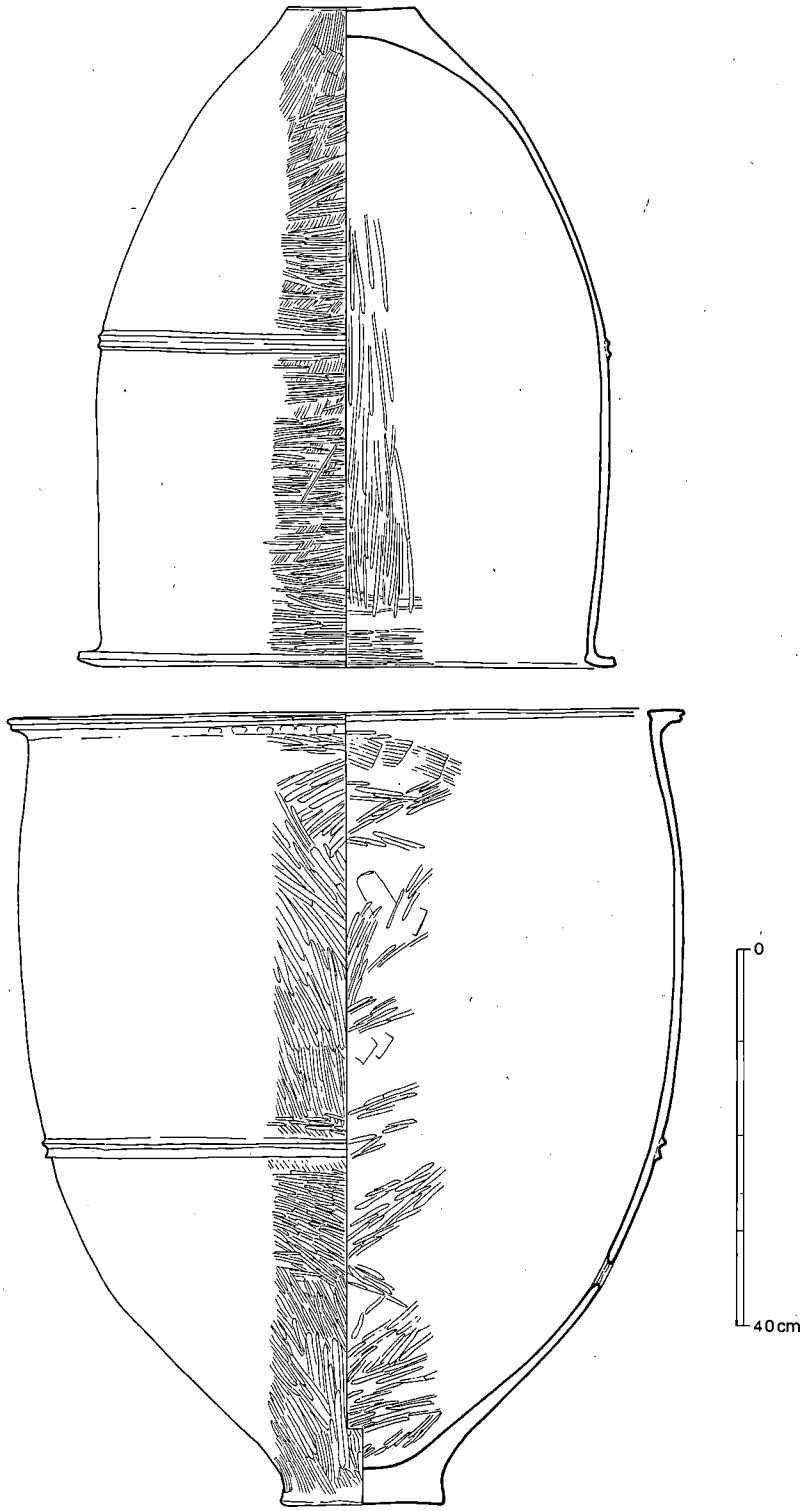
第80図　2号甕棺実測図（1/8）



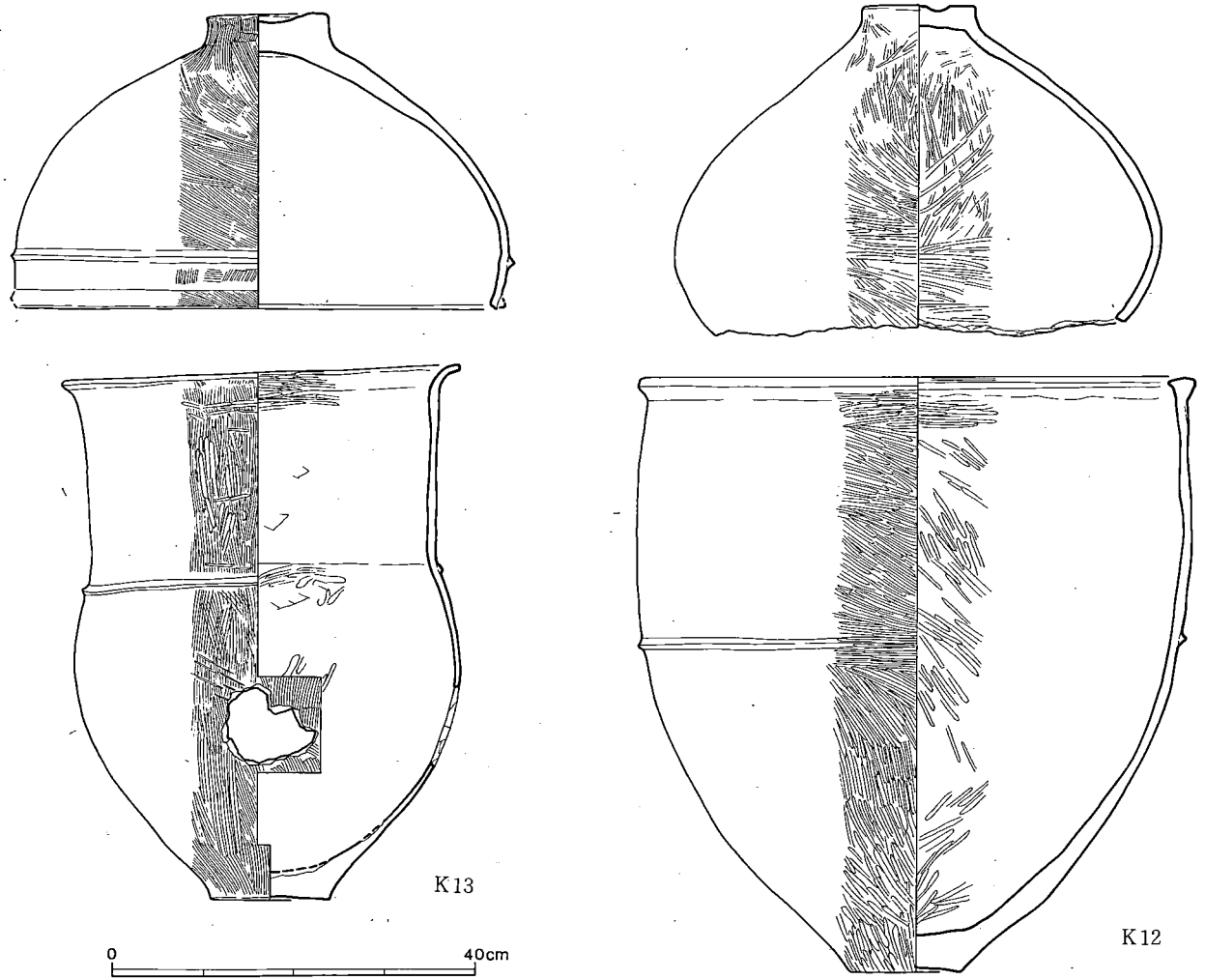
第81図　5号～7号甕棺実測図（1/6・1/8）



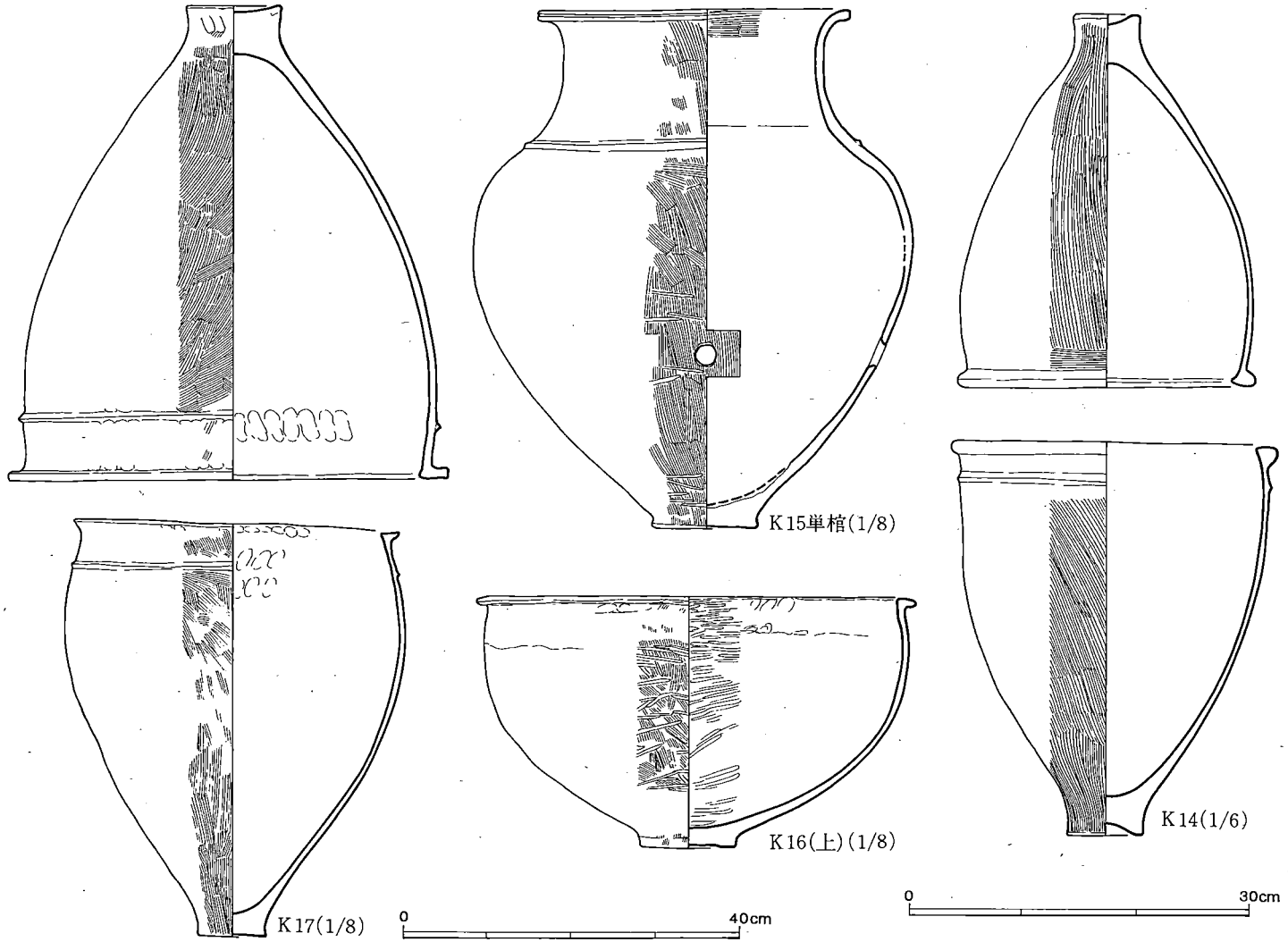
第82図　8号～10号甕棺実測図（1/6・1/8）



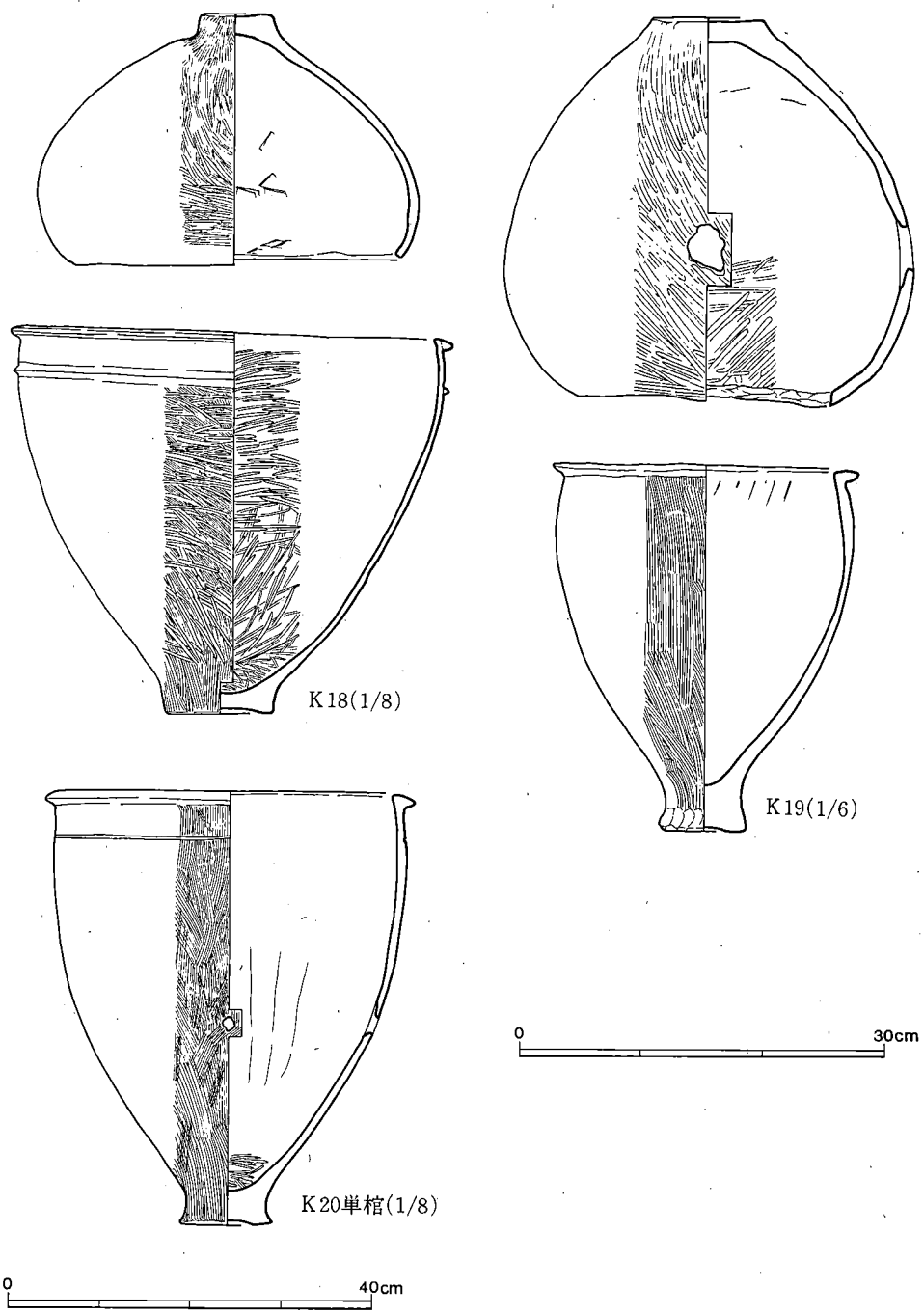
第83図　11号甕棺実測図（1/8）



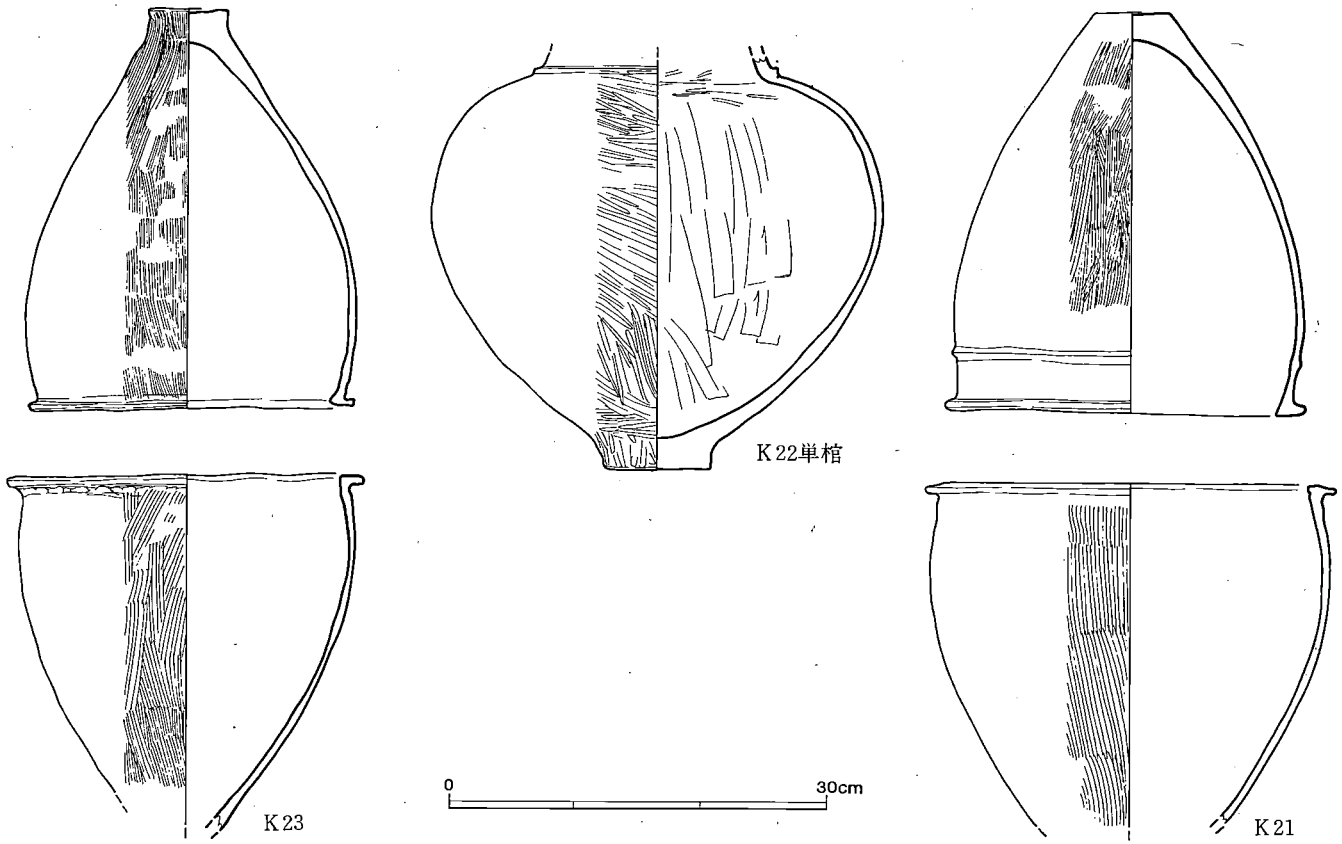
第84図　12号・13号甕棺実測図（1/8）



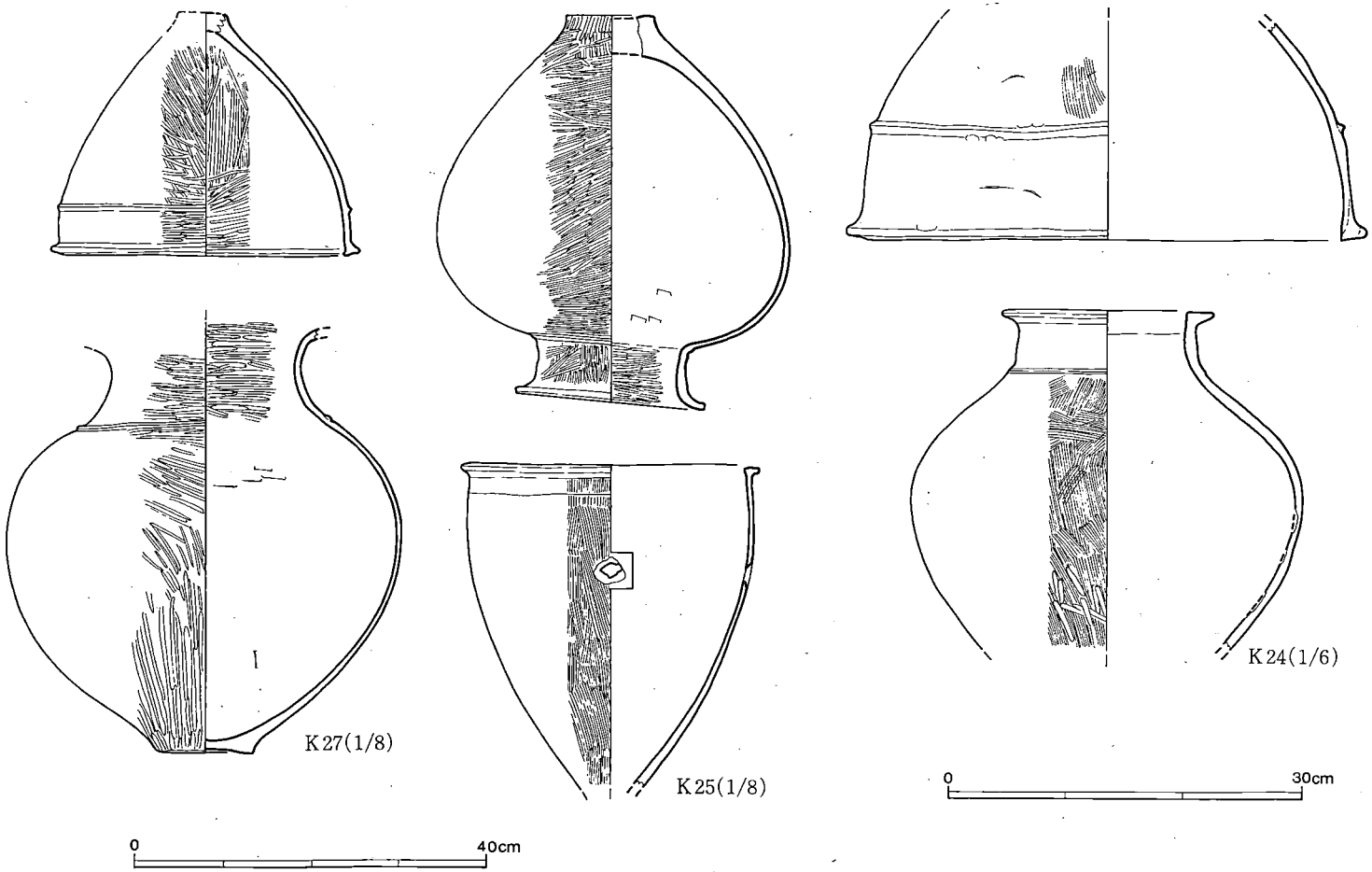
第85図　14号～17号甕棺実測図（1/6・1/8）



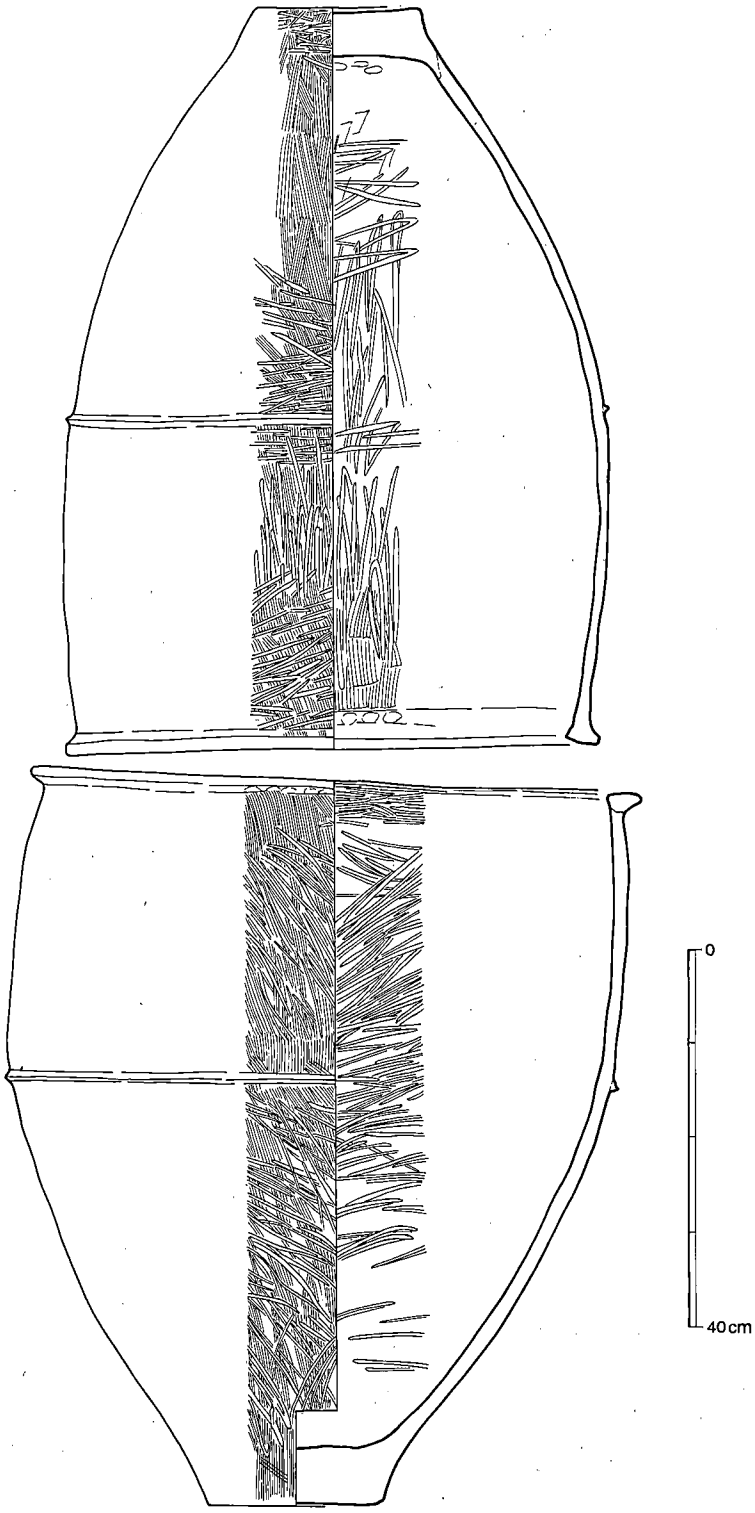
第86図　18号～20号甕棺実測図（1/6・1/8）



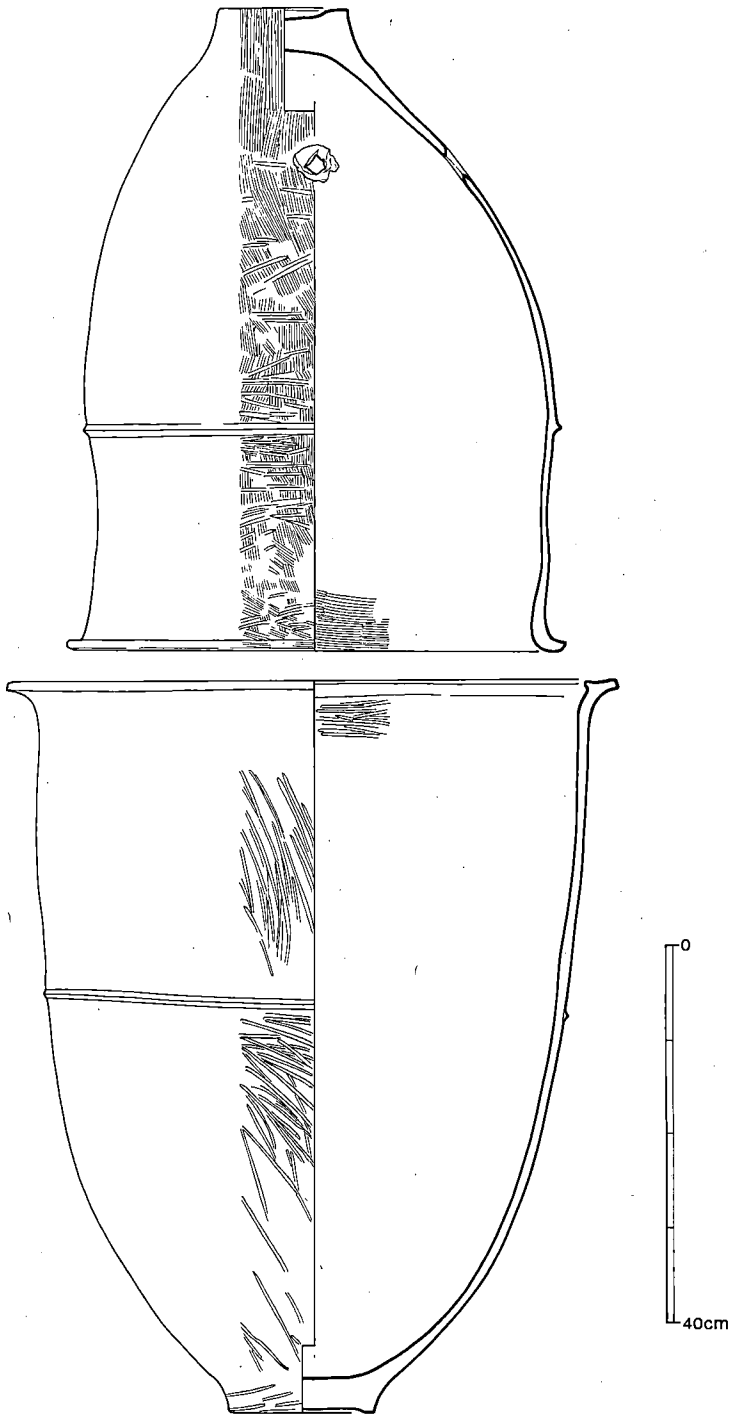
第87図　21号～23号甕棺実測図（1/6）



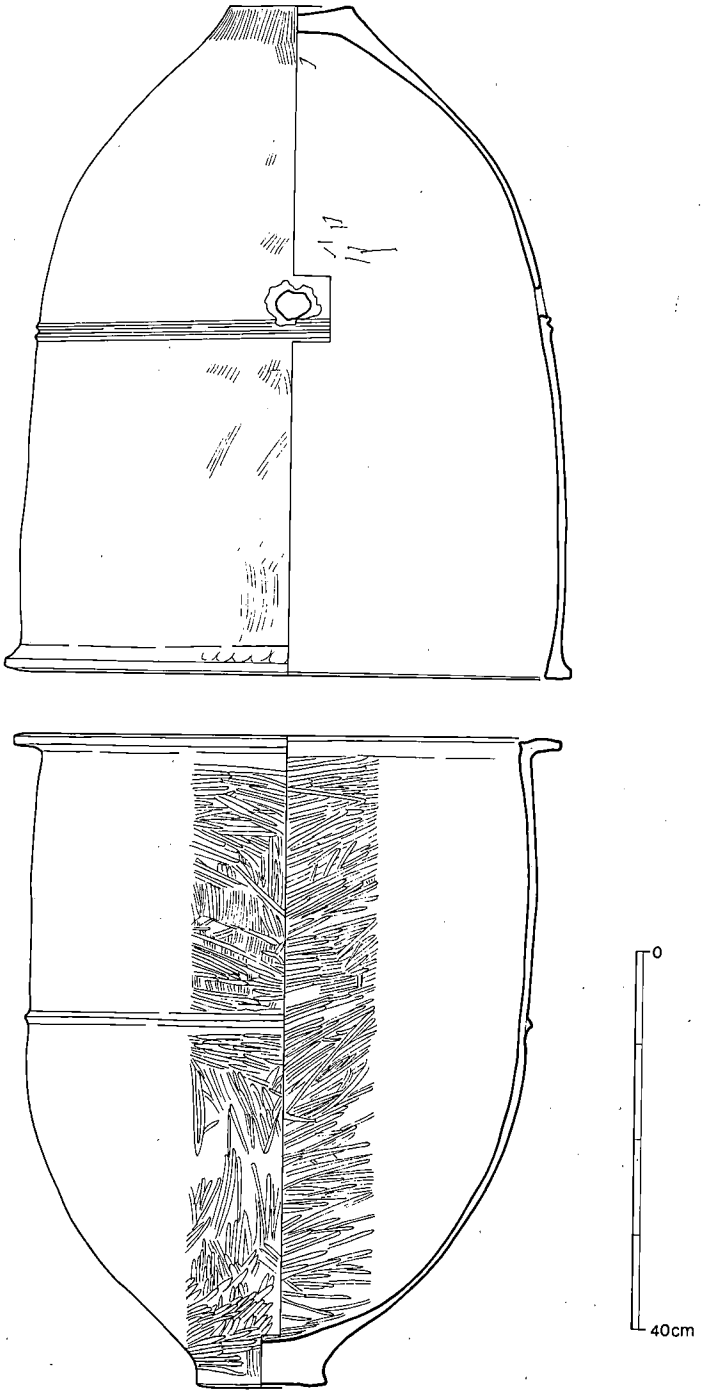
第88図　24号・25号・27号甕棺実測図（1/6・1/8）



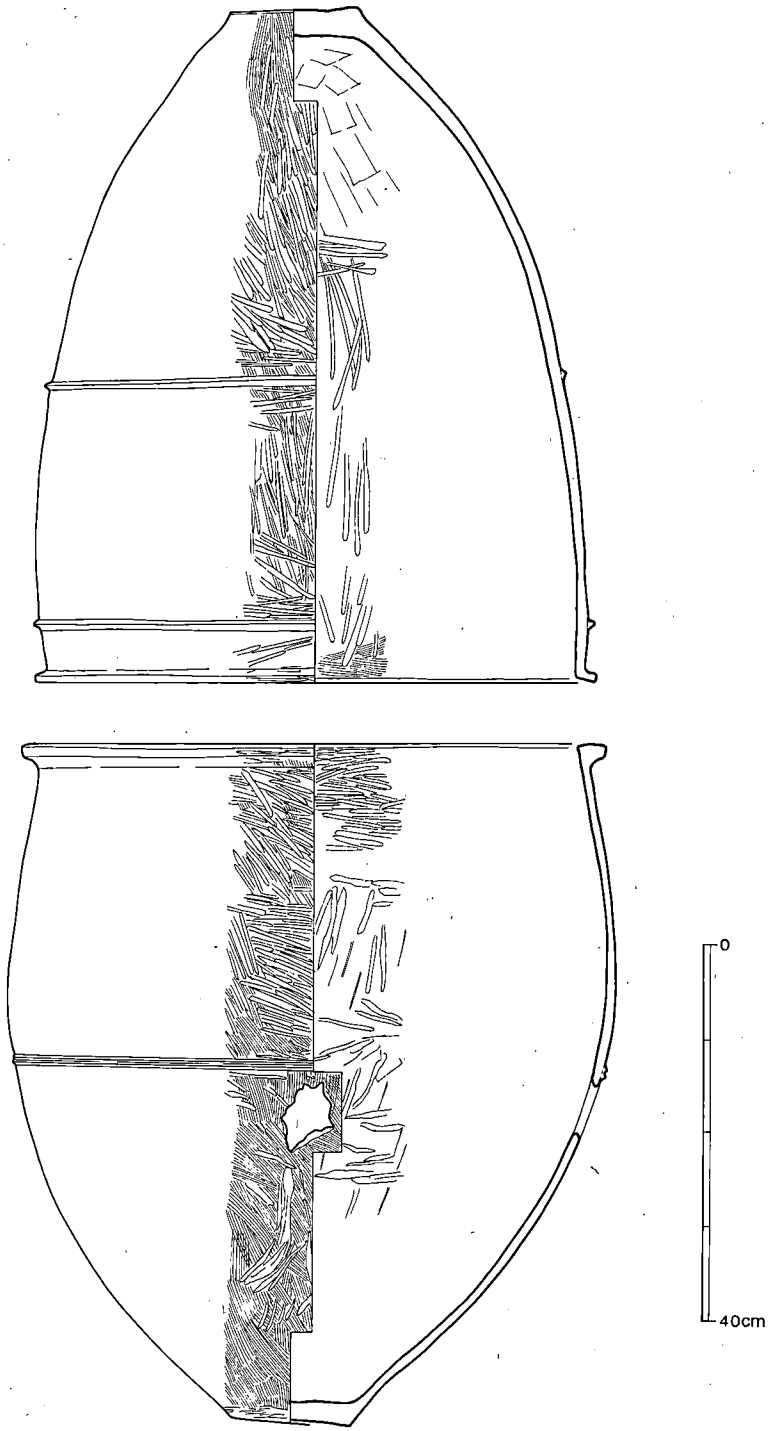
第89図　26号甕棺実測図（1/8）



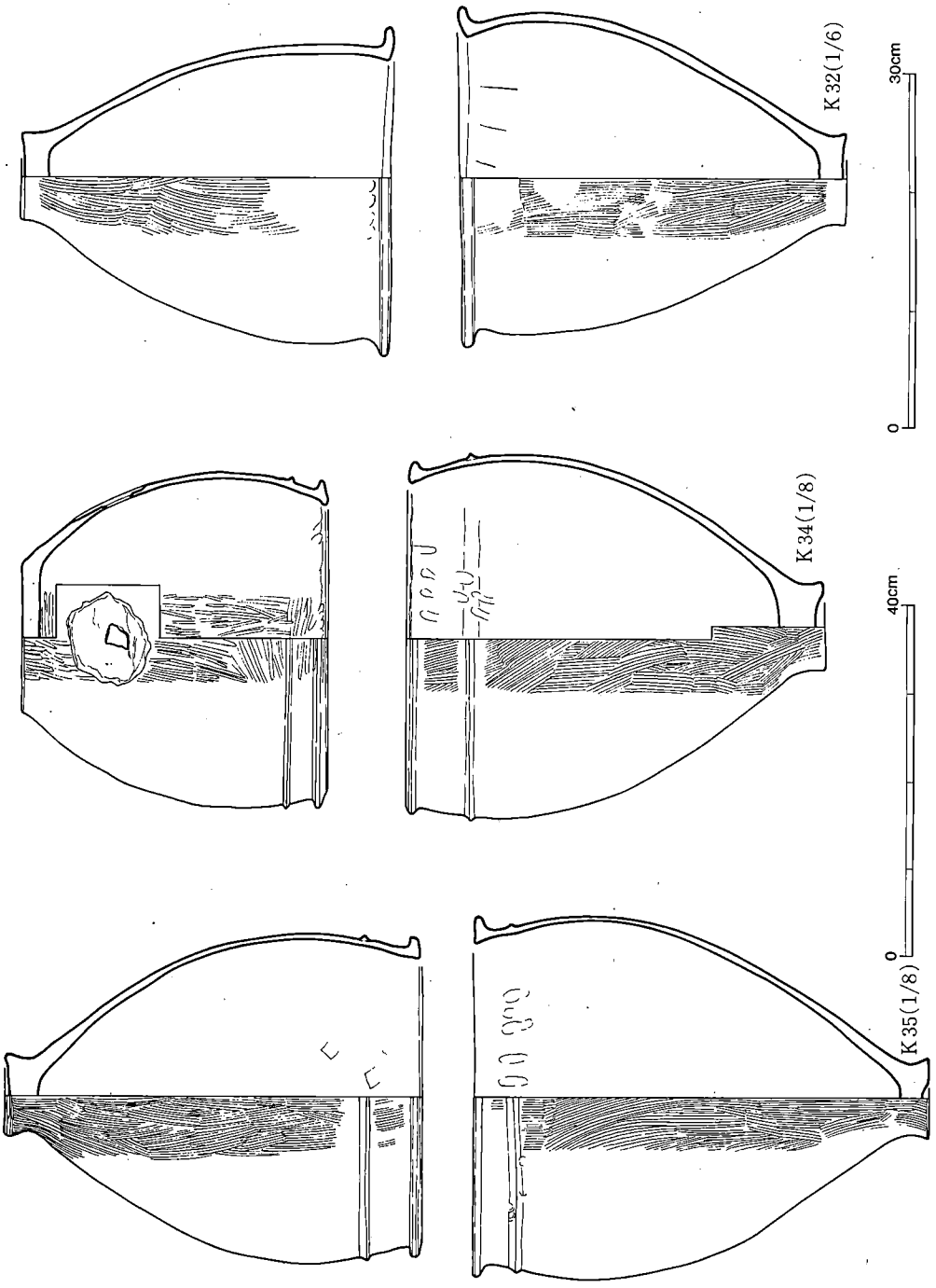
第90図　28号甕棺実測図（1/8）



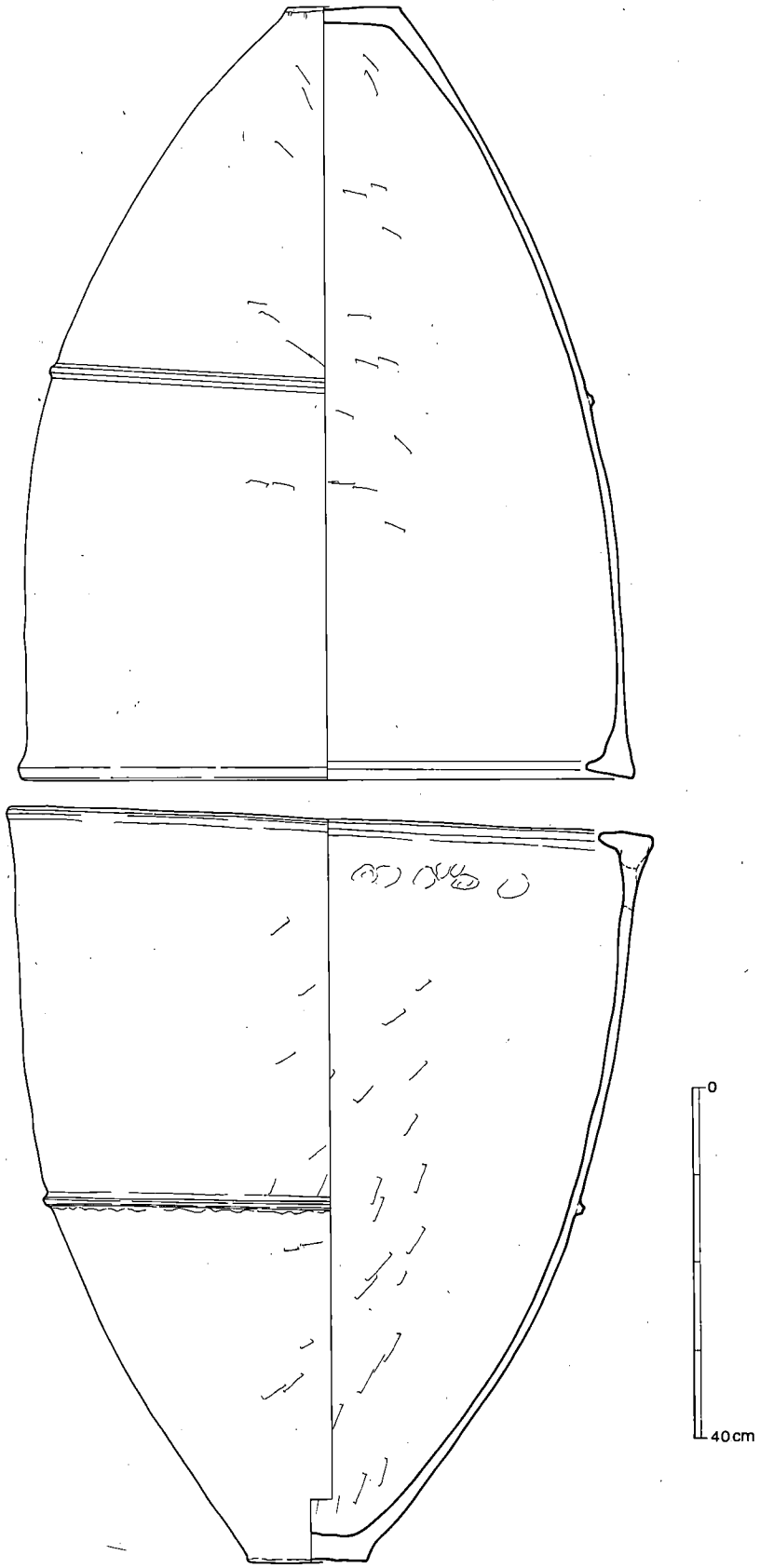
第91図　29号甕棺実測図（1/8）



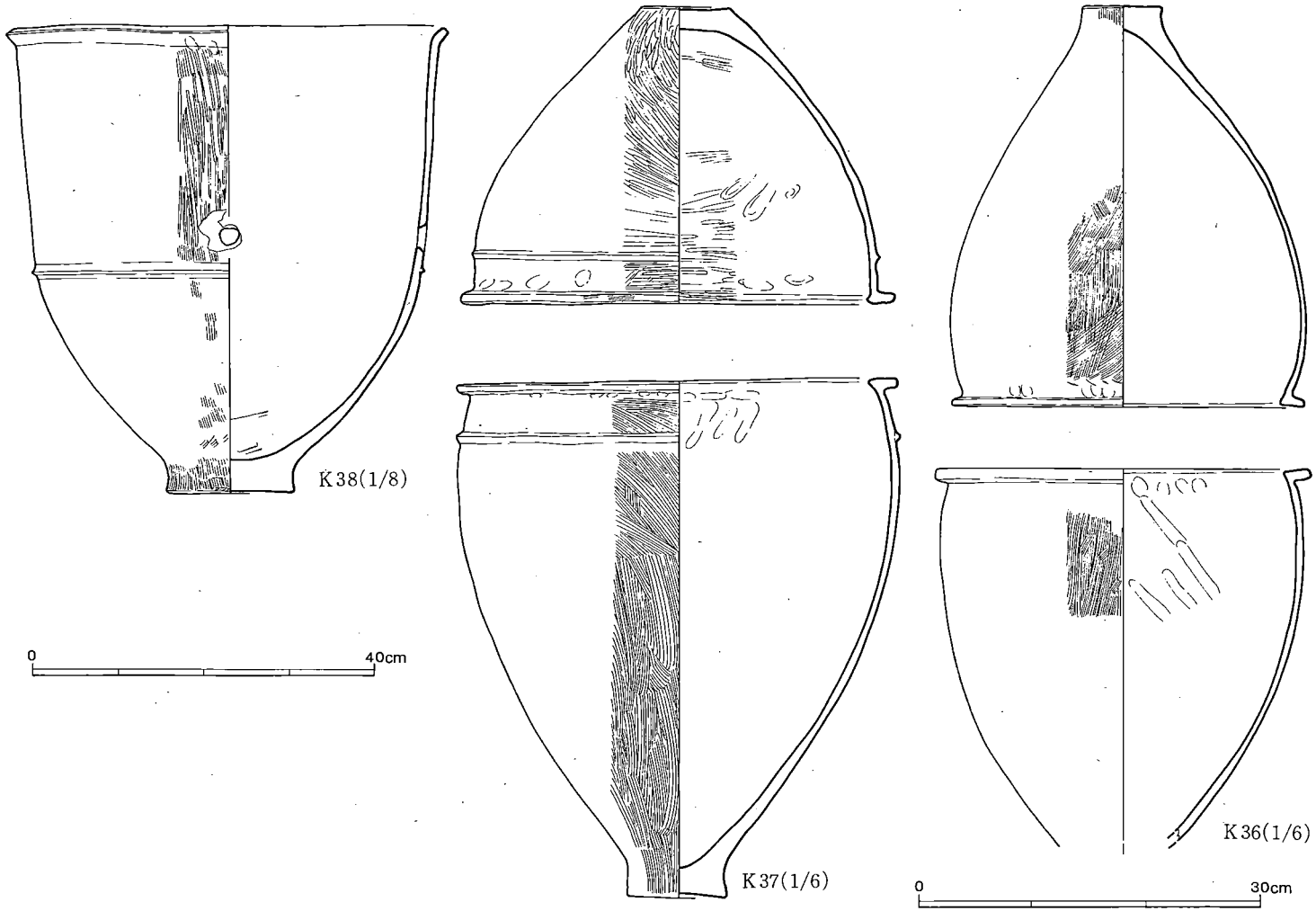
第92図　30号甕棺実測図（1/8）



第93図　32号・34号・35号甕棺実測図（1/6・1/8）



第94図　33号甕棺実測図（1/8）

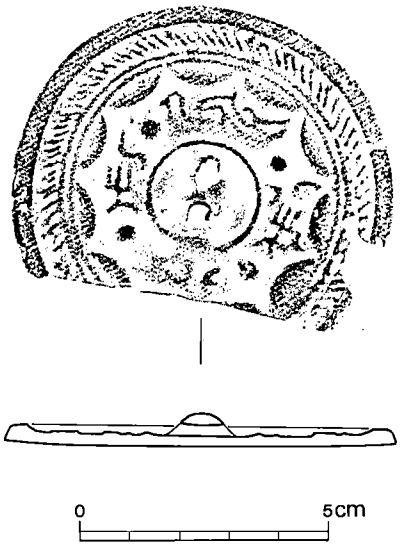


第95図　36号～38号甕棺実測図（1/6・1/8）

② 鏡

29号木棺墓出土の鏡 （図版74－(2), 第96図）

小形仿製鏡 木棺墓の棺材の掘方面で鏡面を上にして出土した鏡で，約1/4を欠損している。欠損部は古く発掘時に破損したものではないことから，残りの破片はこの時期に事例の多い破鏡として何処かの墓に副葬されているであろう。



第96図 29号木棺墓出土鏡拓影（2/3）

小形仿製鏡にしては銅質は非常に良く，現在でも漆黒色を呈している。直径は7.8cmを測り，狭幅の縁をもつ。内側には斜行櫛歯文帯が巡り，圏を挟んで浮彫状に11弧の内行花文帯，その内側には銘帯が抽象化し図文帯化した段階の図柄で，4個の乳状突起，その間には相対峙して龍と鳥を抽象化した図柄と「之」の文字及びS字の抽象文字が鋳出され，さらに鈕の周囲にも一圏が巡っている。この銅鏡は内行花文日光鏡系の仿製鏡で，浮彫り11弧の内行花文帯を巡らす例は長崎県椎ノ浦鏡があるが，酷似した図文帯は「菊隠李養璿蒐集文化財」に掲載されている内行花文日光鏡系仿製鏡の中にあり，これと同笵の鏡が佐賀県大和町礫石から出土している（註）。この2面は大庭・久保出土の仿製鏡と比較すると鏡縁が幅広となり時期的に新しくなる。29号木棺墓出土の鏡は，高倉洋彰氏の分類ではⅠ型b類に属し，時期的には弥生時代後期前半頃に比定される。

（註）高倉洋彰氏から資料の提供を受け教示いただいた。

③ 土　　器

1号土壙墓出土土器 （第97図）

土壙墓の墓壙内から出土した1の壺の口縁部片とやや時期の新しい2の甕の口縁部片があるが，いずれも土壙墓の埋土中から出土した。

1は中期初頭頃の所産であり，口唇部を肥厚させる。小片であることから墓地を掘削する時点での混入土器であろう。胎土には甕棺墓と同様の混入物がある。

2は中期前半頃の特徴を持つ甕で，口縁下に1条の三角凸帯を巡らす。胎土は他の土器と同様で，この土器が土壙墓の時期の可能性がある。

26号土壙墓出土土器 (第97図)

3は土壙墓の墓壙内から出土した中期初頭の甕の口縁部片である。口唇部を肥厚させ，平坦面は外傾する。胎土は甕棺と同じで，白黄褐色を呈する。当該土壙墓はこの時期と同じか，新しい時期の所産であろう。

6号祭祀土壙出土土器 (第97図)

祭祀土壙からの出土遺物は少なく，図示できる土器は4の1点である。前述したように，祭祀土壙の用途が土器の投棄の目的に掘られた土壙でないことを考え合わせると当然の帰結ではあるが，当該墓地群の祭祀土壙の性格を如実に現しているようにも看取できる。

出土した土器は甕の破片で，未発達の逆「L」字状の口縁部を有し，口縁下には1条の沈線を巡らす。調整は外面がハケ，内面はナデで仕上げる。復原口径は24.8cmで，口縁部には二次加熱を受け，日常什器である。

7号祭祀土壙出土土器 (第97図)

この祭祀土壙も土器片の他，箱式石棺墓に使用された緑泥片岩の破片が出土している。このことから，当該祭祀土壙はある程度長期間に機能していたことが分かる。しかし，箱式石棺墓の時期の土器はなく，弥生時代中期初頭頃の小破片と破壊された甕棺の破片が出土した。

5・6は甕の口縁部片と底部片である。5の口縁部は未発達の逆「L」字状を呈し，形態から器高の低いタイプであろう。胎土には細砂粒を含み，黒灰色を呈する。6は分厚い底部をなし上げ底で，中期初頭の特徴をなす。胎土・焼成・色調は甕棺に転用された日常什器と同様である。底径は6.6cmを測る。

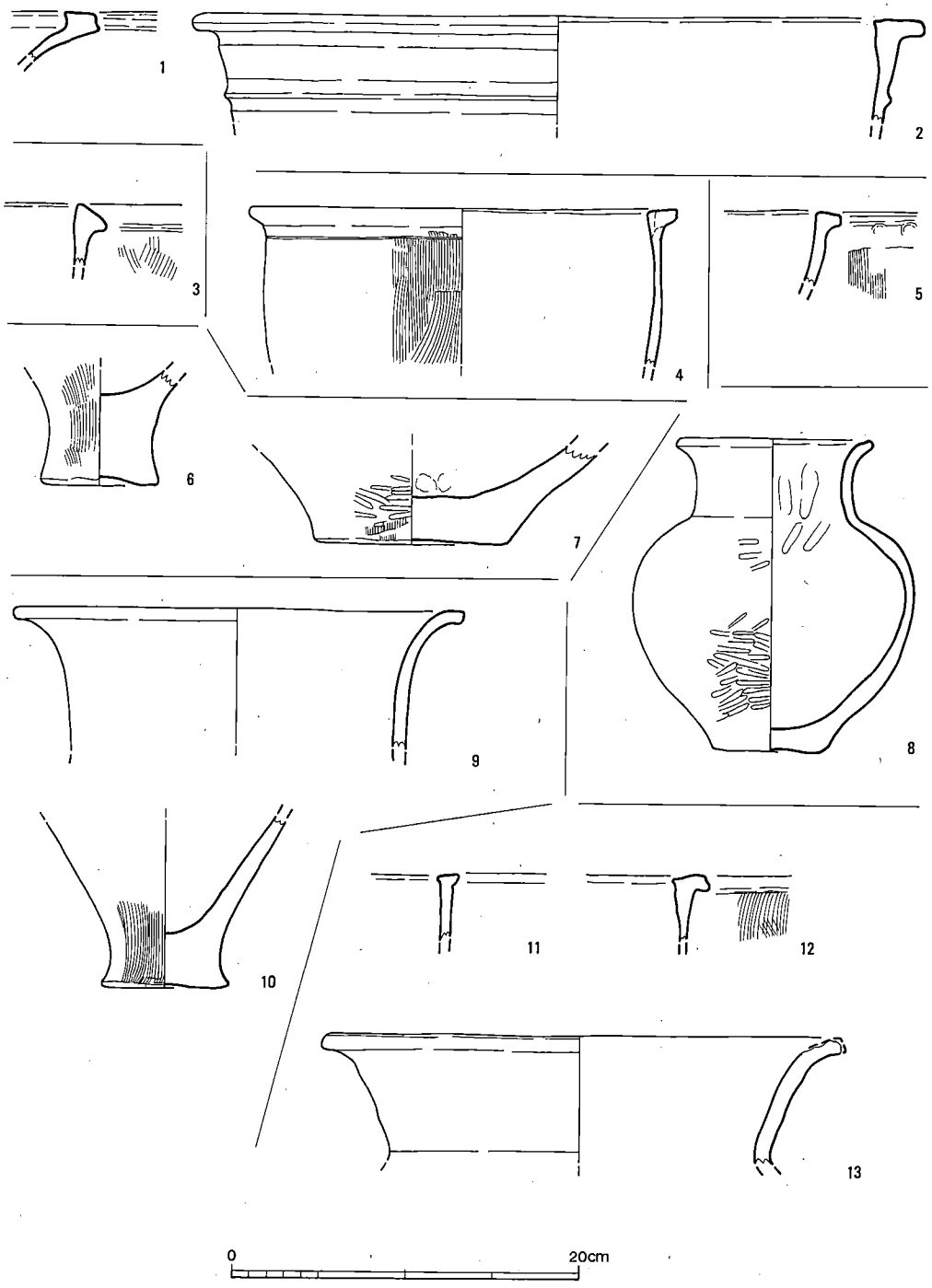
7は壺の底部である。弥生時代中期初頭頃の甕棺墓が破壊されて投棄されたことも考えられるが，接合する甕棺がない。胎土にはやや大粒の砂礫を含み，底径は10.8cmを測る。この他，破壊された38号甕棺墓の底部片が出土している（甕棺と図上復原している)。

8号祭祀土壙出土土器 (図版75，第97図)

8の土壙の底面から出土した壺があるが，出土状態は半分に割れた状態で出土した。口縁の一部を欠損しているが完形品に近く，口縁部は緩く外反し，肩部は張り球状の胴部をなす。底部はやや摩耗し凹凸をなし平底である。

調整は外面をヘラで磨き，内面はナデで仕上げている。胎土は甕棺と同じで，内外面とも黒色顔料を塗布する。復原口径は10,4cm，底径は6,6cm，最大径は胴上半部にあり16,2cm，器高は18,0cmを測る。

祭祀に使用された小壺であろう。



第97図　1号土壙墓(1・2)，26号土壙墓(3)，6号～10号祭祀土壙(4～13)出土土器実測図 (1/4)

9号祭祀土壙出土土器　(図版75, 第97図)

土壙内からは9・10の壺と甕の破片が出土している。9は弥生時代中期初頭頃の壺の口縁部片で，口縁部を緩く外反させ，僅かに平坦面をつくる。胎土は大粒砂粒，雲母，石英が多い。調整は器面の風化が激しく不明瞭であるが，外面の一部に黒色顔料が残っており，ヘラ磨きで仕上げていたのであろう。復原口径は26,2cmを測る。

10は中期初頭頃の甕の底部片で，裾部は開き厚くつくる。胎土にはやや大粒の砂粒が多く含まれ，赤褐色粒も見られる。灰黄褐色を呈し，底径は7.4cmを測る。

10号祭祀土壙出土土器　(第97図)

13は壺の口縁部片で，口縁の外反度は緩く口唇部を若干肥厚させる。調整は器面の摩耗が激しく分からないが，胎土や色調，焼成などで観察すると12号甕棺（壺の打欠き）の上甕と酷似していることから，甕棺を埋葬する際に打欠き片を投棄したと考えられる。そうすると調整はヘラ磨きとなる。外面は黒色顔料を塗布し，復原口径は29,0cmを測る。

11・12は甕の口縁部片で，前者は口縁部を内外に若干突出させるタイプ，後者は未発達の逆「L」字状をなす。すべて中期初頭頃の所産である。

④ 石　　器

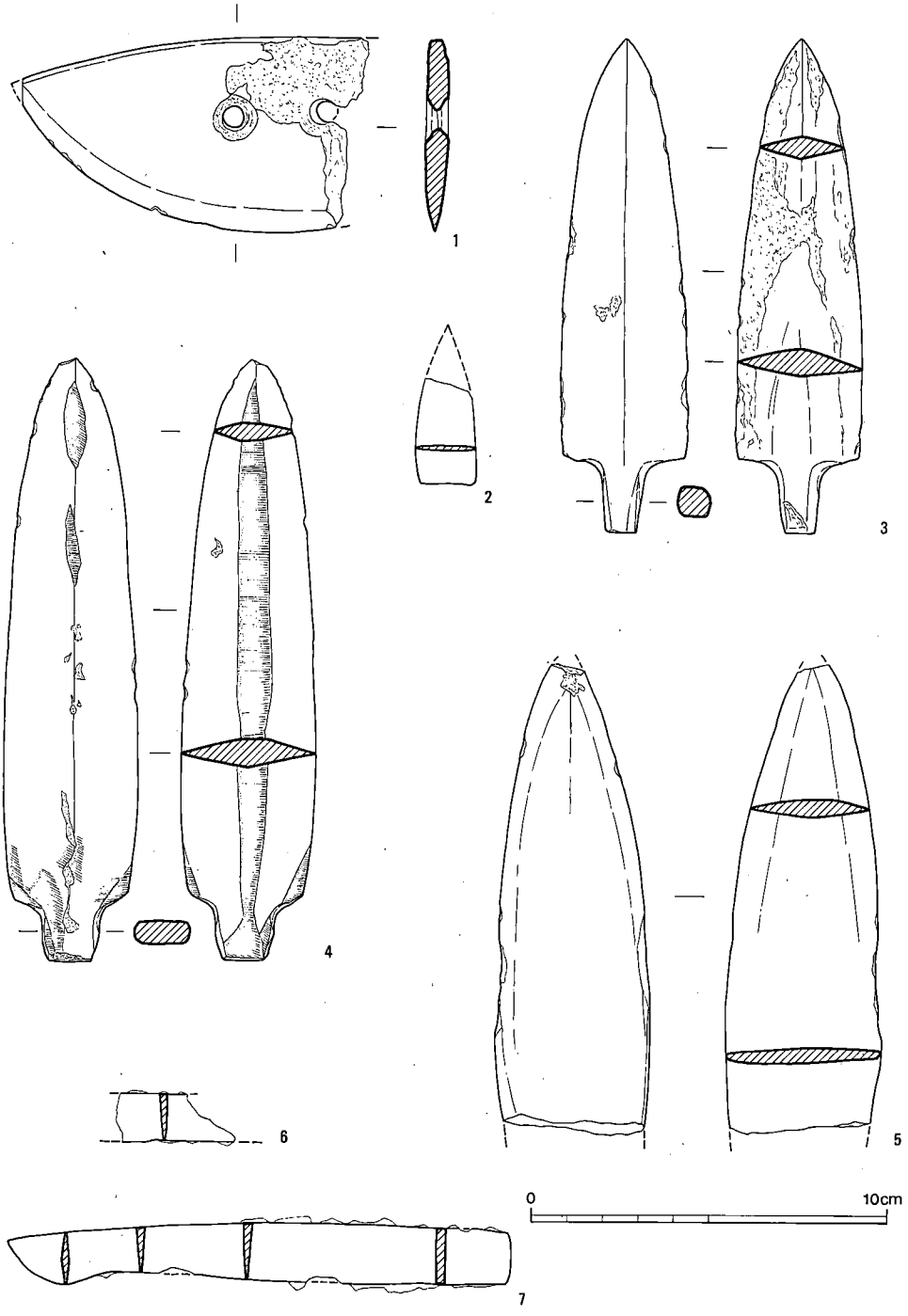
5号甕棺墓出土石器　(図版75, 第98図)

石包丁(1)　5号甕棺墓の墓壙の覆土中，甕棺の底部付近から出土した輝緑凝灰岩製の石包丁である。約1/3が欠損しており，石材は質が悪く不純物が多く混ざる。中央部には穿孔具で穿ったと思われる孔があり，一方の外径は1.3cm，内径は6.0mmを測る。図示した裏面には左側の孔を挟んで穿孔途中の孔があり，その位置から破損した後に再利用しようとしたのかも知れない。刃部は鋭利に研がれており，幅は5.5cm，厚さは6.5cmを測る。

36号土壙墓出土石器　(図版75, 第98図)

磨製石鏃(2)　床面より若干上層から出土した無茎式の磨製石鏃で切っ先を欠損している。石材は堆積岩系の石を使っている。全長を復原すると4.5mぐらいで，最大幅は1.7cm，厚さは1.0mmと薄くつくっている。被葬者の体内に嵌入していたものであろう。

石　剣(3)　土壙墓の床面，被葬者の胸付近から出土した整美な完形の石剣で，副葬品である。刃部はところどころに刃こぼれが見られるが，身の片面中央には明瞭な鎬があり，片面の鎬は切っ先部分のみで中央断面に丸みがある。茎も丁寧につくり出し，断面は円形に近い形である。全長は13.9cm，刃部最大幅は3.5cm，茎長は1.9cmを測り，床面に接していた側は平滑



第98図　墓地群出土の石器，鉄器実測図（1/2）

で，上面は風化しざらついている。

2号祭祀土壙出土石器 （図版75，第98図）

石　剣(4)　祭祀土壙の床面から出土した完形の石剣である。頗るつくりの丁寧な石剣で，堆積岩の縞模様が重厚さをかもしだしている。切っ先と刃部のところどころに刃こぼれが見られる。片面の身の中央には明瞭な鎬が削り出され，一方の面は平坦に研ぎ出している。刃部は鋭利で，表面は平滑である。

全長は復原すると16.9cm，最大幅は3.9cm，厚さは8.0mm，茎の長さは1.3cm，幅は1.7cm，厚さ7.0mmを測り，断面が楕円形に近い形状である。

5号祭祀土壙出土石器 （図版75，第98図）

石　剣(5)　祭祀土壙の床面隅から出土した石剣である。切っ先と茎部を欠損しているが，身の基部は刃を研ぎ出していない。片面の切っ先部に鎬をつくり，一方の面は平坦である。刃部の中央付近には僅かな抉り込みが両方に見られ，おそらく製作途中で欠損したため刃部を研ぎ出さず，木製の茎を装着し緊縛したことが考えられる。石材は他の2本と同じである。現存長は13.2cm，最大幅は4.4cmを測る。

⑤ 鉄　　器

1号箱式石棺墓出土鉄器 （図版75，第98図）

刀　子(6)･(7)　床面上から出土した刀子が2本あるが，そのうちの1本は小片で床面から若干上層の攪乱土から出土した。もう1本は完形で被葬者の左側に副葬されていた。この石棺は脚側が後世の攪乱を受けていることから，出土した小片はその時点で破損したと考えられる。6の幅は1.3cmで，厚さは2mmと薄作りである。7は完存の刀子であるが，通常の刀子とは形状を異にしている。つまり，切っ先部が刃部より幅広につくられ，この部分は諸刃となり，一旦すぼまった後に通常の刃部となる。関部は不明瞭で，柄の痕跡はない。全長は14.2cm，厚さは2.0mmを測る。

この刀子は実測段階で先端部の膨らみに疑問を抱きエヤーブラシで精査した結果によるもので，このようなタイプの刀子の出土例を知らないが，類似したタイプとしては築上郡太平村下唐原に所在する穴ケ葉山墳墓群の2号石蓋土壙墓（大平村教育委員会「穴ケ葉山墳墓群」－大平村文化財調査報告書・第7集－1991）から出土した刀子がある（註）。この墳墓群は第2次調査で多数の石蓋土壙墓が調査され，鏡片や数多くの鉄器が副葬されていた。時期的には弥生時代後期末～古墳時代にかけての墳墓群である。

穴ケ葉山から出土した刀子は切っ先を僅かに欠くがほぼ完形品で，長さは12.1cm，最大幅は1.21cm，厚さは6.0mmを測り，鹿角装の柄を装着する。この先端部は１号箱式石棺墓出土の刀子と同じように先端部の膨らみがつくられ，当該出土の刀子と異なる点は背部が膨らみ諸刃としている点であろう。

（註）調査担当者の承諾を得た上で，横田義章氏から指摘を受けて記述した。

（3） 大庭・久保遺跡出土の弥生人骨

中橋孝博
九州大学比較社会文化研究科

はじめに

北部九州は衆知のように，例外的に大量の弥生時代人骨が出土している地域であるが，その中にも幾つか資料密度の希薄な，あるいは空白のまま残された部域が含まれている。筑後川の中，上流域に当たる筑紫平野の東部もまたその一つである。従来出土している弥生人骨の地域傾向から見て，当地はいわゆる渡来系弥生人分布域の周辺部に近いと考えられ，北部九州に流入した新しい形質が，地域や時代と共にどのような拡散状況を見せるのかを探る上で興味深い一帯となっている。

1985年度の，九州横断自動車道建設工事に伴う福岡県教育委員会による発掘調査によって，新たに２体の弥生人骨が出土した。資料数，保存状態ともに，この地域を代表させるにはまだ十分なものではないが，人骨を精査する機会を得たので，ここにその結果を報告する。

遺跡・資料・方法

大庭・久保遺跡は，福岡県朝倉郡朝倉町大字大庭字久保に所在する。九州横断自動車道建設に伴う一連の発掘調査の中で，当遺跡は1985年，福岡県教育委員会によって調査され，弥生時代の100基余りの墓が検出された。墓地は，木棺墓（33基），石蓋土壙墓（９基），土壙墓（40基），甕棺墓（38基），箱式石棺墓（８基）など，非常に多彩な埋葬施設を持ち，木棺墓の一つからは，小形仿製鏡が，また墓地に伴う祭祀遺構からは石剣なども出土している。

人骨はこの内，石蓋土壙墓と，石棺墓からそれぞれ１体づつ出土した。所属時代は，表３にも示したように，石蓋土壙墓出土のものは弥生時代中期初頭から前葉，石棺のものは弥生時代後期前葉以降のものと考えられている。保存状態は不良ながら，１号人骨では顔面や四肢の一

第３表　大庭・久保遺跡出土の弥生人骨

番号	性	年齢	時代	埋葬施設	保存状態
１号	男性	老年	弥生・中期・初～前葉	石蓋土壙	頭，四肢骨
３号	（男性）	成年	弥生・後期・中頃	箱式石棺	破片のみ

部の計測値が得られた。

計測は主にMartin-Saller（1957）に従い，その他，鼻根部の計測には鈴木（1963）の，顔面平坦度の計測は山口（1973）に従った。また，性判定には四肢骨計測値に基づく方法を（中橋，1988）を援用した。

結　果

3号石棺人骨は保存不良で，頭蓋，四肢の小片しか遺存していないので，以下では1号石蓋土壙墓人骨についての分析結果を示す。

§「1号石蓋土壙墓人骨」

1．頭蓋骨

計測結果を比較群と共に表4に示した。

脳頭蓋は保存不良で，その特徴を窺うのは困難だが，顔面は比較的良好に残っており，全体的にやや低顔傾向が見られた。上顔高は65㎜に留まり，表10の比較結果でも明らかなように，北部九州出土の甕棺人骨の平均値とは大差が認められる。むしろ西北九州弥生人や縄文人の平均値に近く，その示数（上顔示数：65.0）にも同傾向が見られる。鼻型もまたかなりの広鼻傾向を示すが，ただ，眼窩示数（85.0）のみ，かなり高値を見せて北部九州弥生人の平均をも上回っている。なお，表には示さなかったが鼻根部はかなり扁平で，鼻根彎曲示数は90.9となり，北部九州弥生人と大差無い。全体的に顔面の扁平性は強い。

第4表　主要頭蓋計測値の比較（男性）

		大庭・久保（弥生）	北九州[1]（弥生）		土井ケ浜[2]（弥生）		西北九州[3]（弥生）		広田*（弥生）		津雲・吉胡[4]（縄文）		西南日本[5]（現代）	
			N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
8	頭蓋最大幅	(138)	117	142.4	54	142.6	20	144.9	25	147.2	62	144.9	108	139.3
46	中顔幅	(100)	114	104.7	37	103.4	17	105.0	10	99.6	31	103.8	107	99.9
48	上顔高	65	114	74.8	35	72.4	17	68.1	12	62.9	28	66.3	92	71.8
48／46	上顔示数(V)	65.0	105	71.5	31	70.0	17	64.8	10	63.7	22	63.1	91	71.8
51	眼窩幅（左）	40	89	43.2	38	42.7	15	43.1	9	43.4	40	43.2	108	43.0
52	眼窩高（左）	34	93	34.5	40	34.2	15	32.8	9	31.8	38	33.2	108	34.4
52／51	眼窩示数(左)	85.0	86	79.9	38	80.1	15	76.2	8	74.2	32	77.5	108	80.2
54	鼻幅	29	117	27.1	38	27.1	16	27.8	12	25.9	36	26.5	108	25.9
55	鼻高	49	116	52.8	39	53.1	16	51.0	12	45.5	30	48.1	108	52.2
54／55	鼻示数	59.2	113	51.4	37	51.0	16	54.4	11	56.4	27	54.7	108	49.8

＊：広田＋鳥ノ峯　1）中橋・永井(1989)，2）金関，他(1960)，3）内藤(1971)，4）清野・宮本(1928)，金高(1928)，5）原田(1954)

2．四肢骨

表5に，計測できた橈骨，尺骨，大腿骨の計測結果を比較群と共に示した。それぞれ骨体のみで，最大長などは不明である。得られた部位の結果で見る限りは，比較的太く，やや頑丈な特徴を見せている。

骨体断面で気づく点として，尺骨がやや高い示数値(87.5)，つまり前後に厚い骨体を持っている点を指摘しておきたい。この示数値には，いわゆる渡来系の弥生人と西北九州弥生人や縄文人との間に比較的はっきりした差が現れ，今回得られた大庭・久保人は，どちらかというと西北九州弥生人等の値に近い。

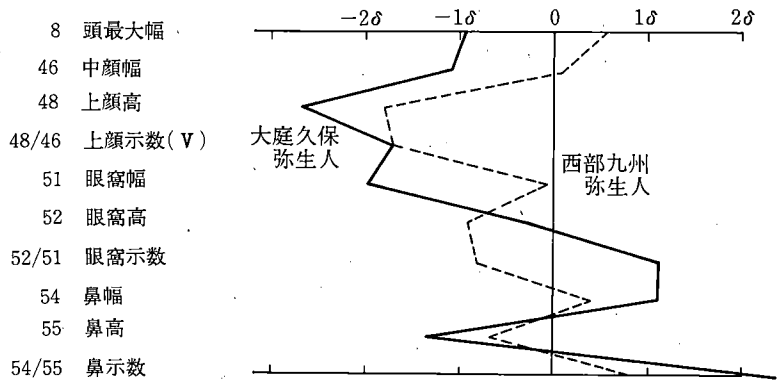
第5表　四肢骨計測値（男性、左）

		大庭・久保（弥生）	北部九州（弥生）		山口（弥生）		大友[1)]（弥生）		津雲[2)]（縄文）		九州[3)]（現代）	
			N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
撓骨												
4a	骨体中央横径	17	50	16.0	33	16.0	25	16.4	−	−	63	15.2
5a	骨体中央矢状径	13	50	12.6	34	12.4	26	12.4	−	−	63	11.9
5a／4a	中央断面示数	76.5	50	78.6	33	77.8	25	75.2	−	−	−	−
尺骨												
11	矢状径	14	100	13.2	49	13.2	26	15.0	50	14.3	63	12.8
12	横径	16	100	17.6	49	17.2	50	16.3	64	16.5	64	16.5
11／12	骨体断面示数	87.5	100	75.4	49	77.2	26	88.0	50	88.5	63	74.9
大腿骨												
6	中央矢状径	29	162	29.7	72	29.1	41	28.6	47	29.0	59	26.5
7	中央横径	27	166	28.0	72	27.2	42	26.4	47	26.0	59	25.6
8	中央周	90	161	90.8	72	88.9	41	87.0	47	87.4	59	82.4
6／7	中央断面示数	107.4	162	106.4	72	107.6	41	108.6	47	111.8	58	103.8

1）松下(1985)，2）清野・平井(1928)，3）阿部(1955)，溝口(1957)

総括・考察

1985年度の，九州横断自動車道建設に伴う発掘調査によって，福岡県南部の朝倉町大庭・久保遺跡から，2体の弥生人骨が出土した。弥生人骨が大量に出土している北部九州でも，甕棺以外の石蓋土壙墓から人骨が出土することはごく稀である。埋葬施設の違いが，その被葬者の形質とどの様な関係を示すのか，その点は北部九州域における人類学上の残された課題の一つである。当地はまた，甕棺分布域の辺縁にあたり，いわゆる渡来人的形質の地理的広がりを検証する上でも，重要な意味を持っていよう。



第99図　北部九州弥生人を基準とした偏差折線図

今回出土した人骨は残念ながら保存状態が悪く，充分にはその特徴を明らかに出来なかったが，僅かながら得られた結果の中で注目される点として，高顔を主特徴とする甕棺弥生人とは異なって，かなり低顔傾向を見せた点を上げておきたい。前腕の尺骨骨体に見られた高示数値も，あるいは西北九州弥生人等との類似性を示唆するものであろうか。ただ，全体的にこれら土着タイプとされる弥生人や縄文人などに明確な類似性を見せているという訳でもなく，鼻根部は強度の扁平性を見せるし，眼窩も高型に傾き，いわば両者の特徴がモザイク状に混在した形となっている。果たしてこれが当地の弥生人の地域性，あるいは石蓋土壙墓の被葬者としての特徴をどの程度表したものか，まだ僅か一体での結果であり，有意の議論には資料の追加を待つ必要があろうが，ただ，以上の結果で判断する限り，甕棺弥生人とは異なる幾ばくかの差異のある可能性を示唆する結果とも考えられ，渡来系形質の地理的広がりを考察する上でも興味深い事例と考える。今後の資料の追加が待たれる。

謝辞

当人骨を研究する機会を与えていただき，種々御教示いただいた福岡県教育委員会の諸先生に深謝いたします。

文　献

阿部英世(1955)：「現代九州人大腿骨の人類学的研究」，人類学研究 2

原田忠昭(1954)：「現代西南日本人頭骨の人類学的研究」，人類学研究 1

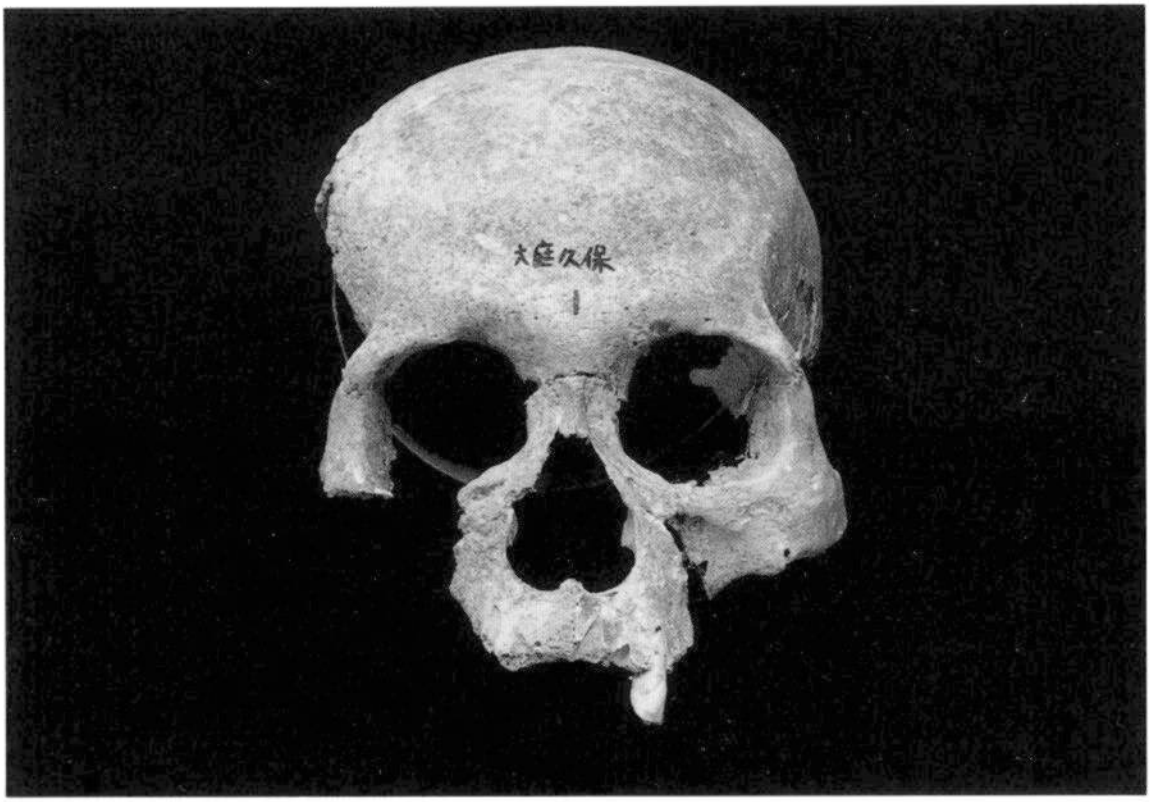
金関丈夫・永井昌文・佐野一(1960)：「山口県豊北町土井ケ浜遺跡出土の弥生式時代人頭骨」人類学研究 7

金高勘次(1928)：「吉胡貝塚人骨の人類学的研究」，人類学雑誌43

清野謙次・宮本博人(1926)：「津雲貝塚人人骨の人類学的研究，第 2 部，頭蓋骨の研究」，

人類学雑誌41
清野謙次・平井隆(1928)：「津雲貝塚人人骨の人類学的研究，第3部，上肢骨の研究，第4部，下肢骨の研究」，人類学雑誌43，第3，4付録
Martin-Saller(1957)：Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1.Gustav Fischer Verlag. Stuttgart
松下孝幸(1985)：「佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨」，大友遺跡，佐賀県呼子町文化財調査報告書1
溝口静男(1957)：「現代九州日本人前腕骨の人類学的研究」，人類学研究4
内藤芳篤(1971)：「西北九州出土の弥生時代人骨」，人類学雑誌79
中橋孝博(1988)：「古人骨の性判定法」，日本民族・文化の生成（永井昌文教授退官記念論文集），六興出版
中橋孝博・永井昌文(1989)：「弥生人の形質，男女差，寿命」，弥生文化の研究1，雄山閣出版
鈴木　尚(1963)：「日本人の骨」，岩波新書477
Yamaguchi B.(1973)：Facial flatness measurements of the Ainu and Japanese crania. Bull. Natn. Sci. Mus. Tokyo,16

1号石蓋土壙墓人骨出土状態



1号石蓋土壙墓人骨

（4） 大庭久保遺跡出土の赤色顔料

本田光子
福岡市埋蔵文化センター
川村秀久
(財)九州環境管理協会

はじめに

大庭・久保遺跡1号箱式石棺墓出土の赤色物が何であるかを知るために，顕微鏡観察とX線分析を行い，その種類や特徴を調査した。

大庭・久保遺跡では，弥生時代中期初頭～前葉，後期の木棺墓33基，土壙墓40基，中期初頭～前葉の甕棺墓38基，石蓋土壙墓9基，箱式石棺墓8基の墓が検出されている。赤色顔料が認められたのは甕棺墓1基，土壙墓1基および箱式石棺墓4基である。これらのうち，1号箱式石棺墓の赤色物について提供を受けた。1号箱式石棺墓では，石蓋内面が赤く塗られ，棺内床面全体が赤かったという。床面では特に頭胸部と思われる位置が赤色が濃かったという。他に墓壙内の石棺長側石横に赤色物のまとまりが検出されている。提供を受けた赤色物は，頭胸部部分のものである。

墳墓出土例や土器・木器等の彩色例に関する現在までの知見に寄れば，出土赤色物は鉱物質の顔料であり，酸化第2鉄Fe_2O_3を主成分とするベンガラと，赤色硫化水銀HgSを主成分とする朱の2種類が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては，四三酸化鉛を主成分とする鉛丹があるが，出土例はまだ確認されていない。ここでは，これら三種類の赤色顔料を考えて調査を行い，若干の考察を試みる。

試　料

赤色物の出土状況は第47図のようであり，提供を受けた赤色物は，赤色の粉末が凝集した小塊が多量に混じった土砂であり，小礫も含めて約360gである。赤色粉末の小塊を実体顕微鏡下で調整（混入土砂等の除去）し，針先に付く程度を採りプレパラートを作製した。提供を受けた赤色粉末を含む土砂の全量を縮分し研和したものを，蛍光X線分析の試料とした。

顕微鏡観察

光学顕微鏡により透過光・反射光40～400倍で検鏡した。検鏡の目的は，赤色顔料の有無・状態・種類を判断するものである。古代の赤色顔料としてはベンガラ（酸化第二鉄），朱（硫化水銀），鉛丹（四三酸化鉛）の3種類が考えられるが，三者は特に微粒のものが混在していなければ，粒子の形状，色調等の違いから検鏡により見極めがつく。

今回の試料には，赤色顔料としてはベンガラ粒子だけが認められ，朱粒子は認められなかった。試料のベンガラは破砕されたような大きめな粒子も僅かに認められるが，大半はやや扁平

で透明度の高い非常に細かい（1,2μm以下）粒子といわゆるパイプ状を呈する透明感の強い管状粒子（20～70μm）が多量に含まれるベンガラである。

蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。理学電機工業㈱製蛍光X線分析装置を用い，X線管球；クロム対陰極，印加電圧；50KV，印加電流；50mA，分光結晶；フッ化リチュウム，検出器；シンチレーション計数管測定を行った。赤色顔料の主成分元素としては鉄のみが検出され，水銀は検出されなかった。

まとめ

以上の結果から大庭・久保遺跡1号箱式石棺墓出土の赤色物は，透明な管状粒子を多量に含むベンガラである。

現在，出土ベンガラについては，粒子の形状・大きさや酸化鉄含有量の多少等からその多様性が把握・整理されつつある段階である。管状粒子を含むベンガラは，弥生時代の出土例として，彩文土器や漆器で多数認めているが，墓ではまだ少数例しか確認されていない。ただし，甕棺墓が盛行する時期には，墳墓出土赤色顔料の主流は朱であるためベンガラの出土例自体がきわめて少ない。後期以降の墓ではベンガラが多量に使われるようになるが，本例のような透明な管状粒子を含む例はまだ少ないので，蓄積が望まれる所である。

北部九州地方では，甕棺墓の衰退とともに，墓から出土する赤色顔料が朱からベンガラに変わる。それと同時に「朱とベンガラの使い分け」が始まる。埋葬施設内面全体にベンガラを塗り，床面あるいは遺骸全体にもベンガラを撒き，頭胸部には朱を施すという現象である。これには様々な状況があるが，本例は棺内壁面の赤色塗布が省略され，頭胸部の朱もまた施されていなかった可能性が高いものと考えられる。

朱の有無を，単純に墓の性格・階層と結びつけることは危険であり，北九州市高津尾遺跡の後期後半から庄内式並行期の墓での赤色顔料検出状況はこれをはっきりと物語るものである。しかし，朱だけが検出される墓は副葬品がなく，遺物を出土した墓はベンガラだけかベンガラと朱を使っていた墓であり，後二者の優劣は認められないという高津尾遺跡例は，赤色顔料の使われ方が確実に墓の性格を表すことも明らかにしている。

大庭・久保遺跡では，多数の異・同時期の墓の中で，赤色顔料を持つ墓が少なく，その赤色顔料はベンガラだけで，しかも石棺壁面にはないということが，性格の一面を表したものといえよう。

今回調査の機会をいただきました福岡県教育委員会佐々木隆彦氏，X線分析装置の使用に御配慮いただいた九州産業大学総合機器センターおよび同センター古賀啓子氏に感謝します。

（5） 竪穴住居跡

調査区内から検出した竪穴住居跡の総数は51軒である。住居の分布状況は，調査した範囲の西側には少なく，中央付近から南東側に数多く分布している。設営場所を見ると，単独で散在するものと，一定の範囲に重複しながら建て直しをはかられた住居とがあり，設営場所にある規制が働いていたといえよう。

竪穴住居と弥生時代の墓地群の関係では，当該集落の南東端は48号竪穴住居跡で，この時期（7世紀から8世紀）の集落は，隣接して調査したD地点でも弥生時代の墓地群を挟んで数多く発掘されており，しかも，両者は弥生時代の墓地群を破壊して集落が営まれておらず，重複する住居もない。この事実から当時の集落の人々は弥生時代の墓地群の存在を認知していたと思われる，と同時にこの墓地群を挟んで営まれた集落は異なる集団の一群と考えられる。このことは，21－A地点（西法寺遺跡）で同時期の集落を確認しており，大庭・久保遺跡との間には小さな谷が南北に走っていてこの集落も単位の違った一群と捉えることができよう。このように，この周辺一帯には7世紀～8世紀にかけての集落が一定の範囲内に集団をなして分布する傾向にあり興味のある結果が判明している。

弥生時代の墓地群に伴うと思われる集落が上の原遺跡で調査されていて集落とそれに付随する墓地群との関連が把握される好資料が得られた。弥生時代の集落については上の原遺跡の報文中で詳細に述べられると思われる。

1号竪穴住居跡 （図版80－(1)・(2)，81－(1)，第100図）

調査区のほぼ中央部から検出された方形プランの竪穴住居跡で，2号住居を切って造られており，東壁側は道路のため未掘である。

住居の規模は，西壁で3.10m，南・北壁は確認部分で2.50m・1.30mを測る。床面は薄い貼り床を施し，硬く叩き締められていた。住居内の主柱穴は不明である。

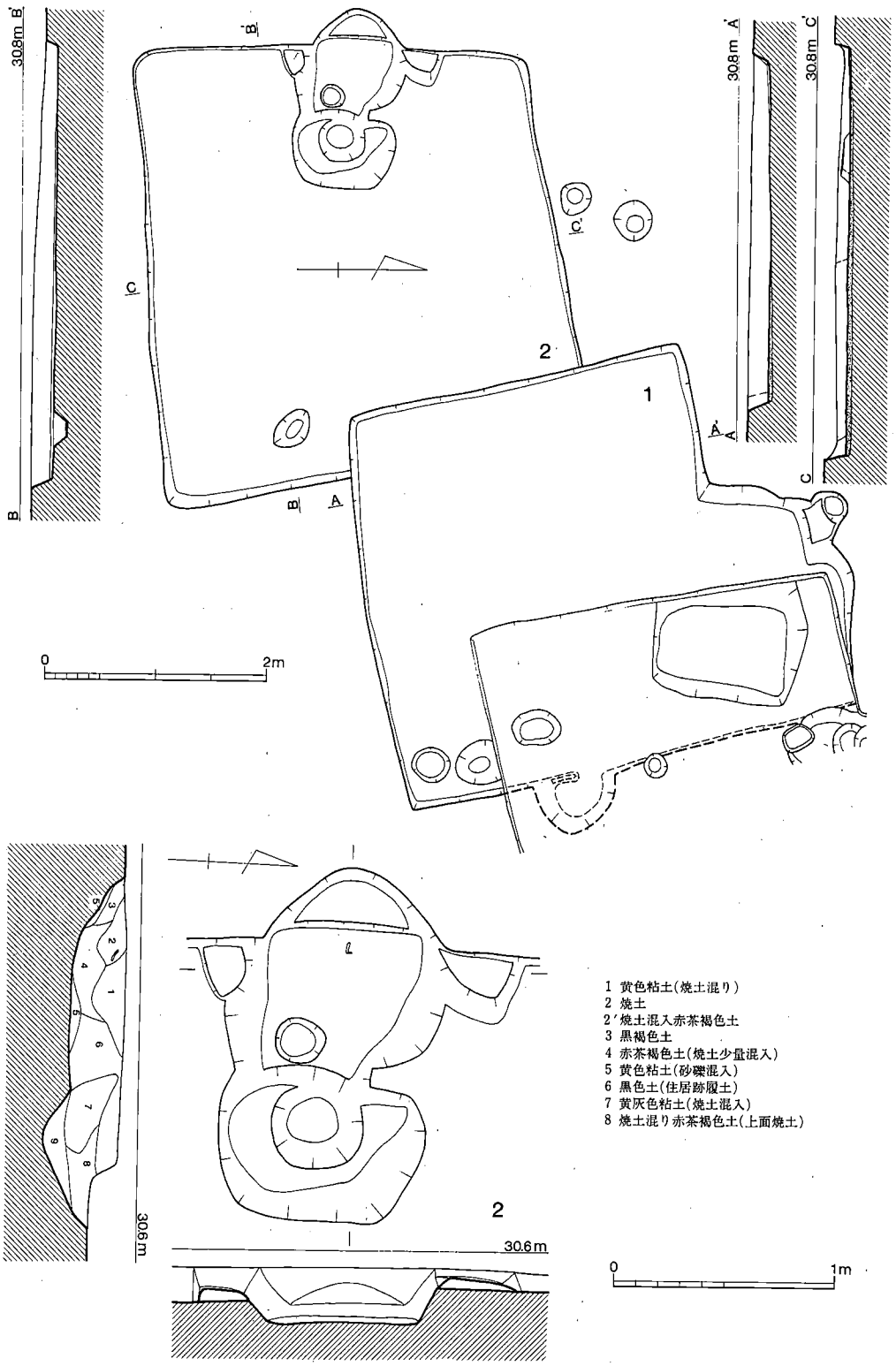
カマドの位置については，明確でないが北壁側にある突出部がカマドの燃焼部の一部の可能性が高いと思われる。しかし，焼土ブロックが少量検出された程度で，カマドの袖などは既に削平されたのか，不明である。

住居内の出土遺物は，少量の土器片だけである。

出土遺物

土　器 （第101図）

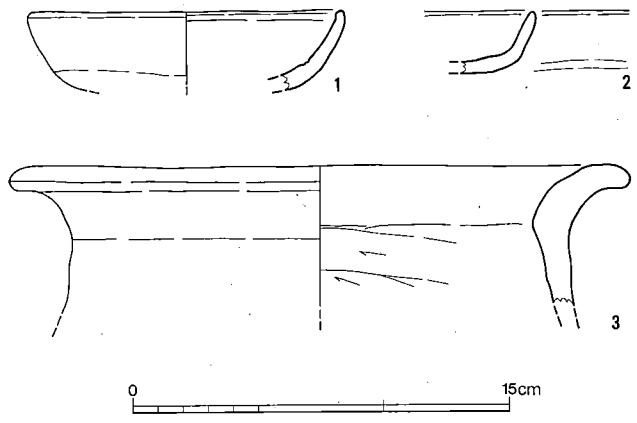
土師器　1・2とも坏の破片資料で，1は口縁端部を内湾気味つまみ上げて仕上げ，復原口径が12.6cmを測る。調整は体部内外をヨコナデ，体部外面下半はヘラ削りである。色調は1が



第100図　1号・2号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

外面茶褐色，内面暗黄茶褐色，２は灰黄褐色を呈し，焼成は普通である。

３は大型の甕の口縁部付近の破片で，復原口径24.8cmを測る。膨らみの弱い胴部に強く「く」字状に外反した口縁部がつく甕で，胴部外面はナデ，内面はヘラ削り，口縁部内外はヨコナデ調整で仕上げている。色調は黄褐色から茶褐色を呈し，焼成は普通である。



第101図　１号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

１～３はいずれも覆土から出土した。

１～７号竪穴住居跡付近上層出土土器　（第102図）

ここに掲載した出土土器は，謂集状況を示す１号から７号竪穴住居跡の上層に堆積していた包含層（黒ボク）から出土した土器で，どの住居に伴うかはっきりしないため一括して上層土器群として図示したものである。

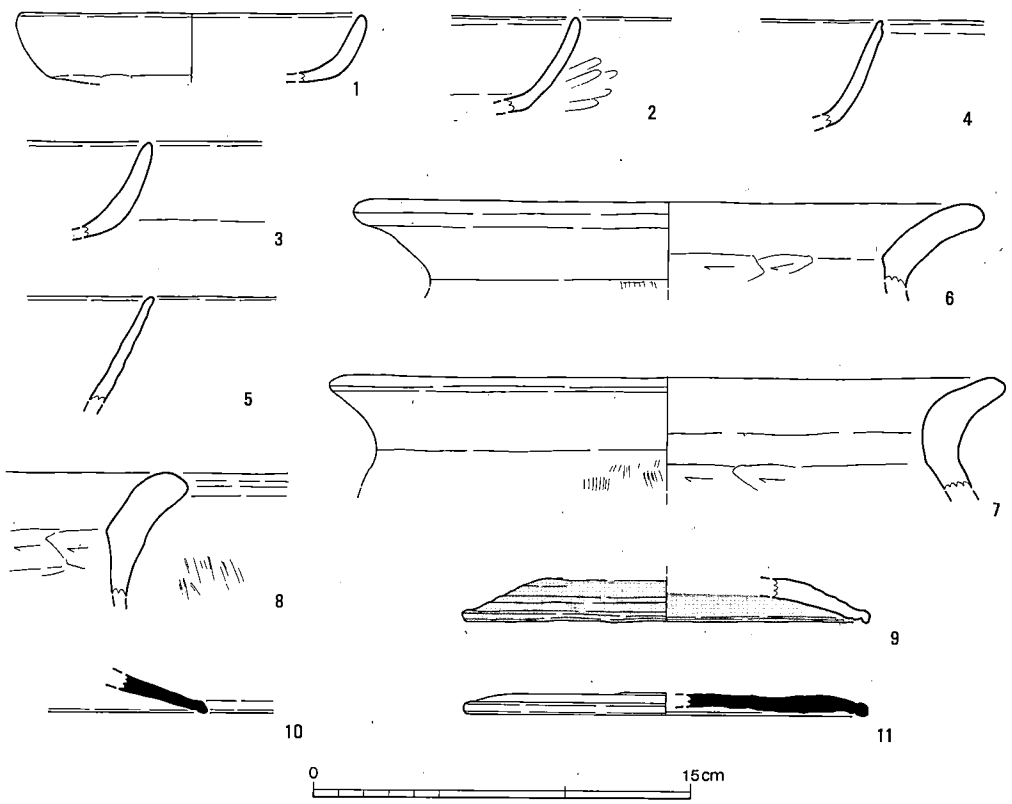
土師器　１～４は坏の破片資料で，１は口径13.8cmに復原できる。２～４は少し深めのタイプで，４の口縁端部外面はヨコナデにより凹線状をなしている。調整は体部外面ともヨコナデ仕上げで，外面下半はヘラ削りし，２は体部外面上半をさらにヘラ磨きして仕上げている作りの良い土器である。色調は１が内面暗黄茶褐色，外面茶褐色，２は茶褐色，３は赤褐色，４は黄茶褐色から黒色を呈し，焼成はいずれも普通である。

５は深めの坏の小破片資料で，内外ともロクロヨコナデで仕上げた土師質の土器である。色調は茶褐色を呈し，焼成は良い。

６～８は大型甕の破片資料で，復原口径は６が25.0cm，７が26.5cmを測る。いずれも強く外反した「く」字状口縁の甕で，８は胴部の膨らみが弱いタイプである。調整は口縁部内外をヨコナデ，胴部外面ハケ，内面はヘラ削りで仕上げている。色調は６が茶褐色から黒色，７が黄茶褐色，８が黄茶褐色から褐色を呈し，焼成は普通である。６の口縁部外面には煤の付着がみられる。

９は低平な坏蓋の破片資料で，復原裾部径16.2cmを測る。調整は体部内外をロクロヨコナデし，天井部外面はヘラ削り，内面はナデて仕上げた黄茶褐色を呈す土師質の土器である。内外とも丹塗りした作りの良い土器である。

須恵器　10・11とも坏蓋の破片資料で，口縁端部は丸くおさめている。11は復原裾部径16.1



第102図　1号～7号住居跡付近出土土器実測図（1/3）

cm，器高0.8cmを測る。調整は体部内外ロクロヨコナデ，天井部外面は回転ヘラ削り，内面はナデて仕上げている。色調は10が黒灰色，11が黄灰色を呈し，焼成も良い。

2号竪穴住居跡　（図版81－(1)･(2)，第103図）

1号住居跡に切られた状態で検出された方形プランの竪穴住居跡で，他の住居跡と同様に上面がかなり削平されているため壁高は15.0cmと浅い。

住居の規模は，西壁で3.50m，東壁は残存部で1.50m，北壁は残存部で2.80m，南壁は4.10mを測る。床面からはピット1個が検出された他は，主柱穴は不明である。床面は薄い貼り床を施し，硬く叩き締められていた。

カマドは西壁中央よりやや北側に偏して構築されており，燃焼部は僅かに西壁側に突出したタイプで，その先に短い煙り出し部を残している。カマドの幅は80.0cm，奥行きは僅かに5.0cm，煙道の長さは35.0cmを測る。両袖とも，僅かに残っているだけで短く，燃焼部前面には性格不明のピットが穿たれている。

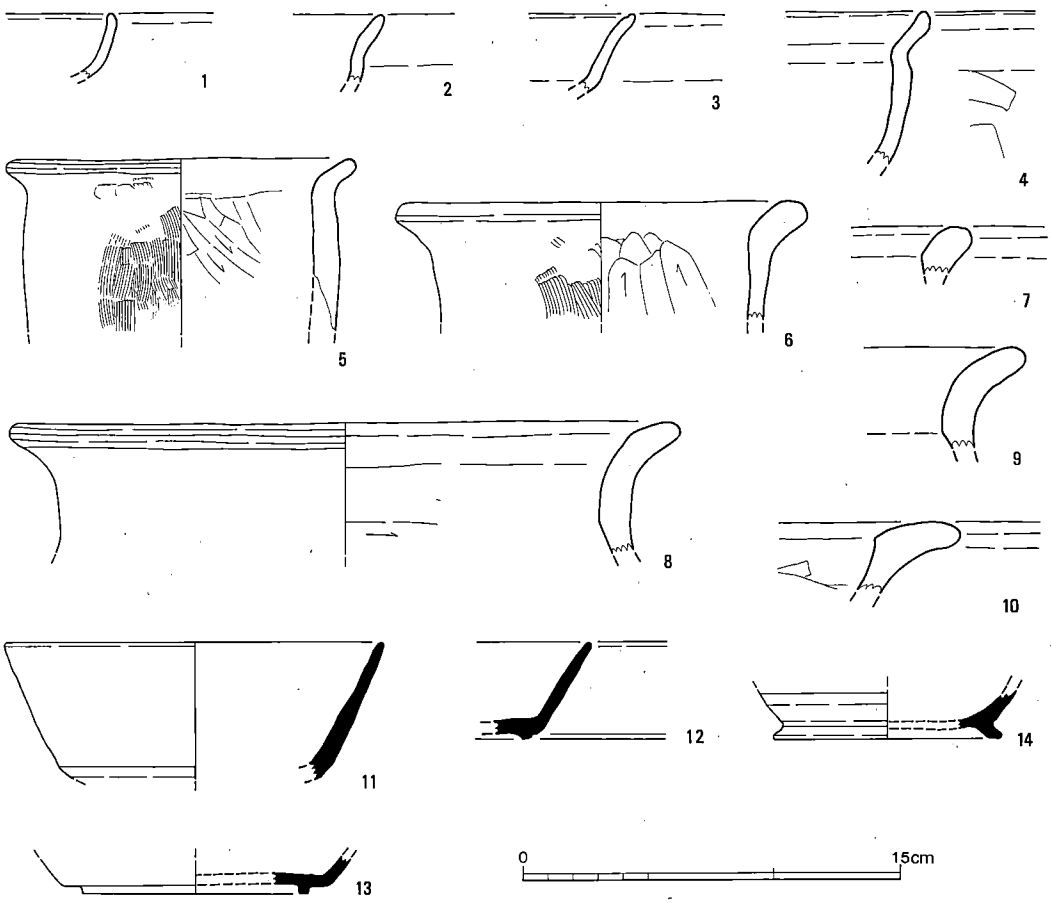
住居内からの出土遺物は，少量の土器片だけである。

出土遺物

土　器　(図版112，第103図)

土師器　1～3は坏の小破片の資料で，1は口縁部が内湾気味に外反するのに対し，2・3は外反するタイプである。調整は体部内外をヨコナデで仕上げ，外面下半はヘラ削りしている。色調は1が茶褐色から暗黄茶褐色，2が黄茶褐色，3が灰黄褐色から茶褐色を呈し，焼成は普通である。

4～7は小型の甕で，いずれも緩やかに外反する口縁部を持ち，胴部の張りは弱いタイプである。6・7の口縁部は肉厚なのに対して，4・5は薄く4の胴部外面には稜を形成する。復原口径は5が14.0cm，6が16.4cmを測る。調整は5・6が胴部外面ハケ，内面ヘラ削り，口縁部内外面はヨコナデ，4は胴部外面ヘラ削りの後ナデで仕上げている。7の口縁部外面には煤の付着がみられる。色調は4が内面茶褐色から暗黄茶褐色，外面暗黄茶褐色，5は内面暗黄茶



第103図　2号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

褐色，外面焦げ茶色，6は灰黄褐色，7は暗黄茶褐色を呈し，焼成は普通である。

8・9は大型甕の破片資料で，8は復原口径が13.4cmを測る。両者とも緩やかに「く」字状に外反する口縁部を持つタイプで，内外ともヨコナデ，胴部内面はヘラ削りで仕上げている。色調は8が内面黄橙色，外面橙褐色，9は内面茶褐色から灰黄褐色，外面橙褐色から灰黄褐色を呈し，焼成は普通である。

10は大きく外反する鉢の口縁部付近の小破片の資料である。調整は口縁部内外面ヨコナデ，体部内面はヘラ削りで仕上げている。色調は内面茶褐色，外面暗黄茶褐色から黒色を呈し，焼成は普通である。口縁部外面には煤の付着がみられる。

須恵器　11～14は高台付椀の破片資料である。11は復原口径が15.0cmを測る坏部が深いタイプで，12は浅いタイプで高台も低いものである。13は高台が低く，直に立つタイプで，14は高台が張り出したタイプである。復原底径は13･14とも9.0cmを測る。調整は体部内外面がロクロヨコナデ，内外底部はナデで仕上げている。色調は11・12・14が灰褐色，13が褐色を呈し，焼成良好である。1・3・5・6・8はカマド内，他は覆土から出土したものである。

3号竪穴住居跡　(図版81－(1)，第104図)

2号住居跡の南西にあり，4号・7号住居跡を切って，2号住居に切られた状態で検出された長方形プランの竪穴住居跡である。

住居の規模は，南壁で3.60m，北壁は残存部で2.60m，西壁で3.46m，東壁は残存部で2.20m，壁高は残りの良い北壁で16.0cmを測る。他の住居とは異なり，床面の貼り床はみられないとともに，主柱穴も存在していない。

カマドは西壁中央よりやや南側に偏して構築されているものの，後世の攪乱も激しく突出した燃焼部と右袖の一部を残しているだけである。

住居内からの出土遺物は，少量の土器片だけである。

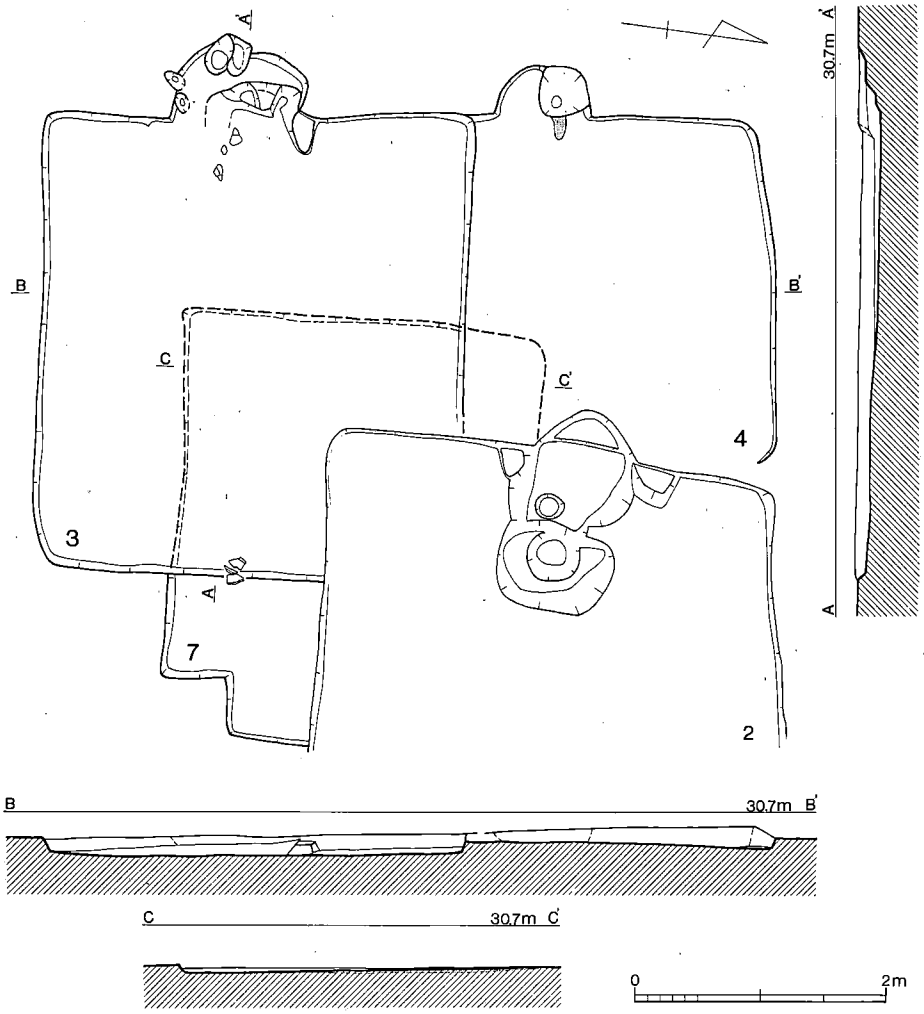
出土遺物

土　器　(図版112，第105図)

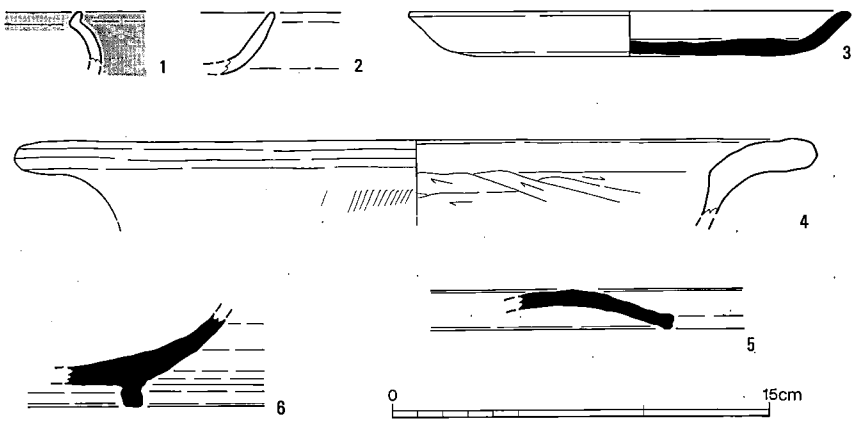
土師器　1は直口する短口縁の小型壺の破片資料で，内外ともヨコナデで仕上げている。外面と口縁部内面を丹塗りした作りの良い土器である。

2は浅い付の小破片の資料で，内外ともヨコナデで仕上げている。色調は茶褐色を呈し，焼成は普通である。

4は大きく外反する口縁部を持つ大型鉢の破片資料で，復原口径は32.0cmを測る。口縁部内外をヨコナデ，胴部外面をハケ，内面はヘラ削りで仕上げている。色調は茶褐色を呈し，焼成は普通である。口縁部外面には煤の付着がみられる。



第104図　3号・4号・7号竪穴住居跡実測図（1/60）



第105図　3号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

須恵器　3は復原口径が17.6cm，器高が1.8cmを測る浅い坏である。体部内外面をロクロヨコナデ，底部内面はナデ，底部の切り離しはヘラ切りである。色調は灰色を呈し，焼成は堅固である。

5は低平な坏蓋で，口縁端部は丸く仕上げている。調整は体部内外面をロクロヨコナデ，天井部外面は回転ヨコナデ，内面はナデで仕上げている。色調は灰色を帯びた茶色で，焼成は普通である。

6は高台付椀の破片資料で，高台の畳付もしっかりしている。体部内面はナデ，外面は回転ヘラ削り，高台と内底部はロクロヨコナデで仕上げている。色調は茶灰色を呈し，焼成は普通である。6がカマド内，他は覆土から出土したものである。

4号竪穴住居跡　(図版81－(1)，第104図)

3号住居跡の北側にあり，南壁を3号住居跡に，東壁を2号住居跡に切られた状態で検出された方形プランの竪穴住居跡である。

住居の規模は，北壁で2.70m，西壁は残存部で2.30mを測り，他は2号・3号住居で切られているため不明である。貼り床はみられないものの，床面はかなり硬く叩き締められていた。住居内の主柱穴は不明である。

カマドは西壁にあり，燃焼部を切り込んだタイプであるが，後世のピットなどにより壊されているため残りは極めて悪く，両袖なども消失している。カマドの幅は78.0cm，奥行きは42.0cmを測る。

住居内からの出土遺物は，少量の小破片の土器だけである。

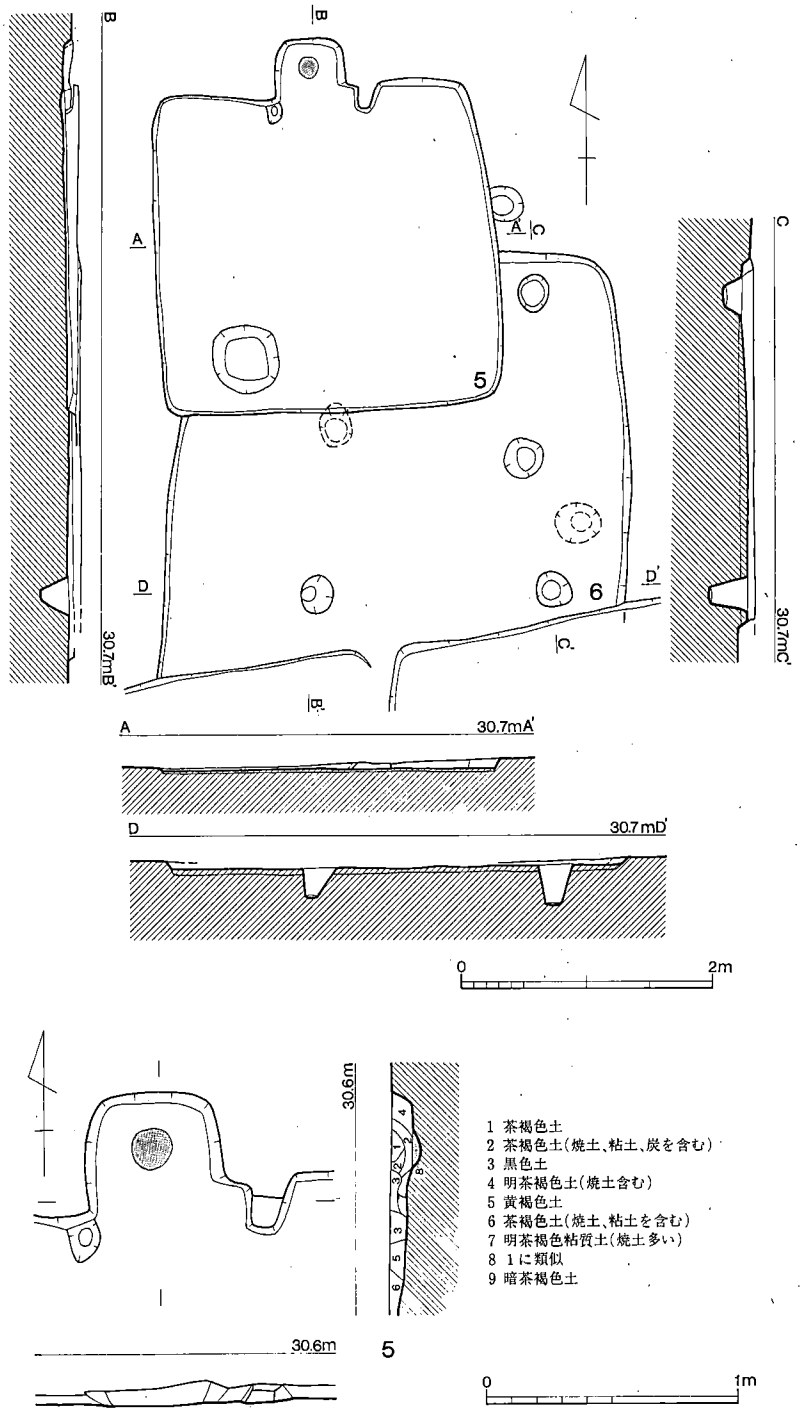
5号竪穴住居跡　(図版81－(1)・(2)，第106図)

4号住居跡の北側にあり，6号住居を切った状態で検出された方形プランの小形の竪穴住居跡である。

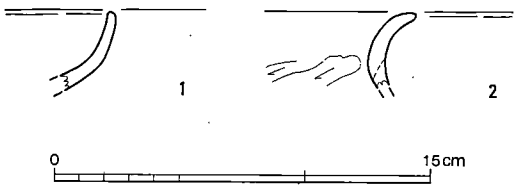
住居の規模は，東・西壁とも2.50m，南・北壁は2.70m・2.50m，壁高は残りの良い東壁で10cmを測る。床面は薄い貼り床を施し，硬く叩き締められていた。住居内の南東隅にはピット1個が穿たれているものの，主柱穴と思われるものはない。

カマドは西壁にあり，燃焼部を切り込んだ突出タイプのカマドで，袖も短い右袖が残るだけである。燃焼部の床面中央には火床が残っており，前面にはカマドの袖の一部とも思われる粘土塊が散乱していた。カマドの幅は60.0cm，奥行きは45.0cmを測る。

住居内からの出土遺物は，少量の土器破片だけである。



第106図　5号・6号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）



第107図　5号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

出土遺物

土　器（第107図）

土師器　1は内湾気味に外反する坏で，内外面ともヨコナデで仕上げている。体部外面には煤の付着がみられる。色調は茶褐色で，焼成は普通である。

2は甕の小破片で，口縁部内外面をヨコナデ，胴部内面はヘラ削りで仕上げている。色調は内面が焦げ茶色，外面は暗黄褐色を呈し，焼成は普通である。いずれも床面から出土した。

6号竪穴住居跡　（図版82－(1)，第106図）

北壁側を5号住居跡，南壁側を2号・4号住居跡に切られた状態で検出された方形プランの竪穴住居跡で，カマドの位置は分からないが，他の例からすれば北壁側と思われる。

住居の規模は，東・西が3.60m，南・北は現存部で3.00m，壁高は残りが悪く約6.0cmと浅い。床面は薄い貼り床を施し，硬く叩き締められていたが，住居内には3個のピットが検出されているものの，主柱穴としていいか若干不安が残る。

住居内の出土遺物は，少量の小破片の土器のみである。

7号竪穴住居跡　（図版81－(1)，第104図）

2号～4号住居跡のいずれからも切られた状態で検出された最も古い時期の不整方形プランの竪穴住居跡である。壁高も4.0cmと浅く全体に残りが悪く，カマドの位置も不明である。

住居の規模は，東・西3.37m，南・北2.85mを測る。床面は硬く叩き締められているものの，貼り床は施されておらず，主柱穴も存在しない。

住居内からの出土遺物は，少量の小破片の土器があるに過ぎない。

8号竪穴住居跡　（図版83－(1)，第108図）

5号住居跡の北側から検出された横長の長方形プランの竪穴住居跡で，西壁は未掘のため不明である。

住居の規模は，現存部で北壁が3.60m，南壁は4.10m，東壁が3.30m，残りの良い北壁で壁高17.0cmを測る。床面の貼り床は南壁と東壁側がやや厚く施され，硬く叩き締められていた。

住居内のＰ１～Ｐ３の３個のピットが主柱穴とも思われるが，南西隅のピットが不明のため確定はできない。

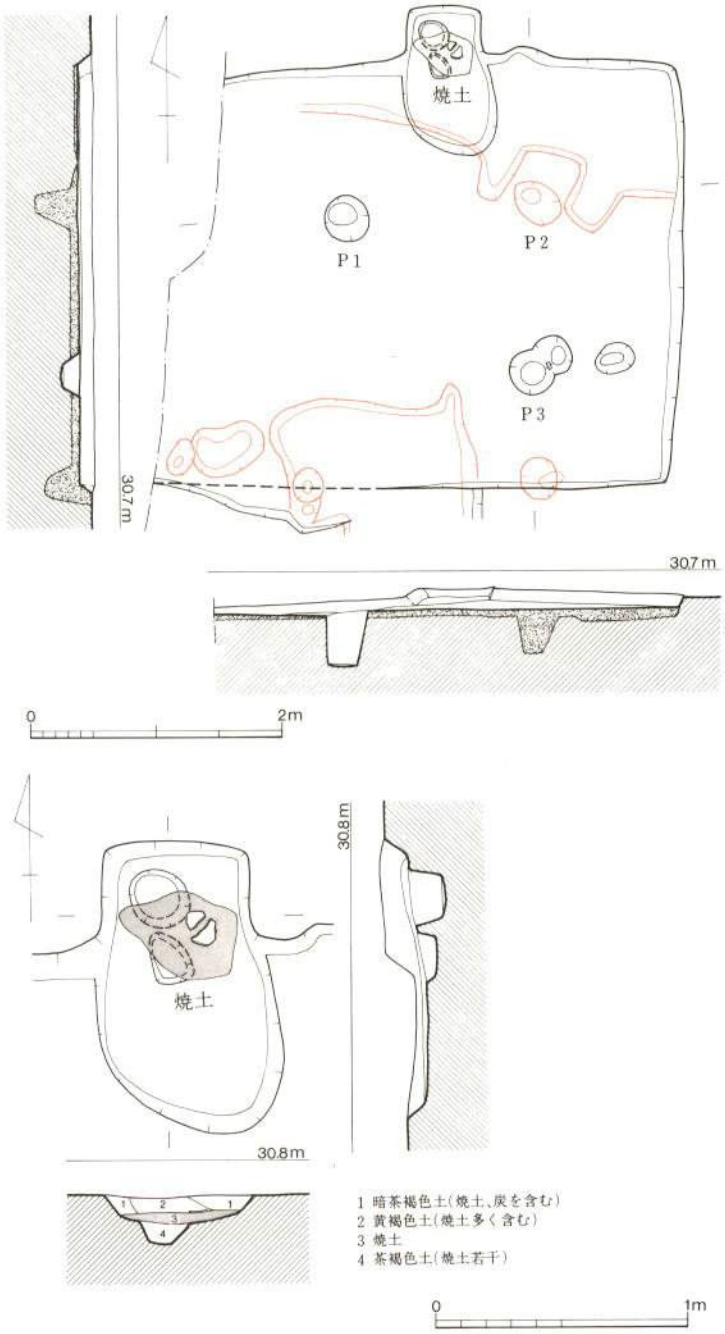
カマドは北壁に設置しており，燃焼部を北壁に掘りこんだ突出型のタイプで，両袖は消失している。燃焼部床面には火床が残っており，その下からは２個の小ピットが検出された。燃焼部の幅は60.0cm，奥行きは35.0cmを測る。

住居内からの出土遺物は，少量の土器片だけである。

出土遺物

土　器　（第109図）

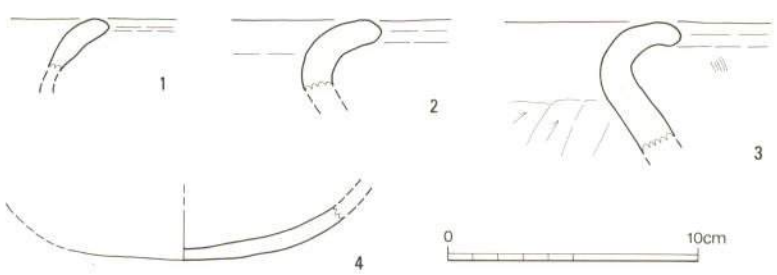
土師器　１～３は甕の口縁部付近の小破片の資料で，２・３は胴部の張りが強いタイプの甕である。口縁部内外面ともヨコナデ仕上げで，３の胴部内面はヘラ削りしている。色調は１が灰黄褐色，２が内面茶褐色，３は橙褐色を呈し，焼成は普



第108図　８号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

通である。3の口縁部内面には煤の付着がみられる。

4は甕の底部付近の破片資料で，底部は平坦な丸底である。内外面ともナデで仕上げ，外底部には煤が付着している。色調は茶褐色を呈し，焼成は普通である。

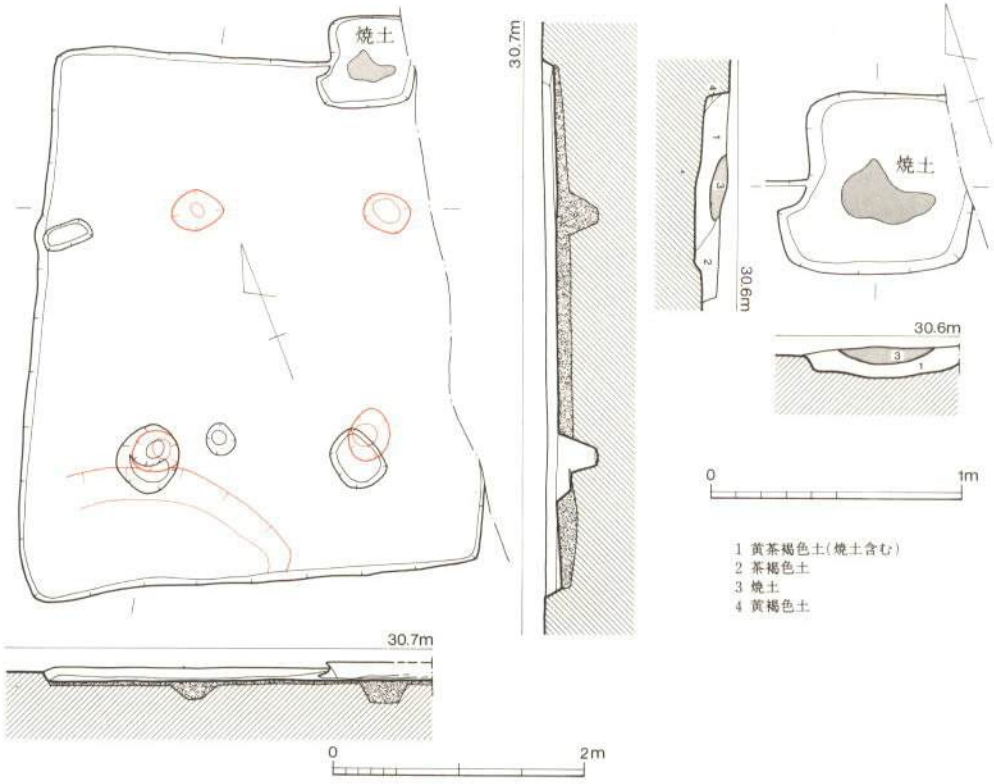


第109図　8号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

9号竪穴住居跡　（図版83－(2)，第110図）

8号住居跡の東に近接して検出された方形プランの竪穴住居跡で，東壁の大半は未掘のため不明である。

住居の規模は，西壁で4.40m，東壁は現存部で0.70m，南壁は3.60m，北壁は現存部で2.80



第110図　9号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

m，壁高は残りの良い北壁で10.0cmを測る。床面は貼り床を施し，硬く叩き締められていた。住居内の主柱穴は４本である。

カマドは他の例と異なり，北壁の北東隅に偏して構築されている。カマドの形式は燃焼部を壁に切りこんだ突出型のもので，両袖は消失している。燃焼部の幅は現存部で63.0cm，奥行きは33.0cmを測る。

住居内からの出土遺物は，少量の小破片の土器だけである。

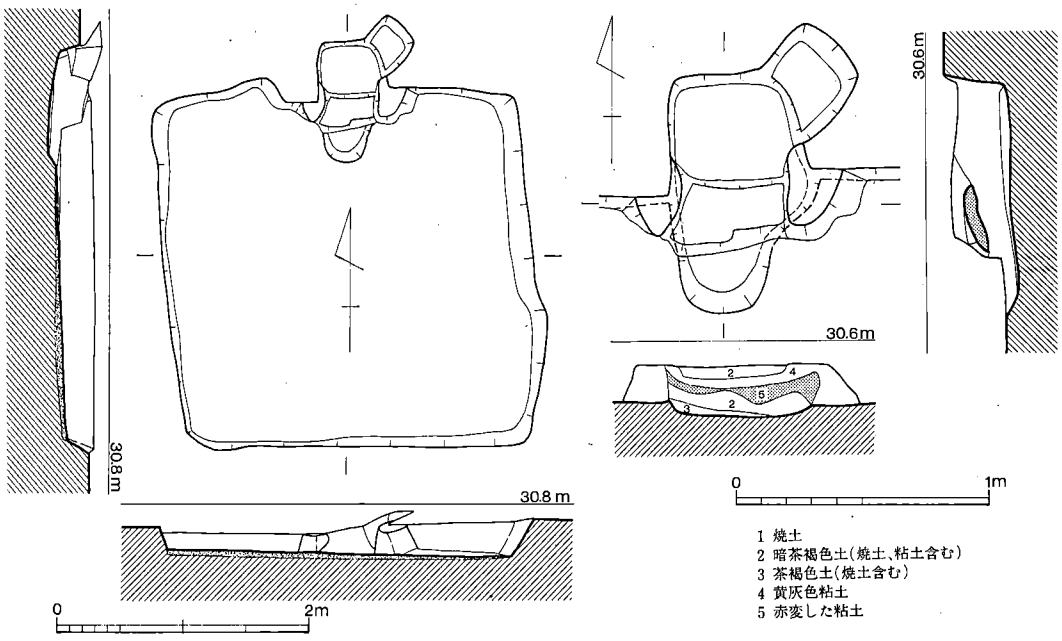
10号竪穴住居跡　（図版84－(1)･(2)，第111図）

８号住居跡の北側から検出された小形の方形プランの竪穴住居跡である。

住居の規模は，東・西壁とも2.80m，北・南壁は2.90m・2.80m，壁高は東壁で29.0cmを測る残りの良好な住居跡である。床面は薄い貼り床を施しており，住居内には主柱穴は存在しない。

カマドは燃焼部を壁に切りこんだ突出型のタイプで，北壁のほぼ中央部に設置している。両袖は黄灰色粘土で短く造られていて，焚き口部の天井が残っている最も残りの良いカマドである。燃焼部の幅は58.0cm，奥行きは46.0cmを測る。

住居内からの出土遺物は，少量の土器破片だけである。

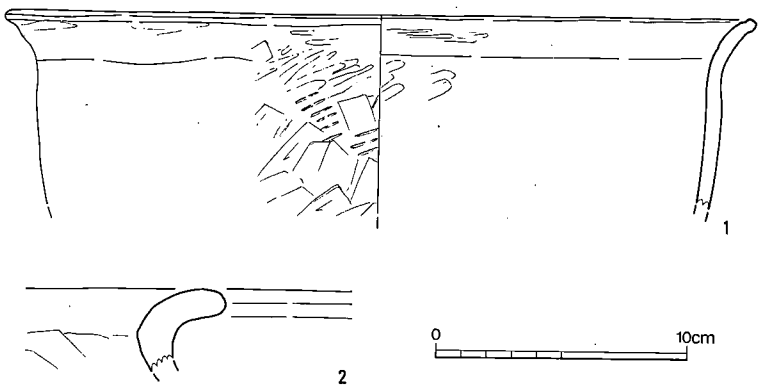


第111図　10号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

出土遺物

土　器　(第112図)

土師器　1・2とも大型甕の破片資料で口縁部の形状は1が緩やかに外反するタイプであるのに対して，2は「く」字状に強く外反する甕である。1は復原口径が30.0cmを測り，調整は口縁部内外面がヨコナデ，胴部外面は粗い叩きのあとヘラ磨きと一部ヘラ削り，内面はナデ，口縁部付近内面は更にヘラ磨きで仕上げている。色調は1が黄褐色から橙褐色，2は黄茶褐色を呈す。焼成はいずれも普通で，覆土から出土した。

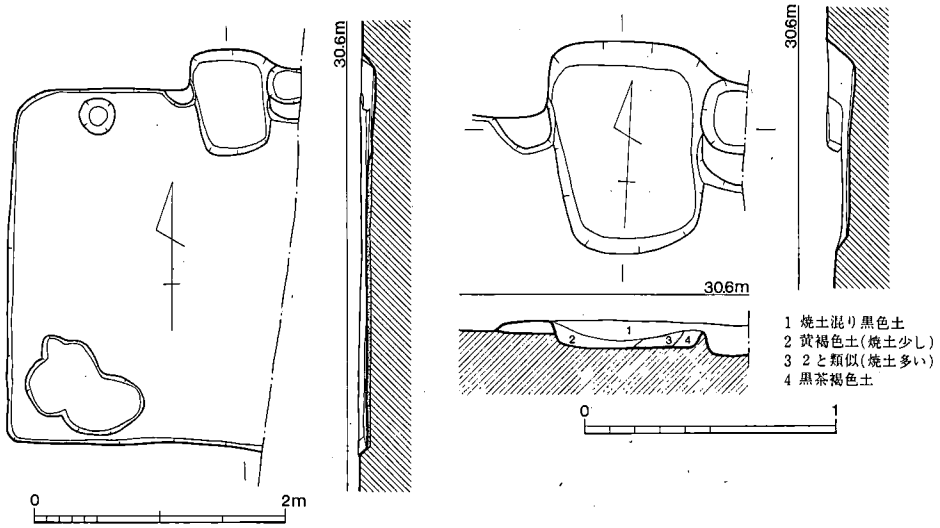


第112図　10号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

11号竪穴住居跡　(第113図)

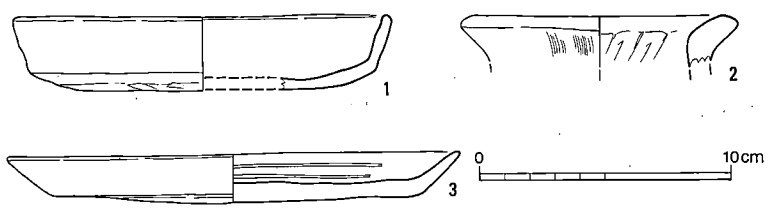
3号竪穴住居跡の西側から検出された方形プランの小形の竪穴住居跡で，東壁側は道路のため未掘である。

住居の規模は，西壁で2.80m，北・南壁は現存部で2.30m・2.00mを測る。住居内には3個のピットがあるが主柱穴とは思われない。床面は薄い貼り床が施され，硬く叩き締められていた。



第113図　11号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

カマドは北壁に付設されており，仮に中央に付設されているとすれば住居の形状は横長の長方形プランを呈することになる。カマドは燃焼部を壁に切りこんだ突出型のタイプで，両袖も短く造り出している。燃焼部の幅は31.0cm，奥行きは15.0cmと浅い。



第114図　11号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

住居内からの出土遺物は，少量の土器破片のみである。

出土遺物

土　器　（図版112，第114図）

土師器　1・2は坏で，1は内湾気味に立ち上がる口縁部，2は強く外反するタイプである。復原口径は1が15.0cm，2が18.1cm，器高は1・2とも3.0cmを測る。調整は1が体部内外面をヨコナデ，内底部はナデ，外底部はヘラ削り，2は体部内外面がロクロヨコナデ，内底部はナデのあとヘラ磨き，外底部は回転ヘラ削りで仕上げている。色調は1が暗橙色から黄橙褐色，2が橙褐色を呈し，焼成は良好である。1の内外面には煤の付着が著しい。3は超小型の甕ないしは鉢といえるものである。復原口径は11.0cmを測り，胴部外面がハケ，内面はヘラ削り，口縁部内外面はヨコナデで仕上げている。色調は淡橙色から黄茶褐色を呈し，焼成は良好である。

12号竪穴住居跡　（図版85－(1)，第115図）

11号住居跡の北側に近接して検出された方形プランの小形の竪穴住居跡で，東壁側は11号住居と同様に道路のため未掘である。

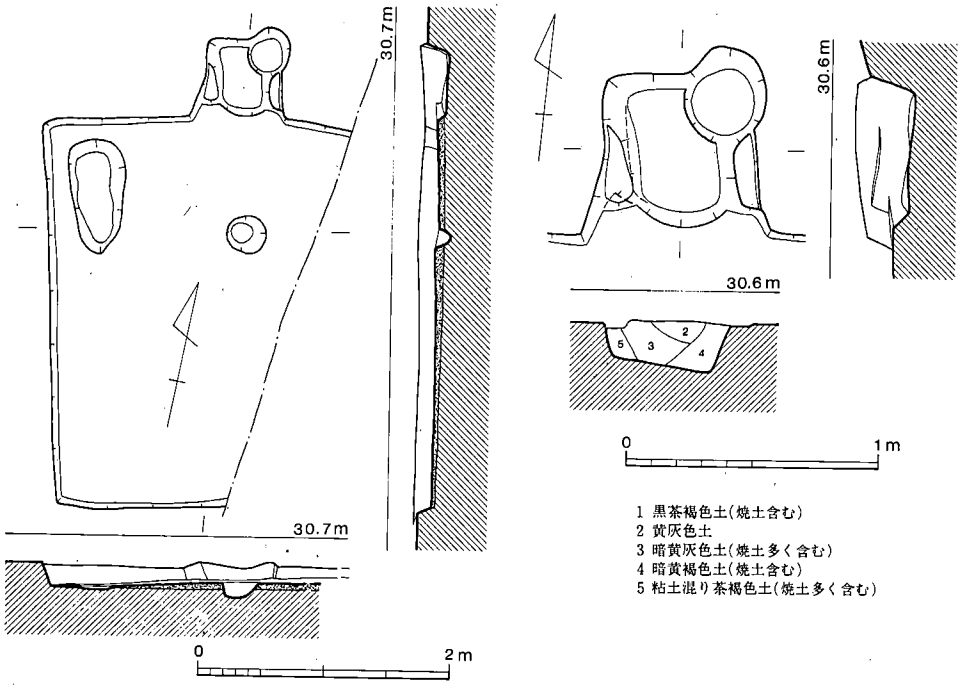
住居の規模は，西壁は3.04m，北・南壁は現存部で2.44m・1.34m，壁高は西壁で17.0cmを測る。床面は全体に薄い貼り床を施しており，硬く叩き締められていた。住居内には2個のピットがあるが主柱穴とは思われない。

カマドは北壁に設置されている。燃焼部を壁に切り込んだ突出型のもので，両袖は消失している。燃焼部の幅は75.0cm，奥行きは64.0cmを測る。

住居内からの出土遺物は，少量の土器破片のみである。

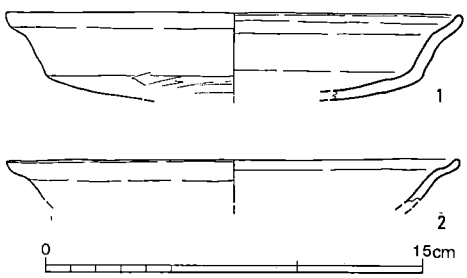
出土遺物

土　器　（第116図）



第115図　12号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

土師器　1・2とも坏で，口縁部上半で緩やかに外反し，外底部は明瞭に屈折稜を形成する。復原口径は1が18.2cm，2が18.0cmを測る。調整は体部内面がヨコナデ，底部内面はナデ，外底部はヘラ削りで仕上げている。色調は1が内面暗黄茶褐色，外面は茶褐色，2は内面茶褐色，外面が暗黄茶褐色を呈し，焼成も良好である。いずれも覆土から出土した。



第116図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

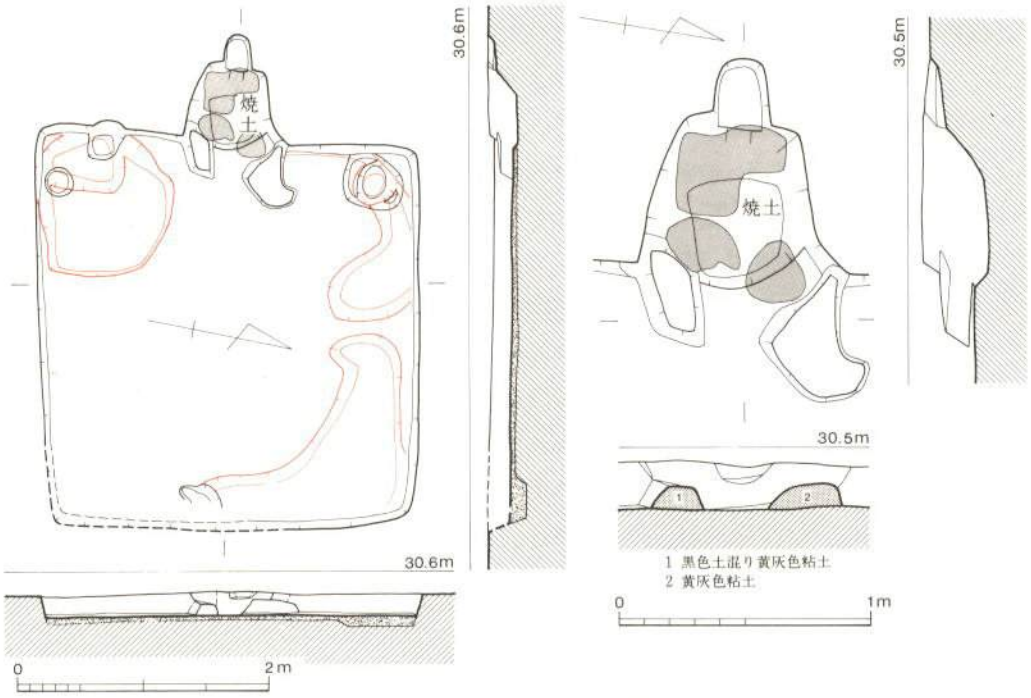
13号竪穴住居跡　（図版85－(2)・86－(1)，第117図）

8号住居跡の西側から検出された方形プランの小形の竪穴住居跡で，東壁の南半分は攪乱を受けている。

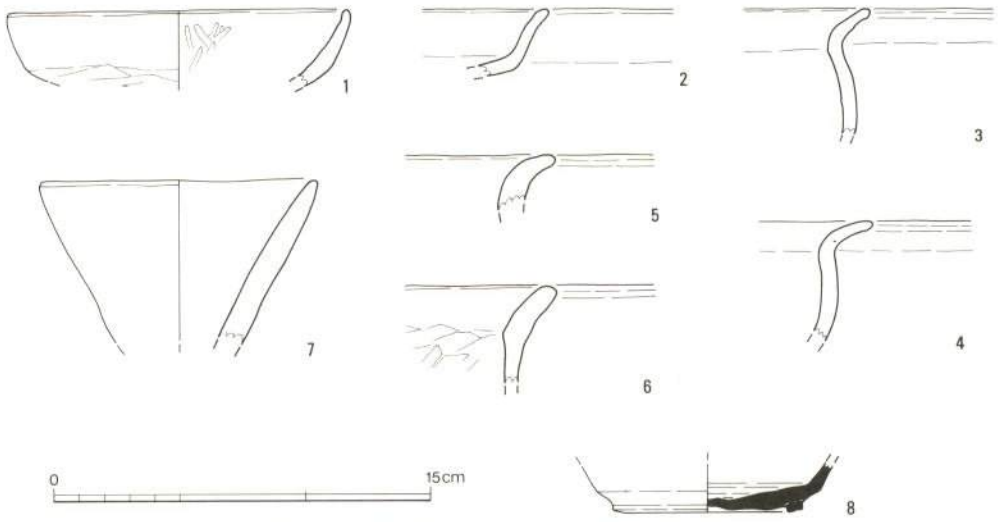
住居の規模は，西壁で3.04m，東壁は現存部で1.30m，北壁は2.94m，南壁は現存部で2.60m，壁高は北壁で17.0cmを測る。床面は全体に薄く貼り床されており，他と同様，硬く叩き締められている。住居内には数個のピットがあるが，主柱穴にはならない。

カマドは西壁のほぼ中央部に付設されている。カマドは壁に切り込んだ突出型のもので，両

袖は黄灰色粘土で築かれていて，煙り出しも短いが残っていた。燃焼部内は各所に強く焼けた跡が認められた。焚き口部には袖の一部と思われる白色粘土が散乱していた。燃焼部の幅は75.0cm，奥行きは55.0cmを測る。



第117図　13号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）



第118図　13号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

住居内からの出土遺物は，少量の土器片がある。

出土遺物

土　器　(図版114，第118図)

土師器　1・2は坏の破片資料で，1は体部が内湾気味に立ち上がり，2は緩やかに外反するタイプである。1は復原口径が13.5cmを測る。調整は体部内外面ともヨコナデし，1はさらにヘラ磨きで仕上げ，外底部はヘラ削りしている。2の体部外面には煤の付着がみられる。色調は1が内面茶褐色，外面は暗黄茶褐色，2は灰黄褐色を呈し，焼成も良好である。

3～6は甕の破片資料で，いずれも小破片のため大きさは不明である。3・4は「く」の字状に強く外反する口縁部を持つもので，5・6は緩やかに外反する肉厚の口縁部を持つタイプである。調整は口縁部内外面をヨコナデ，胴部内面は4がナデ，6はヘラ削りで仕上げている。他は摩滅しているものが多い。色調は3が淡茶褐色，4が黄褐色，5が橙褐色，6が黄茶褐色を呈し，焼成は普通である。6の外面には煤の付着がみられる。

7は焼塩壺の破片資料で，内面はナデ，外面は指圧痕で仕上げている。復原口径は11.0cmを測る。色調は赤茶褐色を呈し，焼成は良好である。

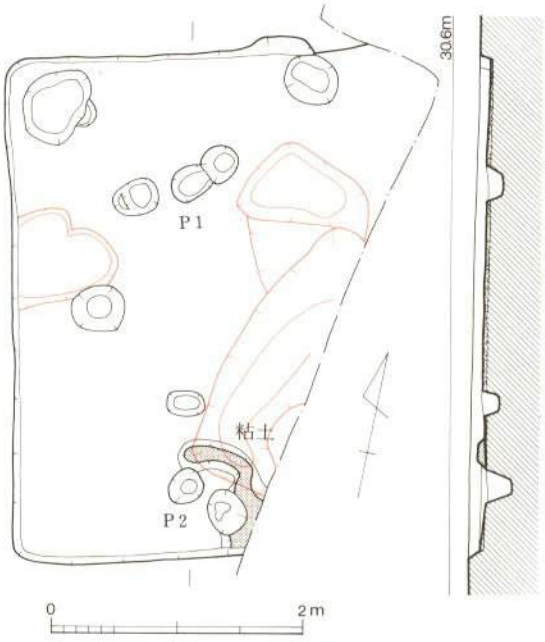
須恵器　8は高台付椀の高台付近の破片資料で，復原高台径は7.6cmを測る。調整は体部内外面がヨコナデ，内外底部はナデで仕上げている。色調は暗灰色を呈し，焼成は良好である。1がカマド内の他は覆土から出土した。

14号竪穴住居跡　(図版86－(2)，第119図)

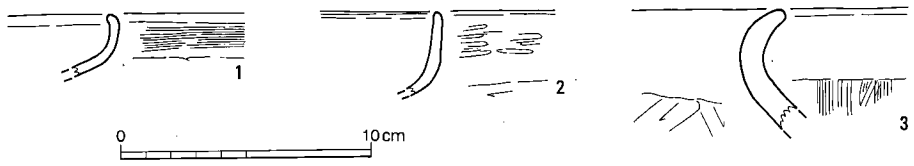
10号住居跡の西側から検出された方形プランの竪穴住居跡で，東壁側は道路のため未掘であり，現存部ではカマドの存在は不明である。

住居の規模は，西壁で4.00m，北・南壁は現存部で2.90m・1.80m，西側で壁高10.0cmを測る。住居内には多数のピットが存在し，位置からしてP1・P2からなる本来4本柱の住居と思われる。床面は薄い貼り床を施し，硬く叩き締められていた。

住居内からの出土遺物は，少量の土器破片のみである。



第119図　14号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第120図　14号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

出土遺物

土　器　（第120図）

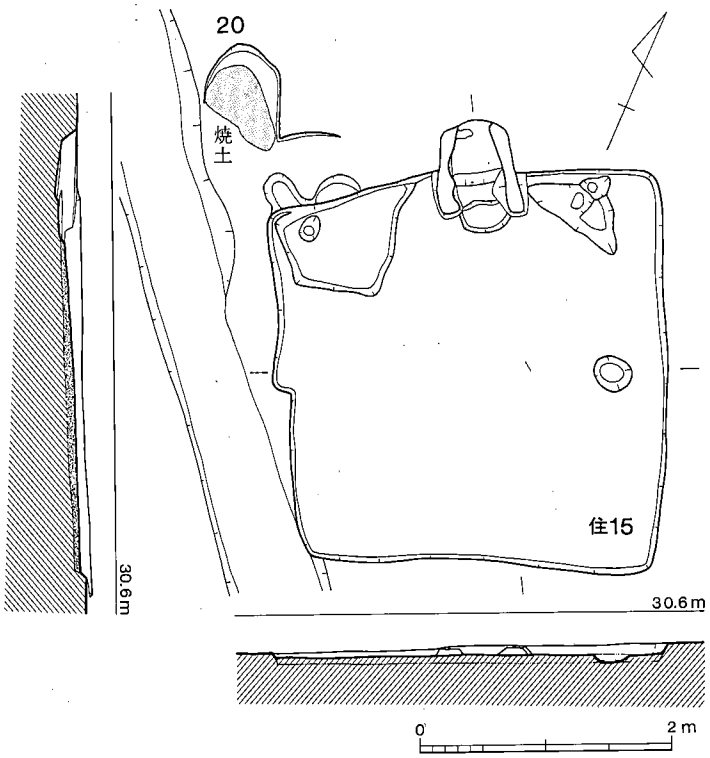
土師器　1・2は坏の小破片資料で，1は体部が内湾気味に立ち上がるタイプであるのに対して，2は直立するタイプである。調整は体部内外面がヨコナデ，2は更にヘラ磨き，体部外面下半はヘラ削りで仕上げている。色調は灰黄褐色を呈し，焼成は普通である。

3は甕の口縁部付近の小破片で，調整は胴部外面がハケ，内面はヘラ削り，口縁部内外面はヨコナデで仕上げている。色調は内面が橙褐色，外面は茶褐色を呈し，焼成は普通である。1・2は床面から，3は下層から出土した。

15号竪穴住居跡　（図版87－(1)･(2)，第121図）

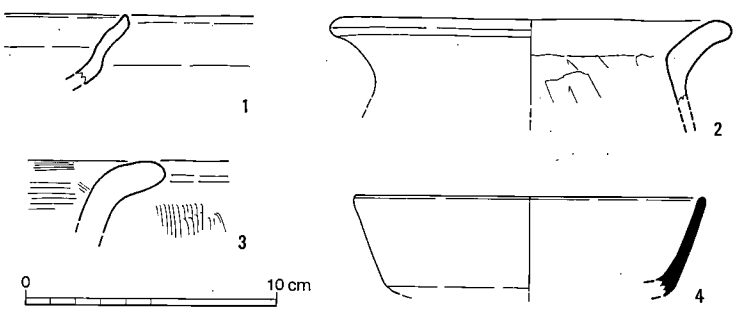
11号住居の西側から検出された方形プランの小形の竪穴住居跡である。

住居の規模は，東・西壁



第121図　15号・20号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

が3.18m・2.74m，南・北壁は2.78m・3.14m，壁高は北壁で12.0cmを測る。床面は薄い貼り床を施し，硬く叩き締められていた。住居内にはピットは存在するものの，主柱穴にはならない。



第122図　15号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

カマドは北壁のほぼ中央に構築されている。カマドの構造は，燃焼部を壁に切り込んだ突出型のもので，押し潰されているものの両袖，焚き口・燃焼部など天井部を良く残していた。燃焼部中央には火床が残っている。燃焼部の幅は58.0cm，焚き口からの奥行きは75.0cmを測る。

住居内からの出土遺物は，少量の土器破片だけである。

出土遺物

土　器　（第122図）

土師器　1は坏の小破片で，口縁部上半で緩やかに外反するタイプである。調整は口縁部内外面はヨコナデ，体部外面は摩滅のため明確でないがヘラ削りと思われる。色調は茶褐色を呈し，焼成は普通である。

2・3は甕の破片資料で，2は小型，3は大型の甕である。2の復原口径は16.0cmを測る。調整は口縁部内外面を，2はヨコナデ，3はハケのあとヨコナデ，胴部内面はヘラ削りで仕上げている。色調は2が灰褐色，3が褐色を呈し，3の外面には煤の付着がみられる。

須恵器　4は椀の破片資料で，復原口径が14.0cmを測る。調整は体部内外面がロクロヨコナデ仕上げで，色調は暗灰褐色を呈し，焼成は良好である。1・4は床面，2はピット内，3はカマド内から出土した。

16号竪穴住居跡　（図版88－(1)，第123図）

15号住居跡の西側から検出された方形プランの小形の竪穴住居跡で，南西隅は発掘区域外のため未掘である。

住居の規模は，東壁で2.88m，西壁は現存部で1.62m，北壁は2.96m，南壁は現存部で1.80m，壁高は東壁で12.0cmを測る。床面は薄い貼り床が施され，硬く叩き締められていた。住居内には多数のピットがあるものの主柱穴にはならない。

カマドは北壁のほぼ中央にあり，当初，燃焼部が壁に切り込む突出型のものと考えていなか

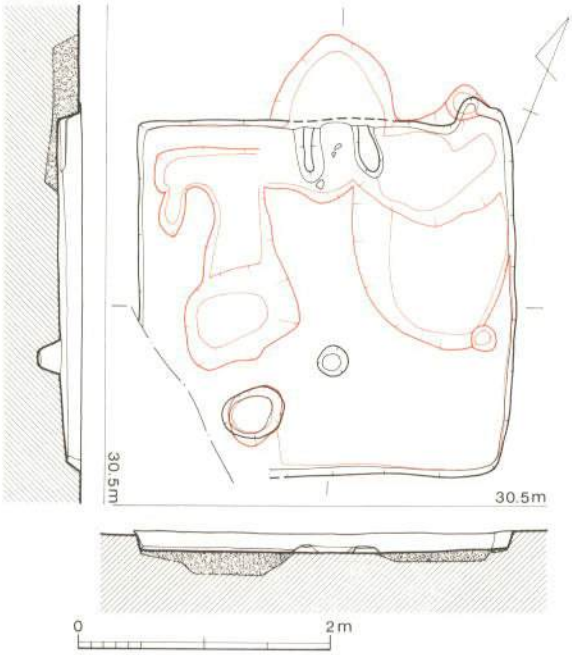
ったが，下層の調査で燃焼部が突出するタイプであることが分かった。

住居内からの出土遺物は，少量の土器破片のみである。

出土遺物

土　器　(第124図)

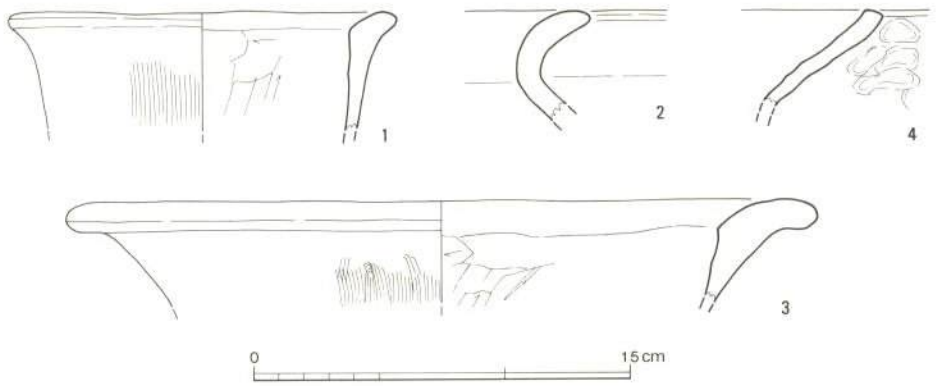
土師器　1・2は甕の破片資料で，1は小型（復原口径15.6cm），2は大型の甕である。調整は口縁部内外面をヨコナデ，胴部外面はハケ，内面はヘラ削りで仕上げている。1の外面は二次加熱のため赤変している。色調は1が黄褐色，2が黄橙色を呈し，焼成は良好である。



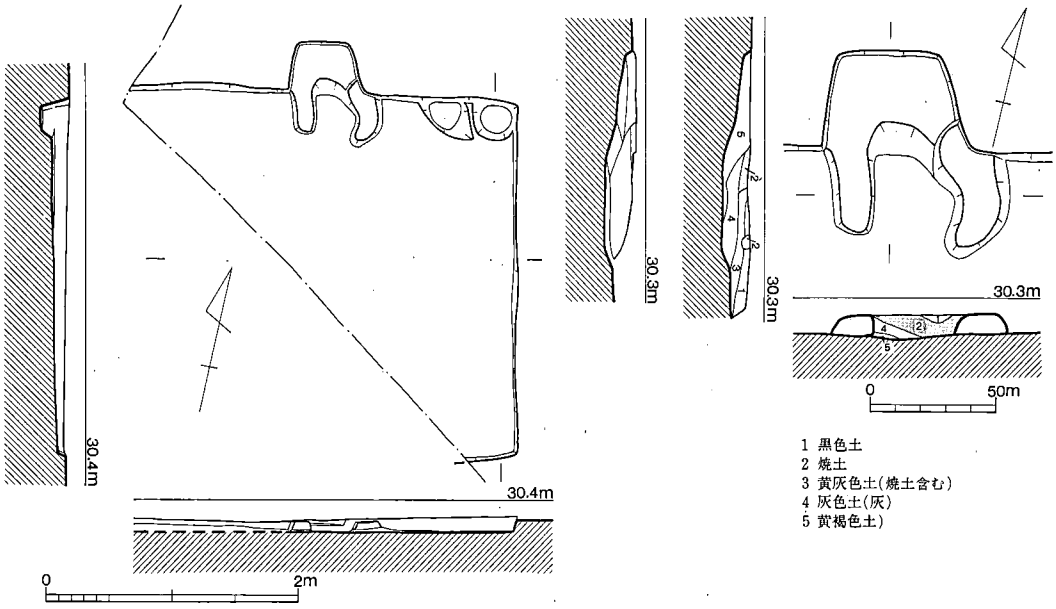
第123図　16号竪穴住居跡実測図（1/60）

3は大型鉢の破片資料で，復原口径は30.0cmを測る。調整は口縁部内外面をヨコナデ，胴部外面はハケ，内面はヘラ削りで仕上げている。色調は茶褐色を呈し，外面には煤の付着がみられ，焼成は良好である。

4は焼塩壺の小破片資料である。内外面ともナデで仕上げており，指圧痕が顕著に残されている。内外面とも二次加熱を受け，赤変している。1はカマド内，他は覆土から出土したものである。



第124図　16号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第125図　17号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

17号竪穴住居跡　（図版88－(2)，第125図）

16号住居跡の北西側から検出された方形プランの小形の竪穴住居跡で，西壁と南壁の大半は発掘調査区域外のため未掘である。

住居の規模は，東壁で2.82m，北・南壁は現存部で3.08m・0.44m，壁高は東壁で10.0cmを測る。床面は硬く叩き締められていたものの，柱穴は存在しない。

カマドは北壁に構築されている。カマドの構造は壁に浅く掘り込んだ突出型のタイプで，両袖とも造り出されている。カマド周辺には袖の一部とも思われる粘土が散乱していた。

住居内からの出土遺物は，少量の小破片の土器だけである。

18号竪穴住居跡　（図版89－(1)・(2)，第126図）

17号住居跡の北側から検出された横長の長方形プランの竪穴住居跡である。

住居の規模は，東・西壁が316m・3.04m，南・北壁は3.78m・3.58m，壁高は13.0cmを測る。床面は薄く貼り床されており，硬く叩き締められていた。主柱穴は少し変則ではあるが中央やや北よりの２本である。

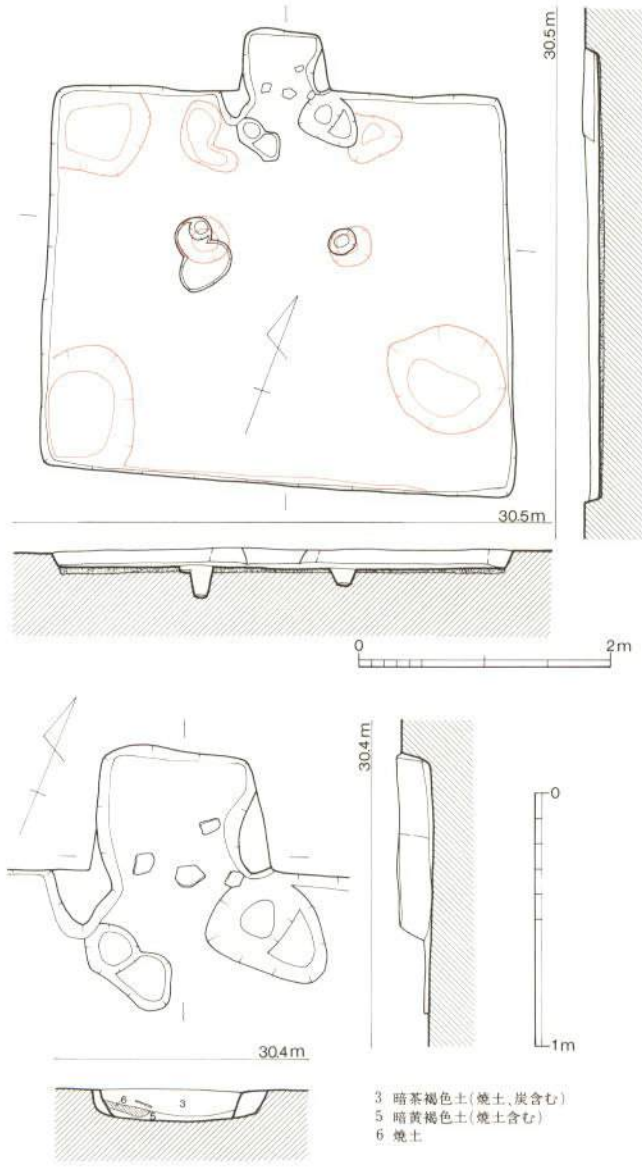
カマドは北壁の中央に設置されている。カマドの構造は，燃焼部を壁に切り込んだ突出型のもので，短い両袖が付設されている。焚き口前面には袖の一部とも思われる粘土塊が散乱していた。

住居内からの出土遺物は，少量の土器破片だけである。

出土遺物

土　器　(第127図)

土師器　1は坏の破片資料で，復原口径は14.2cmを測る。調整は口縁部内外面をヨコナデ，体部内面がナデ，外面はヘラ削りで仕上げている。色調は黄褐色を呈し，焼成は良好である。2～6は甕の破片資料で，2～4は小型，5・6は大型の甕である。3の復原口径は15.0cm，4は16.0cmを測る。調整は口縁部内外面をヨコナデ，胴部外面はハケ，内面をヘラ削りで仕上げている。色調は2が淡黄褐色，3・4が茶褐色，5が黄橙色，6が黄褐色を呈し，4の外面には煤の付着がみられる。2・3はカマド内，他は覆土中から出土したものである。



第126図　18号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

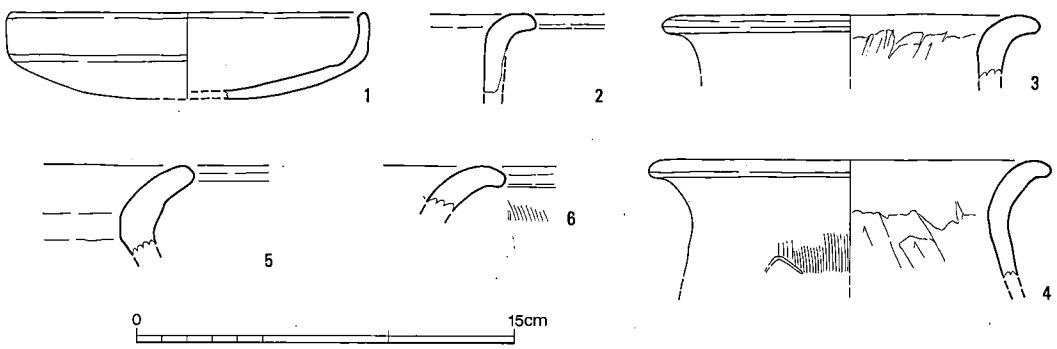
19号竪穴住居跡　(図版90－(1)・(2)，第128・129図)

18号竪穴住居跡の北側から検出された最も大形の方形プランの竪穴住居跡である。

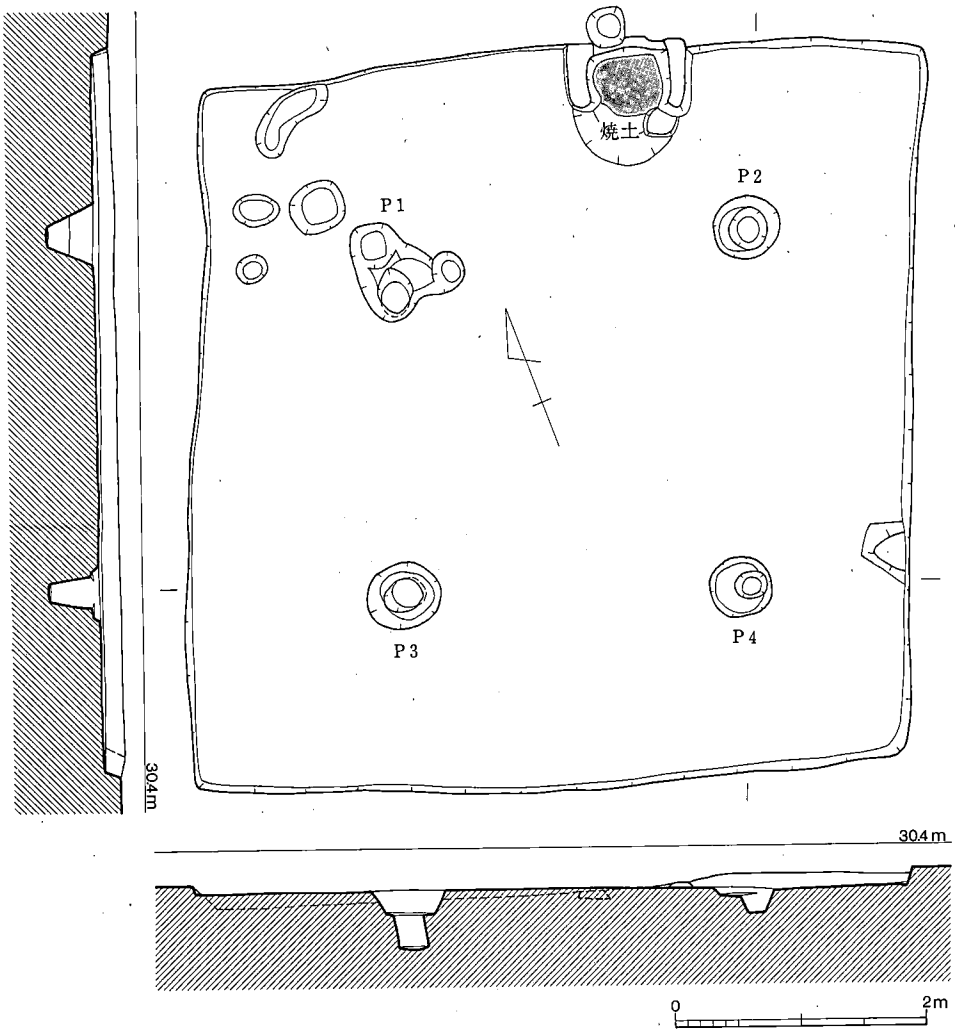
住居の規模は東・西壁で5.66m・5.56m，南・北壁は5.78m・5.68m，壁高は東壁で13.0cmを測る。床面はかなり硬く叩き締められていた。住居内の主柱穴はP1～P4の4本である。

カマドは北壁の中央よりやや東側に偏して構築されている。カマドの構造は，他の住居跡とは異なりなり，黄灰色粘土により両袖を壁面に付設したタイプである。燃焼部の幅は62.0cm，奥行きは40.0cmを測り，燃焼部の床面中央には火床が残されていた。

住居内からの出土遺物は，少量の土器破片のみである。



第127図　18号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

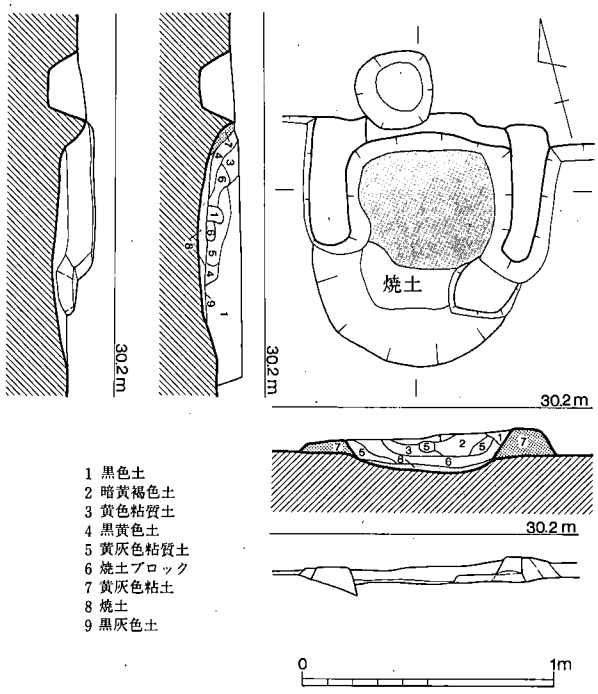


第128図　19号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土遺物

土　器　(第130図)

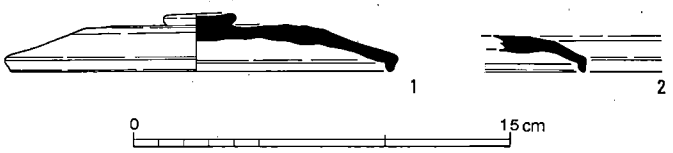
須恵器　いずれも低平な坏蓋の破片資料で，身受部先端は断面三角形を呈し，鈕は低平な宝珠形をなしている。1の復原身受部の径は15.3cm，器高は2.3cmを測る。調整は口縁部内外面がロクロヨコナデ，天井部外面は回転ヘラ削り，内面はナデで仕上げている。色調は1が白黄灰色，2は暗灰色を呈し，焼成も良好である。1は床面から，2はカマド内から出土した。



第129図　19号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

20号竪穴住居跡　(第121図)

15号住居跡の北側から検出されたカマドのみが遺存したもので，住居跡の規模などは不明である。カマドは壁面に燃焼部を切り込んだ突出型のタイプで，両袖は既に消失していた。燃焼部中央には良く焼けた火床が残されていた。燃焼部の幅は61.0cm，奥行きは72.0cmを測る。



第130図　19号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

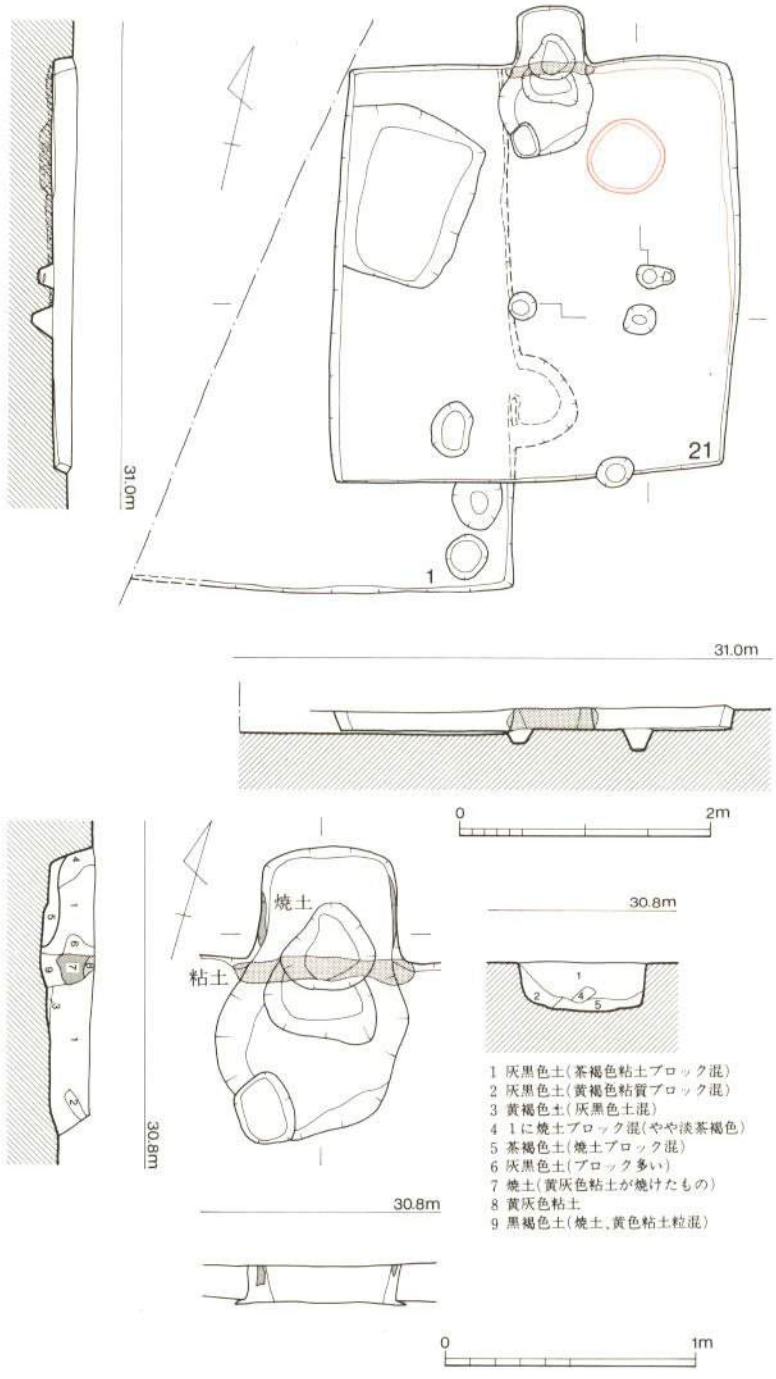
21号竪穴住居跡　（図版91－(1)，第131図）

調査区のほぼ中央付近に位置する竪穴住居跡で，１号竪穴住居跡と重複しており，しかも，この部分が第１次調査との境であるため新旧関係がはっきりしないが，当該住居が新しいと思われる。

住居の形は南北辺が東西辺より若干長くつくり，その規模は東壁が3.20m，南・北壁が3.10mを測る。床面には浅い柱穴があるものの支柱穴ではない。

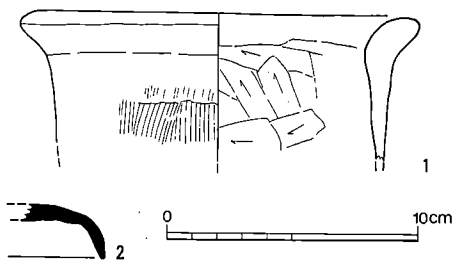
カマドは北壁の中央部分に壁から突出した形で設置されている。その大きさは焚き口幅が60cm，奥行きは50cmを測る。カマド内には灰黒色土が厚く堆積し最下層には焼土ブロック混じりの茶褐色土が薄く堆積していた。焚き口部分には壁体に使用された黄灰色粘土が帯状に残り，その前面には灰を掻き出したと思われる窪みがある。

出土遺物は少なく，



第131図　21号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

図示可能な土器は，土師器の小型甕の破片と須恵器の坏蓋の破片があるに過ぎない。



第132図　21号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

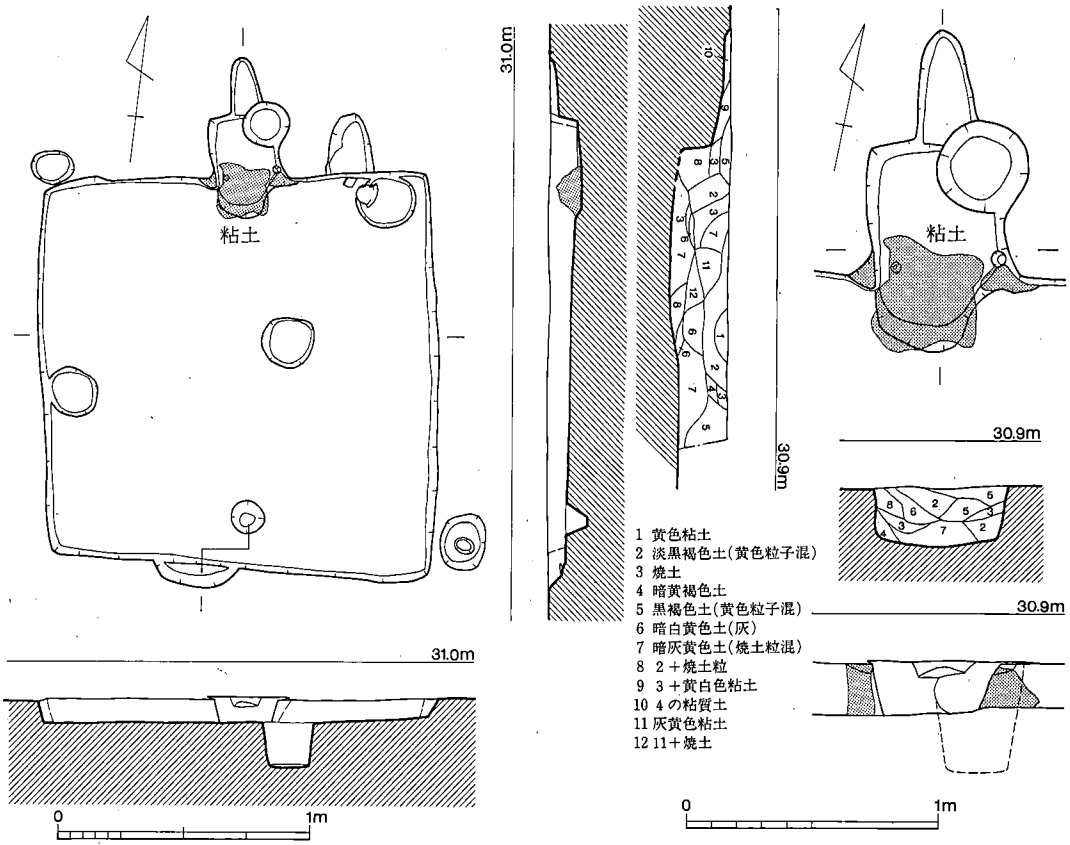
出土遺物

土　器　（図版112，第132図）

土師器　1の小型の甕がある。胴部下半を欠損する。口縁部は緩く外反し肥厚させる。胎土は砂粒が少なく，雲母を多く含む。調整は外面がハケ，内面は粗いヘラ削りで仕上げる。口縁部から外面にかけては二次加熱を受け淡い茶褐色を呈する。口径は15,9cmを測り，カマドの中から出土した。支脚に使用された可能性がある。

須恵器　2は坏蓋の破片で，覆土中から出土した。

22号竪穴住居跡　（図版91－(2)・92－(1)第133図）



第133図　22号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

集落の北限付近に位置する竪穴住居跡で，他の住居との切り合いはない。住居の平面形態はやや歪な方形を呈し，設営場所やカマドの形態，設置方向などから23号竪穴住居と同時併存と考えられる。規模は東・西壁が3.25m・2.90m，南・北壁は3.00m・3.05mを測る。明瞭な支柱穴は見当たらない。この時期の住居は支柱穴のはっきりしない例が多く，支柱穴を住居の周囲に求める考え方があるが，ここでは周囲にも適当な柱穴は遺存しない。

カマドは北壁の中央に設け，壁から突出するタイプで短い煙道が付く。カマドの主軸と住居とが若干ずれてカマドが西方向に振れている。カマドは新しい柱穴で一部破壊されており，その大きさは幅，奥行きともが55cm，煙道の長さは45cmを測る。焚き口部と両袖には灰黄色粘土が見られ，カマドの壁体に使用していた粘土であろう。

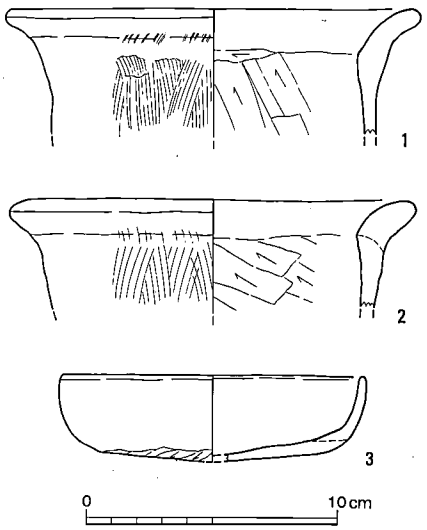
遺物は図示可能な土器では住居の北東隅から土師器の小型の甕が出土した他，坏があるに過ぎない。

出土遺物

土　器　(図版112，第134図)

土師器　1・2は小型の甕の口縁部片である。1は長く緩い外反度の口縁部をなし，調整は外面がハケで内面はヘラで削る。大半の甕が同じようなの調整を施す。胎土は砂粒と雲母を含むが，砂粒が少なく精製粘土を使用している。内外面に弱い二次加熱を受け，覆土中から出土した。復原口径は16.6cmを測る。2は口縁部を厚くつくるタイプで，胎土には大粒砂粒が多く良くない。内外面に二次加熱を受け煤が付着し，黄灰色に変色する。復原口径は16.2cmを測り，住居跡の北東隅の床面から出土した。

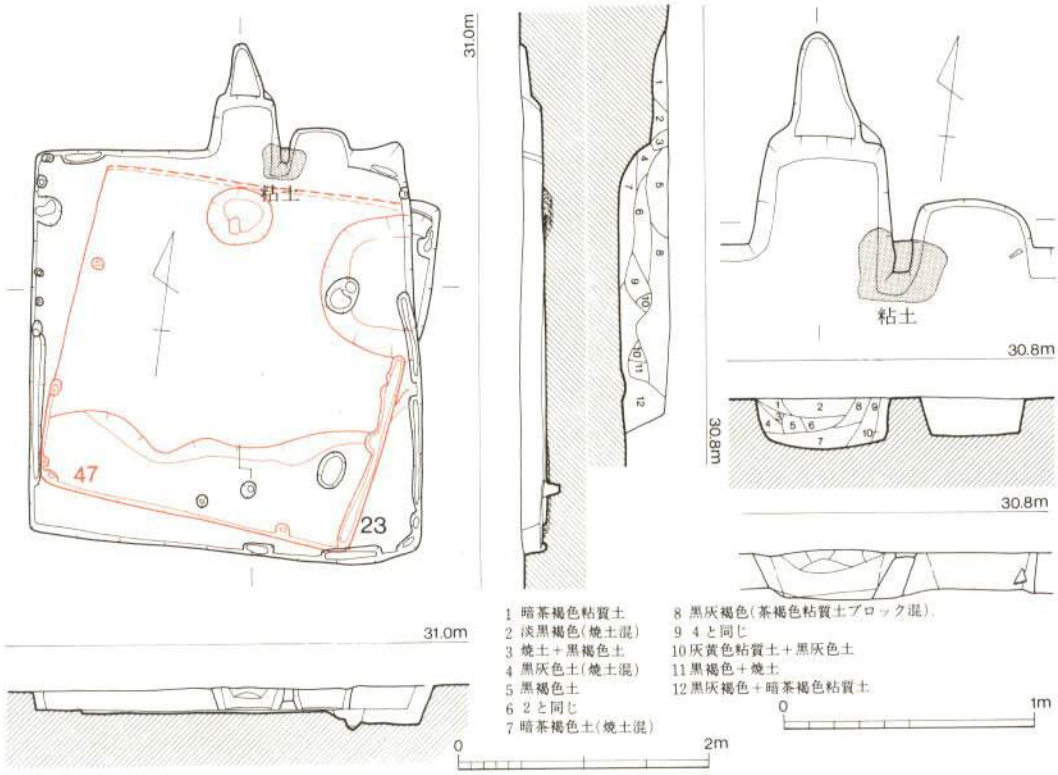
3は坏の破片の復原図で約1/2が残存する。胎土は精製された粘土を使用し緻密である。内外面に二次加熱を受け，明茶褐色に変色している。復原口径は12.0cm，器高は3.5cmを測り，覆土中から出土した。



第134図　22号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

23号竪穴住居跡　(図版92－(2)，第135図)

22号竪穴住居跡の南側7.0mの所に方向を同じくして設営された住居である。住居の形状が22号と殆ど同じで，北壁に設置されたカマドの右傍に突出したつくり出しが付設され，22号竪穴住居のカマド右の突出部も住居に伴うことが推測される。



第135図　23号竪穴住居跡・カマド，47号竪穴住居跡実測図（1/60・1/30）

当該住居は僅かにプランの小さな47号住居と殆どが重なっており，北東側に若干の片鱗を見せている。住居の規模は東・西壁で3.10m・3.00m，南・北壁で3.10m・2.95mを測る。床面はところどころに薄く貼り床を施している。支柱となる柱穴は存在せず，壁沿いには部分的に細い溝と杭状の小ピットがみられる。

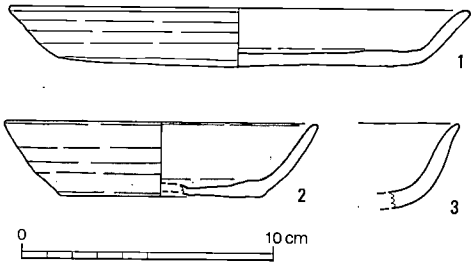
カマドは北壁の中央に突出した形で設置し，22号と同じような短い煙道をつくっている。その規模は幅が55cm，奥行きは45cm，煙道の長さは40cmである。カマド内には焼土の混ざった黒色・茶褐色系の埋土が堆積していたが，横断面の10層は黄灰色粘土が流れ込んでおり壁体の崩れであろう。右側の焚き口部にも灰黄色粘土が焼けた状態で遺存していた。カマドの右傍には幅が48cm，奥行き20cm前後の造り出しが並列しており，この左側には焼痕のみられない灰黄色粘土が堆積していた。

出土遺物は少なく図示不可能な甕の小破片と土師器の皿・坏などの他，土製の管状土錘がある。

出土遺物

土　器　(図版112，第116図)

土師器　1は完形に近い皿である。胎土は非常に緻密で，精製された粘土を使っている。横ナデと回転ヘラ削りで仕上げ，淡い茶褐色を呈する。口径は18.4cm，底径は14.4cm，器高は2.3cmを測る。

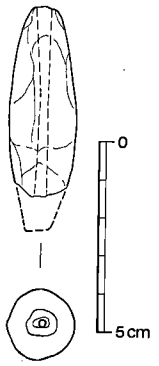


第136図　23号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

2は覆土中から出土した坏の破片で復原実測である。胎土は精製された粘土を使い頗る良好である。調整は横ナデとヘラ削りで仕上げで，灰色を呈する。内面底部に丹を塗布した痕跡が残ることから全面に塗られていたのであろう。復原口径は12.6cmを測る。3はカマド内から出土した坏の小片で，口縁部に橙褐色の化粧土が塗布されている。精製品である。

土製品　(図版115第137図)

管状土錘　住居の床面から出土した管状土錘がある。約1/5を欠損している。精製粘土でつくられ，黄白色である。最大径が1.8cm，重さは14.2gを測る。



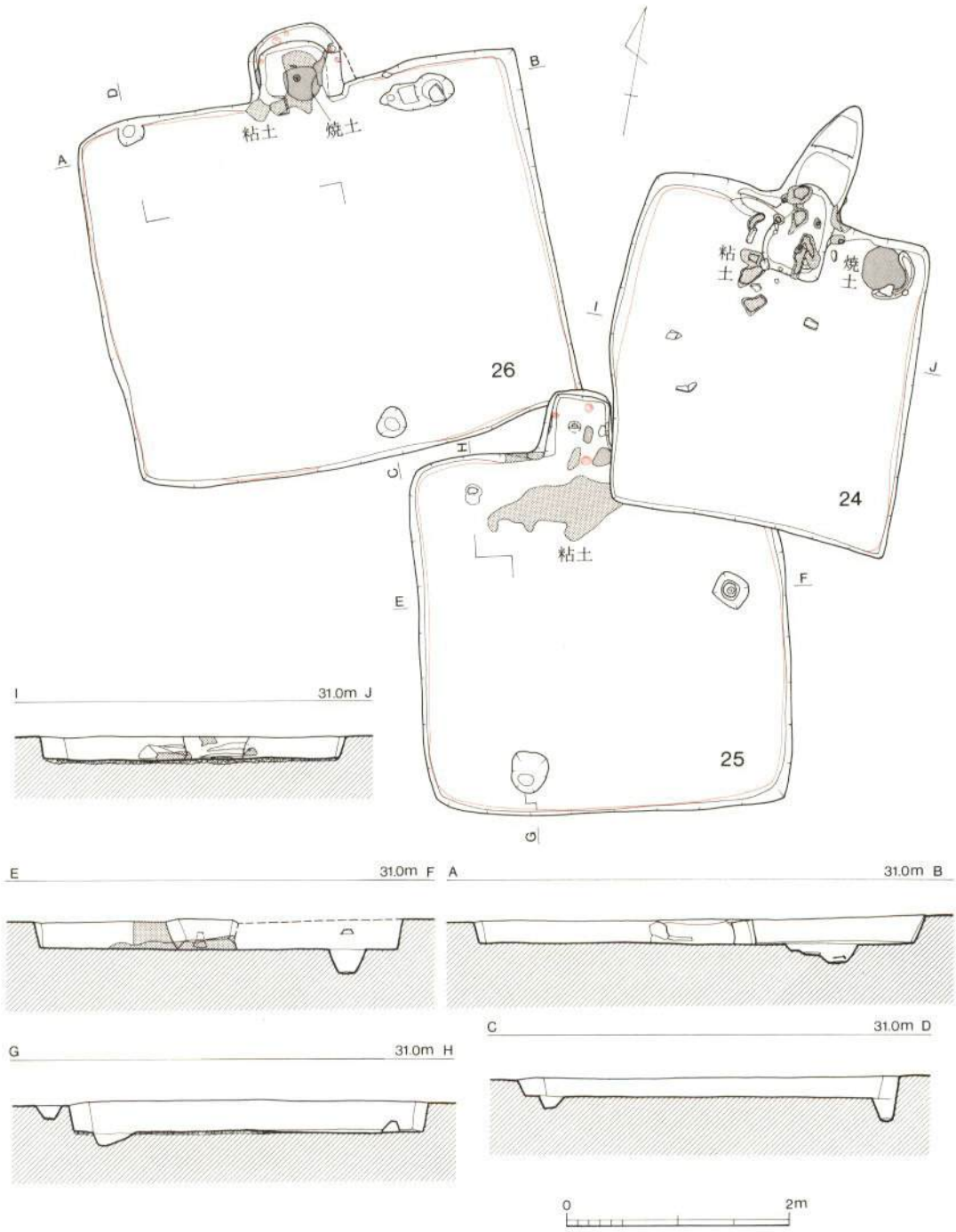
第137図　23号竪穴住居跡
出土土製品実測図 (1/2)

24号竪穴住居跡　(図版93－(2)・94－(1)，第138図)

調査区の中央付近に位置する竪穴住居跡で，26号までの住居が重なるか隣接した形で検出された。当該住居は3軒の中で最も新しく，しかも規模が最も小さい。新旧関係は26号住居→25号住居→24号住居の順で，順次住居の規模の縮小が認められる。

住居は長方形に近い形状で，規模は東・西壁が2.75m・2.95m，南・北壁は2.50m・2.60mを測る。床面は薄い貼り床を施し，住居内の支柱穴は1本もない。住居の北東隅には円形状に焼土がみられた。北壁の中央には住居に対して若干東側に主軸を振った形で突出したカマドを設置していた。カマドは平面形が砲弾状で，隣接する古い住居よりも規模は縮小されているが短い煙道が付く。カマドの幅は55.0cm，奥行きは50.0cm，煙道の長さは45.0cmを測る。焚き口部から前面にかけては若干低くなり灰などの掻き出し痕であろう。ここには黄褐色粘土や土師器，須恵器などの土器片が散乱していた。おそらくカマドに使用した粘土であろう。カマドの右側には粘土による僅かな袖をつくり出している。また，右側の壁面は若干焼痕が認められた。

住居内からの出土遺物は他の住居よりは多く，土師器の甕・高台付椀・坏，須恵器の坏・坏蓋などがある。



第138図　24号～26号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土遺物

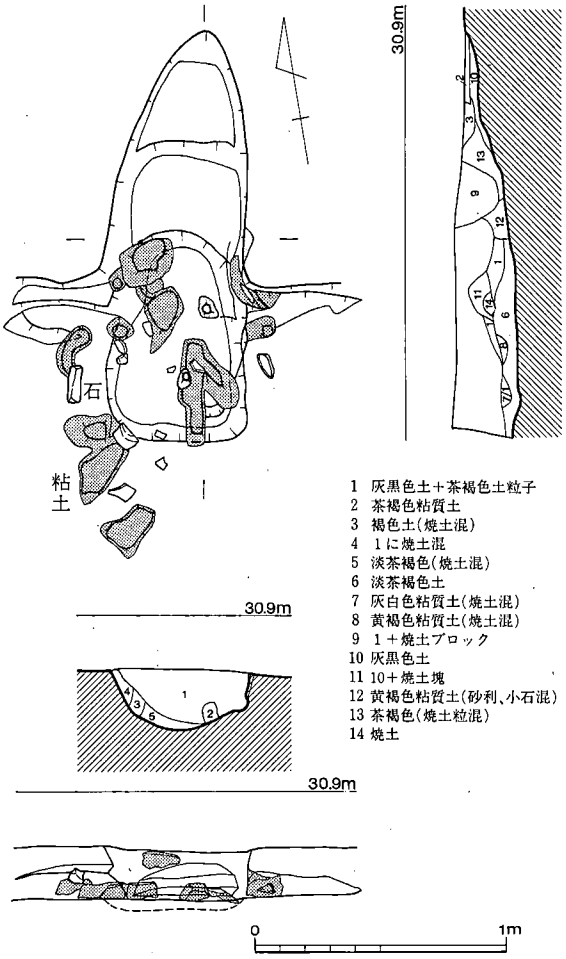
土　器　(図版112, 第140図)

土師器　日常什器の甕ではやや大型から小型のものまでがあるが，いずれも破片で出土している。

1は中型の甕の口縁部片である。2の小型の甕の口縁部と同じタイプで，外反度は緩く，僅かに肥厚させる。胎土は精製粘土を使用し，調整はハケとナデで仕上げるが，外面には化粧土を塗布し二次加熱を受けたため茶褐色に変色している。外面には煤が若干付着し，復原口径は20.8cmを測る。床面から出土した。

2の小型甕は覆土中から出土した。内外面には強い二次加熱を受け，破片の断面にも煤が付着していることから支脚に使用されていたことが考えられる。復原口径は15.2cmを測る。

3・4はやや大型の甕の小片で，前者は鋭く外反する口縁をなし，口唇部は尖り気味である。両者とも器壁が厚い。カマド前面から出土した。4は覆土中からの出土である。



第139図　24号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

5の口縁部片は器壁が薄く長くつくられている。胎土には雲母が多く含まれる。外面には煤が付着し，カマドの直前からの出土である。

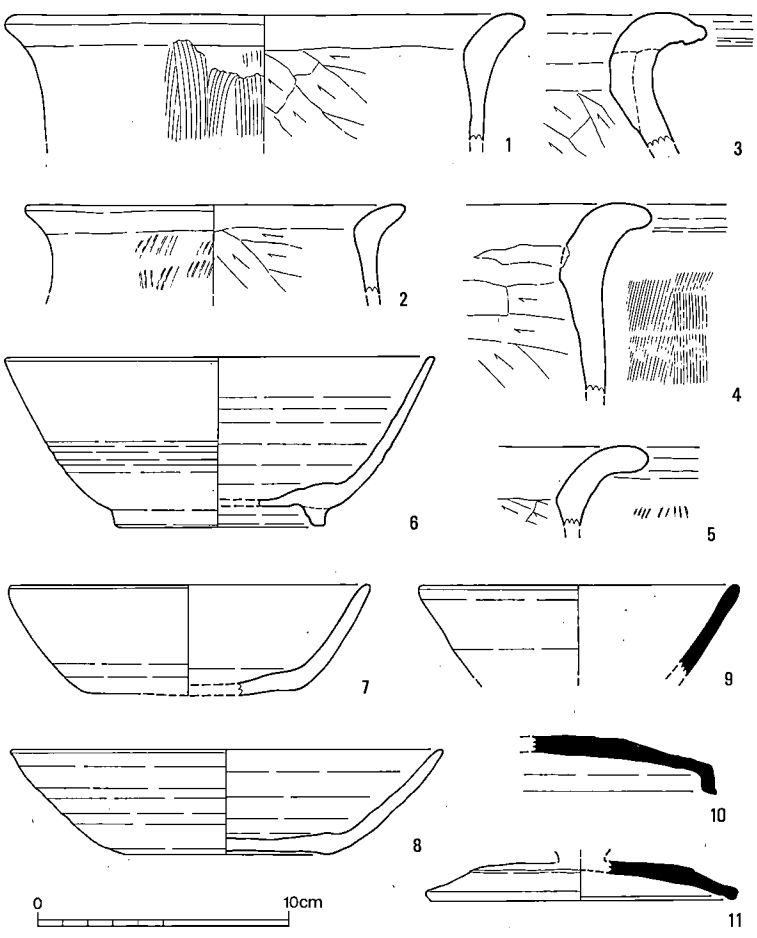
6は高台付の椀の復原実測である。口縁部から胴部にかけては直線的につくられ，底部には低い高台が付けられる。精製粘土を使い胎土には茶褐色粒を多く含む。復原口径は17.2cm，底径は8.4cm，器高は6.7cmを測り，カマドの前面から出土した。

7・8は坏の破片を復原実測したもので，口径の違いで2タイプに分かれる。7は精製された粘土を使用した坏で，内外面に弱い二次加熱を受け煤が付着する。復原口径は14.4cm，底径は8.7cmを測り，覆土の上層から出土した。8は口縁から胴部にかけて直線的につくられ，胎土は非常に緻密で精製品である。外面には二次加熱を受け煤が付着する。復原口径は17.2cm，底径は8.0cm，器高は4.1cmを測る。住居に西側床面から出土した。

須恵器　9はカマド直前から出土した高台付椀の破片である。口縁部から胴部は直線的で，胎土は精製された粘土を使用しているが焼成は軟質で灰白色を呈する。復原口径は12.8cmを測る。

10・11は坏蓋で口縁部のつくりから2タイプに分かれる。10は体部からから口縁部にかけて屈折し，口唇部を尖らせる。天井部を回転ヘラ削りで仕上げ，他は横ナデで仕上げる。淡灰色を呈し，覆土上層から出土した。

11は体部から口縁にかけては直線的で，口唇部は僅かに肥厚させ，摘みの付く坏蓋であろう。天井部は未調整で，他は横ナデで仕上げる。復原口径は12.4cmを測り，覆土の上層から出土した。



第140図　24号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

25号竪穴住居跡　（図版94－(2)，第138・141図）

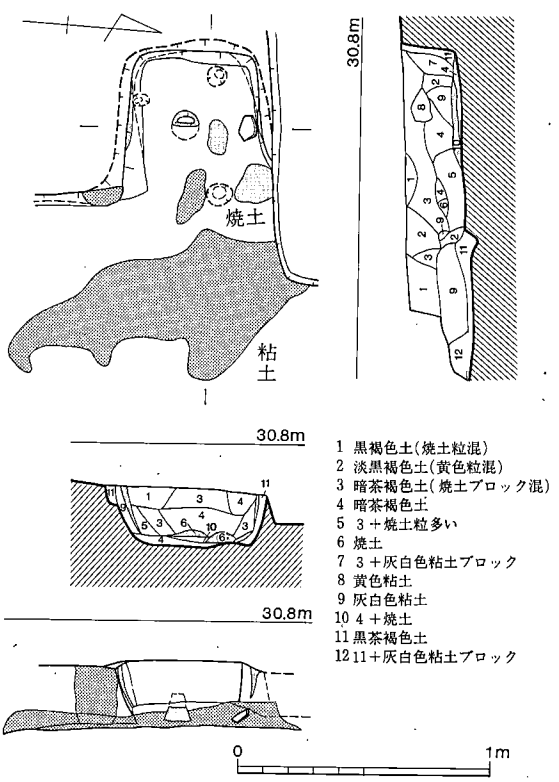
前述したように24号住居に北東側の壁を破壊され，26号住居と当該住居のカマドの一部が重複した竪穴住居跡である。この3軒の住居は狭い範囲の中での建て直しをし，カマドの設営方向は同じである。

住居の平面形態は方形を呈し，床面は部分的に貼り床を施す。床面上では2本の柱穴を検出したが支柱穴とはなり得ない。住居の規模は西壁が3.05m，南壁は3.15mを測る。

カマドは北壁の中央部に壁面から突出した形状で設置していた。カマドの前面には灰白色の粘土と焼土が堆積していた。カマドの規模は，焚き口幅が復原で65.0cm，奥行きが55.0cmを測

る。カマドの中央より若干西側には小型甕を倒立させた支脚の中の焼土が遺存していた。また内部には焼土が残り，両壁は焼痕が残っている。内部の埋土の堆積状況では，黒褐色や茶褐色黄色粘土，灰白色粘土や焼土ブロックが混在した状態で埋没しており，両壁の焼痕の外側には茶褐色系の粘質土が遺存し，壁体の一部が残っていた。また，左側の袖部には灰白色の粘土による小さな突出部があり，若干の袖をつくっていたとこが想定される。

出土遺物は土師器の坏，須恵器の瓶と坏蓋の破片の他，土製の管状土錘がある。

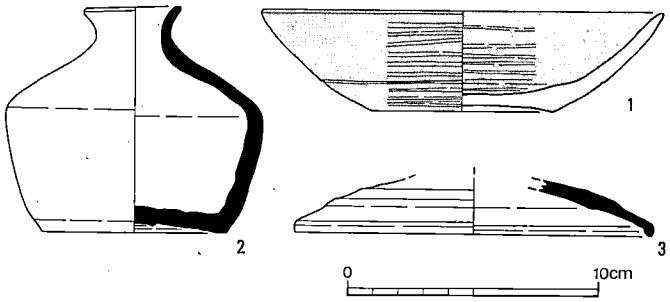


第141図　25号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

出土遺物

土　器　（図版112，第142図）

土師器　1は住居の下層と覆土上層から出土した破片が接合した坏の複原図である。口縁から体部にかけては直線的で，胴下半には細い沈線が巡り，上げ底である。胎土は非常に緻密で精製粘土を使用している。内外面は丁寧にヘラで磨き丹を塗布している。復原口径は16.0cm，底径は7.0cm，器高は4.0cmを測る。



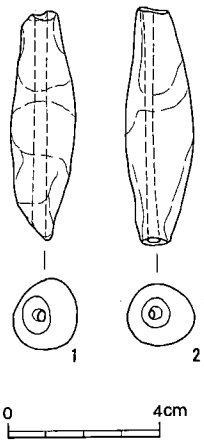
第142図　25号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

須恵器　2は瓶の完形品である。小さな口縁部と短く細い頸部を有し，肩部と胴部の境には微かに稜が付く。底部は安定感のある上げ底を呈する。調整は外面が横ナデ，底部はヘラ切り未調整である。器面の一方の胴下半から底部にかけて煤が付着し，その反対側は強い二次加熱で器面が剝離している。おそらく，煤が付着した部分は土に埋まっていたのであろう。口径は3.9cm，底部径は7.4cm，最大径は10.3cm，器高は9.0cmを測る。

3は住居の上層から出土した坏蓋の破片である。口唇部を嘴状に屈折させている。胎土には砂粒が多く，暗灰色を呈する。復原口径は14.4cmを測る。

土製品　(図版115，第143図)

管状土錘　1・2の手ずくね土錘が住居の上層から出土している。1は端部を若干欠損している。精製粘土を使い棒を刺して掌で握ったため凹凸がある。1は長さが6.0cm，最大径は1.8cm，重さは14.0g，2は6.2cm，最大径が1.8cm，重さは14.8gを測る。



第143図
25号竪穴住居跡出土
土製品実測図 (1/2)

26号竪穴住居跡　(図版95－(2)・96－(1)・(2)，第138・144図)

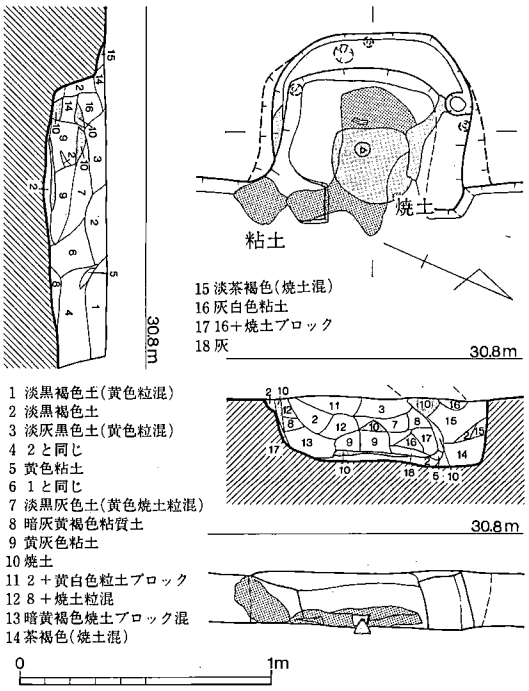
調査した中央付近に位置する竪穴住居跡で，25号住居のカマドの一部が住居の南東隅と重なり合い26号住居が切られている。

住居の平面形状は長方形に近く，その規模は東・西壁が3.25m・3.20m，南・北壁は4.05mを測る。床面は図示できない2.0cmほどの貼り床を施し，床面の北壁沿いに2本，南壁側のカマドに対峙する位置に1本の柱穴があるが，支柱穴かどうかは分からない。

カマドは北壁の中央に設置され，隣接する2軒の住居と同じく壁面から突出するタイプのカマドである。カマドの右壁側には茶褐色粘質土を積み上げた壁体が遺存しており，上部は著しく焼け，左側の壁面も焼痕がみられた。カマドの左と奥壁側は破壊されている。

最下層の淡黒褐色土層の上には径が30.0cmの火床が残り，中央部には円錐形の焼土が据えてあった。おそらく小型の甕を支脚に転用しその内部にあった焼土が残ったものであろう。火床の上層には黄灰色粘土が堆積していたが，焼痕がなく何に使われた粘土かは定かでない。

カマドの規模は掘方までを含めると幅が95.0cm，奥行きは70.0cmほどになる。



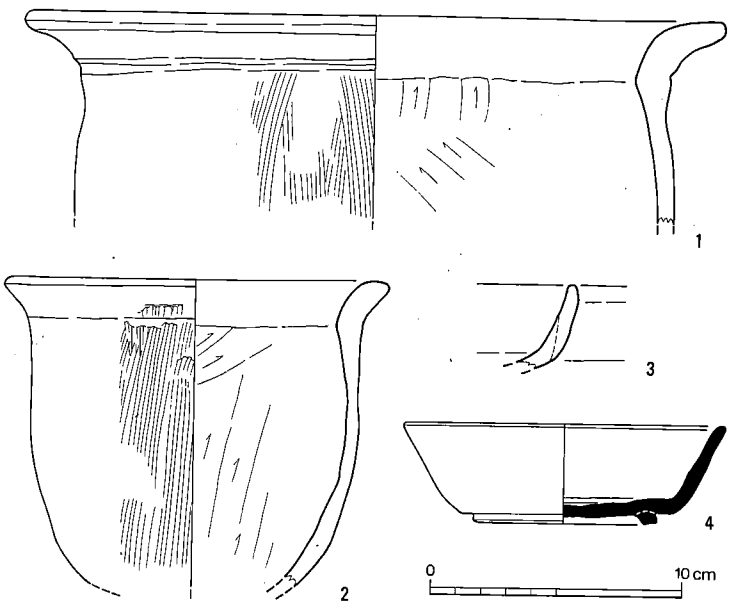
第144図　26号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

出土遺物は少なく，土師器の甕・坏，須恵器の高台付椀などがある。

出土土器

土　器　(図版113, 第145図)

土師器　甕は１・２がある。１はやや大型の甕の口縁部片で，緩く外反しながら長く延びる。調整はハケとヘラ削りで仕上げる。胎土には精製粘土を使用して雲母を多く含む。黄橙色を呈する。全体に弱い二次加熱を受け，内面には若干煤が付着する。復原口径は28.cmを測る。住居の上層から出土した。



第145図　26号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

２はカマドの右側に掘られたピットの中から出土した小型の甕で1/2が残存する。口縁部はやや厚くつくられ外反度は鈍い。胎土には大粒砂粒を含み，焼成はやや軟質である。前面に二次加熱を受け，内外面に煤が付着する。カマドの支脚に使用された可能性がある。復原口径は14.5cmを測る。

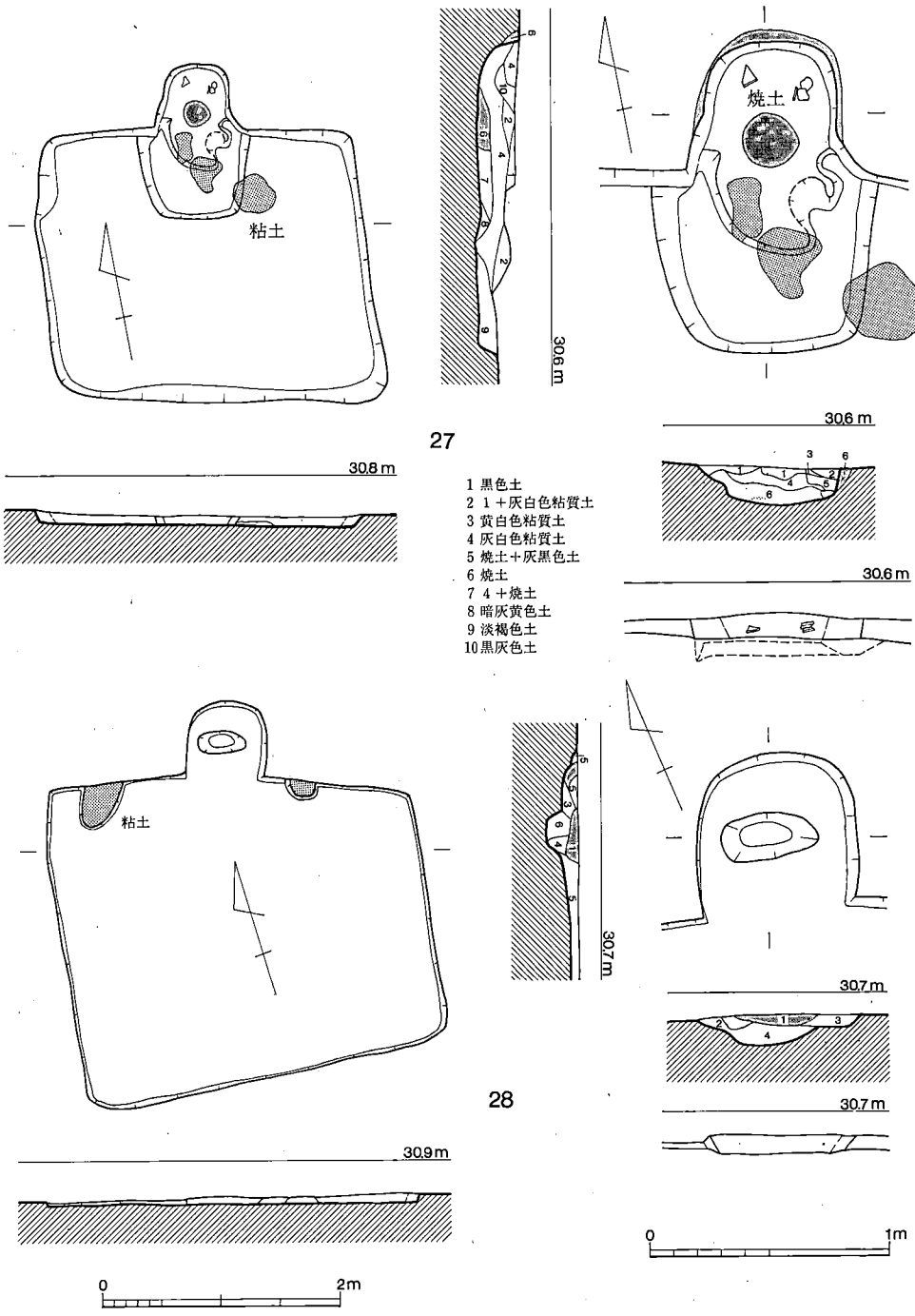
３は覆土の上層から出土した坏の破片で，器壁をやや厚くつくる。口縁部は内湾気味で，底部はヘラ削りで稜をなす。精製粘土でつくられ薄い茶色を呈する。

須恵器　４は住居の上層から出土した高台付椀の復原実測である。口縁部は若干外反し体部から底部にかけては屈折し低い高台を貼付する。胎土には砂粒を多く含み暗灰色を呈する。復原口径は12.8cm，底径は7.4cm，器高は4.0cmを測る。

27号竪穴住居跡　(図版97－(1), 第146図)

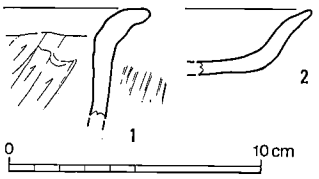
当該集落の北東限と思われる場所に位置する小形の竪穴住居跡で，他の住居跡との重複はない。西側約10.0mに位置する28号竪穴住居跡と住居の主軸を同じくすることから同時併存であろう。

平面形態は歪な長方形を呈し，その規模は東・西壁で2.25m・2.15m，南・北壁で2.75m・2.60mを測る。床面上には支柱となる柱穴は１本もない。



第146図　27号・28号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

カマドは北壁の中央に設置し，住居のプランに対して主軸が東に僅かに振れている。タイプは住居の壁から突出した形のカマドで，その規模は焚き口幅が70.0cm，奥行き55.0cmを測る。カマドの壁面は激しく焼け，中央には径が22.0cmの火床が残っていた。前面には灰・焼土を掻き出したと思われる窪みがある。前面の上層には灰白色の粘土塊があり，カマドに使用された可能性があるが焼痕はない。



第147図　27号竪穴住居跡
出土土器実測図（1/3）

出土遺物は少なく，図示できる土器は土師器の甕と坏の2点である。

出土遺物

土　器　（第147図）

土師器　1はカマド内から出土した小型甕の口縁部片である。緩い外反度の口縁を有し，内外面に強い二次加熱を受ける。支脚に使われた甕かも知れない。

2は覆土中から出土した坏の破片である。口縁を僅かに外反させる。精製粘土を使い胎土は緻密である。内外面は二次加熱のため変色する。

28号竪穴住居跡　（第146図）

当該住居跡も単独で設置されており，他の住居との切り合いはない。平面プランは歪な長方形を呈し，その規模は東・西壁で2.10m・2.70m，南・北壁で3.10m・3.05mを測る。床面上には支柱穴は1本もない。北壁際には2箇所粘土が遺存していた。住居は削平を受けており頗る遺存状態が悪い。

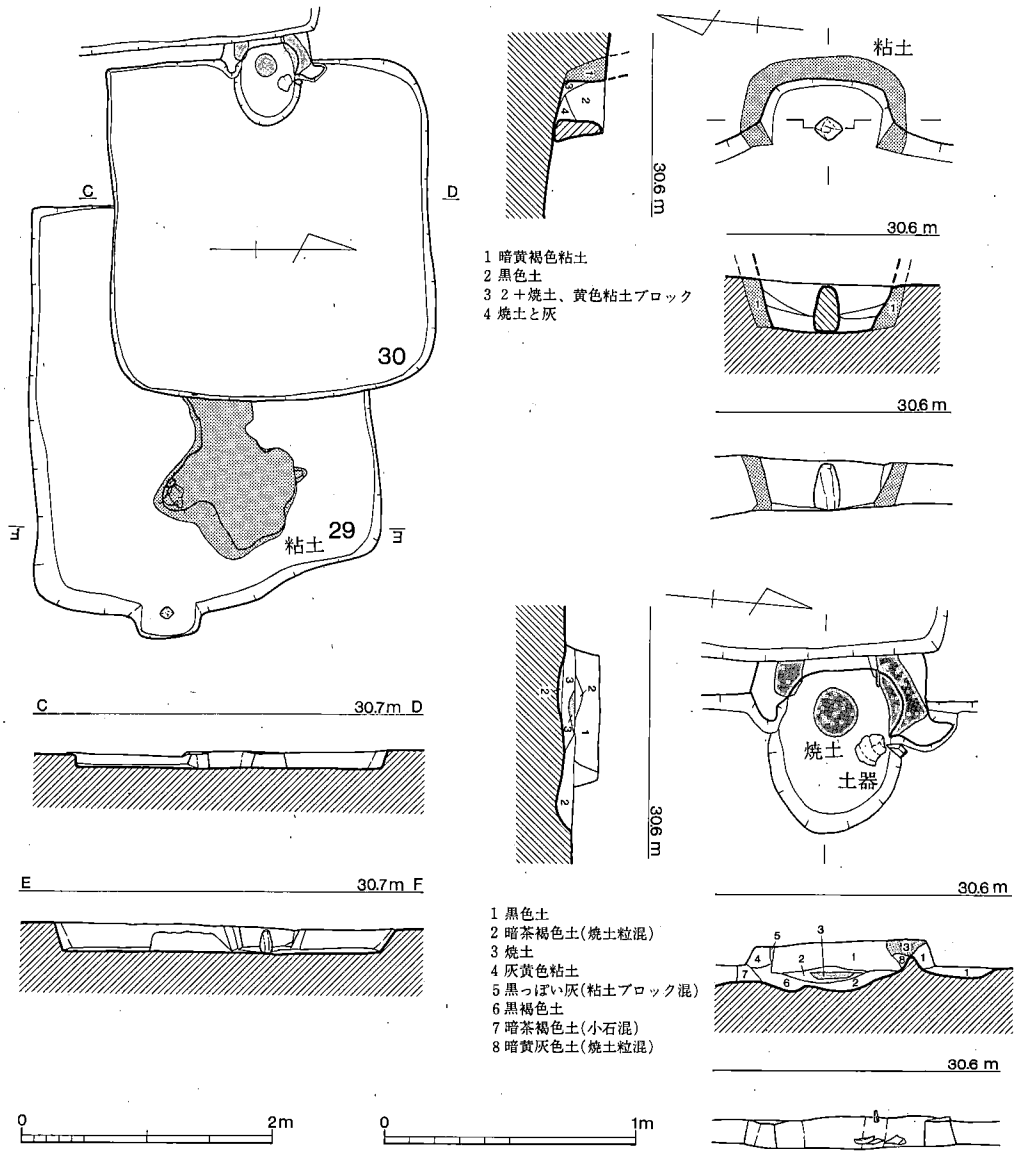
北壁の中央には壁面から突出したカマドが設置されており，規模は焚き口部分の幅が65.0cmで奥行きは70.0cmである。カマド内の真ん中には焼土が堆積し，その周囲には灰が薄く残っていた。底面の中央には楕円形のピットが掘られている。

住居からの出土遺物は殆どなく，図示できる土器はない。

29号竪穴住居跡　（図版97－(2)，第148図）

調査区の東側の一群にある竪穴住居跡で，重複した住居群の中では最も東側に位置する。当該住居と切り合いのある30号住居に1/3が破壊されている。この住居を含めて3軒の住居が重複しているがこの住居が最も古く，新旧の流れは東から西に向かっている。

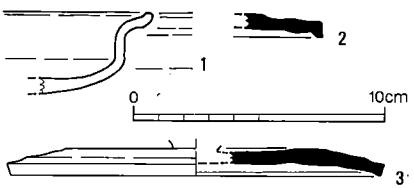
住居の平面形状は長方形に近く，その規模は東壁と南壁が計測可能で，前者は2.75m，後者は3.15mを測る。現存する床面上には支柱穴はまったく遺存しない。床面の中央には灰黄色の粘土が厚く堆積しており，何に使われたのかは定かでない。



第148図　29号・30号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

カマドは，東壁の南寄りに設置しており，壁の最も膨らんだ箇所に突出した形で構築している。カマドの壁面には厚さ8.0cmの暗黄褐色粘土を貼り付けている。規模は掘方幅が66.0cm，内側は52.0cm前後，掘方の奥行きは35.0cmと短く，この法量から住居の内側に袖を構築していたことが考えられるが調査時点では把握できていない。カマド内には黒色土，焼土と黄色粘土，灰などが堆積しており，底面中央には河原石を支脚として利用していた。

出土遺物は少なく，土師器の甕の胴部片（図示していない）・坏，須恵器の坏蓋片が出土している。



第149図　29号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

出土遺物

土　器　（第149図）

土師器　1は覆土中から出土した坏の小破片で，胴部は直立し口縁部を外反させ，口唇部は若干内湾する。精製粘土を使い胎土は茶褐色粒を含み緻密である。黄白色を呈する。底部はヘラ削り，他は横ナデで仕上げる。

須恵器　2・3は坏蓋の破片を復原実測したものである。両者とも口唇部を僅かに肥厚させ，器高の低い蓋である。摘みが付くか否かは定かでない。3の上部口縁には灰が被り重ね焼きの痕跡がある。両者とも覆土中から出土し，後者は復原口径は14.8cmを測る。

30号竪穴住居跡　（図版97－(2)，第148図）

調査区内の住居で唯一東北側にカマドを付設する29号竪穴住居を切った状態で検出した小形の竪穴住居である。この住居は東側に隣接する31号住居にカマドの一部を破壊されている。このことから3軒の住居の新旧関係は31号→30号→29号住居の順になる。

住居の平面プランは隅丸方形を呈し，その規模は東・西壁が2.55m・2.50m，南・北壁は2.50，2.40mを測る。床面上には1本の支柱穴もなく，貼り床も施していない。

カマドは西壁の中央に付設しており，約1/3が30号住居に破壊されているが，壁面から突出したタイプである。カマドは左右の壁体の一部が遺存しており，両袖は僅かに内側に突出している。カマドの掘方の内側には黄灰色粘土を20.0cmの幅で積み重ね壁体としている。

カマド内の上層には黒色土が堆積し，その下層は径が18.0cmほどの火床が残っており，火床の下層は暗茶褐色土層が堆積している。現存する火床は何度かの掻き出しの後の最終段階のものであろう。カマドの掘方の幅は70.0cm，幅の内法は50.0cmを測る。カマドの燃焼部は窪んでおり，灰や焼土の掻き出し痕であろう。この窪みから大型の坏が出土している。

出土遺物は少量で，土師器の坏の他，須恵器の甕の口縁部片がある。

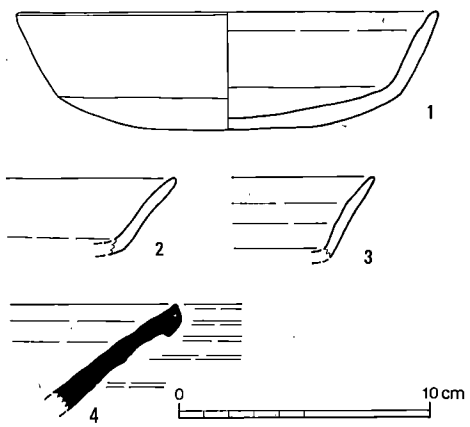
出土遺物

土　器　（図版113・114，第150図）

土師器　1はカマド内から出土した坏の破片を復原実測したもので1/3が残存する。体部から口縁部にかけては直線的につくり，口唇部は尖る。底部はやや膨らむ。胎土は緻密で精製粘土を使っている。内外面に橙色の化粧土を塗布し，弱い二次加熱を受けて黄橙色を呈している。復原口径は16.8cm，底径は13.6cm，器高は4.7cmを測る。

2・3は同じタイプの坏の破片である。体部から口縁にかけては若干反る。前者はカマド内から出土し，強い二次加熱を受け器面が剥離する。精製粘土を使用している。後者は住居の覆土中から出土した。胎土には砂粒が多く，灰色を呈する。

須恵器　4の覆土中から出土した甕の口縁部片がある。口唇部を肥厚させ，口縁下には細い沈線を巡らす。砂粒を多く含み，暗灰色を呈する。

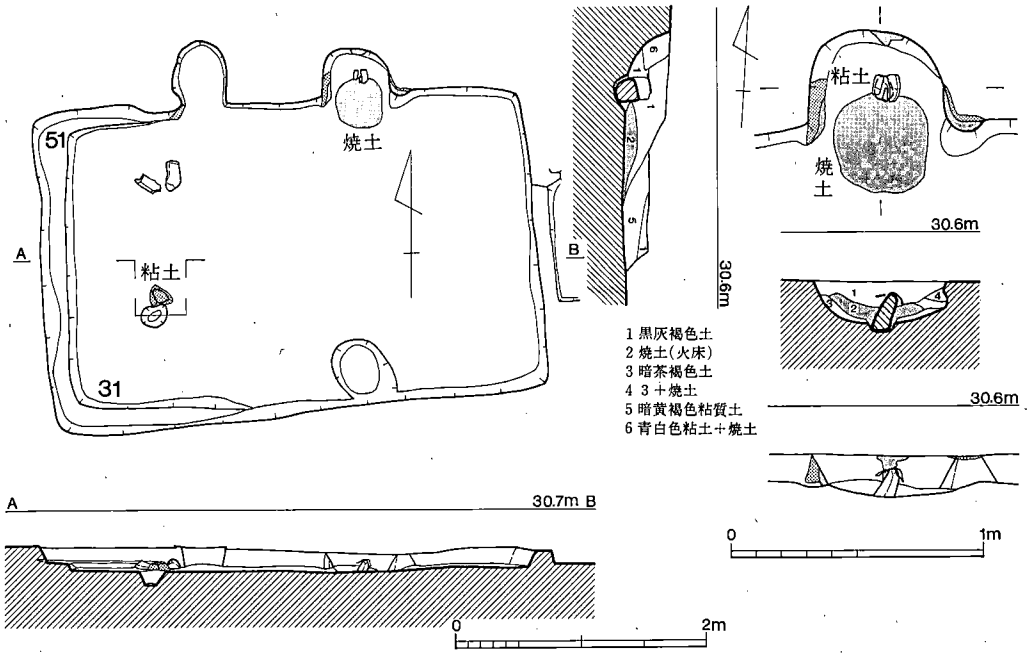


第150図　30号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

31号竪穴住居跡　（図版98－(1)･(2)，第151図）

30号竪穴住居のカマドの一部と重複する竪穴住居跡であるが，西側で一段浅い51号住居跡と完全に重複しており，当該住居の方が新しいと思われるが，31号住居の東側の床面と51号の床面の高低差が4.0cm前後と少ないこと，カマドの位置が東側に寄り過ぎていること，51号住居を含めたプランでの2基のカマドの配置が均等であることなどを考え合わせると，31号住居の拡張が図られた可能性を残している。ここでは便宜上別々に説明する。

住居の平面形状は長方形を呈し，その規模は東・西壁で2.30m・2.20mを測る。床面上には支



第151図　31号竪穴住居跡・カマド，51号竪穴住居跡実測図（1/60・1/30）

柱となる柱穴は１本もなく，カマドと対峙する南壁際に１個のピットが掘られている。

カマドは前述したように，西側のカマドが51号住居のものであるならば東側に寄り過ぎており，北壁から突出した形でつくられている。両端には僅かに袖をつくり出し，カマドの焚き口の両側には青白色粘土が残っていて傍はかなり強く焼け，奥壁も焼痕がみられる。カマドの中央には河原石を埋め込んで支脚に利用し，その上には土師器の坏の破片がのっていた。支脚の前面には径が40.0cmの火床が残っている。焚き口の幅と奥行きは50.0cmである。

出土遺物は土師器の甕・鉢・坏の他，焼塩壺が２個体，須恵器の高台付椀などがある。

出土遺物

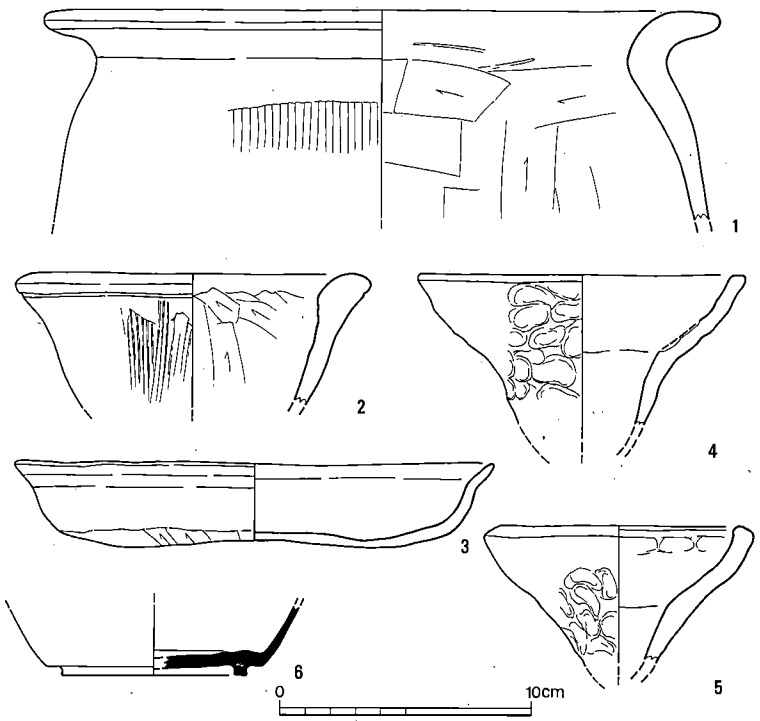
土　器　(図版113，第152図)

土師器　１は覆土の下層から出土した甕の口縁部片である。口縁部は強く外反し口唇部は尖り気味である。肩部はあまり張らない。調整はハケとヘラ削りで仕上げ，復原口径は27.0cmを測る。

２は口縁部を肥厚させる小型の甕（鉢）で胴下半部を欠損する。調整は粗いハケとヘラ削りで仕上げ，内外面には二次加熱を受け煤が付着する。復原口径は14.2cmを測る。覆土の下層から出土した。

３はカマド内から出土した坏の復原実測である。口縁を僅かに外反させ，体部は丸くつくる。外面底部がヘラ削りの他はナデで仕上げる。内外面に二次加熱を受け明茶褐色を呈する。復原口径は19.2cm，器高は3.4cmである。

４・５は住居の覆土中から出土した堅塩をつくり運搬した所謂「焼塩壺」である。円錐形を呈し，森田勉氏による分類ではⅡ－ｂ



第152図　31号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

類に相当する。両者とも強い二次加熱を受け赤変する。外面は指圧痕，内面はナデで仕上げる。４の復原口径は13.2cm，５は10.8cmを測りやや小型である。

須恵器　覆土の下層から出土した高台付椀の破片がある。体部は直線状につくり，底部との境は屈折する。底部には低い高台を貼付する。胎土は砂粒をやや多く含み，暗灰色を呈する。復原底径は7.4cmを測る。

32号竪穴住居跡　（図版99－(1)･(2)，第153･154図）

31号住居の北側に隣接する竪穴住居跡で，50号住居跡と殆ど重なり合っている。住居のプランは方形を呈し，その規模は東･西壁が2.55m･2.60mを測り，小形の住居である。床面上には１本の支柱穴もなく，壁の外側にも柱穴は見当たらない。

カマドは北壁に付設し，壁面から突出したタイプのカマドである。カマド幅は85.0cm，奥行きは70.0cmを測る。両壁から奥壁にかけては壁面に貼られていた黄褐色粘土が残っており，前面にも多くの粘土が堆積していた。奥壁の若干膨らんだ粘土は煙道の痕跡であろう。

カマドの最下層には暗茶灰色土（灰）が薄く堆積し，上層には壁体に使われたと思われる黄褐色の粘質土が堆積していた。焚き口部分の粘土の下層には火床が残っている。

内部からは土師器の小型甕と須恵器の高台付椀の破片が出土した。その他埋土中からやや大型の甕と須恵器の高台付椀の破片が出土している。

出土遺物

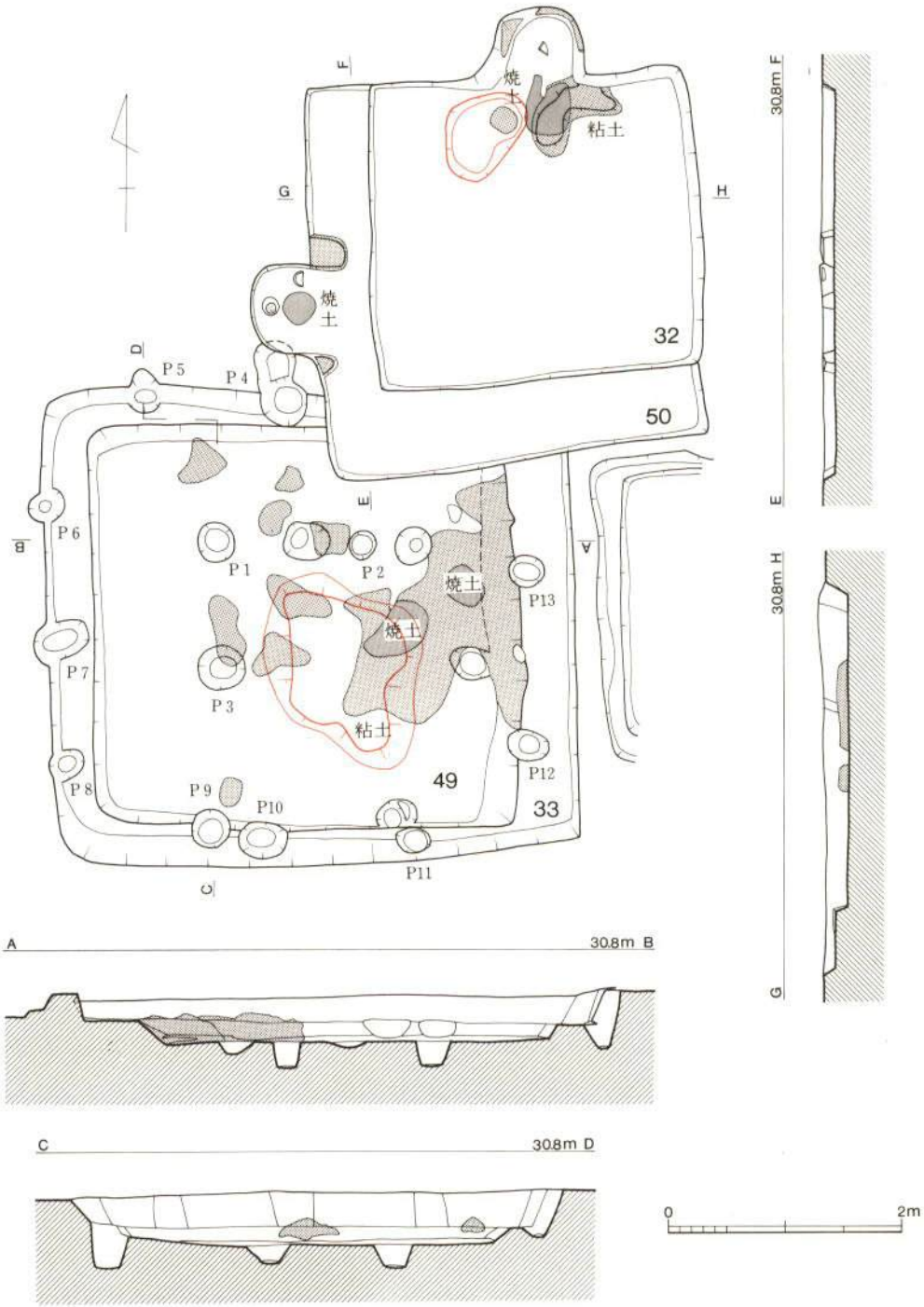
土　器　（図版113，第155図）

土師器　１は覆土中から出土したやや大型の甕の口縁部片で，1/4が残存し図上復原実測である。口縁部は長くつくられ，反り気味に外反する。口縁部の外面には亀裂が生じたためか粘土で補修した痕跡がある。精製された粘土を使い，胎土には砂粒が少なく雲母を多く含む。内外面とも二次加熱を受け，内側には特に多くの煤が付着している。復原口径は39.4cmを測る。

２は小型の甕の破片で，1/2が残っており胴部下半を欠損している。口縁の外反度は緩く，肩部から胴部にかけては直線的につくる。調整は粗いハケとナデで仕上げる。胎土には大粒砂粒を含み，内外面には煤が僅かに付着している。カマド内から出土した。

須恵器　３・４は高台付の椀の破片で，両者とも低い高台を付す。３は焼成が悪く，明灰色を呈する。復原底径は11.2cmを測り，カマド内からの出土である。

４は口縁部から体部にかけて直線的で，体部と底部の境目に高台を貼付する。胎土は緻密で精製粘土を使っている。焼成は悪く，一見土師器風にみえる。外面は重ね焼きしたことで瓦器風に黒く変色している。復原口径は18.8cm，底径は12.6cm，器高は5.8cmを測り，覆土中から出土した。他の共伴土器よりも若干新相を呈する。

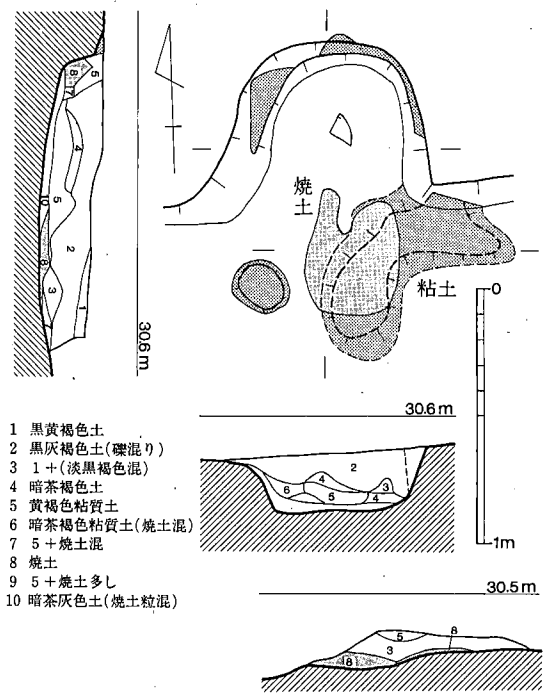


第153図　32号・33号・49号・50号竪穴住居跡実測図（1/60）

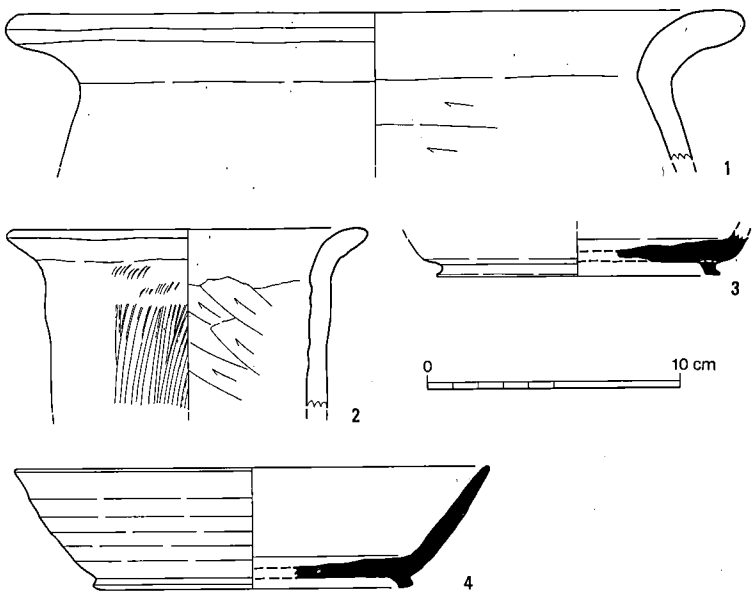
33号竪穴住居跡（図版100－(1)，第153図）

8軒の住居群の中で最も規模の大きな竪穴住居である。重複関係は32号・50号住居に切られ，新しい49号住居跡とは完全に重なり当該住居の全容を分かりにくくしている。

住居の平面プランは長方形に近い形状で，その規模は東壁が50号住居に切られて分からないが西壁は3.95m，南壁が4.40mを測る。支柱穴は49号住居内に数本みられるが，深さ・掘られた位置からP1・P2・P3に規則性があるが，当該住居の支柱穴にしては柱間が狭すぎることから，49号住居の支柱穴であろう。床面上での支柱は分からないが，壁際に規則的な柱穴が配されており，各柱間はP4－P5・P5－P6・P6－P7が1.20m，P7－P8　1.10m，P8－P9が1.35m，P8－P10が1.80m，P9－P11は1.80m，P10－P11は1.30m，P11－P12は1.30m，P12－P13は1.50mを測り，個々の柱間には一定の規則性がある。唯一，P9とP10とは接近して掘られているが両者とP8・P11との間も規則的で，これら住居を取り囲む柱穴は屋根材を組む段階での頭長押（竪穴住居の場



第154図　32号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第155図　32号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

合「長押」の言い方が適当か否かは分からないが）を支える柱跡であろう。このように考えると当然柱間には壁が存在していることが指摘でき，疑問の残る点は住居の四隅に柱が配されていないこと，東側の２本の柱が住居の床面上に立てられていることである。

この住居のカマドは確認できていないし，遺物は49号住居で大半が破壊を受け出土していない。

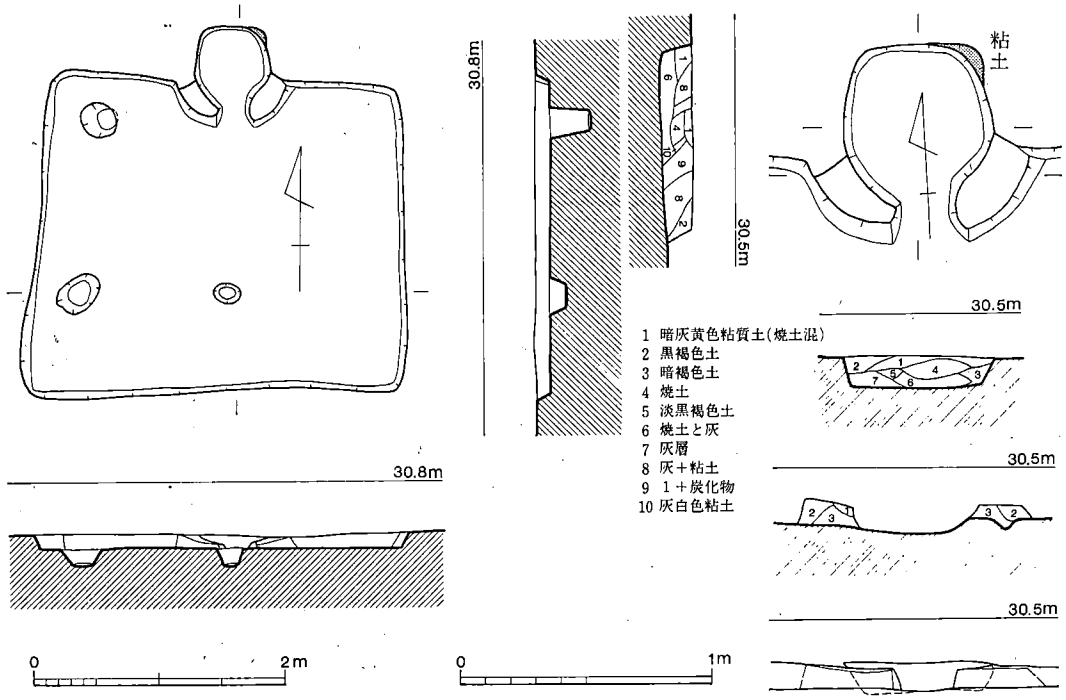
34号竪穴住居跡　（図版100－(2)･101－(1)，第156図）

前述した一群の竪穴住居の西南側4.0mに位置する小型の竪穴住居跡で，他の遺構との重複はない。住居の平面形状は方形を呈し，その規模は東･西壁が2.40m･2.60m，南･北壁は3.00m･2.75mを測る。床面上にははっきりとした支柱穴はない。

北壁の中央には壁面から突出したタイプのカマドが取り付けられ，焚き口部には暗褐色粘質土で囲むような袖の一部が残っている。焚き口の幅は20.0cm，奥行きは75.0cmである。カマド内には最下層に焼土と灰が薄く堆積していたが支脚や火床は残っていない。

出土遺物は少なく，図示できるものは土師器の甕の口縁部片が２点あるに過ぎない。

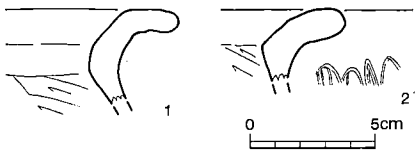
出土遺物



第156図　34号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

土　器　(第157図)

土師器　1・2は甕の口縁部片で，両者とも住居の覆土中から出土した。1の甕は口縁部を鋭く反り気味に外反させ，頸部内面から口唇部にかけては橙色の化粧度を塗布しているが，口縁部内面はヘラで削り取っている。2は口縁を短く肥厚させるタイプの甕である。胎土には雲母を多く含み精製されている。外面の調整はハケと思われるが，粗い沈線上の起点がみられる。

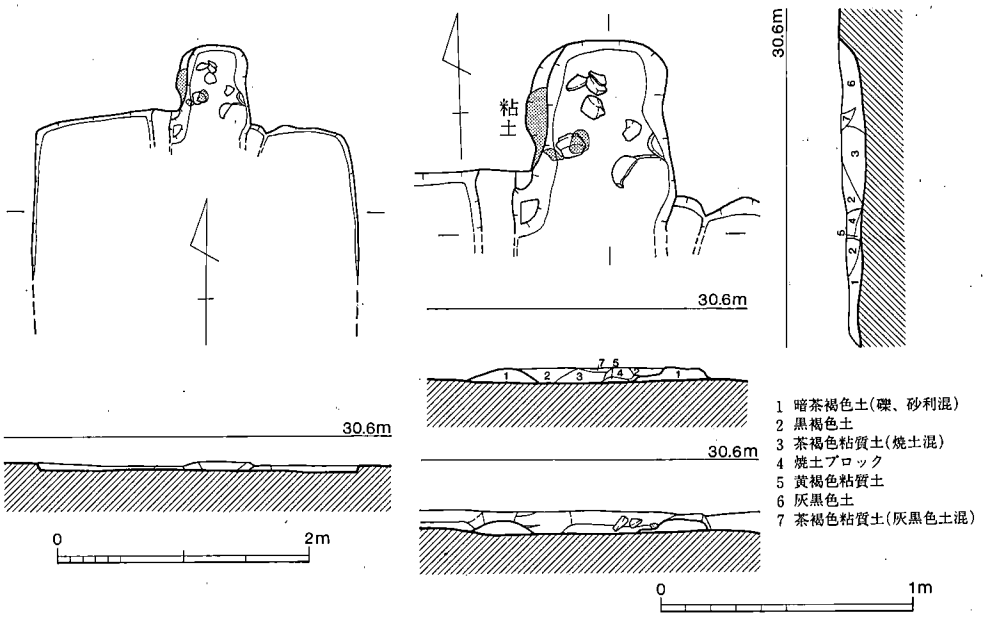


第157図　34号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

35号竪穴住居跡　(図版101－(2)，第158図)

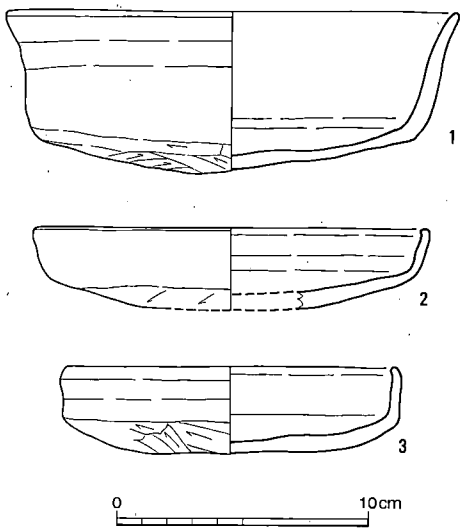
33号竪穴住居跡の南隣に位置する住居であるが，削平により約1/2の壁が消滅している。平面形態は方形と思われ，規模の小さい竪穴住居であろう。北壁辺の長さは2.45mを測る。床面上には支柱穴はまったく見当たらない。

カマドは北壁のやや東寄りに設置し，タイプは壁面から突出するもので，両脇に暗茶褐色の礫と砂利混じりの粘質土で袖を構築している。カマドの西壁には壁体の一部である暗黄褐色の粘土が残っている。内部には灰黒色（灰）と焼土が堆積していた。底面には石塊と土師器の坏の破片が散在している。カマドの規模は焚き口部の幅が45.0cm，奥行きは袖が削られているため分からない。



第158図　35号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

出土遺物は住居が削平され床面上からはなく，すべてカマド内からの出土で，器種は土師器の鉢（坏）・坏がある。



第159図　35号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

出土遺物

土　器　（図版113，第159図）

土師器　1は坏を深くしたような形態の器でここでは鉢に分類できるかと思われる。口縁部は僅かに外反させ，体部から底部の境はヘラ削り調整により屈折する。底部のつくりは凹凸があり不安定である。精製粘土を使用し，胎土には雲母の細粒を多く含み緻密である。外面には弱い二次加熱を受け淡茶褐色を呈する。復原口径は18.0cm，底径は14.9cm，器高は8.4cmを測る。

2・3はいずれも坏の破片で復原実測である。2は口唇部を肥厚させ，しかも内湾する。体部は短く不安定な底である。精製品で雲母を多く含み，橙褐色を呈する。復原口径は15.8cmを測る。

3は口唇部を内湾させるが，体部は上方に延び屈折してやや不安定な底をなす。精製粘土を使い黄橙色であるが，外面は赤橙色の化粧土を塗布している。復原口径は13.0cm，底径は13.4cm，器高は3.4cmを測る。調整はすべて底部がヘラ削りで，他は横ナデで仕上げる。

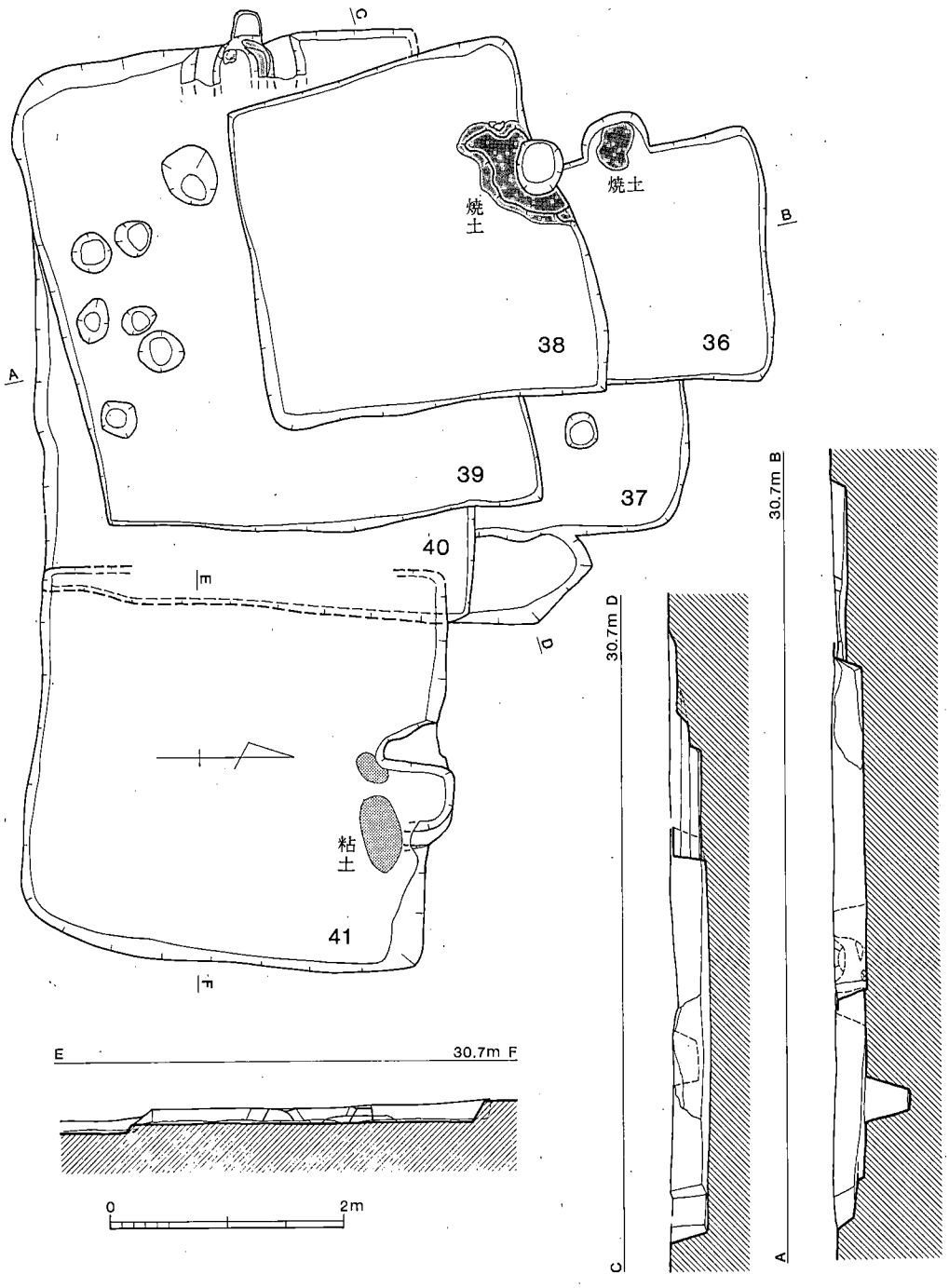
36号竪穴住居跡　（図版102－(1)，第160図）

36号住居から42号住居までは重複関係の激しい一群で，前述したグループの南側5.0mに位置する。この一群の中で最も新しいのが38号住居跡で最も古いのが40号住居跡である。ここでも古い住居から新しい住居に行くにしたがって規模が小形化する。

当該住居跡は一群の最も北側に位置し，一番新しい38号住居に切られ，37号住居を切っている。計測できる北壁は2.15mを測り，小形の住居と思われる。しかも，一群の中では最も遺存状態が悪く，カマドも西壁に痕跡をとどめるに過ぎず，壁面から突出するタイプで内部には僅かに焼土が認められた。現存での床面上の支柱穴は1本もなく，貼り床も施していない。

遺存状態の悪さから出土遺物も少なく，土師器の甕と坏の破片があるに過ぎない。いずれも住居の覆土中から出土している。

出土遺物

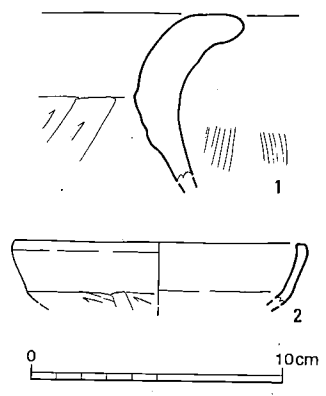


第160図　36号～41号竪穴住居跡実側図（1/60）

土　器　(第161図)

土師器　1はやや大型の甕の口縁部片で反り気味に外反させ，口唇部は僅かに尖る。胎土には砂粒が多く，雲母を若干含む。焼成は軟質で，黄橙色を呈する。

2は口唇部を僅かに内湾させる坏の破片で，精製粘土を使って雲母をやや多く含む。淡茶褐色を呈する。



第161図　36号竪穴住居跡
出土土器実測図 (1/3)

37号竪穴住居跡　(図版102－(1)，第160図)

41号竪穴住居跡とは不明であるが，すべての住居跡より古い住居で，その一部を残すに過ぎない。床面上には1本の柱穴がみられる。位置的にはずれていないが支柱穴かどうかは分からない。

図示できる出土遺物はない。

38号竪穴住居跡　(図版102－(1)，第160図)

一群の住居の中で最も新しい住居跡で，平面形態は歪な方形を呈する。その規模は，東・西壁で2.85m・2.50m，南・北壁で2.75m・3.10mを測り，この一群の住居内で36号住居に継いで小形の住居である。

床面上の支柱穴はまったくない。北壁の西寄りにはカマドを付設していたらしいが，カマド自体が破壊されており，また新しい柱穴にも切られて焼土と粘土の堆積が認められたに過ぎない。

出土遺物は，土師器の甕・坏，須恵器の高台付椀・坏蓋の破片があるが，いずれも覆土中から出土したものである。

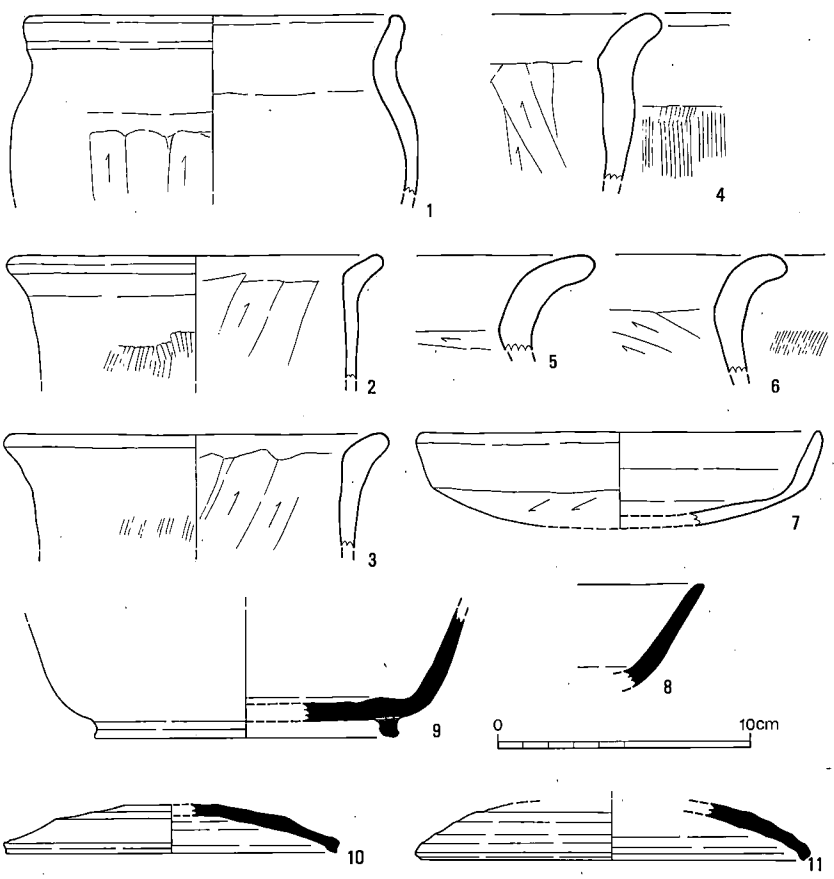
出土遺物

土　器　(第113図)

土師器　甕には3タイプがある。1は口縁部を直上させ口唇部を僅かに内湾させるタイプの甕で，肩部は僅かに張る。調整は胴部外面をヘラで削り僅かな稜が付く。口縁部は横ナデ，内面はヘラで削った後ナデる。胎土は緻密で，内外面に二次加熱を受け淡茶褐色に変色する。復原口径は15.2cmを測る。

2～4は同じタイプの甕の口縁部片である。2・3は口縁部を胴部より厚くつくり，胴部は直線的に仕上げる。4は器壁をやや厚くつくり，肩部に僅かに張りがある。2・4は二次加熱を受け煤が付着する。2の復原口径は15.0cm，3は15.4cmを測る。

5・6は反り気味に外反するタイプの甕で，前者は口縁を長くつくる。



第162図　38号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

7は坏の復原実測である。口唇部を尖らせ，体部は短く直線的で体部と底部の境は屈折させる。精製粘土を使い，茶褐色粒を多く含む。内外面に二次加熱を受け煤が付着する。復原口径は16.0cmを測る。

須恵器　8・9は高台付椀の破片で体部から口縁にかけて直線状につくり，底部との境は丸くつくる。高台は低く丸みを持つ。8は暗茶褐色，9は灰色を呈し，復原底径は12.2cmを測る。

10・11は坏蓋の破片である。両者とも口唇部を肥厚させるが，前者は角ばり後者は丸くつくる。10の胎土は精製され，11は砂粒を多く含む。復原口径は13.0cmと15.8cmを測る。

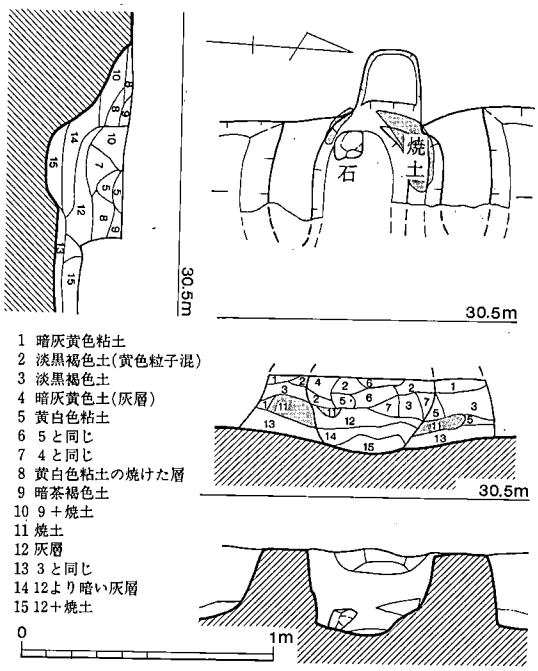
39号竪穴住居跡　（図版102－(1)，第160・163図）

40号竪穴住居跡と完全に重なった住居で，40号住居を調査していた時点で39号住居に気づいた。40号よりは新しく，38号住居より古い。住居の平面形状は方形を呈し，その規模は東・西壁が3.75m・3.40m，南・北壁は3.80m・4.15mを測り，やや歪な住居である。床面上には数個

のピットがあるが支柱穴となり得るものはない。

短辺である西壁の中央には暗灰黄色粘土を主体とした土で「U」字状のカマドを設置している。カマドは調査時点で袖の確認が難しく掘り過ぎた感がある。袖は淡黒褐色の土をベースに焼土・黄白色粘土・暗灰黄色粘土・淡黒褐色土で構築され，焼土が混入している事実から袖のつくり直しが考えられる。内部には灰と焼土が厚く堆積していた。奥壁内部は焼痕の著しい箇所がある。奥には削平された短い煙道が遺存していた。底面からは石塊が出土したが，支脚に使われたものではない。

出土遺物は土師器の甕と坏がある。



第163図　39号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

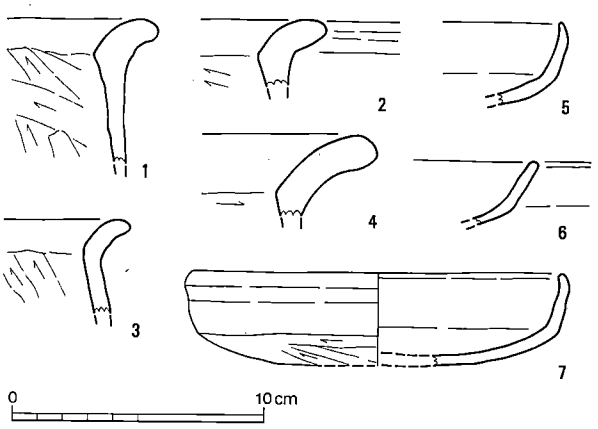
出土遺物

土　器　（第164図）

土師器　甕は口縁部の形態から3タイプある。1・2は厚い器壁を内面のヘラ削りで薄く仕上げるため，口縁部は肥厚したようになる。1は精製粘土を使用し，2の胎土は砂粒を多く含む。

3は外反度の鈍い小型甕で，器壁も薄くつくる。強い二次加熱を受け変色している。4は口縁部を長くつくるタイプの甕で，外面に煤が付着する。

5～7は坏の破片である。5・6は口縁部が同じつくりで，口唇部を僅かに内湾させる。後者は体部と底部の境目を屈折させ，不安定な底部をなす。両者とも精製粘土を使い，雲母を多く含む。5は底部外面に二次加熱を受けている。6は体部から口縁部にかけて直線的で，底部との境の屈折度も鈍い。内外面とも二次加熱を受けている。7は5と同じタイプの坏で復原口径は15.0cmを測る。

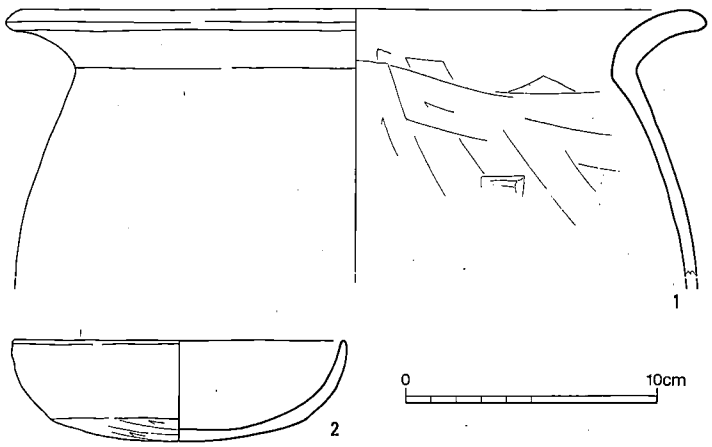


第164図　39号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

40号竪穴住居跡 （図版102－(1)，第160図）

39号竪穴住居跡とほぼ重って掘られた住居跡で39号よりは古い。東側の壁も41号住居に切られており，37号住居よりは新しい。このため平面形状ははっきりしない。その他はまったく不明である。

出土遺物は，39号住居に切られていることから殆どなく，土師器の甕と坏の他，珍しい雛形鉄斧があるに過ぎない。



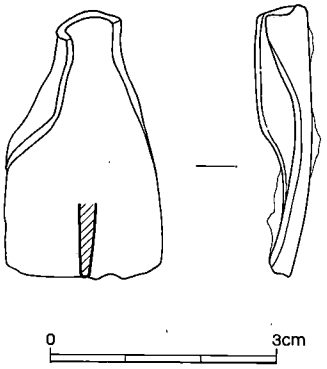
第165図　40号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

出土遺物

土　器　（図版113，第165図）

土師器　1は甕の破片で1/4が残存する。口縁部は長く反り気味に強く外反する。他の甕に比較して肩部はやや張る胎土には細砂粒，石英，赤褐色粒などを含み，外面には煤が付着する。復原口径は28.0cmを測る。

2は覆土内から出土した坏の破片で1/2ほど残る。底部から体部にかけて屈折せず，丸みを持ちながら尖り気味の口唇部に続く。形態的には古相を示す。胎土には精製粘土を使い，砂粒を殆ど含まない。黄白色を呈し，外面に二次加熱を受け煤が付着する。復原口径は13.4cm，器高は4.0cmを測る。



第166図　40号竪穴住居跡
出土鉄器実測図（実大）

鉄　器　（図版115，第166図）

覆土中から出土した雛形鉄斧の完形品がある。薄い鉄板の上半部を左右から折り曲げて袋部をつくり出している。法量は長さが3.5cm，幅は2.1cm，厚さは2.5mmを測る。

41号竪穴住居跡 （図版102－(1)，第160図）

調査当初，40号住居との切り合いで当該住居が古いと考えていたが，出土土器から41号住居が新しいことが判明した。しかし，39号住居との新旧関係は不明で，おそらく，カマドの設置

場所から壁面はそう長く延びず重複はないものと思われる。そうすれば平面プランは方形となる。計測できる壁辺は東側のみで3.45mを測る。

床面上には支柱となる柱穴は１本もない。北壁には壁面から僅かに突出した形でカマドが付設されている。カマドは黄褐色粘土で袖を造り出しているが，右側の袖は破壊されている。現存する左袖は長さが55.0cmを測る。カマド内の最下層には茶褐色土が堆積し，窪むことから灰などの掻き出しが行われたのであろう。黒褐色土の下層には厚く焼土が堆積していた。カマドの前面には黄褐色粘土ブロックが堆積していた。カマドに使われた粘土かも知れない。

図示した遺物はすべてカマド内から出土した土器で，器種は土師器の鍋・坏がある。

出土遺物

土　器　(図版113，第167図)

土師器　１は鍋に使われた土器の口縁部片である。口縁は鋭く外反し平坦面をつくる。胎土には砂粒を多く含み，焼成はややあまく黄橙色を呈する。内外面に弱い二次加熱を受けている。復原口径は32.0cmを測る。

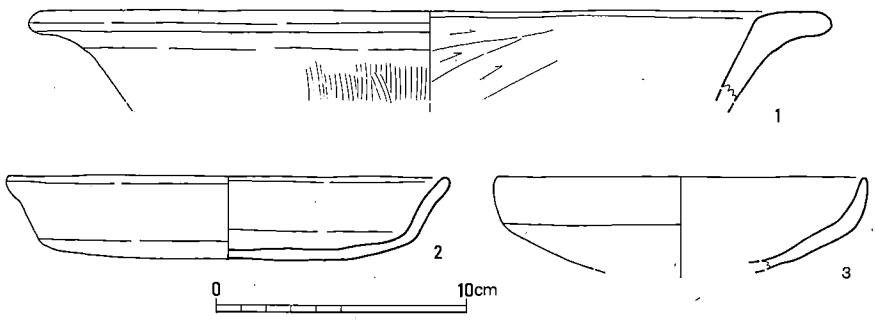
２・３は坏で２タイプがある。２は完形品である。口縁部を若干外反させ，体部から底部にかけては僅かに屈折させている。胎土には砂粒が殆ど含まず，精製された粘土を使っている。内外面に二次加熱を受け，口径は17.6cm，器高は3.3cmを測る。

３は口縁が上方に延び，体部から底部にかけては尖り気味につくる。胎土には赤褐色粒と雲母を含む。復原口径は15.0cmである。両者とも調整はナデとヘラ削りで仕上げる。

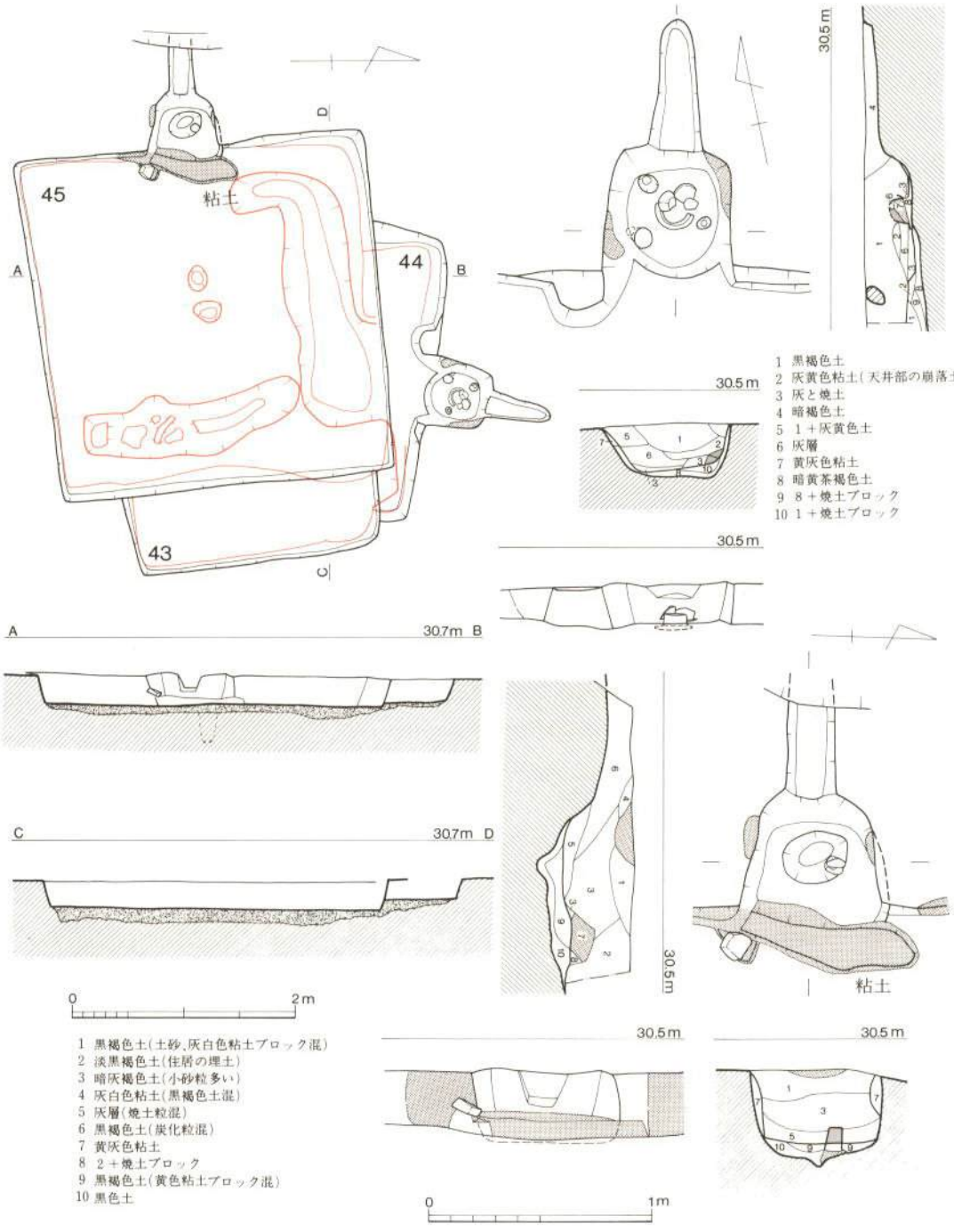
43号竪穴住居跡　(図版102－(2)，第168図)

前述した竪穴住居群とは別のグループで，南側18.0mの所に位置する。この一群は重複したのを含めて総数が４軒である。この内すべての住居が重なり，切り合い関係は46号→45号→43号→44号住居の順である。

当該住居は45号住居に大半が破壊され，東側に壁面が残っているに過ぎない。東壁辺の長さ

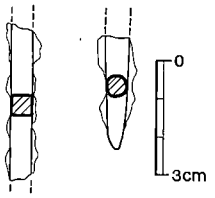


第167図　41号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第168図　43号～45号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

は2.15mを測り，小形の竪穴住居跡であろう。床面の下層には掘削時の凹凸がある。出土遺物は図示できる土器はなく，覆土中から鉄鏃の破片が出土している。



第169図　43号竪穴住居跡出土鉄器実測図（1/2）

出土遺物

鉄　器（図版115，第169図）

鉄　鏃　2本の茎片があるが，両者は接合しない。一方の断面は方形で，一辺が6.0mm，もう一方は茎の基部付近で断面が円形を呈し基部が尖る。他に茎片が数点あるが，切っ先部はない。

44号竪穴住居跡（図版102－(2)･103－(1)，第168図）

重複する3軒の中で最も古い竪穴住居跡で，カマドと床面の一部が遺存しているに過ぎない。遺存する北壁の規模は2.55mを測り，小形の住居跡と推測される。床面は7.0cm前後の貼り床を施している。北壁の中央には壁面から突出したタイプのカマドを設置している。

カマドの焚き口の両側には灰黄色粘土で僅かな袖を構築し，壁面にも同じ粘土を貼りつけている。焚き口部分の幅は55.0cm，奥行きは80.0cm弱を測る。奥壁には長さが60.0cmの煙道が掘られ，中には暗黄茶褐色土が堆積していた。カマド内は茶褐色土をベースにし灰層がやや厚く堆積し，その前面は掻き出しのため窪んでいる。底面の中央には，小型の甕を倒立させ支脚として再利用している。支脚内には黄灰色粘土が充填されていた。

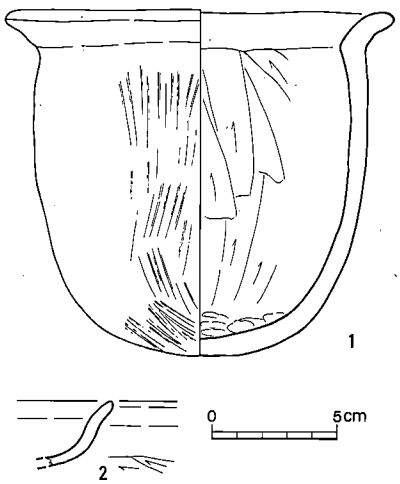
出土遺物は，支脚に使われた土師器の甕と覆土中から出土した坏の破片があるに過ぎない。

出土遺物

土　器（図版114，第170図）

土師器　1は短く緩い外反度の口縁を有する小型の甕の完形品である。胴部は僅かに張る。調整は外面が粗いハケ，内面はヘラ削り，底部には指圧痕が残る。内外面に強い二次加熱を受け，外面が剥離している。胎土は大粒砂粒を多く含み不良である。口径は15.5cm，器高は13.7cmを測る。

2は器高の低い坏の破片で，口縁部を僅かに外反させ，口唇部は尖る。精製された粘土を使い，非常に緻密で黄橙色を呈する。



第170図　44号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

45号竪穴住居跡　(図版103－(2)・104－(1), 第168図)

重なった2軒の住居跡よりは新しいが，西側に隣接する46号竪穴住居跡にカマドの煙道が切られている。住居の平面形状は方形を呈し，その規模は東・西壁が3.00m・3.15m，南・北壁が3.05mを測る。床面の中央付近に2本の柱穴があり，規則性はないが支えの柱跡であろう。掘削時の底面は凹凸をなし，東側と北側は浅い溝状に掘っている。その上に10.0cm前後の客土をして貼り床とする。

カマドは西側の壁の中央に設置し，壁面から突出するタイプのものである。焚き口部分には灰白色粘土が厚く堆積し，左側には同じ粘土で袖をつくり出していて袖の中に埋めていたと思われる石塊が露呈している。また，カマドの両側の住居壁にも灰白色粘土を貼りつけている。内部の両壁には薄く黄灰色粘土を貼りつけ，この部分は焼痕が著しい。奥壁からは幅が20.0cmの煙道が延びているが，先は46号住居に切られている。

カマドの最下層には黒褐色土（黄色粘土ブロック）が堆積し，その上には薄い焼土と灰層が残っている。上層には灰白色粘土ブロックの混入した黒褐色土があり，壁体の崩れ落ちたものであろう。中央の右側寄りには土製の支脚が粘土に固められて立てられていたが，支脚は焼痕が激しく取り上げる際に破砕してしまった。焚き口部の幅は60.0cm，奥行きは75.0cmを測る。

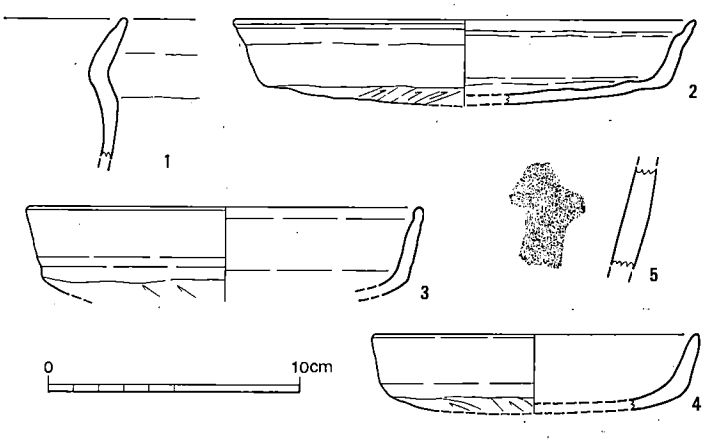
出土遺物は土師器の甕・坏の他，焼塩壺の破片がある。

出土遺物

土　器　(第171図)

土師器　1は口縁部が僅かに外反し，口唇部まで直線的につくられる甕の破片である。外面肩部からヘラで削っているため稜がつく。内面もヘラで削った後にナデている。外面は二次加熱を受け茶褐色に変色している。

2～4は坏の復原実測で口縁部の形態，口径などから3タイプある。2は口縁を僅かに外反させ，内面に段を付ける坏で，体部から底部の境目は屈折する。調整はナデとヘラ削りで仕上げる。精製粘土を使い，緻密な胎土を有す。復原口径は18.4cm，底径は16.0mを測る。3は口唇部を若干内



第171図　45号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

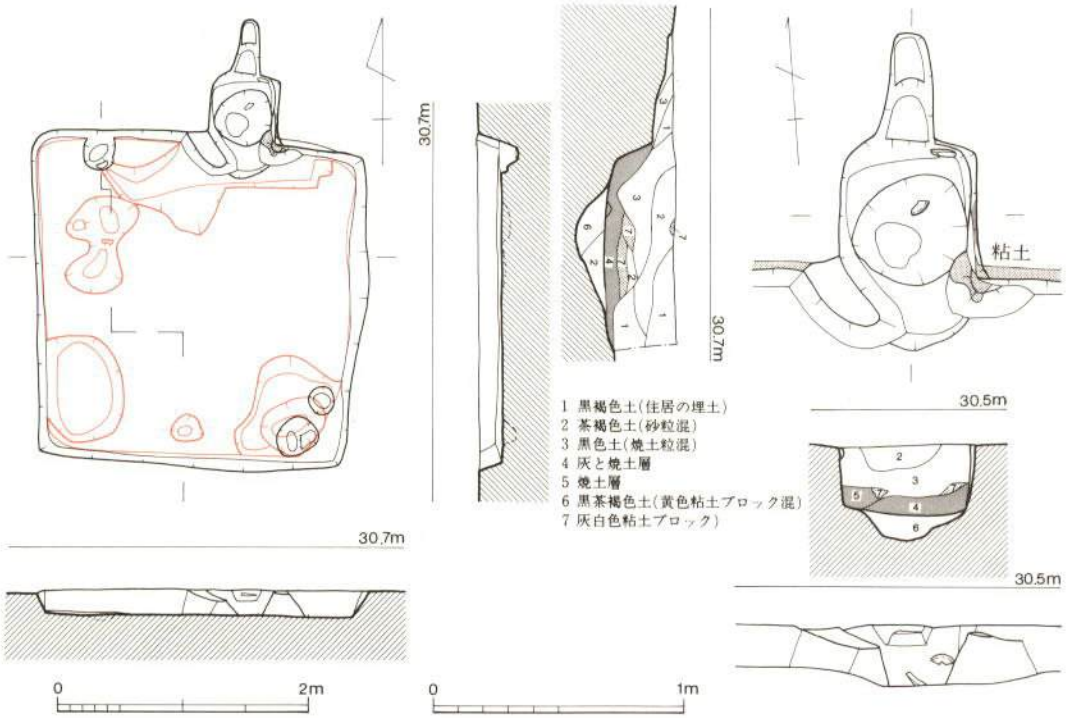
湾させるタイプで，底部の屈折は不明瞭である。胎土は２と同じく緻密で，明茶褐色を呈する。復原口径は15.8cmを測る。４は小型の坏で口縁から体部にかけては真直ぐにつくる。底部の屈折部は不明瞭で，胎土には茶褐色粒子を含み緻密である。復原口径は13.0cmを測る。いずれも住居の覆土中から出土した。

５は覆土中から出土した焼塩壺の小片で，内面に不明瞭な布圧痕が見られる。

46号竪穴住居跡　（図版102－(2)･105－(1)，第172図）

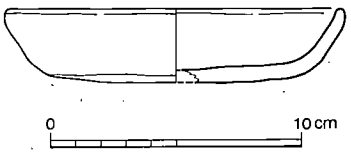
43号住居から当該住居までの切り合いの中で最も新しい小形の住居跡である。平面プランは方形を呈し，その規模は東・西壁で2.50m・2.55m，南・北壁では2.40m・2.60mを測る。床面上には北壁際に１本とカマドに対峙する箇所に１本，南東に２本の柱穴があるが支柱穴ではない。床面の下層には部分的に意味不明の掘り込みがあり，この部分は貼り床とする。

カマドは北壁の東寄りに付設し，壁面から突出するタイプのものである。カマドの焚き口部の両側には灰白色粘土で袖をつくるが，左側は長く右側は短くつくる。焚き口の幅が20.0cmであることから，右袖は壊されたのではなく本来焚き口が右に寄っていたのであろう。カマド内の最下層は抉れたような窪みがあり茶褐色土が堆積していた。おそらく掻き出しの痕跡であろ



第172図　46号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

う。その上層には灰と焼土が厚く堆積し，カマドはそのままの状態で廃棄したと考えられる。左右の壁面には著しい焼痕が残っていた。また，奥壁には長さが40.0cmの煙道が延びている。カマド内からは土師器の坏が出土している。カマドの法量は中央幅で54.0cm，奥行きは80.0cmを測る。さらにカマド近くの両側壁面には，灰白色の粘土を貼り付けており，これは45号住居にも見られたつくりである。



第173図　46号竪穴住居跡
出土土器実測図（1/3）

出土遺物

土　器（第173図）

土師器　カマド内から出土した土師器の坏の破片（残存1/3）が1点ある。口唇部を僅かに外反させ，体部と底部の境は丸みを有す。調整はナデとヘラ削りで，雲母と赤色粒子を多く含む。復原口径は13.6cm，底径は10.0cm，器高は2.9cmを測る。

47号竪穴住居跡　（図版92－(2)，第135図）

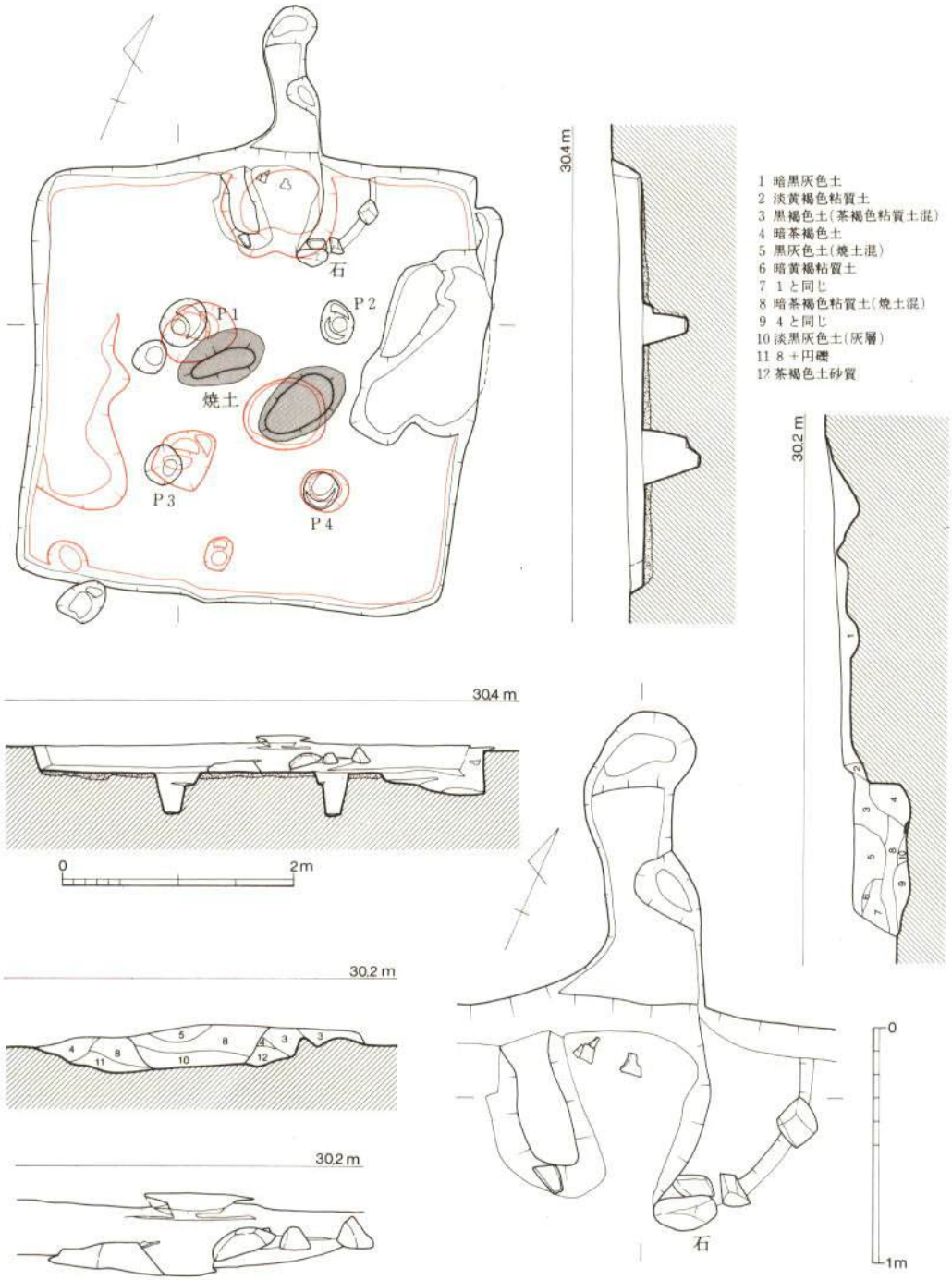
調査区のほぼ中央付近に位置する竪穴住居跡で，23号住居と殆どが重なっており，23号の北東側に僅かに片鱗を見せているに過ぎない。住居の全容は23号の床面下に僅かに残っていて全体のプランは確認される。それによると，住居の平面形状は方形で，その規模は東・西壁が2.80m・2.55m，南・北壁は2.50m・2.65mを測る。支柱穴はなく東壁際に壁溝がみられ，北東側には土壙様の掘り込みがある。その大きさは1.10m×0.8mを測る。

カマドの痕跡はないが，北壁の中央部に浅いピットがあり，これがカマドの掻き出し部に相当するかと思われる。出土遺物は土師器の小破片があるが，図示できるものはない。

48号竪穴住居跡　（図版105－(2)・106－(1)，第174図）

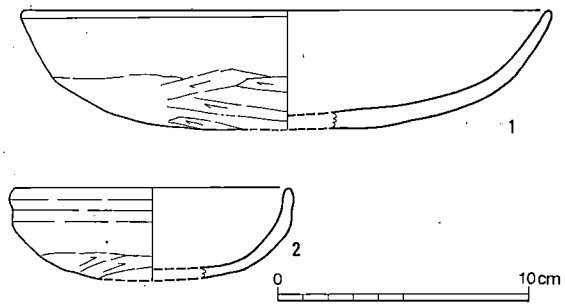
この集落の最も南東側に位置する竪穴住居跡で，弥生時代の墓地群に隣接して設営されているものの重複はしていないし，周囲には竪穴住居も設営されていない。

住居の平面プランは方形を呈し，その規模は東・西壁が3.70m・3.40m，南・北壁は3.70mを測る。床面上にはP1－P4の支柱穴が配置されており，その柱間はP1－P2が1.40m，P1－P3は1.15m，P2－P4が1.35m，P3－P4が1.30mを測り，はっきりとした支柱穴を掘っている住居は，調査区の最も西側に位置する19号住居と当該住居跡のみである。また東壁沿いには不整形な掘り込みがあり，壁側は若干オーバーハングしている。住居に伴うと思われるが，何のための掘り込みかは定かでない。床面の中央には焼土の高まりがあり投棄されたものと考えられる。床は5.0cmの客土を固めて貼り床としている。



第174図　48号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

カマドは北壁の中央に設置し，付設する前に地山を浅く掘り込んでいる。タイプは他の住居とは違って壁面から内側に「U」字状に張り出すもので，袖は茶褐色粘質土と黒褐色土（粘質土混じり）で構築している。右側の袖には河原石や石塊が下層から出土しており，袖内に補強のために埋め込んでいたと考えられる。カマド内には支脚などは遺存しておらず，最下層に僅かに灰が堆積していた。カマドの奥壁には幅が35.0cm前後で，長さが1.25mほどの蛇行する煙道が掘られ，先端は掘り窪めていた。



第175図　48号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

出土遺物は少なく，土師器の坏が2点あるに過ぎず，形態から他の住居よりは古く位置付けられ，それはカマドの形態からも言えよう。

出土遺物

土　器（図版114，第175図）

土師器　1はやや大型の坏の破片で，1/2が残存し図上復原である。底部から口縁部にかけては丸みを持ち屈折はしない。調整はヘラ削りとナデで仕上げ，胎土は精製され非常に緻密である。外面には二次加熱を受け，煤が付着する。復原口径は21.2cm，器高は4.7cmに復原できる。カマド内とP1内から出土した破片が接合した。

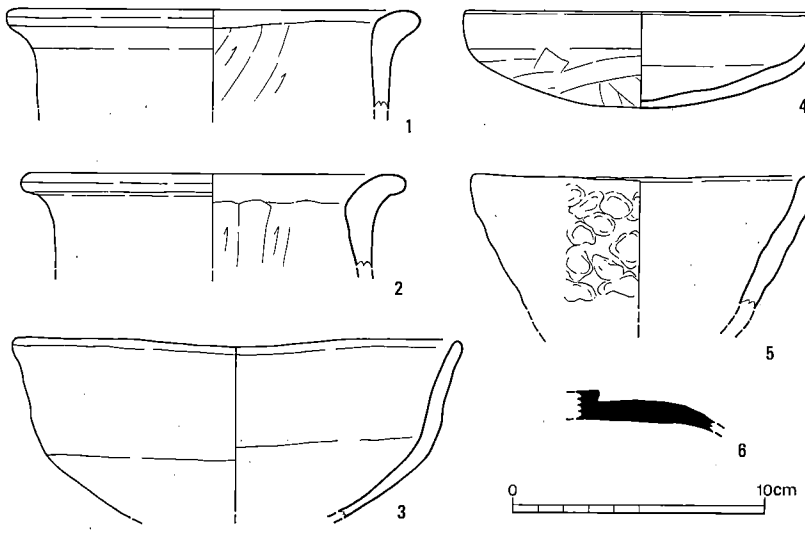
2は小型の坏の破片である。形状は扁平球を半裁した形で，口縁部は直上し口縁下は横ナデによる凹面をなす。胎土には茶褐色粒を多く含み，精製粘土を使っている。橙褐色を呈し，復原口径は11.0cmを測る。支柱穴であるP4内から出土した。

49号竪穴住居跡（図版100－(1)，第153図）

33号竪穴住居が属する一群にある住居跡で，33号住居を調査中に出土した広範囲に堆積する粘土が東側で線状に途切れることから当該住居の存在に気づいた。33号住居とは完全に重なった状態にあり，33号よりは新しい住居であるが，50号住居には切られている。

住居の形態は方形を呈し，その規模は東・西壁の東側を復原すると3.40m，西側は3.30m，南・北壁の南は3.55mを測る。床面上のP1～P3はこの住居の支柱穴と思われる。その柱間はP1－P2が1.25m，P1－P3は1.10mを測る。

住居内にはいたる箇所に粘土が散在し，特に東側の壁沿いに多く堆積していた。この粘土内には2箇所に焼痕があり，他の壁にカマドの痕跡がないことから，この焼土がカマドであった可能性が高いが形を留めていない。この方向にカマドを付設する住居は29号住居と当該住居の



のみである。　　第176図　49号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

出土遺物は土師器の甕・鉢・坏・焼塩壺，須恵器の坏蓋の破片がある。

出土遺物

土　器　（図版114，第176図）

土師器　1・2は小型の甕の口縁部片である。1は外反度が鈍く短い口縁部の甕の口縁部片で胴部の膨らみのないタイプである。精製粘土を使用し，胎土には雲母を含む。内外面に煤が付着する。復原口径は16.4cmを測る。2は反り気味に外反する口縁部片で，胴部が僅かに膨らむタイプである。胎土には砂粒が多く含まれる。内外面とも二次加熱を受ける。復原口径は15.4cmである。

3は鉢の破片である。口縁から底部にかけて僅かに膨らみ，横ナデとヘラ削りの境目の稜は不明瞭である。胎土は砂粒を含まず緻密である。灰黄褐色を呈し，復原口径は18.0cmを測る。

4はほぼ完形に近い坏で体部から底部にかけては丸くつくる。ヘラ削りとナデで仕上げる。胎土には赤褐色粒子を含むが緻密である。黄橙色の色調をなし，口径は14.2cm，器高は3.8cmを測る。

5は焼塩壺の破片で底部を欠損する。タイプは31号竪穴住居跡から出土したものと同じである。外面は指圧痕，内面はナデで仕上げる。二次加熱を受け，黄土色を呈する。復原口径は13.6cmを測る。

須恵器　6は摘みのある坏蓋の破片である。

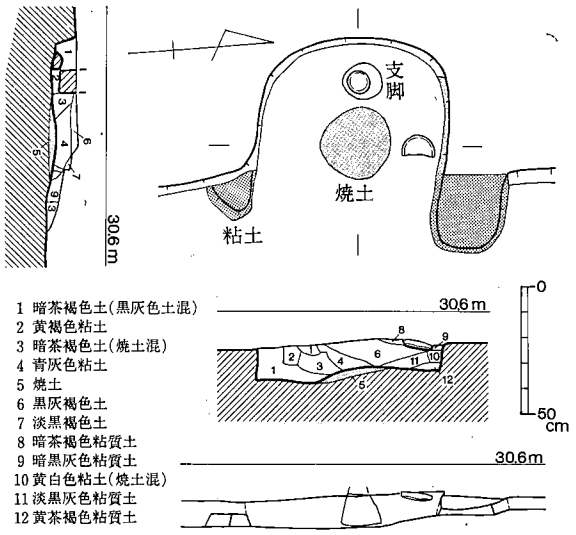
以上の出土土器はすべて住居の覆土中からの出土である。

50号竪穴住居跡(図版99－(1)・106－(2), 第153・177図)

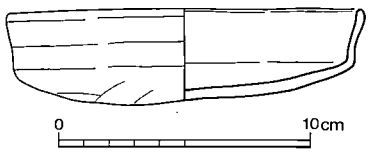
33号・49号竪穴住居を切っているが，小形の32号住居に切られた竪穴住居跡である。遺存している壁辺から方形の平面プランを有していると思われる。その規模は南壁と西壁が残っており，前者が3.20m，後者は3.30mを測る。床面は32号住居に破壊されているものの，支柱穴の痕跡がないことから，他の住居と同様支柱穴がない類であろう。

カマドは西壁の南側寄りに設置し，壁面から突出するタイプである。焚き口の幅は70.0cm，奥行きは80.0cmを測る。カマドの焚き口には粘土で袖を構築している。底面の中央には径が30.0cm弱の火床が残り，その奥には強い二次加熱を受け脆弱になった土製支脚が立てられていたが，取り上げ時に破砕した。カマドの右側壁面は真っ赤に焼けていた。

出土遺物は少なく，カマド内から出土した坏の破片があるに過ぎない。



第177図　50号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

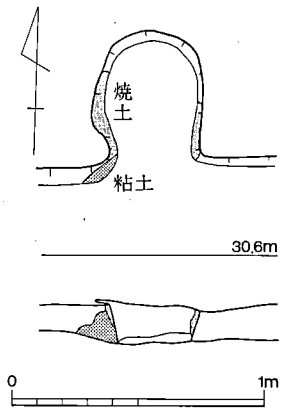


第178図　50号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土遺物

土　器　(図版114，第178図)

土師器　体部から底部の境は強く屈折し，僅かに外反させる口縁部を有す坏である。復原実測であるが大半は遺存している。底部は削り，他はナデ仕上げである。胎土は緻密で，赤褐色粒と雲母を含む。口径は14.3cm，器高は3.6cmを測る。



第179図　51号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

51号竪穴住居跡　(図版98－(1)，第151・179図)

31号住居と殆どが重複した住居で，31号住居の西側に片鱗を覗かせている。31号住居の項でも説明したが，両者の北壁のカマドの設置状況をみると2基とも均等な配置がなされているようにも看取できることから，50号住居の西壁は31号住居を拡張

した可能性も指摘でき，２基のカマドが併存したことも推測されるが，床面の高低差が5.0cmあり２軒が重複していると考えて，ここでは51号住居として説明する。西側の壁辺の長さは2.50mを測る。

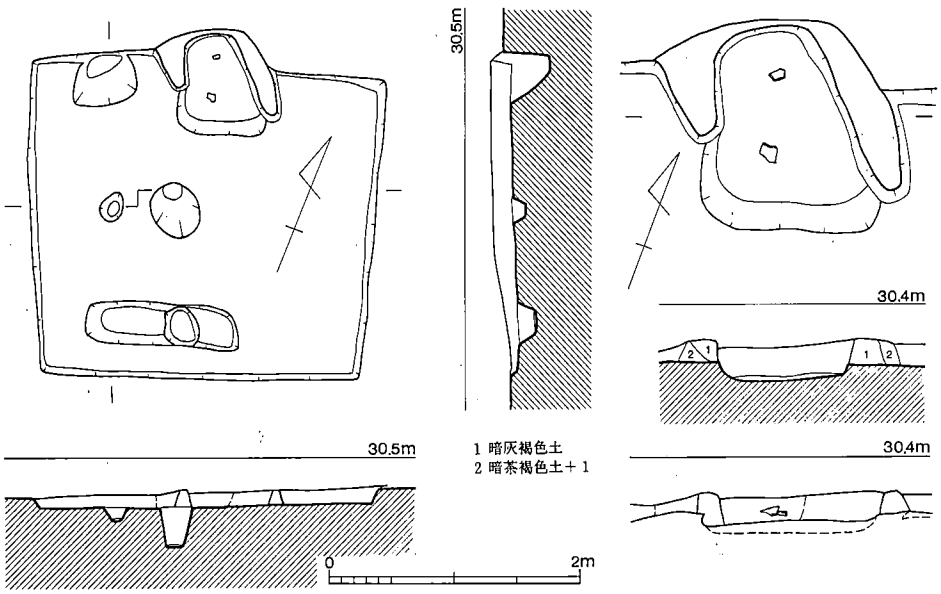
カマドは北壁に設置され，本体に対して焚き口部分が若干狭くなり巾着形を呈する。カマドには袖をつくっておらず，左側の焚き口部の壁面には若干の粘土を貼りつけている。内部の両壁面は著しい焼痕がみられた。カマドの焚き口幅は30.0cm，奥行きは55.0cmを測る。カマド内からの出土遺物はない。

52号竪穴住居跡　（図版107－(1)，第180図）

調査区の最も南側で検出した小形の竪穴住居跡で他の遺構との重複はない。平面形態は方形を呈し，規模は東・西壁が2.40m・2.50m，南・北壁は2.55m・2.80mを測る。床面上には明瞭な支柱穴はない。

カマドは北壁の中央に付設し，住居の主軸に対して西側に振れている。現存するカマドの壁体は「U」字形に暗灰褐色粘質土と茶褐色粘質土を巡らしている。内部は灰や焼土を掻き出したためか全体が若干窪んでいた。

カマド内からは土師器の甕の破片が出土したが，図示できる破片はなく住居内からも然したる遺物の出土はない。



第180図　52号竪穴住居跡・カマド実測図（1/60・1/30）

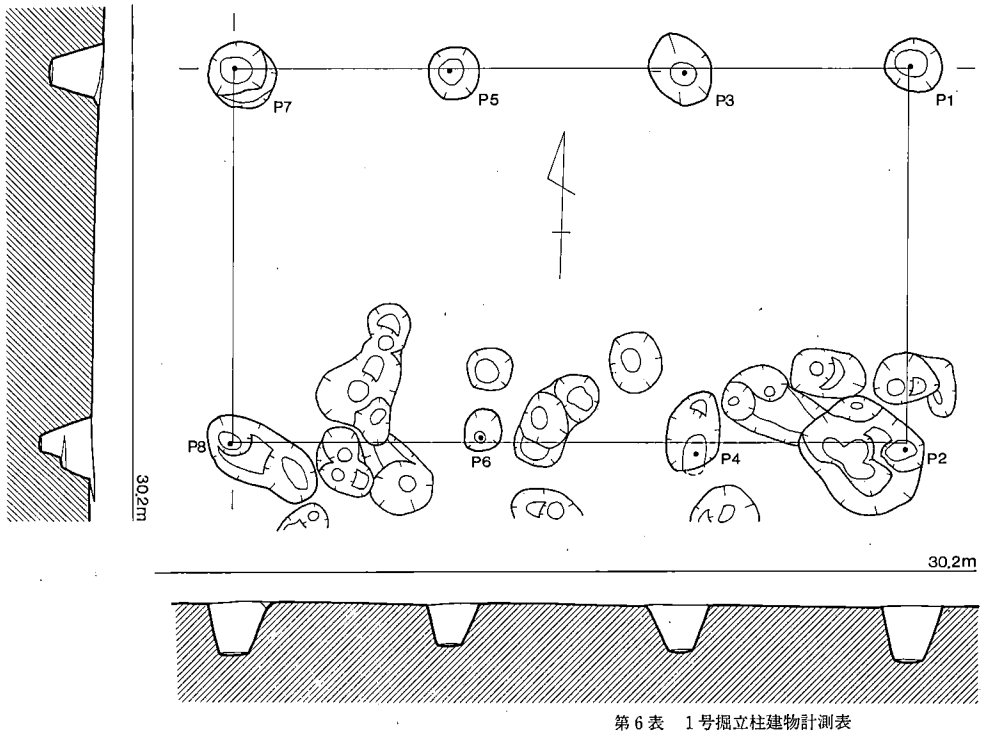
（6） 掘立柱建物

調査区内での掘立柱建物の総数は８棟を数える。図上で精査した結果，柱軸の不揃いの掘立柱建物らしき柱穴群があるが，その分については無理に建物とはしていない。

掘立柱建物の種類は１間・３間が１棟，２間・２間の総柱が３棟，１間・２間が１棟，２間・２間が１棟，２間・３間が１棟，不明１棟である。以下，各々の建物について説明する。

１号掘立柱建物 （図版107－(2)，第181図）

調査区の南東隅の弥生時代の墓地群の北側に位置するやや大型の掘立柱建物である。建物の規模は，１間×３間（梁間間が300～305cm，桁行き間は535cm）の大きさで梁間がやや広くつくられている。この建物の南側に隣接してもう一軒の掘立柱建物が建ちそうであるが，はっきりしない点がある。桁行方位はN－88°－Eを示し，ほぼ東西方向に建てられている。他の建物とは違った性格の掘立柱建物であろう。



第181図　１号掘立柱建物実測図（1/60）

第６表　１号掘立柱建物計測表

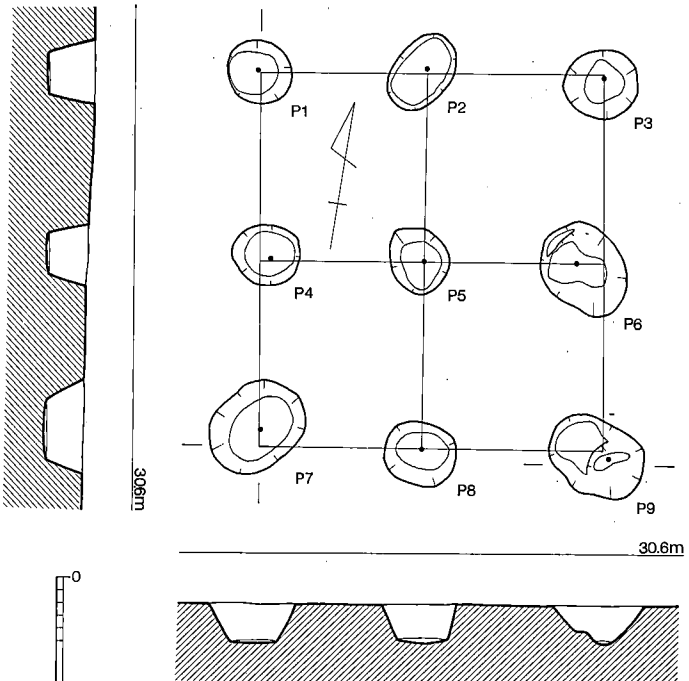
梁間柱間		桁行柱間			桁行間
P1-P2 305	P3-P4 300	P1-P3 180	P3-P5 185	P5-P7 170	P1-P7 535
P5-P6 290	P7-P8 295	P2-P4 165	P4-P6 170	P6-P8 200	P2-P8 535

2号掘立柱建物　(図版108－(1), 第182図)

1号掘立柱建物の北側15.0mの所で検出した掘立柱建物で，その規模は2間×2間（梁間間が275cm，桁行き間は300cm）の総柱建物である。

梁間間ではP4－P6までが若干短い。床面積は8.25m²前後を測る。桁行きの方位はN－8°－Wを示す。高床式倉庫の機能が考えられる。

今回調査した範囲内では2間×2間の総柱建物は，この建物の他，3号・4号掘立柱建物の3棟で（8号掘立柱建物については中央柱が見当たらないことから，高床式倉庫か否かの判断はできない），いずれも竪穴住居跡とは重複しておらず，この集落に付随する高床式倉庫と考えられるが柱穴からの出土遺物がないためはっきりしたことは分からない。



第182図　2号掘立柱建物実測図（1/60）

第7表　2号掘立柱建物計測表

梁間柱間		梁間	桁行柱間		桁行間
P1-P2 135	P2-P3 140	P1-P3 275	P1-P4 150	P4-P7 145	P1-P7 295
P4-P5 125	P5-P6 120	P4-P6 245	P2-P5 150	P5-P8 148	P2-P8 300
P7-P8 130	P8-P9 150	P7-P9 275	P3-P6 150	P6-P9 155	P3-P9 300

2号建物と3号建物は桁行方位が同じ方向を指し示していることから同時併存する倉庫と思われるが，4号掘立柱建物については，桁行き方位が65°前後東に振れており，規模もやや大型になることから時期の異なるやや新しい掘立柱建物かも知れない。

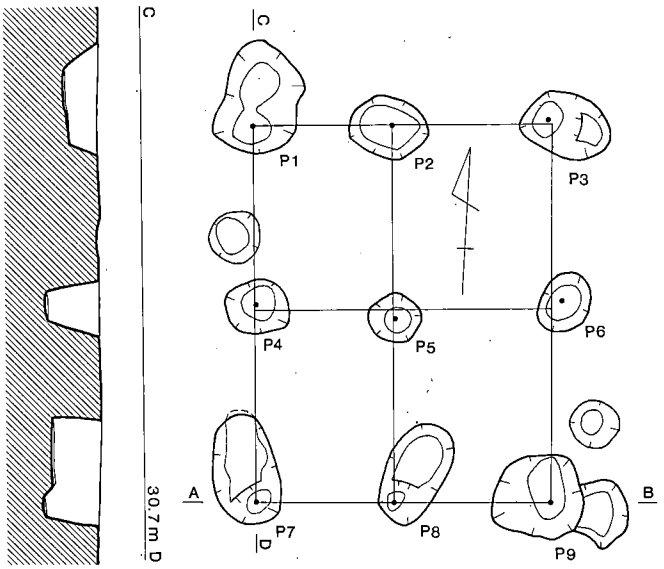
3号掘立柱建物　(図版108－(2), 第183図)

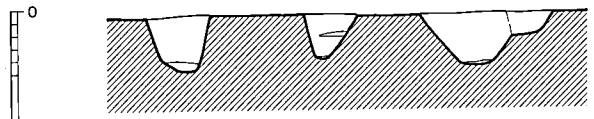
2号掘立柱建物の北側3.00m離れた所に建てられた建物で，2間×2間（梁間間が235cm～240cm，桁行き間は295cm～300cm）の総柱の掘立柱建物である。2号建物と比較して梁間間がやや短く，規模も若干小さい。各柱軸も正確で確りした建物である。床面積は約7.05m²前後を測る。

建物の桁行き方位はN－3°－Wを示し，2号よりは若干東に振れている。この2棟の建物の主

軸と北側にカマドを付設する住居跡との主軸はほぼ同じである。柱穴の深さは25cm～45cmを測り，隅柱が深く掘られている。

柱穴内からの出土遺物はない。





第8表　3号掘立柱建物計測表

梁間柱間		梁間	桁行柱間		桁行間
P1-P2 110	P2-P3 125	P1-P3 235	P1-P4 140	P4-P7 155	P1-P7 295
P4-P5 110	P5-P6 135	P4-P6 240	P2-P5 150	P5-P8 145	P2-P8 295
P7-P8 110	P8-P9 125	P7-P9 235	P3-P6 145	P6-P9 160	P3-P9 300

第183図　3号掘立柱建物実測図（1/60）

4号掘立柱建物　（図版109－(1)，第184図）

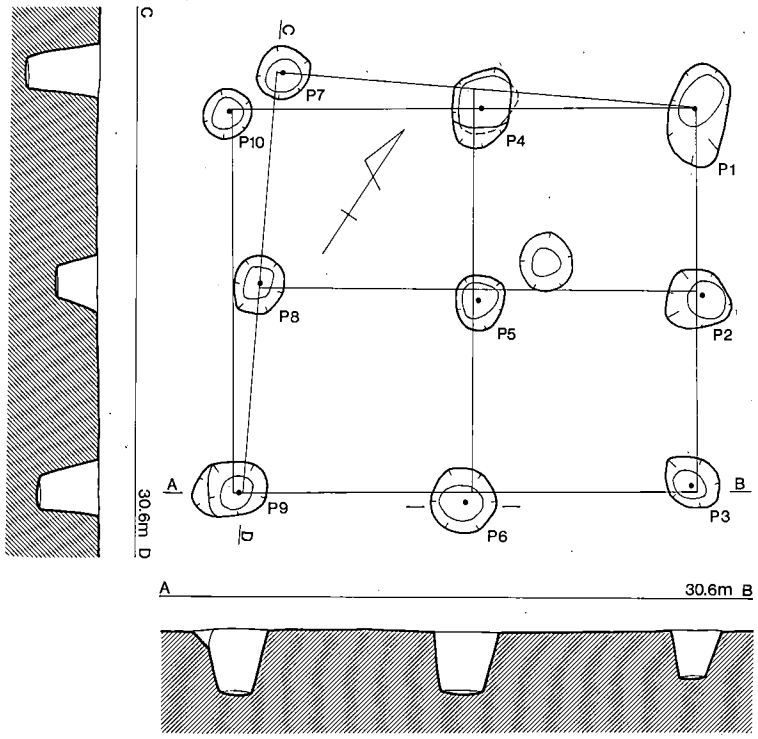
3号掘立柱建物の西側4.0mに位置する建物である。検出した2間×2間の総柱建物の中では最も規模の大きな掘立柱建物で，位置的には離れているものの，建物の方向が8号掘立柱建物とほぼ同じである。西側の隅柱であるP7・P10は柱の建て直しが図られたことが考えられるが，P7とすれば桁と梁との軸線が直交しないが，梁間の柱軸は線上にのる。P10であれば柱軸が直交するものの梁間の柱軸がのらない。しかし，P10は隅柱にしては深さが浅い。

建物の規模は，梁間間が300cm～310cm（P7－P9は330cm）で，桁行き間は330cm～355cm（P1－P10は370cm）を測る。床面積は約10.2m²を測る。隅柱は東側を除くと深く掘られており，桁行きの方位はN－56°－Eを示す。この掘立柱建物の桁行き方向の主軸は，西側にカマドを付設する竪穴住居跡のそれとほぼ同一方向にある。

柱穴内からの出土遺物はない。

5号掘立柱建物　（第185図）

調査区の南端で検出した掘立柱建物で，52号竪穴住居跡の南西隣に位置している。この建物



第9表　4号掘立柱建物計測表

梁間柱間		梁間	桁行柱間		桁行間
P1-P2 155	P2-P3 150	P1-P3 300	P1-P4 170	P4-P7 P4-P10 160 200	P1-P7 P1-P10 330 370
P4-P5 150	P5-P6 160	P4-P6 310	P2-P5 180	P5-P8 175	P2-P8 355
P7-P8 P10-P8 165 140	P8-P9 165	P7-P9 P10-P9 330 300	P3-P6 180	P6-P9 180	P3-P9 355

第184図　4号掘立柱建物実測図（1/60）

は南側1/2が調査区外にあるため完掘していない。

掘立柱建物の規模は，北側の梁間が2間であるが，桁行きは分からない。梁間間は各々97.0cmを測り，柱間が短い。これに対して桁行き間は，P1－P5が130cm，P3－P4が180cmを測り，不揃いである。

桁方向の主軸方位は，N－35°－Eを示し，柱穴内からの出土遺物はない。

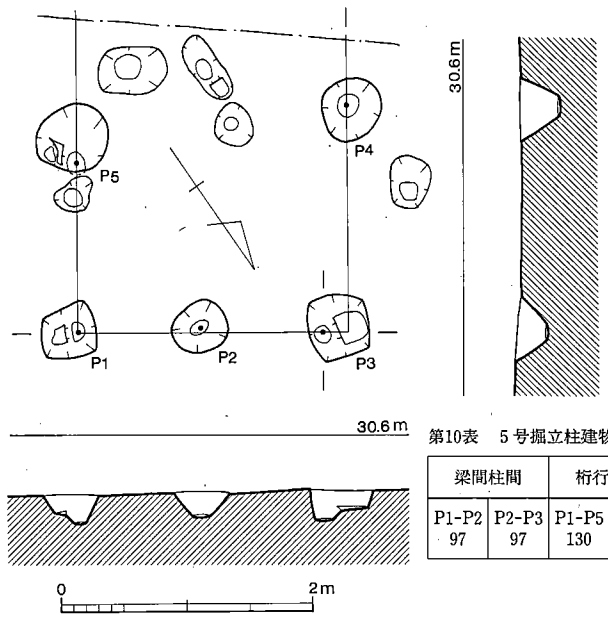
6号掘立柱建物　（第186図）

43号～46号の4軒の竪穴住居跡が重なり合う一群の北側2.0mの所で検出した1間×2間（梁間間が225m・240m・245m，桁行き間は355m）の掘立柱建物である。このようなタイプの建物

は6号のみで，この集落に伴うか否かははっきりしない。

柱穴は不揃いで，深さは15.0cm～20.0cmと浅く，掘立柱建物と判断するには無理があるかと思われるが，桁と梁の柱軸が軸線上にあり，P5-P6の柱間が短いが，その他はほぼ等間隔にあることから掘立柱建物と位置付けて良いのではないだろうか。

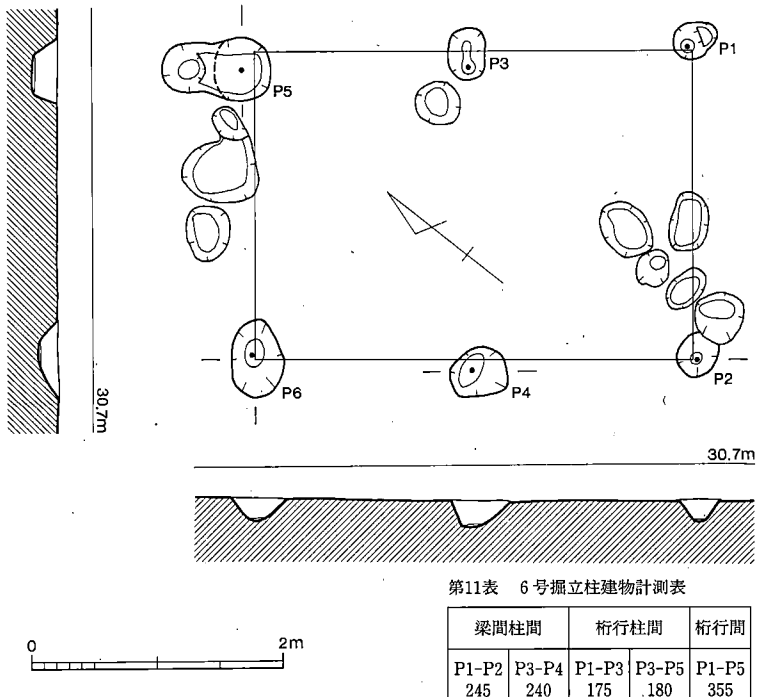
桁行きの主軸方位はN－38°－Wを示す。柱穴内からの出土遺物はない。



第10表　5号掘立柱建物計測表

梁間柱間		桁行柱間	
P1-P2 97	P2-P3 97	P1-P5 130	P3-P4 180

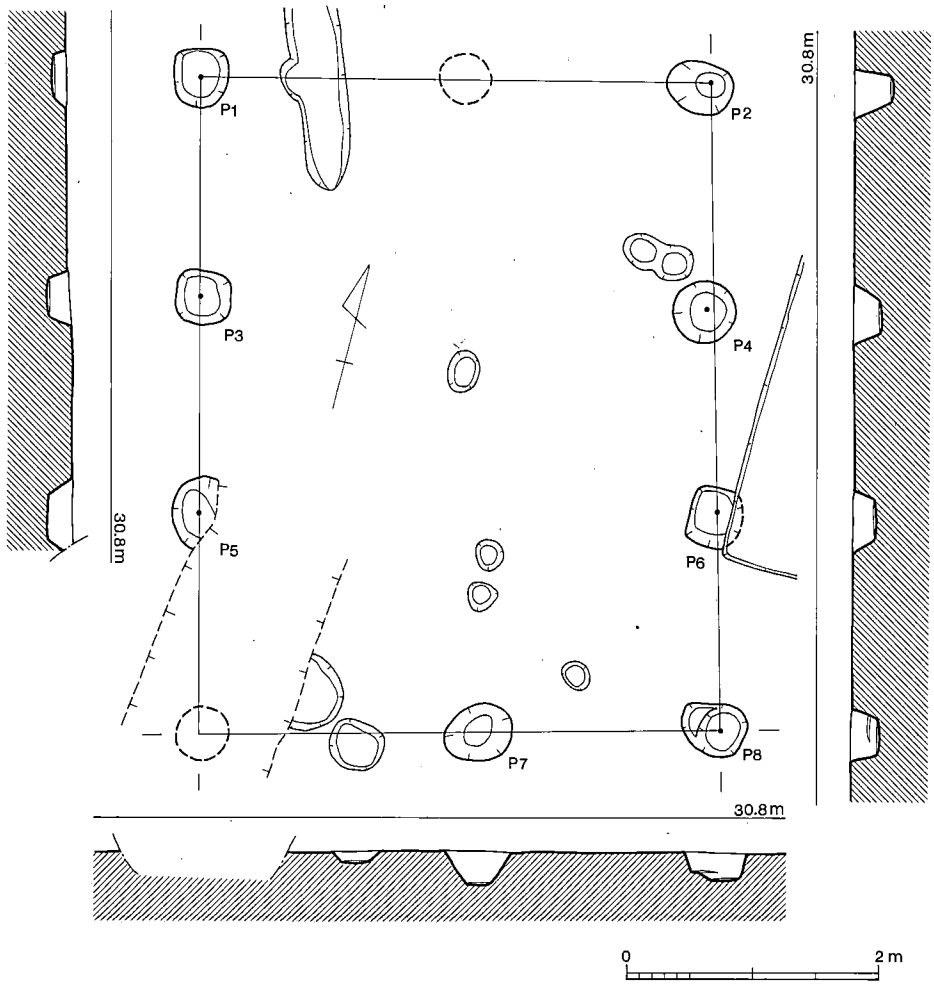
第185図　5号掘立柱建物実測図（1/60）



第11表　6号掘立柱建物計測表

梁間柱間		桁行柱間		桁行間
P1-P2 245	P3-P4 240	P1-P3 175	P3-P5 180	P1-P5 355
	P5-P6 225	P2-P4 180	P4-P6 175	P2-P6 355

第186図　6号掘立柱建物実測図（1/60）



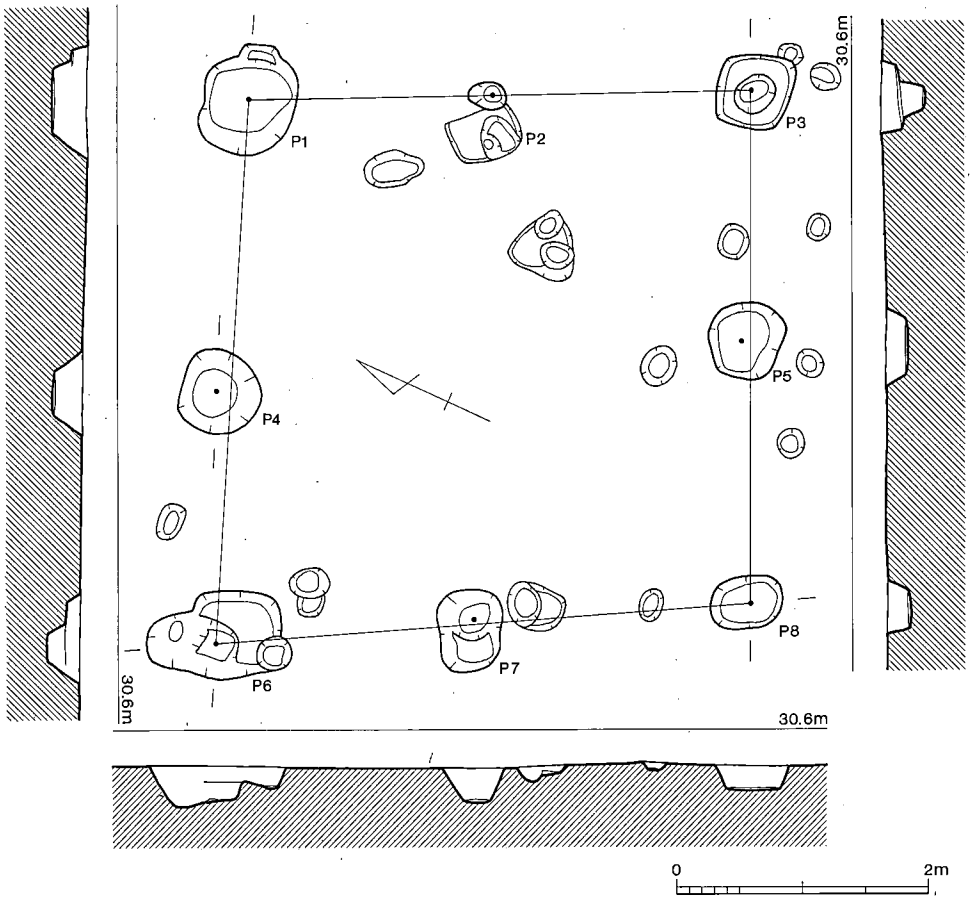
第187図　7号掘立柱建物実測図（1/60）

7号掘立柱建物　（第187図）

11号竪穴住居跡の西側にあり，住居に切られた状態で検出された1間×3間の建物跡でP7は新しい溝で消失している。梁間間平均406cm，桁行き間平均171cmを測る。柱穴は素掘りのものが主体で，二段掘りのものもある。桁行き方位はN－14°－Wを示す。

第　表　7号掘立柱建物計測表　（単位cm）

梁間間	桁行柱間			桁行間
P1-P2 405	P1-P3 175	P3-P5 170	P5-P7 —	P1-P7 —
P3-P4 403	P2-P4 180	P4-P6 160	P6-P8 170	P2-P8 512
P5-P6 410	—	—	—	—
P7-P8 —	—	—	—	—



第188図　8号掘立柱建物実測図（1/60）

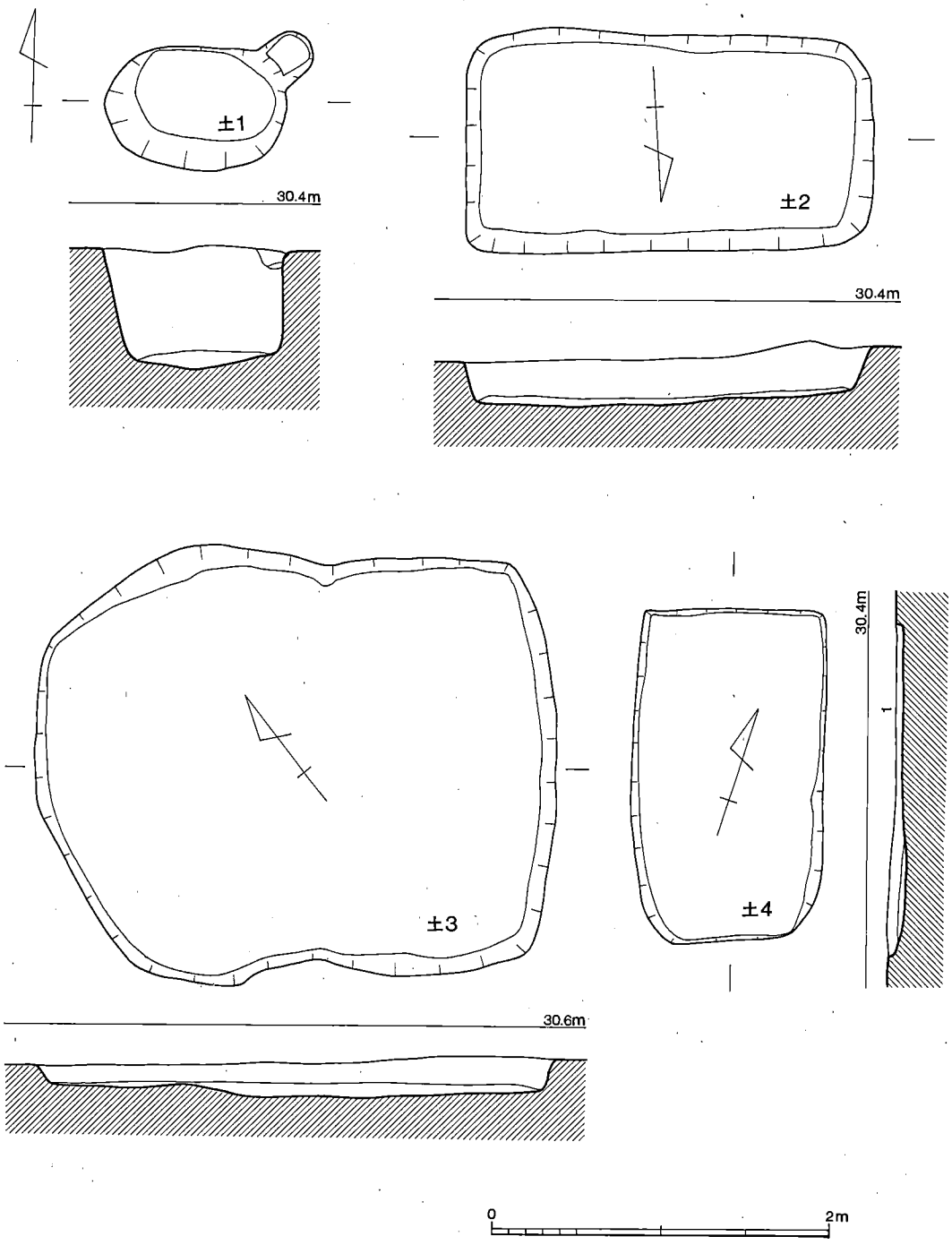
8号掘立柱建物　（第188図）

7号掘立柱建物の西，15号竪穴住居跡の北側から検出された2間×2間の建物跡である。梁間間平均415cm，桁行き間平均417cmを測る。柱穴は二段掘りと素掘りのものとがある。桁行き方位はN－69°－Eを示す。

第　表　8号掘立柱建物跡計測表　（単位cm）

梁間柱間		梁間間	桁行柱間		桁行間
P1-P2 195	P2-P3 205	P1-P3 400	P1-P4 230	P4-P6 200	P1-P6 430
—	—	P4-P5 420	—	—	P2-P7 415
P6-P7 205	P7-P8 220	P6-P8 425	P3-P5 200	P5-P8 205	P3-P8 405

（7） 土　壙



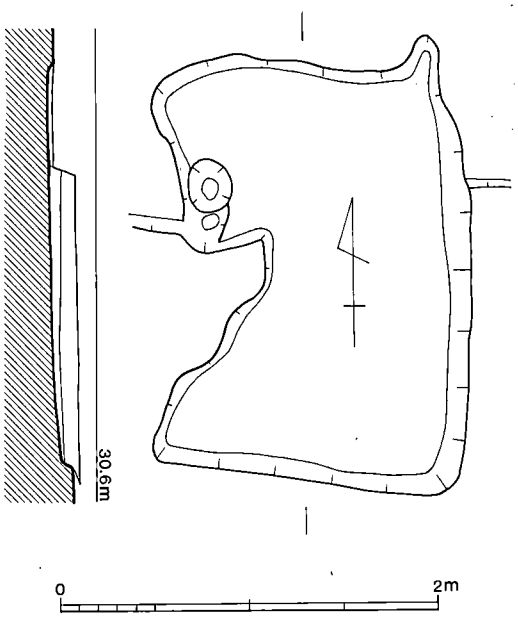
第189図　1号～4号土壙実測図（1/40）

1号土壙　(第189図)

発掘区西端で検出された楕円形プランの小形の土壙で，長径105cm，短径72.0cm，深さは最も深いところで70.0cmを測る。断面は「U」字状をなす。埋土からは少量の炭化物が検出された他はなんら出土しなかった。

2号土壙　(第189図)

19号住居跡の北側から検出された隅丸長方形プランの土壙で，長径が240cm，短径は130cm，深さは中央部で26.0cmを測る。埋土からは1号土壙と同様，少量の炭化物が検出されただけである。



第190図　5号土壙実測図 (1/40)

3号土壙　(第189図)

2号土壙の東側から検出された不整方形プランの大形の土壙で，長径は310cm，短径最大部で260cm，深さは中央で22.0cmを測る。埋土からは焼土や炭化物が少量検出されただけで，土器などの遺物はなんら出土しなかった。

4号土壙　(第189図)

3号土壙の東，14号住居跡の北側から検出された長方形プランの土壙で，長径が198cm，短径は110cm，深さは最も深いところでも10.0cmと浅く，残りの悪い土壙である。遺物は他の土壙と同じようになんら出土していない。

5号土壙　(第190図)

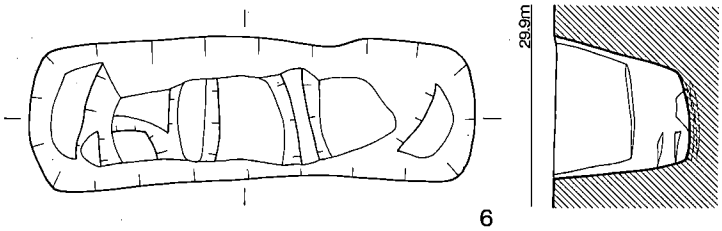
8号住居跡に切られた状態で検出された不整長方形プランの土壙で，長径が220cm，短径最大部で164cm，最小部で110cm，深さは約14.0cmを測る。埋土からは少量の炭化物が出土した。

6号土壙　(図版109－(2)，第191図)

弥生時代の墓地群の西側，7号祭祀土壙の傍に位置する土壙である。この土壙は覆土の土質や色などから墓地群に伴うものではなく，住居の覆土に似ていることから集落に伴うと考えられる。

土壙の形状は隅丸長方形に近く，その規模は，長軸が178cm，短軸は55.0cm前後を測る。床面

は凹凸が激しく，平坦に掘られておらず，最も深いところでで58.0cmを測る。用途は定かでなく出土遺物もない。

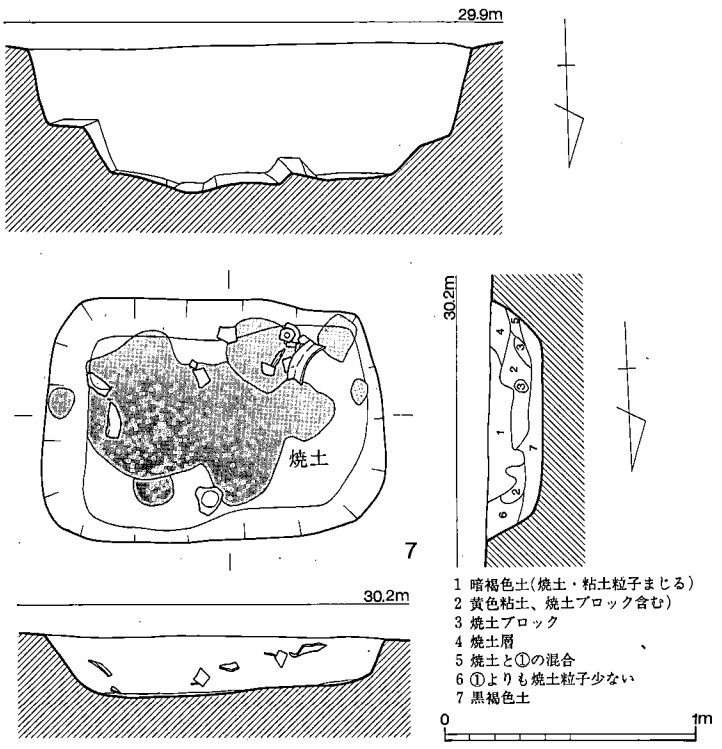


7号土壙 （図版110－(1)，第191図）

52号竪穴住居跡の南東側6.0mに位置する土壙である。他の遺構との重複はなく，調査時点で内部に焼土が詰まっていたことからクド跡と符号していた。平面プランは隅丸長方形を呈し，断面は逆台形である。

土壙の規模は，長軸が135cm，短軸が95.0cm，深さは25.0cm弱である。

土壙内には黄色粘土と焼土が渾然一体の状態で検出され，最下層には黒褐色土が薄く堆積していた。クド跡にしては床面や壁面に焼痕が見られず，粘土と焼土に混ざって出土した土器類はすべて破片であることを考えあわせると，これらは土壙内に投棄されたと考えるのが自然であろう。出土した土器類は，土師器の甕・皿・坏，須恵器の壺・灯明皿などがある。



第191図　6号・7号土壙実測図（1/30）

出土遺物

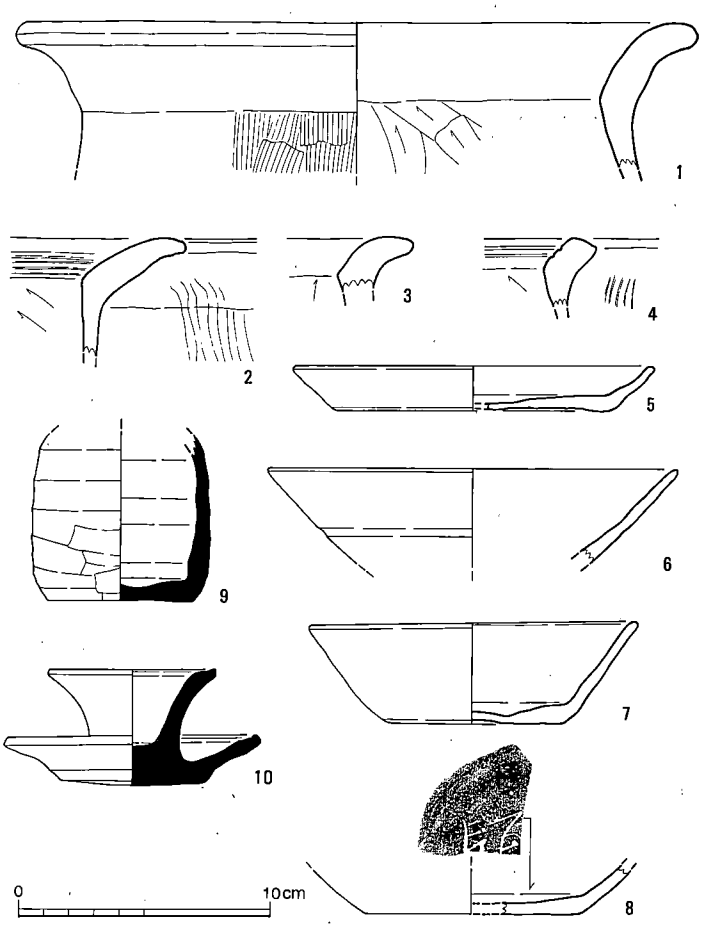
土　器　（図版115，第192図）

土師器　1～4は甕の口縁部片である。口縁のタイプから4種類に分けられる。1は口縁部を長くつくり，反り気味に外反し肩部から胴部にかけてやや膨らむタイプで，胎土は精製され砂粒が少ない。胎土の色調は黄白色を呈し，外面は赤橙色であることから化粧土を塗布してい

ると思われる。復原口径は27.2cmを測る。2は口縁を直線的に外反させ，口唇部はやや尖り気味につくる。

肩部下半は膨らまない。外面と口縁内面に粗いハケが見られる。胎土には砂粒が多く，外面には煤が付着する。3は器壁が厚く短い口縁部の小型甕である。4は厚手の口縁を僅かに外反させ，口唇部は角ばったつくりで，口縁内面には2本の沈線が巡る。全面に二次加熱を受けている。

5は皿の破片である。調整は底部がヘラ切りの他は回転ナデで仕上げている。復原口径は14.4cm，底径が11.0cm，器高は1.8cmを測る。



第192図　7号土壙出土土器実測図（1/3）

6～8は坏の破片で，6は体部から口縁部にかけて直線状につくり，体部には浅い凹線が巡る。胎土には茶褐色粒子を多く含み，精製粘土を使用している。復原口径は16.4cmを測る。7はやや深めの坏の破片で，口縁部まで直線的につくる。底部はヘラ切りで，胎土は7と同じである。復原口径は13.1cm，底径は6.6cm，器高が4.1cmを測る。橙褐色の色調を有す。8は坏の精製土器の底部片で，胎土には茶褐色粒子を多く含む。底部内面にはヘラ書きが見られるが，小破片のため解読できない。橙褐色を呈し，復原底径は8.4cmを測る。

須恵器　9は小型の壺の胴部片である。胴部の膨らみは少なく，安定した平底をなす。調整は外面がヘラ削り，内面はナデで仕上げる。底径は5.8cmを測り，灰褐色を呈する。

10は灯明皿である。口径が6.6cm，受け皿の口唇部は僅かに肥厚し，径が10.2cm，底はやや丸みを持ち，5.7cmを測る。ヨコナデで仕上げ，底部は摩耗しざらつく。

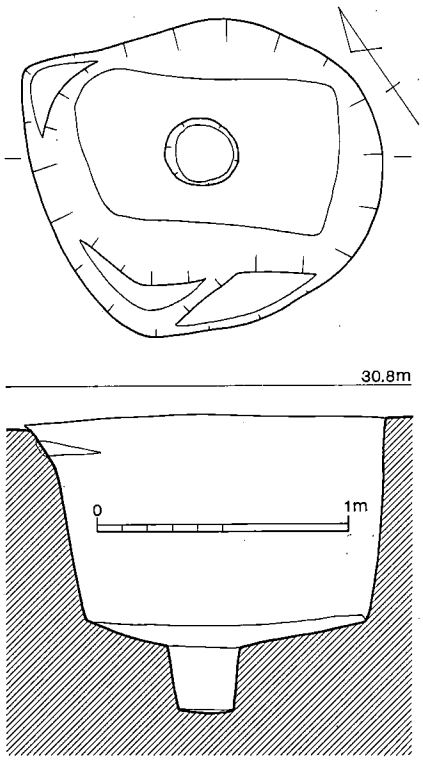
以上の土器類の出土状態はすべて床面の上層で焼土に混ざって出土した。

（8） 落し穴 （図版110－(2)，第193図）

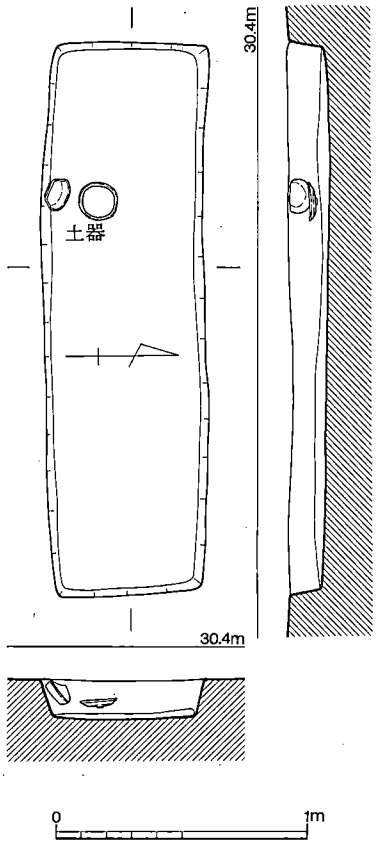
、調査区内で落し穴は１基しか検出されていない。

出土した場所は竪穴住居跡群からかけ離れた北東側に位置し，本来落し穴は数基の群をなす例が多いことから，調査区外の北側に遺存していると推測される。

平面プランは不整形を呈し，その大きさは，長軸が1.40m，短軸は1.20m，床面までの深さは90.0cm前後を測る。底面の中央には逆杭を立てる深さ25.0cmのピットが掘られている。



第193図　落し穴実測図（1/30）



第194図　土壙墓実測図（1/30）

（9） 土壙墓 （図版111－(1)，第194図）

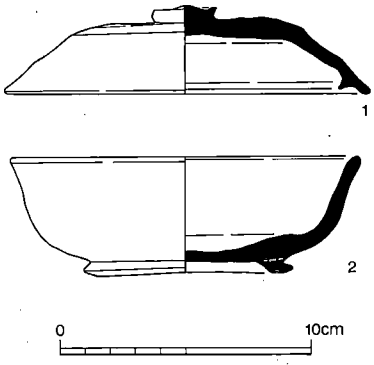
この土壙墓は，弥生時代の墓地群よりは新しく，集落に伴う墓地である。18号竪穴住居跡の北西に隣接して検出された長方形プランの土壙墓で，主軸はほぼ東西に向ける。土壙墓内の南西部からは床面より5.0cmほど浮いた状態で，須恵器の坏身と坏蓋が出土した。落ち込んだような出土状態から棺上に供献されていたものかも知れない。土壙墓の規模は，長軸220cm，短軸は65.0cm，深さは16.0cmを測る。断面は逆台形をなす。

出土遺物

土　器　(図版115, 第195図)

須恵器　1は身受けの返りを持ち，低平な宝珠形の鈕を有す坏蓋である。身受け部の最大径は15.6cm，器高は3.5cmを測る。調整は体部内外面がロクロヨコナデ，天井部外面は回転ヘラ削り，内面はナデで仕上げる。色調は灰色で成は良好である。

2は高台付の椀で，高台は低く，強く外方に付き出している。口径は14.0cm，器高は4.5cm，高台径は8.3cmを測る。調整は体部内外面がロクロヨコナデ，内外底部はナデで仕上げている。色調は灰色で，焼成は堅固である

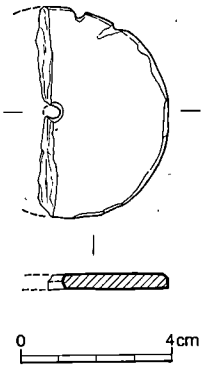


第195図　土壙墓出土土器実測図 (1/3)

(10)　その他の出土遺物

石　器　(図版115, 第196図)

紡錘車　P－49から出土した石製紡錘車がある。約2/1が欠損している。石材は絹雲母片岩の良質の石を使い，表裏とも磨いて平滑であるが，側面の加工はやや粗い。直径は5.5cm，厚さは4.0mmを測り，中央には径が5.0mmの孔を両方向から穿っている。



第196図　P－49出土石製品実測図 (1/2)

IV 総　括

大庭・久保遺跡では，弥生時代の墓地群と７～８世紀頃の集落を検出した。前述したように，奈良時代頃の集落は，未報告の西法寺遺跡で数十軒，大庭・久保遺跡では51軒，上の原遺跡では76軒が発掘されている。３遺跡の集落の分布状況をみると，西法寺集落と大庭・久保集落との間には浅い谷部が入り込み，自然地形によって相互の集団が区別されており，大庭・久保集落と上の原集落とは弥生時代の墓地群によって集落が別れている。いずれの集落も南西側に広がりその規模を推し量ることはできないが，相当な規模でしかも一定の間隔で集落が展開していたことが理解される。

弥生時代の墓地群については，縦列埋葬された墓域を横断する形で調査したが，その起点と終点は分からない。西側の調査区域外では，圃場整備事業に伴って同じ墓地群（乙王丸遺跡）が発掘されており，この墓地群の長さは200m以上の規模になると思われる。

墓地群の種別は甕棺墓（38基）・木棺墓（33基）・石蓋土壙墓（９基）・箱式石棺墓（８基）・土壙墓（40基）と墓地群に付随する祭祀土壙（11基・この内の11号は違う可能性がある）などがある。

以下調査の成果についての所見を若干述べることにする。

弥生時代の墓地群の展開

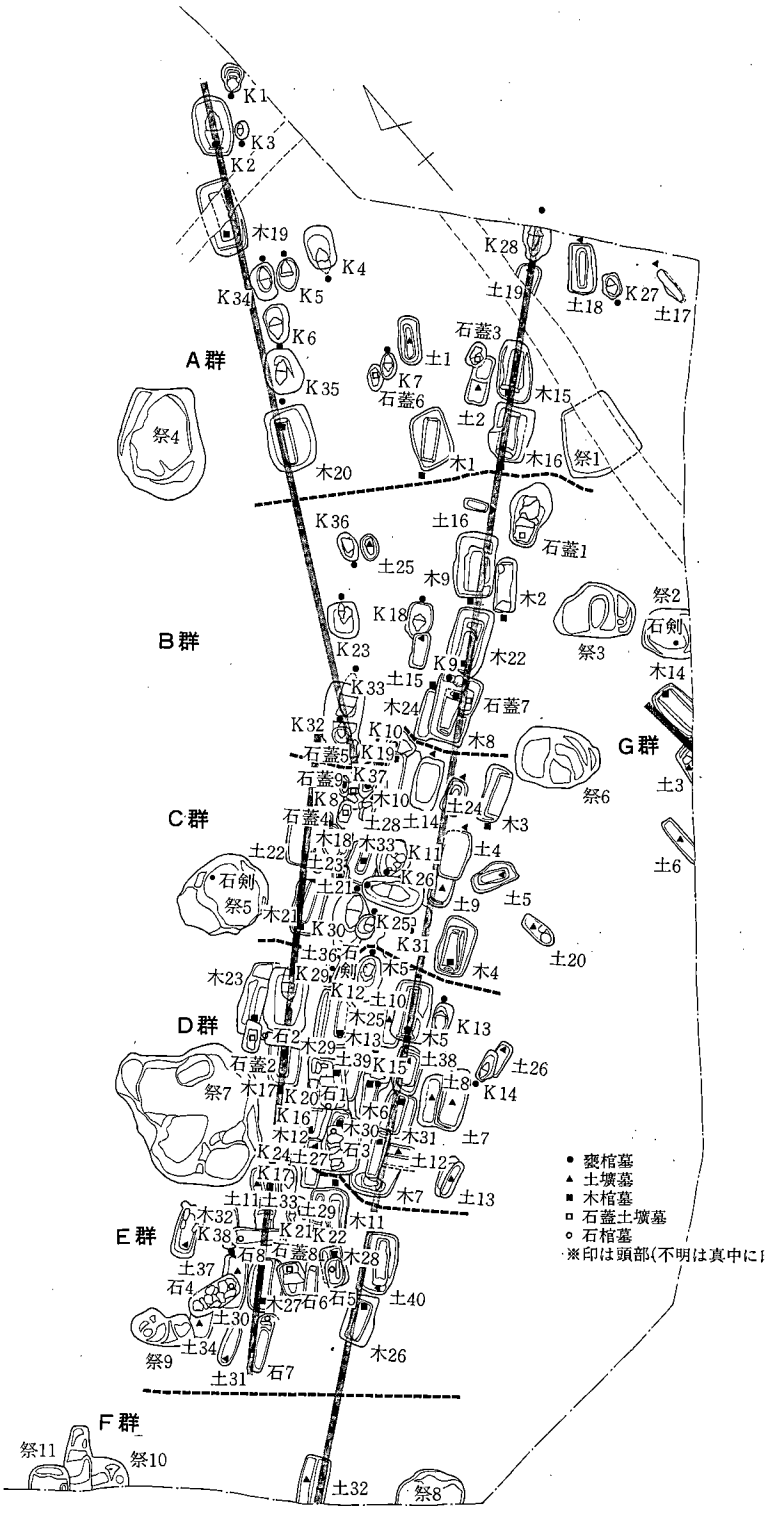
（１）　墓地群の変遷

墓地群の埋葬状況をみると，縦列埋葬の中にも基本線がある。その一つは調査区の東北端に位置する28号甕棺墓と南西端に埋葬されている32号土壙墓のラインで，もう一本は北側のアミ線上である。このラインは調査区の中央付近で西側に振れ，全体では「Ｙ」字状に広がった形をなす。

さらに，墓域調査区の東側端の14号木棺墓を起点とするラインがありそうで，このグループは縦列埋葬墓地群の東側に配されている３号祭祀土壙によって区切られた格好である。また，調査区の東隅に埋葬されている17号土壙墓の主軸がＧ群の14号木棺墓と同一方向を呈していることから，縦列埋葬群から分岐した列の存在も推測される。

縦列埋葬された墓地群は，不規則に配置された祭祀土壙（祭祀土壙の用途ではない可能性もある）によって墓域の範囲が規制されており，このような例は弥生時代の墓地に通例みられるものであるが，大庭・久保の墓地群では，若干指摘できる事象がありそうである。次にそれを考えてみたい。

墓地の埋葬順序であるが，墓地群は北東側から南西側に向かって埋葬されている。この状況をみると墓地の謂集状況に変化があることが分かる。つまり，北東側はわりと整然と列をなして埋葬され，墓地どうしの間隔が保たれていることが指摘でき，余裕のある埋葬がなされ，墓地の重なりが少ないことが分かる。これに対して検出した中央部分，「Y」字状に分岐する基部付近から南西側にかけては，２列の基本線は保持しながらも主軸を並行にして列間にも埋葬され，埋葬場所の余裕がなくなると列の外側にも埋葬している。また，南西端に近くなるにつれて，新しい埋葬形態で，主軸方位が異なる箱式石棺墓が築造され，重複が一段と激しくなる傾向が看取できよう。この埋葬の流れから推察できることは，墓地の起点を北東側に求めることができよう。つまり，当初墓域を設定した段階で，整然とした並びで埋葬していた墓地群は，時間的なあるいは時期差を伴いながら規制された範囲内に埋葬されたため，埋葬場所の設定が，全体の墓地



第197図　墓地群の分布とグループ（1/300）

の配置をみても分かるように成人墓と小児墓（親子）との関係，あるいは近親者との関係という血縁関係の中で捉えられ，このことが墓地群の謂集状況を示す結果になったと推察される。

（2） 墓地群の時期とグループ別け

墓地群が形成された時期であるが，総数128基の墓地の中で時期の決めてとなるものは甕棺と僅かな副葬品のみで，副葬遺物を持たない墓地については時期決定ができない。しかし，埋葬された甕棺墓の分布状況からある程度の推測は可能である。

当該調査区内での甕棺墓の時期は，弥生時代中期初頭から前葉頃（一部）に限定されていて，最も多いのは中期初頭頃の甕棺墓である。甕棺墓は全体に分布しているが，列線上に配置される甕棺墓は北東列にしか存在せず，中央付近にある甕棺墓は列間か外側に埋葬されている。列外の甕棺墓は列埋葬された木棺墓や土壙墓よりは時間的，あるいは若干の時期差で後出する墓と思われる。このことから，木棺墓（一部の木棺墓は除く）や土壙墓，石蓋土壙墓などは中期初頭かそれに近い古い時期が付与でき（北西列の29号甕棺墓に切られている23号木棺墓は前期末頃の可能性がある），短い時期の中で形成された墓地群といえよう。

この墓地群の続きとみられる圃場整備事業用地内で調査された墓地群（乙王丸遺跡）も当該墓地群と同様な内容と時期が与えられる。調査担当者から教示を受けたところ，今回調査した箇所からそう掛け離れていない所での調査で，調査区内で墓地の南西端が確認されたらしい。検出された墓地の種別は甕棺墓（中期初頭から前葉と後期が１基），その他，木棺墓や土壙墓，箱式石棺墓（小児用か）などである。

しかし，前述したように，調査区の南西側に集中して埋葬されている箱式石棺墓や小形仿製鏡を副葬していた29号木棺墓のように明らかに後期の範疇で捉えられる墓地群が出現する。この墓地群は縦列埋葬された墓地群とは主軸を異にし，古い墓を破壊して築造するなど，受け継がれた墓地群を無視した形で埋葬されている。にもかかわらず，祭祀土壙に挟まれた墓域からは逸脱していない。このことは，中期初頭頃から営まれはじめた墓地群が，中期中葉をはずして後期に至っても継承された証で，墓域の規制に阻まれた結果に基づくものと言えよう。

このような墓地形成の流れの中で，「Y」字状に分岐する基部に位置する北西列の33号甕棺墓は，周囲の甕棺墓よりは明らかに後出する中期前半の成人用甕棺墓であるにも拘らず，列線上に埋葬されている。本来ならば古い墓から順次埋葬されると考えられ，ここの墓地群は北東から南西へと墓地形成が行われていることから，新しい墓地は列線からはずれた箇所に埋葬されるはずである。

この事実をどのように理解するかであるが，一つの考え方として群別埋葬が考えられる。つまり，縦列埋葬の中での小集団別埋葬が行われ，埋葬範囲が限定されていたことが指摘できるのではなかろうか。縦列埋葬（特に二列埋葬）の分析は，春成秀爾氏，橋口達也氏や田中良之・

土肥直美氏らによって論じられており（註1），この項では言及を避けるが，最初に埋葬されたと考えられる列上に位置する墓地をみると，第197図に示したようなグループ別けが可能のようである。この区分はあくまでも当初埋葬されたと思われる列上の墓地を対象とし，後に埋葬された列間の墓地は，墓域の狭隘さからこの領域から若干逸脱したことが考えられる。

A 群 16号・20号木棺墓を結ぶ北東側に位置する一群で，両者の南側には空白部分があり9号と16号木棺墓の間には，1号石蓋土壙墓が入るにも拘らず小児棺を埋葬し，わざと空白部をなしているように看取できる。全体の墓の中で甕棺墓がこの内の50%を占めている。この群は整然と埋葬されていて墓地の切り合いは少なく，成人墓の近くには小児棺が埋葬され親子の関係を示唆している。形態的に新しい甕棺は列上にはない。各群とも言えることであるが，南東側の列上には甕棺墓は28号の1基のみで，北西側の列に多いことが指摘でき，この要因が何であるかは現時点では言及できない。

B 群 33号甕棺墓と8号木棺墓を結ぶ一群である。このグループまでは近親者間での重複はあるが，墓の切り合いは少ないといえる。前述したように，この中での33号甕棺墓は他の甕棺墓よりは新しく，墓地形成の流れが北東側からと考えられるものの列線上に埋葬されていることで，一群の中で最も最後に死亡した被葬者を埋葬したと思われ，あらかじめ埋葬される場所が設定されていたような感を受ける。

C 群 4号・21号木棺墓を結ぶ線で区切られる。21号木棺墓と29号甕棺墓間の空白部と1号石蓋土壙墓と同じように4号木棺墓が5号木棺墓と9号土壙墓間に埋葬される場所があるにも拘らず，列から外れて埋葬した形をとる。この一群から列間に多くの墓が錯綜した状態で埋葬されている。列間に成人用甕棺墓が埋葬されるのもこの一群のみである。

D 群 7号木棺墓と11号土壙墓とを結ぶ線で列上の空白部が区分の根拠である。この一群は29号甕棺墓と23号木棺墓，7号木棺墓や12号土壙墓のように成人墓との切り合いがあり，また列間にも新しい形態の墓が古い墓を破壊して埋葬されるなど，継承された墓を無視した状態で墓が錯綜している。

E 群 26号木棺墓と7号石棺墓（木棺墓との折衷形）とを結ぶ線で，この南西側は広い空白部が存在し，一つの集団がここを境に大別できる。この一群にも北西側の列には甕棺墓が埋葬されているが南東列にはない。しかも，北東側からの流れの中でこの列の行間が最も狭く，そのためか，列の北西外側に並行して墓地が営まれている。この一群もD群同様墓の主軸を異にした新しい墓地が古い墓を破壊した形で設営され，D群と同じような墓の形成過程を示している。

F 群 このグループは32号土壙墓と両脇の祭祀土壙を検出したに過ぎない。北西側の列は新しい攪乱を受けているが，当然墓が存在したと考えられる（付図参照）。

G 群 これを群として捉えられるかははっきりしないが，3基の墓地の主軸が同一方向を

向いていることから墓地群の起点と捉えることができよう。14号木棺墓の北側に隣接している2号祭祀土壙がこの墓地群に伴うと考えらっれ，北側にある縦列埋葬の墓地群とは違った集団の墓地である。

以上が墓の設営の方法から検討したグルーピングであるが，墓の形成過程では北東から南西への流れがあるものの，墓地全体の埋葬順序が同じ方向での古→新の秩序がみられないことが一つの根拠なっている。

（3） 祭祀土壙の役割

弥生時代中期の縦列埋葬の墓地群（主に甕棺墓であるが）には，その墓地を挟む形で土壙状の掘り込みが適宜配置されていたり，溝状の遺構が掘られたりしている。これらの遺構からは葬送儀礼に使用された土器が出土し，一般には祭祀土壙（遺構）と呼称している。

さらに，この土壙や溝状遺構は墓地群に対して規則的な配置がなされている訳ではなく，筑紫野市に所在する永岡遺跡のように溝と土壙状遺構が配置されている場合があり（註2），甘木市に所在する栗山遺跡のように時期の異なる墓地群によって土壙状遺構であったり溝状遺構であったりする（註3）。今回調査した大庭・久保遺跡では墓地群を挟む形で不規則な配置で不定形な土壙が掘られ，これを従来指摘されている祭祀土壙と位置付けた。

これら祭祀遺構と呼ばれるものは，一つの役割として言えるこは，墓域の設定（区画）の役目を果たしていることである。縦列埋葬の墓地群ではこの祭祀遺構の外側には墓をつくらないことがはっきりしており，集団内で墓域の設定基準がこの祭祀土壙によって決定されていたといえ，墓域設定の用途が指摘できる。

祭祀土壙からの出土遺物は，主に丹塗り土器を中心とした祭祀遺物かそれに使用された土器類に限られるが，出土状態は土壙の床面から出土するものもあるが，上層から中層にかけての出土が多く，ある程度埋土が堆積した段階で祭祀土器などが投棄されている。

近くの例では，栗山遺跡の7号祭祀土壙から出土した祭祀土器が床面に密着した状態と浮いた状態で出土している。この祭祀土壙は二時期の祭祀土器が投棄され，床面から出土した土器は中期中頃，上層から出土した土器類は中期後半の時期が付与でき，同じ土壙を二時期にわたって使っていることが分かる。

大庭・久保遺跡の祭祀土壙については，配置された場所が通常の縦列埋葬墓地と同様で，設定された場所からの墓地のはみ出しはない。設置場所も規則性はなく，規模も大小さまざまである。形態的には楕円形に近い形状や方形の形態，不整形な形など，これにも定まった形はない。他の遺跡の例でも形状はさまざまで，断面でみると凹凸が激しいものや，階段状に掘られている土壙，部分的に深く掘り込んだ土壙や壁面がオーバーハングした形のもの，壁面に横穴を掘ったもの，床面には所どころに意味不明の窪みがあるなど祭祀のための使用目的がどのよ

うな行為であったかは定かでないが，この土壙から祭祀の行為は彷彿されないのである。

大庭・久保遺跡での出土遺物をみると以外に少なく，丹塗り土器はまったくない。もっとも，丹塗り土器が盛行する中期中頃以降の墓地群でないことが起因すると思われるが，床面から出土した遺物としては，２号・５号祭祀土壙の石剣２本，８号祭祀土壙の小型壺（黒塗り）１個のみである。その他出土した土器片（甕棺片も含む）はすべて土壙の覆土内からである。ここで大庭・久保遺跡で検証した実例で検討を加えたい。

主に墓地群の北西側に配置された祭祀土壙であるが，出土遺物に疑問を抱かざるを得ない遺物がある。つまり，破壊された甕棺片が覆土中，それも覆土の下層から中層にかけて出土したことである。祭祀土壙の配置状況から，当然この墓地群が形成された時点で掘られていたことは，２号・５号・８号祭祀土壙から出土した遺物で分かるし，７号土壙のように墓地群が祭祀土壙を避けた形で埋葬されていることでも判断できる。

しかし，付図で示したように，４号・５号・７号・９号祭祀土壙内から１号・８号箱式石棺墓で破壊された16号・20号・38号甕棺墓の破片が出土している。８号は時期がはっきりしないが，１号箱式石棺墓は小形仿製鏡を出土した29号木棺墓より新しく，小形仿製鏡の時期が弥生時代後期前半頃に位置付けられていることから（註4），この箱式石棺墓は後期前半よりは新しい時期が与えられる。

この時期に破壊された甕棺片が出土したという事実は，弥生時代後期前半以降も墓地群の周辺に配されている祭祀土壙のすべてとは言わないまでも，使われていたことの証であると考えられ，５号・７号祭祀土壙の覆土中から箱式石棺を築造する際に出たと思われる石材の破片が多数投棄されていたこともこの事実を補強する資料になる。

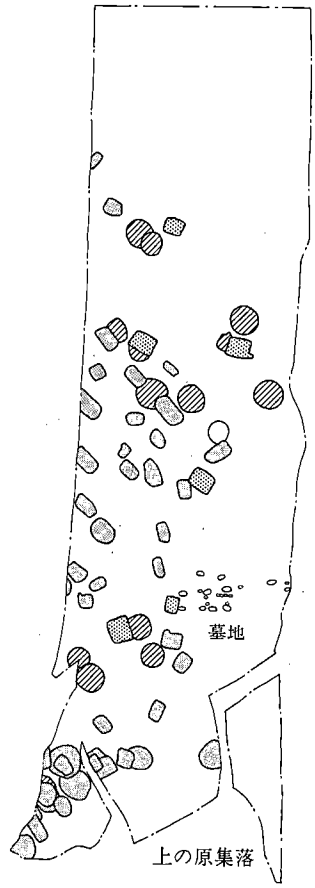
以上の結果から，縦列埋葬の墓地群に配される祭祀土壙から考えられることは，ここでは一つの試案として受け取ってもらいたいが，墓地群を形成する段階での採土場と推測し，墓地群が終焉する段階まで使用されたと考えられ，７号祭祀土壙の断面で分かるように一度埋没しかけた土壙を再度掘り返している。これを意識した形で墓地群を形成し，結果的には墓域設定の役割を果していると考えられないだろうか。

祭祀土壙と呼称されている一連の土壙は，前述したように，平面的には不定形が多く，一度掘った所を改めて掘り進んだような形を残し，断面や床面観察で分かるように意味不明な凹凸があり，壁面に横穴を掘った痕跡を残したり，オーバーハングさせたりした掘り方は，採土場と考えれば説明がつくように思える。

大庭・久保の墓地群周辺の地層は，黒ボクの下層に砂質層，その下層には礫の混ざった黄褐色粘土層が堆積しており，この粘土を採集するための土壙と考えられる。甕棺や他の墓地の目張り粘土には黄褐色粘土の他に，灰褐色粘土も使っており，目張り粘土のみに使用されたとは考えにくく，使用された量からみてもそぐわない。標石をもつ23号甕棺墓の覆土の上層には全

面にこの粘土が厚く使われていたことを考えると，個々の墓地の盛り土に使用されたと推測される。しかも，この土壙内にある程度覆土が自然堆積した段階で，あるいは採土して間もない段階で，葬送儀礼に使われた祭祀土器が投棄されたと考えることができないだろうか。そうすれば土壙内の床面から出土したり，浮いた状態で出土する祭祀遺物の出土状態が説明できると思われる。

大庭・久保墓地群



第198図　大庭・久保墓地群と上の原集落との関係図（1/2,000）

（4）　墓地群と上の原集落との関係

大庭・久保遺跡の墓地群と上の原遺跡の集落とは時期的にも同じで，周囲に墓地群と同一時期の集落がないことから両者は深い結びつきがあるものと考えられる。

上の原集落と当該墓地群とは約100mの距離を隔てており，集落と墓地群との有機的な繋がりが認められる事例は珍しく貴重な資料である。

上の原遺跡で検出された集落は，弥生時代の中期初頭から始まっており奈良時代まで続いている。その間には若干のヒアタスがある。この内弥生時代の集落は総軒数が65軒を数え，その内訳は，中期初頭（円形住居）が19軒，中期前葉（小判形住居）が20軒，中期中葉（長方形住居）が18軒，時期不明が８軒ほど検出されている。集落は南西側に広がっており，総軒数が何軒になるかは定かでない。

これに墓地群の内容を対比させると，検出した墓地群の埋葬開始時期と符合する。これは時期決定の可能な甕棺墓と対比した場合で，中期初頭の甕棺墓に切られた墓は，前期に遡る可能性があるものの，円形住居どうしでの重複があることから，時間差的な新旧関係があるものと思われ，墓地群の埋葬開始時期を弥生時代前期まで遡らせる必要はないと考えられる。

墓地群の拠点集落である上の原遺跡は，弥生時代中期の農業共同体の一つの単位として推し量られるが，中期の墓地群から出土した副葬遺物は貧弱なことが指摘でき，この墓地群が集落の一般構成員の共同墓地であったことを裏づけている。

上の原の集落では中期中葉頃の住居跡が発掘されているが，墓地群の中に同じ時期の墓の存在を見いだすことはできない。もしあるとすれば，木棺墓などが該当する可能性があるが，甕

棺墓の分布状況や圃場整備事業で調査された南西側の墓地群の甕棺墓の時期及び埋葬の流れから検証しても無理があるように思われる。また，中期前半の甕棺墓も集落と対比すると圧倒的に少ない。

上の原集落の北側の一画に縦列埋葬の墓地群が北東側に連なり，南西側の端が方形の竪穴住居（中期中葉）に隣接している。この南西端が墓地群の起点か終点かは定かでないが，調査した範囲での墓地群の種別は甕棺と木棺墓からなり，全体的に甕棺墓が主体を占めている。時期は弥生時代中期前葉から中頃にかけての墓地群であり，大庭・久保遺跡の墓地群内で空白であった中期中葉の墓地群が上の原集落の北側に形成されていることが判明した。

墓地群は南西側の一部を調査したに過ぎないが，２列埋葬がなされ，北西側に祭祀土壙（？）が掘られている。おそらく北東側に延びる墓地群と推測され，上の原集落で検出された弥生時代中期初頭から中葉にかけての竪穴住居群に付随する墓地群が揃ったことになる。唯一大庭・久保の墓地群で後期に形成された一群の墓の集落が発見されていないが，南西側に広がる集落内に存在すると考えられる。

これら中期前葉から中葉頃の墓地形成は，大庭・久保遺跡で検証した中期初頭から前葉にかけての墓地と埋葬場所の違いこそあれ時期的に連続性が認められるもので，大庭・久保墓地群の墓域の飽和状態が縦列の方向を同じくして別の場所に埋葬する形となったのであろう。大庭・久保遺跡で検出した後期の墓地については数が少なく，墓域の場所は継承されていたものの，古い墓は忘れ去られたか無視した形で形成されたと思われる。

上の原墓地群は甕棺葬が多く，甕棺の盛行時期とも重なるもので，このように理解することで時期の不明瞭な大庭・久保の墓地群の木棺墓，土壙墓，石蓋土壙墓は弥生時代中期初頭から前半の短い時期に埋葬されたことが判明したと言えよう。

（５） 大庭・久保遺跡出土の甕棺

甘木・朝倉地方の甕棺の特徴については，栗山遺跡出土の甕棺を中心とした橋口達也氏の見解がある（註5）。

今回出土した大庭・久保遺跡の甕棺は，大形棺を例にとると橋口氏の編年でのKⅡa（中期初頭）が大半で，KⅡb（中期前半）は１基のみである。栗山遺跡から出土した甕棺には中期初頭頃の甕棺は２基と少なく，比較対照するには資料に乏しいが，大庭・久保出土の甕棺とは製作技法や調整法に若干の差異がみられることから，若干の指摘をしておきたい。

甘木・朝倉地方の甕棺の特徴は，福岡・春日市周辺と比較して，要約すると以下のようにまとめられている（註5）。

中期初頭（KⅡa期）：口縁部が逆「Ｌ」字状に発達したものがある。胴部の凸帯は下位にあり，２条つくりの１条凸帯が多い。底部の径が大きく，スマートさがない。器壁が10

㎜前後と厚い。調整では叩キ→ハケ→ナデの順で，一部ハケ調整のままがある。

中期前半（KⅡb期）：口縁部の外側への張り出しが顕著なもや内側が未発達のものがある。胴部の凸帯はやや上位にあり，見かけ２条つくりの１条つくりがある。底部の径は11cm～12cmが多いが，15cmに近いものがある。器壁は10㎜前後と厚く，スマートさにかける。調整は上記と同じである。

以上の特徴と大庭・久保遺跡の甕棺との比較では，今回出土した甕棺は，栗山遺跡の中期初頭の甕棺に対して形態・製作技法にやや古相を残しているものの，KⅡa期の範疇で捉えられる甕棺であり，以下のような特徴を示している。

大庭・久保出土甕棺の特徴（大形棺）

中期初頭（KⅡa期）：口縁部の形態は，三角口縁，短い逆「L」字状口縁，外側に突出する逆「L」字状口縁，如意状口縁など，様々な種類がある。13号（下甕）・28号（上甕）・38号（単棺）などのような如意状口縁が残り，底部の形態とともに古相の形態を示すが，中期初頭の範疇に入るものである。また，栗山遺跡の甕棺で指摘されたように逆「L」字状に発達した口縁部を有す11号（上甕）や29号（下甕）があり，この地域の特徴を示している。

凸帯は普遍的に見られる１条の三角凸帯の他，２条つくりの１条凸帯や見かけが台形状を呈する特異な形のものがあり，これらの貼付位置は上半部・中央部・下半部とまちまちである。30号（上甕）のように口縁下と胴部中央に１条の三角凸帯を貼付する甕棺もある。また図版72－(1)で示したように凸帯を貼付する際に目安として沈線を巡らす例などもあるが，総じて粗い技法である。

法量や器壁の厚さなどでは，器高が59.1cmから最も大形の甕棺で11号（下甕）の83.4cmを測るものまでがあるが，平均すると71cmを測る。器壁の厚さは，福岡・春日周辺のものと比較して栗山遺跡では1.0cm前後とやや厚くつくっていたが，大庭・久保の甕棺は0.7cm～1.7cmの範囲で，栗山遺跡の甕棺よりもさらに厚くつくる。これは甕棺製作技法の未熟さが原因と考えられる。

底部については栗山遺跡の計測よりも一段と大きく，12.2cmから大きいものになると19.0cmを測る甕棺があり，厚さも2.0cm～5.0cmと厚く，全体的にプロポーションの悪さが指摘できるとともに，底部の重量から26号（上甕）のように焼成段階で接合面から外れたものや，甕棺の製作時に亀裂が生じ補修して使ったもの，亀裂が生じたまま使用したものなど甕棺墓の縁辺地域の在り方を如実に物語っている。

調整・成形技法では，殆どすべてハケの上からヘラ磨きを施し古い技法を継承しているが，僅かに29号甕棺の上甕にハケを撫で消す新しい調整手法が見られる。

中期前半（KⅡb期）：大形棺ではこの時期のものは33号甕棺１基のみである。この時期の甕棺は上の原遺跡で新たな墓地群が形成された中に認められるが，比較してみると口縁部のつくり

が分厚く，口縁外面の粘土紐の貼りつけが雑で，内側に著しく突出し，凸帯が台形状を呈していること，明橙褐色の色調を有すことなどから製作工人の違いとしか言いようのない甕棺である。調整は上記の甕棺に対して新しくハケを撫で消す手法が用いられている。

以上の成形・調整の特徴を持つ一群であるが，胎土にも栗山出土の甕棺とは差異がある。中期初頭の栗山遺跡の甕棺は赤褐色粒子と雲母（黒雲母）を多く含んでいるのに対して，大庭・久保遺跡の中期初頭頃の甕棺（大形・中形棺）は，赤褐色粒子・雲母（金雲母）・角閃石・石英の他に特徴的な混入物として黒曜石の細粒を含んでいる。この細粒が黒曜石であるか否かを顕微鏡観察した結果間違いないことを確認した。観察の結果，黒曜石の細粒は摩滅し丸くなっていることから，採土した粘土内に含まれているもので，故意に入れたものではないと思われる。しかし，中期前葉の33号甕棺には黒曜石の小片が見当たらないし，肉眼観察の結果，栗山遺跡の甕棺も黒曜石の細粒を胎土に含んだものはないように思われる。

黒曜石を含んだ胎土を持つ甕棺の例としては，同じ九州横断道で調査した杷木宮原遺跡・中町裏遺跡の中期初頭の甕棺に見られ（註6），同じ時期で筑後川を挟んだ浮羽町の岩野遺跡の甕棺にも認められることが指摘されている（註6）。製作技法・プロポーションも上記の遺跡の甕棺と似た所があり，供給源が同一である可能性が高い。このことは，栗山遺跡の所在する一帯の甕棺とは製作工人が異なっていたことが指摘でき，筑後川を挟んだ浮羽町・杷木町・朝倉町一帯に栗山遺跡に供給した工人とは違った工人集団の存在が考えられる。甕棺の製作技法も栗山遺跡の甕棺に比較すると拙劣さが感じられるとともに，栗山の甕棺が福岡・春日周辺のそれと比べて製作技術が劣っていると指摘されたのと同じようなことが甘木・朝倉周辺にもいえ，甕棺埋葬の縁辺部の特徴を色濃く残しているとともに，製作技術の拙劣さが一層感じられる。さらに，14号小児用甕棺は，口縁部と底部の形態が南筑後の瀬高町周辺で出土する弥生時代中期初頭の小児用甕棺墓に酷似した所があり，南筑後地域との交流を物語る資料であることを指摘しておきたい。

註1　春成秀爾「弥生時代九州の住居規定」－国立歴史民族博物館研究報告第3集－1984
橋口達也「二列埋葬の意味するところ」（永岡遺跡II）－筑紫野市文化財調査報告書第26集－1990
田中良之・土肥直美「二列埋葬墓の婚後居住規定」（日本民族・文化の生成）－永井昌文教授退官記念論文集－1988

註2　筑紫野市教育委員会「永岡遺跡II」－筑紫野市文化財調査報告書第26集－1990

註3　甘木市教育委員会「栗山遺跡」－甘木市文化財調査報告第12集－1982

註4　高倉洋彰「日本金属器出現期の研究」－学生社－1990

註5　註3に同じ

註6　福岡県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－21－」－1991

図　版

図版1　大庭・久保遺跡俯瞰

1

2

図　版　2

(1) 墓地群全景（北東から）

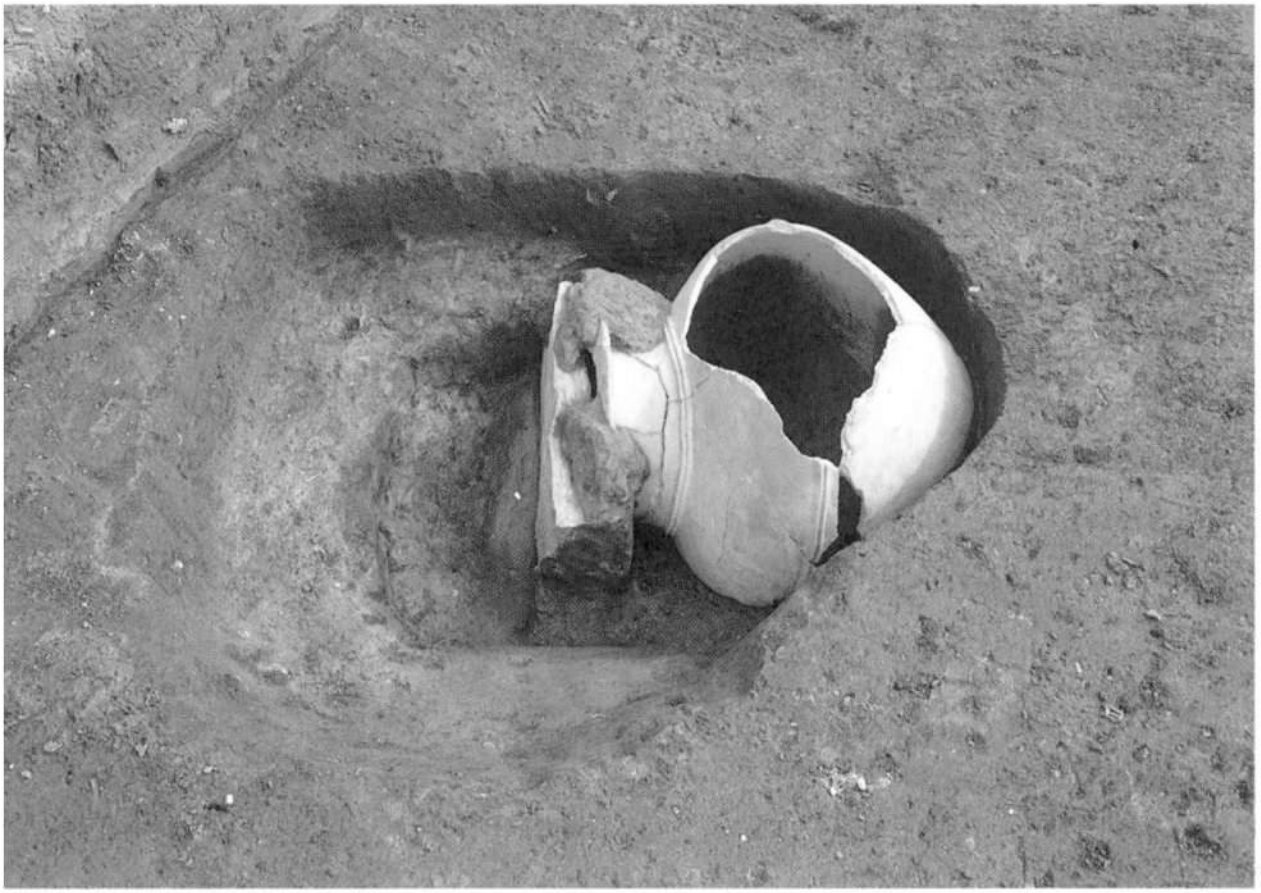
(2) 墓地群全景（南西から）

図　版　3

(1) 北側墓地群（東から）

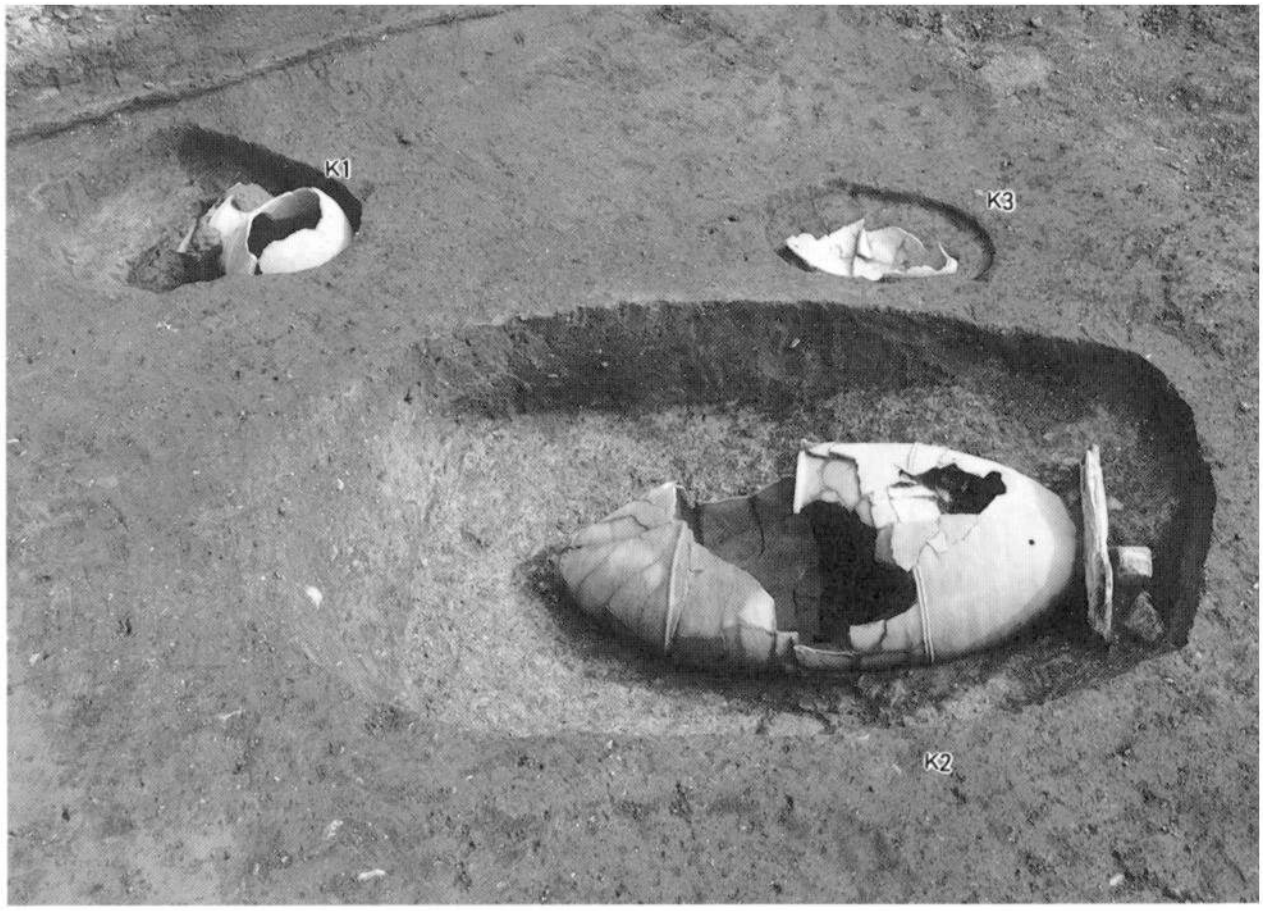
(2) 中央墓地群（北東から）

1



2

図　版　4　(1) 南側墓地群（北東から）
(2) 1号甕棺墓（北西から）



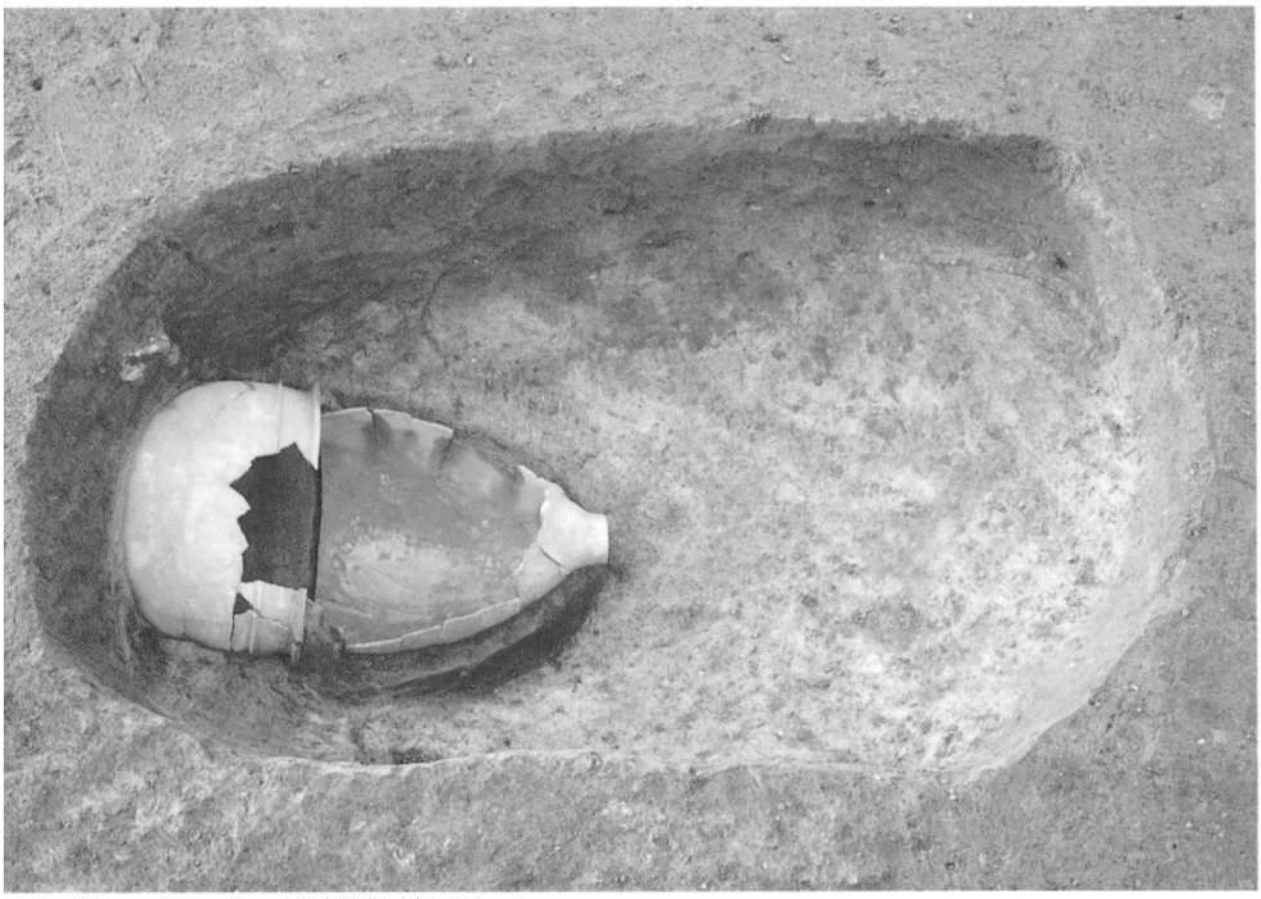
1

2

図　版　5　(1) 1号～3号甕棺墓（西から）

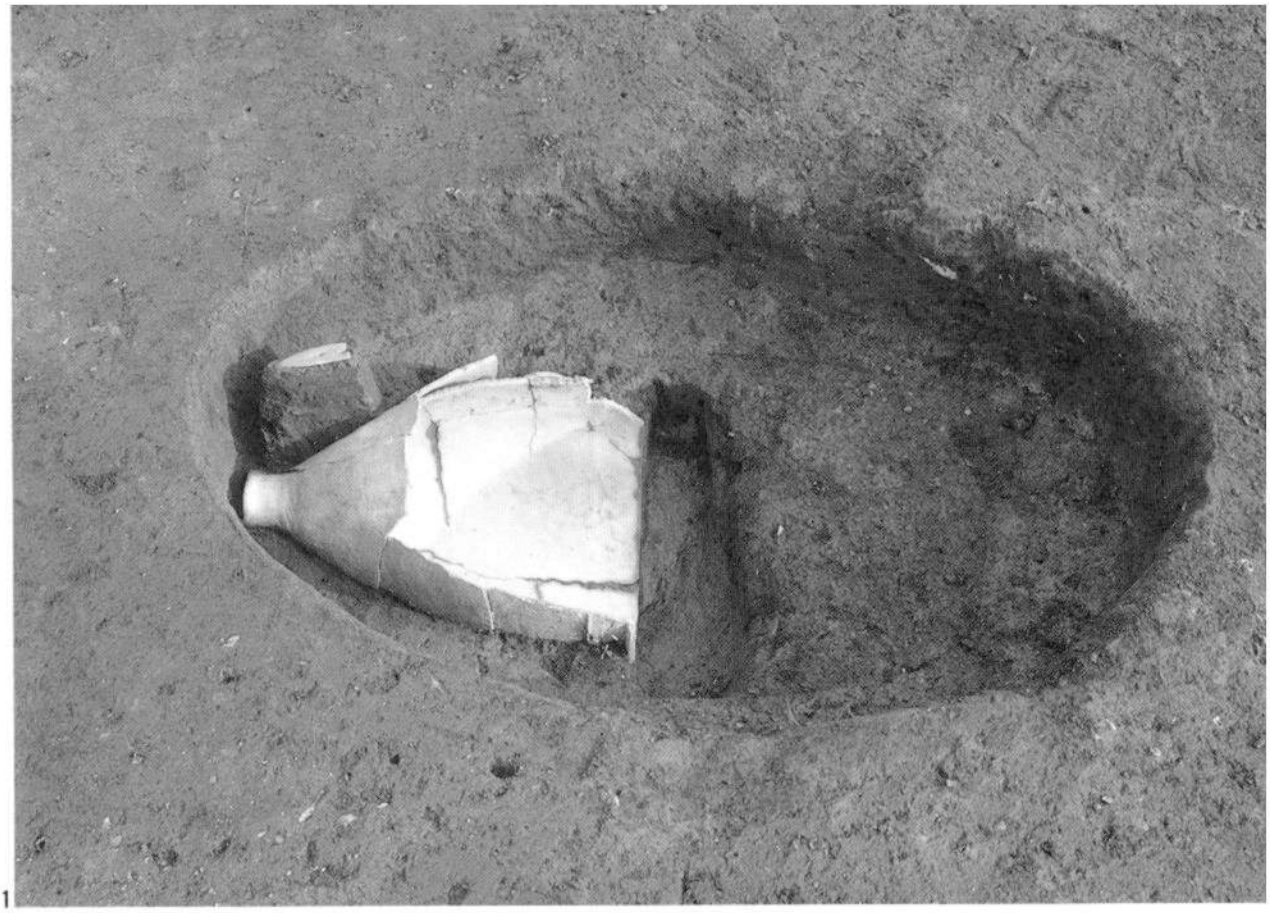
(2) 2号甕棺墓補修状態

1



2

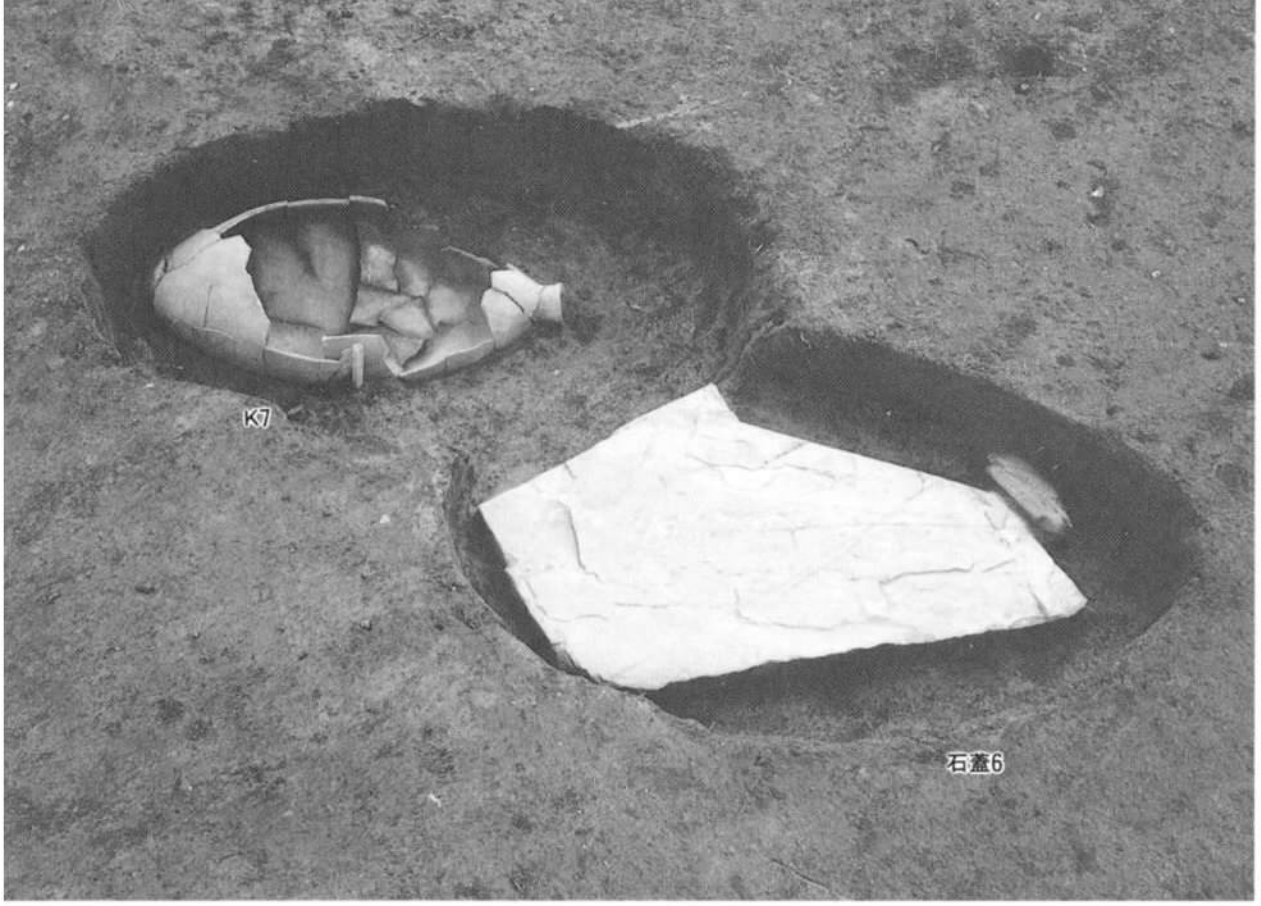
図　版　6　(1) 4号～6号甕棺墓（東から）
(2) 4号甕棺墓（東から）



1

2

図　版　7　(1) 5 号甕棺墓（北西から）
(2) 6 号甕棺墓（北西から）

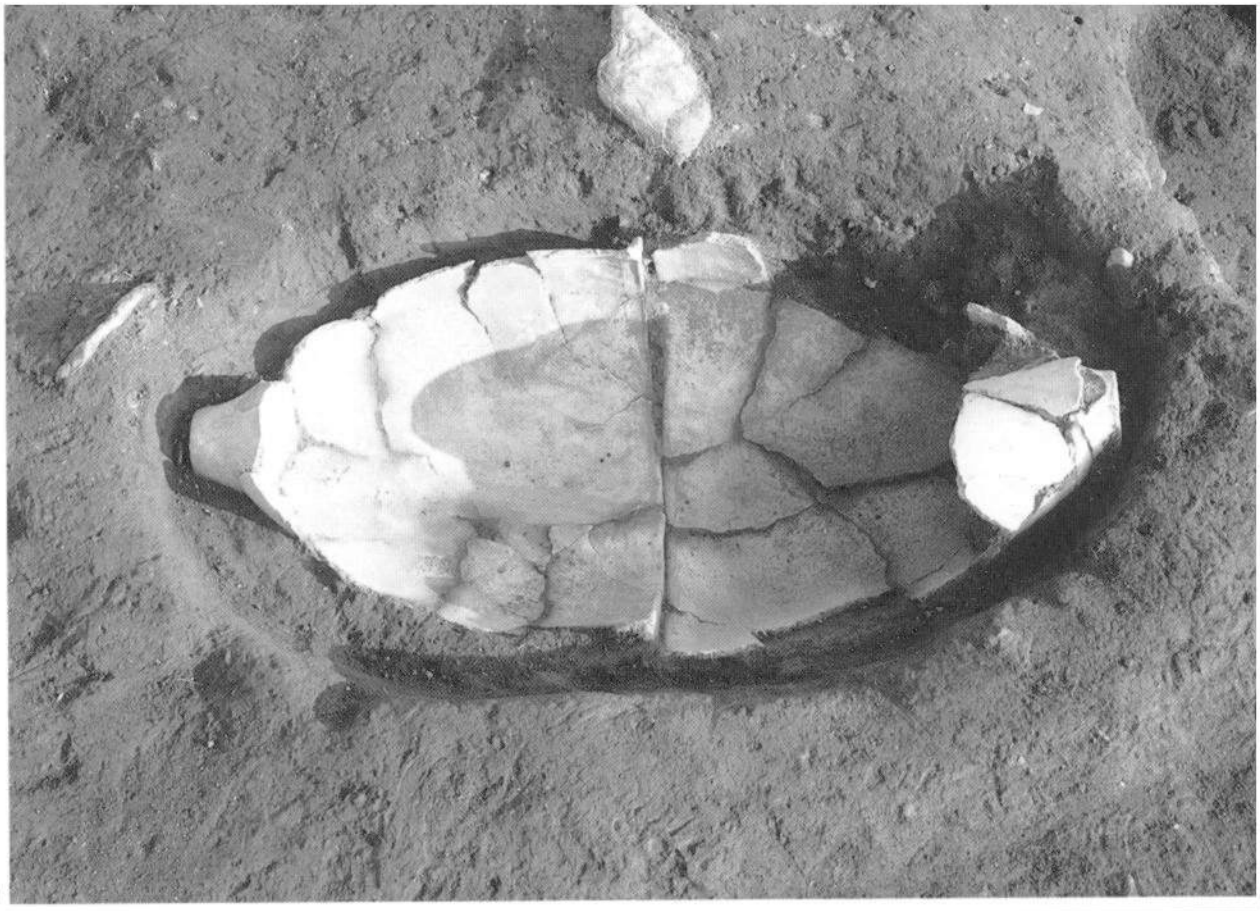


1

2

図　版　8　(1) 7号甕棺墓、6号石蓋土壙墓（北西から）

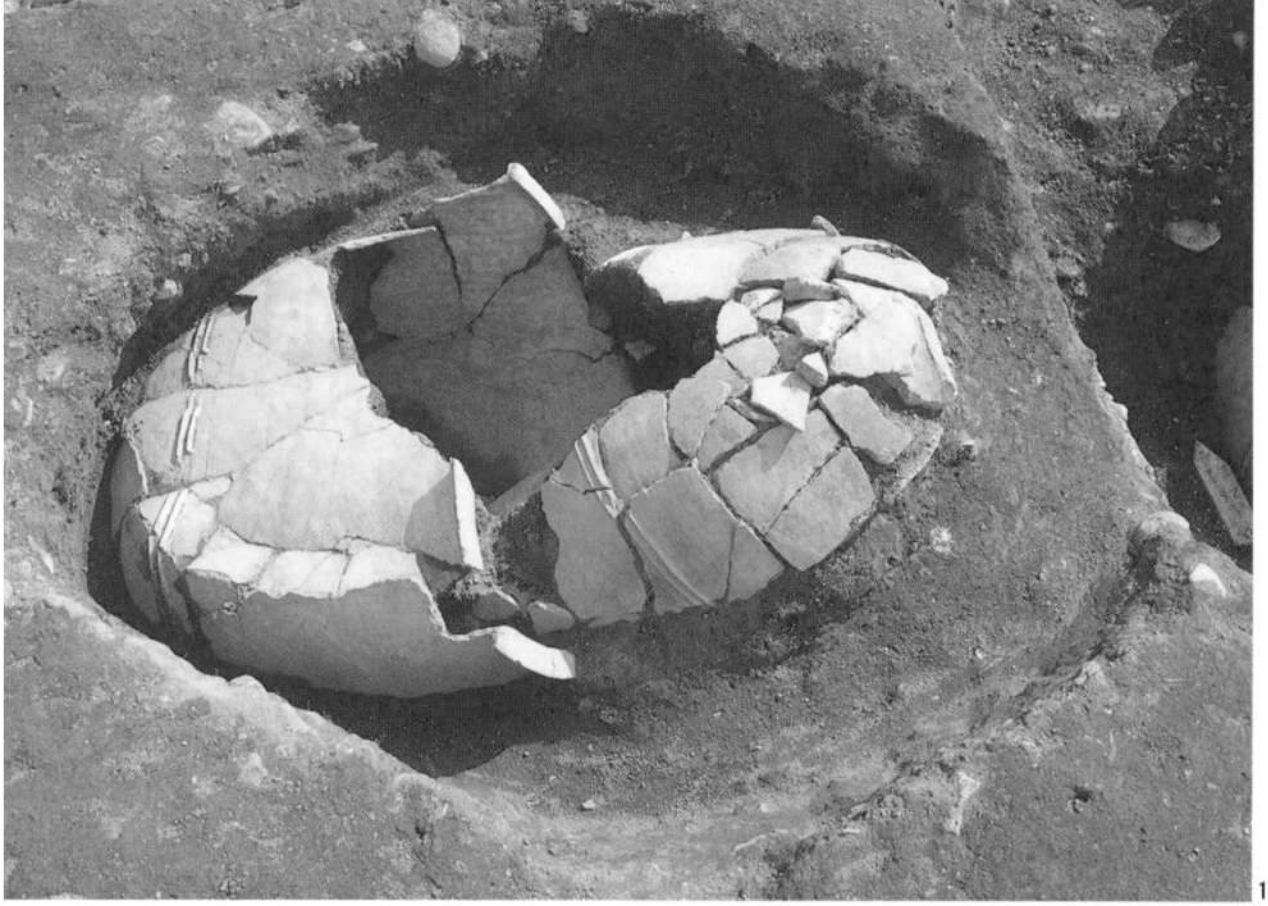
(2) 8号甕棺墓の標石（北西から）



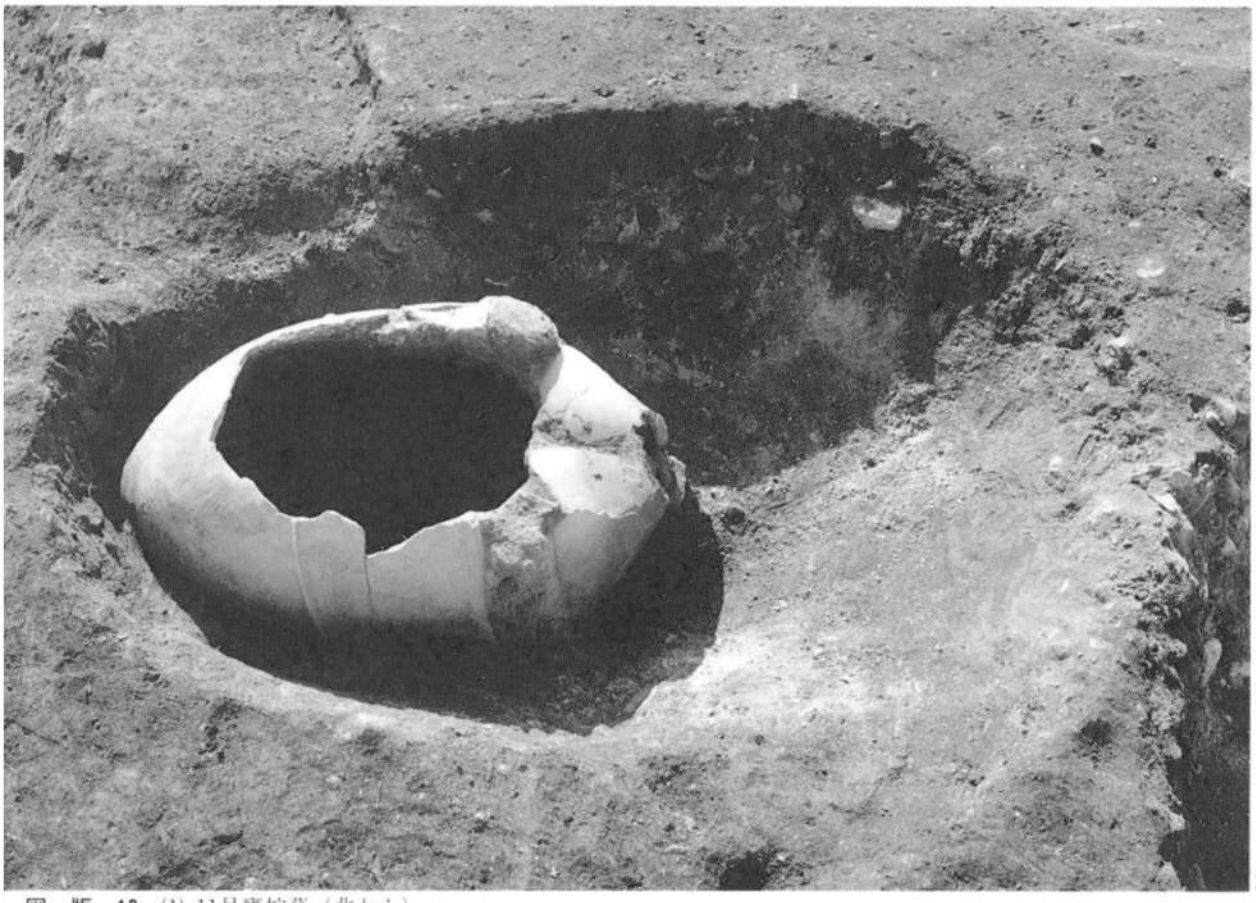
1

2

図　版　9　(1) 8号甕棺墓標石除去後の状態
(2) 10号・19号甕棺墓と10号木棺墓（北西から）



1

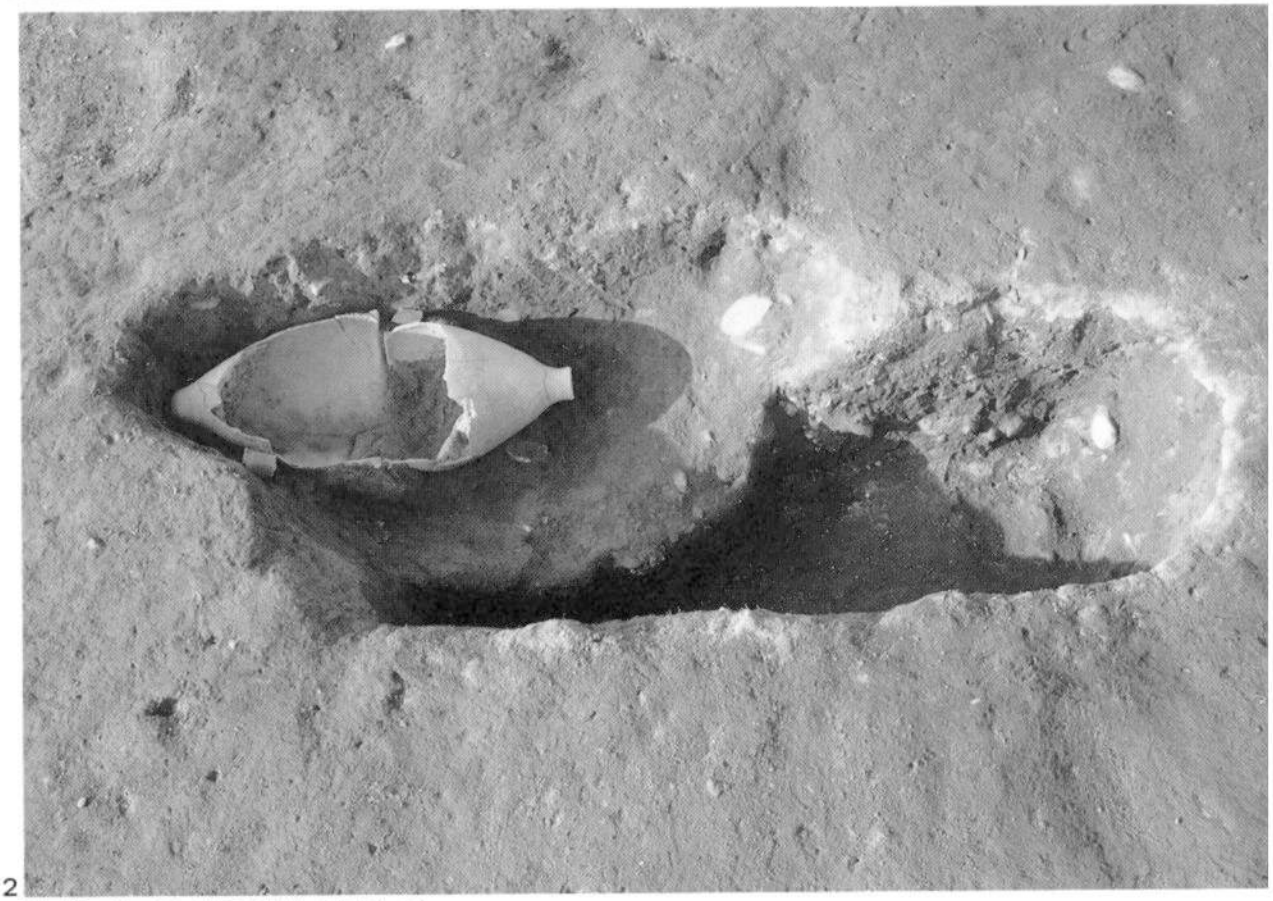


2

図　版　10　(1) 11号甕棺墓（北から）

(2) 12号甕棺墓（北西から）

1

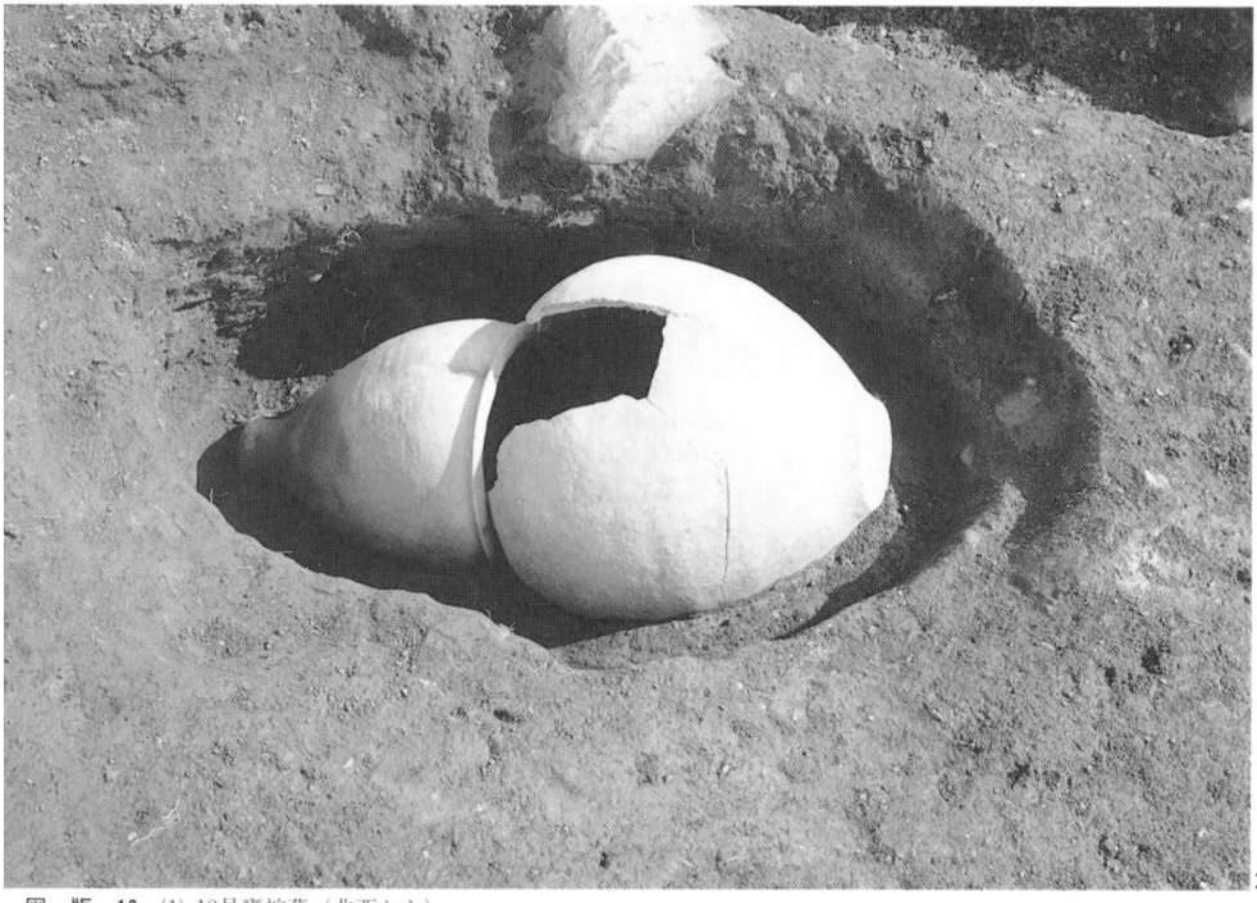


2

図　版　11　(1) 13号甕棺墓（南東から）

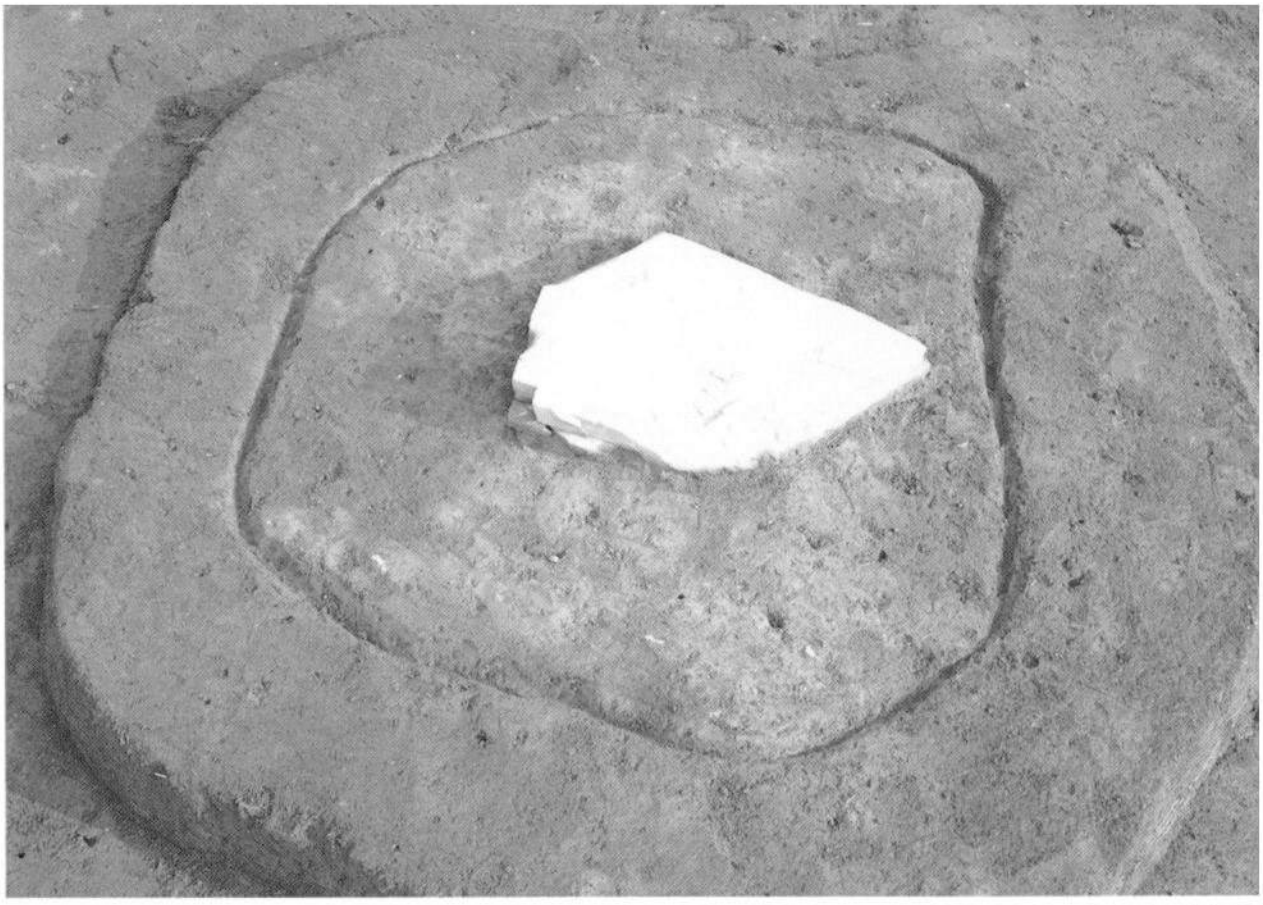
(2) 14号甕棺墓と26号土壙墓（南東から）

1



2

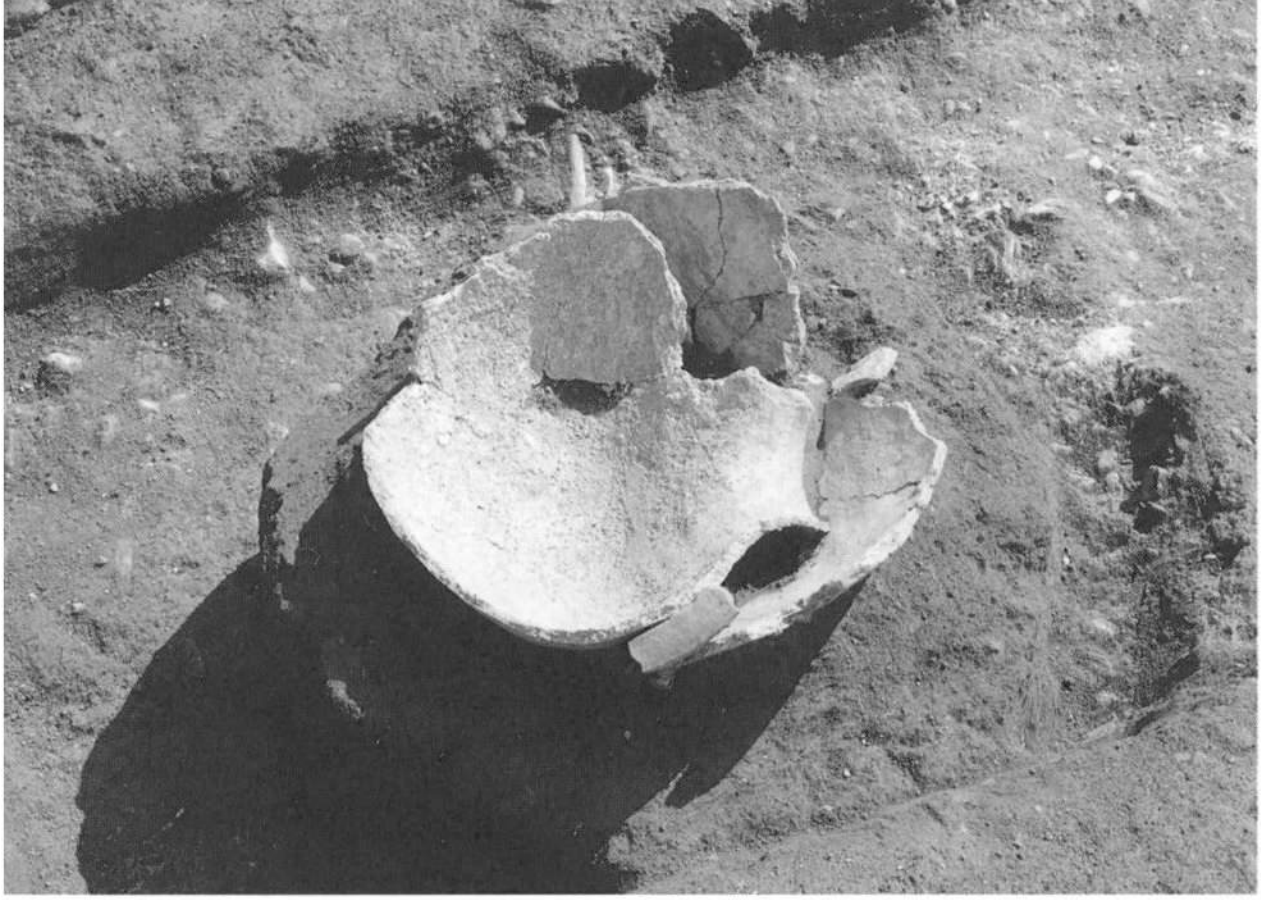
図　版　12　(1) 18号甕棺墓（北西から）
(2) 19号甕棺墓（北西から）



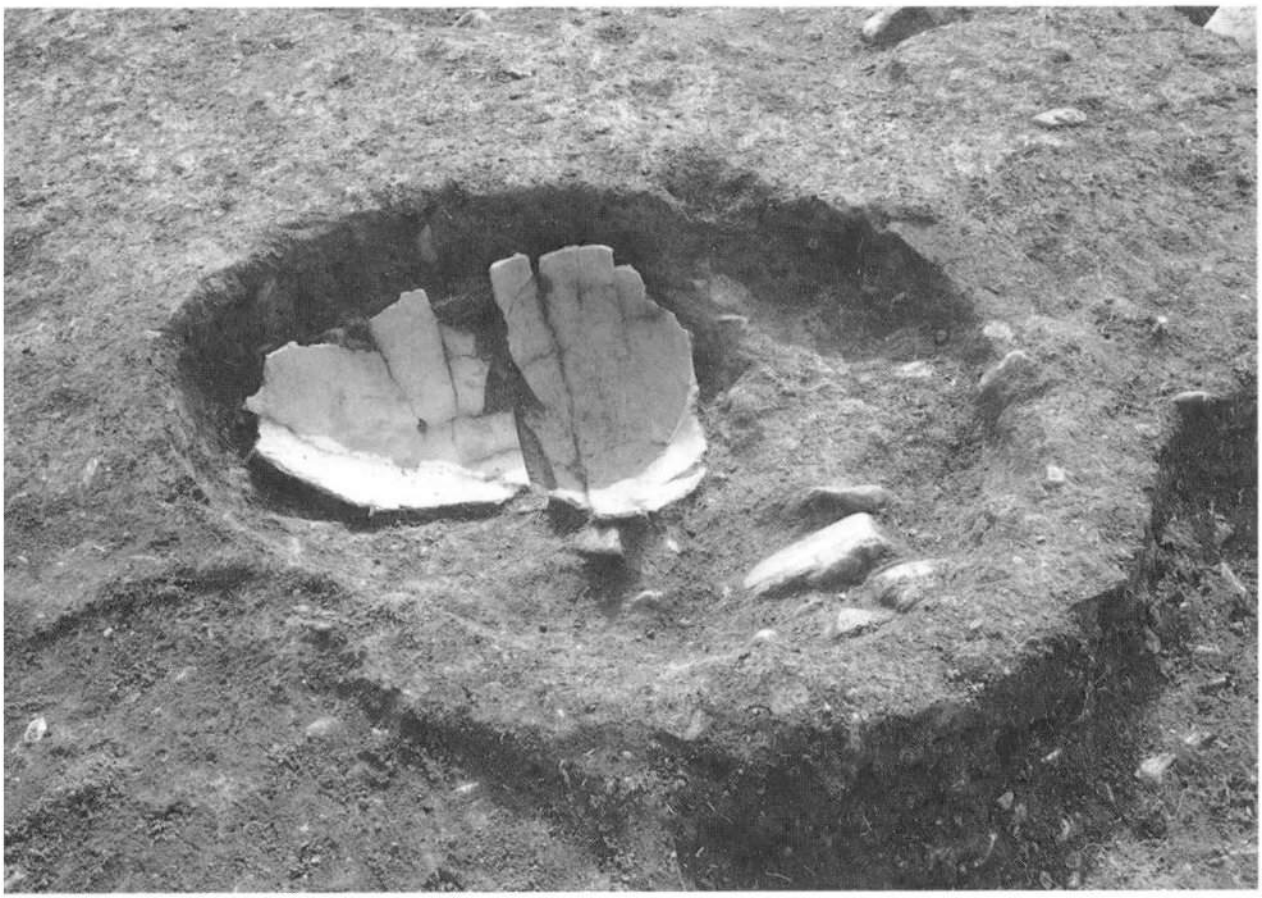
1

2

図　版　13　(1) 23号甕棺墓標石（北西から）
(2) 23号甕棺墓（北西から）



1



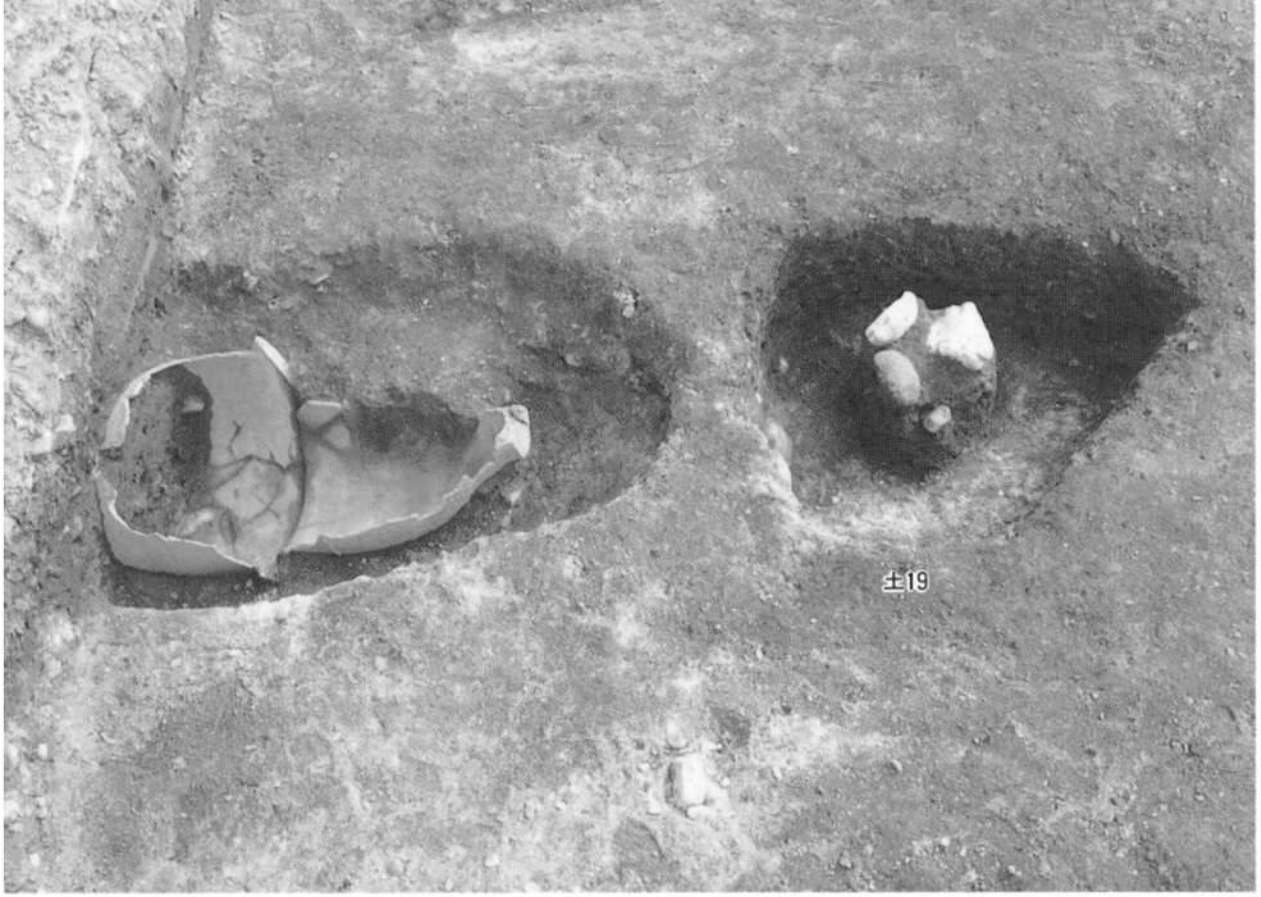
2

図　版　14　(1) 24号甕棺墓（北から）
(2) 25号甕棺墓（北から）

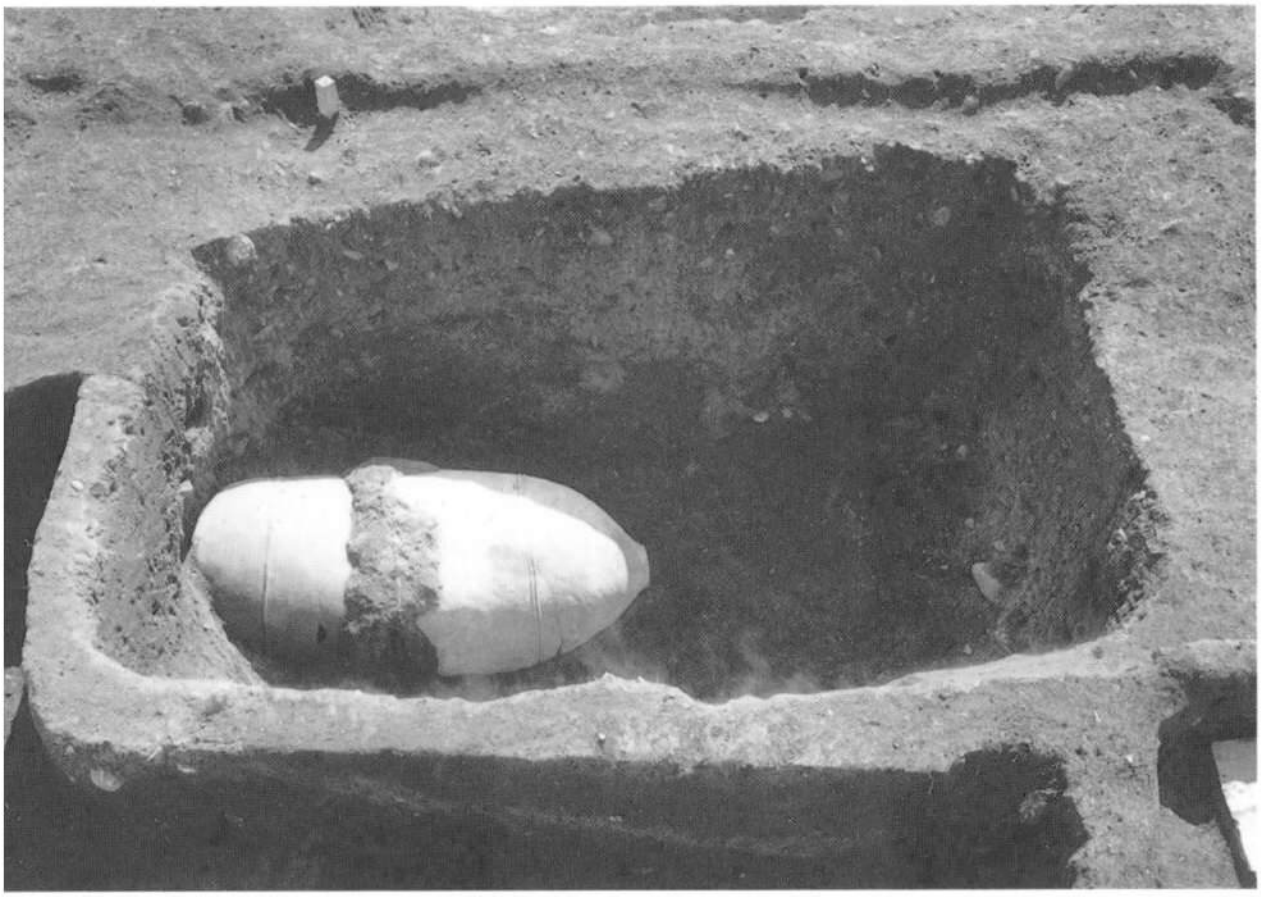
1

2

図　版　15　(1) 26号甕棺墓上層河原石出土状態（南西から）
(2) 26号甕棺墓（北東から）



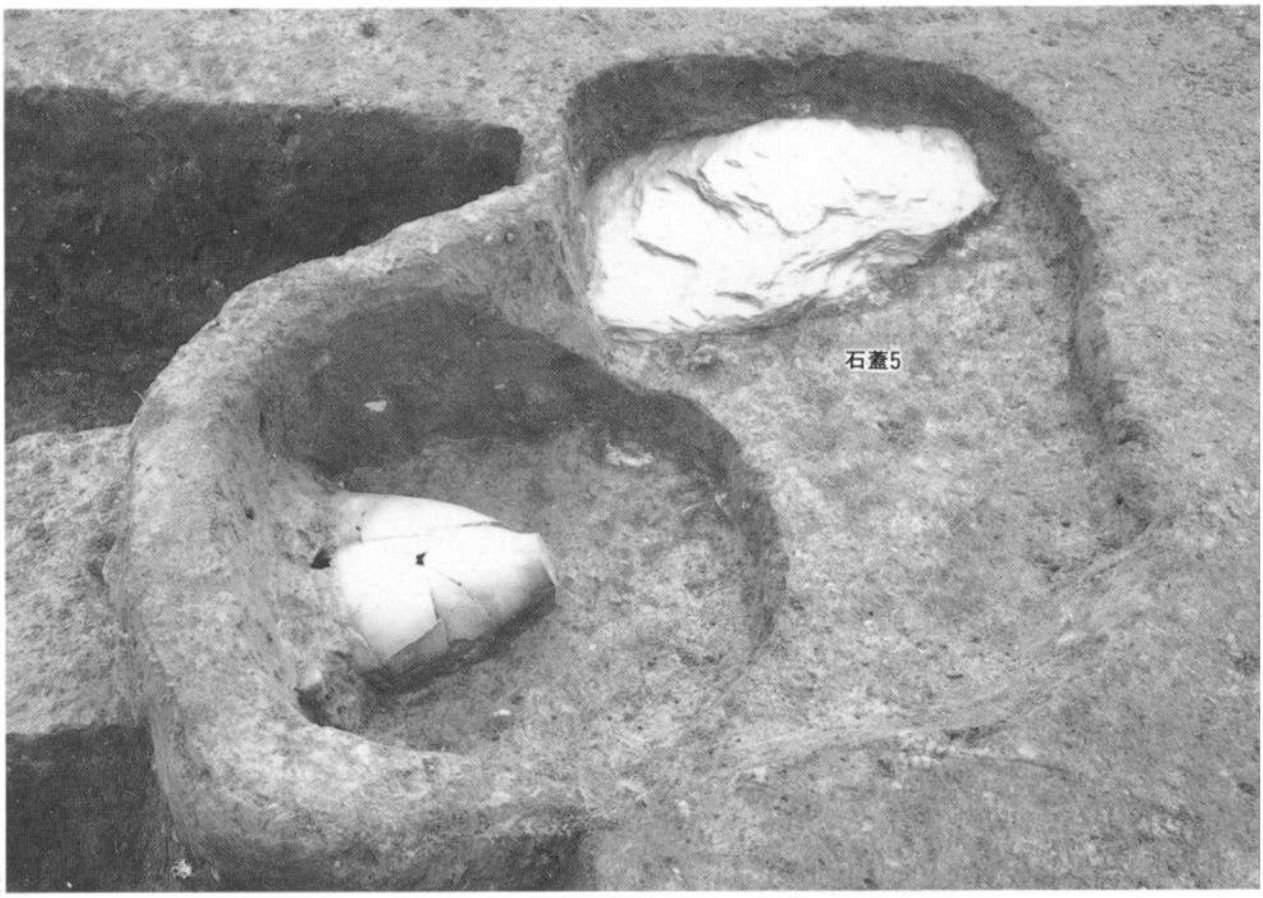
1



2

図　版　16　(1) 28号甕棺墓と19号土壙墓（北西から）

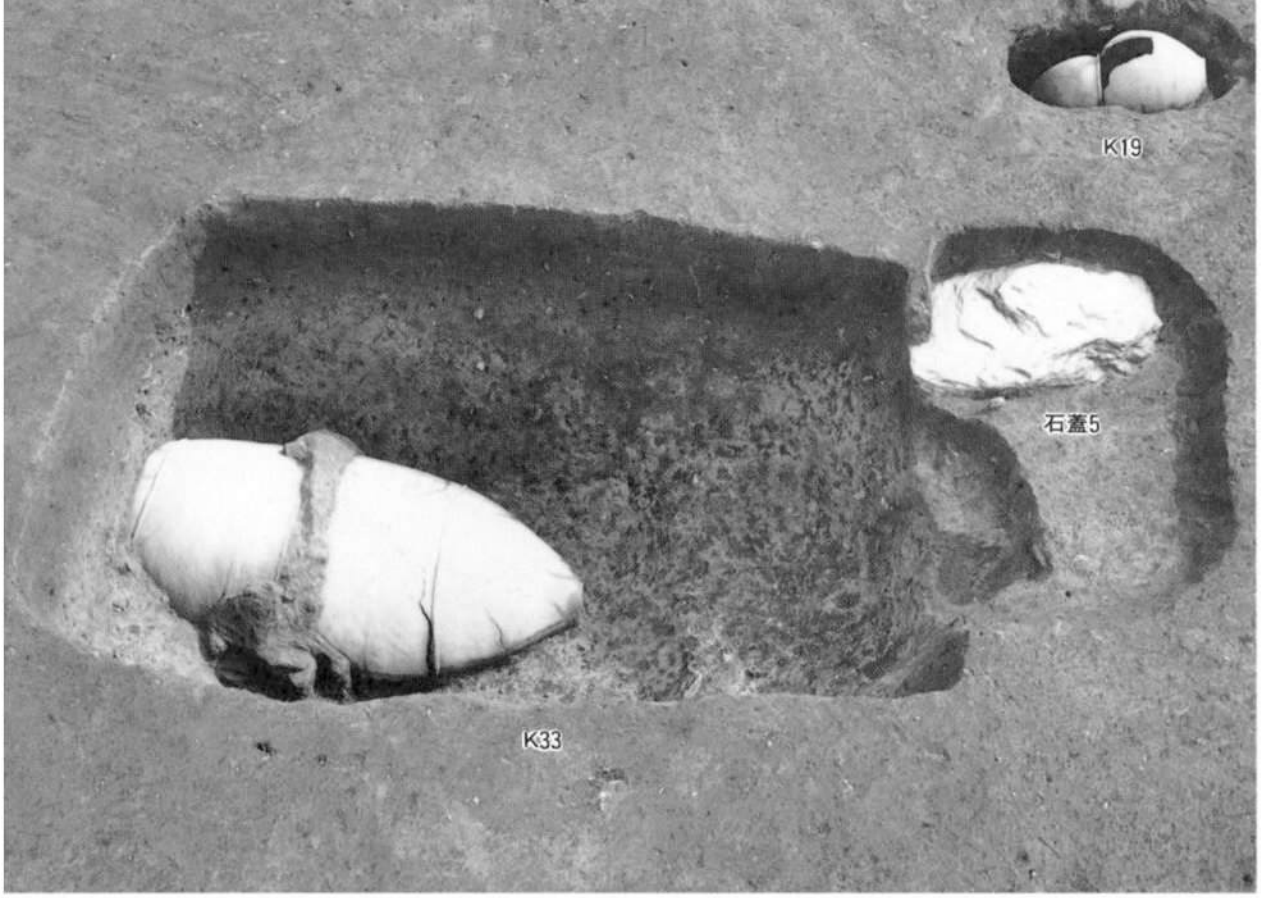
(2) 29号甕棺墓（西北から）



2

図　版　17　(1) 30号甕棺墓（北西から）

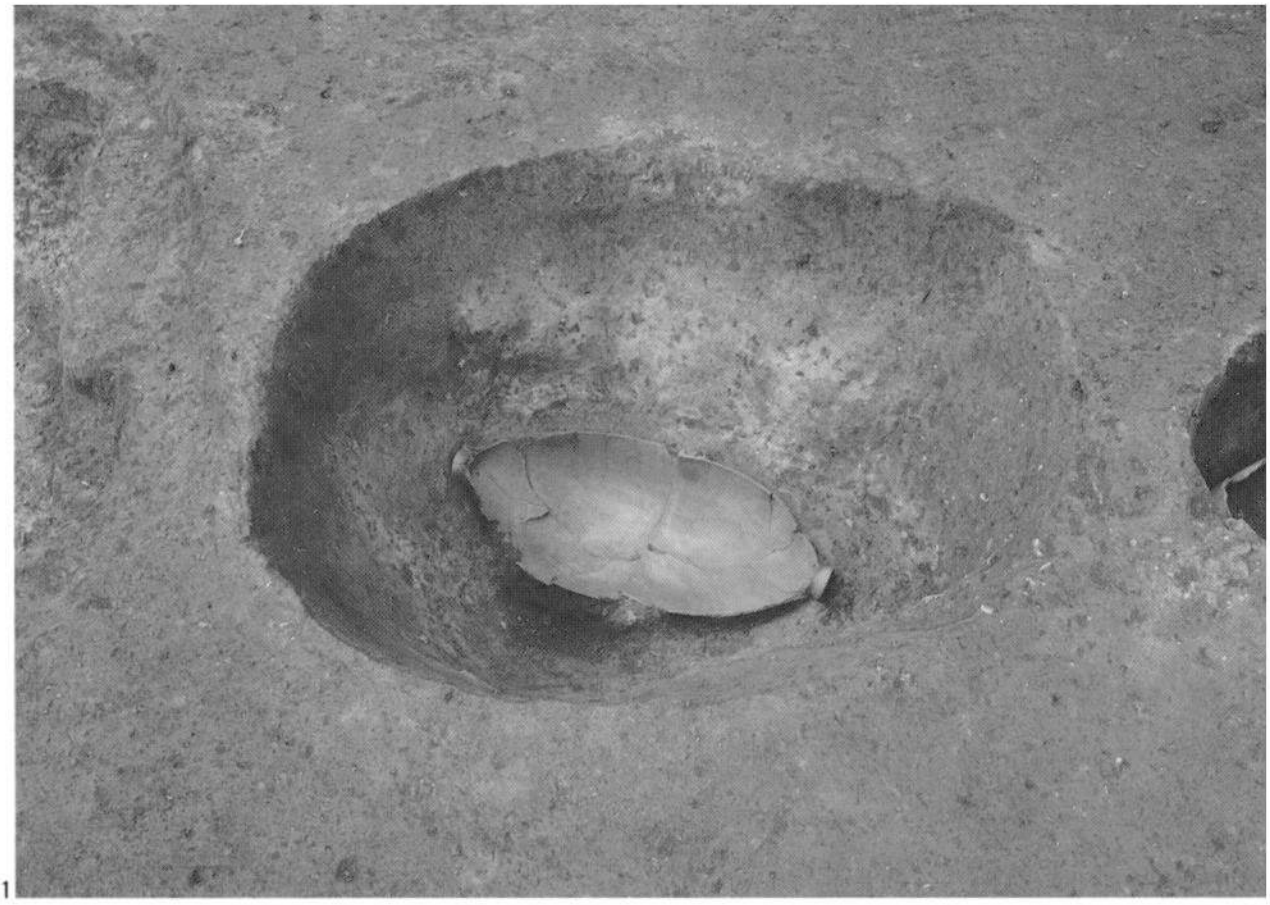
(2) 32号甕棺墓と5号石蓋土壙墓（北西から）



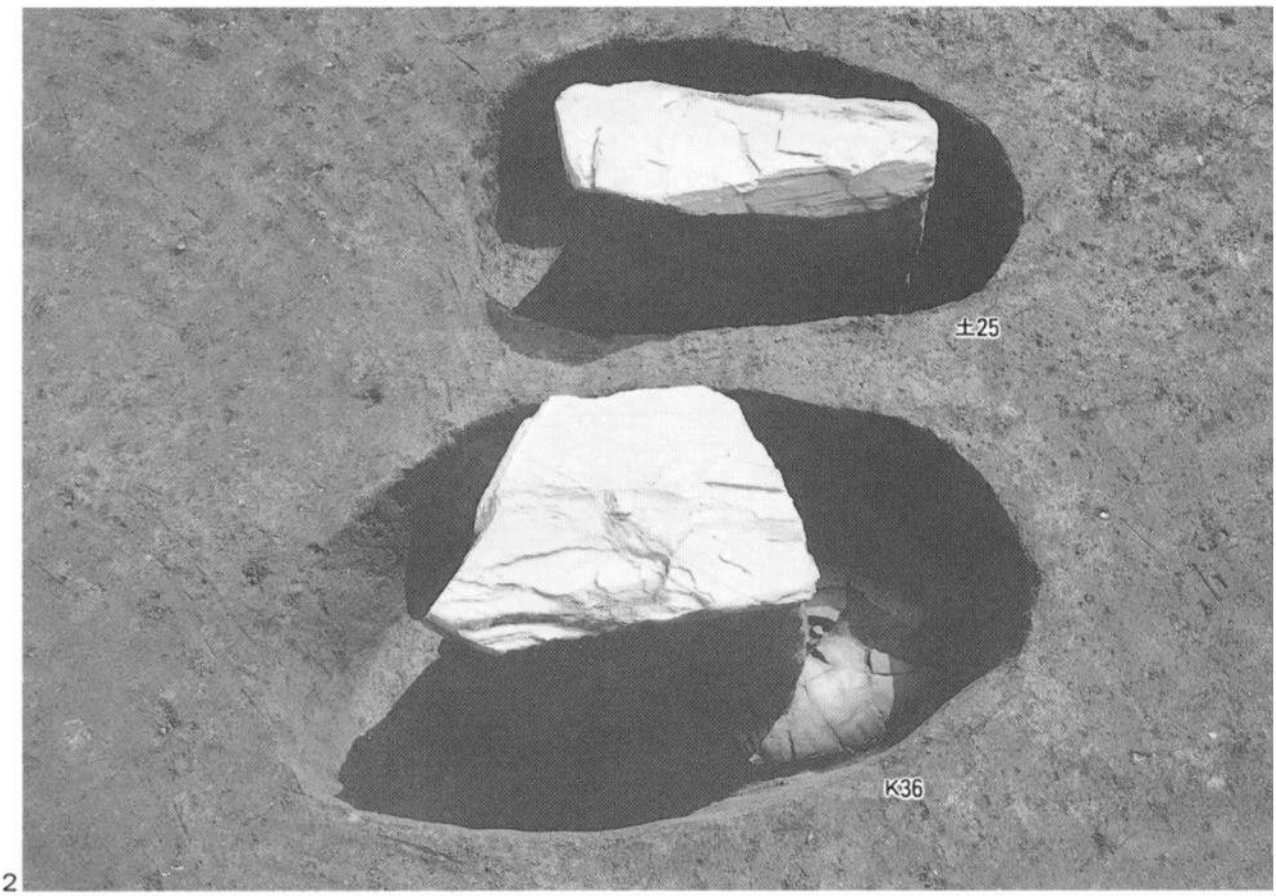
1

2

図　版　18　(1) 33号・19号甕棺墓、5号石蓋土壙墓（北西から）
(2) 34号・5号甕棺墓（北西から）



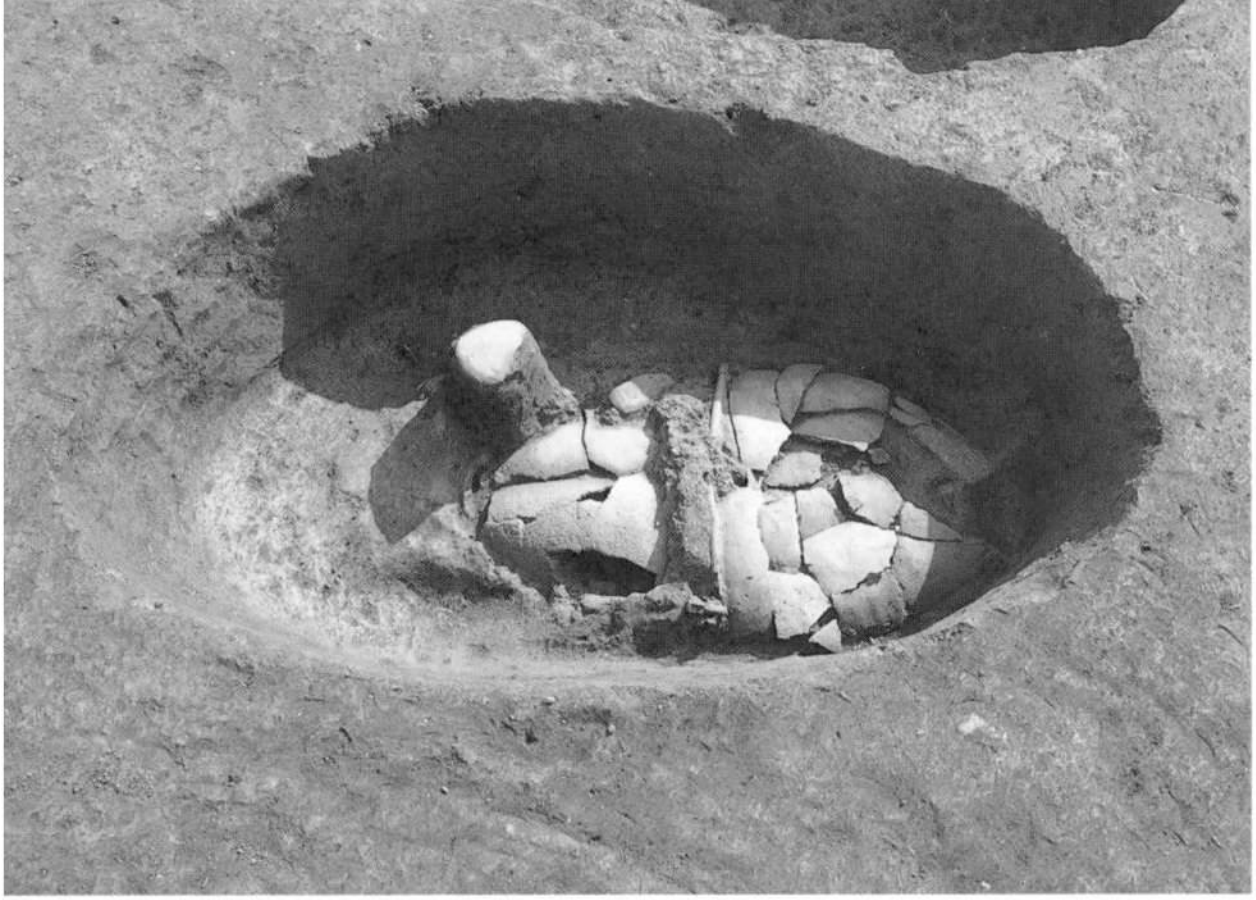
1



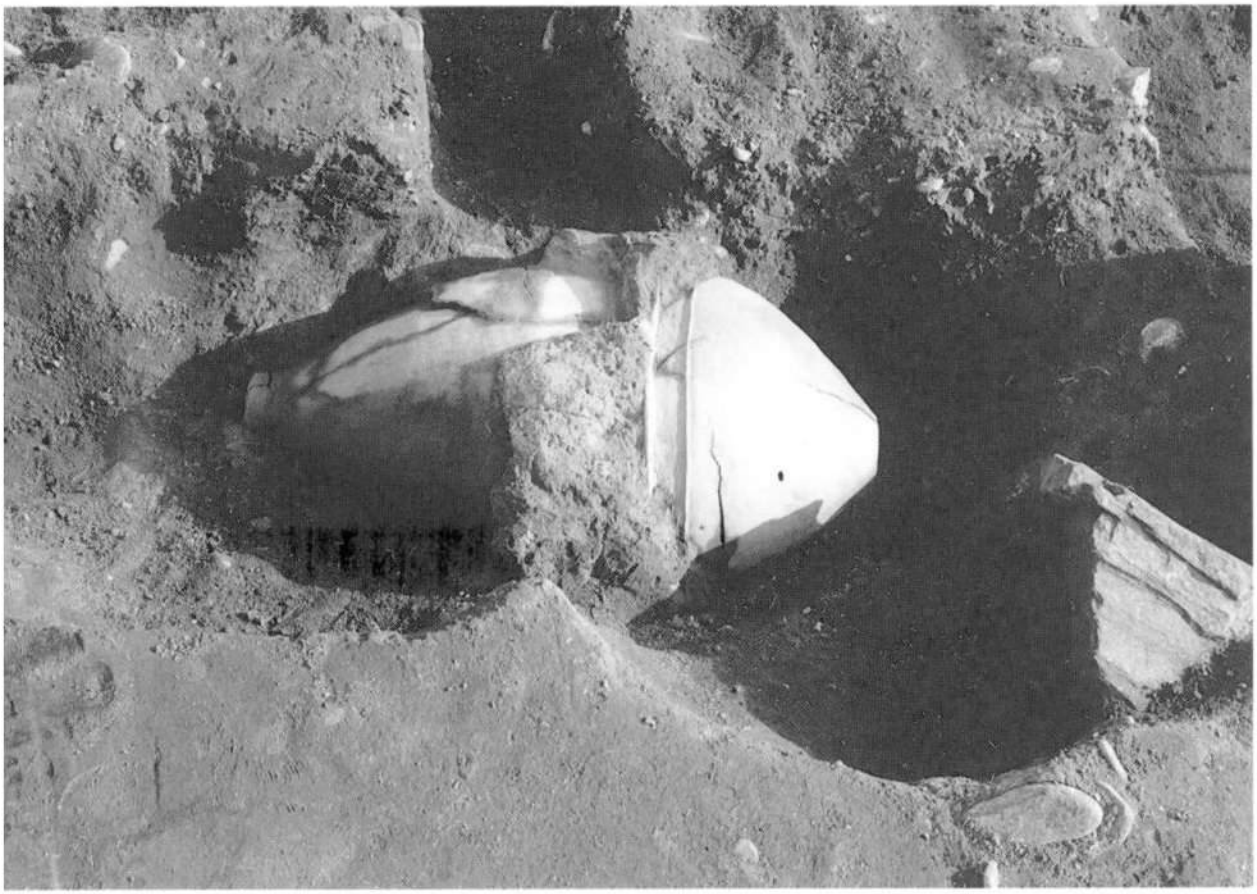
2

図　版　19　(1) 35号甕棺墓（南東から）

(2) 36号甕棺墓標石、25号土壙墓標石（北西から）



1



2

図　版　20　(1) 36号甕棺墓（北西から）

(2) 37号甕棺墓（北から）

1

2

図　版　21　(1) 1 号木棺墓（北西から）
(2) 2 号木棺墓（北西から）

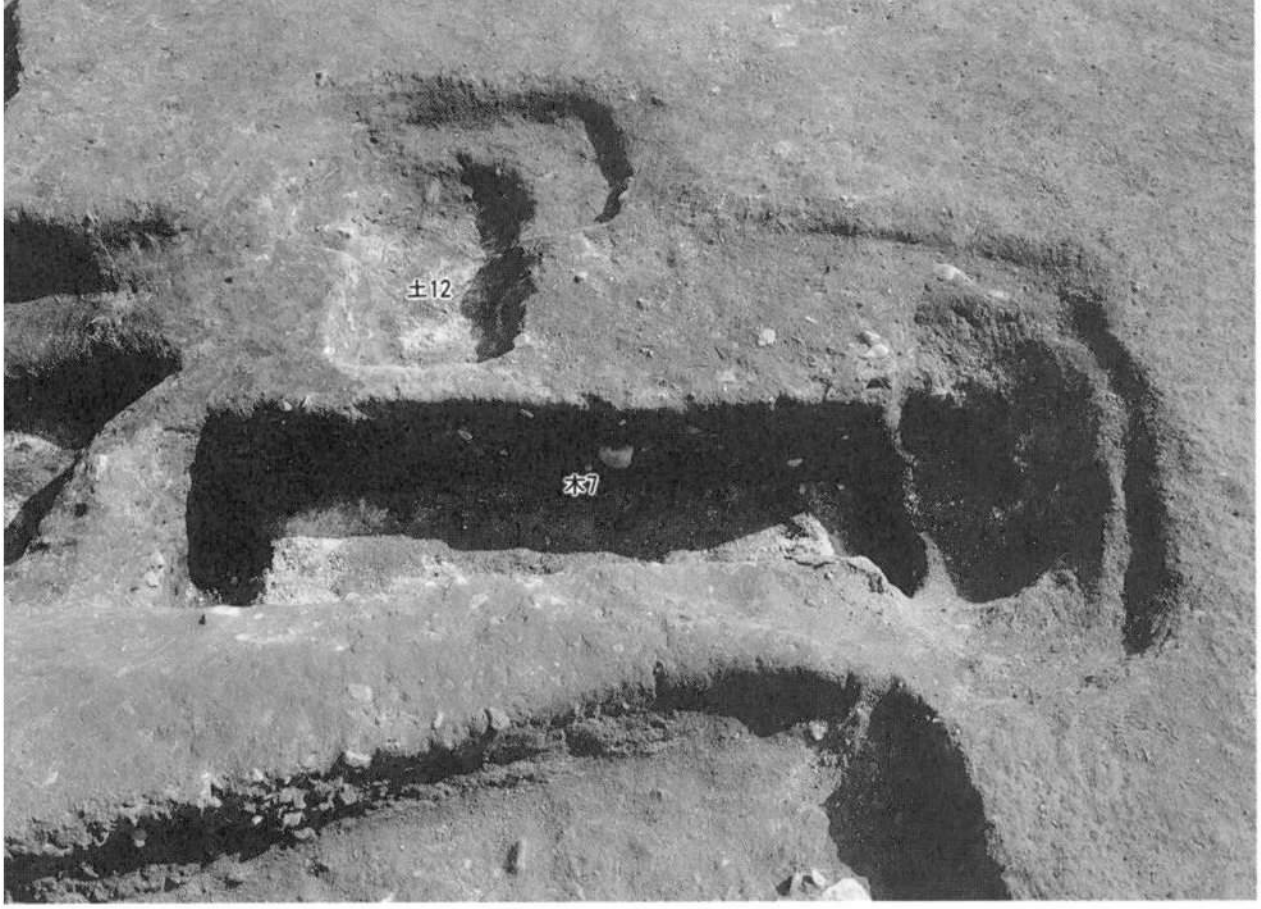
図　版　22　(1) 3号木棺墓（北西から）
(2) 4号木棺墓（南東から）

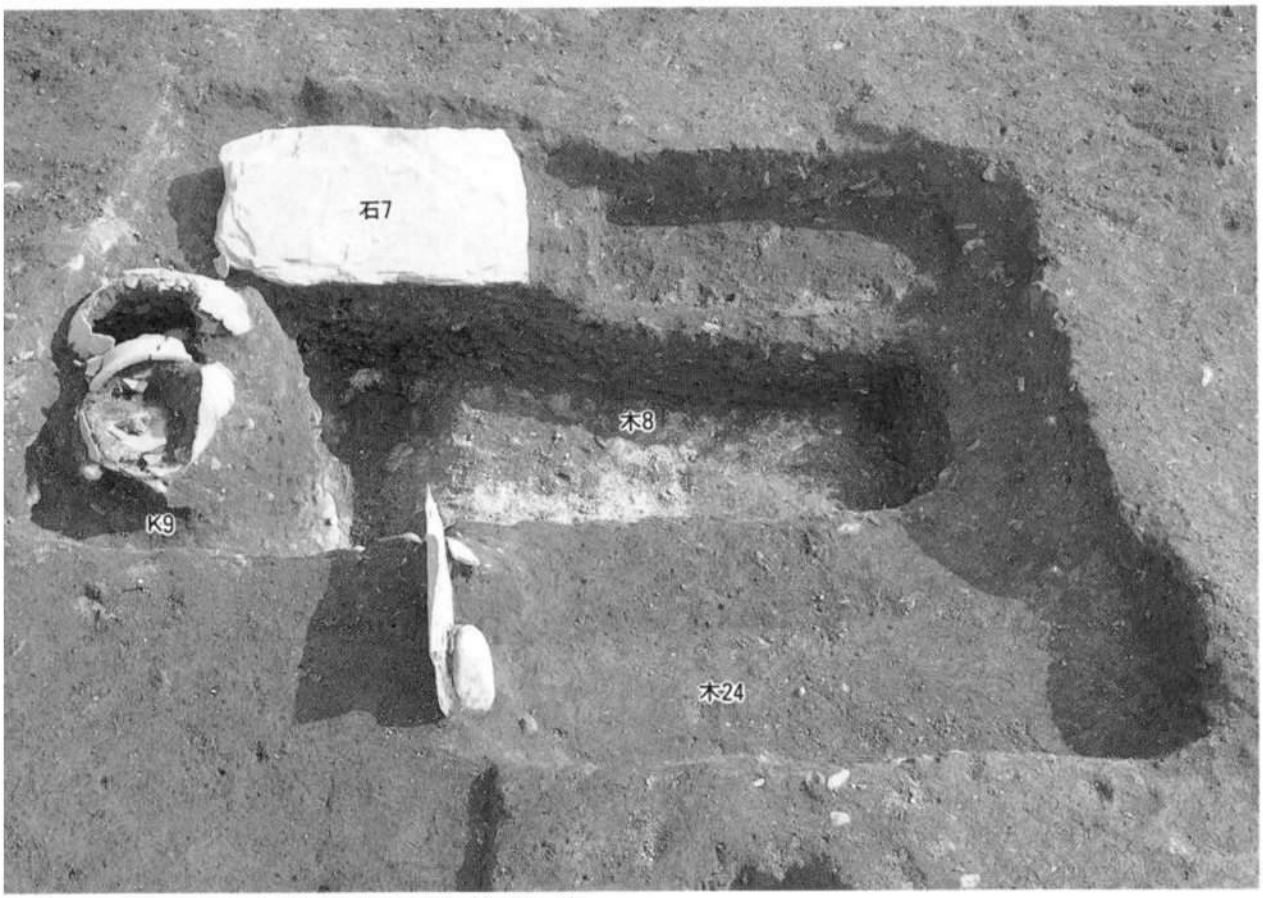
1

2

図　版　23　(1) 5号・25号木棺墓、10号土壙墓（南東から）

(2) 6号・31号木棺墓、38号土壙墓、15号甕棺墓（北西から）





2

図　版　24　(1) 7号木棺墓、12号土壙墓（北西から）

(2) 8号・24号木棺墓、7号石蓋土壙墓、9号甕棺墓（北西から）

1

2

図　版　25　(1) 2号・9号木棺墓（北西から）

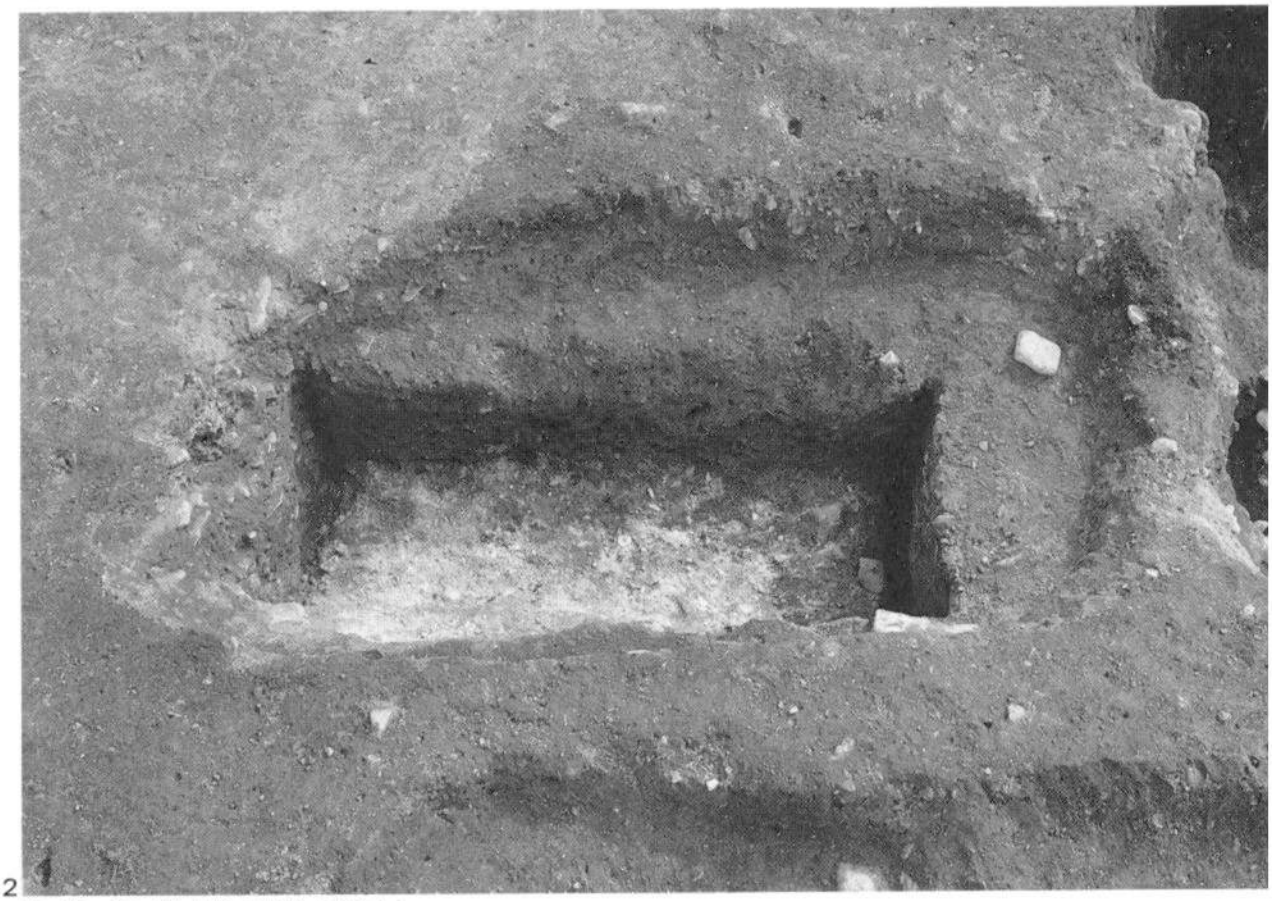
(2) 11号木棺墓、29号土壙墓（北西から）

1

2

図　版　26　(1) 12号木棺墓（北西から）
(2) 13号木棺墓（南東から）

1



2

図　版　27　(1) 14号木棺墓（西から）
(2) 15号木棺墓（北西から）

1

2

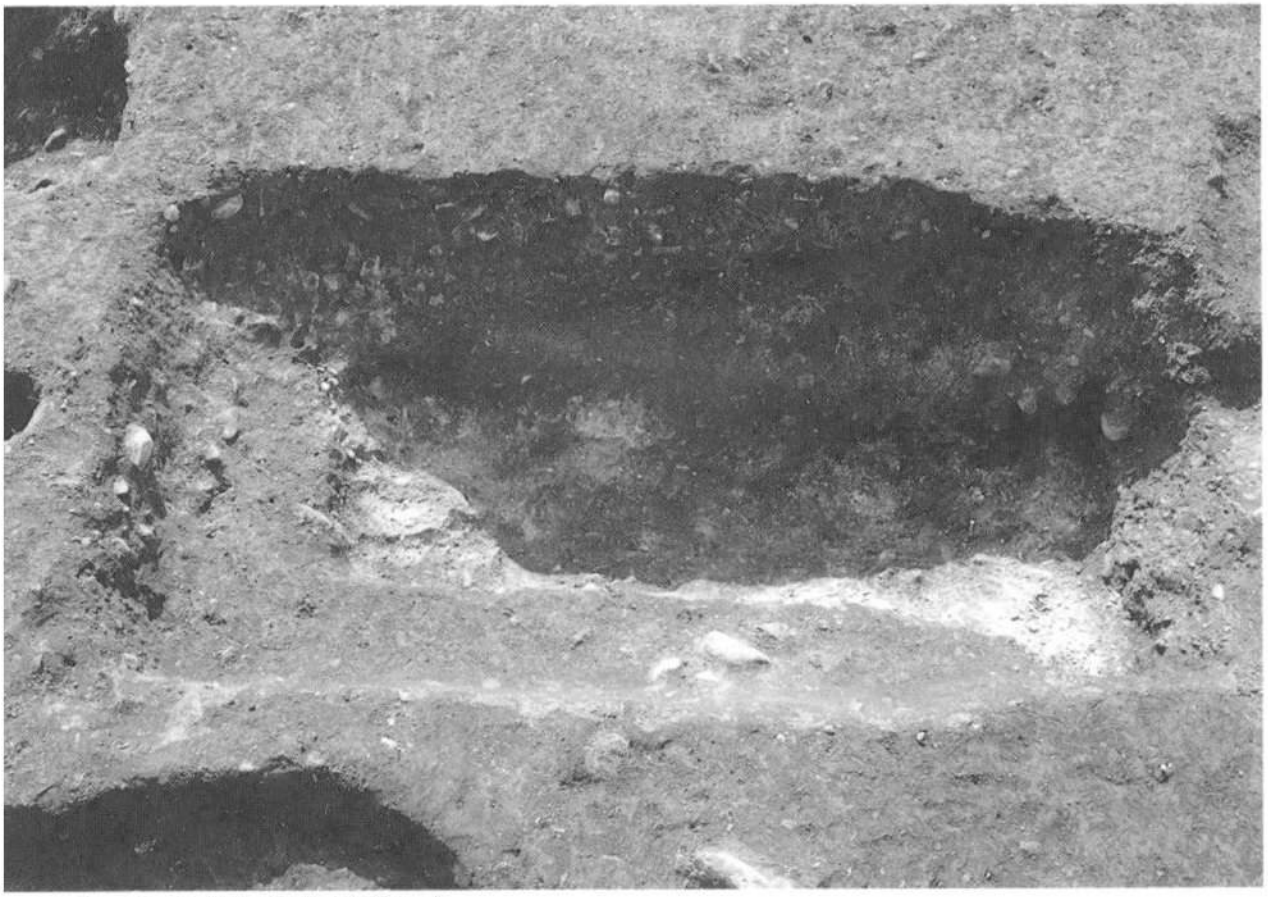
図　版　28　(1) 16号木棺墓（南東から）
(2) 17号木棺墓（北西から）

1

2

図　版　29　(1) 19号木棺墓（西から）
(2) 20号木棺墓（東南から）

1



2

図　版　30　(1) 21号木棺墓（北西から）
(2) 22号木棺墓（北西から）

1

2

図　版　31　(1) 23号木棺墓（北西から）
(2) 26号木棺墓（北西から）

1

2

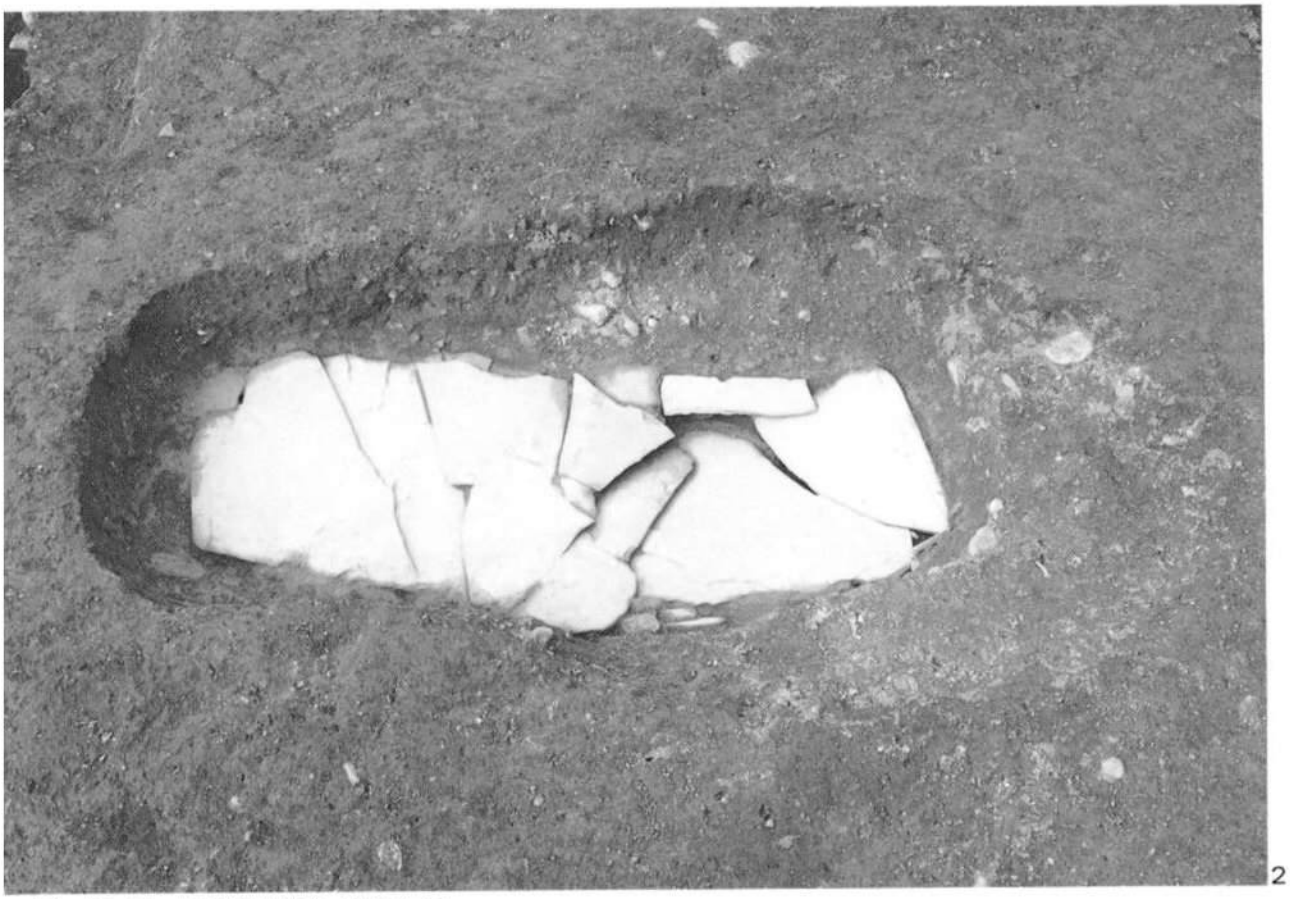
図　版　32　(1) 27号木棺墓（北西から）
(2) 28号木棺墓（西北から）

1

2

図　版　33　(1) 29号木棺墓、39号土壙墓、1号箱式石棺墓棺材除去後（南西から）
(2) 29号木棺墓鏡出土状態

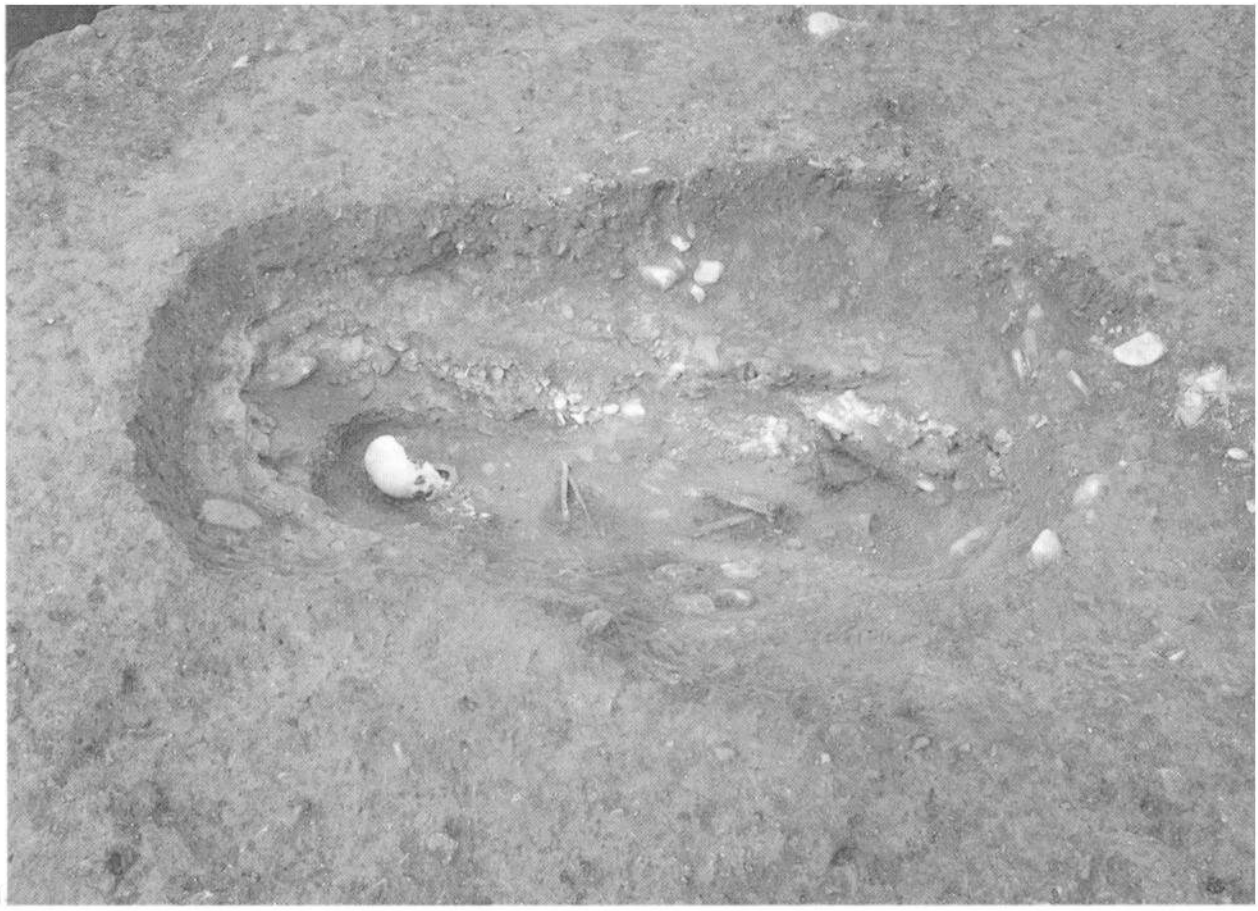
1



2

図　版　34　(1) 33号木棺墓（北西から）

(2) 1号石蓋土壙墓（南東から）



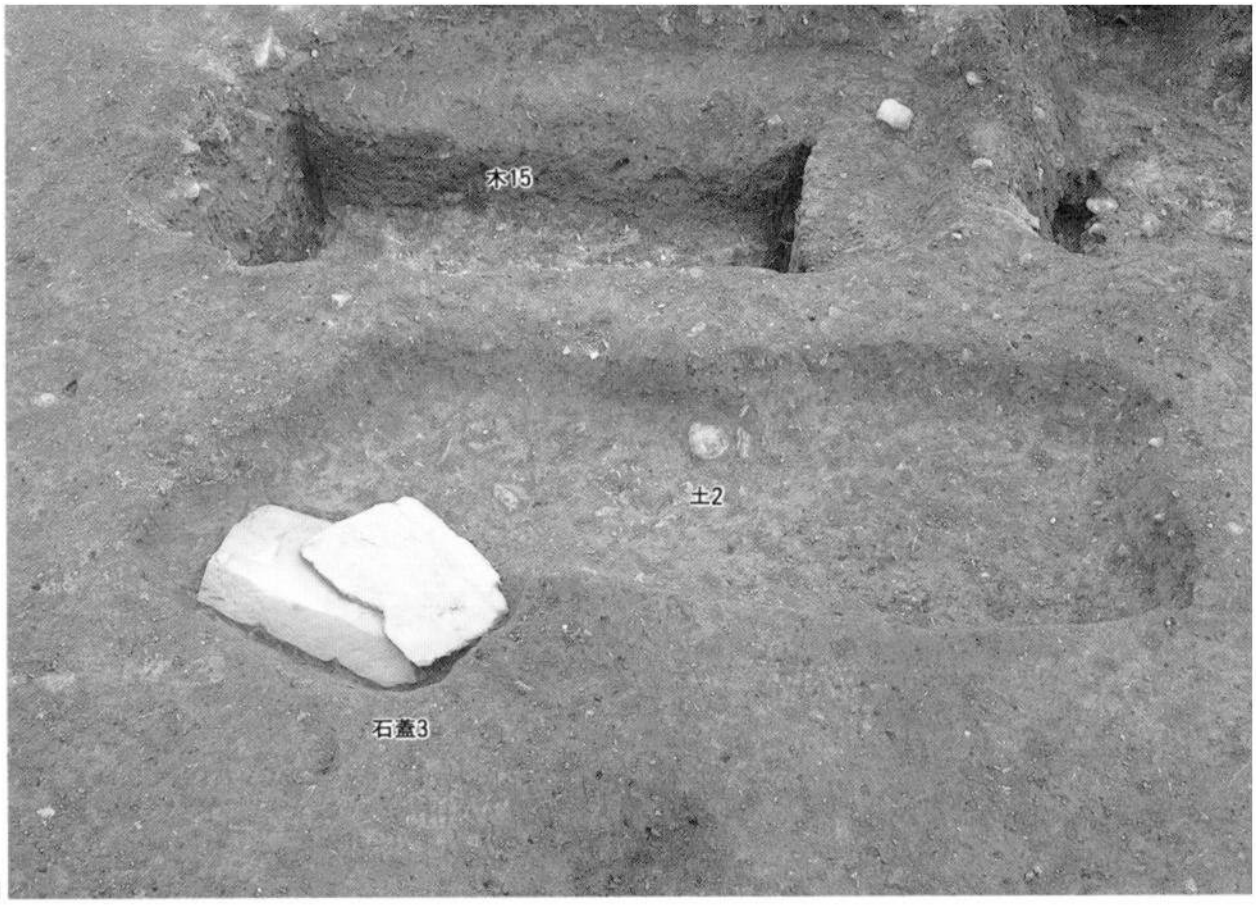
1

2

図　版　35　(1) 1号石蓋除去後の状態（南東から）

(2) 1号石蓋土壙墓人骨出土状態（東北から）

図　版　36　(1) 2号石蓋土壙墓（北西から）
(2) 2号石蓋土壙墓除去後の状態（北西から）



1

2

図　版　37　(1) 3号石蓋土壙墓、2号土壙墓、15号木棺墓（北西から）
(2) 3号石蓋除去後の状態

1

2

図　版　38　(1) 4 号石蓋土壙墓（北西から）

(2) 4 号石蓋除去後の状態

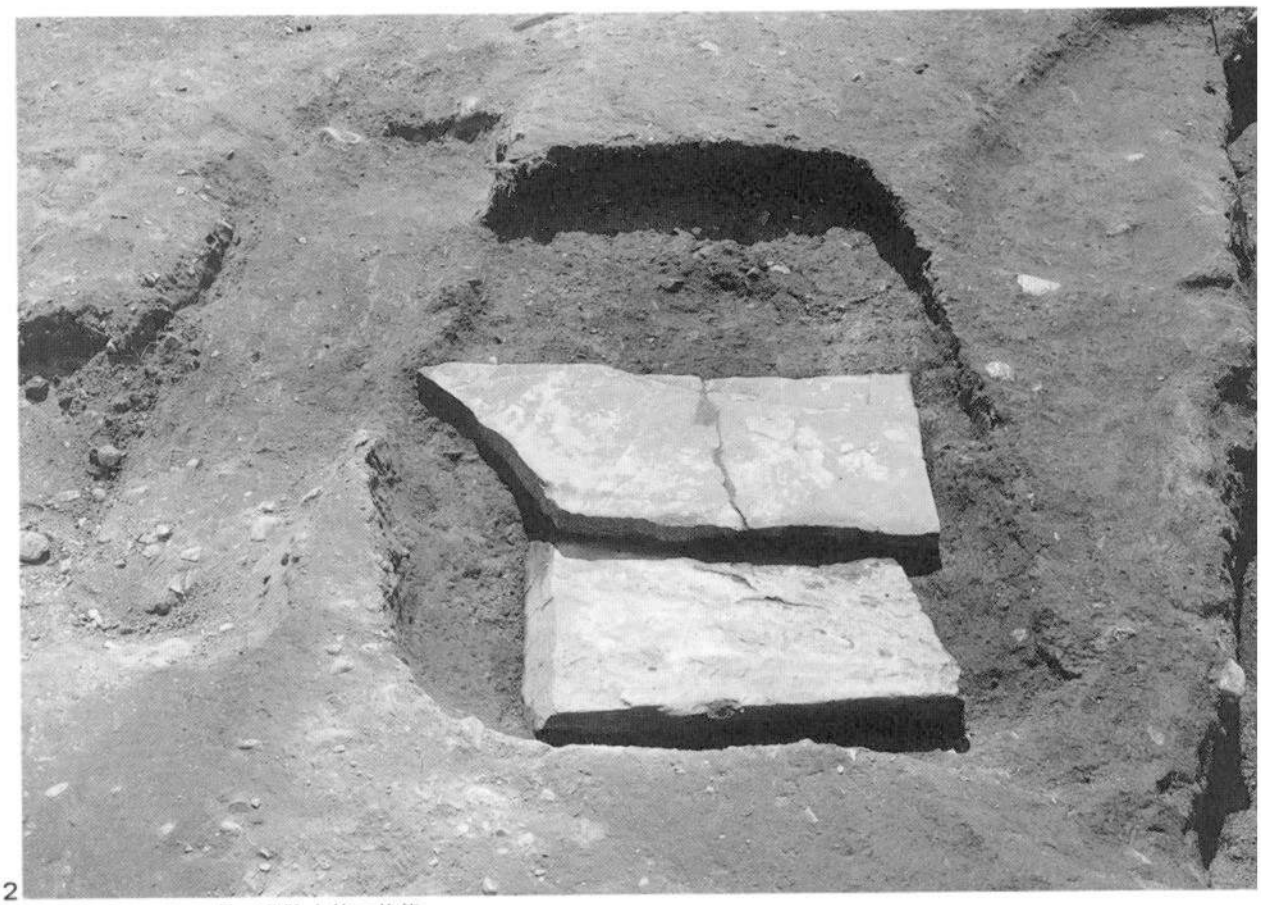
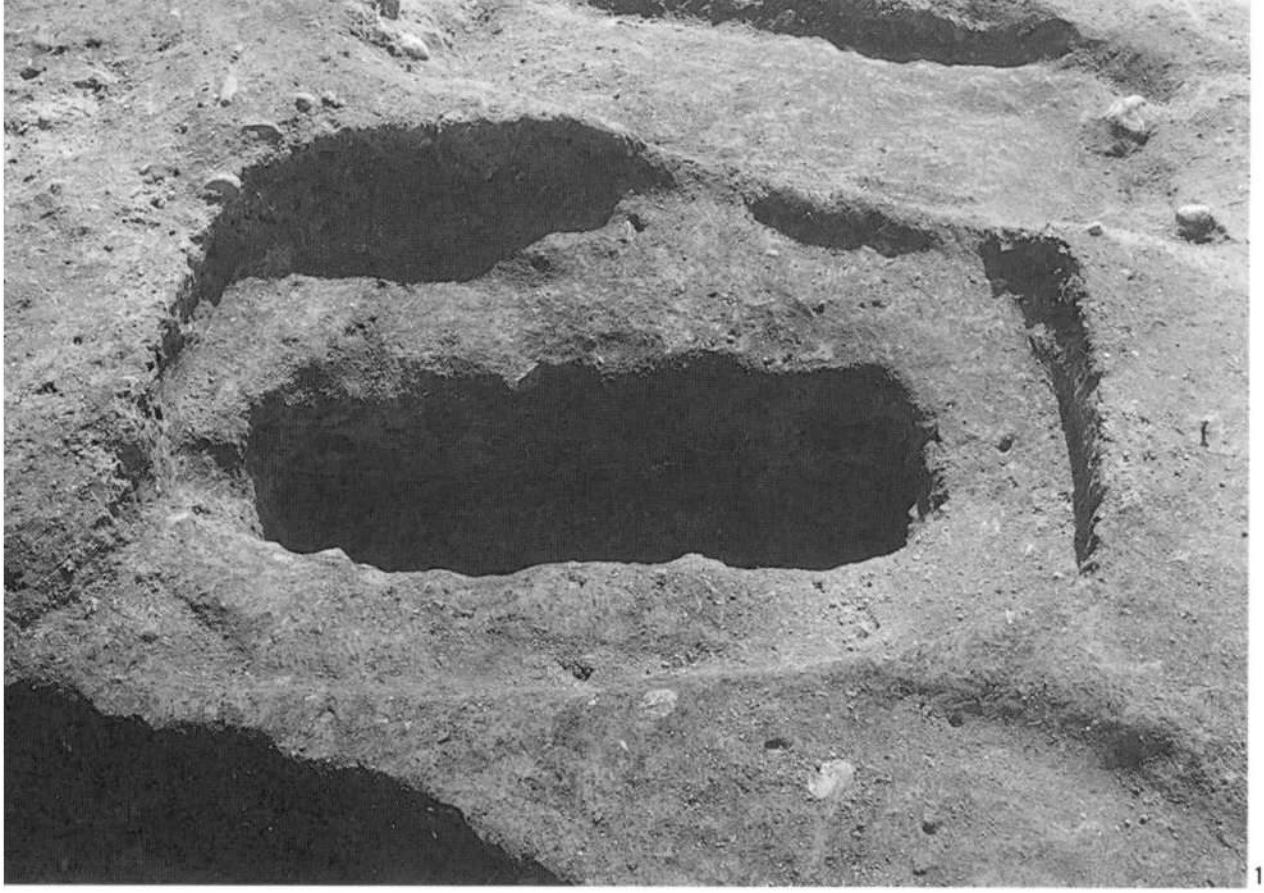


図　版　39　(1) 5号石蓋除去後の状態
(2) 8号石蓋土壙墓（北東から）



1

2

図　版　40　(1) 8号石蓋除去後の状態（西北から）
(2) 9号石蓋土壙墓（西北から）

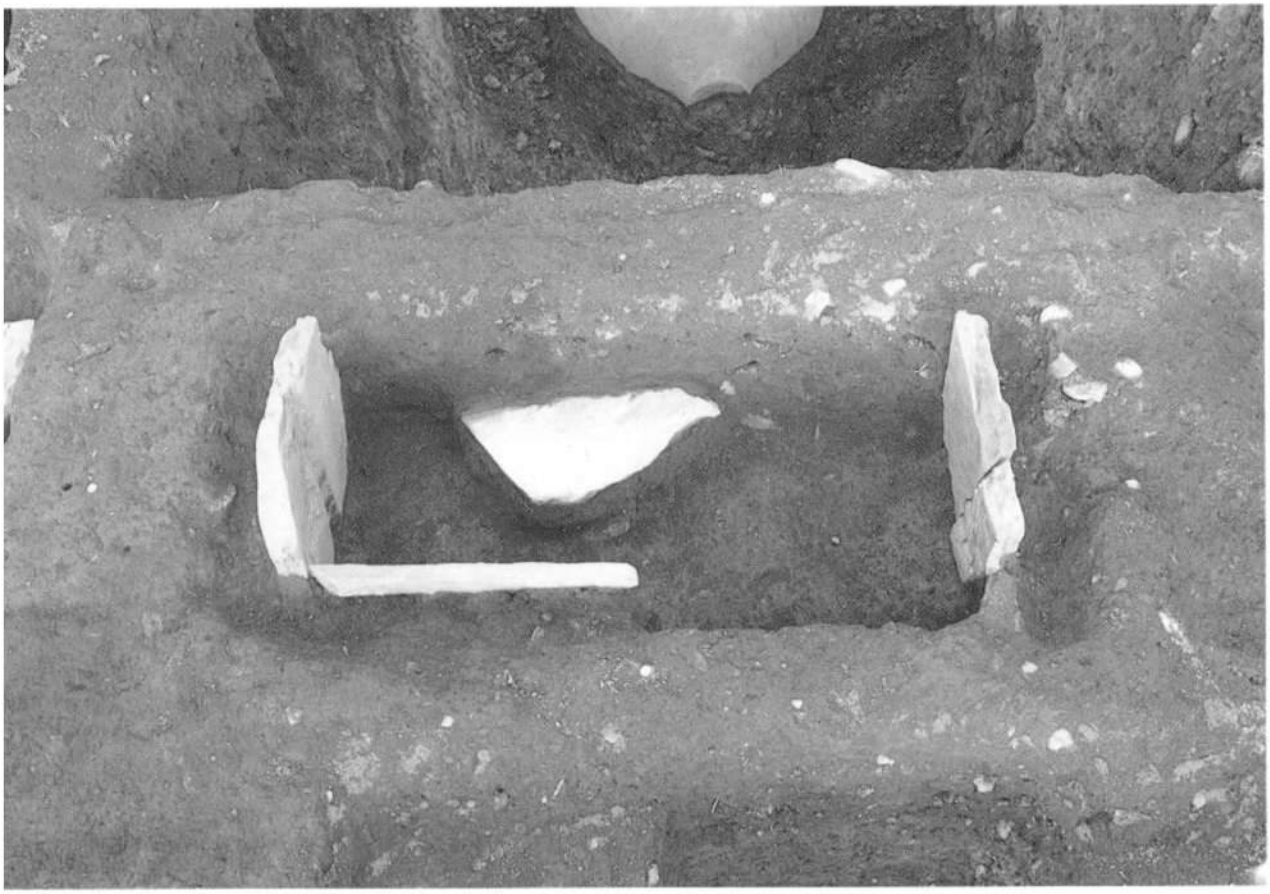
1

2

図　版　41　(1) 1号箱式石棺墓、16号・20号甕棺墓（北西から）

(2) 1号箱式石棺墓石蓋除去後と16号・20号甕棺墓（北西から）

1



2

図　版　42　(1) 1号箱式石棺内鉄器出土状態
(2) 2号箱式石棺墓（南西から）

1

2

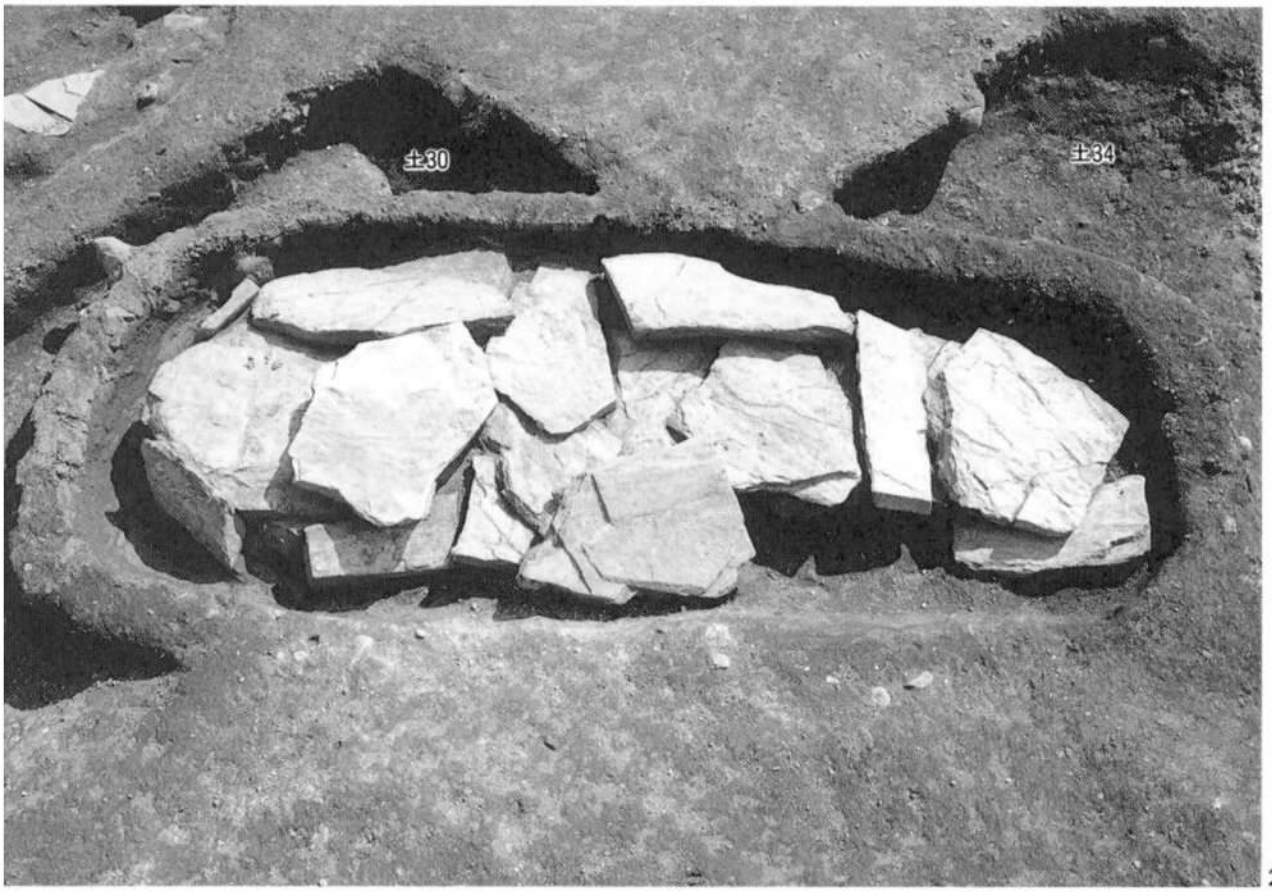
図　版　43　(1) 3号箱式石棺墓、24号甕棺墓、12号・30号木棺墓（北西から）
(2) 3号箱式石棺墓石蓋除去後の状態

1

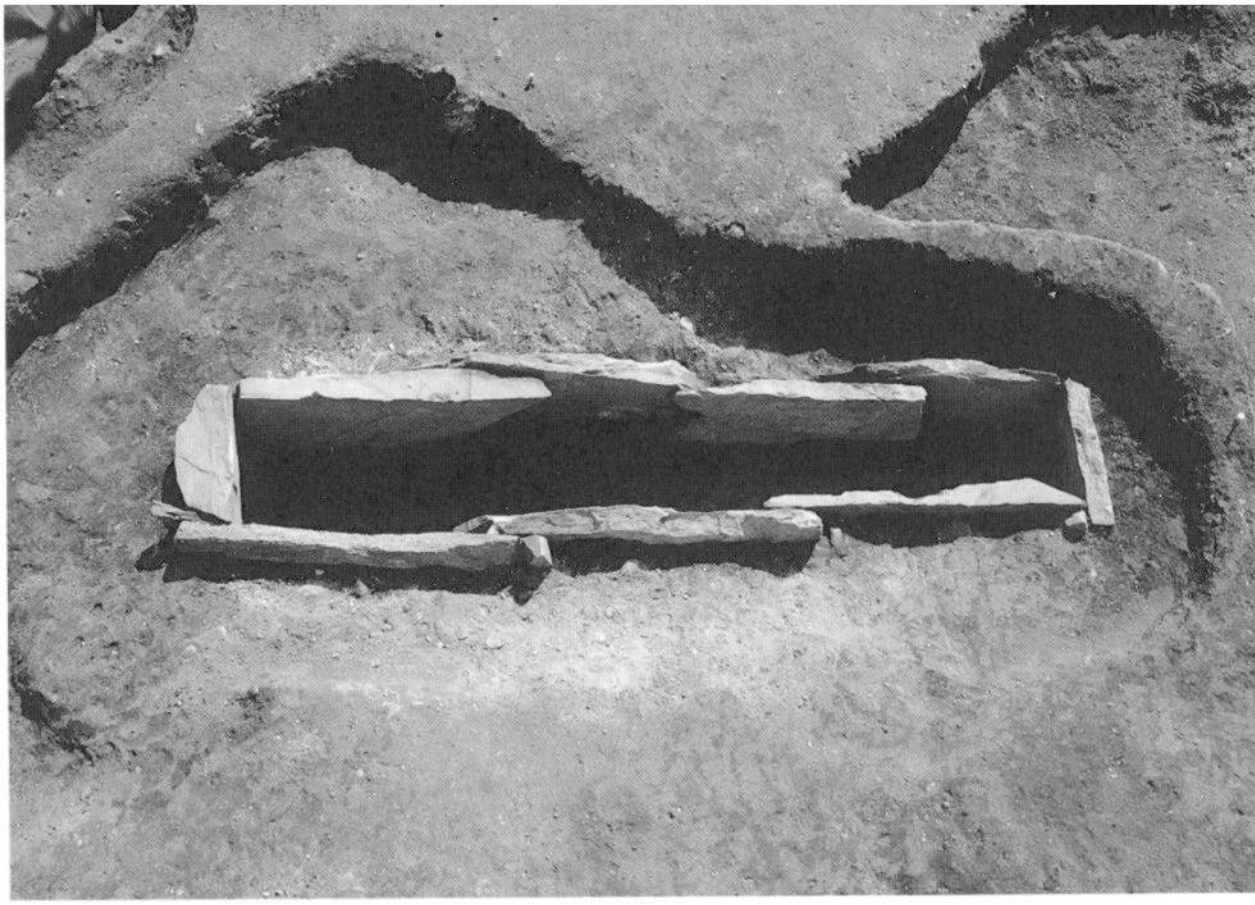
図　版　44

(1) 3号箱式石棺墓人骨出土状態（北東から）

(2) 4号箱式石棺墓、30号・34号土壙墓（北から）

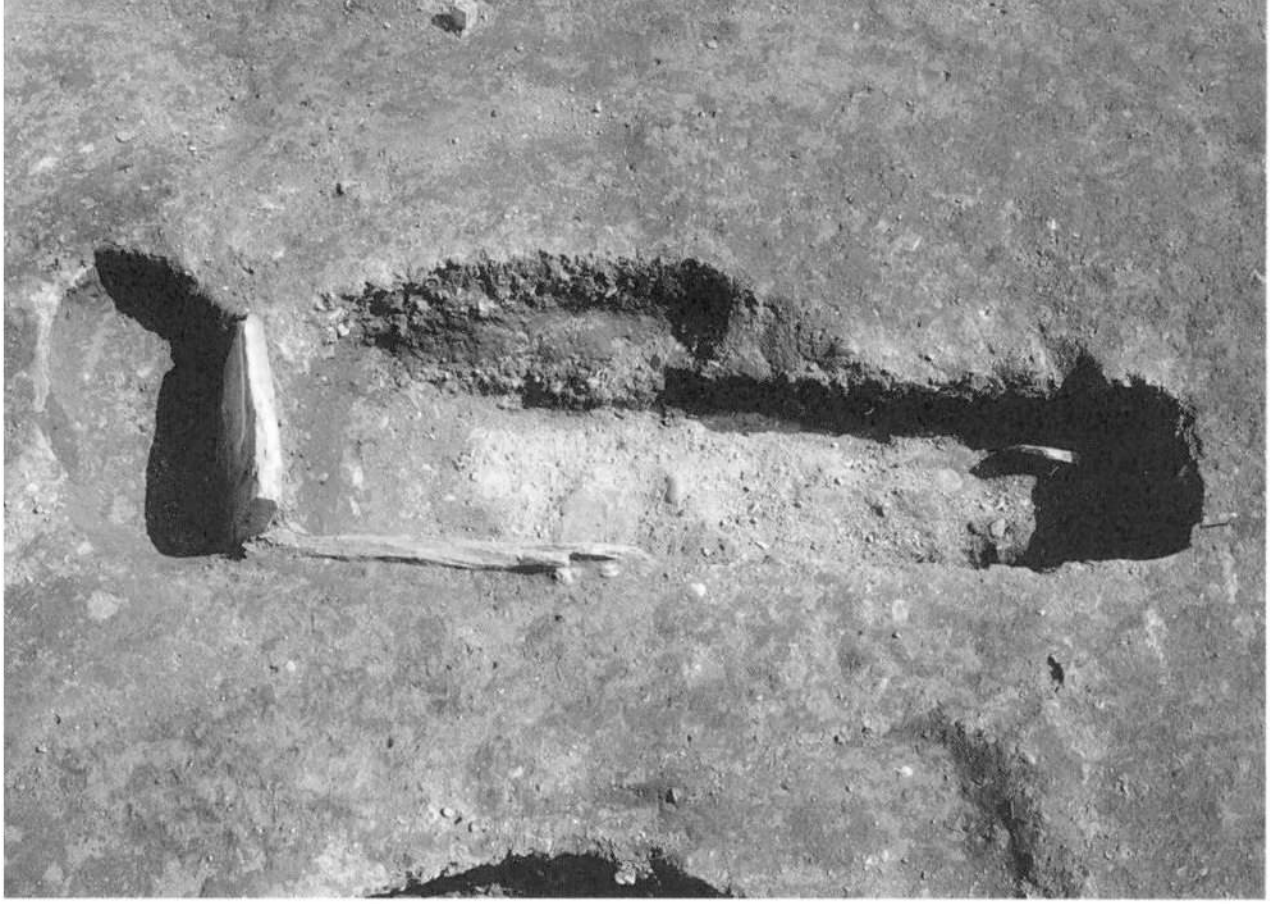


2



2

図　版　45　(1) 4号箱式石棺墓石蓋除去後の状態（北から）
(2) 5号・6号箱式石棺墓、28号木棺墓（西北から）



1

2

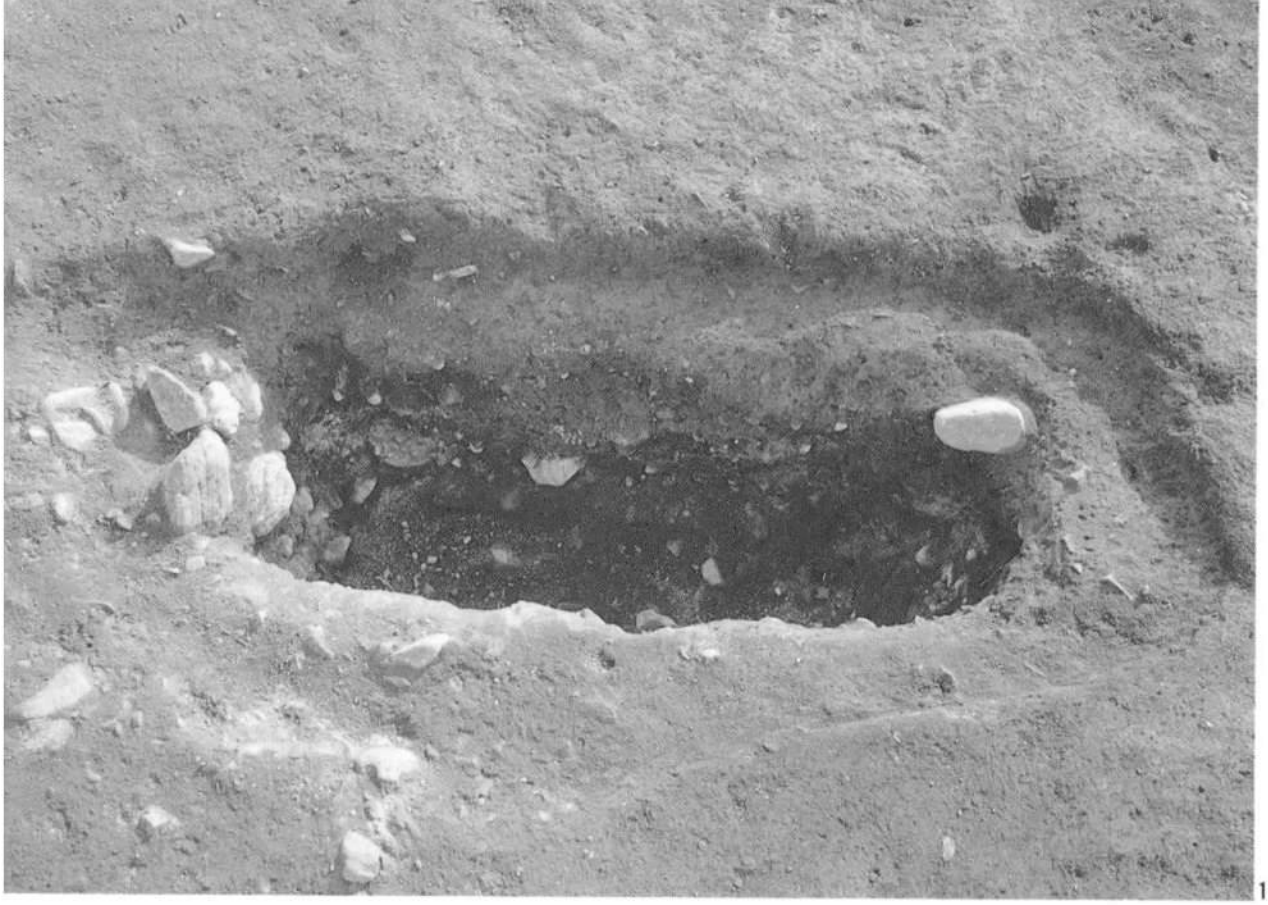
図　版　46　(1) 7号箱式石棺墓（北西から）

(2) 8号箱式石棺墓、32号木棺墓、38号甕棺墓（北西から）

1

2

図　版　47　(1) 1号土壙墓（西北から）
(2) 4号・9号土壙墓（南東から）

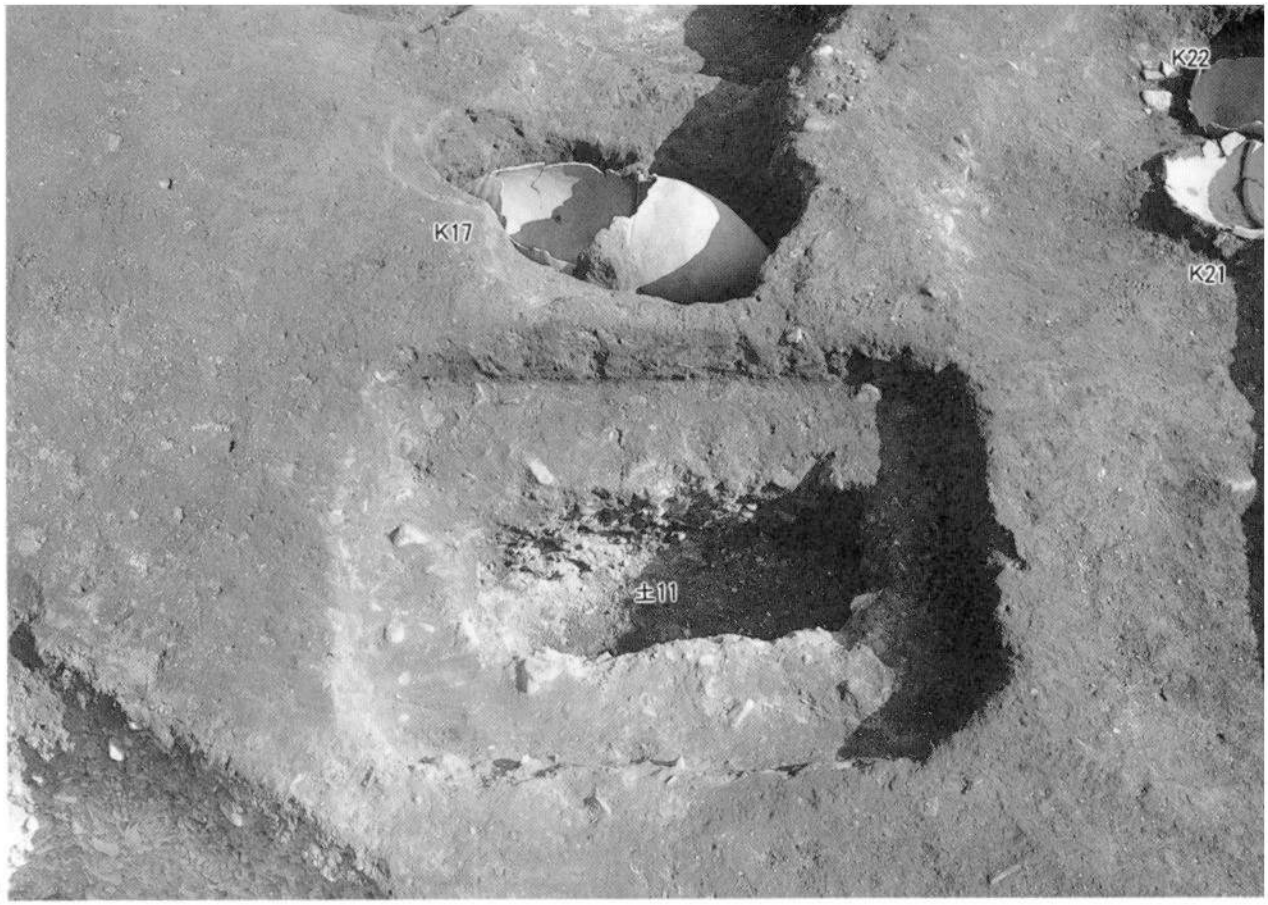


1

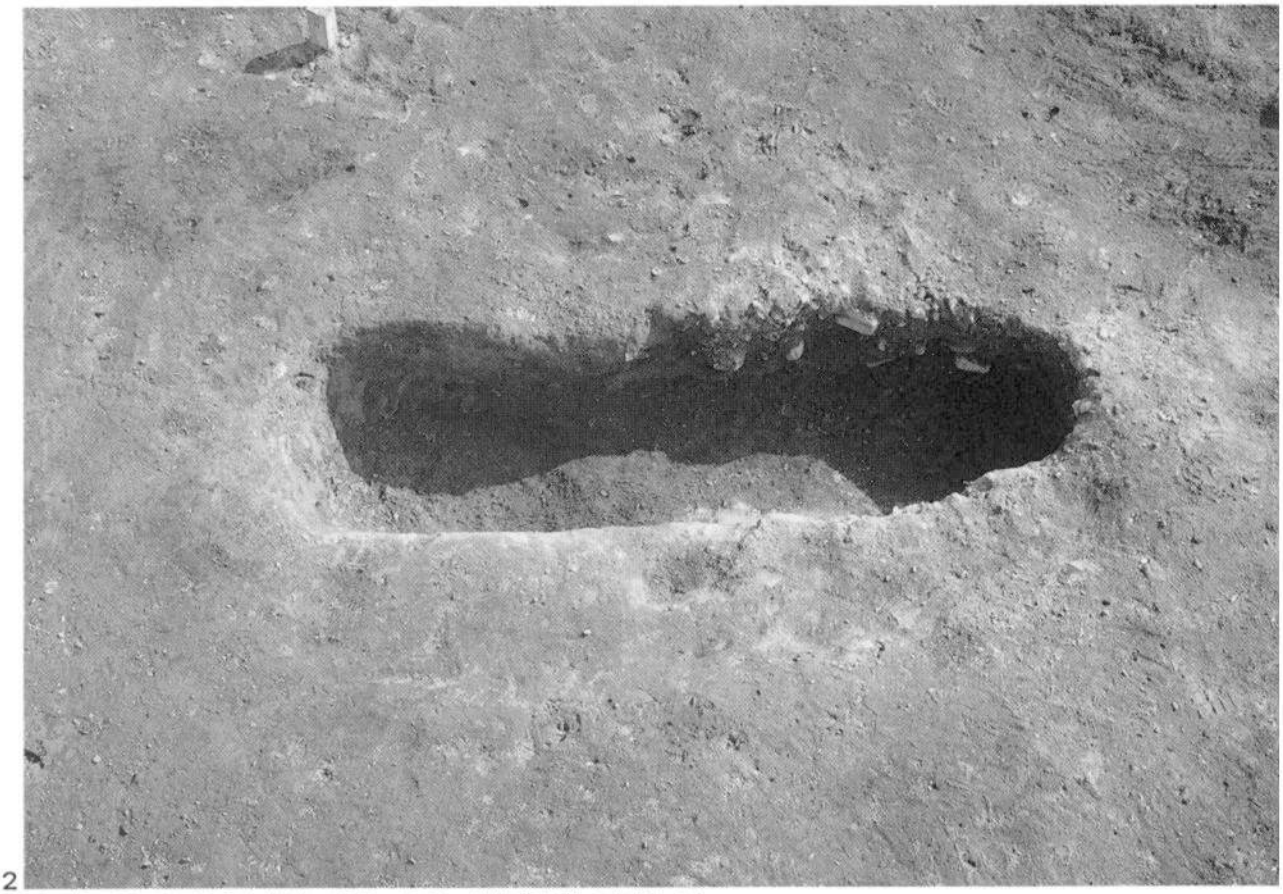
2

図　版　48　(1) 5号土壙墓（北から）

(2) 7号・8号土壙墓（北西から）



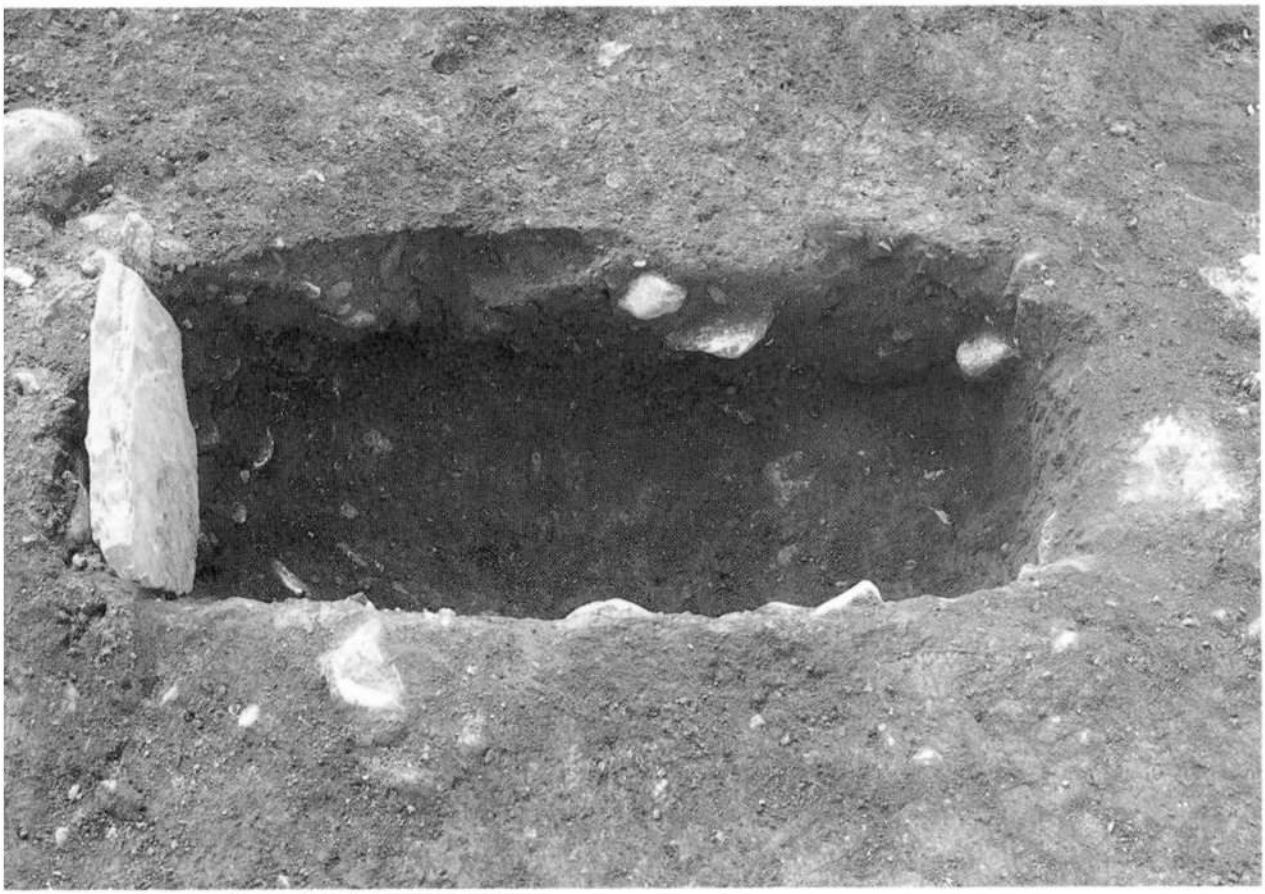
1



2

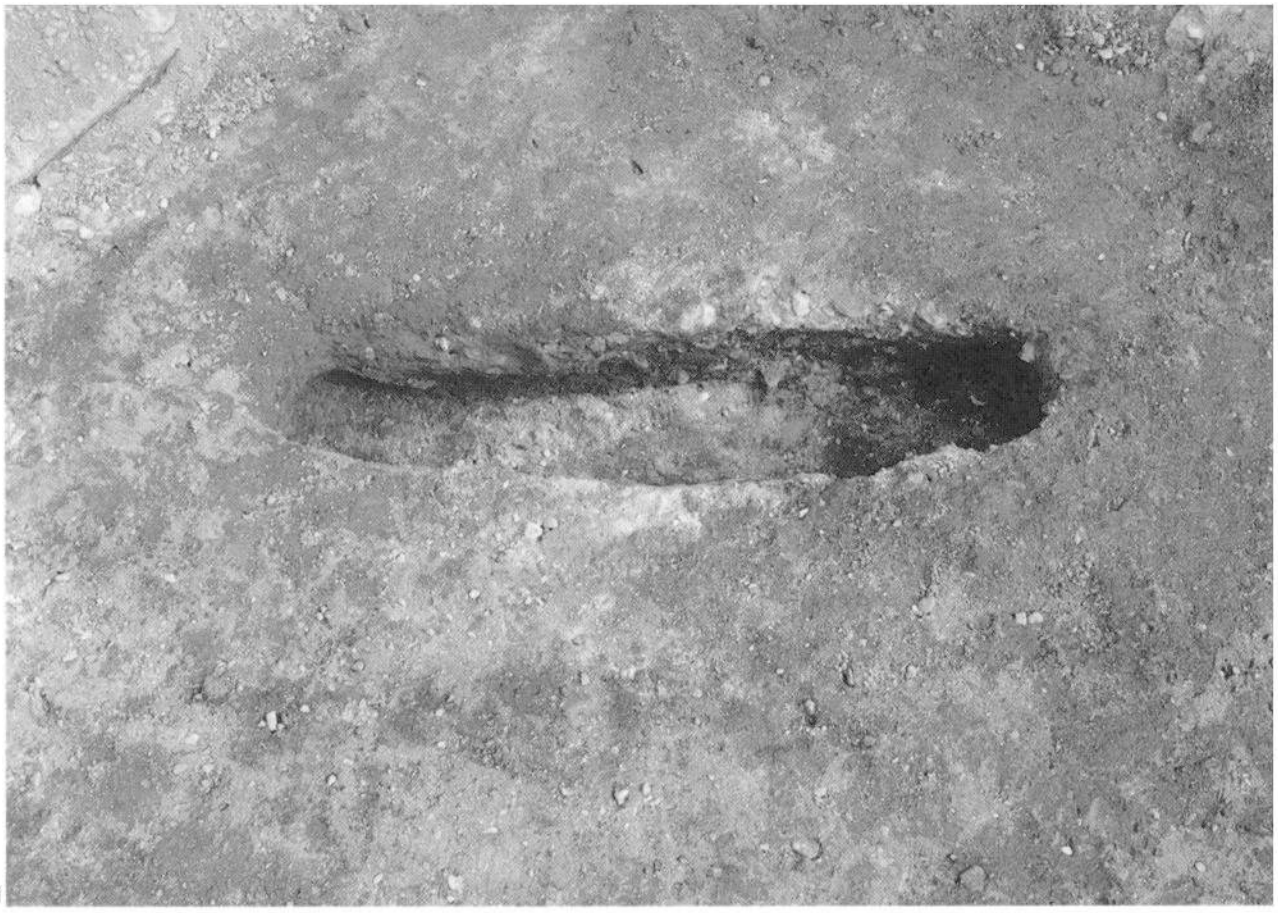
図　版　49　(1) 11号土壙墓、17号・21号・22号甕棺墓（北西から）
(2) 13号土壙墓（北西から）

1



2

図　版　50　(1) 14号・24号土壙墓（北西から）
(2) 16号土壙墓（北東から）

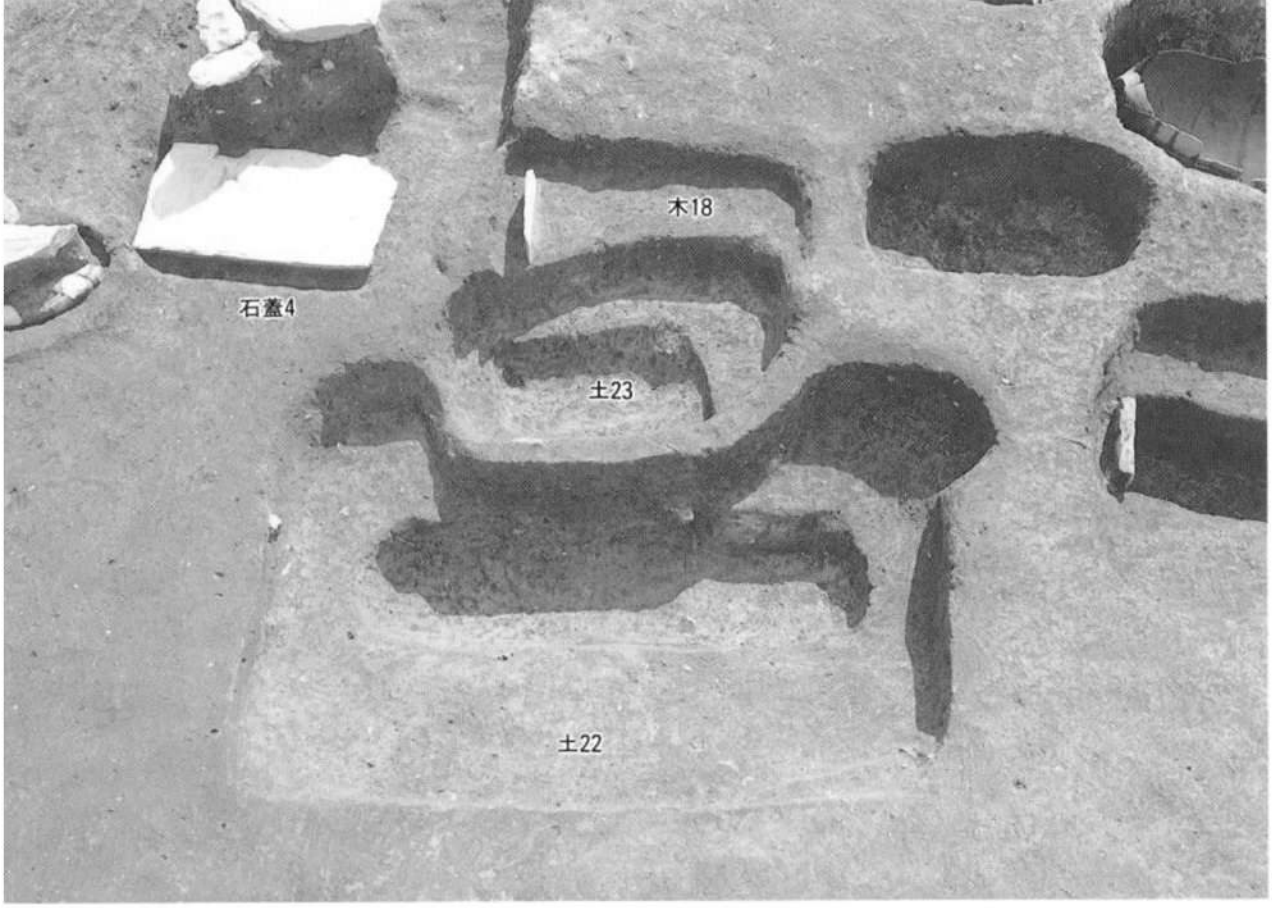


1

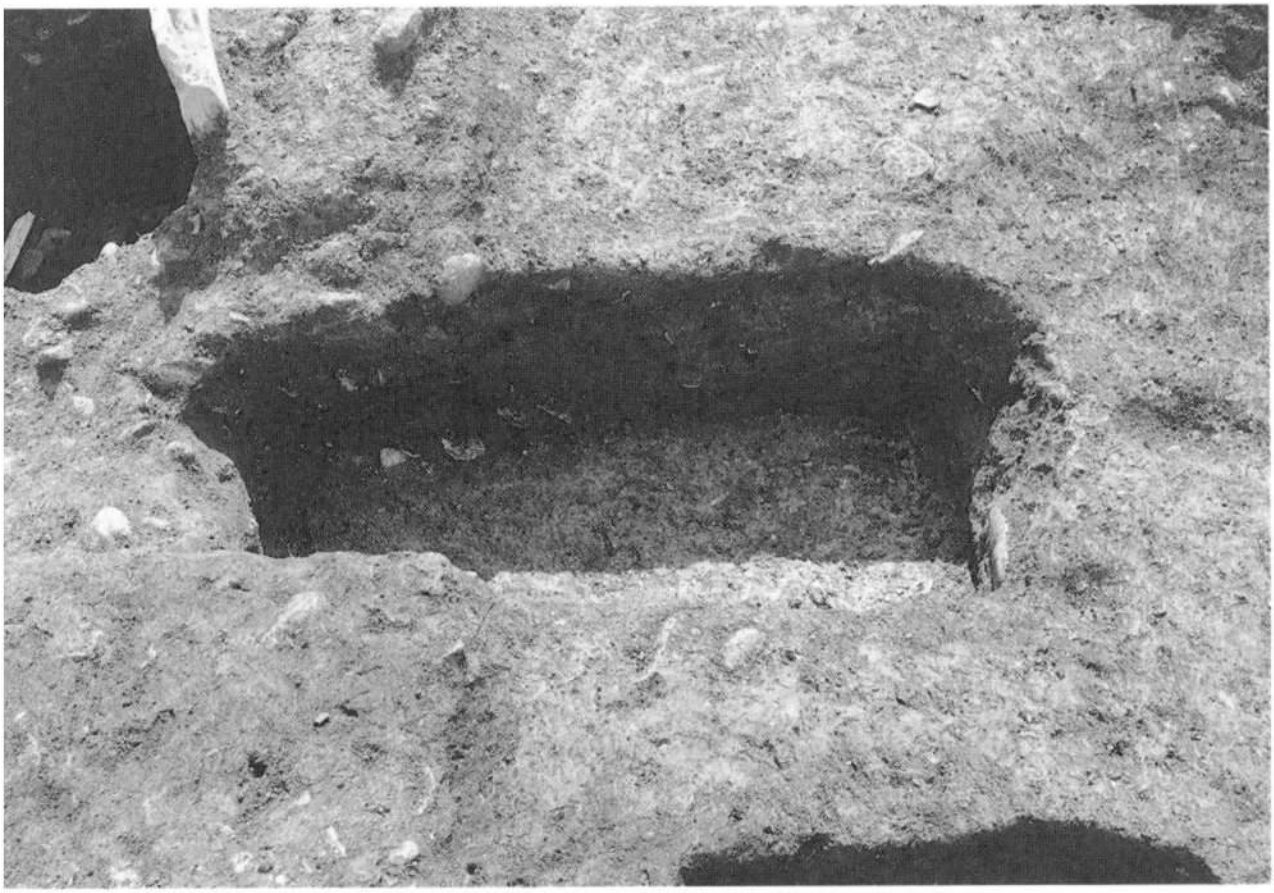
2

図　版　51　(1) 17号土壙墓（西から）

(2) 18号土壙墓、27号甕棺墓（北西から）

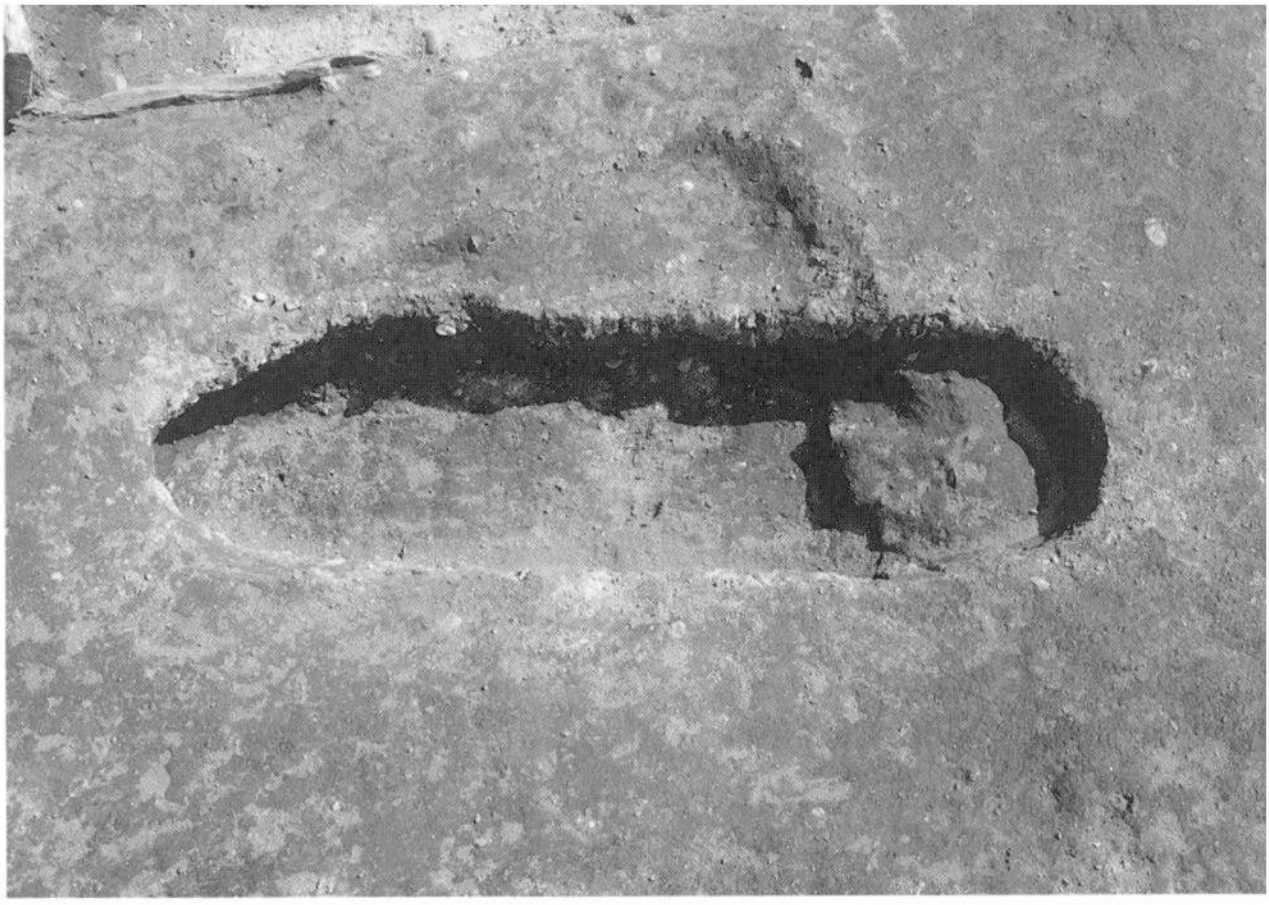


1



2

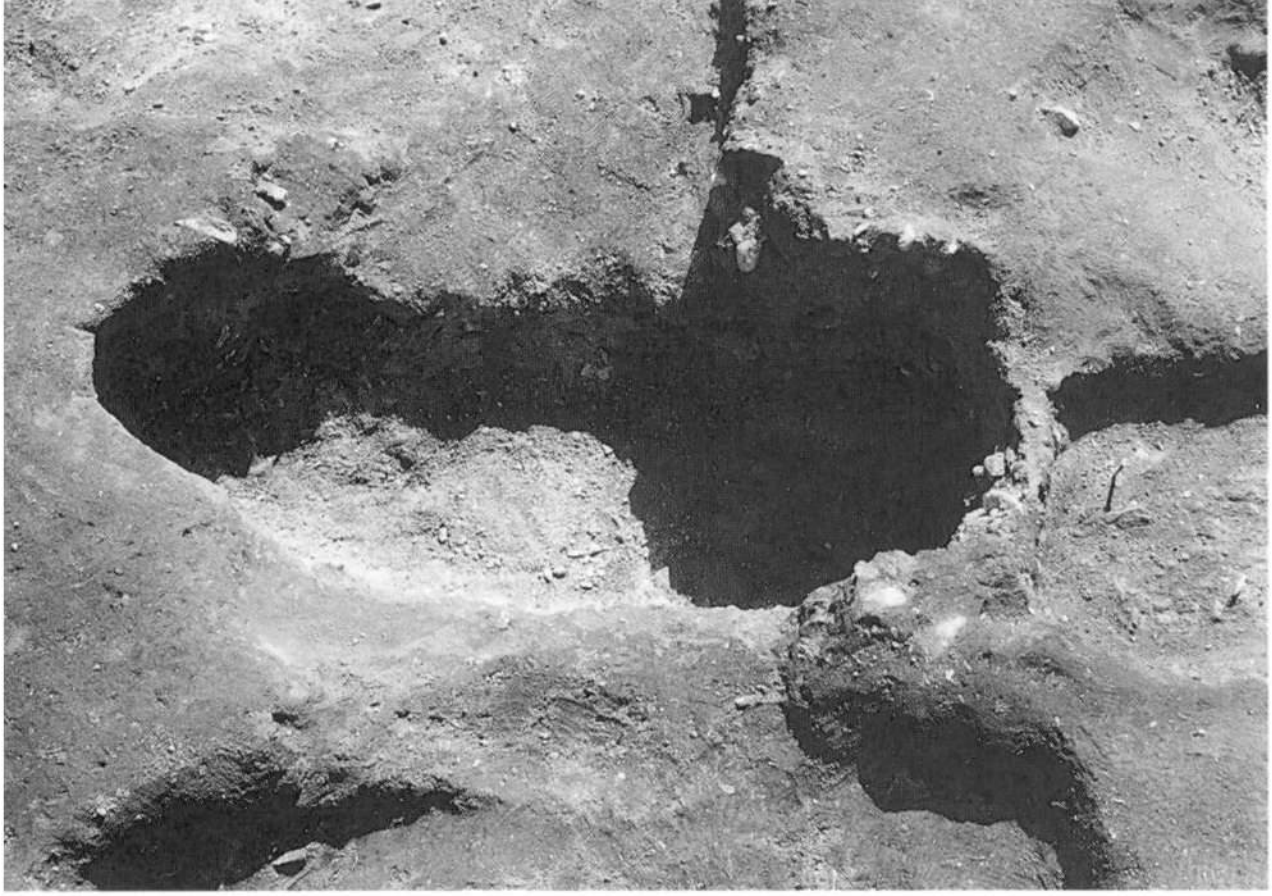
図　版　52　(1) 21号～23号土壙墓、18号木棺墓、4号石蓋土壙墓（北西から）
(2) 28号土壙墓（北西から）



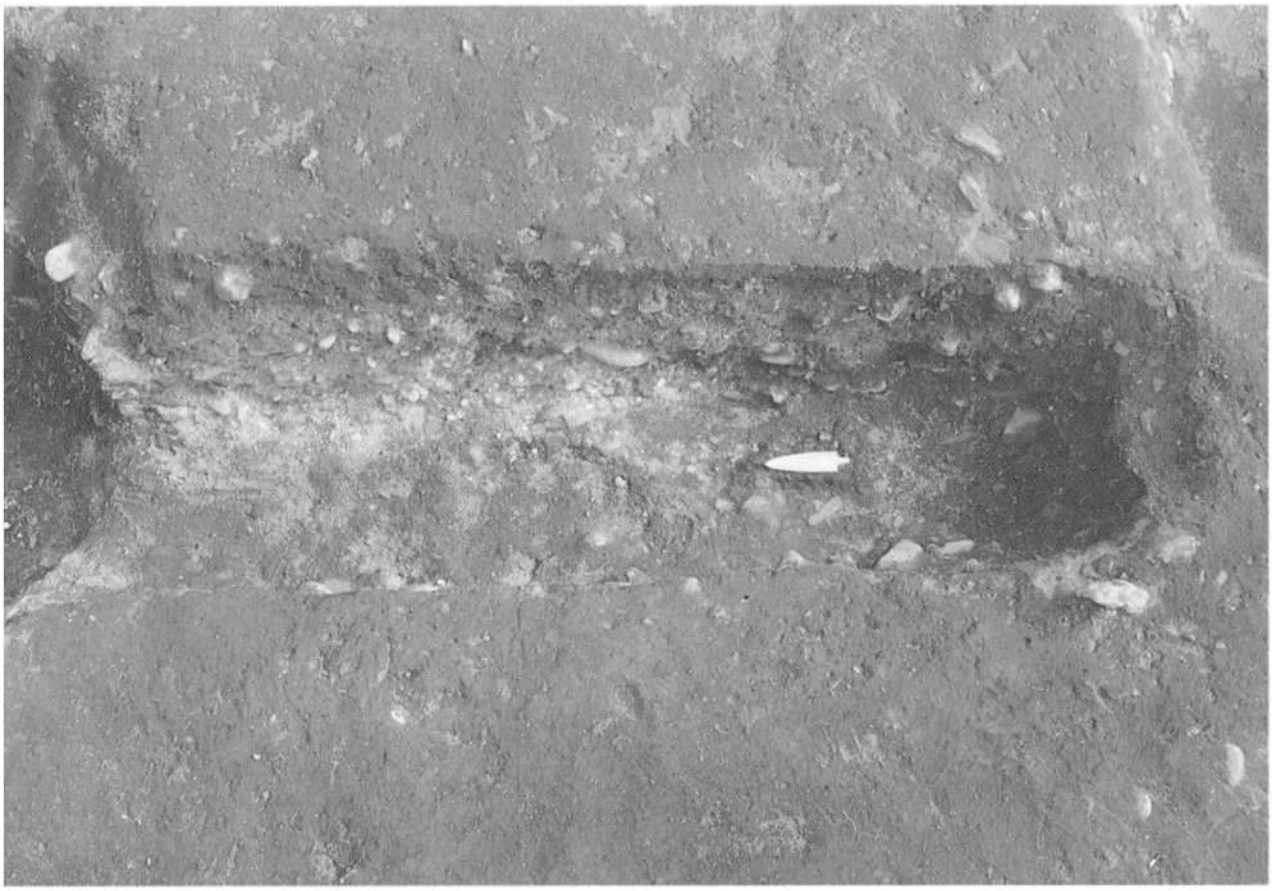
1

2

図　版　53　(1) 31号土壙墓（北西から）
(2) 32号土壙墓（北西から）



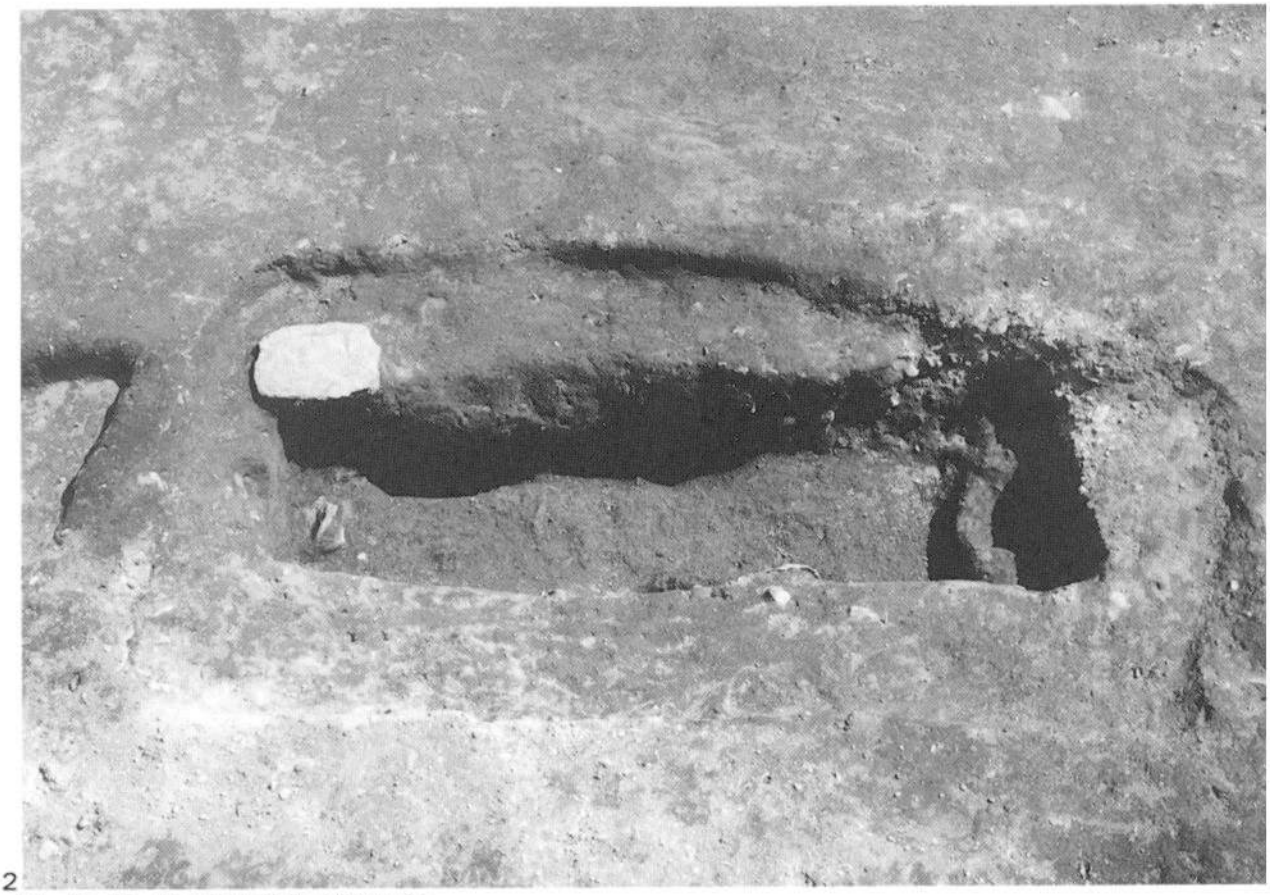
1



2

図　版　54　(1) 33号土壙墓（北西から）
(2) 36号土壙墓（北西から）

1



2

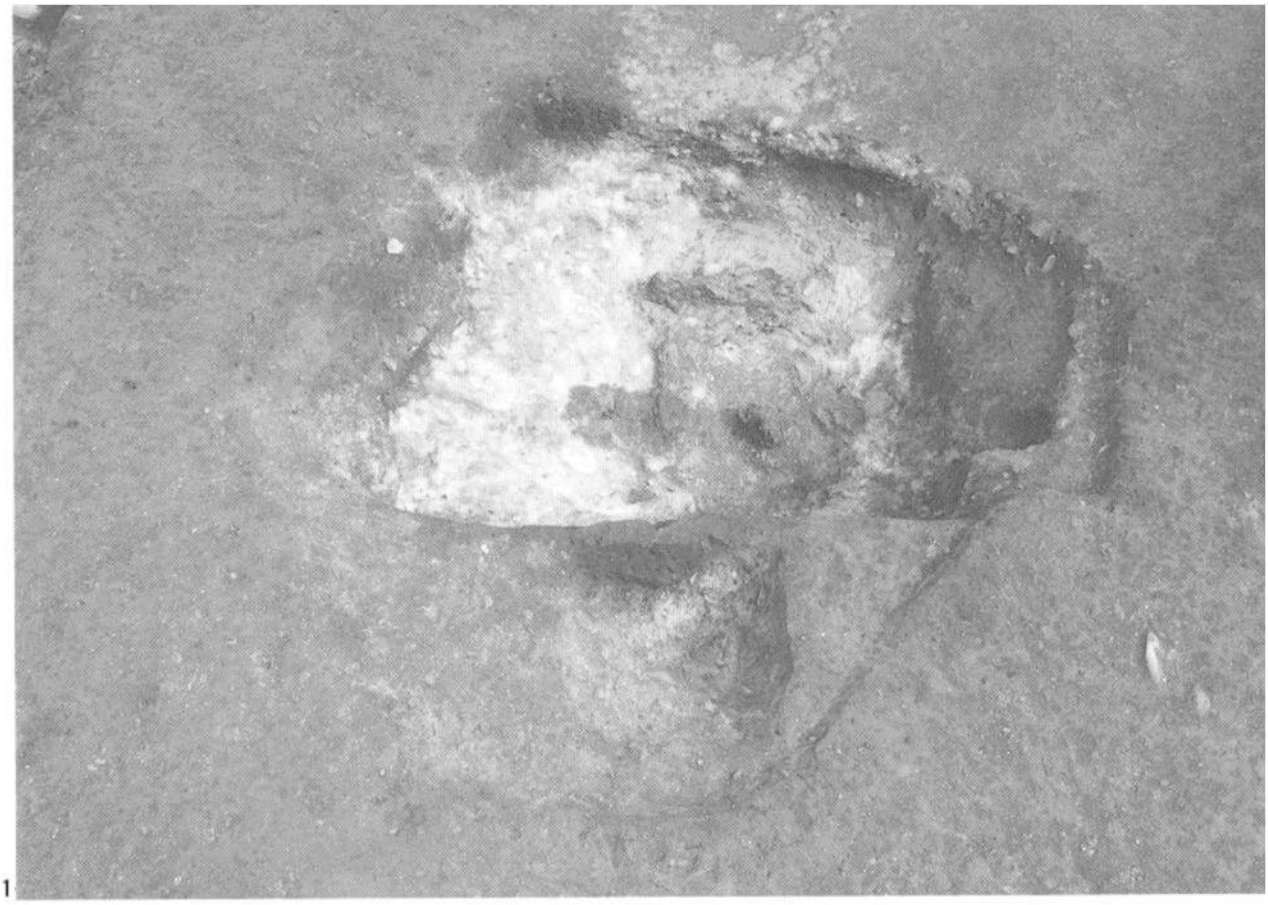
図　版　55　(1) 37号土壙墓（北西から）

(2) 40号土壙墓（北西から）

1

2

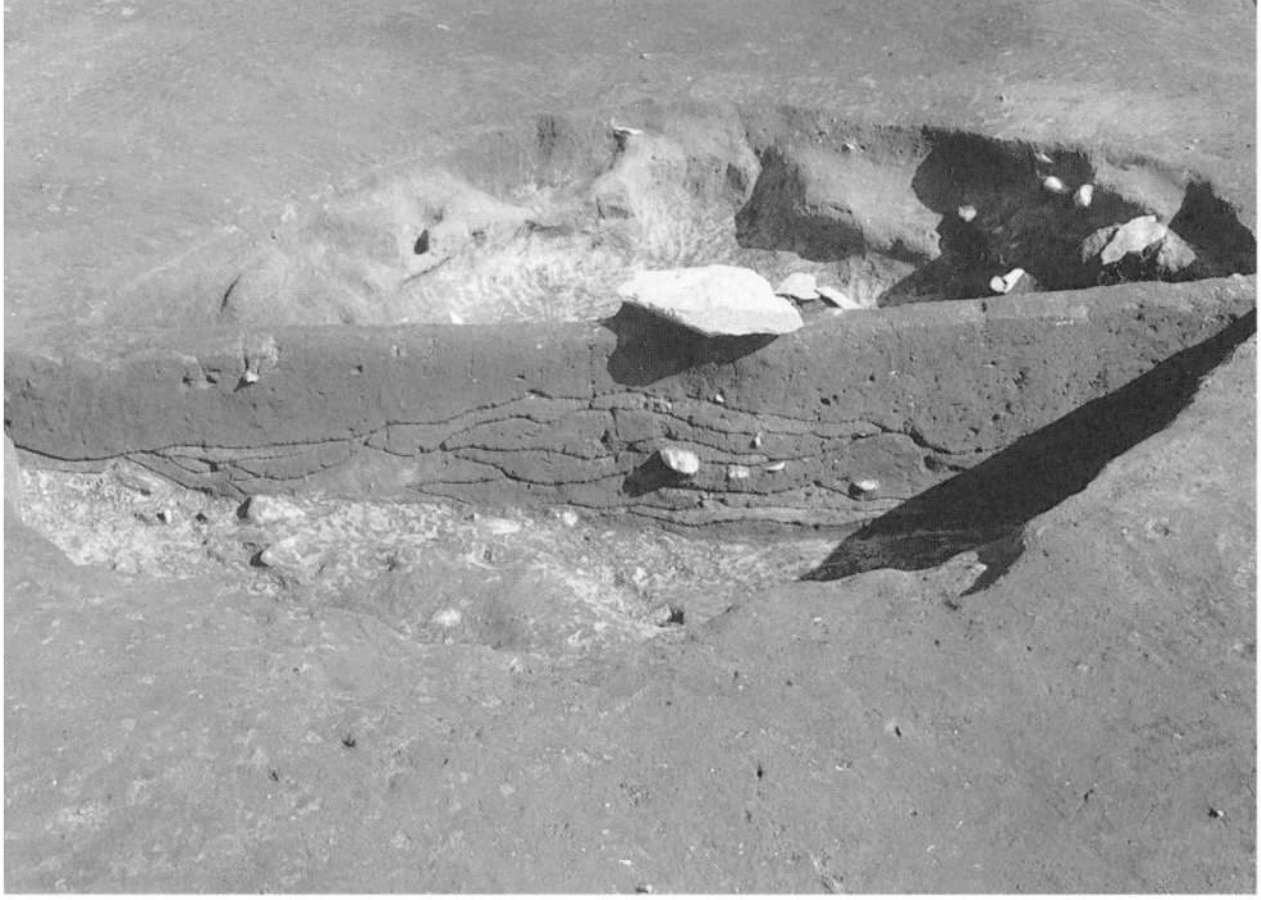
図　版　56　(1) 1号祭祀土壙（北東から）
(2) 2号祭祀土壙（西から）



1

2

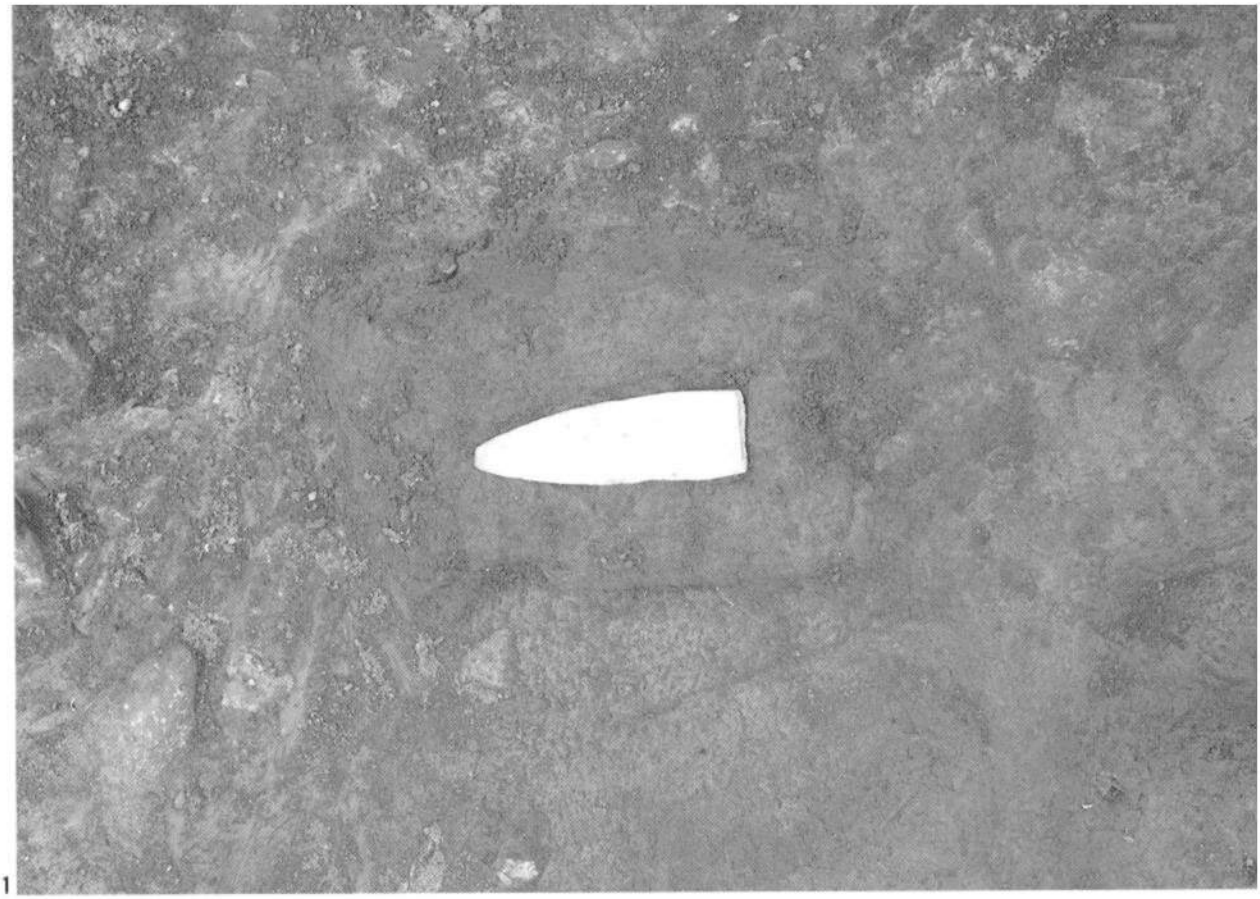
図　版　57　(1) 3 号祭祀土壙（南西から）
(2) 4 号祭祀土壙（北西から）



1

2

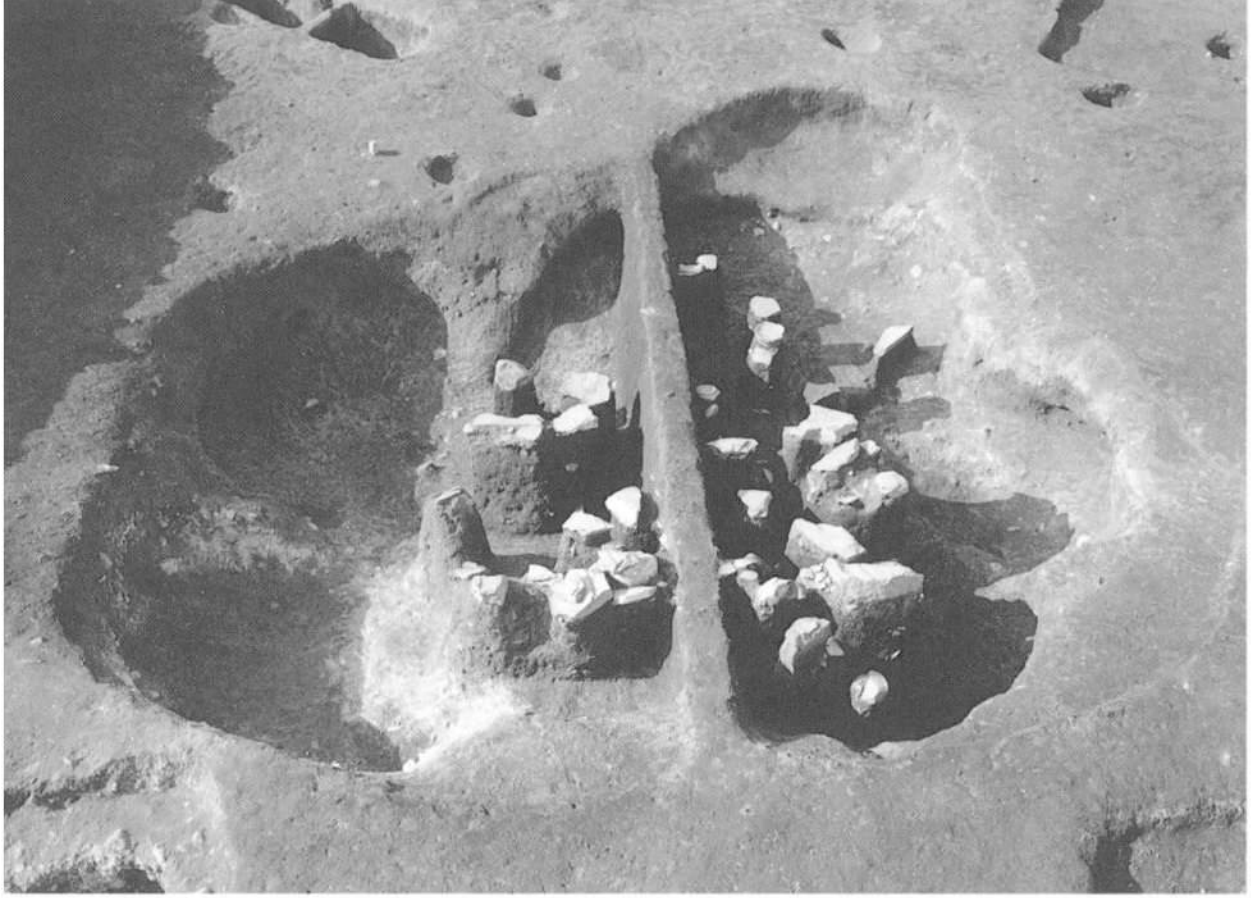
図　版　58　(1) 5 号祭祀土壙埋土状態（南西から）
(2) 5 号祭祀土壙（北から）



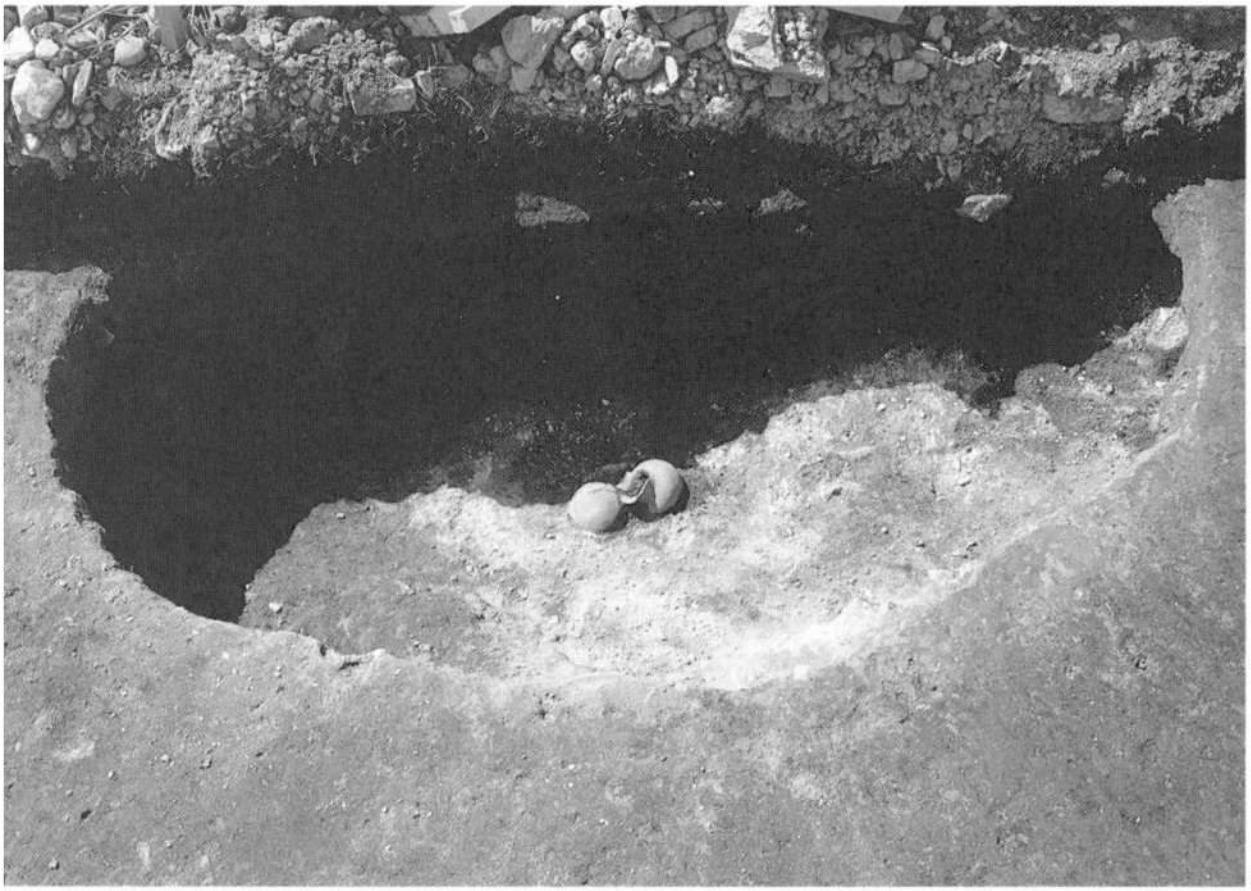
1

2

図　版　59　(1) 5号祭祀土壙出土石剣
(2) 6号祭祀土壙（南東から）



1



2

図　版　60　(1) 7号祭祀土壙（南東から）
(2) 8号祭祀土壙（北東から）

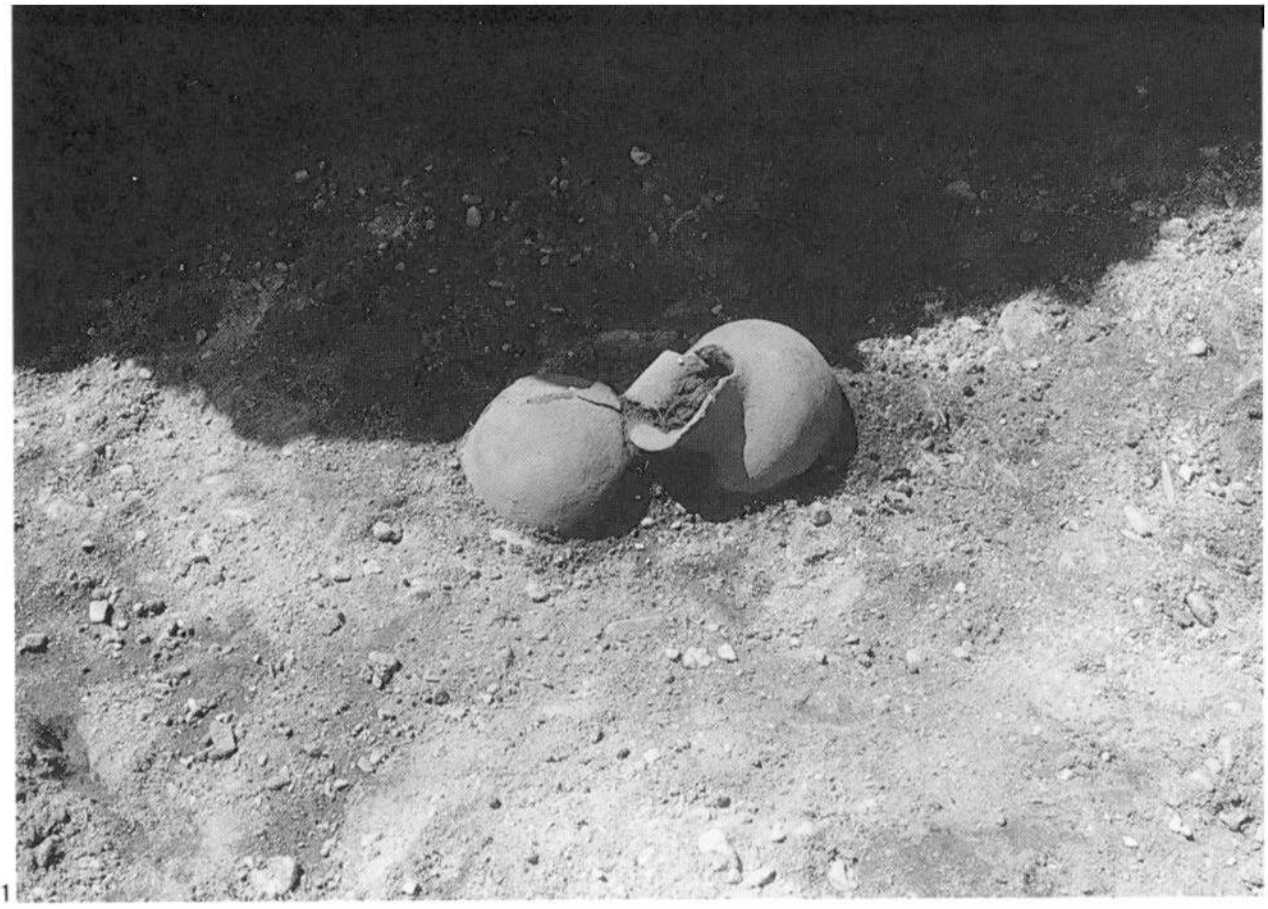


図　版　61　(1) 8号祭祀土壙土器出土状態
(2) 9号祭祀土壙（北から）

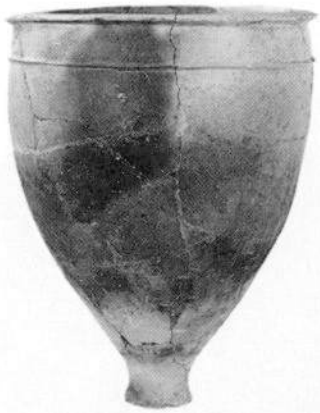
K1

K3

K2

K4

図　版　62　1号～4号甕棺



K5

K6

K7

K8

図 版 63　5号～8号甕棺

K9

K10

K11

図 版 64　9号～11号甕棺

K12

K14

K13

K15(単)

K16(下)

図　版　65　12号～16号甕棺

K17

K19

K20(単)

K18

図 版 66 17号～20号甕棺

K21

K24

K22(単)

K23(上)

K25

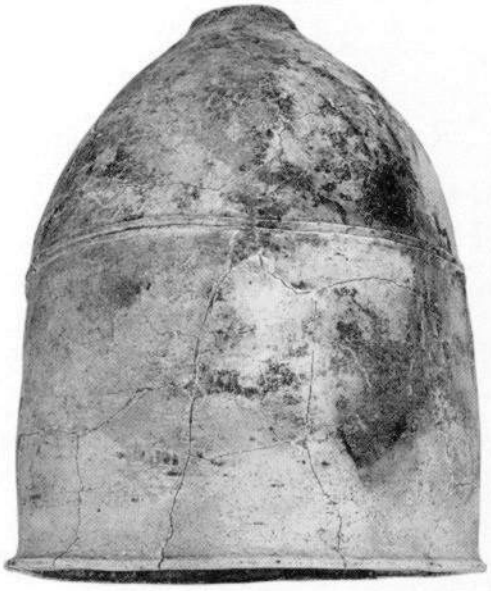
図　版　67　21号～25号甕棺

K26(底)

K26

K28

図 版 68 26号～28号甕棺



K29

K30

図 版 69 29号～30号甕棺

K27

K32

K33

図 版 70 27号・32号・33号甕棺

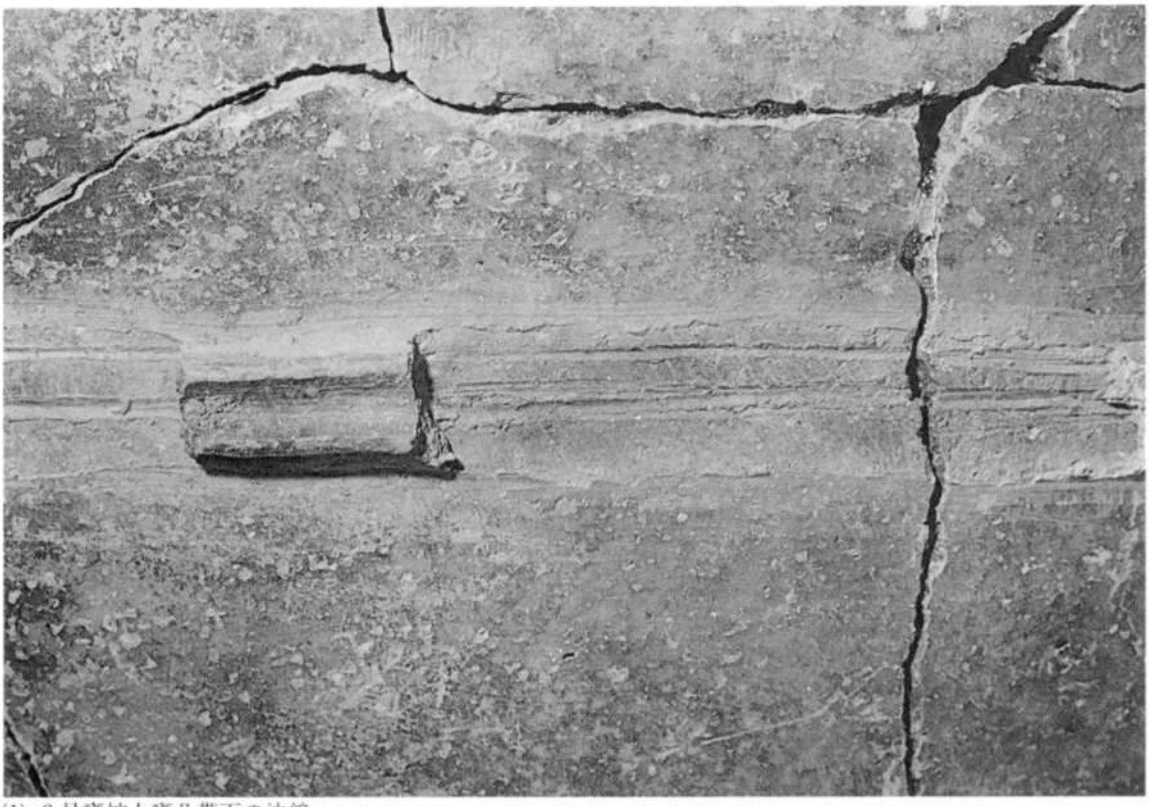
K34

K36

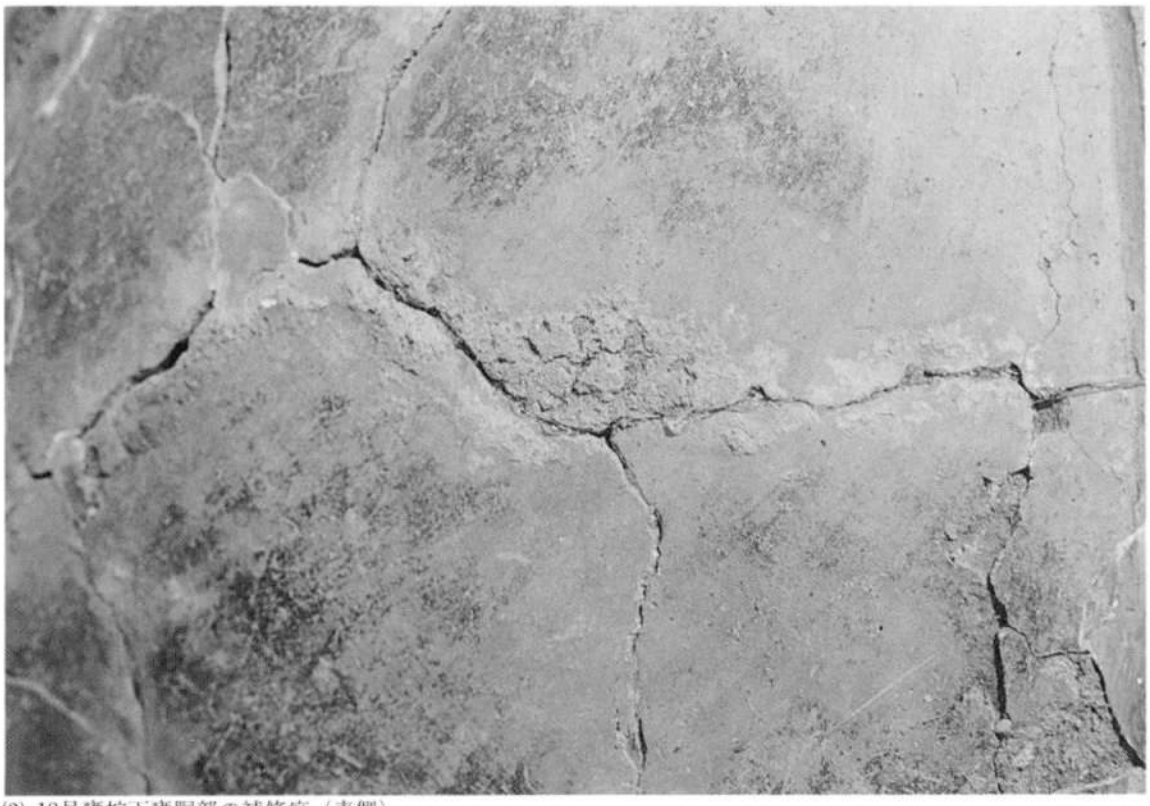
K35

K37

図　版　71　34号～37号甕棺

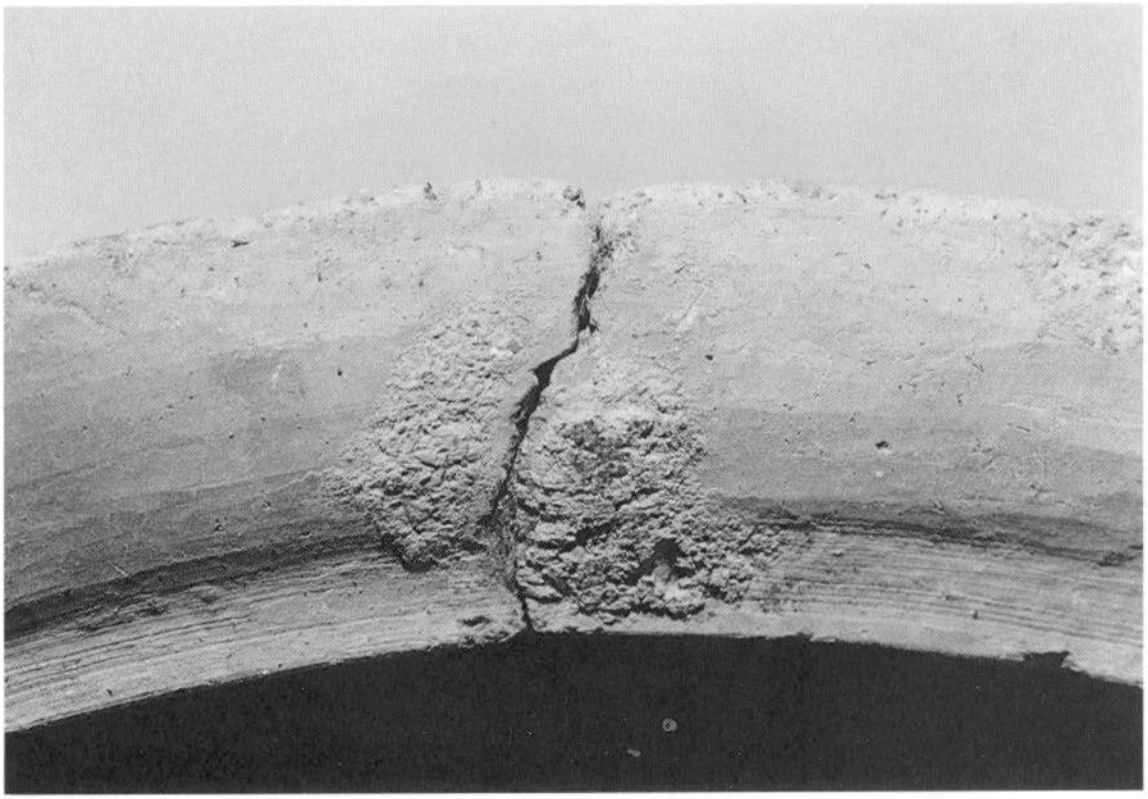


(1) 2号甕棺上甕凸帯下の沈線

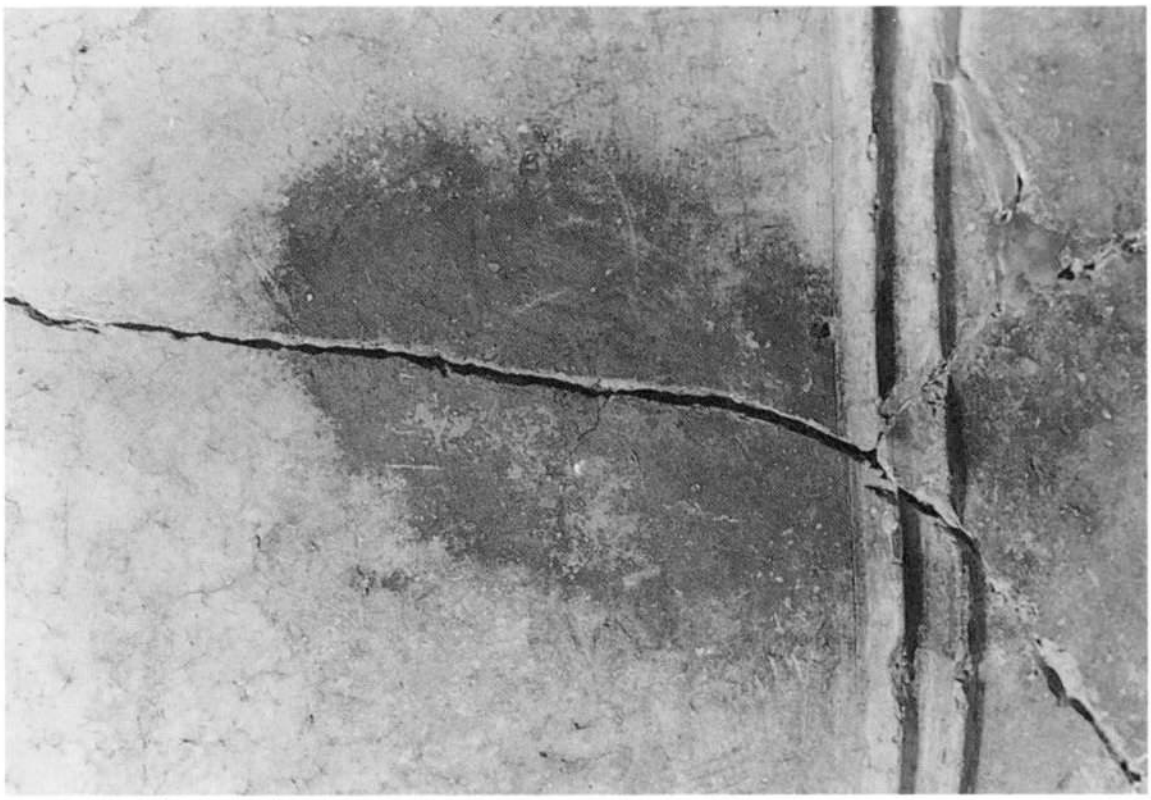


(2) 12号甕棺下甕胴部の補修痕（表側）

(1) 12号甕棺下甕補修痕（内側）



(2) 29号甕棺上甕口縁部補修痕



(1) 29号甕棺下甕焼成時の亀裂（煤が吹き出している）

(2) 29号木棺墓出土の鏡

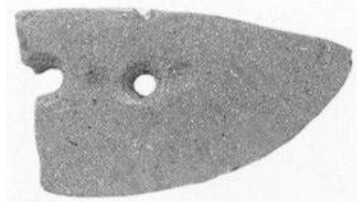
祭祀7

祭祀7－2

祭祀7－3

祭祀8

祭祀9



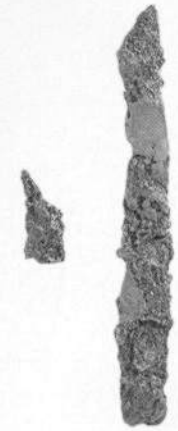
K5

土墓36

土墓36

祭祀2

祭祀5



石棺1

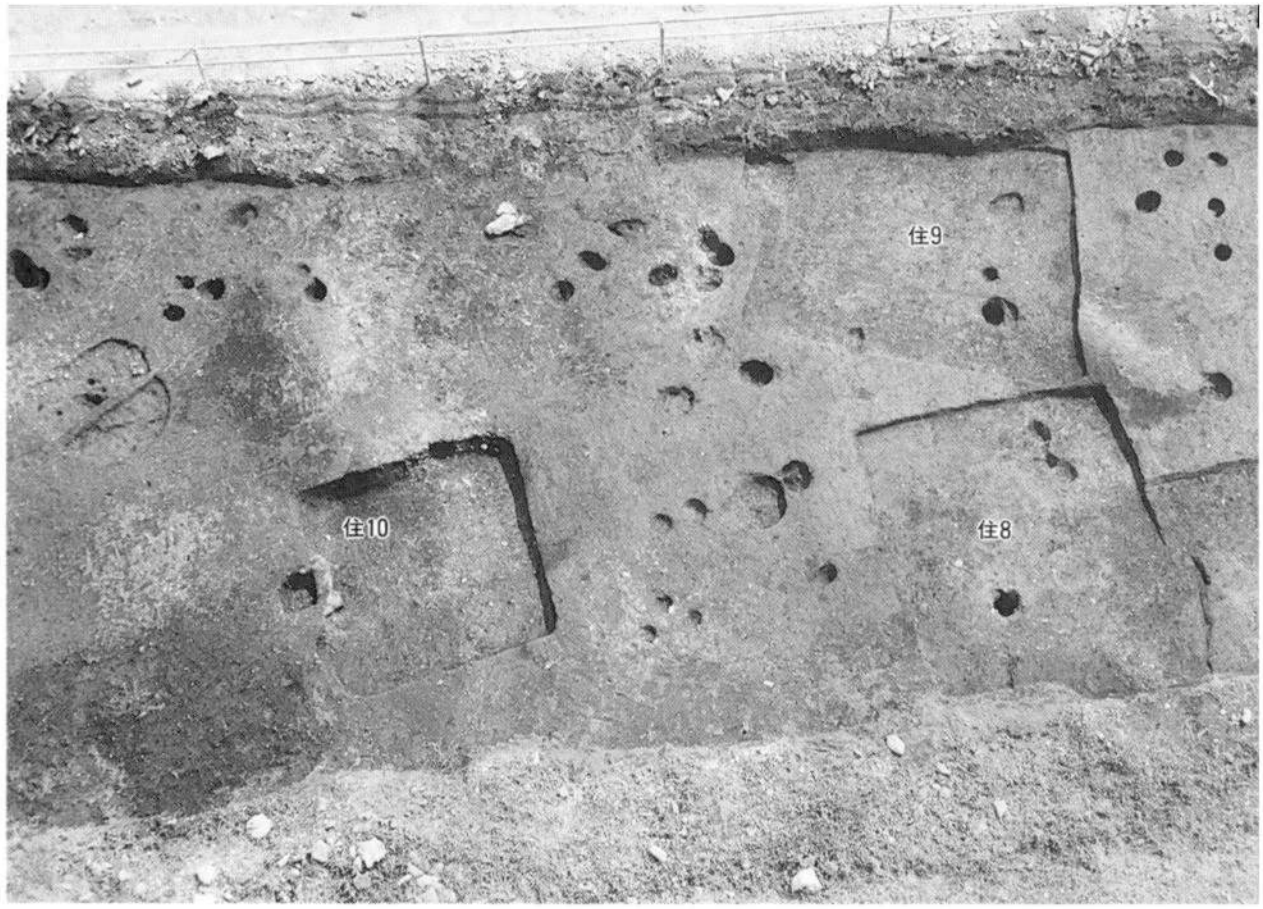
図　版　75　7号～9号祭祀土壙出土土器、5号甕棺墓、36号土壙墓、2号・5号祭祀土壙出土石器、1号箱式石棺墓出土鉄器

1

2

図　版　76　(1) 大庭・久保遺跡西側俯瞰

(2) 大庭・久保遺跡西側竪穴住居跡群

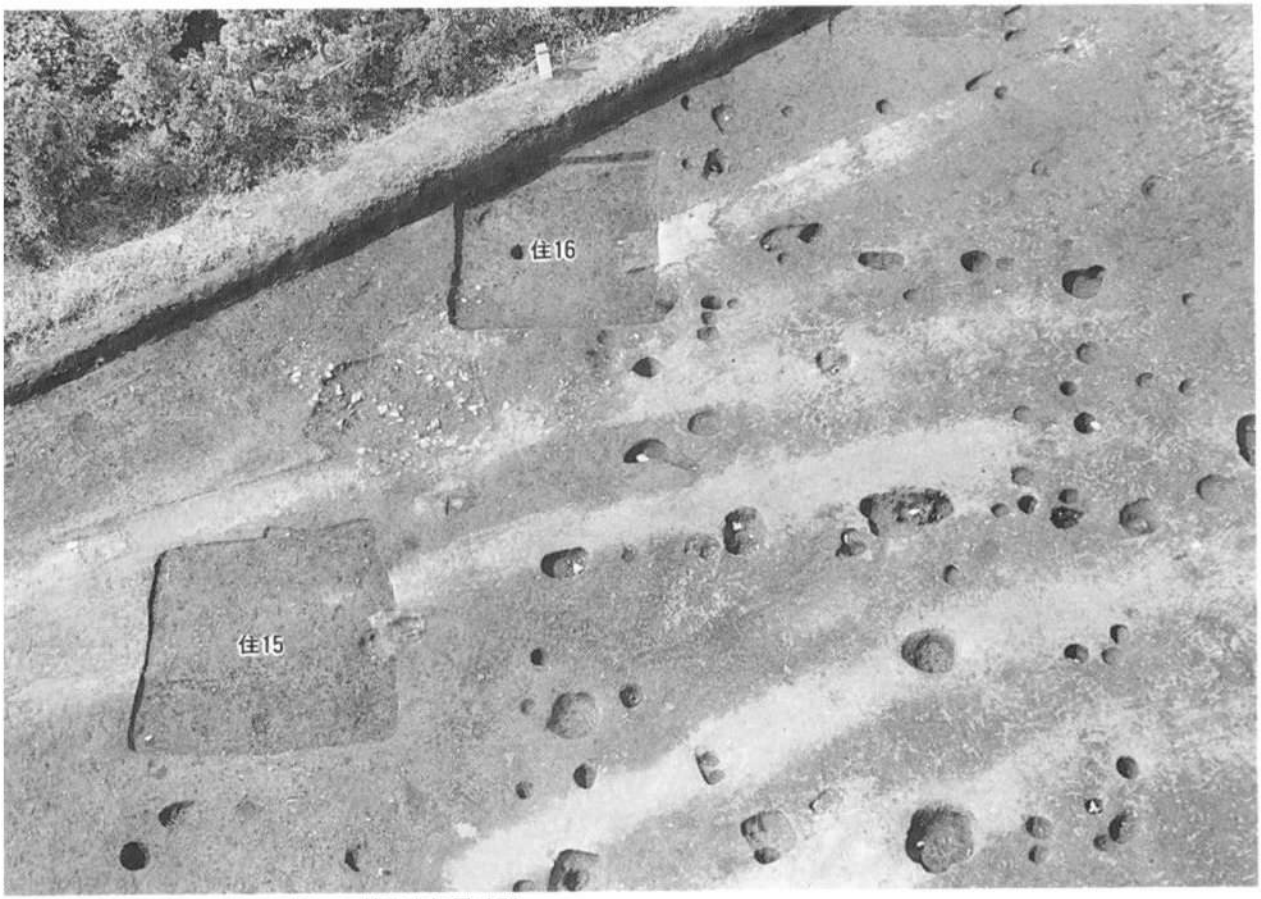


1

2

図　版　77　(1) 8号～10号竪穴住居跡群
(2) 12号・13号竪穴住居跡

1



2

図　版　78　(1) 13号・15号～18号竪穴住居跡群

(2) 15号・16号竪穴住居跡、8号掘立柱建物跡

1

2

図　版　79　(1) 18号・19号竪穴住居跡

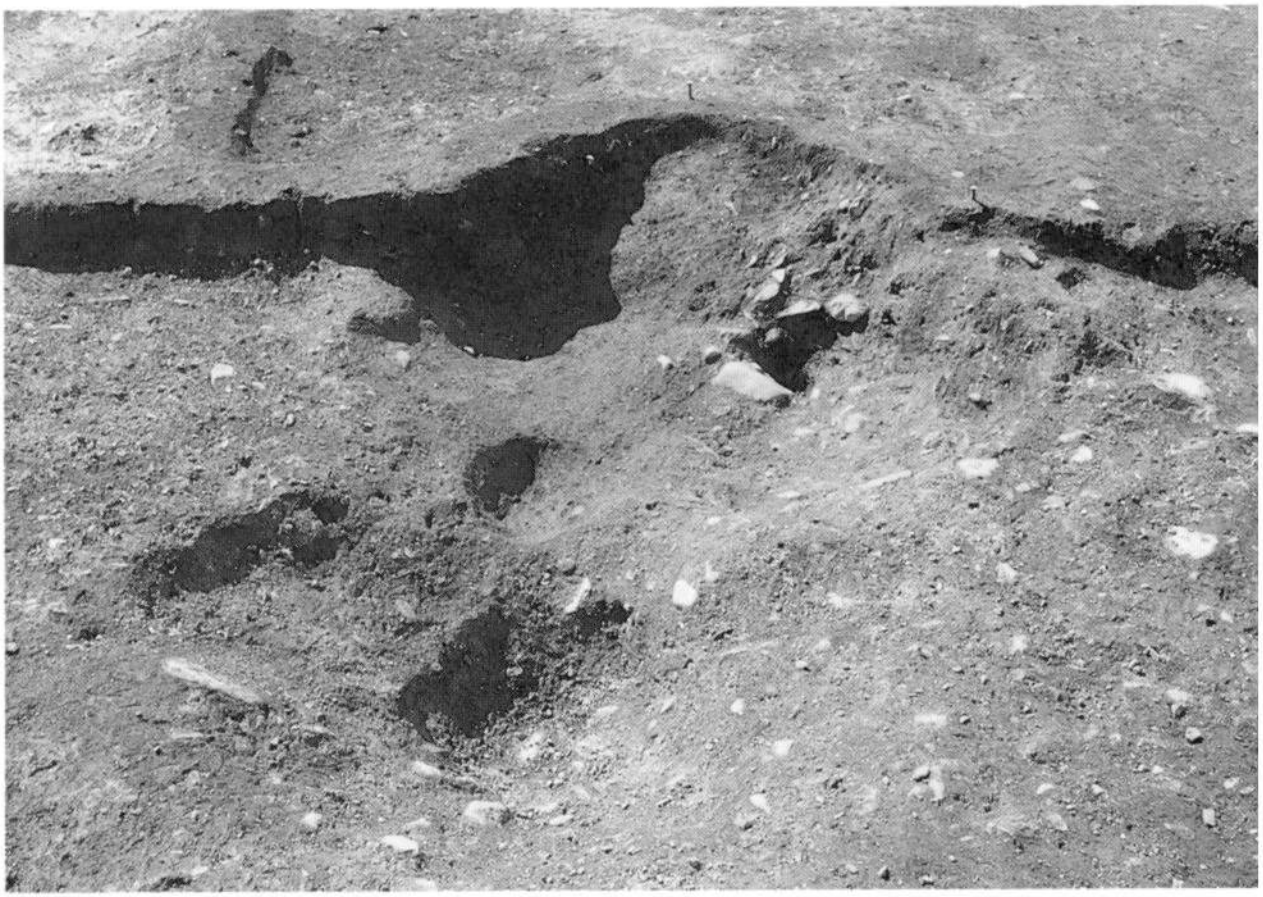
(2) 発掘区東北隅

1

2

図　版　80　(1) 1号～10号竪穴住居跡群（南から）
(2) 1号竪穴住居跡（西から）

1



2

図　版　81　(1) 1号～7号竪穴住居跡群（南から）
(2) 2号竪穴住居跡カマド

1

2

図　版　82　(1) 5号・6号竪穴住居跡（南から）
(2) 5号竪穴住居跡カマド

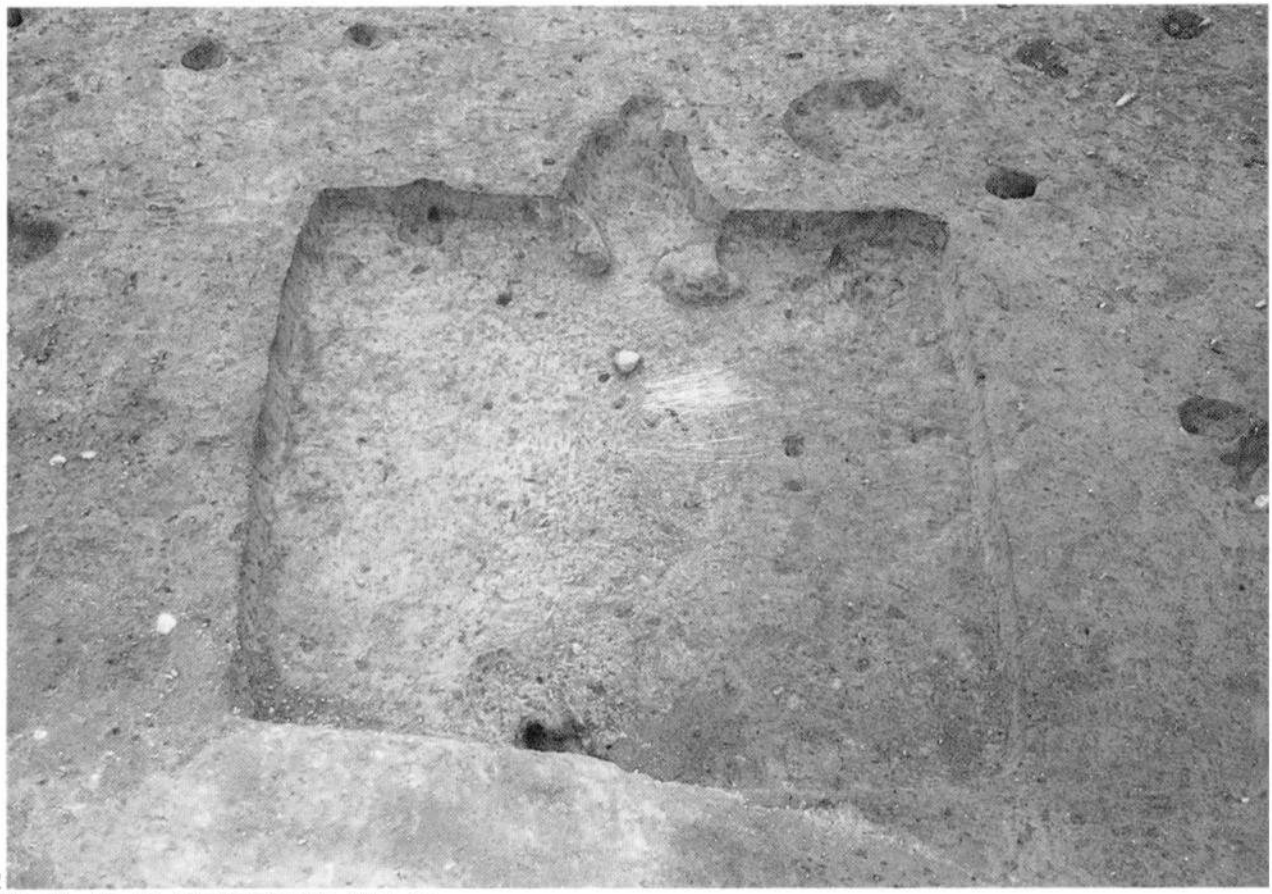
図　版　83　(1) 8号竪穴住居跡（南から）
(2) 9号竪穴住居跡（南から）

1

2

図 版 84 (1) 10号竪穴住居跡（南から）
(2) 10号竪穴住居跡カマド

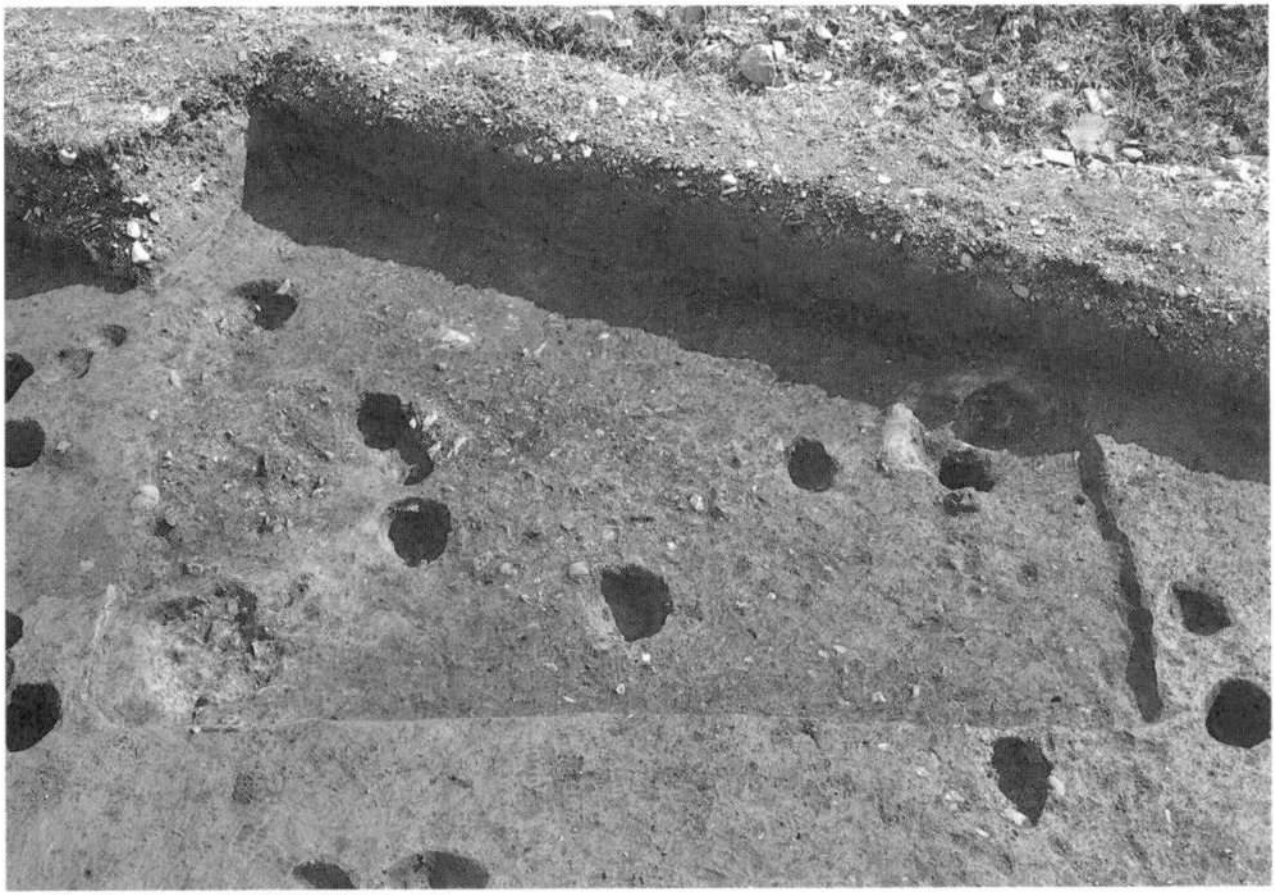
1



2

図　版　85　(1) 12号竪穴住居跡（西から）
(2) 13号竪穴住居跡（東から）

1



2

図　版　86　(1) 13号竪穴住居跡カマド

(2) 14号竪穴住居跡（西から）

1

2

図　版　87　(1) 15号竪穴住居跡（南から）

(2) 15号竪穴住居跡カマド

1

2

図　版　88　(1) 16号竪穴住居跡（東から）
(2) 17号竪穴住居跡（東から）

1

2

図　版　89　(1) 18号竪穴住居跡（南から）

(2) 18号竪穴住居跡カマド

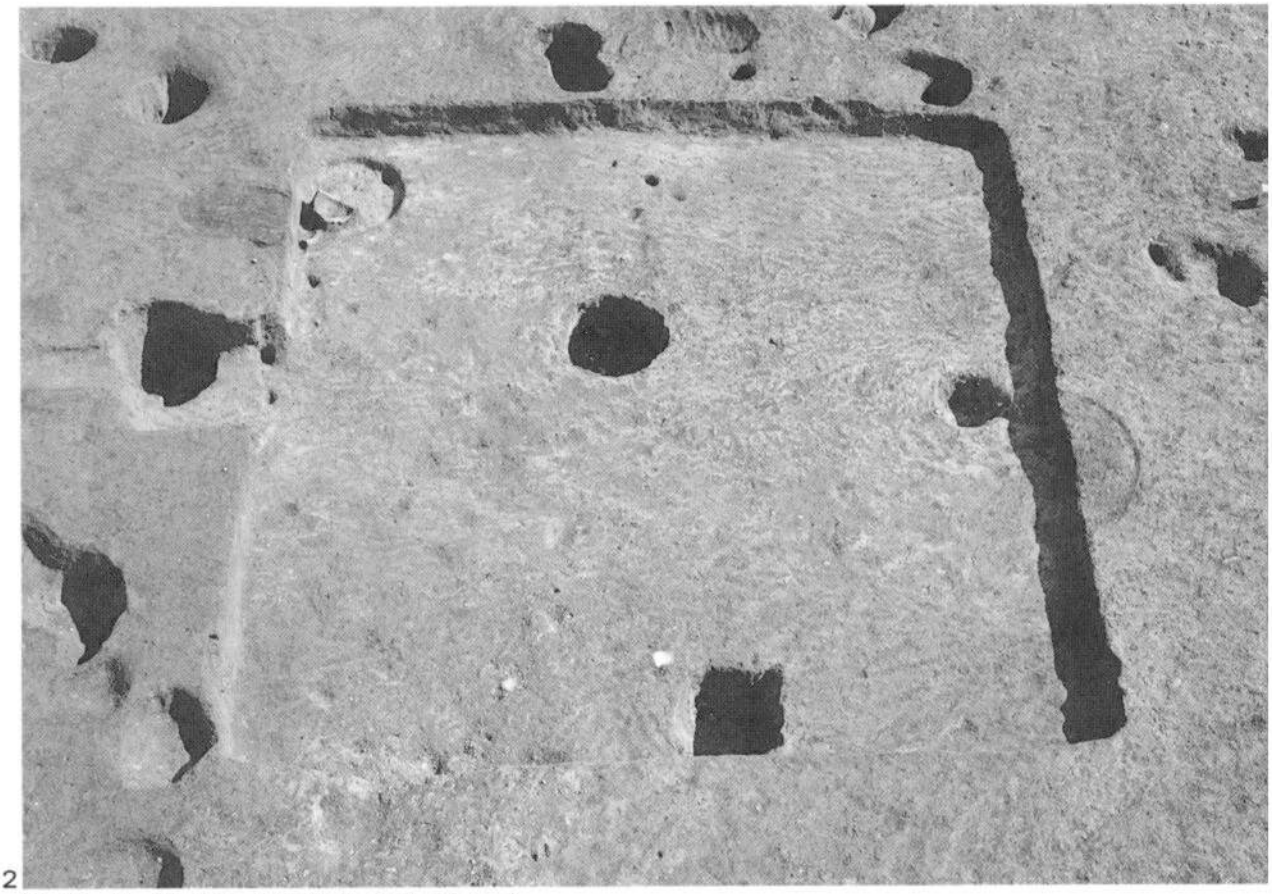
1

2

図　版　90　(1) 19号竪穴住居跡（南から）

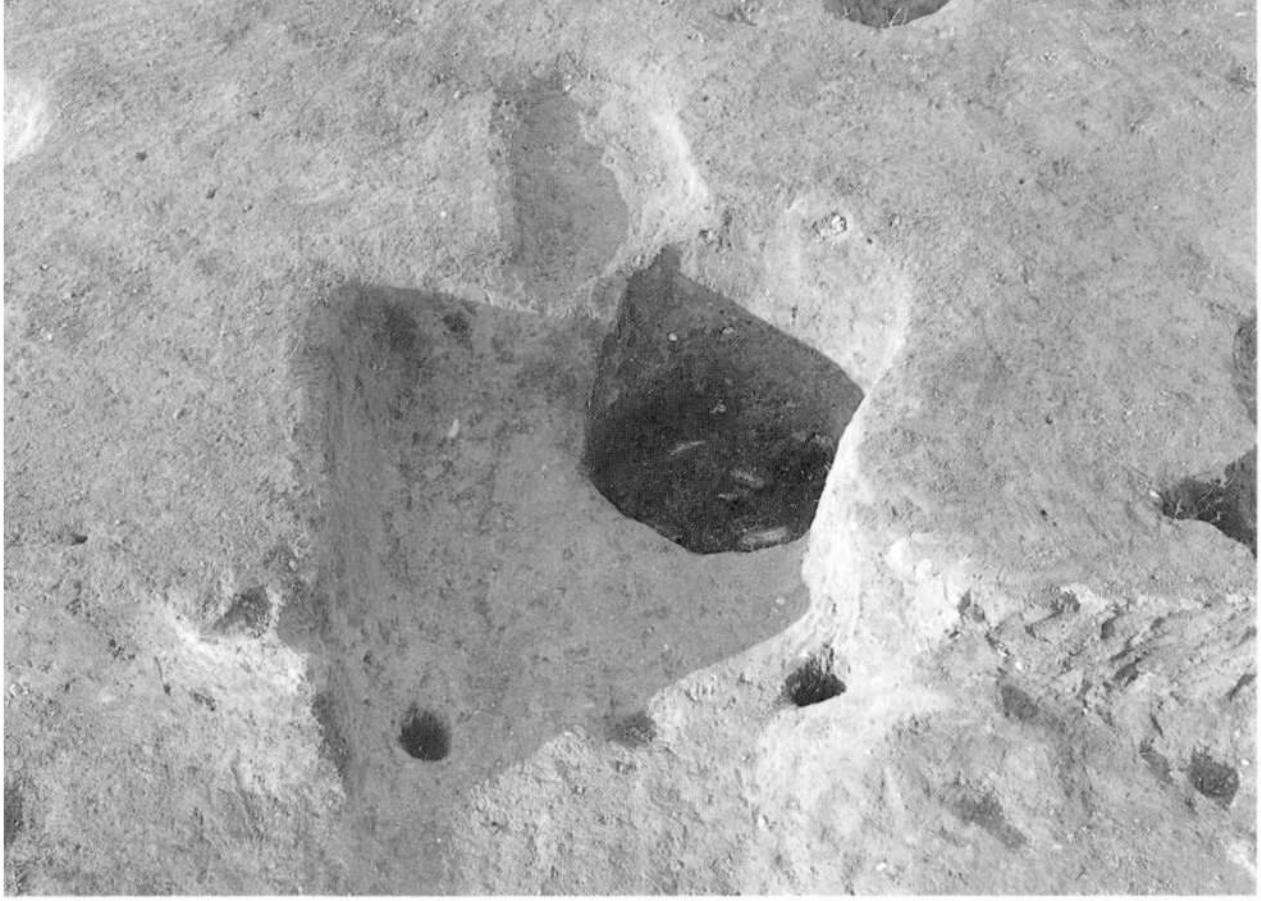
(2) 19号竪穴住居跡カマド

1

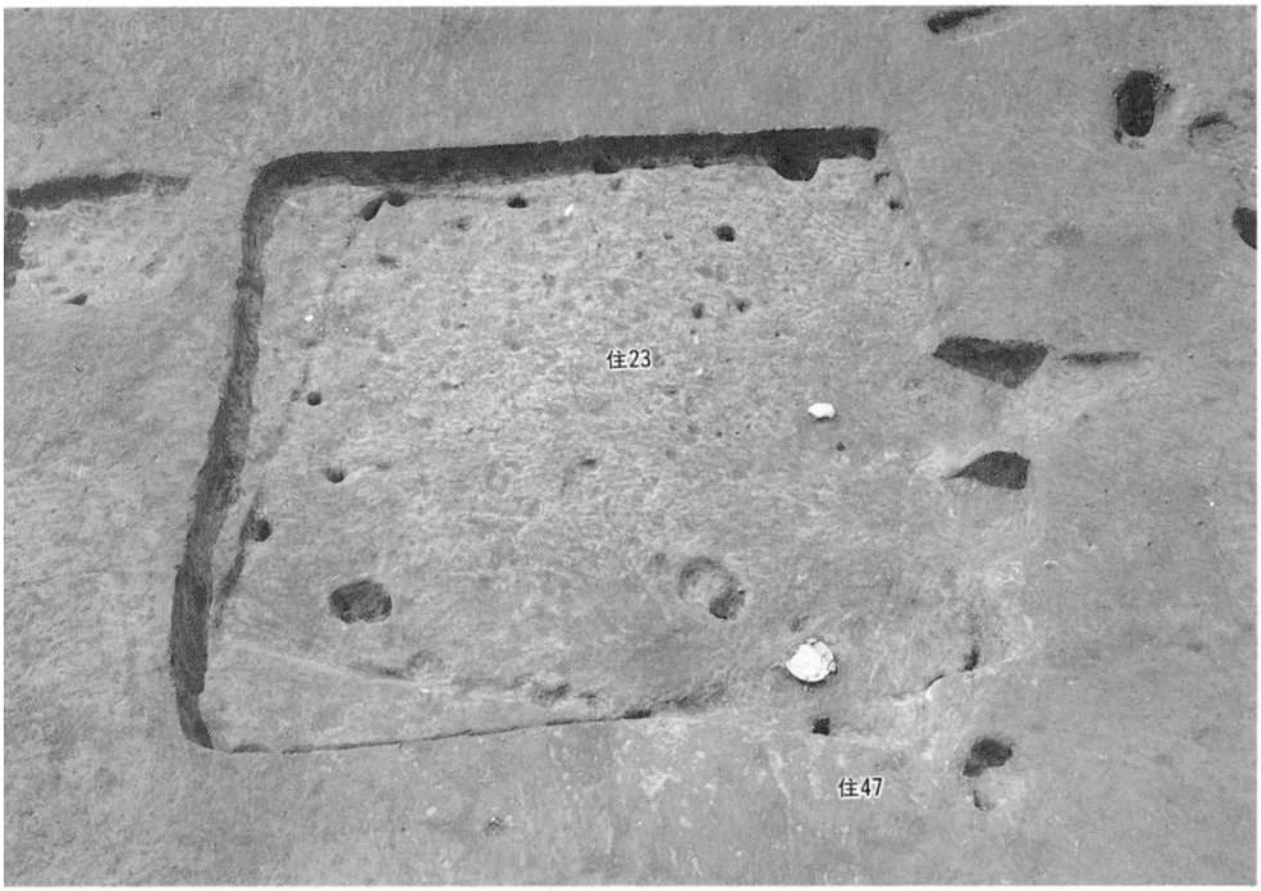


2

図　版　91　(1) 1号・21号竪穴住居跡（南から）
(2) 22号竪穴住居跡（西から）



1

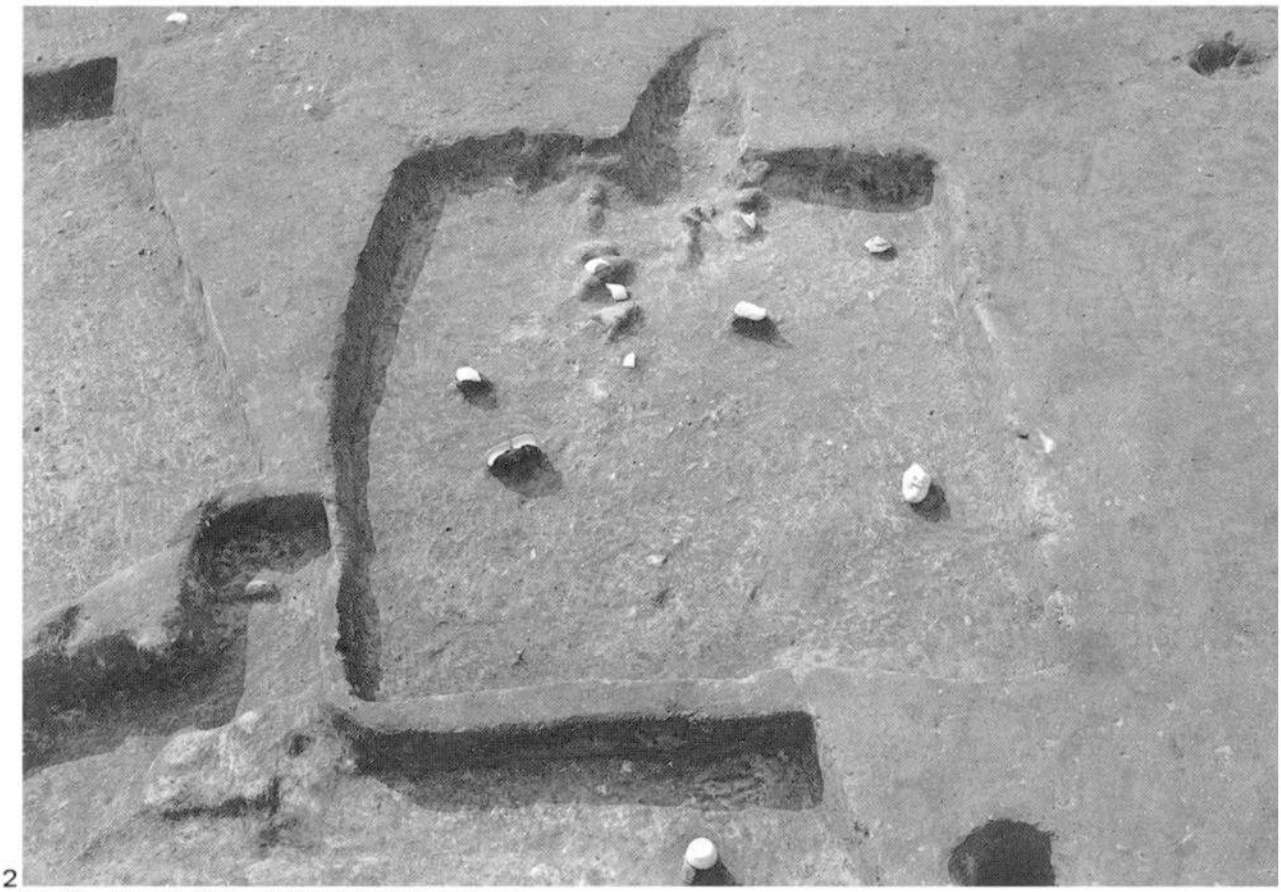


2

図　版　92　(1) 22号竪穴住居跡カマド

(2) 23号・47号竪穴住居跡（東から）

1



2

図　版　93　(1) 24号～26号竪穴住居跡（東から）
(2) 24号竪穴住居跡（東から）

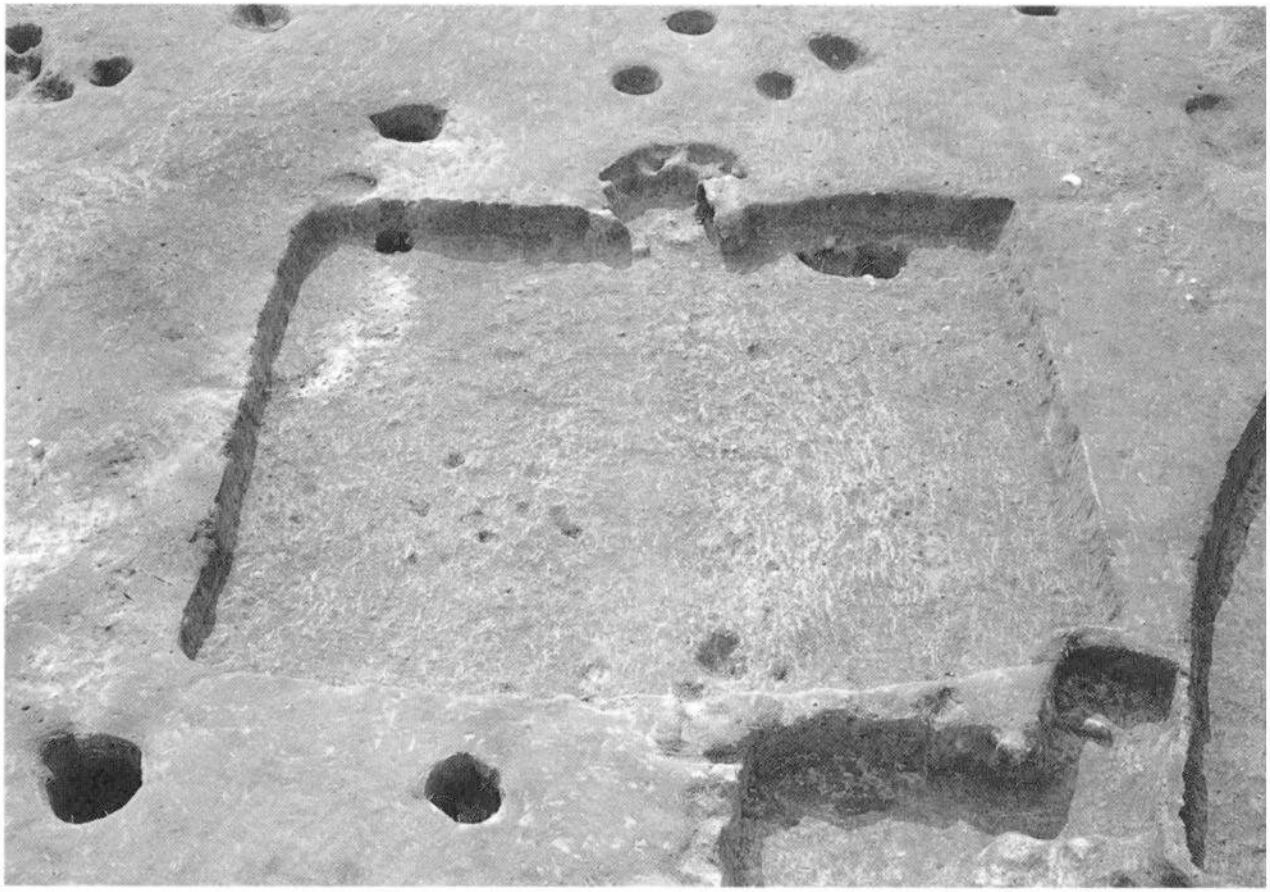
1

2

図　版　94　(1) 24号竪穴住居跡カマド

(2) 25号竪穴住居跡（東から）

1



2

図　版　95　(1) 25号竪穴住居跡カマド
(2) 26号竪穴住居跡（東北から）

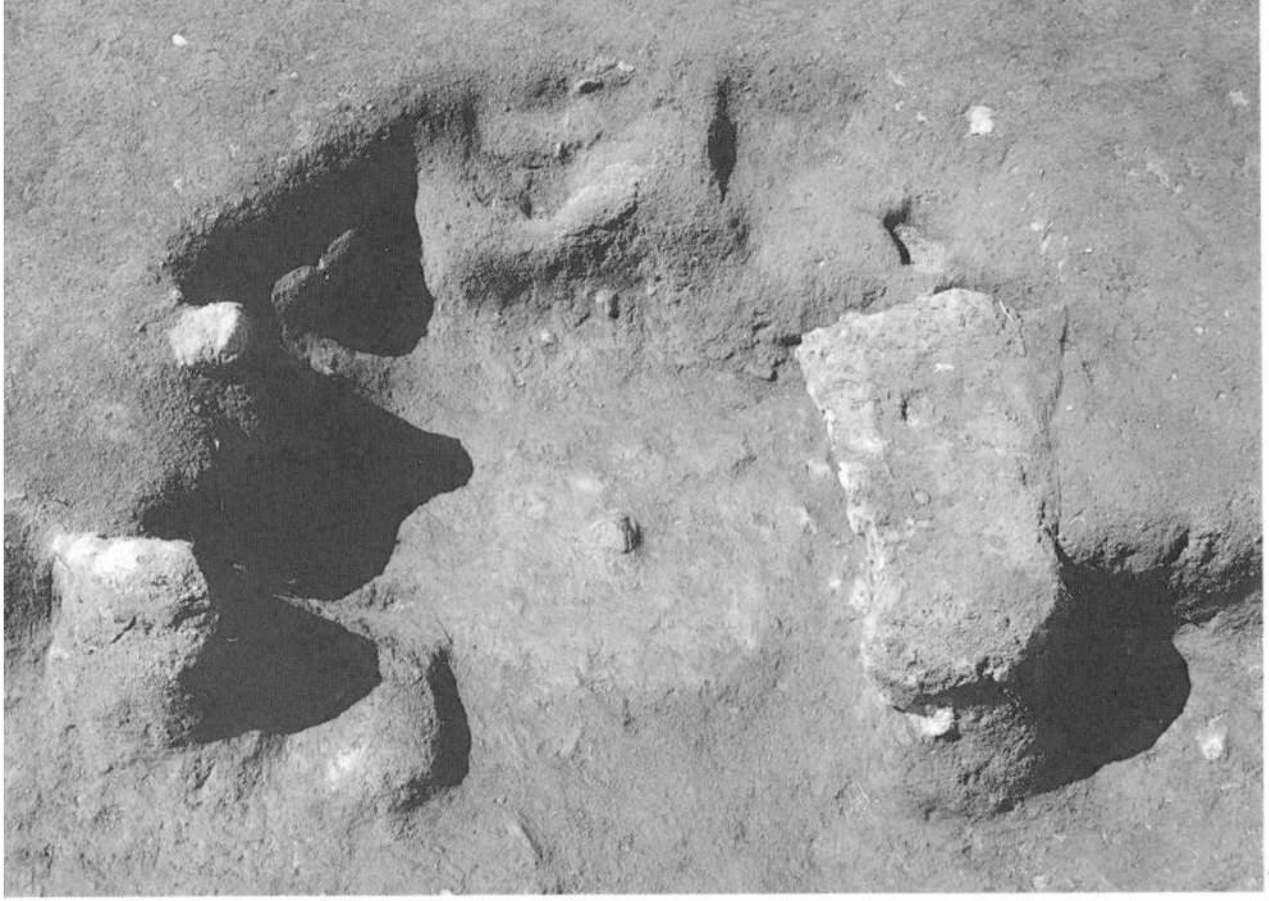
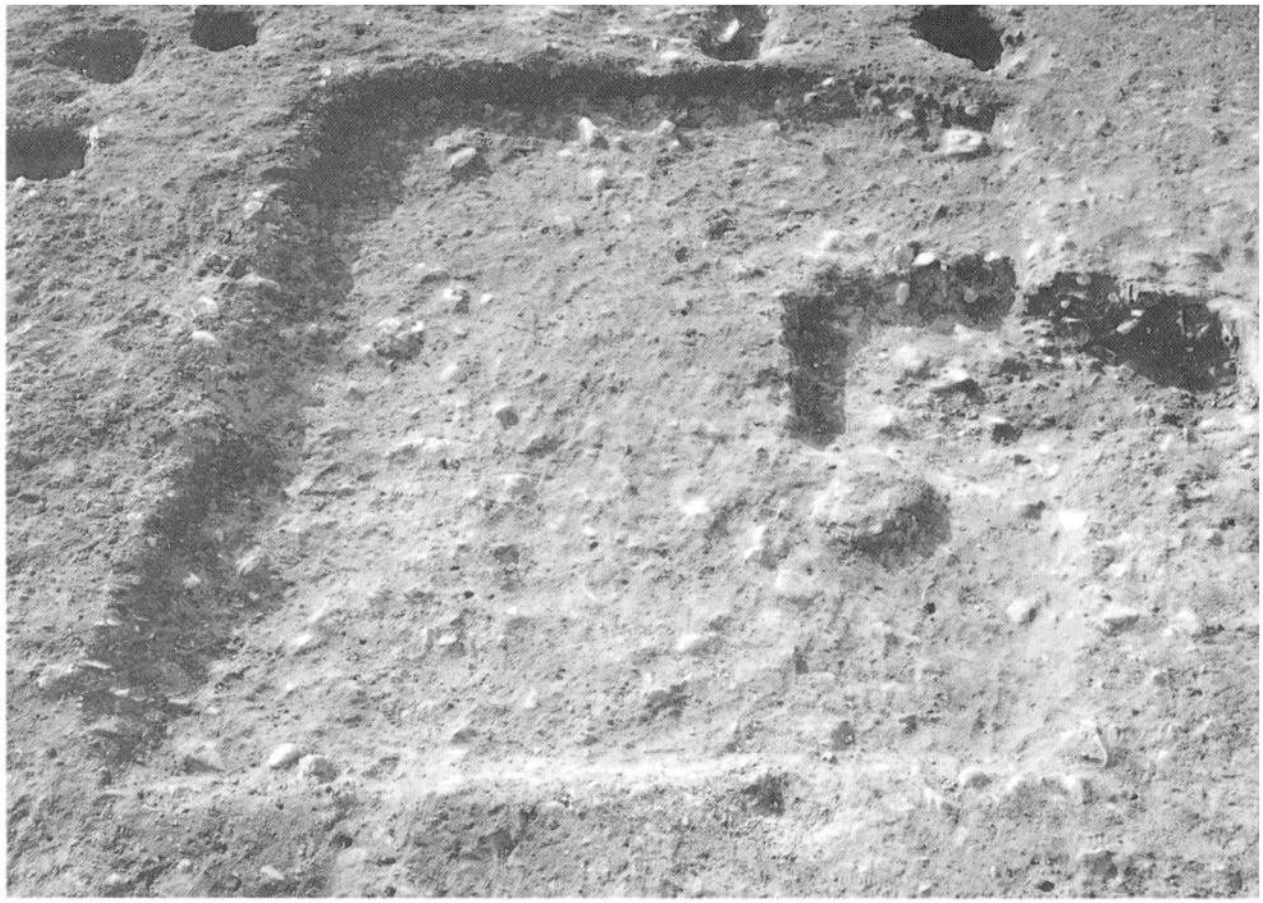
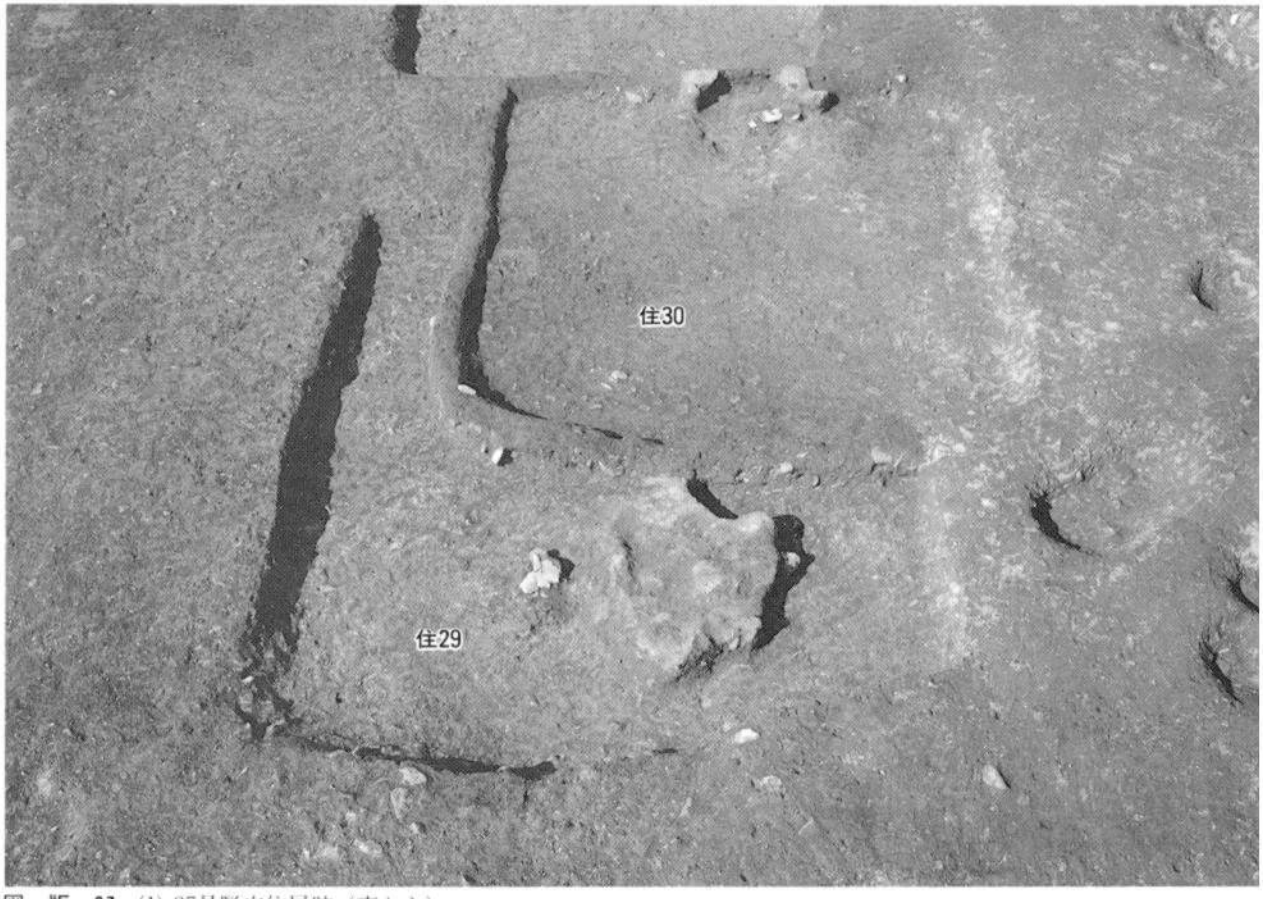


図　版　96　(1) 26号竪穴住居跡カマド
(2) 26号竪穴住居跡カマド壁体





2

図　版　97　(1) 27号竪穴住居跡（東から）

(2) 29号・30号竪穴住居跡（東から）

1

2

図　版　98　(1) 31号・51号竪穴住居跡（東から）
(2) 31号竪穴住居跡カマド

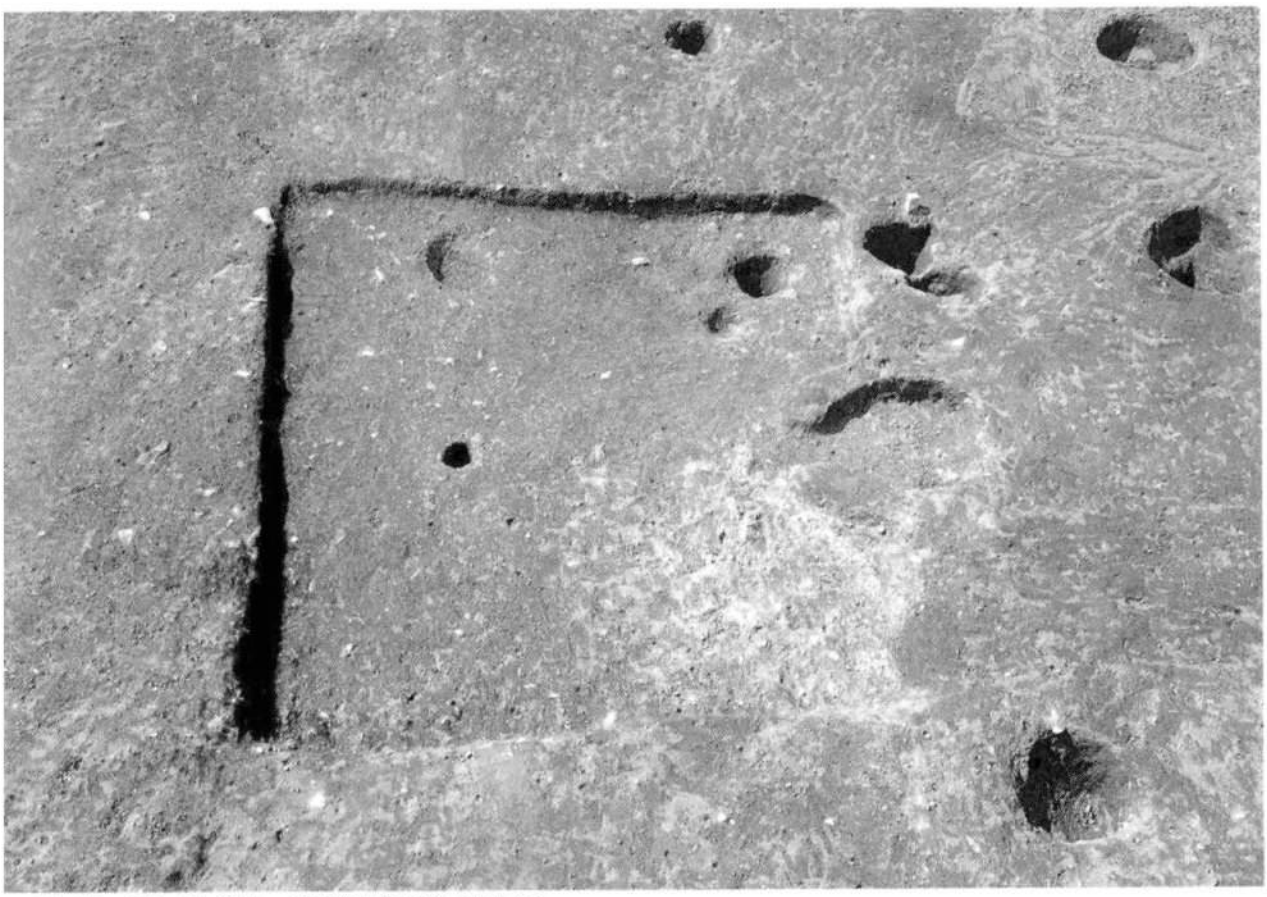
1

2

図　版　99　(1) 32号・50号竪穴住居跡（東から）

(2) 32号竪穴住居跡カマド

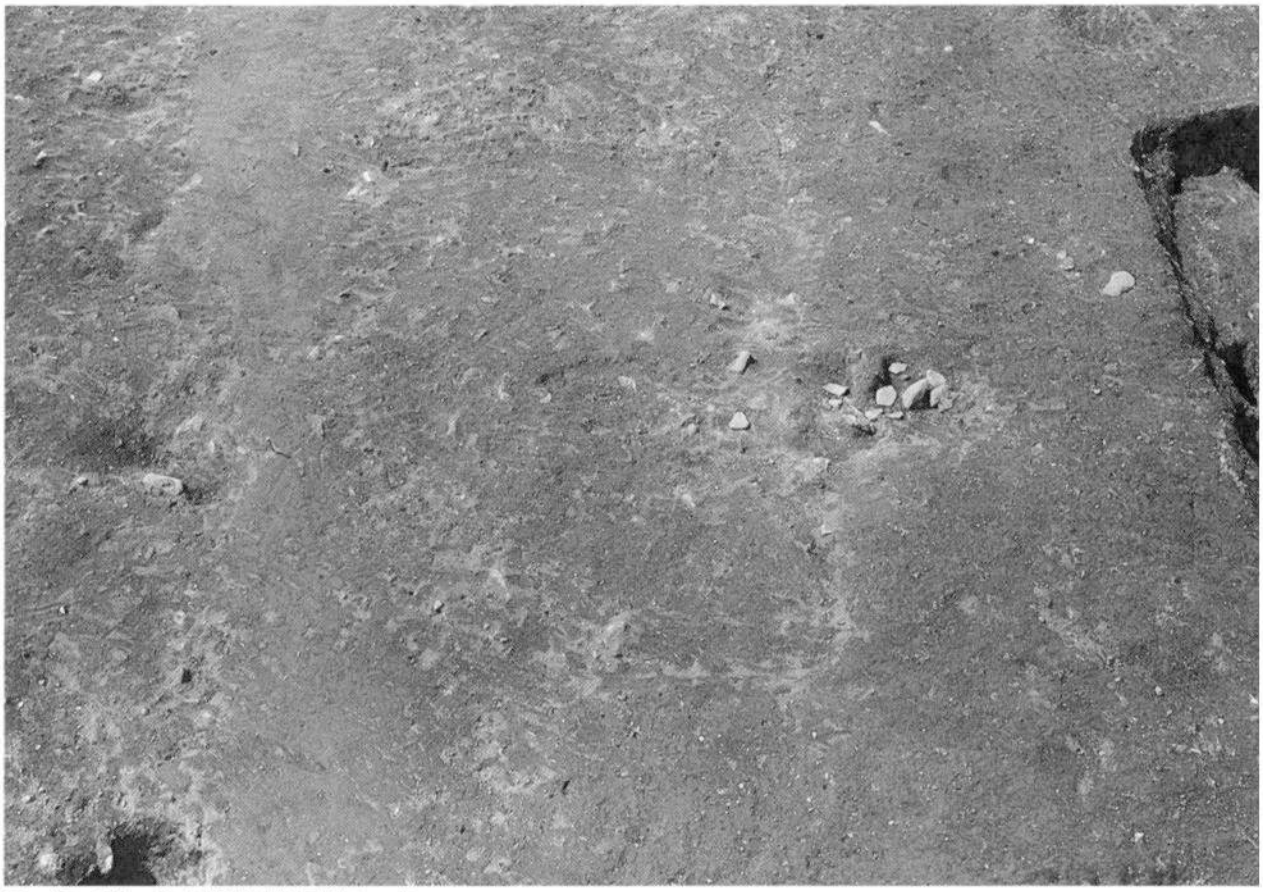
1



2

図　版　100　(1) 33号・49号竪穴住居跡（東から）
(2) 34号竪穴住居跡（東から）

1

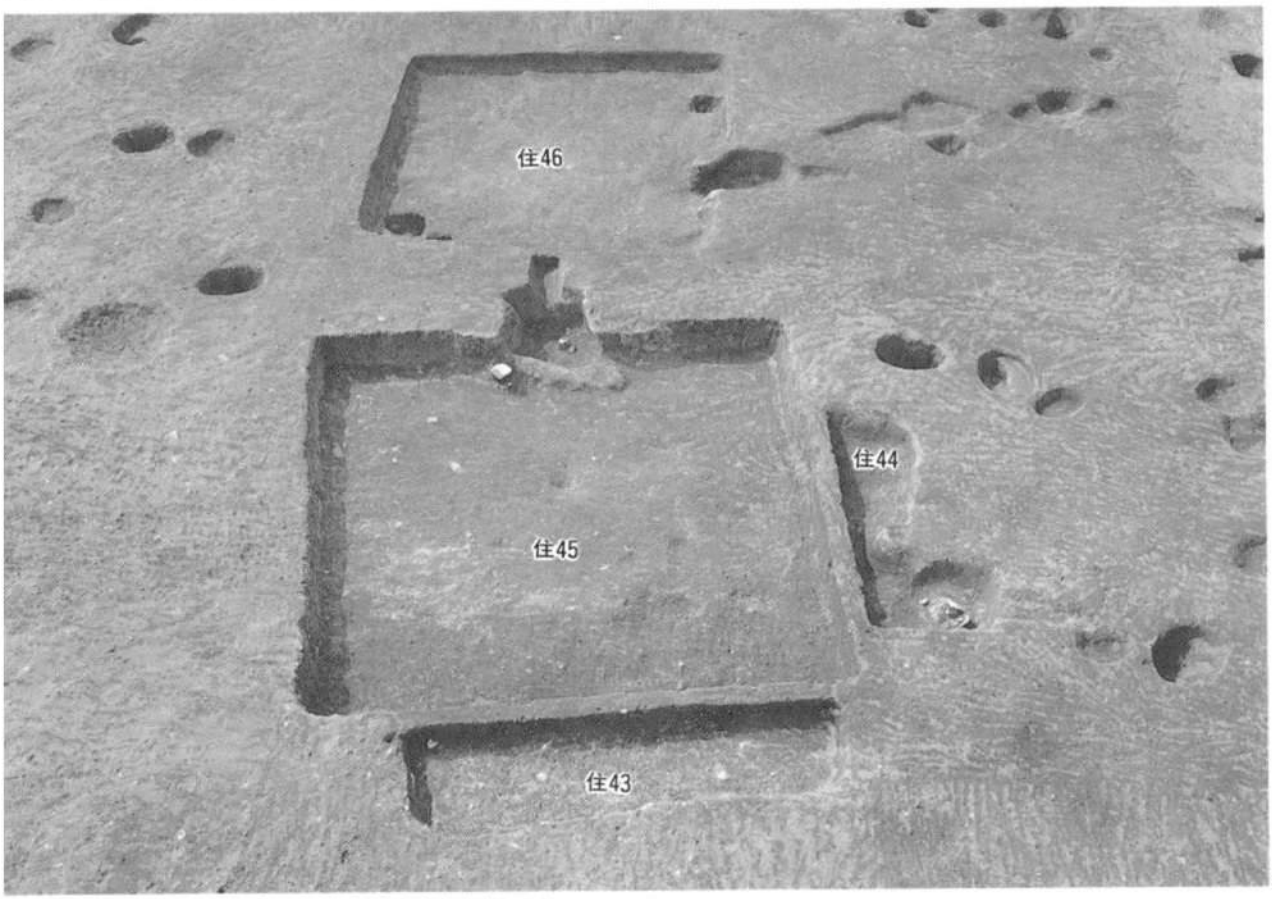


2

図　版　101　(1) 34号竪穴住居跡カマド

(2) 35号竪穴住居跡（東から）

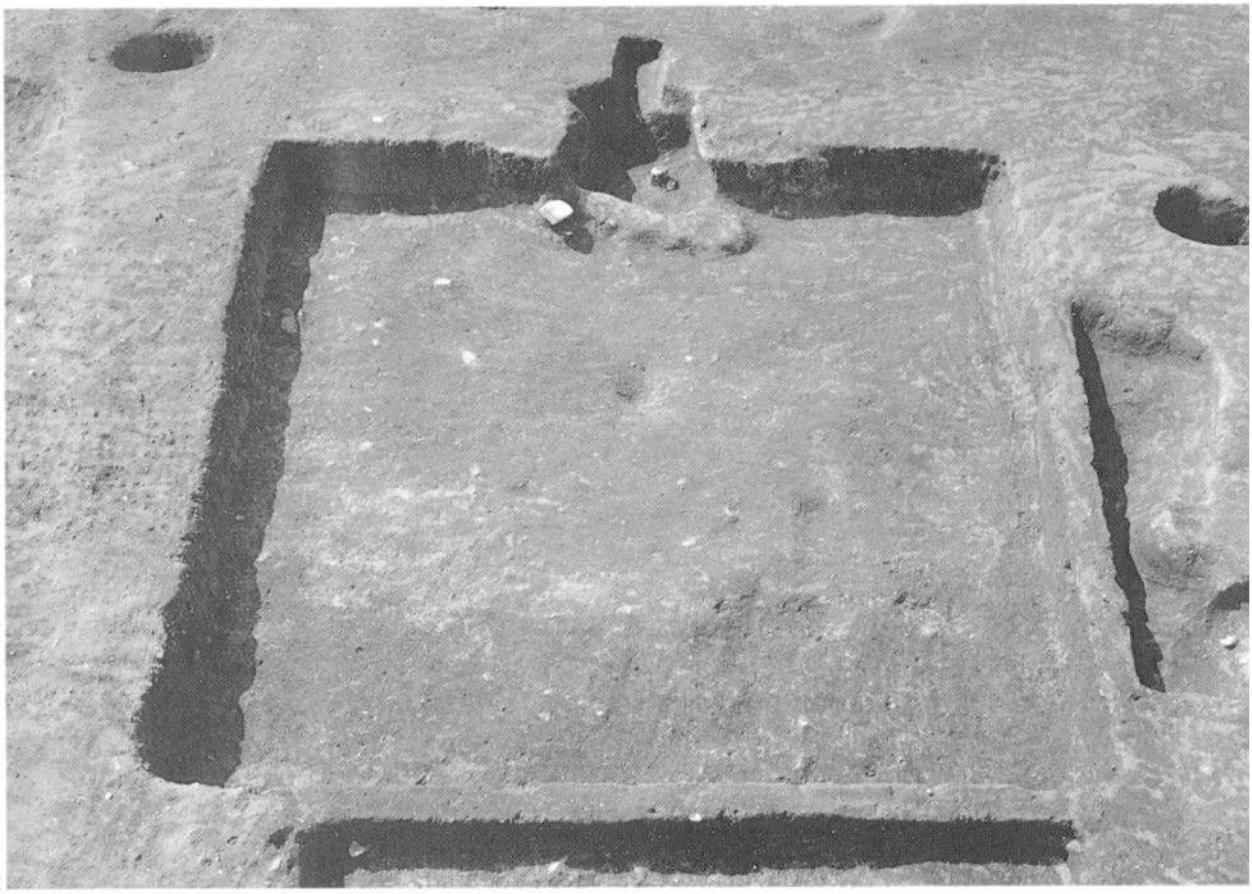
1



2

図　版　102　(1) 36号～41号竪穴住居跡（東から）
(2) 43号～46号竪穴住居跡（東から）

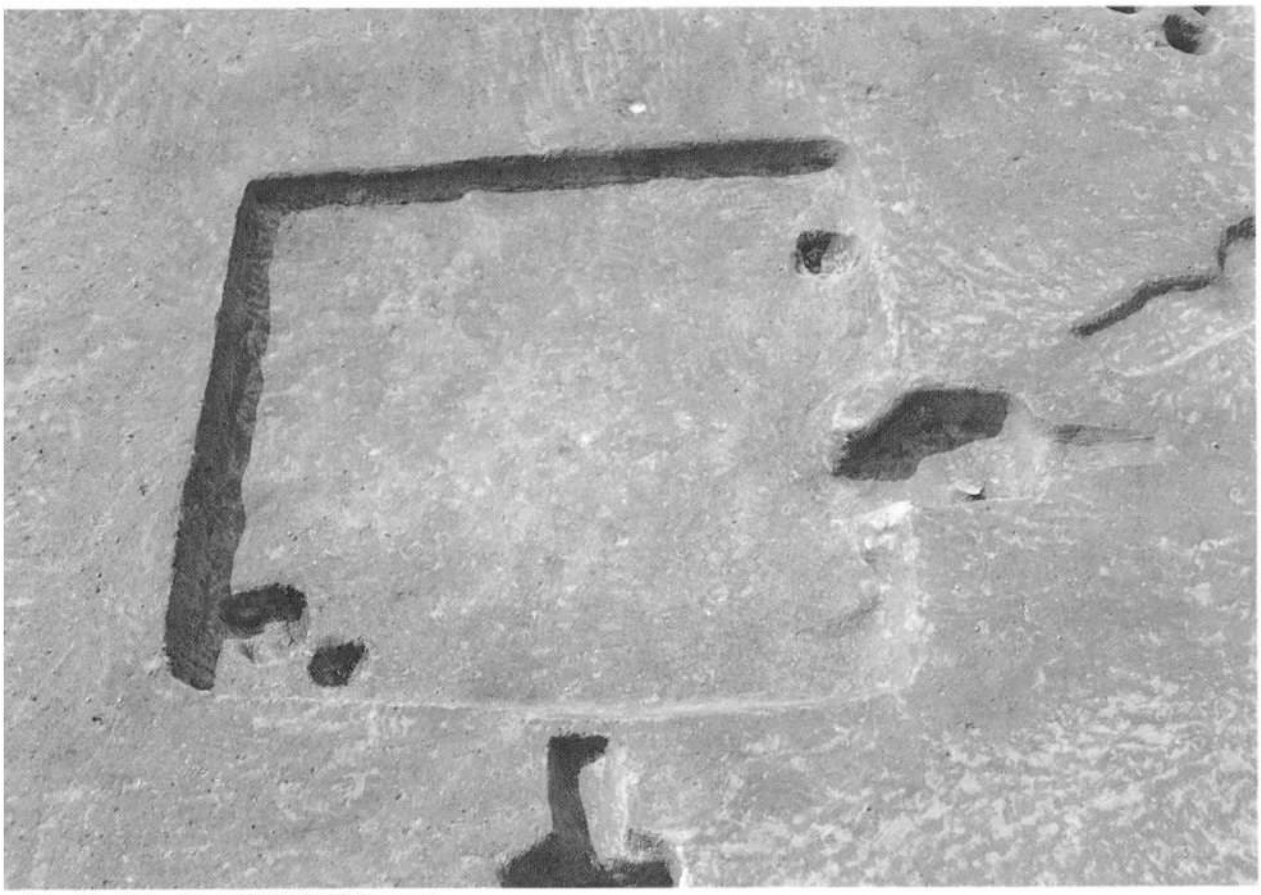
1



2

図　版　103　(1) 44号竪穴住居跡カマド
(2) 45号竪穴住居跡（東から）

1



2

図　版　104　(1) 45号竪穴住居跡カマド
(2) 46号竪穴住居跡（東から）

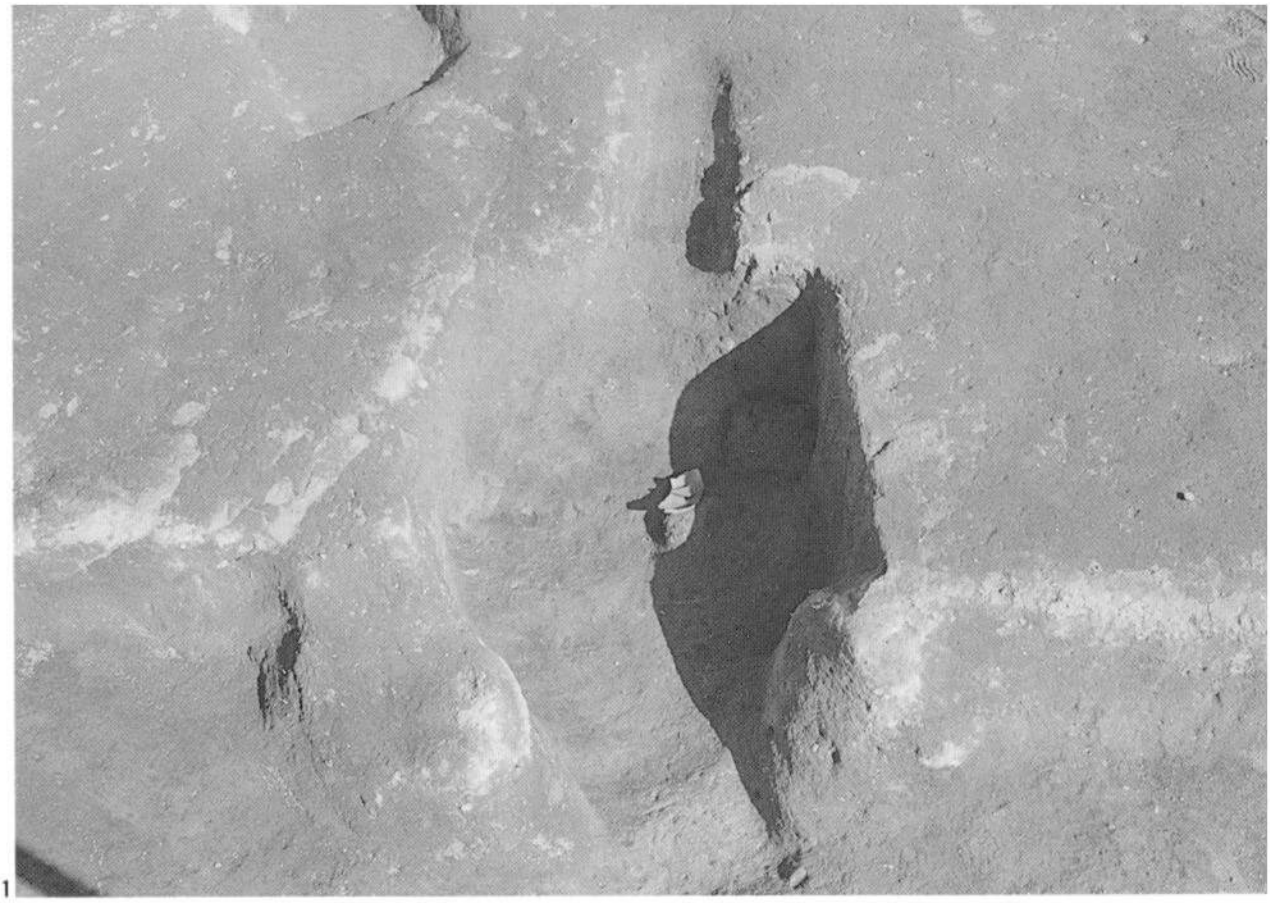
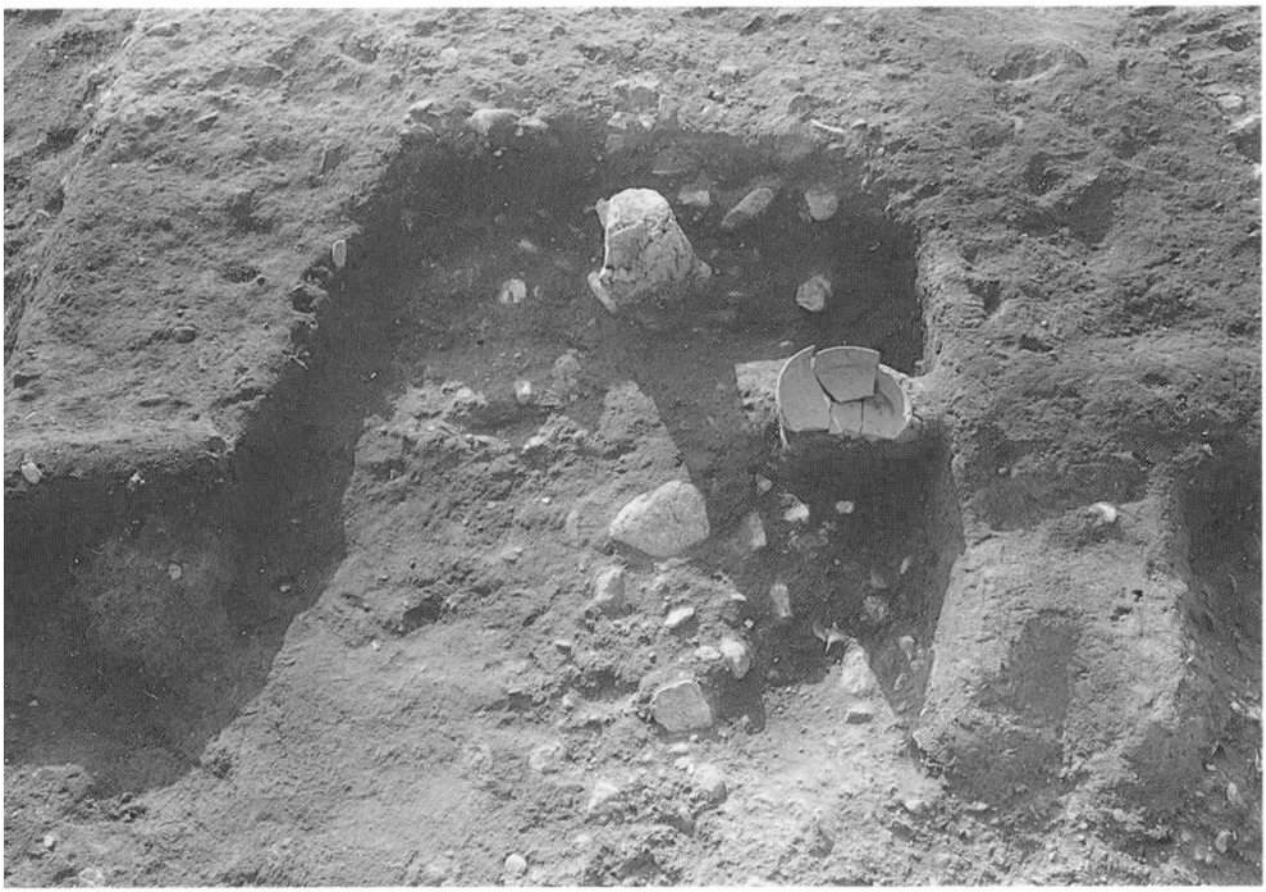


図　版　105　(1) 46号竪穴住居跡カマド
(2) 48号竪穴住居跡（東北から）

1



2

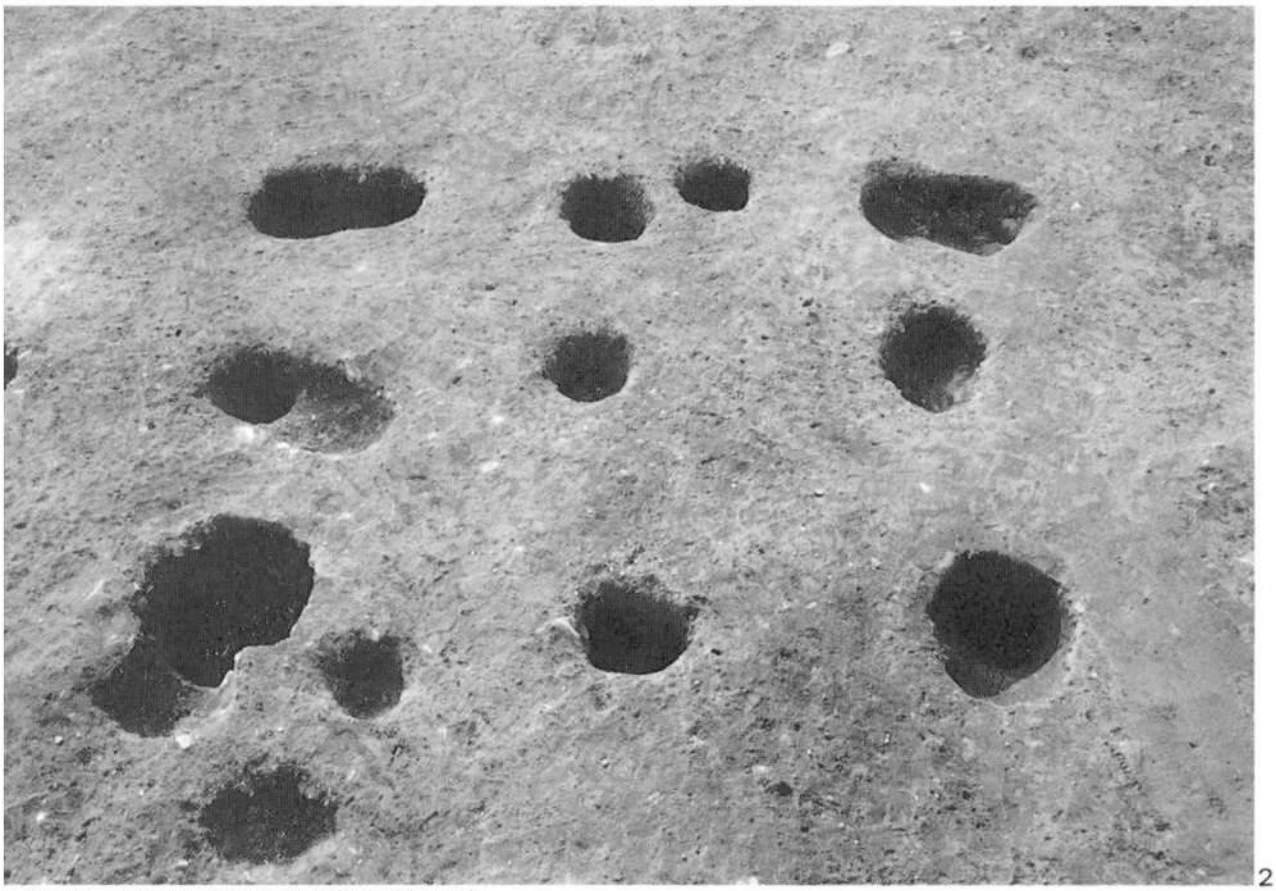
図　版　106　(1) 48号竪穴住居跡カマド
(2) 50号竪穴住居跡カマド

1

2

図　版　107　(1) 52号竪穴住居跡（東北から）
(2) 1号掘立柱建物跡（東から）

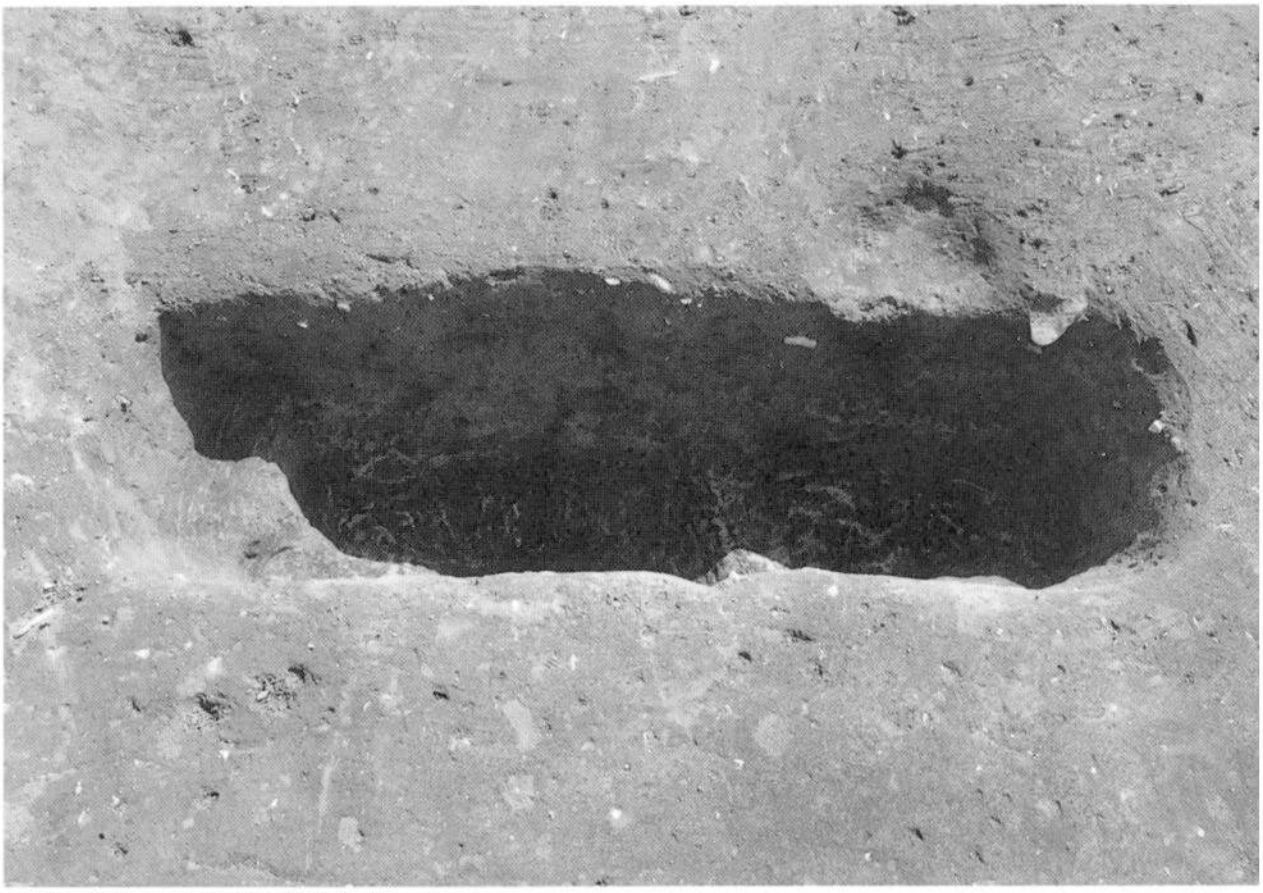
1



2

図　版　108　(1) 2号掘立柱建物跡（東から）
(2) 3号掘立柱建物跡（東から）

1



2

図　版　109　(1) 4号掘立柱建物跡（北東から）
(2) 6号土壙（北から）

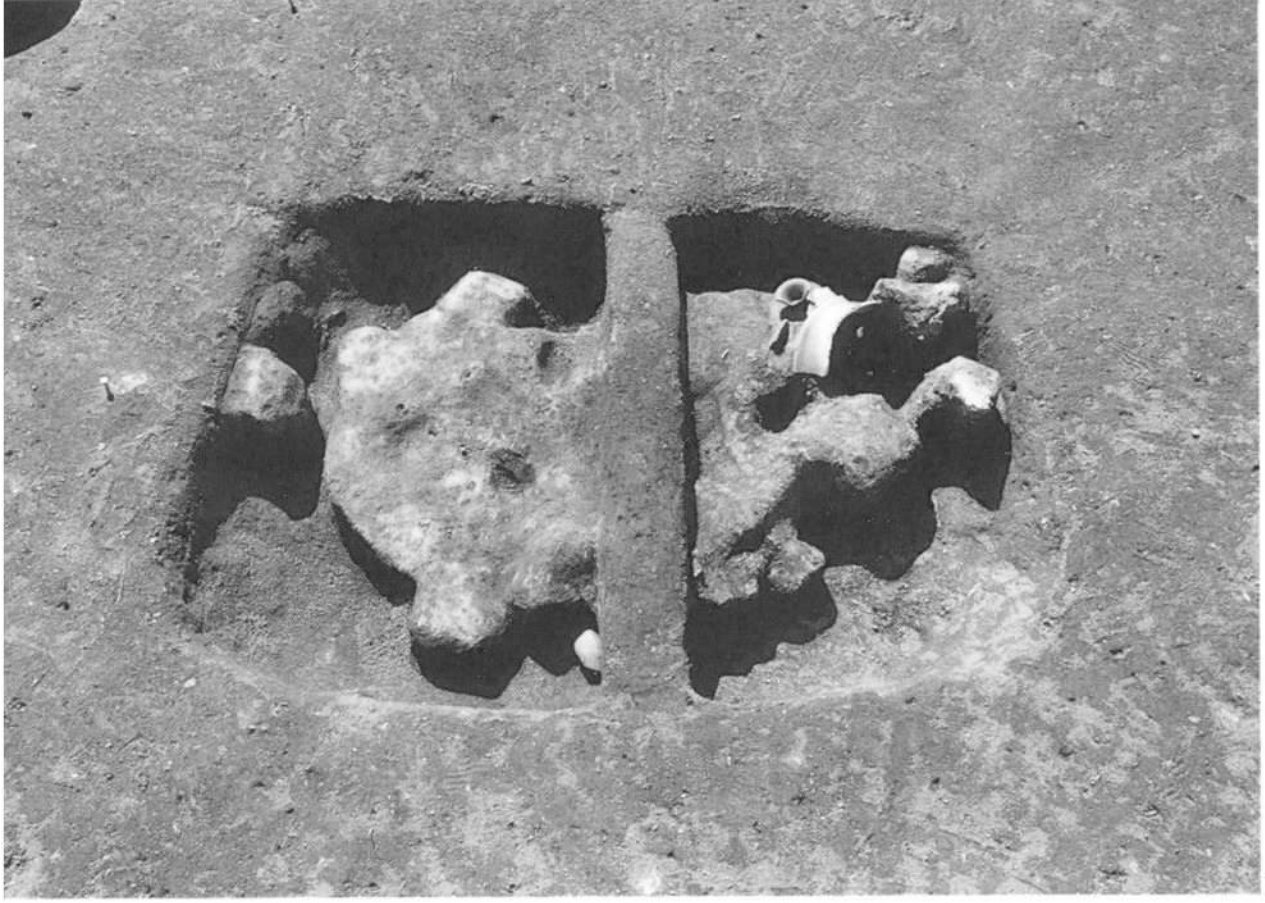
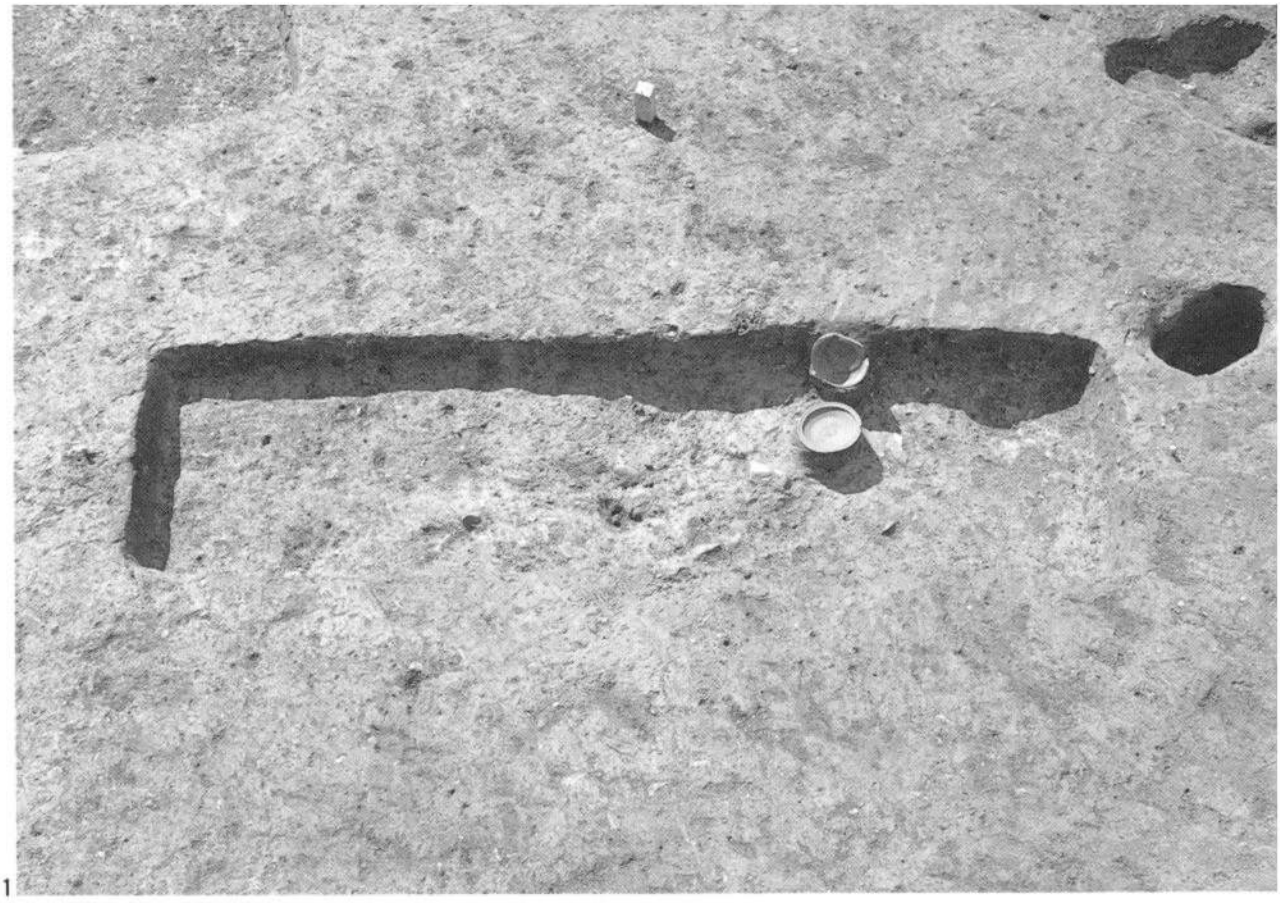


図　版　110　(1) 7号土壙（西から）
(2) 落し穴（南から）



1

2

図　版　111　(1) 土壙墓（北から）

(2) 土器出土状態（北から）

住2－5

住2－6

住3－3

住11－3

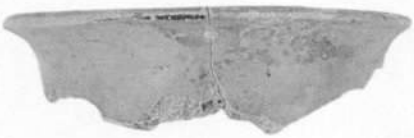
住21－1

住22－2

住22－3

住23－1

住23－2



住24－1

住24－6

住24－7

住24－8

住25－2

図　版　112　竪穴住居跡出土遺物

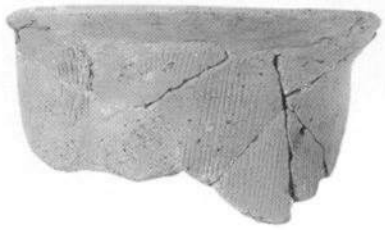
住26－1

住26－2

住26－4

住30－1

住31－1



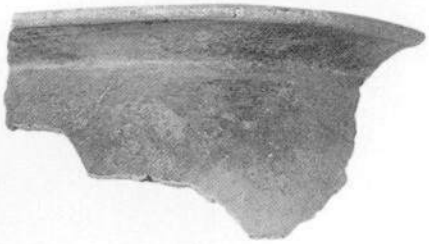
住32－2

住35－1

住35－3

住38－2

住38－9



住40－1

住41－2

住41－3

図　版　113　竪穴住居跡出土遺物

住44－1

住49－3

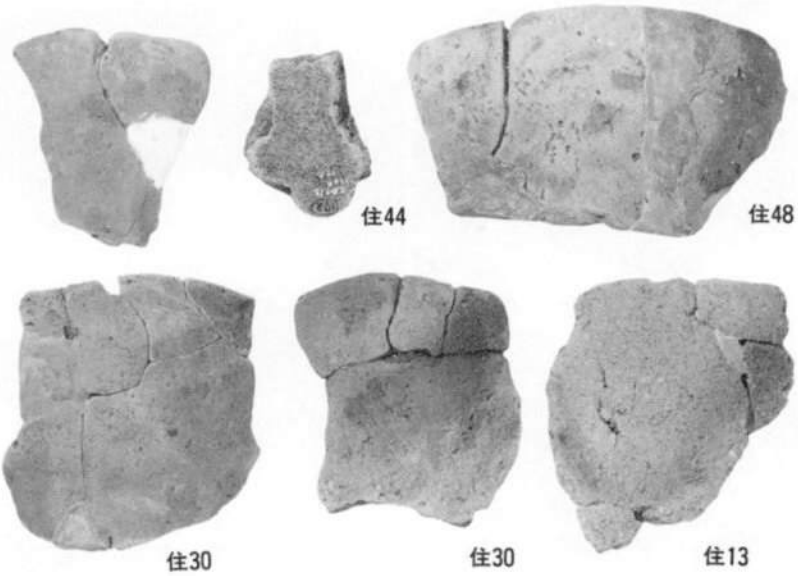
住46

住49－4

住48－1

住50

(1) 竪穴住居跡出土遺物



住44　住48　住30　住30　住13

(2) 各住居跡出土焼塩壺

図　版　114

住23

住25－1

住25－2

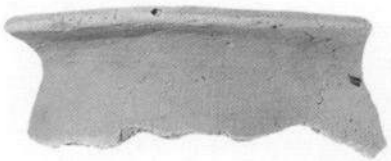
土7－9

土7－10

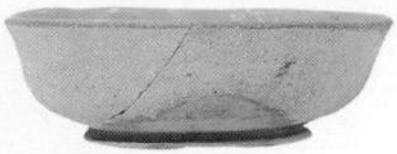
住40

住43

土壙墓



土7－1



土壙墓

土7－5

土7－7

P－49

図　版　115　竪穴住居跡、６号土壙、土壙墓、ピット出土遺物

報告書抄録

フリガナ	キュウシュウオウダンジドウシャドウカンケイマイゾウブンカザイチョウサホウコウ
書名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告
副書名	朝倉郡朝倉町大字大庭字久保所在の大庭・久保遺跡の調査
巻次	
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第36集
編集者名	佐々木隆彦
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812・福岡市博多区東公園7番7号
発行年月日	1995年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
オオバ　クボ 大庭・久保 遺跡	朝倉郡朝倉町 大字大庭字久保	404420	570377	33° 23 20	130° 42 40	19850827～1011・19851223～0313	9,650	九州横断自動車道建設に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大庭・久保 遺跡	集落 墓地	奈良時代 弥生時代 縄文時代	竪穴住居・土壙・土壙墓・甕棺墓・木棺墓・土壙墓・石蓋土壙墓・箱式石棺墓・落し穴	弥生土器，土師器・須恵器焼塩壷，鉄鏃，土錘，石製紡錘車，小形仿製鏡，石包丁，石剣，刀子	祭祀土壙を伴う縦列埋葬の墓地群 人骨2体

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告

−36−

平成７年３月31日

発　行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園７番７号

印　刷　大野印刷株式会社
福岡市博多区榎田２丁目２番65号

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード 2133051
登録年度 Ｈ６	登録番号 4

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

－36－

朝倉郡朝倉町大字大庭所在の大庭・久保遺跡の調査

付　図

付図１　大庭・久保遺跡遺構配置図（1/200）

付図２　大庭・久保遺跡墓地群配置図 (1/100)